
こんな僕たち私たち

粉 ミル子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな僕たち私たち

【Nコード】

N0916A

【作者名】

粉 ミル子

【あらすじ】

寝癖頭にジャージ姿、女らしさ0の心都。そんな彼女の幼馴染みは、校内きつての「美少女顔」を持つ少年だった。自分よりも遙かに可愛い彼に恋してしまった心都の、受難と苦悩と少しのときめきの日々。

1 & 1 t ; 七不思議少年と、ジャージ少女 & g t ;

恋をすると女の子は可愛くなるらしい。

些細なことに悩んだり、些細なことにときめいたり。

そんな日々のドキドキが何やら不思議な作用となって、内面のみならず外面にも表れる。

だから恋をすればするほど、女の子は可愛く、綺麗に、輝いていく。

これが世間の俗説らしい。

本当だろうか？

* * * *

冬が好き。

もつと詳しく言つと、冬の澄んだ朝。私はこれが好き。

冷たい空気に包まれると、朝のどたばたした慌ただしさも眠気も吹っ飛んで、たちまち心が落ち着く。私の解熱剤。

だからその日も、行ってきまーすで家から1歩出た瞬間、ひんやり感がたまらなく嬉しかった。

頭がしゃっきりとして、背筋も伸びる。今日は1時間目から嫌いな数学で居眠りする気満々だったけど、まあ頑張ろうかという気持ちになる。

だけど、しかし、でも。 やっぱり世の中、空気1つで全てが落ち着くはずがない。そう思い知つたのは歩きだした数秒後、見慣れた姿を前に発見した瞬間だ。

私の頬はみるみる緩んで、嬉しさを伴なつたドキドキが体中を占領した。

もはや冬の空気じゃどうにもならない。
だって、大好きな人の後ろ姿だったから。

「七緒ななお」

私の呼ぶ声にゆっくり振り向いたのは、可憐な花がよく似合う、天使のように光を放つ、ショートヘアの美少女……に見えるけれど、正真正銘、男である。

「おはよう、七緒！」

と、小走りで追いついた私に、

「……はよ、心都こしよ」

その美少女顔 美少年顔ではなく、美少女顔 とは正反對などこか可愛げのない口調で返答した彼、東七緒あづま。私の大好きな幼馴染みです。

「なんか七緒、今日は朝早いね」

「部活の朝練あるから。……お前も、いつもの事ながら、はえーな」
「もちろんっ。ただし冬限定」

「ああ、夏は暑すぎて起きれないんだ？」

「正解」

私が冬好きって覚えていてくれた。片思い歴4年の私はそんな小さい事に喜んでしまう。

「さあ、ここで会ったが100年目。学校まで一緒に行こう！」

「それってさ、敵とかに使う言い回しじゃないの？」

七緒のドライな突っ込みは聞かなかった事にして、私はルンルン気分です歩みを進めた。

『2年2組の東七緒は、あんなに可愛いのに男』。

これ、この有坂中学校の七不思議の1つだ（ちなみに他には『校長の髪の毛は年々不自然に増え続ける』『飼育小屋のオウムは、誰が教えたわけでもないのに下品な言葉で女子生徒に絡む』e t c . . .）。

女の子のような可愛い顔を持つ七緒は、いつでもどこでも目立つのだ。

そんな彼と、わたし杉崎心都の出会いは遡ること14年前。つまり、生まれた時から付き合いた。

母親同士が高校時代の友達で家もご近所っていう、幼馴染みの定番パターン。必然的に小さい頃から七緒が遊び相手な訳で。

でも、これがいけなかった！なにしろ身近すぎて全く恋愛対象にならない。

それは七緒にとっては今も変わらないらしく、こっちの気持ちに全く気付きもしないこの鈍感野郎。

いや……まあ、私がちゃんと素直に言えないのがいけないんだけど、七緒も悪い。男のくせにこんなとんでもない美少女顔 反則だ。

七緒と並んで校門をくぐる。

「いててて」

「何」

「いや視線が……」

ああ、七緒狙いの方々の殺気立った視線が痛い。

七緒はその顔のせいで当然、女の子 たまに危ない感じの男の人もいるけど に、特に3年のお姉さん方に人気がある。だから私が七緒への気持ちに気付いた4年前、奴はすでにたくさんの女の子に狙われていた。その人数は中2になった今でも増える一方。まさに恋愛サバイバルってやつだ。

でも、最近思う。

この恋の本当の問題点は、実は七緒でもライバルの先輩達でもなくて

「はあ」

思わず溜め息が出た。

すると隣で七緒が、

「へー、心都にも溜め息つくような悩み事あるんだ」

と、可愛い顔を歪めながらさり気なく嫌味。

「あんたのせいだつてのー!!」

絶叫する私の顔を見て、七緒の目には「？」マークが浮かんだ。

……ああ、もう。この鈍感、どうにかしてくれ。

私はがっくりと肩を落とした。

校庭を抜け、朝練があるからと体育館に入った七緒と別れ、私は教室へ向かう。

せつかく同じクラスなのに一緒に教室まで行けないなんて寂しい、とか思ってみたり。

ガラスとドアを開けるなり、栗色のさらさらロングヘアが私の目の前にあった。

「おはよ、心都！」

「美里、おはよー」

美里は窓際の私の席までついてきて、私が鞆を置くなりにこにこして囁いた。

「窓から見てたわよ。一緒に登校なんかしちゃって！ やったじゃない」

「へっへっへ」

思わず頬が緩んでへらへら。

美里は私の友達で、更に言うつと学校でも有名な可愛子ちゃん、そして、唯一、私が七緒を好きつて事を知っている人間だ。ちなみに人間以外では、我が家の愛犬クロ（雑種、雄、5歳）も知っている。私が家でよく愚痴つているから。

「でもねえ、心都」

「ん？」

美里の大きな瞳が、呆れたように私を覗き込む。

「ジャージ登校は、いい加減やめたほうがいいよ？」

「……っ。」

もつともなお言葉。

実は私、冒頭で家を出て冬の空気がどうとか語つてた時からずっと、学校指定のダサいだばだば青ジャージを身にまもつていた。

「だってスカート好きじゃないんだもん……」

うなだれる私に美里がぴしゃりと言い放つた。

「そんなんだからずっと幼馴染みから発展しないのよ。制服の七緒君とジャージの心都、遠くから見てもすっごい変な組み合わせだったわ」

「マ、マジ？」

「マジよ。もっとう、女らしさをアピールしなきゃ！ っていうか、とりあえず一刻も早く着替えてきなさいよ」

「はあい……」

普段は砂糖菓子みたいに可愛い美里だけど、こういう時の彼女には逆らえない。

私は制服を抱えてしぶしぶ更衣室へ向かった。

廊下の窓に映る自分を見る。

今日は何をやっても寝癖が直らなかった。頑張ったのに。肩まである髪の毛先が、一部ぴよこつとはねている。

「……そりゃあ、なれるもんなら私だって」

可愛くなりたい。七緒がメロメロのドキドキになっちゃうくらいに。

でもやっぱり七緒を見るたび、ああこいつにはかなわないよなあ、と思ってしまう。

恋をすると女の子は可愛くなるらしい。

嘘だ、と思う。

大体、自分より恋の相手の方が何倍も可愛いなんて！ ……どう

したらいいのよ。

そう。最近、真面目に思う。

この長い片思いの本当の問題点は、可愛すぎる七緒でも、多すぎるライバルでもなく。

可愛くなれないこの私、なのだ。

2&17:七緒の快拳と、ハイタッチ>

「つまりねえ、色気と可愛気。これが心都には足りないと思うのよ」
「はあ……」

制服に着替えて教室へ戻った瞬間、美里のお説教が始まった。

「ただでさえあんな美少女顔の七緒君が相手なんだからさあ、それを越えるくらいの魅力でアピールしなきゃっ」

「七緒を越えるう？ ……って、無理無理！ ぜーったい無理！！ だってあの七緒だよ！？」

私は顔の前で拳を握り締め、ここぞとばかりに普段の不満を吐き出した。

「あいつ、男のくせにあんなにまつ毛長くてあんなに肌綺麗であんなに髪さらさらであんなに細くて……っ」

「…心都、本当に七緒君の事好きなのねえ」
と、半ば呆れたように美里。

「へ？」

七緒の文句を言っただつもりなのに、何ですか。

でも美里の言葉はもちろん間違っではないわいけ。

「……そりゃー……好きだけど」

「ん、素直素直」

美里の白い腕が、私の頭をくしゃくしゃと撫でる。

小首を少し傾けながら小悪魔的な笑顔を浮かべる美里は、女の私から見ても文句ナシで可愛い。

そんな彼女の性格は、一言で言うと「恋多き乙女」。ついこの間まで「1組の武藤君かっこいい」とか言ってたかと思うと数日後には「相田先輩ステキー」になっている。あ、そういえば昨日は「1年の藤森君サイコー」に変わってたっけ。何せこの顔だから、今までに泣かせた男の数知れず。……もしかしてこういうのを、いわゆる魔性の女っていうのかな。いや、基本はいい子なんだけどね。

少しでいいから、そのフェロモンを分けてほしいものだわ。

「あ、本人登場」

美里の声に振り返ると、朝練を終えた七緒が教室に戻ってきた。冬だつてのに、光る汗が眩しい。七緒の動きにあわせて髪がさらさら揺れて、それがあまりにも綺麗だったもんで、私は思わず自分の寝癖部分をぎゅっと掴んだ。

やっぱり遅刻してでも直してくるんだった。

七緒は部活上がりなので今はジャージ姿だ。さっき着替えなきゃお揃いだったのになあ、とほんの少し悔しい。

「あつちー」

担いでた鞆と共に七緒が自分の机に放り出したのは、使い古した柔道着。

七緒は外見に似合わず、小さい頃から習ってる柔道を今でも結構真面目にやっている。実は私も、小4くらいまでは一緒に習ったりしてたんだけど。あんまり楽しくなくてやめてしまった。

「お疲れー」

私がひらつと手を振ると七緒は、

「おー」

と言つて白い歯を見せて笑つた。ご機嫌。本当に心の底から、「楽しかった！」みたいな笑い方。

いつもの事ながら、七緒がどれだけ柔道が好きなのかを実感させられる瞬間だ。

「聞いてくれよ心都！」

七緒がきらきらした瞳で言つた。

「何？」

「俺、今日練習中に初めて主将を投げれたんだ！ 今までずっと投げられっぱなしだったから嬉しくてさっ」

「本当！？ 柔道部の主将つてあのでっかい先輩でしょ？ すごー

！！ ちょっと七緒やるじゃん！」

「だろー？」

屈託ない笑顔。

私は思わず立ち上がってハイタッチで喜んだ。ぱちん、とキレのいい音。

恋愛対象として見てもらえない分、こういう時だけは幼馴染みの関係に感謝。

立ち上がった時に、大して身長差のない七緒の顔が近くにあつてドキドキしてしまった事はもちろん秘密だ。

今はそれよりも、七緒のプチ快拳の方が嬉しいから。

3&1t:ピンクの便箋と、午後の血痕>

が、しかし。何だか悠長な事を言っていていられなくなったのが、昼休み。

私は黒板の前で、美里や数人の友達とくっちゃべっていた。

「でねー、結局両方ともフっちゃったんだって」

「うっそお」

「もったいなー」

たわいのない世間話が飛び交う。女子が集まると自然に恋の話になるから不思議。もちろん私もそういう話題は嫌いじゃない。

お喋りタイムが続ぎ、昼休みも残り数分となったその時だった。

ガラガラツとうるさい音をたてて入ってきたのは、校庭で遊んでいたクラスの男子達。その中にはいつも通り七緒もいる。

……心なしか、七緒の顔が赤いような。

そう思った次の瞬間には、お調子者の男子が大声でその理由を明らかにしてくれた。

「はい皆さん注目ー！！ ビッグニュースです！ 何とついつき、七緒がラブレターを貰っちゃいましたー」

「えええ！？」

ら、らぶれたあ！？ 嘘！？ そんな古典的な……！！

ヒューヒューだとかモテモテーだとか、男子たちのヤジ（ひがみ？）が飛ぶ。

騒つく教室の中で、七緒が動揺まるわかりのやけに高い声を出した。

「お、お前なあっ！！ こんな場所で……しかも大声でベラベラしゃべってんじゃないよー！！」

否定しないって事は、本当なんだ……。七緒、本当に貰っちゃったんだ！

「ヤバいじゃん心都……」

美里が私に耳打ちした。

「ど、どうしようどうしようどうしようどうしよう!? もう私の頭はパンク状態。」

怒鳴られた彼はケロツとした顔で、

「まーまー、そうカツカしなさんな」

語尾にハートマークさえ付きそうな口調だ。

「てゆうか、誰からもらったのー?」

窓側にいた女子が興味津々といった感じで七緒に尋ねた。私もそれが気になってたところ。

七緒は不機嫌そうな顔のままもごもごと答えた。

「……校庭から戻ってきたら、下駄箱の中に入れて、名前、書いてなかった。いたずらかもしれないし……」

するとまたしてもさっきの男子が、

「いたずらなわけねーって。こんな気合い入った文章なんだぜ?」

と言うと、七緒のポケットからひょいっと便箋らしきピンクの紙をつまみ出した。

「あ、てめ……」

七緒の手をかわすと、彼は女子の声を真似て朗読した。

「2年2組の東七緒くんへ 急にお手紙出してごめんなさい。びっくりしたでしょ?? でもどうしても伝えたい事があった。あたしは東くんが大大スキです! 付き合っして下さい! 返事は今日の放課後、裏庭で聞かせてね。P.Sあたしスタイルには自信あるよ (笑) じゃあ、いい返事期待してるヨ!」

……最悪だわ。手紙の内容も、朗読の声も! 『自信あるよ (笑)』って、何!? 甲高いおかま声が気持ち悪いったらありやしない。

七緒はさっきよりも赤くなってその猛烈ラブレターをひったくった。

そして、うるさい仔犬みたいに、

「……っ勝手に読むなよ人の手紙を!! 完全に面白がりやがって。だいたいさっきからなあ……」

でも、こんなに可愛らしい顔で吠えてもせいぜいチワワかプードルだ。誰もびびらない。

むしろ皆、そんな七緒を見てちょっと和んでる？ 何だかクラスがほんわかムード。ただし、七緒本人を除いては。

「へいへい、ごめんな」

と頭なんか撫でられちゃって、

「触んな！」

七緒はますます青筋を立てた。

……ぷっ。

悪いけど、笑ってしまっ。

吹き出す音が聞こえたらしく、七緒がキツとこっちを睨んだ。地

獄耳？

「心都お前、今笑っただろ！？」

「あははっ、笑ってない……くく」

「……って思いつきし笑ってんじゃん！」

よっぽど悔しかったのかわなわなしてる七緒を見ると、また笑えてくる。

そんな私に美里が遠慮がちに囁いた。

「ちよつと心都、爆笑してる場合じゃなくない……？」

「あ。」

アホか私！ 七緒のあまりの可笑しさに、今、一瞬忘れてた。

ラブレター！

もしいたずらじゃなかったら……差出人がめっちゃめっちゃ可愛い子だ

ったら……七緒が告白OKしちゃったら……

どうしようー！！

神様仏様七緒様、お許し下さい。

私はこれから、人として決して誉められない行動を起こします。
それは……。

「覗くしかないわね」

昼休みの終わりを告げるチャイムと共に、美里はそっと甘い声で
言った。

「な、何を……?」

「決まってるんじゃない、放課後の告白よ」

「ええ!? 人様の告白を!？」

顔に似合わずなんて大胆なんだろう。大声を出した私に、美里が
「シーツ」と恐い顔をした。

「だって心都、気になるでしょ？」

そりゃー、もちろん。告白の相手も、現場も、結果も、死ぬほど
気になりますとも!

でも七緒に黙って覗き見るなんて何か気が引ける。

「うーん……」

迷う私に、美里がキラリと目を光らせ決めの一挙。

「七緒君がああ差出人のモノになっちゃったらヤでしょ……?」

この一言で、私の中に辛うじてあった小さな道徳心は塩をふりか
けたナメクジみたいに消え去った。

七緒が誰かのモノになんて、そんなの た、耐えられません

!..

「うんっ!」

首が痛くなるくらい力一杯頷き、私は決心した。

いざとなったら七緒とその子の間に乱入して泣き喚いてやるわ。

……わがままだってわかってるけど。

でも、好きすぎてどうしようもなくなくなる。

授業中も放課後の事が気になってそわそわしっぱなしだった。

もしあの差出人が七緒に負けず劣らずの美少女で七緒は一目惚れ

しちゃって2人のお付き合いが始まってものすごいラブラブで七緒は私の事なんか相手にしなくなって……と妄想は止まらない。

無意識にガツタンガツタンと激しい貧乏揺すりを始めていて、それを見た右斜め前の席の七緒が「コイツぜってー女じゃねえ……」みたいな顔をした。

自己嫌悪の嵐。

そんな私に、少し離れた席から美里が「落ち着け！」とアイドル並のウインクを一発。

私の後ろの男子が何を勘違いしたのかすごい勢いで鼻血を噴き出して、ちよつとした騒ぎになった。

やっぱり美里は小悪魔だ。

そんな感じで、教室の床に赤い汚れを作りながらも午後の授業はゆっくり過ぎていった。

がさごそと音をたてて、私は植え込みに潜り込む。

学校の裏庭の植え込みは手入れされていなくて伸び放題だから、隠れるのにこれいじょうバツチりな場所ってない。ちよつと寒いけど冬好きの私には心地いいくらい。

でも、隣の美里はそうもいかないらしい。「痛いなー」とか「触らないですよ」とか葉っぱにキレている。色んな意味で、大丈夫だろうか。でも無理もない。冷たい葉っぱ達は、さつきからちくちくと制服姿の美里の足を突いている。

「だから美里もジャージ着てくれればよかったのに……」

「嫌よ、あんなダツサイの」

美里はピンクの唇を尖らせた。今まさにその「ダツサイの」に身を包んで完全防備した私と喋ってるっていうのにお構いなしだ。

「ひっどー」

でも本当は一緒にここまで着いてきてくれただけで大感謝だから、口で言うほど気にしてないんだけど。

「心都こそ何よ。これから修羅場になるかもしれないっていうのにそんなだぼだぼジャージ着ちゃって。気合が足りない、気合がっ」「修羅場って……」

そんな言い方されるとますます緊張が。

動悸を押さえつつ、そつと植え込みの影から顔を出してみる。もう放課後になって十数分たつのに、七緒もラブレターの差出人もまだ来ていない。

「七緒、来ないつもりかな」

「ああ、それはあるかも。七緒君、いたずらかもって言ってたし」もしかすると今頃柔道着を着て、おつしゃーやつたるぜーと部活に励んでいるかもしれない。まあ、その方が私にとってはありがたいけど。

でもそんな私の希望はいとも簡単に消え去った。

七緒が来たのだ。

「何よあいつ、結構本気にしてんじゃない……」

呟く私の脇腹を美里が小突いて、静かにと促した。

七緒は緊張のためか少し顔を硬くしながらしゃきしゃき歩いて来て、私達のいる植え込みより3、4メートル離れた所で止まった。ナイス。あそこなら声もよく聞こえるし、見つかる心配も少ない。

ごめん七緒、この悪い幼馴染みを許して。こんな私に惚れられたあなたはきつと不幸だね。ひたすら謝罪の言葉を念じながら息を殺した。

七緒はきよるきよると辺りを見回した。そして差出人がまだ来ていないとわかると、側の木に寄り掛かって軽く溜め息をつく。

心臓が止まるかと思った。

その七緒の顔を見た瞬間。

何ていうか、いつもと違う　全く知らない表情だったから。

瞳には迷いのない強い力があって、でもどこか気怠そうで、少し大人っぽくも見える、その表情。遠くを見つめるその表情。

上手く言い表わせないけど、14年間の中で1度も見た事がない七緒の顔だった。

驚きも束の間、

「東く〜んっ」

と、辺りに響く甲高い声。

いよいよか!?

私は声の方向を凝視する。

4 & 1 t ; 鳥肌と、限界 & g t ;

「ごめんね、待った？」

息を弾ませ駆けてきたのは1人の女の子。

うっん今来たところ、と軽く首を振る七緒。

ちよつとちよつと。何かこれってデートの1コマみたいなんですけど……。

私の心中突っ込みは届くはずもなく、その女の子は七緒ににっこり笑いかけた。

見た事ない顔だから、多分先輩かな。程よい小麦色の肌に、すらっと伸びた足が印象的。髪は肩より少し下でふんわりウェーブしていて、どちらかというところ可愛いより綺麗系。

さすが『自信あるよ(笑)』なだけあってスタイルは抜群だ。女子大生って言っても違和感なさそう。

「ボンツキキュッポーン、ね」

隣の美里が歌うように囁いた。あんたは親父か。今度は私が小突いてシャラップサインを送る番だ。

女の子は、

「あたし、3年1組の黒岩みか。あたしの事知ってる？ 知らないよね」。話すの初めてだし。手紙読んでくれた？ ていうか、読んでくれたからここにいるんだよね。ごめんね急にあんなラブレターみたいな恥ずかしい事して」

これだけ一気に言うと、きゃらきゃら笑った。

「はあ、はい」

七緒の中途半端な返事は、あつという間にその笑い声に呑み込まれる。

黒岩先輩は笑うのをぴたっと止め、今度はじつと七緒の顔を見た。鼻がくつつくぐらいの至近距離で。

何!?

私は思わずつま先に力を込め、今すぐにも飛び出せる体勢をとる。拳を固め戦闘準備万端。が、

「かーわいーい！」

黒岩先輩の拍子抜けするような声で、私は危うく前につんのめりそうになった。

危ない危ない、今バレたら一巻の終わりだわ。

「やーん、まつ毛長ーい！ もうマジ可愛い。ねえ、外歩くと女と間違えられてナンパされたりしない？」

「全くないです！」

嘘。私が知る限りで4回はあった。

可哀想に、本人にとっては消したい出来事なんだろう。私にとっては思い出し笑いでできる最高のネタだけだ。

「そおー？ あたしが男だったら絶対放っておかないのに」

黒岩先輩はそう言うとおくと笑って、

「ま、女でも放っておかないんだけど」

と付け加えた。恐い。

……ちよつと七緒、何照れちゃってんのよ。頬を染めるな、頬を！

私は、七緒の側の本で猫みたいにガリガリ爪を磨ぎたい衝動にかられた。

いや、いつそあの2人の間でーんと黒板を置いて、その上に爪を……想像したら鳥肌が立った。

「それで」

黒岩先輩は素敵に微笑みながら、ようやく七緒から顔を離れた。

「告白のお返事は考えてくれたのかな？」

「あの、それなんですけど」

今までは先輩がほとんど一方的に喋ってた風だったけど、今度は七緒が口を開く。

「先輩、手紙に名前書いてなかったですよ。…あれで返事期待してるよって言われても、誰だかわかんないのにすぐ返事考えるなんてフツー無理です」

うーん、言われてみれば確かに。

七緒の「やつと言えた」みたいな清々しい顔から察するに、きつとずつとこれを言ってるやうにたかっただろう。細かい奴。

「嘘やダごめーん！ 名前書かない方がドキドキ感あっていいかなーと思っただけだ。そうだよ、マジごめん。じゃあ返事くれるの明日とかでもいいから」

「いえ」

言葉を遮るように、七緒は低く短く言った。

普段の、「ちよつとハスキーボイスが魅力的な女の子です」って知らない人に紹介すれば通っちゃういそうな声とは、まるで違う。

「俺の返事はもう決まってるから……」

「ほんと？ 聞かせてほしいな」

返事考えるの無理って言ったじゃーん、という突っ込みは置いて。決まってるだなんて七緒、何て返事するんだろう。まさかOKしたりしない……よね？

黒岩先輩の魅惑的な笑みを見ると、それもありかもと不安が押し寄せてきた。

「えーつと……」

ぼりぼりと頭を搔く、七緒の手。

特別小さいとか美里みたいに色白だとかいうわけじゃないんだけど、やっぱり男の手には見えない。

「何っーか、そのー……」

「うん」

目をらんらんとさせながら、黒岩先輩が「早く言って！」光線を送る。

七緒。

すぐるような気持ちで、声を出さずに呼んだ。

……そういえば幼稚園までは七ちゃんと呼んでたのよね、と私は妙に場違いな事を思い出した。

七ちゃんと心都ちゃんだった。でも小学校に入ってしまったら

ある日、七ちゃんはやめろって急に怒りだしたんだ。そして私の事も二度とちゃん付けで呼ばなくなっちゃった。

今思うと、きつと誰かにかかわれでもしたんだらうなあ。

あの頃から私がもう少し可愛い女の子になれてたら、今の関係変わった？

七緒も、幼馴染みじゃなく女の子として見てくれてた？

そんな考えがちらつと横切って、私は慌てて頭を振った。

あー、もうやめやめ。昔の事うだうだ思ってもきりがない。とりあえず今は中2の「七ちゃん」に視線を戻そう。

七緒はしばらく言いにくそうな顔をして、そして意を決したように、

「ゴメンナサイ」

勢いよく頭を下げた。

全身の力がへなへな〜と抜ける。

美里が私に、一安心ね、と目配せ。

うん、とりあえずは安心だ。

「えーっ何でエ!?!」

黒岩先輩は腕を上下にバタバタして叫んだ。

悲しんでるっていうより、少し強い口調で。

七緒は困った顔をして、

「俺、今は部活が一番楽しいんです。だから誰とも付き合う気はないっていうか……とにかく、すいません」

もう1度謝った。

おしつ、さすが柔道バカ。

小さくガッツポーズをした後、何かが心に引っ掛かった。

ん？ 今、誰とも付き合う気はないって言ったよな。これって喜んじゃいけないんじゃないか……。

しばしの沈黙。

居心地悪そうな七緒と、何だか髪の毛が邪魔で表情が見えない黒岩先輩。

「……東君」

「はい？」

先輩の目が鋭く光ったように見えた。気のせい？

いや、気のせいじゃない！先輩はメデューサみたいに髪を振り乱し、ガバツと七緒に抱きついた。

何してんのよ！叫びそうになった私の口を美里の白い手が慌て塞いだ。

七緒はじたばたしてるけど振りほどくにほどけない。それもそのはず、七緒より背の高い黒岩先輩は七緒にすっぽり覆いかぶさるような形になっている。

「そんな事言わないでよ。あたし、東君の事こんなに大好きなんだよ？」

「いや、ちよつと、あの……っ！は、離して下さい」

「言ったでしょ？スタイルには自信あるって」

やけに色っぽい声。

ヤバい、この先輩こんな過激な人だったの！？

先輩は、真っ赤な七緒にさっきよりグツと顔を近付けた。

「ね、付き合ってよ」

七緒の目を見つめ、そしてますます顔を……いや、唇を接近させて。

もしかして。いや、もしかしなくても、これは、チューしようとしてる！？

……もう。

もう、駄目だ！

限界、の2文字が頭に浮かび、

「やめて下さいっ！！」

思ったよりも大声が出た。

そして気が付いたら、マジでキスする5秒前の七緒と黒岩先輩の

目の前に、私は立っていた。

「心都……?」

七緒のきよとん顔。

「誰」

黒岩先輩の恐い顔。

後ろからは、あっちゃーと眩く美里の声。

もう、どうにでもなれ!!

足が震える。

足だけじゃなく、手も、肩も。

せめて声だけはと願いながら、私は口を開いた。

「やめて下さい先輩。そういうのは…お互いの同意があつてするものです」

駄目だ、震えた。

黒岩先輩は私を睨んで、口の中で何か呟きながらようやく七緒から離れた。よく聞こえなかつたけどいい意味の言葉であるはずがない。

「心都、何してんの？」

心底不思議、という感じの七緒の顔が私を見つめる。

悪いけど答えられません。

「あんた誰？」

私を睨んだままの先輩が刺々しく言った。そのあまりの迫力に思わず喉がごくりと鳴る。

「…2年の杉崎です」

「杉崎い？聞いたことねえな」

ねえな、ですか。さっきまでの甲高い声はどこへやら、先輩はすっかり人が変わっている。

「邪魔してくれちゃって、何のつもり？まさかあんた東君の彼女が何か？」

「そんなんじゃないです！」

「じゃあ何だつつんだよ」

言葉に詰まる。

答えがわからないわけじゃないのに。

「…私、は。」

幼馴染み。

きつとそれ以上でも以下でもないんだろう。悲しいくらいはつきり

している。

ただ、素直にそう言うのが悔しかった。

「…」

普段はこの関係に嫌気が差す事ってあまりない。意識しない分ちよつとした話で馬鹿みたいに盛り上がりたりもできるし。結構楽しかったりする。

でも、こんな時は。

こんな時は、半端な距離がどうしようもなく悲しいんだ。

その肩書きじゃ大切な人を守れないから。

ひねくれた私が先輩のキスを邪魔する理由にもならないから。

それが無性に、悔しかった。

「幼馴染みです」

私に代わって答えたその声　七緒だった。

「それ以外は何にもないです」

わかってはいたけど、やっぱり相手の口から直接聞くと結構重いもんがある。

私は意味もなく、足元の土の微妙な茶色のグラデーションに興味を奪われたフリをした。

そしてもちろんそんな回答に先輩が納得するはずもない。

「はあ！？何それ、ただの幼馴染みがどうして急に…」

「先輩」

静かに、しかし有無を言わせない口調で、七緒は遮った。

「もう返事は返しました。先輩とは、付き合えません」

遠回しに『もう解放して下さい』。

それを聞いた黒岩先輩は見ているこっちが痛くなるくらい唇を噛み締め、

「…わかったよ！」

低く乾いた声で言うと言を返して去っていった。

だけど私は、どうしても落ち着いた気分になれなかった。

だって、歩きだす瞬間の黒岩先輩の目。

私を睨み付けるその目は、事態がこのまま済むわけがない事を物語っていた。

目は口ほどにものを言う、だなんて。そんな言葉、今は信じたくない心境だわ。

先輩がいなくなった後の裏庭には微妙な雰囲気漂う。

私は再び土を見つめ始め、七緒は不自然に視線を泳がせながら隣につつ立っていた。

沈黙はどんどん濃くなって、逆に空気はますます薄くなっていく。

…出来る事なら今すぐ、風の如く爽やかに走り去りたいです。

美里はまだ隠れてるのかな、と思い植え込みを見てみると案の定彼女は葉っぱの中に埋もれていた。

美里の口が声を出さずに動く。

「私、お邪魔つばいなので帰りまーす」

読唇術で読み取った言葉はそれだった。

待って美里、今2人きりにしないでえー！

私も口パクで訴えてみたけど全くの無駄で、私の親友（多分）で学校一の小悪魔は何事もないように「後は頑張れ」の意味が込められたアイドルウイंकを投げた。

そして音をたてずに植え込みから滑り出し、軽やかにスキップしながら去って いや、逃げていった。

…うう。これで完璧に2人きりになってしまった。気まずい、気まずすぎる。

「でさ。結局心都は何してたの？」

ついに来ました二度目のこの質問。

さっきは先輩に答えるフリして完全無視した私だけど、今度はそうもいかない。

「えーとですねえ何故ここにいたかと申しますとー……。ワタクシ

本日授業中に貧乏揺すりしていたじゃないですかー。あの瞬間頭の中で謎の音が響き渡りましてー」

「はあ？」

「『裏庭へ・ジャージデ行ケヨ・放課後二』と訴えるその声に従うまま放課後ここに来てみたところ貴方が見知らぬ人にちゅーを迫られていたのでー、もしかや痴女かと思いつさに飛び出してしまいましたー。もしかするとあれは神様の声だったのかもしれないね」

「何ステキめな笑顔で綺麗にまとめてんだよ。どーせならもつと上手く嘘つけ」

目を眇め呆れたように七緒。

嘘をつく時、時間を稼ごうと不自然に語尾を伸ばすのは私の昔からの癖だ。

今回はそれに妙な敬語と5・7・5が加わり怪しさMAXで、七緒が信じるはずもない。

「…そーですよ覗いてました！ええ覗いてましたとも！！覗き見る痴女はこの私ですよ！！どーもごめんなさい！」

「うわ開き直り!？」

どうしてこつも可愛くないんだろう、私。

告白覗いて、邪魔して、最終的には開き直りか。我ながら最悪。

でも、どうしてもじつとしていられなかった。

どうしても。

「…嫌だったの」

きよとんと私を見る七緒の真つ直ぐな目が、痛い。

「七緒が何か綺麗な先輩に呼び出されちゃったり…それでキスされそうになっちゃったりさあ…。そういうのが…どうしても嫌だったの」

ガキっぽい事、言ってる。無茶苦茶だ。

「ごめんね、性格悪くて」

「いや、せーかく悪いっつーかさあ…」

ぼんやり眩き、七緒はニツと笑う。

別に上品な笑い方でもないのに、周りの空気がきらきらしたような錯覚を覚えた。

もうさつきまでの顔じゃない。14年間見慣れたいつもの七緒の顔があったから、私は少しホッとして、そしてほんの少し残念だった。「本当お節介おばさんだよなー、心都」

「おっ…おばさん!？」

私がおばさんならあんたはおじさんだつての、という反撃をぐっと堪える。

「俺もう中2なんだからさあ、いくら幼馴染みでも心都のお守りは必要ないつて」

「お守りい?」

七緒は腕を組み1人でうんうん頷きながら、

「お前何だかんだ言つてイイ奴だし、俺が変な女に引つ掛からないか心配してくれたんだよな」

…ん?

「でもいくらなんでも、そんな誰とでもほいほい付き合ったりしないし。だから心配すんな!俺の事なんか気にしないで、心都は心都でいい相手でも見つけて青春しろよ」

…んん?

「このままじゃ一生お節介おばさんで終わるぞ。な?」

な?つて爽やかに言われても。ていうか「いい相手」ってそんなサラツと!

やっぱりこいつ、私が幼馴染みとして心配したと思ってる。本当は七緒を好きな一女子として、だったんだけど。

そんな事実はずゆ知らず、嫌味なほどの可愛い顔で笑う超鈍感男。この……

「このアホ!!」

「はあ!？」

怒号一発、わけわかんねーと言わんばかりの七緒を睨み付け、私は自分の望み通り風の如く裏庭から走り去った。

ジャージを翻して肘と膝は直角の、可愛さの欠片もない走り方で。

6 & 1 t ; 小さな愚痴と、 1 対 1 & g t ;

「どおおっしてあそこまで鈍感なのかなあ。ねえ、クロ」
家の庭でどっかり地べたに座り込み、愛犬を抱きしめながら私は呟いた。

その愚痴に答えるように、クウ、と細い鳴き声。元気出してご主人様、とでも言いたげに。

「クロは素直ない子だねえ…」

飼い主（私）に似ないでよかったわ。

ふうつと吐いた息が白い靄になって空に吸い込まれていく様子は、
見ているだけで寒い。

いくら冬好きでも今は12月、しかも夜9時の野外の気温はさすがに厳しい。

「うー寒っ」

思わず腕の中のクロを抱く力が強くなる。

私の肌にクロの体温が伝わって、そのほっこりとした温かさに何だかホツとした。

黒岩先輩も、七緒に抱きついた時こんな感じだったのかな。

余計な事を想像して、体温は上がったのに気持ちはずっかり沈んだ。
あのアホ大絶叫の後、私は下手な陸上走りで裏庭からダッシュして、
そのままのスピードを崩さず家へ帰った。きつと取り残された七緒
は「わけわかんねー」まま部活に行っただろう。

「…アホ」

クロがひよいつと顔を上げた。

「あんだじゃないよ」

思わず苦笑い。

「…私だよ」

覗き見して、飛び出して、怒鳴って。

普通に考えれば理性とかモラルが止めてくれるはずなのに、七緒の

事になるとそういうのが全部ぶっとんじゃうんだ。

そうとうアホかも、私。

不意に頭に浮かんだのは、今日の「な？」の七緒の顔。その屈託のなさが余計悲しい。

「私が好きなのは、七緒なんだよ」

呟いた気持ちは誰に伝わる事もなく、冷たい空に消えていった。

「ちよつといい？」

「はい？」

朝。今日も冬らしい澄んだ空気が最高に爽やか！

なのに。

「ちよつと顔貸してくれつつつてんの」

校門を（今日は1人で）くぐった瞬間、恐い顔の黒岩先輩に肩を叩かれた。

顔貸してくれって、つまり呼び出し。

上級生が気に入らない後輩をシメる恐ろしい伝統行事だ。

…そりゃー昨日のまま終わると思ってたけども。

「今ですか？」

昨日遅くまでクロに愚痴りすぎて眠いし、そのせいで寝坊して髪ボサボサだし、リボン結んだりボタンとめたりちまちま制服に着替える時間がなくて結局今朝もジャージだし、ていうか純粹に恐いし、と断りたい理由なんか山ほどある。しかし、

「今だよ今。ついてきて」

ものすごい威圧感を放つ黒岩先輩の誘いを断れるはずもなく、私は泣きたいような気持ちで歩きだした。

もしかして呼び出しの舞台には黒岩先輩の仲間がヤバそーな雰囲気待ち構えていて、複数で私の事シメるつもりなのかも…。嫌な想

像がむくむく膨らむ。

しかし意外にも、着いた裏庭には誰もいなかった。

1対1だ。

「ここならゆる〜っくり話せるっしょ」

微笑みながらくるりと振り返った黒岩先輩の目は、間違いなく笑っていないかった。改めて、恐い。

「何をですか？」

苦し紛れにすつとぼけてみたらそれが先輩の神経を逆撫でしてしまつたらしい。

「ばつくれんなよ。昨日の事に決まってるんだろ」

「…ですよね」

「あんたさあ」

先輩がずばり切り出した。

「東君の事、好きなんですよ？」

「え？」

「ただの幼馴染みとか言つて超バレバレ。だから昨日も飛び出して邪魔してたんじゃない」

「違います！…本当に、幼馴染みです」

「ふうーん」

先輩の鋭い目が気持ちを看透かすように私を睨んだ。何となく、逸らす事ができない。

「じゃあこれからは邪魔しないでよ。昨日は断られたけど、あたしまだまだ諦めるつもりないんで」

少しだけ、胸がざわつと波立った。

「それは…それは、また昨日みたいにゴイんな手段に出たりするつて事ですか」

「まあ時と場合によつては」

魅惑の笑みを浮かべる黒岩先輩。

波立ちは止まらない。それどころか、どんどん大きく広がっていく。このボンツキユッポーン、本気だ。

7&1t;間違い探すと、答え>

黒岩先輩の髪は昨日と変わらず柔らかくウェーブしていて、私はこんな状況にもかかわらず羨ましいと思つてしまった。

つまりそれほど、今日の私の髪はひどかったんだ。

…やっぱり今日も、遅刻してでもちゃんとしてくるんだったなあ。

「だから二度と邪魔しないでよ！」

「…嫌です」

「は!？」

「邪魔しないなんて無理です！」

先輩の顔がみるみる引きつっていく。

「今好きじゃないつつつたる!？関係ないんだから放つとけよ！」

「放っておけません、邪魔します！」

「何あんた超ウザい!?!あんたみたいなダサイジャージの女が東

君の周りちよろちよろしてんじゃねーよ！」

先輩は今にも掴み掛かつてきそうな勢いでまくしたてた。

私も、もう言い訳できない。

放っておけない理由なんて1つだけだ。

「嫌です!?!だって私、大好きなんだもんっ!?!」

一瞬、空気が固まった。

「……………」

先輩の右手がぴくりと震え、

「マジムカつく…!」

その手が、ビンタするには申し分ない高さまで振り上げられる。

「…!」

うわ殴られる!?!親父にもぶたれた事ないのに…ってお約束の台詞を吐く余裕すらない。

私は間もなく頬にくるであろう衝撃に備え、目をぎゅっと閉じた。
ふっ、と風が動く。
そして

ばちん！！

…あら良い音。

なのに私の頬はいたって正常、痛くもかゆくもない。
これってミステリー？

恐る恐る目を開けると、そこには涙が出るほど見慣れた姿。
それは。

「ななお…」

「あ、あずま君！？」

私と黒岩先輩の間に立ち、左頬を赤くした七緒だった。

突然乱入した七緒は物怖じする事なく先輩の方を向いた。

「こいつ殴るのやめてもらえませんか」

そのえらく丁寧な言葉に、黒岩先輩が自分の右手をポケットに突っ込んだ。苦虫を噛み潰したような顔って、きつとこついつのを言うんだと思う。

七緒。

何してるの？

何でいるの？

私の頭の中は疑問符でいっぱい、昨日の七緒の心境が今少しだけわかった気がした。

「あ、東君…何で!？」

自分の想い人を力いっぱい殴ってしまった黒岩先輩が、動揺した声をあげた。

「先輩」

「なっ何」

華奢な芸術品みたいな七緒の細い髪が、太陽の光を受けてきらつと

光る。

「俺、何やつても先輩とは付き合えませんか。ヨロシク」
そう言くと七緒は、見ている人全ての劣等心を刺激するような、素
晴らしく可愛い顔で笑った。

…眩しっ。

悩殺された先輩が「ふにゃ」とか「くしゃ」と感じて崩れた。
美里よりも七緒の方が、実は小悪魔かもしれな と、私は頭
の隅のそのまた隅で考えた。もちろん隅じゃない部分は真っ白。
七緒が、私の方を向く。ゆっくりと。

その表情は、左頬が少し赤いものの、昨日ここにいた時と全く同じ。
私が14年間で見た事のない、あの不思議な七緒の顔だった。

「行こ」

七緒が私の手首を掴んだ。

頭が真っ白だった私は急に引っぱられて転びそうになったけど、そ
れでも何とか持ち堪えて歩きだす。

左手には通学鞆。右手は七緒。

何だろうこの状況 夢？

私は、先に行く七緒の背中をぼんやり見つめた。

七緒の髪は相変わらずさらさらで。

背丈とか肩幅は私とあまり変わりなくて。

そのせいか制服は少し大きめで。

一見いつもと変わらない。でも、巧妙にできた間違い探してみたいに
何かが違う。

そして、私は気付いた。

さっきの七緒。

昨日先輩を待っている時にも見せた、不思議な表情。
今まで知らなかったあの顔の正体は

七緒の背中が止まった。

場所は校庭の隅の、飼育小屋前。

くるりと振り返った七緒は最上級のしかめっ面で、昨日の私に負けず劣らずの罵声を響かせた。

「このバカ!!」

「ば、ばかつスカ」

私の運動部後輩っぽい反応に、七緒は大きく頷いた。

「本当バカだよ!!のこのこあんな所ついてって、あの先輩絶対キレたら何するかわかんねーじゃん!だいたいお前いつも…」

「七緒」

「あ？」

「痛い？」

彼の滑らかな頬に、今はくつきり赤い手形ができている。

私の代わりに、私のせいでできた手形。

「…痛いよ。本気のビンタって初めてだけど、結構地味に痛いのかな」

そう言うのと七緒は、私の顔を覗き込んだ。

「お前ぶたれてないよな。あの1発だけだよな？」

「そっだよ。」

そう言おうとしたら胸に熱いカタマリがつかえて、言葉が出なかった。

だから私は折れそうになるほど首を上下に振った。

七緒は少し偉そうに頷き、

「ならヨシ」

短い4文字の後、笑った。

「…何かっこいー事しちゃってんのよお…」

「は？」

今までだって死にそうなくらい好きなのに。

これ以上好きになったらどうすんの。

こんな私が好きになったら、1番迷惑するのはきつと、絶対、七緒

だよ。

「私の代わりに殴られたりしてさあっ…かつこつけすぎなんだよバカー！」

「…何で泣いてんの」

美少女顔で幼馴染みの七ちゃんには、きつと一生勝てないね。

だけど。

「ごめんね」

さつき気付いた、七緒の不思議な表情の答え。

今まで知らなかったあの顔の正体は

「ごめんね七緒…私のせいで、こんな…」

チワワでもプードルでも、もちろん可愛らしい美少女でもなく。

あの時の七緒はちゃんと『男の子』の顔だったんだ。

「…とりあえず泣き止んでください」

七不思議になっちゃうくらい可愛い顔で、

柔道命で、

笑うと瞳がきらきらして、

ためらいもなく人を庇って殴られて、

一番近くて、

一番遠くて、

そしてたまに男の子なこの幼馴染みが、

私は、大好きだ。

8 & 17 : 気持ちと、4年目の決意 & 8 t ;

チャイムが鳴った。

校庭に出ている人なんてほとんどいないし、ましてや飼育小屋の前なんか静まり返って怖いくらい。

だけど突如、甲高い声でその静寂を破る奴がいた。

前にも少し触れたけど、飼育小屋のオウムはとにかくうるさい。そして下品。

あの七不思議のオウムが七緒を見つけてすかさず絡んだ。

「ヨオヨオ姉ちゃん、ベツピンサンダナーツ」

「姉ちゃんじゃねえっ!!」

「怒ツタ顔モチヨー可愛イネー」

男子制服を着ているにもかかわらずオウムにまで勘違いされて本気で怒っている七緒。

そしてその隣には、真正正銘の女子生徒であるにもかかわらずオウムに完璧無視されている私。

…何だか微妙な心境だ。

オウムはすっかり七緒に夢中で、スケベさが滲み出た声色でしきりにわめいている。

「姉ちゃん、チヨットケツ触ラセロヨ」

「焼き鳥にすんぞ!!」

七緒さん、鳥相手にキレすぎです。

「あははっ」

「そこ笑うな!…さっきまで泣いてたくせに」

あんた見てたら涙もひいちゃいましたよ。

ひと睨みしてオウムをようやく黙らせた後、七緒は唸るように言った。

「あのさあ心都」

「は、はい」

真剣気味なその表情に、私は少しまごついた。

「えーと…お前さつき自分のせいとか言ってたけどっ、元々このゴタゴタは俺の問題だし。だから別に、心都のせいじゃないから。っ
ていうかむしろ…巻き込んでごめん」

「えっ…」

そんな事ないのに。私が勝手に先輩を怒らせたせいなのに。

「でも私の代わりにビンタ…」

「あのな」

真っ直ぐな七緒の目が、私を見る。

「別に俺は心都のせいだなんて思ってないし、代わりにぶん殴られたのも、巻き込んだ責任感じてとかじゃなく…」
ここで七緒は、自分の中で言葉を整理するみたいに難しい顔になった。

「…心都も先輩も関係なくて、“俺が”嫌だと思ったから、だから動いたんだよっ」

少し怒ったような口調。

私はこの台詞を前にも聞いた事がある。

4年前、今と同じように七緒の口から。

「…七緒。前にもおんなじ事言ってくれたんだよ。覚えてる？」

「そうだった。全然」

と、きよとん顔のご本人はすっかりお忘れのようだけど。

「あっそ」

私はすっかり覚えている。

そういつと「、ずっと変わらないね。

「……」

「…心都。何思い出してんだか知らないけど、そうやってにやにやする癖は止めたほうがいいと思うんだけど」

「七緒」

「へい」

「…ありがとー」

「…？いえこちらこそ。」

七緒はちよつと困ったように眉を下げて笑い（これが可愛いお嬢さんっぽくてやけに似合っていた）、

「お前も昨日飛び出してきたじゃん？正直あの時、心都がいなかったらヤバかったかも」

「ヤバいつて何が？」

「その…防げなかったかもって事だよ」

七緒が不自然に視線を泳がせた。

「よーするに唇奪われちゃってたかもって言いたいわけね」

「くちびるって…何か嫌な言い方だなオイ。でもあの先輩と目エ合わしてると、体動かなくなるっていうか、頭空っぽで逃げらんなくなるんだよな…」

そういうのをフェロモンっていうのかもしれない。どっちにしろ、

私とは縁が遠いものだ。

「それは…私も飛び出した甲斐があったよ」

私はへらっ、と頬を緩めかけた。けど、ここでもんでもない事に気付いた。

今となつては思い出すのも恥ずかしい、ついさつき私が言った言葉。

『嫌です…！だって私、大好きなんだもんっつ…！』

そして、先輩の右手が動いて、七緒が飛び出してきて。

「…」

「何固まつてんだよ」

「…ねえ七緒」

「ん？」

嫌な感じの冷や汗が背中を伝う。

「七緒、どこから聞いてた？」

もしかして。あの「大好き」、聞いてたりする？

七緒は一瞬きよんとしたけどすぐに「ああ」と理解して、

「俺、今日朝練ないから遅刻ギリギリでき。校門入ったら裏庭の方からすげー怒鳴り声が聞こえてきて、何話してんのかはわかんなか

ったけど何か危なさそうだったから。で、行ってみたらちよーど先輩が右手下ろそうとしてるトコで。」

「つまり会話の内容は聞いてないの？」

「うん」

よ、よかったあ…。

私はホッと息をつき、思わずへたりこむ。七緒が不思議そうに尋ねた。

「どーしたの」

「いえ何でもないっす」

「そうっすか。ところで俺も1つ聞きたい事がある」

「な、何？」

心臓が跳ねた。なぜなら、隣の七緒が私の視線に合わせて腰を下ろしたからだ。

「俺、昨日から何回考えてもわかんないんだけど」

「だから、何？」

場合によっては黙秘権を行使する。

七緒はふざけた色なんて全く感じさせない表情で、言った。

「何で昨日怒ってたの？」

「へ」

…何だ。そんな事。

私はてつきり、さっき先輩と何話してたのかとかそういう質問かと思っていた。

こいつそんな事を真面目に何回も考えていたのか、と思うと少し可笑しくて。

そしてやっぱり、外見じゃなく中身も、色んな意味で七緒には一生勝てないだろうなあ、と思う。

「…七緒があまりにも素直だからだよ」

「は？」

「とにかくもう全然怒ってないしっ昨日はごめん、気にすんな！」「強引な自己完結だな」

しっくりこなさそうな七緒だったけど、まあいつかと呟くと校舎に目を移した。

「じゃー心都、そろそろ教室行く？」

そういえば本鈴が鳴ってからもうだいたいぶたっている。確実に1時間目は始まっているはず。

「うわ、こちら大遅刻じゃんっ！急ごー！」

筋肉痛（昨日の裏庭ダッシュのせい）の体に鞭打ってパタパタ走りだすと、12月の空気が頬を撫でた。

心地いい冷たさを感じて、私の気持ちは落ち着いていく。

よかった。

「大好き」って、あんなふう先輩に怒鳴った形で伝える事にならなくて。

『部活が一番楽しい』らしい今の七緒には、まだ気持ちは伝えられないかな。

柔道より好きになってとか、七緒より可愛くなりたいとか、そこまです言わない。言えない。

でも私が頑張って、いつか。

いつか、ほんの少し　七緒がちよっと心臓速くなるくらいの「女の子」になれたら。

その時は。

「…伝えてみるか」

「何か言った？」

「や、1時間目って何だっけ？」

「橋本の理科」

「うあ最悪…あの先生怖いんだもん」

「急げ」

「おー」

『いつか』がいつになるかはわからない。

けど。

その時は、伝えてみるか。

… せんせえ。いくらなんでも時代錯誤しすぎです、これ。

「どう？このセンス」

「古い」

自分の机で頼杖をつきつつ、ズバツと美里は答えた。

「だよな」

と、私はげんなり呟く。

紐を通して私の首からぶら下げられた四角い板には、『私は今日遅刻をしました。』とでかでか書いてある。

1時間目、大幅に遅れて教室に現れた私と七緒に、鬼理科教師の橋本がかけさせたものだ。

はつきり言つてレトロすぎ。

「こうなったら私、明日の登校中はトースト齧りながら男の子とぶつかるしかないじゃない」

「で、それが美形の転入生で隣の席なのよ。素敵！」

美里がミラーボールの如く瞳を輝かせる側、私はやれやれと肩を揉み解した。

今日1日外すなと橋本に命じられているため、楽しい昼休みだってのに首と肩はガチガチだ。

「あー、もうっせめてダンボールか何かで作ってくればいいのに、どうしてわざわざ木の板？こんな物ぶら下げてうるついでるだけで恥ずかしいんだから、重さでまで苦痛与えなくても！」

「…どーかん」

数メートル先から気合いのない平仮名発音で割って入ったのは、同じく首から板を下げた七緒。

どーかん…あ、同感。頭の中で変換するまでに少し時間がかかった。七緒は慣れない肩凝りに負けて机に突っ伏している。

「なあなあ東ーそんな疲れきってないでさー校庭でバスケやるーぜー」

七緒の隣でブーたれているのは、バスケット部の田辺だ。

「…悪りい、今日は止めとく」

それでいいのか柔道少年、とそのぐったりした七緒の背中に突っ込みたい。

「昨日約束したじゃんかよ東ー！」

普段から年中お祭りをしているような性格の田辺だけど、今日は一段と声がでかい。

彼は、七緒を誘いながらもさつきから視線が美里に行っている。

わかりやすい奴。

それを知ってか知らずか、小悪魔美里は彼ににっこり笑いかけ、

「田辺君うるさい」

…田辺撃沈。頑張れ。

「それにしても朝は本当にびっくりしちゃったわよ」

そ知らぬ顔の美里が、私にだけ聞こえる声で囁いた。

「2人そろって遅れて来るし、七緒君はほっぺに手形で心都は目が真っ赤なんだもん。しかもその言い訳が…」

美里が笑いを噛み殺した。

「あれは私も無理があると思うよ」

登校中の細い道でボクが後ろから杉崎さんに声をかけたら変質者と勘違いされ泣きながら平手をくらい和解するのに時間を要したので遅刻しました。

怒り狂う橋本に、七緒はペラペラとそう説明した。

信じてもらえるはずもなく、お前らどうせ寝坊だろう、と説教をされてこの時代遅れの罰まで与えられた。

「朝から大変だったのねえ」

しみじみと美里が言う。

彼女には、1時間目が終わった後に（小悪魔スマイルの質問攻めにあいながら）ちゃんと本当の事を説明した。

「でもおかげ様で一段落だよ。ありがと美里」

「お礼はばっちり彼氏彼女になつてから言つてよねー」

「いや本当に、美里には感謝してるよ。昨日も裏庭までついてきてくれたし」

それに今、私の髪が朝より落ち着いているのも、美里が貸してくれたスタイリング剤のおかげだ。

朝の質問攻めの後、「ちよつとは可愛くなれるように努力する」と小声で宣言した私に、あぁやつと心都もやる気出してくれたのね嬉しいわじゃあまずぐしやぐしやの寝癖を直すのが第1歩よいやそれよりそのダツサイの着替えなさいよ、と句読点の入れ場がないくらいの激しいエールをくれた。

そんなわけで私は今、きちんと制服姿で髪も人並みにまとまっている。

「ふふつ、ジャージ登校は今日で封印だからねー心都！」

甘い声で、でも絶対NOとは言わせない雰囲気醸し出す美里に、私は間抜け面でこくこく頷いた。

確かに、常にジャージでいるっていうのは止めなきゃな。別に制服になつたからって急に可愛く変身できるとは思わないけど、小さな変化にはなるだろう。

よし、頑張ろ。

と、秘かに決意したその時、教室のドア側にいるクラスメイトが私を呼んだ。

「杉崎、お客様だぞー」

「オキヤクサマ…?」

見るとそこには、ふわふわヘアが美しい女子生徒。

「…げ。黒岩先輩」

無表情の黒岩先輩は、私に向かつて手の指だけを動かして来い来いのジェスチャーを送っている。

「あのご用で？」

恐る恐る近付き尋ねると、

「あんた今、げって言ったでしょ。…何そのダサイ板」

「えっ、いえ…ハイ。板は気にしないでください」

先輩はなぜか、少し笑った。

「…ちよつと、また裏庭来てくんない？」
「ひ。ま、また？」

先輩は、泣きたい気分でつつ立っている私の肩越しに、少し赤くなつて怒鳴った。

「もう変な意味の呼び出しじゃないからっ！」

誰に言ってる？不思議に思い振り返ると、すぐにわかった。机に突っ伏したまま何か言いたげな顔でこつちを睨んでいる七緒への言葉だ。

「別にあたし、またシメようとか考えてるわけじゃないし」

今までの黒岩先輩と比べたら驚くほど控えめで、そして何だか信じられる態度。

「わかりました、行きます」

私は、昨日から飽きるくらいに通った裏庭へと向かった。

目的地に着くやいなや、先輩は言った。

「東君、痛かったって言ってた？」

「え？」

ああビントの事か、とようやく気付く。

「地味に痛てえって言ってました」

「そう」

黒岩先輩は、私が予想もしなかった行動に出た。わざとらしく咳払いをするとちよつと頭を下げ、

「悪かった」
素直に、謝った。

「……」

「……」

「……ちよつとあんた何、そのマジかよ信じらんねーみたいな顔は」
「え、私そんな顔してますか？」

「あんたはもーちよい自分の顔に責任持った方がいいよ」

「は、はいっ」

先輩はもどかしげに首を振り、

「あー違う違う、説教したいんじゃないやなくてえ、あたしは謝りたいの！……朝はどーもごめんでした！！」

吠えるような口調だけど、今度は勢い良く頭を下げた。そして、そのまま上げようとしない。

私はどうすればいいのかわからず目をしばしは瞬いていた。

「あ、こういう時は「顔を上げてください先輩」とか言うべきかな」
「か」

最初の1文字目で先輩はグオツと顔を上げた。

「東君にも謝つといて」

「……」

この人と喋っていると、私ってめちゃくちゃトロいんじゃないかって気分させられる。

……まあ実際そんなに機敏な方ではないけどっ。

「……何だかなあ」

誰に向けるでもなく、先輩は独り言のように呟いた。

「あたし、東君のあの可愛い顔と声が好きだったんだ」

「そ、そうなんですか」

「だってあれはもう半端ないじゃん！？初めて見て2秒で惚れたっつーの！ヤバイ可愛いから！ね、そう思うでしょっ？ね！？」

すごい勢いで質問をしておきながら私に返事をさせる間もなく、先輩は続けた。

「でもさー。あんたの代わりに殴られた時の東君、全っ然可愛くねーの」

そう言いながら先輩は、私を見つめた。

相変わらず強い視線だったけど、あの睨むような感じとは少し違う。

「顔も声も、っていうかオーラが、あたしの好きな東君とは全然別人になっててさあ。あんたはあんたでついに『大好きなんだもんっつ！』とか言って本音ぶつけてきやがっちゃうし」

「…あは」

笑えない。我ながら顔から火が出そうな本音。

「あの時はカツとなって手が出たけど、実はあたし結構びびってたんだあ」

「びびってた…?」

先輩は苦笑いして軽く頷いた。

「『嫌です邪魔しまくります!』なんて言っちゃって。そうやってマジで逆らってきた生意気な後輩は前例がなかったもんでさー」

「…前にも何人が呼び出しててるんですか」

「ま、それは置いといて。とにかくいたいの奴は怒鳴れば泣いて従うんだけど、そうじゃない相手は初めてだったから、何だコイツって感じで」

先輩は私からバツが悪そうに目を逸らし、

「…何かバカみたいだけど謝るしかねーじゃんって気になったんだよ。あんたにも、東君にも」

私は何て言えばいいのか迷って、先輩のパワーに負けないように早口になってみようかとも思った。

でも、やっぱりゆっくり口を開いた。

「…あの、私も、謝ったんです。七緒に。私の代わりにごめんって先輩は少し寒そうにポケットに手を入れて、私の話を聞いてくれた。でも七緒、私も黒岩先輩も関係なくて、俺が嫌だから動いたんだああって、えつらそーに言ってみました」

「…」

「だから、あいつに本気で謝ろって考えるのは、多分…時間の無駄じゃないかと思うんです」

最後の1文で先輩は笑った。

「何、それ」

「ノンフィクションです」

確かに無駄っぽいわ、と先輩は呟いた。

それから目を眇めて私の顔を見て、

「あんた東君の事話す時、にやにやしすぎ
こう指摘した。」

「にやにや、ですか…」

何か今日の朝、七緒にも言われた気がする。

これじゃまるで、私がものすごおおっく怪しい人間みたいじゃない。私としてはせめてにこにこって言ってもらいたい。

「そ、にやにやしすぎ。ベタ惚れバレバレ」

ベタ惚れバレバレ、早口言葉みたいだ。どうでもいい事を考えてしまった私は、次の先輩の質問でようやく正常に戻った。

「あんたさあ、何で好きなの？」

「え？」

「そこまでバカみたいに東君の事好きなんだから、何か理由があるでしょ？」

理由？

「…正直もう多すぎて自分でもわけわかりません」

そう答える私は、懲りずにまたにやにやしていたんだらうか。

思い出していたのは、朝の七緒のえつらそーな台詞。

「…きっかけみたいなのはきつと、ある……です」

半ば独り言で呟いた言葉を、無理矢理ですます調にした。

「へー、どんなん？」

「いいんですか？ワタシ長々と語っちゃいますヨ？」

「…どーせ喋り終わるまでにやにやし続けるんでしょ？」

そう先輩が嫌味っぽく言う頃には、私はもうどうしようもなく笑い

を抑えきれなくなっていた。

七緒は覚えてる？

今よりずっと子供だったあの日の事を。

2人で泣いたあの日の事を。

4年前　もつと正確に言うのと、3年と11ヶ月前。

私たちは10歳だった。やっと年齢が2桁になって少し大人になれたような、でもまだ子供でいたいような、中途半端な時期。

その頃私は七緒と一緒に柔道を習っていた。といつても、「こんな危険な世の中なんだから今は女の子だって強くなくちゃっ！」というお母さんの教育方針に基づいて半ば無理矢理始めたようなものだったから、あまり楽しくはなくて。

特に冬の道場の、足元が凍りそうなあの凄まじい寒さは本っ当に嫌だった。

その日もとても冷え込んで、外では雪が積もっていた。

「ありがとーございましたあ！」

生徒全員での元気のいい号令が終わり、本日の練習は終了。

「あー寒。早く着替えて帰ろっ」と

こんな日はこたつでみかんが1番賢い過ごし方だもん、と私は意気揚揚と練習場から一歩踏み出した。

「待て心都」

ぐわし。そんな効果音がぴったりな強さで肩を掴んできたのは、当時私より5センチは身長が低かった東七緒。私の大好きな幼馴染み…なんだけど。

その頃の私は七緒の事を、やたら顔の可愛いただの幼馴染み以外の何とも考えていなかった。

なので当然、意識する事もなくその手を叩く。

「何すんのよう七緒」

「お前忘れてるだろーけど今日掃除当番だぞ」

「えー!？」

その道場では練習終了後に生徒が雑巾がけをする決まりがあって、その日は私が当番だったのだ。

冬の雑巾がけ。これほど嫌なものはない。

「何でよりによってこんな寒い日に……」

「文句言うなよ、俺も当番なんだから」

ああさようなら、こたつでみかん……。

私はしょんぼりと呟きながら冷たい床をぺたぺた歩いた。

その日の当番は、私と七緒ともう1人、大柄な男子。

確か同い年だったそいつの名前は　ヤマザキだったかヤマガミだったか。

とにかく意地悪な奴。

道場で唯一の女子だった私が心の底から気に入らなかつたらしく、しょっちゅう嫌な事を言ってきた。

「あーあ杉崎と一緒にかよ！」

そいつは私を見るなり顔を歪めわめいた。

「うるさい」

バケツの上で雑巾を絞りながら言い返すと、相手は今にも唾を吐き出しそうな顔をした。

……くそう、ムカつく。

七緒は呆れたように、1人床をごしごしやっていた。

先生や他の生徒の気配はもう辺りに感じられない。広い道場の中はしんと静まり返っていて、それがいつそう寒さを体に染み込ませる。

雑巾から滴る水でキンキンに冷やされた指は手からもげそう。

さっさと終わらせたくて、私は夢中で床を擦った。

「おい杉崎い」

さっきから雑巾を振り回すだけで全く掃除をしていなかったヤマザキだかヤマガミだが、意地の悪い笑みを浮かべた。

「お前女のくせにいつまで道場続けんだよお？」

もう何百回もこいつに言われてきたお決まりの台詞だ。

私はまたかとうんざりして返事をしなかった。

黙ったまま、今までより少し強めの力で雑巾をかけた。

そのシカトが逆鱗に触れたらしく、彼は再び大口を開けた。

…ここからが、問題だ。

「！」

ヤマザキだかヤマガミ　もう面倒だからヤマザキって事で　は、私に向かって何か吠えた。

でも私はちょうどその時、力いっぱい雑巾を床に擦りつけている最中で、それが発するキュツという甲高い音に気を取られていた。

…まあ早い話が、聞き取れなかったわけです。

でもヤマザキの「さあ、泣くか？泣くよな？泣け！」と言わんばかりの勝ち誇った顔を見れば、私にとってかなりよろしくない意味の言葉である事は明らかだった。

「は？聞こえな…」

私が聞き返そうとしたその時。

今まで真面目に掃除をしていた七緒が、その手から数メートル離れた場所にあるバケツめがけて雑巾を投げた。

ぼちゃっ、と派手な音と水しぶき。

ナイツシュー七緒　とか言えるスポーティで爽やかな雰囲気じゃなかった。

七緒がこんな事をするなんて、珍しい。

「あーあ、周りびしょび…」

しよ、まで私が言う間もなく。

電光石火、七緒はヤマザキと取っ組み合いを開始していた。

「え？何してんの…」

呆然とする私の声なんか誰も聞いちゃいない。

「な、んだよっ！！」

突然飛び掛かられたヤマザキは驚きと怒りが3：7くらいで混じりあった顔をしていた。

でも大柄なそいつは中学生と戦っても互角なくらいパワーがあつて、強い。

小柄で、当時私と戦ってもいい勝負になるくらい弱かった七緒はあ
っけなく背負い投げされた。

ダンッ、と床が鳴る。

「…っ」

自分が息を呑む音がこんなにもはつきりと響き渡ったのは、後にも
先にもこの時だけだ。

ヤマザキの人を見下すような　　っていつか実際七緒を見下ろす格
好だったんだけど　　威圧的で嫌な顔。

「てめえ弱いくせに俺に…」

奴が全部言い終わる前に、七緒が弾丸みたいにすっ飛んで行って試
合が再開された。

「しっけえなっ」

また、投げられる。

冷たくて固い道場の床は、そうとう痛いはず。

「何だよてめえ、いー加減にしるよ！」

ヤマザキの怒号。

でも、七緒は何度も跳ね起きて、飛び掛かっていく。

意味不明なほど、何度も。

「な、七緒…っ止めてよ！！ちよつとホントに…」

七緒のきつく食い縛った歯の間からは何の言葉も発せられない。

ただ、静かに燃えるような目だけが、ヤマザキに向けられていた。

起きて、投げられ。また起きて、投げられ。その繰り返し。

結局私がバケツの汚い水をぶっかけるまで、七緒は11回も投げら
れた。

「冷てえな、マジで何なんだよお前ら！」

と、全身ぐしょ濡れのヤマザキ。

「おい東、お前弱いくせに俺にいきなりかかってくるなんて100
万年早えーんだよ！」

苛立たし気に床の雑巾を蹴り飛ばし、きつと早く着替えたいんだろ
う、鼻息荒くドカドカ力帰ってしまった。

「……………」

私はしばらく放心状態。

今のは何？って混乱状態の心の中で何度もぐるぐる繰り返した。さっきヤマザキが蹴って跳ね上がった雑巾が頭の上に乗っていたけど、どうにかする気力もない。

七緒もびしょびしょのまま床にへたりこんでいた。

「本当に…何してんの」

私がぼつりと漏らした言葉に、返事はない。

七緒は髪からぽたぽた滴れる水を気にもせず、ただじつと床の一点を見つめていた。

10歳の私には、この沈黙が異様に怖くて、

「そ」

言いたい事もまとまっていけないのに、気持ちを吐き出すためつつかえながらまくしたてた。

「そ…そんなさあつ！…そんな、人の代わりに怒ったりとか、そういうの…そのせいで七緒が、痛い思いするんだから…」

「違うよ」

相変わらず床を凝視する七緒の目は、誰かを睨んでいるようにも見える。

「…違うよ。俺、心都の代わりに怒ったんじゃない」

いつもよりほんの少しだけ大人びた声で、目の前の幼馴染みは呟いた。

乱闘の数分前、七緒の手によってぴかぴかに磨きあげられた床。

それに映る自分自身を、彼は睨んでいた。

「自分が…俺」が嫌だから、動いたんだよ」

今まで聞いた中で、最も七緒らしい台詞。

だからこそ、長い長い私の人生で2回も聞けるのかもしれない。

「…だからってあいつに飛び込んでくなよあ…っ」

もう、わけわかんない。

わけわかんないけど、私はありがととかごめんなさいを百連発し

ながら、顔をぐちよぐちよにして泣いていて。

「…ごめん。弱つちいへなちょこで。」

こんな事を言つて七緒もボロツボロに泣きだしちゃうもんだから、私の涙もさらに増えた。

気付いた先生に発見されるまでの10分間、冬の道場で2人で大泣き。

それこそ七ちゃん心都ちゃんって呼び合っていた頃みたいに、わんわん泣いた。

外ではまた雪が降りだしたらしく温度は急激に下がったけど、私はその寒さを少しも疎ましく感じる事はなくて。

熱く火照った涙を冷やしてくれる冷たい空気は、むしろとても素敵に思えた。

こたつでみかんがあんなに好きな子供だったのに。

七緒と冬。

どっちも、きつとあの日好きになっただよ。

11&17: お揃いと、ちょっとした変化&get;

「で。泣き終わってすっきりしたら、何かすっごい好きになっちゃってたんですよねえ」

遠い思い出に浸ってほんわか気分の私に、黒岩先輩は一言こう返した。

「あっそ」

「先輩、反応薄…」

「あたりまえじゃん。あなたの恋話なんか聞いてたってつままないっつーの。そのにやにやした笑いを止めたくて話させてやったんだよ」

「…そーですか。」

先輩、相変わらずキツイ所はキツいまま。

「結局さあ、そのヤマザキだかヤマガミはあなたに何て言ったわけ？」

「さあ」

それは今でもわからずじまいだった。

多分七緒は聞こえていたんだろうけど、教えてくれた事はない。

私も訊ねなかつたし、訊ねる気もなかつた。

「ちっちゃい頃の喧嘩ですから。お前の母ちゃんまでーべーそとかそういうのじゃないですか」

ちなみに私の母ちゃんでもべそじゃあないです、多分。

もつとちなみに、昔自宅へそピアスを開けてその現場を見た5歳の息子を泣かせたのは、七緒の母。

「ふうん。お前の母ちゃんでもべそ、に東君は激怒したわけか」

「…それもよくわかんないですね。まあ、もうそんな昔の事は気にしてませんけど」

結局、最後まで柔道に夢中にはなれなかった私は、しばらくして道場をやめてしまった。

七緒も、中学に入ってからには部活一本にしているようだ。

あの時ももう少し楽しんで習っていたら、今頃は私も柔道部員だったのかな。

歴史の流れを感じるって言ったら大袈裟だけど、少し懐かしいような寂しいような気持ち。

遠くから聞こえる、校庭で遊ぶ生徒の声。

校舎からは、吹奏楽部の昼練の音色。

誰かを咎めるような、教師の甲高い怒鳴り声。

そういえば今年の1年生には結構荒れた奴がいるって聞いた。

もしかしてその人が暴れてるのかな。

そんな事をぼんやり考えていた私は、突然額へ来た軽い衝撃に面食らった。

「うあ!？」

「ぼけーつとすんな。自分の顔に責任持った方がいいつつたじゃん」

と、指を影絵の狐みみたいな型に構えた黒岩先輩。

「…痛いです」

先輩にでこぴんされちつたーエへ。

そう言ったら仲良しっぽく聞こえるけど、黒岩先輩のでこぴんは本当に、冗談抜きで、痛い。

「あんたぼーつとしてるとホントに頭悪そーに見えるんだから、東君の前ではもつとキリツとしてな。嫌われるよ?」

人差し指を突きつけながら、先輩はびしつと言い放った。

…これは。

これは好意的なアドバイス、と受け取っちゃっていいんだらうか? だとしたら、黒岩先輩はもう七緒の事…。

「ちよつと」

また考えが顔に出ていたのか、黒岩先輩が少し眉をつり上げた。

「念のため言っとくけど、あたし諦めたわけじゃないからねっ! 確かにあの時 あんたの代わりに殴られた時の東君は、あたしの好

きな可愛いメロメロプリチーな東君とは違ってたけど…でもその直後のにつこり顔には、もう悩殺だったから！つまり、チャンスがあればまた狙うからね！？」

私の顔を見据えて、勢いよく言う。

「…ただ、もう殴ったり呼び出してシメたり、そういう汚い事はしないから」

ライバルが減ったわけではなく。

これからも、サバイバルになりそう。

ただど少なくとも、今の先輩の言葉は、信じられた。

「…私も。今更ですけど、ちよつと頑張ってみようかなーとか、思ってるんです」

例えば、髪をちゃんとしてこよう、とか。

普段からいかにも気合いゼロなだぼだぼジャージは控えよう、とか。

「まだまだちよつとした事ですけど…」

「だから朝より格好がマシになってるわけか。でもその首の古くさい板は、間違つてもあんたを可愛くは見せないんじゃない？」

まあ、確かに。

別に見た目の問題だけじゃなく、こんな肩凝りの原因は一刻も早く外したい。

でもここまで強気に「メロメロプリチー」とか言える黒岩先輩を見ると、ほんの少し対抗意識が芽生えて。

だから私は重い板を無理矢理掲げて、胸を張った。

「お揃いだからいーんですっ」

アホか、とでも言いたげな先輩の表情。

というかその数秒後、実際に言った。

「アホか。まあせいぜい頑張んなよ。…頑張れば、ちよつとは可能性あるんじゃない？」

「はいっ…あの、黒岩先輩」

「何」

じろっ、と無愛想な顔を向ける先輩。

「先輩は私を、こんな生意気な奴は初めてって言ってましたけど…」
強い視線を受けても、もう恐いとは思わなかった。

「…私も、呼び出しの時1対1だったのは先輩が初めてです」

もつとも、私はあれが呼び出し初経験だったんだけど。

でも呼び出しつてもつとこつ、複数対1人とかだと思っていただけで。

何だか堪えきれなくなって、私はちよつと笑った。

先輩はもう一度、

「アホか」

と言った。

でも次に、あたしはタイムン主義者なんだよと言った黒岩先輩の目は、間違いないく、ちゃんと笑っていた。

「何か言われた？」

「え？」

教室へ戻った私に、七緒が訊ねた。

「また朝みたいな事…」

「あ、ううん全然。仲良しになったとまでは言わないけど、女同士和解成立っ」

私がニカツと笑うと（今度こそにやにやにならないよう気を付けた）

、七緒は凝り固まった肩をとんと叩きながら床に座った。

「だったらよかったよかった」

「うっわ、おっさんくさ…でも、心配どうも」

「…別に心配ってほどじゃないけど。心都ならその板とか武器にして戦いだしそうだし」

と、七緒が意地悪く笑う。綺麗な歯を覗かせ、にやり。

…う。やっぱりそこらの女の子より、全然可愛いよこの人。ちよつと悔しい。

「…自分は母ちゃんへのそびで号泣のくせにっ」

「い、いつの話だよ。てか全然関係ねーじゃん！」

と、下から私を睨む七緒の視線が、ふと止まった。

まるで珍しい物でも見るように首を傾げながら、私の頭の辺りを眺める。

「…何？」

「や、何かいつもと違う気が…」

えっ き、気付いた!?

この超絶鈍感美少女顔男が!

「嘘っわ、わかる?実は美里に寝癖直しのスタイリング剤とか借りて…」

必死こいて説明する私をよそに、七緒はぼんつと手を打った。

「あー、わかった!」

わかった、って。本当に!?

まだ地道な自分改造計画1日目だっというのに

こんなちよつとした変化に気付いてくれるなんて!

ああ決心してよかった、やっぱりこの恋そんなに捨てたもんじゃないんだね…。

と、感動の嵐に巻き込まれた私は涙ぐみながら1人でこくこく頷いた。

「うん、やっぱり」

そう言いながら七緒がすつくと立ち上がった。

そしてその手が、どういうわけか私の頭に。

「…え。え!?!何この手はちよちよちよつと七緒サン!?!」

「じつとしてて」

真剣な七緒の顔が、すぐそばにある。

何!?!ていうか、何っ!?!?

感動の嵐から一変、今度は混乱の渦が巻き起こった。

だって、七緒の手が何故か私の頭に！
4年前なら何の事なく払い除けたこの手。なのに、今はどうだ。
心臓の音が七緒に聞こえちゃうんじゃないかってくらいに緊張しき
っている、自分の免疫のなさが嫌だ。
そして数秒後。

ぶちっ。

「…ん？」

やけに軽快な音と共に、つむじから来る一瞬の痛み。
そして目の前には、「あ、抜けた」と満面の笑みを浮かべる七緒。
さっきまで私の頭上にあったその手には今、白い糸のような物が握
られている。

「うわー、根元から毛先まで真っ白だよ！俺、若白髪って初めて見
た。何か違和感あるなあと思ってたんだけど、やっぱりこれが原因だ
ったかー」

「……。」

「それにしてもこんな見事に真っ白なんて、心都、ストレス溜め込
んでんだろ」

うん。あのさ七緒。

私の髪の毛の落ち着きに気付くより、この1本の細い若白髪を見つける
方が遥かに難しいと思うんだけど。

…そりゃあストレスも溜まりますわ。

だって好きな相手がこんな奴なんだから。

「ってこんなオチ納得いくか　　！！」

「また絶叫！？やっぱストレス溜まってんだ」

「うっさいバカー！！」

やっぱり、と言っべきか。

そんなに簡単にはいかないようです。

こんな私たち。想いが伝わる「いつか」は、本当にいつになるのでしょうか。

…畜生。絶対可愛くなってやる。

1 & 1 t ; ふりふりフリルと、最後のチャンス & g t ;

本日12月24日、恋人たちのクリスマスイヴ！

去年までの私には関係のないイベントだけど、今年はちょっと違う。なぜなら今、宝石みたいにライトアップされた街を、七緒と2人で歩いているから。

「はい、これ」

そう言って七緒が差し出したのは、

「わぁ、指輪？」

「…こーいう時はリングって言えばよな」

華奢なシルバーの輪に、きらきら光る石がしがみついている。

「かわいいー！ありがとうございます七緒」

何かもう、幸せすぎて怖い。

お願い、夢なら覚めないで。

「ぐへっ」

笑ったところで目が覚めた。

ベッドから落ちて。

「…やっぱり夢オチかい」

寝癖頭をぼりぼりかきながら呟く。

ここはイルミネーションが光り輝くイヴの街ではなく、散らかり気味な7畳の私の部屋。

そりゃそうだよ。

クリスマスイヴに七緒と仲良く2人きりなんて、我ながら呆れるほど都合のいい夢。

だいたい、イヴなんてまだ1週間も先だし。

「あ……。今年はどうなんのかなあ……」

「どうなるのかしらねえ」

と、私の独り言に突然の相槌。

「おはよう心都っ」

華やかなピンクに溢れんばかりのフリルを乗せたド派手なエプロン。それを身に纏ったその人は満面の笑みで立っていた。

「…おはようお母さん。今日のはまた一段とすんごいね」

「可愛いでしょお？」

裾を摘んでくるつと1回転　こんな、今時小さな女の子でもやらないような芸当を朝っぱらからやってのける（しかも嬉しそう）のが、我がお母様。

「おニユーよ、おニユー！ほら見て、フリルの先にピンクのビーズが付いているのよ！素敵よねえ」

ふりふりフリル、リボン、レース…子持ちの主婦としてはどーなの的なこの趣味は昔から、それこそ学生時代からのものらしい。

幸いと言っていいのか、一人娘である私には遺伝しなかったけど。

「これまたごてごてな…ってかちよつと待って何で私の部屋にいるの？」

「あら、母親が娘を起こしに来ちゃいけないわけ？時間になっても起きてこないから声かけにきたのよっ。そしたらなーんか幸せそうな顔して寝てるから。寝言まで言っちゃって」

「えっ」

嫌な予感。

探るような、そして明らかに面白がっている表情でお母さんは言った。

「『メリークリスマスえへへへ』って。誰と一緒にいる夢見てたのかしらねえ」

「とっ友達だよ！友達みんなでパーティーする夢！」

「ふうーん」

疑わしそうな目。

…危ない。

何しろ、私のお母さんと七緒のお母さんは、高校時代からの無二の親友だ。

もしお母さんが私の気持ちを知ったら、すぐ親友に伝えて母親同士勝手に盛り上がるに違いない。そしてその流れから七緒にも伝わりかねないわけで。

つまり、私のお母さんに恋心がバレるのは危険って事だ。

「ああ、パーティーで思い出したわ！あのね心都、実は七ちゃんか…」
「ぐはっ」

「あらやだ。何してるのよー」

タイミングよく出てきたその名前に気を取られて、顔面強打。

「ちょ、ちよつと足がもつれて…で、七緒がどうしたって？」

お母さんは昔のアイドルみたいに両手で頬を挟み、

「明美から聞いたんだけどね、七ちゃん、俺は今年はパーティーなんかぜってー行かねーって宣言してるらしいのよー」

明美さん（おばさんと呼ぶと烈火の如く怒る） 七緒のお母さんだ。

「あー…無理もないんじゃない？私だってそろそろ抜けようかと思つてたし」

「ええ？そんな寂しい事言わないでよー」

と、眉を下げ駄々をこねるおかーさま。どっちが親だか。

さつきも言った通り親友である私のお母さんと明美さんは、学生の頃からクリスマスは欠かさず2人で祝ってきたらしい。

そしてその習慣は、お互い結婚して子供ができて変わらさず。

私たちが生まれて最初のクリスマスから今まで、杉崎家と東家の合同パーティーが毎年のイヴの定番となっているのだ。

パーティーと言っても、どちらかの家で唐揚げやらケーキやらを食べる後は世間話をするだけのものなんだけど。

つまりその恒例行事に、今年の七緒は「ぜってー行かねー」らしい。

「うーん…まあ当然っちゃ当然だよな」

「ええ、どうして？」

お母さんは腑に落ちない様子だけど、私だって七緒の気持ちはわかる。

14にもなつて家族とわいわいパーティーなんてホームドラマみたいな事、そろそろ恥ずかしい。

昔みたいに家族ぐるみで和気藹々とはいかないんだろうな、きっと確か去年だって、気乗りしない様子の七緒を、彼の母が無理矢理引っ張ってきたんだっけ。

「しょうがないよ。もうチューガクサーなんだしさ」

「まあ男の子だし…そういうの、もう照れちゃうのかしらね、七ちゃんも」

「そうそう。というわけで今年は明美さんと2人でやれば？久しぶりの親友水入らずで」

お母さんはまだ不服そうに、寂しいわーとフリルのエプロンを振ったけど、それが私の正直な気持ちだ。

確かに、クリスマスを好きな人と一緒に過ごせるのは、とてつもなく幸せな事だと思う。

でも家族同士で過ごすのは何か違うよな、と首を傾げてしまうのは長年の腐れ縁から来る、ただの高望みなのかなあ…。

「へっくしー!!」

七緒のコントみたいなくしゃみが辺りに響いた。

無理もない。誰だって、冬真っ最中の12月に頭から冷水をぶつか

けられたらこうなってしまうだろう。

3時間目の美術の授業中。つまり、今。

絵筆を洗うために用意されたバケツの水がひっくり返り、運悪く近くにいた七緒がとぼつちりを受けてしまったのだ。

4年前の道場の取っ組み合いの時といい、七緒はよっぽどバケツの水と縁があるらしい（まあ、あの時ぶっかけたのは私だけだ）。

でも水を被った七緒は、髪の毛がきらきらと光って、何だかますます美少女っぷりが上がっているように見える。

これぞまさに。

「水も滴るいい女…?」

「おいこら心都。誰が女　へっくし!」

相変わらずの地獄耳。でも、くしゃみ混じりの反撃は気のせいかな少しなさを感じる。

七緒はむすつとしながらも、制服を着替えるために美術室を出ていった。

「ねえねえ心都」

隣の美里が、左手は筆を動かしながら（美里は左利きだ）首だけをこっちに向ける。

「心都はクリスマスどうするの？七緒君と過ごせそう?」

「寂しい私にはどーせ予定がないですヨ。今年は東家とのパーティも母親組だけの参加になりそうだし、多分暇かな」

「ちよつとお、そんなのん気な事言つて…今年が最後のチャンスかもしれないってわかつてる?」

「え?」

今まで画用紙にべたべたと絵の具を塗り付けていた私の右手は、止まってしまった。

その反応を見た美里は、「食い付いたな」とばかりに目をきらりと光らせた。

「来年の今頃は受験で忙しいだろうし、高校が同じかどうかだってわかんないじゃない。だからね、クリスマスと一緒に過ごせるのな

んで、彼女にでもならない限り今年が最後かもしれないでしょ？」

「そ…つかあ、そうだよな」

あまり考えていなかった（というか考えたくなかった）けど、来年は受験なんだ。

きつとクリスマスどころじゃなくなっているんだろう。

それから高校。七緒はどこに行くのかな。成績的には同じくらいだけど、もし学校離れちゃったらもう今までみたいには会えないかもな。

…うわあ。何か私って。

「先の事なんつも考えてなかったんだなあ…」

頭がくらくらしてきた。

「だからこそ今年は一歩進むべきでしょー？」

形のいい唇を尖らせた美里は、絵筆をぶんぶん振り回した。

ピンクの絵の具が飛び散って後ろの男子の顔面を直撃したけど、なぜかそいつは嬉しそうで。

「あ、ごめーん田辺君。絵の具付いちやった？」

「えっ！？あ、いや全然！もうかなりいい具合にほんのり染まったから！」

ほんのりどころか、顔を真っ赤にしながらかわいのわからない事を口走る田辺。

「本当に？」

…出た。小悪魔美里の必殺上目遣い。

硬直状態の田辺は、すでに頷く事すら出来なくなっている。

何かあまりにも気の毒だ。

「こらこら。純情な少年を弄ぶなっつての」

私が目の前で手をひらひらと振ると、美里は「弄んでないわよう」と言いたげに口を開きかけた。

しかし数秒後、美里は口じゃなく目を大きく見開いた。

その目がいつもの数倍きらきらと輝いて、私を見る。

「何？」

こういう時の美里は、何か「すっごく素敵！」な事を考えていたりする。

そして、その読みは的中した。

「ねーえ、田辺君？」

美里に甘ったるく呼び掛けられた田辺は、完全に頬が緩み切っている。

「な、何？」

「田辺君クリスマススの予定なんかはどうなってるの？」

「え、俺？特に何も…」

「あらそう！」

美里の目が輝きを増す。

「じゃあ一緒にクリスマスパーティーしない？私と心都と田辺君と、あと誰か　そうね、七緒君でも誘って！」

「「ええ！？」」

私と田辺の声が、見事にハモった。

「何よう2人しておつきい声出しちゃって」

「だってそんな急に　ねえ、田辺？」

首を捻って問い掛けると、そこはお花畑だった。

「…」

校内1の美少女からお誘いを受けた彼は、完全に夢見る表情で宙を見つめている。

駄目だこりゃ。

「ね、心都。七緒君誘ってみれば？来てくれたら嬉しいでしょ？」

「…うん、嬉しい」

嬉しくて泣きますよ、私。

でも七緒は。

パーティーなんかぜってー行かねーって宣言したらしい七緒は、来るんだらうか。

幼馴染みのお誘いに、首を縦に振ってくれるんだらうか　？

「俺が何？」

「ぎゃっ」

いつの間にか、着替えを終え戻ってきた七緒が田辺の隣の席にいた。「ぎゃって何だよ、ぎゃって」

ジャージ姿の七緒が不機嫌そうに私を見る。

「だっていきなりいるんだもん。そういうえば制服大丈夫だった？」

「あー、水に絵の具が混ざってたみたいで染みが付いてた。クリーニング出さなきゃいけないから当然ジャージだな。動きやすくていいけど」

ジャージ姿の七緒を見ると、服は着る人によって変わるもんだなあっていつも思う。

前に七緒ファンのお姉様方が「ジャージの天使よおお」とか言っているのを聞いた。

正直、私もちよーっとだけ心の中で頷いてしまった。

だって、私が着るとただのダサい青ジャージなのに！

それが七緒は、可愛らしさがあるというか、爽やかというか　と　とにかく、ジャージまで光って見える。

…私、かなり重症かも。

「あかさ、七緒」

「ん？」

「えっと、24日の事なんだけど　」

と、私が切り出そうとしたその時だった。

パソコン。そんな感じの鈍い破壊音が、廊下で響いた。

2 & 1 t : 悲しい現実と、逃避法 & g t ;

何かを叩きつけるようなその音は2、3回続いた。

「やだー何？」

美里が大げさな手振りで耳を塞いだ。でも心なしかその口調はどこか楽しげ。

自習にする、と狼狽えた声で告げた若い美術教師は慌てて廊下へ飛び出していった。

教室が騒つく。

「うふ、これで堂々とお喋りできるわね」

「なるほど、そういう訳ね。でも、なんたる今の音。1年生の教室の方から聞こえてきたけど」

「ああ、進藤じゃねえ？」

ようやく夢の世界から帰ってきた田辺が口を開いた。

「進藤ってだあれ？」

美里に問い掛けられ舞い上がった田辺は、いつもより高い声で説明した。

「1年生だよ。入学した頃からやんちゃしてたみたいんだけど、最近ますます荒れてて1日1回はキレるらしい。キレると壁とかごみ箱とかボコボコに蹴るんだってさ。しかも担任がああ鬼の橋本だから、よく衝突するんだって」

「だから先生総出で抑えに行ってるわけか。大変だなー。それにしても田辺詳しすぎだろ」

半ば呆れたような七緒の言葉に、田辺は胸を張った。

「だって橋本、バスケ部の顧問だし。進藤のせいかわらないけど最近橋本も超イラついてて、練習厳しいんだよ」

「あ、そーいえば田辺君バスケ部のね」

この一言に、再び田辺撃沈。美里さん、「そーいえば」はキツいです。

その笑顔から察するに、彼女に悪気はない、多分。だから余計、始末が悪い。

へこんでしまった田辺に代わって七緒が口を開く。

「…で、何？心都」

「は？」

「さっきの。何か言いかけてたじゃん」

まさかここでその話に戻されるとは。案の定、私は動揺しまくってしまった。

「え！？あ、あれね」

何度も見慣れた七緒のきよとん顔が、私をじっと眺める。

バカ。そんな風にされたらこっちがますます言葉に詰まるって事くらい、いい加減わかってよ。

泣きたいようなキレたいような気持ちを何とか抑える。

「七緒、今年はお母さんたちのクリスマス会行かないんでしょ？」

応えはすぐに返ってきた。

「去年は引きずられて行っただけど、今年はまだ勘弁。つかそれ以前にその日部活なんだよ」

「へえー。……って部活！？クリスマススイヴなのに！？」

「うん、部活。日本武道にクリスマスなんか関係ねえっていうのが主将の意見で。単に彼女いなくてやけくそになってるだけって噂もあるけど」

ゴーン。哀しい鐘の音色が聞こえた気がした。

「…そっかー。柔道部も大変だね」

「その日何かあんの？」

「や、別に。部活頑張れよー」

私がバシッと肩を叩くと、七緒は前につんのめった。

美里が私に、憐れむような視線を向ける。

…うう。我ながら虚しいなー、この展開。

悲しい時は生クリーム。

これ、14年間の人生の中で得た私の教訓。

もつとも、食べるわけじゃなく作る方なんだけど（だって太りたくないし）。

悲しみを手動泡立て器に込め、ひたすらボウルの中のクリームに集中する。

頑張れば頑張っただけふわふわになってくれるクリームを見ると「ああやれば出来るじゃん」ってな感じでほんの少し気分が回復する。

…まあ早い話が、ちよつとした現実逃避？

そして私は只今、その逃避の真っ最中で。

「……………」

無言で泡立て器を握り締め、銀色に光るボウルの中をがしがしやっていた。

場所は放課後の調理室。

といつても、何も個人的な理由のために教室まで貸し切りに行っているわけじゃない。

今の私、現実逃避の真っ最中であると共に、れっきとした部活動の真っ最中でもある。

『料理部に入れば少しは女の子らしくなれちゃったりするかなーへ』

そんなにやけ笑いを伴う動機で入部したのが中1の春。

それ以来私は料理部員だ。

おかげで料理はそれなりに好きになったけど、入部から1年以上たった今も女の子らしさに大した変化はない。

…それはさておき。無言で手だけをやけに機敏に動かし続ける私の姿は、かなり異様らしかった。

「わあ今日は気合い入ってるねー」
と、部活仲間に驚かれつつ、クリームを泡立てまくる。
腕折れんぞこんちくしょうってくらいに。

「……」
そりゃあそんなに上手くいくとは思っていなかったけど。

でも、今年のクリスマスはちょっといい感じで過ごせるかなあなんて、ワンパターンな妄想がちらつと頭をかすめたりもした。

それが あんなにあっさりばっさり玉砕かい。
つまり私が言いたいのは。

「柔道部主将のばかー」

溜め息混じりの呟きは、ドアをノックする音にかき消された。

「失礼しまーす……」

遠慮がちにひよこつと現れたのは紛れもなく私の溜め息のタネ、七緒。

部員のみんなは「東君だ可愛いー」と囁いたけど、さすがにジャージの天使とか言い出す人はいなかった。

それもそのはず、料理部はもう3年生が引退しているので、七緒より年上はこの教室内にいないのだ。

上級生には熱狂的ファンを持つ七緒だけど、同い年や年下には少し可愛すぎるらしい。そこまで「七緒ラブー！」な人（それこそ黒岩先輩みたいなの）は1、2年生にはあまりいない。

私にとっては少しでも競争率が減って嬉しい限りだけど。
ドア付近に立った七緒は私と目が合うところくり頷いた。

つまり、ちよつと来いって事か？

怪訝に思いながらも近づくと、七緒は珍しく気遣わしげな口調で言った。

「そろそろ部活終わる？」

「うん、5時半だからもうすぐ終わると思うけど。柔道は？」

「さっき終わったんだけど」

七緒はここで一旦言葉を切り、目の前でパンッと両手を合わせた。

「心都に、折り入って頼みがある！」

3&17:女子マネもどきと、拳の予感>

昔から、そう。

七緒の頼みといえは、それはそれは大した事のないもの（例えば消しゴム貸してくれとか）ばかりだった。

だから今回も、そんな感じの用件かなあと思っていた。のだけれど。

「りょーり？」

間の抜けた声で聞き返す私に、七緒はこっくり頷いた。

12月ともなると、日が落ちるのが早い。

薄暗くなり始めた通学路を七緒と2人で歩きながら、私は「これってちょっとだけ正夢？」とかぼんやり考えていた。

でもその夢見心地な思考も、七緒が本題を切り出すのと同時に終わった。

「心都、仮にも料理部じゃん？料理教えてほしいんだ」

「仮にもは余計なんだけど。ていうか何でまた急に。一人暮らしでも始めるわけ？」

「じゃなくて」

実はさ、と七緒は語り始めた。

早い話が、今日の部活中くじで運悪く当たりを引いた七緒は「めっちゃくちや重くて辛くて大変な差し入れ係」に任命されてしまったらしい。

「何そのめっちゃくちや重くて辛くて大変な差し入れ係って」

「夏休みとか冬休みだけの臨時の係なんだけど、練習の度に部員皆の差し入れ作ってかなきゃいけないんだよ。ほらうちの部活マネージャーとかいないから1、2年生の中の誰かがやる事になってて。

もちろん練習は普通にするけど、休憩時間中はマネージャー代わり

になるって感じのやたら忙しい係でさ」

つまり冬休み中の七緒は可愛らしい女子マネみたいに、レモンの砂糖漬けやらスタミナドリンクやらをいそいそ用意するって事か。

……何かそれって、ビジュアル的にハマりすぎ？

「でも料理って七緒さあ……」

「だから心都に教えてもらいたいんだよ」

悲愴感漂う七緒の声。それには理由がある。

「ひつどいもんね、七緒の料理……」

小学校低学年の頃、母の日に私の家で一緒にカレーを作った。

エプロンを着てさあやるぞと意気込んだのはいいけれど、じゃが芋を切る七緒の包丁さばきを見た私は、幼心にはつきりと思った。

絶対こいつに包丁を持たせちゃいけない、って。

というか包丁だけじゃない。

味付けも盛り付けも分量も、きつと生まれつき才能がないってこういうのを言うのかなあと考えてしまうくらいに、七緒はひどい。

そうしてその日出来上がったカレーはある意味スペシャルだった。

「確かにあの腕前で差し入れとか作っちゃったら相当素敵なお事になりそうだねー。でも私、いくら部活でやってるからって人に教えられないほど上手くないよ?」

「そんなに豪勢なもんは作んないし、基本的な事教えてくれるだけでいいから! 駄目?」

七緒は再び両手を合わせ、縋るような目で私を見た。

「……………」

そんな顔されて、断れるわけないでしょーが。

「わかった、いーよ。でも本当に大した事は出来ないからね、そこんとこよろしく」

七緒が屈託ない笑顔で拳を宙に突き上げる。

「サンキュ、やっぱ持つべきものは料理ができる幼馴染み!」

やっぱりポジションはそこだよな。心の中で小さく呟いて苦笑い。

「じゃあ帰りに家寄ってく? 冬休みまであんまり日もないから特訓

始めるんなら早い方がいいし、きつとうちのお母さんも七緒が来た
ら」

喜ぶよ、と言いかけた私は思わずその言葉を飲み込んでしまった。

「…ねえ、あれって」

10メートルほど先、人通りの少ない細い道を指差す。

そこには向かい合う2人の少年。着ている制服はうちの学校のもの
だ。

「何か…とても仲良く話してるようには見えないんだけど」

「…だよな」

背の高い方の少年が、小柄な少年の胸ぐらを掴んで怒鳴っている。

「ふっざけんなよテメエ!!! ナメてんのかよ、え!? 誠意見せるや、
誠意をよ」

ヤクザかよ。

対する小柄な少年が怯えきつた声を出す。

「す、すいません進藤さん…っ」

私は、美術の時間に聞いた田辺の話を思い出した。

「やんちゃ(??)でキレると周りの物をボッコボコに蹴るという1年
生と、まさかここで出会うとは。」

「あれが進藤か…」

隣の七緒が呟いた。

「何かヤバそうだしとりあえず止めなきや」

か弱い私には危険だ

し、七緒ファイト一発!」

と、せつかく目一杯の笑顔でエールを送ってあげたというのにこの
男は。

「か弱い私って誰だよ」

「わかんない?」

「うん」

……軽い冗談だったの。

「ただどやっぱり、何だかんだ言いながら七緒は昔から変わらずそう
いう奴で。」

「悪いけど全くわかんねえ」

そう言いながら私に鞆を預け、気合い入れなのかこの寒空の下ジャージの腕を捲る。

「…へつくし！」

格好つかない今のくしゃみは、可哀想だから聞かなかった事にしてあげよう。

そして七緒は、怒鳴る進藤と震える少年　「謝るだけじゃ許されねえつつつてんだよ」「そ、そんな事言っただって」「テメエ口答えすんのか、ぶっ殺すぞ」「ヒィ」　に近付いていく。

私はその背中の中の少し後ろにつけ、いざという時にはすぐ飛び出せるように両足に力を込めた。

「あ…ちょっとその、進藤」

七緒が進藤の肩を掴んだ。

「あゝあ！？」

濁った怒鳴り声と共に振り返った進藤を見て、私は思わず呟いた。

「……………すんげえ」

ああいけない言葉遣いが。

とにかく初めて間近で見る進藤は、ポロツと男言葉が出るくらいすごかったって事。

もちろん外見の話。

つんつんに立った赤い髪は限界まで重力に逆らっていて、反対に制服のズボンは地面につくほど引きずり気味。両耳には2つずつのピアス。こつちを睨み付けるその目には、よく切れるナイフのような鋭さがある。

とてもじゃないけど去年までランドセル背負って小学校に通っていたとは思えない。

「何だよ」

「この状況で呼び止められたらわかんだろーが。放してやれよ」
小柄な少年が救いを求めるように七緒を見る。

進藤は相変わらずぎろりとした目付きのまま唇の端を歪めた。

「こいつがぶつかつといてちゃんとした態度を取んねえから指導してやってんだよ」

「胸ぐら掴んで怒鳴り散らすのが指導かよ」

「うっせえな放つとけよ」

何だか危ない雰囲気。

本当にヤバくなった時に備えて、私は2人分の鞆を地面に降ろした。もしそうになったら私が止めなくちゃならない。

もちろん拳での殴り合いなんか経験した事もないもんだから心臓はバクバクで、それを紛らわすために心の中で叫んだ。

ああもう、これだから男の喧嘩なんて！

…いやまあ女でも手エ出す人はいるけどね、うん。

4 & 1 t ; 告白と、続くサバイバル & g t ;

案の定、先にキレたのは進藤だった。

盛大な舌打ちの後、今まで少年の胸元にあった右手を思いっきり振るう。

「……………」

止めようと駆け寄るその一瞬の間に、私は3つの事を考えた。

『立場逆だけど前にもあったなこんな場面』

『七緒のためなら歯の1本や2本!』

『……………でも前歯は嫌』

そして。

結果的に、私の助けは必要なかった。

柔道で鍛えた反射神経で、七緒はすんでのところで進藤の手首を掴んだのだ。

ああ心臓に悪い。

私は中途半端な割り込み未遂の格好のまま、ホッと息をついた。

「……………」

苛立たしげに腕を振り払おうとする進藤。

だけど七緒はその手を離さず。

「お前」

私はてつきり、七緒が1発説教でもぶちかますのかと思った。でも、違った。

「本当は判ってるんだろ」

何を。

七緒は怒っているようでもなく、波立ちのない口調でそれだけ言う
と、あとは静かに進藤の目を見ていた。
いつも思う。

こういう真剣な時の七緒の目はとても強くて、絶対に逸らせない
だ。

14年間で一度も、私はこの目から逃げられた事がない。

そして、それはどうやら進藤にとっても同じらしく。

それ以上七緒の手を振り払おうとはせずに、ただその視線を受けと
める。

「……」

流れる空気は、重くならなかった。

しばらく睨み合っていたかと思うと、ふいに七緒が進藤から手を離
した。

そして、さっきからずっと地面にへたり込んでいたあの気の毒な少
年に声をかける。

「だいじよぶか…?」

「は、はい」

進藤はというと、さっきまでの威嚇的な眼光はどこへやら、何とも
間の抜けた顔で自分の右手をぼうつと見つめている。

えっと、何だっけこういうの　骨抜き?...ちよっと違うか。

とにかく、私を感じる事はただ1つ。

何かすごいな、七ちゃん。

そして今回も役に立ってないなー心都ちゃん。

私は小さな感動と虚しさを覚えながら、少年にすごい勢いで頭を下
げられ照れまくっている幼馴染みの姿を眺めた。

「あのっ。ちよっといいスカ」

「はい?」

気が付いたら、すっかりナイフの鋭さを失った進藤が私のすぐ傍に
いた。

ていつか敬語だ。七緒は、さっきまでヤクザよろしく怒鳴り散らし

ていたこの1年生の言葉遣いまでをも変えてしまったのか。

進藤はその外見に似合わない空気だけの声　　いわゆる乙女の内緒話系囁き声　　を出した。

「あの人の名前、何て言うんスか」

少し離れた所で、まだ頭を下げられ続けている七緒。

何故か微妙に震えている進藤の人差し指は、しっかりとそれを示していた。

「2年2組の東七緒っスよー」

何で私まで敬語で喋ってんだろうなと自分に疑問を感じつつ答える
と、彼はそつと呟いた。

「七緒先輩　　…」

あれ今、薔薇咲いた？

一瞬すごく華やかな幻覚が見えたような。

幻覚じゃなかった。

とても恐ろしい事だけど、薔薇は進藤の瞳の中に咲いていた。
おいおいおいおい。

突っ込む間もなく、進藤は回れ右して七緒の方を向く。

「七緒先輩！」

ちょうど帰ったあの少年の後ろ姿を見送っていた七緒は、

「え？」

いつもの顔で振り返る。

そう、いつものきよとんとした美少女顔で　　。

「…あ、もしかして」

私が信じ難い事実に気付く頃には、もう始まっていた。

何がって、爆裂不良少年進藤クンの、頬を紅潮させながらの大絶叫が。

「1年1組進藤祿朗っス！今、惚れましたっ！！オレとお付き合
してくださあぁ　　いつー！！」

新たな恋のライバルは、
性別の壁をぶっとばしてやってきたようだ。

【惚れる】意味：異性を好きになる。心を奪われる。

異性じゃない場合は、どうなのですか。

進藤禄朗（へー名前ろくろーっていうんだーとか思う暇もなかった）による熱血的な告白の後、数秒続いた沈黙を破ったのは七緒の間抜けな声だった。

「……………へっ…?」

さつき喧嘩を止めた時の気迫はどこへやら、七緒の眉はギャグ漫画みたいに八の字に下がり、目と口はこれ以上ないくらいぽっかりと開いている。効果音を付けるとしたらがちょーんってところか。せつかくの美少女フェイスが台無しだ。

「オレ…っこんな気持ちになったのマジ初めてっス。七緒先輩みたいな強くて綺麗な女の人に、今まで会った事ないっス！」
ぴきっ、と七緒の表情が引きつった。

「一生、幸せにします！七緒先輩となら温かい家庭が築けそうな気がするっス！」

私の『もしかして』は、珍しくばっちり当たってしまったらしい。この進藤禄朗、ジャージ姿の七緒を完璧に女だと思っている。

が、彼の暴走は止まらない。

「浮気なんかしませんし、日曜はしっかり家族サービスするっス！子供はやっぱり娘2人に息子1人っスカね」

思考回路が停止していそうな七緒に変わって、とりあえず私が突っ込んでおこう。

飛躍しすぎです。

そして子供産めません。

「お付き合いしてくださいっ！」

胸の前で拳を握り締め、瞳を輝かせながら進藤禄朗は言った。想い人が男に求愛されている。こんな時、私の立場としてはどうするべきなんだろう。

ねえ、これ、笑っていいの？女に間違えられるのはかれこれ5回目（うち4回はナンパ）の我が幼馴染みを、笑いながらからかつちやっついていいの？じゃないと　笑わないと私、辺りに漂うこの妙な緊張感に押し潰されそう。

「…えーと…し、進藤？」

これ以上なくらいに困った顔の七緒が、やっとまともな言葉を発した。

「“進藤”なんてそんな他人行儀すぎるっすよ、禄朗って呼んでください」

「じゃ禄朗」

「はいっ」

名前で呼ばれて嬉しそうなろくくン。何かもう、完全にただの恋する中学生だ。むしろそこまで素直に愛情表現できるのがちょっと羨ましい。今の私には、とても難しい事だからだ。

「その…お気持ちは、大変あ、ありがたいんですが」

七緒はしどろもどろながらもそう言い、俯き加減だった顔を上げる。

「俺、男だから」

それを聞いた禄朗は　笑った。

「はははっ、またまたそんな。それ先輩流のアメリカンジョークっすかー？」

「いやジョークとかじゃなく！つかアメリカン？」

「そんな可愛い顔で一人称俺とか言われても信じらんないっすよ。

先輩はどっからどう見ても、可憐で、キュートで、華やかで、ヴェ

リースウィートで、男なら惹かれずにはいられようなマブい女の子ス」

マブいって死語だよなーとか私が思っている間に、ぴきっ、と再び七緒が音をたてた。今度は引きつったわけではなく、きつと。

「…てんめえ…」

やっぱり青筋の方の音。

当然といえば当然だけど、七緒は女に間違えられるのをものすごく嫌がる。ていうかキレル。説明しても信じてもらえない時は、特に。

「男だっつってんだろが！」

と、七緒は自分の着ているジャージの上着をガツと捲り、

「眼球ひんむいてよーっく見やがれー！」

意味不明な台詞と共に露わになったのはもちろん、女らしさの欠片もない（でも何か色気がないとも言えない）真っ平らな水平線胸

「……………」

さすがに今度は、祿朗も笑わない。その表情は何ていうか 名画ムンクの叫びのような。ただし色は一切ついていない。彼は完全に真っ白だった。

沈黙が、頭に、肩に、心に重い。

「へっくし…っ」

本日何回目かわからない七緒のくしゃみが、すっかり暗くなったこの細い道に響き渡った。

「…………お…おと、こ…？」

ぼつりと、祿朗が呟く。魂が抜けたかのような細く弱々しい声だ。ようやく冷静さを取り戻したらしい七緒は、ジャージの裾を元に戻した。

「…信じてくれた？」

その七緒の問い掛けに返事はなく。

祿朗は生気のない顔のままぼうつと宙を見つめている。瞳の薔薇

は枯れてしまった。

「…そこまで言ってくれる気持ちはありがたいよ。でもやっぱり性別に問題ありだし　いや、それ以前に俺、今は部活一筋でいきたくていうか、誰ともそーい関係になる気はなくて…だからごめん、な」

黒岩先輩の時と同じ、どこまでも七緒らしい返答。

私は少しホツとして　そして、やっぱり少し悲しかった。

けど、当の祿朗の耳にその言葉が届いていたかどうかはわからない。シヨックのせいかほとんど白目状態の彼の頭の中には、さっきからあの3文字しか渦巻いていないらしい。

「おとこ……オトコ……男……七緒先輩が、男　…」

「あの、祿朗？聞こえてるか？」

名前を呼ばれた祿朗が、ぴくつと動く。

そして、

「う…うわああ…!!」

絶叫しながら、夜道の向こうへと走り去っていった。

「あ、ちよつと…っ」

私と七緒は、しばし呆然。

「……」

「…あーあ、泣かした」

同性まで虜にしてしまうほど愛らしい東七緒君は、当然ながらエプロンもよく似合う。それが私のお母さん用のあの無駄に「ごてごてと飾り立てられているものなら、尚更。

「…ありえねえ」

禄朗の告白から数十分後、私の家の台所にて。

ピンクなフリルを摘んだ七緒の一言に、今の気持ちが全部凝縮されている。

「しょうがないでしょー。うちにはそういう系のエプロンしかないんだもん。私だって我慢してんだから、七緒も頑張ってるよ」

いつもの彼なら怒濤の勢いで拒否しているであろうそのエプロンを、七緒は溜め息1つ吐くと諦めて着た。

「七緒、かーわいーい」

「うっせー」

本来の持ち主であるお母さんは買い物かどこかに出掛けているらしく、家には誰もいない。早い話が今、私にとって「好きなあの子と2人きり」という非常にオイシイ状況なわけなんだけれど。出会って14年もたつ相手だからか、緊張感も何もあつたもんじゃない。

料理の基本っていえばまずこれでしょー、という私の安易な考えから始まった林檎の皮剥きに2人並んで取り組むだけだ。

七緒はぼーっと両手を動かしていた。

「七緒、手エ危ないっ」

「おわ」

間一髪、包丁は七緒の指に触れずに止まった。

「しっかりしてよ。七緒の指が切り落とされるとこなんて見たくない」

いからね、私」

「…うん」

「…そんな気イ抜けた状態で料理特訓して平気？」

「…うん」

さつきからやけに素直だ。つい数時間前まではいたって元気だった七緒がこんなふうになってしまった原因は、単純明快明々白々。

「進藤禄朗の事、気になってるんでしょー？」

その言葉に、七緒は包丁と真つ赤な林檎をまな板の上へ置いた。

「俺 まさか泣かれるなんて思わなかったから、びっくりした。

何かどーしたらいいのかわかんなくて」

「…わかんないって事は、付き合っちゃう可能性もあるわけ？」

「だから、それはないって」

七緒は困った顔で、

「でも禄朗は真剣に気持ち伝えてくれたわけだし、こつちも真剣に答えなきゃと思ったんだけど やっぱ、どーすりゃいいのか……」
と、頭を抱えた。

禄朗の涙は、普段あまり悩むという事がない七緒に相当なショックを与えたようだった。

「…いーんじやない、禄朗。不良ぶってるけど誠実そうだし、幸せにしてくれると思うよ。付き合っちゃえば」

思わず口をついて出たのは、本心とは裏腹の言葉。

何だか七緒も禄朗も、あまりに真剣なもんだから。ああ本当に、

心の底から悲しいくらい素直になれない、杉崎心都。

「…お前、なんか怒ってない？」

「全つ然。超ルルンルン気分よ。怒ってるっていえばさっきの七緒でしょ。女に間違えられるのなんて慣れてると思ってたのに、『よく見やがれ』なんつって、珍しくキレたね」

「あー…」

七緒が歯切れの悪い返事と共に私を見る。じっと、睨むような表情で。

何ガン飛ばしてんだよー喧嘩売ってんのか。と、私は冗談交じりに返すつもりだった。
なのに。

3秒後の七緒の言葉は、私を呼吸困難に陥らせた。

「心都がいたから」

「ぐほつ。……え？」
むせた。

「だから」

いちいち繰り返させんなよ、とばかりに面倒くさそうな七緒。さつきよりも少し大きな声で、言う。

「心都の前では女に間違えられたくなかったんだよ、俺は」

呼吸困難を通り越して、呼吸停止だ。

ねえ、七緒。恋する乙女は皆、自意識過剰の妄想族なんだよ。つい最近までジャージを愛用していた私が乙女かどうかはともかく。つまり私は、その言葉を自分に都合のいい方向で受け取っちゃうからね？あまつさえ心ときめかせちゃうからね？

「七緒…それってどういう」

「だってお前すぐからかうじゃん」

と、七緒が口を尖らせた。

「はい？」

「俺が女に間違えられると、めっちゃからかうだろ。今日も、水も滴るいい女ーとかって。だから心都の前では絶っつ対に間違えられなくなかったんだよ」

「……あー、そーいう事ね、はい」
ときめき終了。

今までに何回も経験したパターンだ。どうやら七緒は、人（主に私）にほのかな期待を持たせた後それを盛り下げるつまらないオチをつけるのが得意らしい。しかも、全部無意識に。だから余計たち

が悪い。

「でもな、今に見てる。そのうちすつごい背エ伸ばして柔道も強くなって、絶対間違えられないくらい男らしくなってやるから。そしてたらちゃんと謝れよー？」今まで散々からかって悪うござんした」
「うん」

わけのわからない宣戦布告を得意気に繰り広げる七緒に視線を遣りながら、私は心に誓った。

もう、めったな事では舞い上がったり沈み込んだりしないからな、絶対に！

だって何か悔しいし。それに、こんな奴の一言にいちいち一喜一憂していたら、きつと私の心臓がもたない。

「へいへい。わかったからさっさとお料理教室進めちゃおうよ」

私は皮剥きを再開するために包丁を持った。

「…あのさ」

「ん？」

やっぱり、宣戦布告に一言返したい。

「……強くなってよ？マジで」

七緒が柔道に夢中になっている姿とか、技が決まった事を嬉しそうに話す笑顔とか。

それは、いつも、切ないくらいに眩しくて。

だから。

「……これでも応援してんだからね」

いつまでも笑っていてほしいんだ。

「うん」

七緒はちゃんと頷いてくれた。

私の大好きな、いつもの綺麗な瞳で。

6 & 1 t ; 放物線と、母は強し & g t ;

私は、思わずまじまじと見つめてしまう。
その綺麗な目を。

「何見てんの」

「んー、まつ毛長いなあと思って」

「長いかな？ふっーじゃん？」

「長いよ」

「……包丁握り締めたまま顔見つめられると怖いんだけど」

「あらごめんあそばせ」

そんなたわいのない（？）会話の最中。

「このエロガキ　　！！」

バシツめきよズシヤ。凄まじい音と共に七緒が吹っ飛んだ。指でなぞりたくなるような、美しい放物線を描いて。よく飛ぶなーここ室内なのに。

「……何すんだいきなり！」

と、頭を擦りながら七緒が怒鳴った相手はもちろん、たった自分分の息子に強烈すぎる鉄拳をかましたその女性。

「学校帰りに女の子の家に上がり込んで新婚気分inキッチンってか。あたしはそんなふしだらな子に育てた覚えはないよ七！」

「はあ！？意味わかんない……」

「エロガキのうえに女装趣味か！こりゃアイタタだな。七、お母さんは悲しい」

七緒は苦悶の表情で、自分が身に付けているエプロンを見た。

「こ、これは事情が……っ」

……えっと、とりあえず。

「こんばんは明美さん」

「ああ心都、しばらく見ないうちに垢抜けて！あんた大丈夫？あのエロガキに何かされなかった？」

背中まである赤茶の髪をなびかせ、東明美さん　つまり七緒のお母さん　は私を抱き締めた。

「ごめんなーうちのエロ息子が！」

「大丈夫だよ何もされてないし」

昔からこういうノリの明美さんが相手だからこそ、こんな話題でもいちいち赤面したり慌てふためく事なく笑って反応できる。

少なくとも、私は。

「さっきから人の事エロガキだのエロ息子って、その呼び方やめろっつーのー!!」

あらぬ誤解をかけられてしまった七緒は、そう簡単に冷静にはなれないようだ。

「だいたい何で杉崎家にいるんだよ!!」

「うふふ。お買い物途中で会ったのよ」

そう言って長身の明美さんの後ろからひよっこり現れたのは、上から下までピンクハ　スばりの派手な服装でキメた私のお母さん。

「せっかくだからうちで一緒に夕食食べましょって事になって今2人で帰ってきたの。ねーっ」

「なーっ」

母親2人は顔を見合わせにつこりと笑った。

ふりふり命でピンク大好き、鳥肌が立つほど少女趣味な私のお母さんと、へそピアスが眩しく性格も限りなく男前な明美さん　格好が年令不相応(ぶっちゃんけ若造り)という部分以外は全く正反對なこの2人が、高校時代どういう経緯で無二の親友になったのか。昔から疑問に思っていた。

何回か訊ねてみた事もあったけど、「うふふ若い頃は色々あったのよー」または「あたしもあの頃は青かったからさー」で片付けられてしまった。最近では私も諦めて、訊ねるのをやめた。

「きゃあ七ちゃん可愛い!とっつても似合ってるわ」

お母さんがエプロン姿の七緒を見て瞳を輝かせる。

「七ちゃんみたいなの可愛い子に着てもらえればそのエプロンも幸せ

ねえ」

「……う、嬉しくないです」

七緒は、素直だ。

7&17:消えゆくモノと、少しの本音>

「うわエ口息子の料理ひどいなー」

「だからその呼び方やめろって」

「あら、学ぼうとする心意気が立派よ。心都、お嬢さんにするならこういう人よ？」

「ママンそこで私に振らないで」

現在7時30分。ここ杉崎家のリビングで、私たち4人は食卓を囲んでいた。

「どうせお料理教室するんだったら今日のお夕飯は2人をお願いね」とお母さんに半ば無理矢理包丁を握らされた(危ない)のが約1時間前。

それから七緒と何とか作った『肉じゃがと言えば肉じゃがに見えなくもないモノ』が本日のメインディッシュだ。

「…作ってもらっていいんだけどさ。何かこれ本当ビミョー……」
『肉じゃがと言えば(以下略)』を一口食べた明美さんがぼそりと言う。それを聞いた七緒はフツと偉そうに鼻を鳴らした。

「今回の失敗は俺だけの責任じゃねーもん」

「何それ私のせいとか言っちゃうわけ？」

「確かにじゃがいも煮過ぎて溶かしたのは俺だよ。でもその前に何かわけわかんねーけどしらたきをめっちゃくちゃに切り刻んだのは心都だからな？」

「そつ、それは……」

それは人參を切る私の手を見た七緒がおおさすがは一応料理部員じゃーんとか言いながら寄って来て可愛い顔近付けるせいで(再び危ない)馬鹿みたいにドツキドキして側にあったしらたきまでぶつた切っちゃったから、だつっーの。

……とは言えない。

「今回は責任半々だな」

「くっ…」

反論できねえ（あら嫌だまた言葉遣いが）。火花を散らす私たちの傍で、呑気な母親組は「仲が良いわねえ」と顔を見合わせ笑っている。っていかいつの間にもビール開けたんですかお二人さん。

「ふふっ、もういつそ冗談抜きでお婿さんになってもらいなさいよ」

大分酔いが回った（本当にいつから飲んでいたんだろう）お母さんがにこにこしながら言う。

「そーだなあ、そしたら心都もつままない嫁姑問題で悩まなくてすむな。あたしが可愛がったげるから」

素敵な笑顔で親指をぐっと立てる明美さんも、明らかに面白がっている。

「…そりゃどーもです」

私は妙に落ち着いていた。親に好きな人との仲をからかわれていくというのに、もうさっきのしらたきの時みたいには動揺したりしない。

なぜなら。

「人の将来勝手に決めんなー」

隣でゆるい反論をしている「好きな人」こそがこの状況の中一番動じていないからだ。つまり、七緒は私と冷やかしを受けたくらいでは動揺したりドキドキしたり、あまつさえ可愛らしく恥ずかしがったりはしないわけで。毎度の事ながらそれは奴が私をそういう対象として全く意識していない現実を意味する。

だったら私だけわたわた慌てるのなんて馬鹿らしいじゃないスカ、ってなもんで。

想い人・東七緒君の鈍感加減のせいで10代の少女としての初々しさというか恥じらいをちよっぴり失いつつある私なのであった。

「あつ、そうだわ聞いてよ明美」。この娘ったら今年はクリスマスパーティー参加しないから私たち2人だけでやれって言うのよ」

お母さんが私の頭の上にポンツと手を置く。

「マジ？」

「あー、うん。ほら今年は七緒も部活で来られないし、久しぶりにマブダチ水入らずでどうかなって」

「男か」

キラリと目を光らせ明美さんが言った。

「はい？お、おと…？」

「心都にもついにクリスマススイヴと一緒に過ごすような男ができたんだね！？あの、3年前のパーティーでワインをジュースと間違えてがぶ飲みした挙げてるんべろんに酔って『今すぐ新しい顔を焼くヨ』って延々とジャ　おじさんの物真似してた心都にも！」

「ぎゃああ明美さんそんな昔のエピソードいらなからってというか男じゃないからっ」

ちなみに。私は全く記憶にないけど、結構似ていたらしいです。

ジャ　おじさん。

「ふうん、お節介おばさんな心都にもやっと青春時代が来たかと思っただのに」

と、けろりと言うのはもちろん七緒。

「男じゃなくて悪かったね。美里とか田辺君と楽しくパーティーの予定なんですよー」

「あらそれじゃあやつぱり今年は2人きりでやるうかしら」

「まあたまにはいいかもな。またあの若かりし頃に戻った気持ちでぱーっとハメ外そうぜ」

「そうね、ぱーつと！」

外さないでください39歳。という私と七緒の突っ込みが届く事はなく、意外と酒豪な母2人はまた新しいビールを開け始めた。

「で。結局こうなるんだよな」
「…うん」

私と七緒はげんなりと呟いた。目の前には、床に転がりぐうぐういびきをかくお母さんと明美さん。

「ねえ起きてよ、もう9時だよ！」

呼び掛けも効果なし。ただ明美さんが「このエロ息子…ついに教師にまで手エ出しやがって」と寝惚けた声をむにゃむにゃあげただけだった。

「この酔っ払い…っ」

七緒は堪え難そうに拳をぶるぶるさせたけれど、私は明美さんが見ている夢の内容を想像してしまい笑いを封じ込めるのに必死だった。

「しゃーない…俺1人で帰るわ。明日朝練で早いし」

「明美さんどうするの？」

「目エ覚めたら勝手に帰んだろ。悪いけどそれまでここに置いといてやってくんない」

「うん、それは構わないんだけど」

私は眠りこける2人に布団を掛けながら、窓の外を見た。

「外暗いけど平気ー？」

「は？」

「最近かわいい女の子狙った変質者が多いからね。そこまで送ってこーか」

「それは嫌味ですか」

「まつさかー」

だって、フリルのエプロンが最高に似合っちゃう七ちゃんだし。いくら5分足らずの道だろうと、こんな暗い中を1人で歩かせたらお節介おばさんは気が気じゃないわよ。

…いや。本当はそれだけじゃないんだけど。

「僕は女じゃありません。ああ何かこんなような台詞前にも言った気がするーこれがデジャヴってやつか」

「それは多分今日あなたが禄朗に何回も訴えた言葉だから。……じや、せめてドアまで見送ってやるのかなー」

そりゃあね。

いくら恥じらいを失おうと、女の子として見られていなかろうと、好きなんだから。

やっぱり少しでも長く一緒にいたい、とか思ってしまったているわけですよ。

素直に直接そう言えないのが、なんとも切ないけれど。

「じゃあね、七緒。また明日」

靴を履く七緒の背中に向かって手を振る。

「じゃーなー。お邪魔しました」

律儀な挨拶の後ドアを開け杉崎家を出て行く、寒そうなジャージの後ろ姿。

「あ」

それが突然ぴたりと止まり、振り返った。

「あのさー」

七緒はドアから入ってくる冬の空気に両手を擦り合わせながら言った。

「うぬぼれだったらゴメンナサイ」

「何」

「今日美術の時間に俺の24日の予定聞いたの、あれってもしかして田辺たちのパーティに誘ってくれるつもりだったりした？」

「あー…うん」

私はワンテンポ遅れて頷いた。なぜなら七緒がいつもより真剣だったからだ。

「そっか。…いや、何かずっと気になって考えてたんだ」

こんな事ずっと考えるなんてあんたどれだけ暇なんだ。とは思わなかった。

むしろ、少し嬉しくて、少し泣きそう。

だから私も、いつもより素直に言えたのかもしれない。

「今年で最後かもしれないじゃない。その…一緒に、クリスマスだーとか騒げるの。美里に言われて気付いたんだけど、来年からは受験とか色々あるし」

「…あぁ」

「で、だから、その…一緒に過ごせたらいいなーとか…思った」

間違っても可愛気のある口調ではなかったけど、これが精一杯、今言える気持ちだった。

傍にるのが当たり前で。

それはこれからも変わらないと、思った。思いたかった。

だけどやっぱり、幼馴染みには限界があるんだ。

私はずっと一緒にいたいよ。

隣で君に、笑っていてほしいよ。

七緒は私の言葉をきちんと聞いてくれて。
そして言った。

「……部活、燃えててさ。終わるの7時くらいなんだよ」

「……うん」

「だから参加するの結構遅くなっちゃうけど。…それでもいい？」

一瞬、思考が　　というか私の全てが停止した。

「き、来てくれるの…?」

「汗くさかったら悪いけど」

申し訳なさそうに笑う七緒の顔を、まともに見られなかった。

失いつつあると思った私の恥じらい。

どうやらまだ残っていたようだ。

8 & 17 ; 情緒不安定な朝と、再来 & 8 ;

どうしてこう、頭の中でリピートしちゃうんだろう。つい1日前の、同じシーンの台詞ばかり。

『参加するの結構遅くなっちゃうけど。…それでもいい？』

ええ、いいですとも！何分でも、何時間でも待ちますとも！

『汗くさかったら悪いけど』

そんなの構いませんとも！むしろ貴方の光る汗に私はメロメロズツキユンですとも、うっふふふふふ。

「キモい」

朝日が差す明るい教室。その爽やかな空気の中で、美里はあっさりと言った。

「え？」

「朝からそのキモい笑い方やめてよねー。考えてる事まるわかりよ？」

「どうやら私はまた、自分の顔に責任を持っていなかったらしい。何とか頬を引き締めようと、必死で頑張ってはみるもの。」

…駄目だ。にやける。

「だって嬉しんだもん」

「まあ確かに普段の心都から考えると上出来よね。素直に自分の気

持ち言って誘うなんて」

「んへへ」

「…だからさ。もうちょっと可愛く笑おうよ」

目を眇め呆れたように美里。だけど今の私はそんな事気にしていられないくらいに浮かれ気分だ。

理由はもちろん、昨日七緒と交わしたイヴの約束。部活の後だろ
うと何だろうと、とにかく来てくれる。一緒にいられる。それだけ
でもう、頭が爆発するほど嬉しいよ。

「…ってかホントに爆発させてどーすんのよ」

そう言って美里が指差すのは、数日前の『可愛くなつてやる』の
誓いを守っているとは到底思えない、私の超無造作へアー。…つま
りかなりの寝癖頭。

もちろんそれを見た彼女が黙っているはずもなく。

「何なのよ今日の髪は！アホ毛炸裂じゃない！ちょっとでも可愛い
女の子になれるように努力するんじゃないかなかったの？」

こういう事には鬼のように厳しい美里。いつもの澄んだプリチー
ボイスとは180。違う、ドスのきいた声色でこつちを睨み付ける。
今にも私の髪を引っ掴んでスタイリング剤を振り撒きそうな勢いだ。
「いや、あの、言い訳さして？」

「何よ」

「その…や、私さー昨日の夜七緒が帰った後もう浮かれまくっちゃ
って。パーティーでおいしーいケーキでも作って持ってっちゃおうか
な！なんて、急に料理部員魂がメラメラと…」

「つまり夜からケーキ作りの練習始めちゃったわけね。で、夜更か
しのしすぎで寝坊して、髪をセットしてくる余裕がなかった、と」

「わお、さすが美里サン。一を聞いて十を知るとはまさにこの事だ
ネ よつ平成の聖徳太子！」

あれ、聖徳太子は10人いっぺんに話が聞けるんだっけ…も
うこの際どうでもいい。

「はいはいそういうお世辞いらないから」

私の間違った誉め言葉（ウィンク付き）をさらりと流し、美里が呆れたように言う。

「でもさすがにその髪はあんまりよ。何か大乱闘後って感じ」

「何それ」

よくわからないけど、妙に心がそわそわしてきた。そんなにひどいのか、今の私。

昨日の言葉通り、七緒は朝練があるらしくまだ教室に姿を見せない。

美里がギラリと光る瞳で私を睨み付ける。

…目力、強つ。

「…トイレで直してきます」

「ん、よろしい。ただし朝のHRに遅れないようにね」

ようやくにつこり笑った美里に背中を押され、私は1人よろけ気味に教室を出た。

「…もう切っちゃおうかなあ」

教室前の廊下の窓に映った自分の頭を見て、私は思わず呟いた（何か前にもあったなこんな事）。

3、4年前から、「せめて外見だけでも女の子っぽく」とささやかな望みを込め肩辺りまでの長さを維持してきた私の髪。『可愛くなくてやる』宣言以来、少しはボサボサ具合が落ち着いた（と思う。思いたい）けど、今日みたいに余裕がない朝なんかは我ながら本当に御愁傷様な事になる。

いや、それ以前に！

私の髪が落ち着いていたとして、七緒より「可愛い女の子」に見えるのかというと、それは領けない、絶対に。

「…うう……」

さっきまでとは打って変わって、私のテンションは急激に下がり始めた。

恋すると情緒不安定になる、とはよく言うけど。最近の私の場合はそれが激しすぎて、このままだと心の変化に体がついていかずあと3ヶ月後くらいにポツクリ逝っちゃうんじゃないか？なんて恐ろしい未来予想図まで頭に浮かんだ。

……………っというか、もう。

「あいつが可愛すぎんのが悪いんじゃないボケ　　！！！！」

開け放した窓へ我を忘れて叫んでしまった14の冬、なのでした。

と、その時。

数メートル先から、今の私の絶叫なんて可愛いもんだわと思えるくらいの、ものすごい大声が響いてきた。

「あゝあ！？んだとテメエ！！もっかい言ってみるやゴルア！！」

…ああ、このヤクザ風味な怒鳴り声。

なんだかものすごおおっく聞き覚えがある。

9 & 1 t ; 激突と、君の名は。 & g t ;

「ナメてんのかテメエ!!」

その聞き覚えありまくりな怒鳴り声は、少し先の階段付近から聞こえてくるようだった。

恐る恐る覗いてみる。

「おいコラ、さっきからふざけた事ばつか抜かしてんなよ!!」

「そつちこそ何度言わせる気だ進藤! 他学年の教室にはきちんとした用がある場合のみきちんとした格好で行く、これが学校でのルールだろう!」

「なんでテメエに指図されなきゃなんねんだよっ」

案の定、教師と激しい言い争いを展開中の進藤禄朗だった。

「2年にちゃんとした用事があるって言ってるんだろ!! 本っ当にうぜえなテメエはよ!!」

禄朗が今にも掴み掛かりそうな勢いで怒鳴りたてる。とてもじゃないけど昨日男にフラれて泣いていた少年と同一人物とは信じ難い。「うぜえとは何だ! 全く、どうしてお前はいつもいっつも…」

一方相手の方は、鬼の理科教師橋本。銀縁眼鏡の奥で神経質そうに動く目が、バスケ部顧問というポジションには恐ろしく似つかわしくない。

そしてそのバスケ部員の田辺曰く、「進藤の担任で最近よく衝突してる」らしい。確かに今少し見ても、仲良しで信頼関係バツチリな先生と教え子には明らかに見えない。

周りの生徒たちはその2人の横を避けて通り、見て見ぬフリを決め込んでいる。

まあ当然といえば当然だろう。あんな凶暴で短気で薔薇とか咲かせちゃう危ない1年生、私だって出来れば関わりたくはない(色んな意味で)。

が、しかし。

「だからっ2年2組に用があるんだよ！先公の説教聞いてる暇なんかねえつつつてんだろ！！」

「なんだその言葉遣いは！それが先生に対する態度か！」

彼がこんな所で喚いている理由と目的。それに薄々感づき始めている今、私は何となく動く事ができない。

「……っオレ、どうしても会いてえんだよ！」

……。うお。禄朗、信じられないくらいに切なげな表情。少女漫画ならふわふわと点描が漂うところだ。

そう。彼は今、大好きな人に会うためここにいるのだ。

が、橋本の一喝がそんな甘酸っぱいムードを打ち壊した。

「どうせ大した用事じゃないんだろっ！！ぐだぐだ言わずにさっさと自分の教室へ戻れ！」

ぶち。

「……」

今、なんだかとても不吉な音が。

そしてその後の禄朗の行動はまさに予想通りだった。

「……っざけんな！！」

禄朗のグーが、空を切り高く振り上げられる。

もちろん、昨日彼を止めた七緒は今ここにいない。

間違いなく、限りなく、この上なく、危険だ。

「のをつ！！ススストップ禄朗！」

突如間の抜けた大声を発した私を、禄朗が見遣る。その拳は、青ざめた橋本の顔面の一歩手前で止まっていた。

「誰あんた」

禄朗が苛立たしげに訊ねる。昨日会ったっていうのに。私、どうやらすっかり忘れ去られているらしい。

禄朗も橋本も、明らかに「なんだコイツ」的な目で私を見ている。

さて。…どうしよう。

昨日の今日で、ついしゃしゃり出てしまったけれど。咄嗟に動いた事があだとなって、これから何をすればいいんだか全く思いつかない。

「えーと…」

とりあえず口を開いてみる。

「あの、先生。私、彼が何の用事でここにいるか知ってます。……あつ。っていうかー彼、私に会いにきてくれたんですよ、うん！」

「はあ？」

禄朗と橋本が同時に聞き返した。

「私と禄朗くん、学年の壁を越えてすごい仲良しなんです！今も私に会うために朝っぱらから2年の階まで来てくれたんですよ。こんな大騒ぎになつてすみませんでした。もう禄朗くんってば相変わらず短気なんだから、デモソコガ素敵ナンダケドネウフフ」

しまった、最後の方が嘘モロバレな棒読み。っていうか鳥肌立ってきたぞ本当に。

引きつった表情で何か言おうと口を開いた禄朗を封じるため、私は早口で続けた。

「あの、だからもういいですよね先生、ハイ！ 失礼しました！」

ビバ自己完結。

呆然とする橋本を残し。

まだ何か言いたげな禄朗の襟を掴み（手を掴もうとしたら死ぬほど嫌な顔されたので）。

私は落ち着いた空間を求め、ひどかった髪を更に振り乱し、一目散に走りだした。

「ちよつ、おいテメ…マジなんなんだよ！離せ！」

辿り着いたのは、ここ1階の被服室前。あまり使われる事がないので静かに語るには丁度いい場所だ。

私が手を離すと、禄朗は首元を擦りながら吠えた。

「何すんだよいきなり！！」

至近距離で、しかも1対1で聞くこの怒鳴り声は耳にキンキン響き、全力疾走後の体にはキツイもんがある。

私はゼエゼエと乱れる呼吸を整えながら言う。

「あ、あのねつとりあえず殴っちゃいけないから！」

「は？」

「ねえ、七緒に会いにきたんでしょ？自分の事が原因で先生殴ったって知ったら、七緒が喜ぶわけないでしょーが！」

七緒の名前を出すと、禄朗はこっちがびっくりするくらい反応した。

「おい、七緒先輩と知り合いなのか！？」

その目はきらきらと輝いている。

「一応同じクラスで…っていうか私も昨日あの場にいたんだけど。覚えてないんだ」

「オレの目には七緒先輩しか入ってこねえ。はっきり言ってお前はアウトオブ眼中」

と、きっぱり言い切る禄朗。

……おい。何か…今のは少ーしイラッときたぞ、つと。

「ちよつと…お前って何、お前って。昨日は敬語使ってたくせに！あの時七緒の学年・組・名前教えてあげたのも私なのに！」

ついガキっぱさ丸出しな喧嘩口調になる。

「ああ、そっぴやいな。あの時のダサイ女が」

「…ダ…っ！？」

ださいおんなださいおんなださいおんな…その言葉が頭の中でぐるぐると回る。

「ちよちよちよつとっ！！失礼にもほどがあるだろが！」

「うつせえなあーボサボサ頭」

「……………！」

うつわ　あ…………。

なんだこいつ…………今、人が1番悩んでいる事を言っちゃったよ…………？

白目気味で震える私に対して、禄朗は何事もなかったかのように会話を続ける。

「なあっおい、お前七緒先輩と知り合いなんだっいたら会わせてくれよ！今どこにいるんだ？教室か？なあなあなあ！」

…マジでブチ切れる5秒前。

「おいボサボサ！！聞いてんのかよ！？」

ぶち。と、ついさつきと同じ音が聞こえた気がした。

ただし、今度はもつと近い所　自分のこめかみ辺りから。

「うつつさ　い！！黙れろくろー！！」

「おい平仮名で呼ぶな！！このボサボサが！」

「平仮名で十分だろ！つかボサボサとかゆーな！！私には杉崎心都つて立派な名前があんの！」

「ボサボサをボサボサって呼んで何がいけねえんだよ！！どうでもいいから早く七緒先輩に会わせる！」

「なんつで私があんたたちの仲人しなきゃいけないわけ！？死んでも嫌だっつーの！！！」

「んだよ性格悪いいな！！！」

「いやあんたにだけは言われたくないから！！！」

「…何してんの？」

と、デッドヒートの最中、場違いすぎるのん気な声をあげたのは、
「な、なななななあお！」

「七多すぎだから驚きすぎだから」

顔に似合わず意外と鋭い突っ込みを繰り返す、「争いの根源」
と東七緒だった。

神出鬼没な七緒さん。

一体いつからいらっしやったのですか。

「今、朝練終わったとこ。体育館から教室戻るのがってここ通ると近いから。そしたら心都のすっげー大声が聞こえてきてさー、俺、また何かあったのかと。ほら前にもこんな事あったじゃん」
へら、とジャージ姿の七緒が笑う。

うん。気に掛けてもらえるのは、とてもとても嬉しいんだけど。こんな髪の毛振り乱して喧嘩中の姿、死んでも見られなくなかったよ。ああ泣けてきたわ。

そんな私とは正反対で、

「七緒先輩ああい！」

と、喜びに満ち溢れた声をあげたのはもちろん禄朗。

「お、おー禄朗」

七緒がぎこちなく左手を挙げた（右利きなのに）。やっぱりまだ、昨日の涙が気になっているんだろう。

対する禄朗はあの時のショックはどこへやら、今すぐバンジージャンプできるくらいのハイテンションだ。

「先輩、昨日はいきなり走り去ったりしてすみませんでしたっ！」

「あ、いえいえ」

禄朗の勢いに押され、なんだか敬語気味な七緒。が、完全に暴走エンジンに火が点いた禄朗は更に熱く語り続ける。

「やっぱり、七緒先輩が男って知った時は落ち込みました。オレ、初恋だったんすよ…。でも！昨日しばらく泣いた後考えました！そしてわかりましたっ！！」

何が？と聞く暇を与えず、禄朗は七緒の両手を取った。

その瞳はこれまでのどんな瞬間より光り輝いている。

「男とか女とか、もうそんな次元じゃないっす！」

「へ？」

「オレ、人間として惚れたんすよ！ ヒトとして七緒先輩が大好きっす！ つまり、この気持ちはいつまでも変わりませんっ！」

薔薇、全開。

恋のライバルの華麗なる復活宣言に、私は蚊帳の外でただただ固まるしかなかった。

「いや、でも俺……」

と、言いかけた七緒を禄朗が素早く遮る。

「わかってるっす。七緒先輩、今は誰ともお付き合いする気ないって。昨日のオレが馬鹿でした！オレ、もうそんな事望みません。こうして七緒先輩と喋ってられるだけで、そんでもって心の中でほんのり想ってられるだけで幸せっす！」

なんなんだ、その健気な恋する女のカガミみたいな心意気は。正直言つて、今の私には羨ましい限りだ。

ずっと傍にいたいし、

それ以上可愛くならないでほしいし、

綺麗な先輩にちゅーされるところなんて見たくないし、

強引な後輩に迫られてまんざらでもなさそうなところも見たくないし、

クリスマスだって一緒に過ごしたいし、

いつか大好きって言いたい。

今思いつくだけで、なかなか自己中心的な私の欲求はこんなにもあるのだから。

「……な、何かよくわかんねえけど、とりあえず禄朗が納得してくれたならそれで……」

なんだかぐつたり疲れた様子の七緒が言う。

オイそれでいいんかい、と私は思わず突っ込みたくなっただけれどやめた。それよりも激しく気になる事があつたからだ。

「……ねえ。いつまで手エ握ってんの」

さつきから七緒の手をガッチリ掴んだままの禄朗が、私にぎろり

と目を向ける。

「関係ねえだろダサ女」

「く……っ、その態度の違いがム力つくんですけど!」

「うっせー! 自分が七緒先輩と同等だとか思ったら大間違いだぞ
コラ」

昨日は、殴り合いを始めそうな七緒と禄朗を見ながら『これだから男の喧嘩なんて!』と心の中で叫んだ私。でも、どうしてでしようか。今は、胸の前で握りしめすぎて血管が浮いているこの拳を使いたくてしかたがないのです。いやもう本当に。

「聞いてくださいよ七緒先輩! オレ、七緒先輩に今の言葉を伝えたくて朝から2年の教室らへんウロついてたんすよ。そしたらこのボサボサ、オレを七緒先輩に会わせるのを拒否ったんすよ? ありねえッスよッ!」

ようやく手を離れた禄朗が、七緒に向かって訴える。

「ボ、ボサボサ?」

一瞬わけがわからなさそうな表情を浮かべた七緒が、私の頭をチラッと見遣り。

「あー……」

って、おい。

「ちよつと何納得してんの!」

「いや、だって今日のはさすがに……」

「笑いをこらえるな!」

「ギャハハハ」

「ろくろーあんたは笑うな!」

……ああ、もう。なんなんだろう今日は。寝坊しながらもチエックしてきた朝の占い、さそり座は4位とまあまあだったのに(そよ私はさそり座の女)。

「じゃ、じゃあ……禄朗、とりあえず自分のクラス戻れよ、な? そろそろ本鈴鳴るし!」

滅茶苦茶になりつつある雰囲気をとリなすように、七緒が言った。「そつスね、名残惜しいっスけど……わかりました。でもっ!! せめて教室まではお見送りさせてくださいっ!!」

「え!？」

全然ほんのりじゃないじゃん、と突っ込みたくなつたのはきつと私だけではないはず。その証拠に七緒は、面食らつた表情で首をぶんぶんと横に振っている。

「いや、本当そんなんいいから」

「いえそつ言わずにっ!」

ちよつとひきつり気味の七緒と、きらきら瞳を輝かせた祿朗の視線がぶつかる。

「……………」

負けたのは七緒だった。

「……………じゃー教室じゃなくて、その階段まででいいから……お願いします」

げっそり感を漂わせた七緒が言う。この10分ほどで少しやつれたようだ。

「はいっ喜んでー! ……おいボサボサ、今舌打ちしたろ」

どうやら祿朗もかなりの地獄耳らしい。とりあえず、そつぽを向いてしらんぷり。

七緒の言う「その階段」までの30メートルたらずの道のりを、祿朗は元気いっぱい先頭に立って歩きだした。私はしぶしぶ最後尾につく。

これからずっと、こんな感じの日々が続くんだろうか。そう考えただけで眩暈がしてきた。

少し先を行く2人を眺める。

何やら興奮気味に喋りまくる祿朗と、たしなめるように相槌を打つ七緒。

……七緒、なんだか本当にまんざらじゃないような。

あの2人、もしも本当にくっついちゃったらどうしよう いや

いや男同士じゃん　でも、今どきそんなの当たり前なのかも
それにしても、確かに七緒は男にもモテるけどそういう趣味はない
はず　でも、さつきも祿朗の勢いに押しきられていたし　でも

無駄な堂々巡りに、溜め息がもれた。

本当は、わかってる。

私も祿朗みたいにな、もっともっと素直に気持ちをぶつけなければいい
事なんだ。

だけど、どうしてだろう。

伝えたい事はたくさんあるのに。

とても簡単な事なのに。

七緒の前だと言葉にならない。

あの何も考えていなさそうなきよとん顔を見るたび、言いたかつ
た言葉がへなへなとへたつてしまう。

「……………なんでだろ……………」

と、思わずぽつりと呟いたその時だった。

「……………」

見られている。

普段こういう事にあまり敏感ではない私のはっきりそう思うほど、
背後から視線を感じた。

「ごくり、と無意識に喉が鳴る。

恐る恐る、後ろを向くと　。

「……………ん？」

廊下の遙か遠く、曲がり角からちよこんと顔を出す、髪を2つに
結んだ小柄な女の子。視力1・5の私の両目がとらえたものは、確
かにそれだった。

女の子は微動だにせず、間違いなくこっちをじっと見つめている。
しかし。

「ぱち、と驚いた私が瞬きをしたその僅かな間に。」

「……あれ」

女の子は消えていた。まるで今までの姿が夢か幻だったかのように、跡形もなく。

「……おいおいおい。」

ぞくり、と背中に冷たいものが。

「心都、何してんの？」

いつのまにやらかなり先を歩いていた七緒と禄朗が、不審そうな顔で振り返る。

「おっせえよボサボサー」

もちろんそんな禄朗の言葉に激怒している余裕はない。

私、なり振り構わず2人の元まで全力疾走。

「うおっ。こ、心都 真顔で、しかも無言で走ってこられるとちよつと怖い」

「……七緒」

「ん？」

「幽霊つていると思う？」

「はあ？」

「私、今…学校の怪談を初体験しちゃったかもしんない」
七緒が呆れたように目を眇めた。

「…寝ぼけてんの？ 行かないんなら先戻ってるな」

「先輩さっさと行きましょー」

「ぬあっ待って！」

ここで置いていかれたらたまらない。私は必死についていった。さっきの事は忘れよう、と自分に言い聞かせながら。

もちろん、そう簡単に忘れられるはずがなかったのだけけれど。

11&1t・名言と、乙女ちつくな彼等>

中1にしては割りと長身な禄朗は、159センチの七緒より少し大きい。

目を輝かせる禄朗と少し困り顔の七緒が並んで立っていると、まるでカップルのように見えてくる。

もちろんどっちが女の子かというと、それは想像通り。

「お別れは辛いつすけど…ここまでっすね…」

1階の階段前にて。

禄朗は切なげな瞳を七緒に向けた。

「…禄朗」

「いいんす、何も言わないでください…」

朝独特の静かな冷気が、辺りには漂っている。

「また、会いに来てもいいっすか…?」

禄朗にしては珍しく、少し躊躇いがちなその口調。そんな彼の心配をとつぱらうように、七緒はさらりと答えた。

「ん。いつでも」

必殺・美少女風(つてかまんま美少女)きらめきときめきスウィ

ートBabyスマイル。私命名。

今日は一段と眩しい。

禄朗の瞳に色とりどりの薔薇が咲いたのは言うまでもない。

「…お二人さん早く行かないと授業始ま…」

「うっせ黙ってるボサボサ」

…なんか慣れてきたけどさ。どうにかならないかな、この私の扱い。指で地面にへのへのもへじでも書きたい気分だ。

「ありがとうございますっ。感激っす！」

「…あ、そだ禄朗。これだけは言っとく」

僅かに真剣になった七緒の口調に、禄朗の背筋がピンと伸びた。

「お前昨日の3時間目もなんか暴れてたろ」

「はいっ担任の橋本を殴ろうとしてましたっ！」

元気よく答えるなよ。つーかまた橋本かい。私は心の中で突っ込みつつ、2人のやりとりに耳を傾けた。

七緒は禄朗の目を見据え、静かに言う。

「むやみやたらに誰かを殴ったり、まわりのモンに当たり散らしたり、そーいうのはもうやめとけ。何の解決にもなんねえって判ってんなら、尚更」

「は、はいっ！わかつたっス！」

これだったんだ。1つ謎が解けたよ、七緒。

昨日、禄朗の喧嘩を止めた時に言った「判ってるんだろ」。こついう事だったんだね。

と、唐突に。七緒が私の方を向く。

今まで階段の隅っこでしょぼくれながら2人を見守っていた私の方を、だ。

「ちよつとかつこつけていー？」

「は？なんで私に聞くの」

七緒は禄朗に向き直り、

「俺がかつこつけんのはあいつの許可が必要なんだよ」

大真面目に言った。

「前に勝手にかつこついたら怒って泣かれたから」

…ああ。あれか。ほんの十数日前、12月の初め。私の代わりに黒岩先輩のビンタをくらった七緒へ、泣きながら言った言葉。

『かつこつけすぎなんだよバカー！』

…我ながら、本当の本当に可愛くない。

「どうぞ。気の済むまでかつこつけちゃってくださいな」
もう泣かないからね。

「では。……禄朗」

「はいっ」

白い歯を見せ、きつと奴にとつては精一杯の男らしい笑顔。しかし周りからすればやっぱり美少女スマイル。を見せる七緒。きらりーん、とか古い効果音が入りそうだ。

「……男の拳は喧嘩のためにあるんじゃないやねえんだぜ」

……………。

「ぶっ」

「あつ、てつめえ心都、今笑つたる!？」

「や、笑つてな…ッゲホゴホ」

「咳で誤魔化したけど今のは絶対笑つた!！」

ごめん、七ちゃん。

だってこれは、もう。

「くくく…ッ男の拳はつて!しかも最後ゼツて!あはははは!！」
笑うしかないでしょう。

「笑つてんなよ!」

真つ赤な顔でムキになる七緒。どうやら、相当とっておきな台詞だったらしい。ああ今度は笑いすぎて涙が。

そういやさつきから反応がない禄朗は、と思い彼の顔を見遣ると。

「…七緒先輩、続きは!！」

禄朗がすごい勢いで七緒に訊ねる。

「え、続き?」

「そつス!その言葉の続きつス!男の拳は、なんのためにあるん
スカッ!！」

七緒の言葉は、私とは比べものにならないくらい禄朗の心に響いたらしかった。

一方、七緒はもう「かつこつける」事を諦めたようだ。いつも通りの美少女顔で答える。

「それは人それぞれだよ」

「それぞれ…ッスカ」

「うん」

それぞれ。その答えは結構難しい。

禄朗は自分の中で言葉を消化するように、ゆっくり頷いた。

「じゃあ…七緒先輩の拳はなんのためにあるんすか」

「へっ俺!？」

予想外の自分への質問。七緒は今度こそ困った顔になる。

そして、しばらく考え込んでいたかと思うと。

質問の答えを、とても短く、禄朗に耳打ちした。…なんだかやたら乙女チックな光景だ。

「そうっすか わかりました!!ありがとうございますっ!!」
ぶん、と風を切るくらいに激しい一礼。

そして禄朗はスキップ混じりに1年生の教室方面へ駆けていった。

「カツコヨカツタネ七緒」

「…うつせえな。わざとらしいんだよ」

「いやいや本当に。私の中の名言集に刻み込まれたよ。ねえさつき
禄朗になんて言ったの?」

「また笑うから絶っつ対教えない」

「…うん。私もまた笑っちゃいそうだから聞くのやめとく」

きつと、七緒が自分の中でかっこつけければつけるほど、私は笑いがとまらなくなってしまっただろう。

「でも禄朗、七緒にまた来いって言われて嬉しそうだったね」

「…そう?」

「きつとそのうちまた会いに来るよ」

誰かを好きって気持ちは、簡単に変わらないよね。

そう呟いた私の言葉が、七緒に届いたかはわからない。
ただ、私たちはなんとなく黙って教室へ戻った。

12 & 1 t : やる時はやる女と、幸せ & g t ;

教室へ戻った私に、美里はにっこりと微笑んだ。

「おかえり、心都。相変わらず素敵なナチュラルヘアね」

その目は間違いなく、笑っていなかった。

「いや、もうホント…すみませんでした…」

教室を出た本来の目的を思い出した私は、背中に嫌な感じの汗をかきながら美里に手を合わせた。

「えー？別に私は心都に謝られる事なんかないわよ」

目だけが笑っていない顔のまま、美里が言う。

「だってせっかく直してこいってすすめてくれたのにまだ…」

「私はただ、頭が爆発してたら心都のためによろしくないと思って忠告しただけよ。心都が直さなかったところで私に害が及ぶわけじゃないし。謝る事なんかなーんにもないのよ」

更になにっこりと美里。

「……う」

こっぴつ時の美里は、怖いくらいにドライ。っていうか普通に怖い。

「…いい、今すぐ直します」

もう鏡なんか見なくていい。そんなの気にしていられるか。

美里の射るような視線（これがかなり痛い）を受けながら、私は手ぐしでワイルドに髪を整え始めた。いや、何しろ鏡やらくしやらを携帯する習慣がないもんで。

恋する女本格的に失格、か…？

「さつきよりはマシな頭になったわね、とりあえず」

怒れる女神美里様からやっとお許しが出たのは、2時間目終了後の休憩時間だった。

「お世話になりましたー」

思わず美里の机の前で頭を下げると、

「ほらすぐそうやって安心するー。まだ人並みに寝癖はなくなった、
ってだけよ。……ねえ心都、頼むからクリスマスマスパーティの日だけ
は爆発頭で現れないでね？そんなんじゃ生まれる愛も生まれないわ
よ」

彼女が不安げな色を宿した瞳で私を見る。

心配してくれているのはとてもありがたい。が、私の頭の中
では今美里が発したある単語だけが強烈な主張を繰り返していた。
「愛……愛かあ……いーなその響き……」
うつとりしすぎて別世界へ行きそうになった意識を慌てて引き戻
す。げんなりとした美里の視線が痛かったからだ。

「だ、だいしょーぶ！心配しないで美里。当日はバッチシ」

「へえ」

「そんな疑わしい目で見ないですよ。言っとくけど私、やる時はやる
女ヨ？」

「ふうん」

……さつきから、反応薄っ。ぐっと立てた親指のやり場のなさが
虚しい。

「そこまで言うんなら心都」

と、美里がお得意の小悪魔スマイルで微笑んだ。

その白い腕をゆっくりと私の肩に回し、甘い声で囁く。

「クリスマスイヴはそれなりの行動を起こしてくれるんでしょうね
え？」

「こ……行動って！？」

美里、ますますにつこり。こうなるともう小悪魔じゃなくただの
悪魔にしか見えない。

「そうね例えば、告白とか、告白とかー…あと告白とか？」

「結局告白じゃないですか……って告白！？そ、そんないきなり！
」！」

ヤバい、頭部に血液上昇中。

そんな私とは対照的に、美里はふふふと悪戯っぽく笑い、

「冗談よ。心都は心都でちゃんと決めてるんでしょ？告白の条件」
白い腕が私の肩からはずれる。首周りが自由になつた私は、美里の問いにこつくりと頷いた。

「…いつか、私が可愛くなれたら。そんでもってあの部活命の鈍感男をちよつとドキドキさせる事が出来たら。」

その時は、ちゃんと伝える。

泣いて喚いて殴られかけたほんの十数日前、冬の校庭を走りながら決めた自分の中での目標。

我ながら、果てしなく無謀だと思う。

「じゃあ今はまだ全然告白できないわね」

「そーそーまだ私より七緒の方が何百倍も可愛いから　って美里さん？」

ハッキリ言いすぎです。

「でもね心都、告白とまではいかなくても、ちょーっという感じの雰囲気でもいい感じに気のきいた言葉を囁き合ったりは出来るんじゃないの？」

「えー…」

そりゃあ、クリスマスが近づくにつれてそんな感じの理想（妄想？）が何度も頭を駆け巡つた事は否定できない。

でも、なんだか都合よくいく気がしないのも事実。

大体「囁き合う」っていうのが問題だ。仮に、クリスマスのきらびやかな雰囲気押し流された私が囁きまくつたとしても、七緒はどうだろう。

やっぱり奴の「いい言葉」は、『男の拳は喧嘩のためにあるんじゃないんだぜ』くらいが限界なのかもしれない。

…いや、別に何か期待しているわけでもないけれど。

神のみぞ知るクリスマス。

とりあえずもう二度と、酔って物真似しまくるような事態だけは

避けたいものだわ。」

「今日一緒に帰れる？」

好きな相手からこう言われて、嬉しくない人なんかきつといな
んじゃないかな。

もちろんかく言う私もその1人で。

「あつ、え、今日？私、かつ帰れりゅ」

「ぶつ。噛んでやんの」

私のぐたぐたな返答を聞いた七緒は、わざとらしく嘖き出した。
あなたの不意打ちのせいだったの、とはもちろん言い返せない。

だって、本当に、不意打ちだった。

かつたるい6時間目の数学もHRも終わり、帰り支度をしていた
丁度その時。七緒が私の席へやって来て、さっきの無駄に人を惑わ
す台詞をさらりと口にしたのだ。

「あの、なんで急に…？」

「昨日の続き教えてもらおうと思って。もう冬休みまで1週間切っ
てんだし！」

「きのー…？」

ああ料理教室、と私は納得した。そうだ。じゃなきゃ、いつもは
部活仲間と帰っている七緒が理由もなく私を誘うはずがない。だっ
て彼氏彼女でもないのに。

「あーはいはいOK。そういう事ねー」

「なんか投げ遣りだな…。でさ、なんか教わる身なのに毎度毎度お
邪魔するのも悪いし、今日は俺の家開催って事で」

「そんな気にしなくてもいいのに」

「こういうところは妙に律儀な七緒に感心しつつ、私は『また明美さんに新婚ごつことかからかわれるのかな』と考えていた（正直、そんなに嫌じゃなかったりする）。」

「あ、でも俺今日は部活6時までなんだけど、心都は？」

「私は今日5時までなんだよね実は。いーよ、1時間待つてるし」

「え、マジで？」

七緒の表情がぱつと輝いた。

：駄目だ。料理教室のためだつて事も、さらにその料理教室は部活のためだつて事も、わかつているのに。

七緒が私に向けるこの笑顔を見ると、どうしてもウキウキしてしまう。

「柔道部って体育館だよな。久しぶりに七緒の柔道姿でも見学しようかなー」

懲りずにまたニヤけそうになる自分の顔を俯き加減に隠しながら、私は言った。いかにもな「浮かれてます」感が声に滲み出ない事を祈りながら。

ふうん、と七緒は呟き、

「じゃー頑張んなきゃな」

いつもと変わらない口調で言う。

そりゃあ、当の御本人は何も考えずにおっしゃった言葉なんだろうけど。

知り合い見に来るならいっちょ張り切るか、くらいの意味なんだろうけど。

それが、ものすごく悔しいけど。

どうしてこの人は、私を一瞬で幸せにするコツを無意識に知っているんだろう。

重く錆付いた体育館のドアを開くと、そこは12月とは思えないほどの熱気に満ちていた。

動き回る生徒、大きな掛け声、ボールが跳ねる音。

もし誰かがこの場をスケッチすれば、完成した絵には「青春」とか直球ど真ん中な題名が付きそう。つまりそれくらい、放課後の体育館の雰囲気は元氣潑刺だったのだ。

今日は柔道部とバレー部が場所を半分ずつ分け練習しているようだ。その周りには、友達待ちか恋人待ちか、はたまた季節外れの入部希望なのか、練習風景を見学している人もちらほらいる。

そしてついさっき部活を終え、七緒の練習姿を拝むべく体育館へとやってきたこの私。

とりあえず入り口付近に立ったまま、左側で活動中の柔道部を眺める。どうやら今日は2人ずつ組んでの練習らしい。

いかにも柔道やってます、って感じのガタイのいい部員の中で、七緒の姿はすぐに発見できた。

「あ。」

…七緒、小さっ。

私とも大して変わらない身長や肩幅に、照明の光を受け茶色っぽく透ける髪。

使い古した柔道着さえ着ていなかったら、何の疑いもなく可愛らしい女子マネだと間違えられるだろう。

しかし、自分よりかなり大柄な練習相手に向かう七緒の表情は真剣そのもので。これから何かを打ち破ろうとする人間独特の、ピンと張り詰めた雰囲気静かに発していた。真つすくな瞳は、あの不思議な、人を動けなくする強い眼差しを持っている。

もちろん私がちゃっかり見学に入ってきた事なんか気付く様子は少しもない。だけど今は、それに対して寂しいだとか虚しいだと

かという感情を抱く事は全くなかった。

むしろ、このまま。

この暑苦しい体育館の中、眩しいくらい好きな事に打ち込む七緒を、ずっと眺めていたい。

と、空気が微かに揺れた。

ほんの一瞬の出来事。

七緒の手が動き、相手の胴着をしっかり掴み、

「……！」

投げる　　そう思った時にはもう、相手の体が無駄なく動き七緒をかわしていた。

あまりの素早さに、私はもう頭がついていかず。

何が起きたのかわからないままただ息を止めて、戦う幼馴染みを見つめた。

その強い眼差しが。

相手を捕えようとする腕が。

私の心に焼き付いていく。

ボタン、と聞くだけで痛そうな音をたて七緒が投げられた頃、私の思考はようやく追いついた。

「もう一本、お願いします……！」

七緒の迷いのない声が、体育館に響いた。

「お疲れ様です」

見慣れたジャージ姿で体育館から出てきた七緒が、少し驚いた顔で私を見る。

「わ。びつくりした……心都、来てたんだ」

「かれこれ1時間くらい前からね。さり気なく見学してた」

「へえ。全然気が付かなかった」

呟く七緒の横顔は、もういつもの美少女フェイスに戻っていた。たださつきまでの柔道少年の名残として、左目の下に小さな掠り傷があるだけだ。

「悪いなそんなに待たして。じゃ、行きますか」

そう言って七緒は、すっかり日が落ちた冬の校庭を歩きだした。

「結構、ううん、かなり楽しかったよ。私は」

だって、久々に七緒の柔道姿を見られたんだしね。

「そうかあ？つか1時間前って事は、俺が見事に投げられたところも見たんだ」

「うん」

はは、と少し困ったような顔で笑う七緒。

「俺、昨日強くなるって言ったばっかなんだけどな。かつこ悪り……」

「かつこよかったよ？」

校門をくぐるのとほぼ同時に、私は言った。

少し恥ずかしいので俯きかげんだったけれど、とにかく、ちゃんと隣に聞こえるように。

お世辞ではなく。

慰めでもなく。

「ほんと。かつこよかった」

真剣に相手に向かう七緒。

投げられても投げられても諦めずに起き上がる七緒。

まっすぐな七緒。

全部、心からかつこいいと思ったんだ。

「……………」

あまりの反応のなさに不安になった私は、恐る恐る隣の彼の表情を見遣った。

「……………」

「……………」あのさ。せっかく人がかつこいいって言ってんだから、もう

少ししいい感じの顔してよ」

眉毛は八の字、普段の三割り増し真ん丸い目で口をぱーんと開けた七緒は、半信半疑な様子で言った。

「…や、何か心都にそうやってちゃんと誉められたの初めてな気がしますから…びっくりした」

「別に初めてじゃないでしょ。私、今日の朝もちゃんと言ったじゃん。『カツコヨカツタネ七緒』って」

「あれは明らかに馬鹿にしてる感溢れる棒読みだったろ」

七緒は、うつすらと星が輝き始めた空を見上げ、

「……そうだな。そう言ってもらえりゃ、あんなだけ派手に投げられた甲斐があつたかな」

ぼつりと呟く。

「それはよかつた」

と、私も短く返した。

普段は美少女顔の七緒。だけど昔から、柔道をする時だけは私の目に誰よりもかつこよく見えるよ。七緒はずっと七緒で、やっぱり「かつこいい」んだよ。

そう言いたかつたけど、私は私でやっぱり昔から、この微妙な恥ずかしさに耐えきれない人間で。

「…ふへっ」

「何だよ笑うな！しかもふへって」

どういうわけかつい噴き出してしまい、雰囲気はぶち壊し。その自分のアホさ加減を少し悔やみ。

そして。

やっぱり私はそんな七緒が大好きなんだ。そうあらためて実感した。

ぞわり、と悪寒が全身を駆け巡る。

『そいつ』の姿が視界に入ったその瞬間から、震えが止まらない。どうして。どうして神様はこんなにも無情なのだろうか。

心の中でそう何度も繰り返す。

たまらなくなつて、私は擦れた声を出した。

「……何であんたがここにいるの」

『そいつ』 進藤禄朗は、得意気な表情で言った。

「いちや悪りいか！オレの情報網をナメんなよ。七緒先輩在る所にオレ在りだ！！」

いや、もう訳わかりません本当に。

湯気のとつ3つのカップがテーブルに置かれ、

「いただきます！」

いちいち暑苦しい挨拶と共にお茶を啜ったのは、もちろん進藤禄朗。

極度の眩暈に襲われながら、私は禄朗を見据えた。

「ていうかストーカーだろ」

なぜならここは東家のリビング。そしてさっきまで禄朗が仁王立ちで待ち構えていたのは、あと2、3歩進めばこの家のインターホーンに手が届く位置だったからだ。

「人聞き悪りいな。そんなキモい事するわけねえだろ」

と、私を睨みながら禄朗。

そして、

「それにしても……よく俺の家わかつたなー……」

呆氣にとられた間抜け面のまま七緒が呟く。外での立ち話は寒い

からまあ入れ、と禄朗を招き入れ、またまた買い物中で不在の明美さんに代わりお茶まで淹れた彼も、未だに状況が飲み込めていないようだ。

七緒が言葉を発した途端、禄朗は口調と表情を変える。

「もちろんっ！オレ、七緒先輩の事なら何でもわかるんすよ」

はい。今、明らかに空気が一瞬凍りました。

「というのはお茶目な冗談っす。本当は放課後テキトーに生徒捕まえて聞いたんすよ」

「は？生徒…？」

「校庭にいたんで部活中だったんだろっすけど、2年の東七緒さんの家の場所を知ってるかどうかっすよ。オレが優しく控えめに尋ねたら、その人すぐ教えてくれましたよ。短髪、色黒、泣きぼくろ。多分バスケ部っすね、近くにボールが転がってたんで」

「……………田辺」

げんなりと、七緒が友人の名前を呟く。私の頭にも、美里に惚れて度々ドンマイな目にあっているクラスメイトの顔が浮かんだ。

もちろんこの進藤禄朗が「優しく控えめに」尋ねたはずはないと思う。田辺、脅しとかに弱そうだもんなあ…。

「で、禄朗。人に俺ん家の場所聞いてまで、どうしたんだよ」

ぼ、と禄朗が初々しく頬を染める。

「実は、どーしても今日中に七緒先輩に言いたい事があるんすよ」

「…なら朝言えばよかつたじゃない」

「そこ、うつせえよボサボサ！さっき思いついたんだよ！」

「だからボサボサって言うな！朝よりはマシだっつーの」

「あーはいはいストップ」

七緒が私と禄朗の間に割って入る。このまま喧嘩に突入したらまた話がややこしくなる事を察したのだろう。

「えーと…本題は何だっけ」

「七緒先輩に言いたい事があるんすっ」

「ああそうそう。何？」

禄朗はつんつんに逆立った頭を掻き、

「えーっとスねえ……」

と、恋する純情少女よろしく少しもじもじした。激しく嫌な予感。

七緒はというと、頭上に「？」マークを浮かべた相変わらずのきよとん顔で禄朗の言葉を待っている。

「七緒先輩、24日お暇つスか？」

嫌な予感、大的中。

「もしよかつたらっ、オレと一緒にチョコレートケーキ食べたり鶏の唐揚げ食べたりクラッカー鳴らしたりシヤンパンもどきの炭酸飲料飲んだりツイスター ゲームしたりしませんかっ？」

へえ禄朗つてば不良ぶってるくせにクリスマスパーティーのイメージはわりと古典的、そしてケーキはチョコ派なのね じゃなくて。

またまた誘われてしまった東七緒君。24日、アイドル並に大人気だ。

「あー…残念だけどその日部活で、その後も予定が…」
と、申し訳なさそうなアイドル。

「その後の予定」は私との約束で、それを七緒がちゃんと覚えていてくれた事が、禄朗には悪いけどほんの少しだけ嬉しかった。

が、しかし。

「あ、そーだ心都」

「ん？」

笑顔を輝かせた七緒の提案は、私の思考を吹っ飛ばした。

「24日のパーティ、禄朗も呼んでやればいーじゃんっ」

「え」

「人数増えた方が盛り上がるし」

私には、くつきりと見えた。クリスマスツリーの前、七緒を巡って火花を散らす私と禄朗の姿が。

それはかなり信憑性の高い未来予想図。

とてもじゃないけど今まで夢見てきたイヴとはかけ離れすぎて
いる。

「でもさ…えっと…あ、美里と田辺にも聞いてみないとっ」

「あいつらには俺から言つとくよ。多分納得してくれんだろ」

な、何か今日はやけに押しが強いじゃない。

ああ七緒の笑顔が眩しい。本当に眩しい。もう眩しすぎて涙が
出てくるよ。

「マジっすか七緒先輩！こ、光栄っす！」

よく見たら禄朗も泣いていた。ただ私と違うのは、頬を伝うそれ
が明らかに嬉し涙だという事だ。

「ダメ元で言ってみてよかったっす。クリスマスイヴを七緒先輩と
過ごせるなんて夢みたいっすよ…！」

本当に、夢である事を望まずにはいられない。

もし、夢ならば、お願い。

「さ、覚める覚める覚める覚める〜おおお」

低音でそう呻きつつ頬をつねると、やっぱりと言うべきか、痛み
が走る。

どうやら夢じゃないらしい。

強靱な妄想力により、クリスマスイヴの予想図は更に膨らむ。

禄朗と仲良くケーキを食べる七緒。禄朗と仲良くシャンパンもど
きの炭酸飲料を飲む七緒。禄朗と仲良くツイスター ゲームを楽し
む七緒……（エンドレス）。

そしてその傍らには、鬨いに敗れ独り寂しくジャ　おじさんの物
真似に励む私。

……わお。虚しい。虚しすぎる。

「七緒先輩は何ケーキ派っすか？チョコっすか？クリームっすか？
それとも意外なところでモンブランっすか？」

「何か層になってるやつ」

「ミルフィーユっすね！さすが先輩、いい意味で予想を裏切る返答
っす！」

孤独感に苛まれる私の耳に。

「でもあれって綺麗に食うの難しいっスよね」

「いくら上下左右バランスよく食っても絶対最後ぼろっぼろに崩れるもんな」

「美味しいのに勿体ないっスねー」

「うんうん」

聞こえてくるくる。仲睦まじいお二人の甘い会話。

……っというか。

「……馬鹿話。」

「あ、あ！？何だとボサボサ」

ぎん、と禄朗がこつちを睨む。

最初に会った時は呆然としていた私だけど、今朝から何度も睨まれているせいかもう恐怖心は感じなくなっていた。その目の鋭さにも、センス0な私の呼び名にも。

何というか、慣れっすっごい。

「私は『意外なところ』のモンブラン派ですって言ったの」

でも栗ご飯は嫌いだ。甘さ×白米のコラボレーションはどおっしても体が受けつけないから。

「誰もお前の好みなんか聞いてねえし。しかもさつきから『とつとと帰りやがれ』みたいな目で見てんなよ」

「けっ」

…以前にも増して自分がひねくれてきているのを感じる今日この頃。

つまり、馬鹿話だとかモンブラン派だとかはどうでもよくて

私が言いたい事は1つ。

『七緒とベタベタしないでください』。

もちろんそんな告白っぽい台詞を口にできるはずもなく、自分の中のがままな嫉妬心を目のあたりにして落ち込むばかりだ。

「大体どうしてお前が当たり前みたいなの顔で七緒先輩ん家にいんだよ。ずっずっしい女だな」

「……ずうずうしい？」

今の台詞はかなり聞き捨てならない。

「ちよつとちよつと、ずうずうしいのはどっちだったの。あんた自分の事棚に上げすぎだから！」

ああまた始まったよこんちくしょう、と呆れ気味に遠い目になる七緒。

が、出会って2日で既に犬猿の仲になりつつある禄朗との火花はもう消せない。

「は、オレのどこがずうずうしいんだよ？言いたい事言うために来たんだつつつたる」

「ふん、私には料理教室っていう正統な目的があるんです！。誰かさんみたいに突然押し掛けたわけじゃありません」

「料理だあ？お前の作ったもんなんか食ったらそのまま死ん……」
死ん……って何よ（まあ大体想像つくけど。『死んでしまうほど美味しいんだろうなあ』とか続くとは思えないし）。

中途半端に言葉を切った禄朗はじつと私の顔を見て、

「へーえ……」

突如、意地の悪い笑みを浮かべる。

「……何笑ってんの」

そう問うと禄朗は、一層不敵に口角を上げた。

「そーかボサボサ、お前……」

何なんですかこの人。

……めちやめちや嫌な予感がするんですけど……！！

が、沸き上がる緊張感のあまり、酸欠金魚よろしく口をぱくぱくさせる事しかできない私。

そしてまだまだ極悪スマイルの禄朗。真つすぐ私を見据えると、
大声で言う。

「お前、七緒先輩の事好きだろ！」

瞬間、周りの景色が色を失った。

……このつんつん頭の彼は今何て？ワタシ、何も聞こえない。え

え聞こえませんとも。

「つーか大好きだろっ」

悲しいかな、当然の如くばつちり聞こえたその2度目の禄朗の発言で、ようやく現実に取り戻される私。

「！！！！…私が！？な、ななな何言っ…！！つーか、いやマジで、はあ！？」

「見ててバレバレなんだよ」

思えば、黒岩先輩にも『ベタ惚れバレバレ』と言われた。私つてそこまでわかりやすいんだろっか？この、好きな人しか眼中にない進藤禄朗にもバレるくらいに。

いや、今の問題はそこじゃない。

日頃の他人との怒鳴り合いで鍛えられた（？）禄朗の大声は、当然すぐ傍の七緒にも聞こえたわけで。

という事は、私の4年間の想いがまさに今、不本意な形で伝わってしまったわけで……。

恐る恐る、七緒を見遣る。

「……」

「ぼかーん。と、わけがわからなさそうな表情の七緒が、そこにはいた。」

15&1t:嘘と、レモンの砂糖漬け>

出会って14年。好きになって4年。

七緒の顔を見るのがこんなにも怖かった事は、今までにない。

重く降り積もる沈黙。

ぽかんとアホ面の七緒。

にやにやと笑う禄朗。

はち切れそうに脈打つ心臓。

その全てに耐えられなくなった私は、わなわなと震える唇を動かした。

「な、何言ってるんすかつ。私が七緒を、すつすす好きなんて」

…やばい、裏返った上にちよつと禄朗口調混じり。

「ろくろー、いくら私が嫌いだからってねえ、そつ、そついう……」

そついう嘘つかないですよ。

言葉は喉まで出かかっているのに。駄目だ。言えない。

だって、嘘じゃないから。

禄朗の言う事は全てあっていて、大正解で、でも今ここでは認めたくなくて、だからといってただの嘘と一緒に誤魔化したくない気がして つまり私は黙り込むしかなかった。

そんな私とは対照的に、すぐ傍から聞こえてくる声は何とも呑気だった。

「あ、やつぱ冗談？」

はははと笑うのはもちろん、どつこまでも無邪気で素直な東七緒君。

「一瞬ホントかと思ってびっくりしちゃったじゃん。まあよく考えりゃありえねえよな、心都が俺の事好きとか」

「…ん」

私は中途半端に、どちらかといえば肯定の色合いが強い音を発した。

卑怯だ。こんなの、最悪。

が、そこで黙っちゃいけないのは禄朗だ。

「七緒先輩！！ボサボサの言ってる事こそ嘘っスよ！！こいつ絶対先輩の事、大々大好きっスもんっ」

「ろくろー！お前、確かに心都とはあんましウマが合わないみたいだけど…そんなわけわかんない嘘言っなって」

な？と少し困ったように七緒。

「…うっ」

大好きな七緒先輩になだめられた禄朗はそれ以上何も言えずに、すごい形相で私を睨み付けた。

『てめえのせいで恥かいたじゃねえかこん畜生』。目がそう語っている。しかしここは七緒の手前、ぐっと堪えたらしく、

「……そっスね。すいません長居しすぎたっス。先輩、オレそろそろ帰ります」

目だけはぎらぎらと私を睨んだまま、禄朗は愛想よく七緒に言った。

「あー、じゃ24日の詳しい事はまたそのうち連絡するよ。寒いから風邪ひかないように気イつけてな」

「はいっ。クリスマスパーテイ楽しみにしてるっス！」

笑顔で七緒にそう言つと、最後にまた私をひと睨み。

「お邪魔しましたっ！」

風を切るように頭を下げ、禄朗は去っていった。

さて。とりあえず……何について落ち込めばいいのかわからない。

あんな不意打ちみたいな形で七緒に気持ちが伝わらなかったのは、心から良かったと思う。

でも、私は嘘をついた。

私が七緒を好きだなんてありえない　という最大級の嘘を。

七緒もその嘘をあっさり信じた。それは、私が七緒にとって「幼馴染み」から「女の子」になる確率の低さを改めて実感させてくれる。

自業自得。私が馬鹿みたいに素直になれないせいだ。それはわかっている。わかっている、けど。

私は、ずるい。

私の気持ちを自分自身で塗り潰したんだ。

なのに、悲しいとか寂しいとか思うなんて。

こんなの、ずるいよ。

「…どうしてこー上手くいかないんだろうな」

突如、七緒が呟いた言葉に、今まで自分の世界に入っていた私はびくりと反応してしまった。

「な、何が？」

「心都と禄朗だよ。まだ会って2日なのに喧嘩ばかりじゃん」

「あー…何ていうか、もう生まれながらの相性の問題でしょ」

「そんな他人事みたいに。間にいる俺は疲れるっつーの」

は、と眉を下げて七緒が笑う。私もつられて笑ってみた。

「あは。じゃ、ちょっと遅くなっちゃったけど、心都ちゃんのお料理教室始めますか」

「はい。…良かった、心都もう忘れてんじゃないかって思ってたんだ」

失礼な。私は約束を守る人間よ、一応。

自分の通学鞆に手を突っこみ、料理部からちよろつと失敬してきた材料を取り出す（まあ、だって私も一部員だし、ちゃんと部費払

ってるし……うん、いいだろ。

「今日は、可愛らしいマネの定番 レモンの砂糖漬けを作りまーす」
「可愛らしいはいらないけど」

私は七緒の訂正を無視し、レモンをまな板の上に乗せた。

「これを薄ーく輪切りにして砂糖をまぶすだけだよ。簡単でしょ。
私も一緒に作るから、とりあえずレッツトライ」

「はい……」

私たちは包丁を握り、レモンを切り始めた。包丁がレモンに入る、すどん、という小気味いい音だけが部屋に響く。

やっぱり私は、悲しい時に料理をするのが向いているのかもしれない。考えたくない事を全部忘れられる。

「それにしても、禄朗もすごい嘘つくよな……」

と、何ともいえない苦笑いの七緒。

「……私が……好きって?」

「うん」

七緒はいつでもまっすぐだ。本当に。

「そーだね。禄朗すごいよ」

私はレモンを切る手を休め、隣に立つ彼を見た。

「もしも嘘じゃなかったらどうするわけ?」

私はいつも通りの口調で聞いた。七緒にはきつとただの『もしも話』にしか聞こえないんだろう。

「……とりあえず、びっくり?」

「だね、びっくりだわ」

ちよつと笑って、私はまたレモンを切り始めた。さっきより少し速いスピードで。

とりあえずびっくり、その後は?私にどういう返事をくれるの? そんな事、聞けるわけなかった。

だってこんなの、ただの『もしも話』だし。

ねく。

「あ。」

痛みより先に、頭がひやりと冷たくなる感覚が走る。しまったあ
あと思った時にはもう、左手の人差し指から赤い血が流れていた。

「わ、どうしたんだよ大丈夫か？」

「大丈夫。…ああワタクシとした事が」

七緒は部屋の隅に置いてある棚の引き出しから絆創膏と消毒液を
出してくれた。

「とりあえず傷口洗って、洗ったら椅子に座ってて」

「…はい」

何しているんだろう、私。なんかもう、めちゃくちゃだ。

指を消毒した後、絆創膏を貼った。さすがに七緒に貼っていただ
くのは恥ずかしかったので、頑張って自分でやってみた。

「…大丈夫か？」

「うん。何かあんまり痛くないし、もう平気」

「や、傷だけじゃなくて」

七緒がじつと私を見た。こういう時、私は少し固まってしまっ

「心都、さつきから変だから」

「…はは。顔が？」

「顔以外も」

「……」

「ごめん嘘嘘、冗談」

七緒の優しさは、たまにちょっと痛い。

……言っちゃうか？

このまま半端な距離にぐちぐち悩むより、いっそ。

今この場で言って、結果はともかく すっきりさせてしまおう
か。

「…七緒」

「ん？」

七緒が見慣れすぎたきよとん顔で、こっちを向く。変わらない綺麗な瞳。

大好き。

大好きだよ。

「……………だい……」

最初の2音を口にした後、私はハッと我に返った。

何雰囲気になされて告白しかけてんだ私！！！駄目じゃん！！

心の中で大絶叫。

しかし気付いた頃には手遅れで、七緒にはしっかりと聞こえていたらしい。

「『だい』……………何？」

「え、えつと……」

神様仏様女神様仙人様。誰でもいいから助けて！

「その、つまり……。だい……」

「……？」

「……………だい……………だい……………大福食べたい」

「はあ？」

七緒が眉をしかめる。

「いや、その…急に死ぬほど大福が食べたくなりまして」

「…お前大福嫌いじゃなかった？」

「…うん」

そう。いわゆる食わず嫌いというやつで、私は昔から大福が駄目だった。

「いや、もしかしておいしいかもしれないし…食べてみよーかなと

…」

「へえ。でも残念だけどあいにくうちには大福ないんで」

「い、いえお構いなく」

ああ、支離滅裂。私はまたやっちゃまったよ美里さん。これじゃあ人の家に来てお菓子をせびるただの厚かましいガキだ。

七緒と一緒にいるだけで、いつだって幸せな私なのに。

どうしてだろう。

やけにレモンが目にしみる。

「うをええ!?!」

と、妙に甲高い声を発したのは、『短髪・色黒・泣きぼくろ』で脅しとかに弱そう』な田辺。

「ろ…禄朗って、あの進藤禄朗かっ?」

「あの進藤禄朗。」

七緒が答えると、田辺は頭を抱え込んだ。

「あの進藤禄朗と!?!仲良くクリスマスパーティー!?!」

「え…駄目?」

「マージーカーよーおおお…」

俺、何かやつちゃった?と目で私に訴えてくる七緒に、やつちゃったねーと同じく目で返す。

24日なんだけど、1年の禄朗も一緒でいい?

朝1番、冬休み間近で浮つく教室にて、美里と田辺に七緒が問うた言葉。それが冒頭の田辺の奇声の原因だ。

一方の美里は落ち着いたもので、

「進藤君ってあれでしょー。こないだの授業中キレて先生総動員させた子」

「そうそう」

私が頷くと、横から無駄にデカい声が割り込んできた。

「あいつ、質問に5秒以内で手早く尚且つ解りやすく答えないと胸ぐら掴むんだぜ!?!すんげえ血走った目で!」

「田辺君なんでそんな事まで知ってるのー?」

「え」

美里の大きな瞳に覗き込まれ、田辺は言葉を詰まらせた。そりゃ、まさに昨日七緒の家を教えるように脅されたからだーなんて情けない事、好きな子の前では言えないだろう。

「う、噂。そう噂で」

誤魔化し方が苦しいぞ、田辺。…まあ、昨日の私の大福ほどではないけど？

一刻も早く話題を変えたい田辺は、急いで七緒に向き直った。

「つか東、いつの間に進藤禄朗と仲良くなったんだよ？一昨日まで存在も知らなかったじゃんかー」

「あー……うん。まあ…色々あつて。」

七緒さん、女の子と間違われ愛の告白をされた事は意地でも隠し通すつもりらしい。男も男で秘密が多くて大変だ。

「ね、美里は禄朗も一緒でいいの？パーティの場所だって美里の家でやらせてもらう事になってるのに」

私が訊ねると、美里は顔の横で可愛いVサインを作り、

「いーよん。どうせうち、クリスマスは両親もお姉ちゃんもらぶらぶデートでいいのよ」

「へえー…若いね、美里のお父さんとお母さん」

「まあね。それに」

と、美里が小悪魔スマイルを浮かべる。

「人数増えた方が色々楽しそうだし？ね、心都」

何だか彼女、面白がっている気がするのは私だけでしょうか。

美里はそのまま笑顔を田辺に向ける。

「田辺君は？進藤君が入っちゃ嫌？」

「…！おっ、俺は、栗原がいいならそれで！」

「ええ！？変わり身早っ」

七緒の突っ込みに激しく共感。

田辺の良い返事を聞き、栗原美里さんは更になっこり微笑んだ。

うーん最強。

「まあ、とりあえず了解とれてよかったよ」

七緒がほっとしたように言う。

「禄朗喜ぶんじゃない？七緒先輩がオレのために友達に頼んでくれたなんて感激っスよっ！』みたいな」

「3年前のジャヤ おじさんといい今の禄朗といい、心都って妙に物

「真似上手いよな」

…そんな誉め言葉嬉しくない。

「あ、そだ」

七緒は自分の机の横に掛けた通学鞆を「ごそごそ探り、「ん」と私に何やら袋を差し出した。

「何これ？」

「きのーの。結構ちゃんと出来てたからさ」

袋の中のタッパーには、レモンの砂糖漬けが入っていた。

「わぁホントだー！普通に食べられそうっ」

レモンの砂糖漬けは、一晩置かないと出来上がらない。だから昨日、薄く切ったレモンを七緒がちゃんと砂糖に漬け込んだのを見届けたところでその日のお料理教室は終了になった。『明日ばかり出来上がってるといいね』という私の言葉を、七緒は覚えていてくれたらしい。

「すごい可愛いー。これ心都と七緒君が作ったのー？」

美里が鮮やかな黄色のレモンをつまみ、感嘆の声をあげる。

初めて自分の料理（レモンの砂糖漬けて料理か？という疑問はこの際ナシで）がまともなものになった七緒は得意気に笑った。

「へっへー。食ってみ食ってみ。ま、俺の腕も確実に上がってきてるって事だな」

「そうだね。たとえ七緒がレモンを漬け込む時に間違って塩で漬けようとして間一髪私が止めたっていう秘密の出来事があったとしてもね」

「…それ言うな」

こっちだって、まさかあんなベタベタなお料理ボケかまされるとは思っていなかったわ。

「おいしーい！」

一口食べた美里が、ちゃんとレモンを飲み込んでから言う。七緒と並んで校内きっての美少女（？）である彼女は、物を食べながら喋るなんてお下品な事はしないのだ。

「おつまジだ。うまいじゃーん。これ部活中に食べたら嬉しいよな
ー」
田辺も口をもぐもぐさせながらの好評価。

「だつろー？料理部直伝だしな、おいしくて当然ってやつ？心都も食つてよ」

ますます鼻高々な七緒に勧められ私も1つ頂くと、なるほど、七緒の前科（カレー、肉じゃが等）から見てもかなり『まとも』で『食べられる』。

「おいしー。すごいよ七緒！進歩したねえ」

「さんきゅ。心都センセにそう言ってもらえると俺も自信つくわ
と、七緒が笑う。

その屈託ない笑顔は、私の中で燻っている昨日の小さな出来事を思い出させる。

私が七緒を好きな事なんて、奴にとっては大したのありえない『もしも話』。『わけわかんない嘘』なんですつてよ。

ちくりと胸が痛んだ。

「何が『センセ』よ」

苦笑いで答える自分が、本当に嫌になりそう。

「でもさー…何かこーいうのつてアレだよな」

と、3つ目のレモンをくわえながら田辺が腕組みをする。

「アレつて？」

「東がその顔できらつきら笑顔ふりまきながらレモンの砂糖漬けとか乙女ティックなもんを部活に差し入れて持つてくわけじゃん。それって見た目的にはアレになつちゃうよな、ほら今年流行った、いわゆる…『萌え〜』？」

ガシッ。

「ぐはッ」

「田辺テメエ人をそんな目で見てたのか」

「いや俺はただお前ファンの3年生のお姉さん方の甘い心理描写を」

「それ以上言ったらぶつ殺す」

「す、すんません……」

見た目とは裏腹に性格は限りなく男前な東七緒君なのでした。

でも七緒、とりあえず早くその首にかけた手を離さないと、すでに白目状態の田辺が死んじやうから。

「心都、本当は進藤祿朗君が来るのあんまり嬉しくないでしょ」

美里が私めがけてバレーボールを手から放つ。さすが現役バレー部員、動きが美しい。

「な…何でわかるの!？」

動揺した私は、ゆるやかな速度で腕の中へ飛び込んできたボールを取り落としてしまった。

ふふーと美里が微笑む。

「心都って本当表情に出やすいのよね。まあ肝心の七緒君は全く気付いてないみたいだけど」

「美里つてとことん鋭いよね…。誰かとは大違いだよ」

体育館はバレーのトス練習をする（ふりをしている？）女子たちの笑い声や叫び声に溢れ、もはや体育の授業はフリートークタイムと化している。そんな空気に便乗した私と美里も、あきらかにバレーの練習にはならないような至近距離でボールの受け渡しをしながら、朝的一幕について語っていた。

「何でそんなに嫌なのよー？」

「…だつて祿朗は私に敵意むき出しだしさあ。それにあの2人…ちよつと見てらんないくらい仲良いんだもん」

「なあんだ、ただのヤキモチじゃない。っていつか男の子にヤキモチ焼いてどーすんのよう」

くすくすと笑う美里に、私は大真面目で反論する。

「あいつの決め台詞は『男とか女とか、そんなのもう関係ないっす！』だよ！？」

おまけにやけに健気だし、薔薇とか咲かせちゃうし。

「どうしよ美里…クリスマス口のロマンティックなムードに染まった七緒と禄朗が万が一何か間違いを起こしたら…っ」

「はい妄想はそこまで」

ばっさりと美里が遮る。

「あのね心都、今は進藤君より自分の今後の行動についてよおっく考えた方がいいわよ。周りの事ばかり気にしていると、そのうち自分が何したいのかわかんなくなっちゃうんだから」

小悪魔美少女の言葉には、ひしひしとした重みがある。

向かうところ敵なしに見える彼女にも、そんな恋があるんだろうか。

「…そういえば美里の真剣な恋の話って聞いた事ないかも…」

「『真剣な』ってかなり失礼じゃない？」

完璧に可愛らしい顔で口元を歪める美里はなかなかの迫力があつた。

「別に聞きたいなら話してもいいけどー、好きな人をクリスマスパーティーに誘えたくらいでるんるん気分の心都にはちよっと刺激強すぎるかもね。あれは4カ月前…一夏のアバンチュール」

「ア、アバン…！！？」

どうしよう。最後まで平静を装って話を聞く自信がない。ていうか中学生が口にする言葉じゃないよね、それ。

あたふたする私をよそに美里は相変わらずの落ち着きぶりを発揮し、細い指先で髪の毛なんかいじっている。

「まあそのうちゆっくり語ってあげるわよ。でもこれだけは言っとくね」

「は、はいっ」

ごくり、と唾を飲み込み美里の言葉を待つ。

「障害があればあるほど、絶対素敵な恋になるから」

彼女は再びにつこり笑うと甘い声で言った。

「あー…だから禄朗がパーティに参加するって聞いた時、あんなに面白そうに了解したんですネ美里さん」

「さあ？」

やっぱり美里は本当の本当に、小悪魔です。

17&17・華ちゃんと、チャンネルロック>

馬鹿馬鹿しいくらい、君が好きで。

切ないくらい、大切に。

ただそれだけの事なんだけど。

本音を伝えるのって、どうしてこんなに難しいんだろうね。

「じゃーちよつと禄朗のそこ行ってくるわ」

昼休み。あまりにも爽やかな笑顔で七緒が言った。

「な…何で？」

対する私の返事は、あまりにも不機嫌な声になってしまった。

「昨日、24日の詳しい事決まったら連絡するって約束したから。

教室行って伝えてくる」

あの暴走すると止まらない禄朗と、何だかんだ言って彼のペースに振り回されている七緒が2人きりで会う。割りと穏やかではない未来予想図が脳内を駆け巡り、気付いたら叫んでいた。

「…わ、私も行く!!」

「え、本当に？」

意外そうな七緒の顔が私をまじまじと見つめる。

「へー。心都もやつと禄朗と仲良くする気になったんだ」

「いや、仲良くってゆーか…」

ただ禄朗と2人きりになってほしくないだけなんですけどね。そんな嫉妬心がまた顔に出ていたのか、隣でお上品に弁当を食べていた美里が半ば呆れたような薄笑いを浮かべこっちを見た。

「……………」

まだまだ子供な私は、さつき美里がくれた貴重なアドバイスを守れない。

だって、気になる。ライバルの事も、周りの事も。

自分が何をしたいかだけを考えるなんて、当分出来そうにないよ。

禄朗は1年1組の教室にいなかった。

廊下にいた1年生何人かに居場所を知っているか訊ねても、皆知りませんと首を振るだけだ。中には、こっちが進藤禄朗の名前を出ただけでガタガタ震えだす子もいた。あいつ過去に何やったんだ。「誰も居場所知らないなんて、禄朗の奴どこにいるんだろうな……」途方に暮れたように七緒が呟く。

「でも朝はいたらしいから、どっかその辺にいるよきつと。さつきと捜し出して用件伝えちゃお」

ごく平凡な私と、顔がやばいくらい可愛いジャージ姿の2年生(制服はまだクリーニングがここ1年生エリアの3階できよるきよろしている様は少々浮き気味だ。昨日の禄朗よろしく、またいつ鬼の橋本がやってきて、無駄な用で他学年の階へ来るなど怒鳴りつけられるかわからない。

「じゃあ効率よく二手に別れて捜すかー。俺こっち見てくるから」「へーい」

間延びした返事と同時に、私は七緒と反対方向へ歩きだした。

昼休みの廊下は元気な1年生で溢れていて、気を付けないと人にぶつかりそうだ。

数歩進んで、振り返る。

ジャージの後ろ姿。人混みの中でもやっぱりちよつと浮いていて、笑ってしまった。

と、その時。

「……………」

まただ。

はつきりと感じる背後からの視線。

私はこの間と同じように、喉をぐくりと鳴らした。

そして数秒躊躇って、でもやっぱり正体を確かめないとどうにも落ち着かなくて　ゆっくり後ろを振り返った。

案の定、廊下の遙か遠くから私に視線を送る犯人も前回と同じ小柄な女の子だ。

目が合う。

すると彼女は、悪戯が親に見つかった子供みたいに、びくつと肩を震わせた。

何だその意外な反応は…。こっちだって十分怖い思いしているっのに。私はもう顔面蒼白全身硬直、１ミリも視線を逸らせない。

だってあの子、前回消えましたよ。私が瞬きした、ほんの僅かな間に。

やっぱりこれは学校の怪談ってやつで、という事はあの女の子は幽霊で、この学校の制服を着ているから昔ここに通っていた生徒の霊とかいうよくあるお話なわけで　霊にガンつけられた私はどうなっちゃうのよ。…あっちの世界に連れていかれちゃうとか？

そんなの嫌だ。だってまだ若いし遊び足りないし皆と離れたくないし、何より、七緒に気持ち伝えていない。

なのに死んじゃうなんて、そんなの、そんなの………そんなの！
「絶対嫌　　つつ！！」

妄想がMAXに達し、絶叫。

近くにいた1年生が、一斉にこっちを見た。

……あれ。今の私、完全に「イタイ子」かな。だって周りの冷たい視線がそう言っている。

その時。女の子がまた、曲がり角に消えた。

いや、消えたんじゃない。走りだしたんだ。姿がなくなる直前、走るために足を折り曲げたのが見えた。

「……………足？」

…冷静になろう。あの子には足があった。幽霊なんかじゃない。
私を見ていたって事はきつと、何かあったんだ。私に伝えたい事
が。

「…まっ…待って！」

周囲からの「イタ子」に対する目線を感じながら、私は女の子
を追って走りだす。

今さっきあの子が消えた角を曲がると、階段を上る彼女の姿が目
に入った。

「ねえ、ちょ…っその子、待って！」

追ってくる私に気付いた彼女はますますスピードを上げる。

こうなるとお互い意地だ。私も全速力で、尚且つ2段抜かして階
段を駆け上がった。

が、やっぱり慣れない事はするもんじゃない。

「ぐはッッ」

4階から5階へ行く途中の踊り場で躓き、床にガツッーンと顔面
強打。

「…！！」

声にならない叫びが口から飛び出す。いやもう半端じゃなく、痛
い。

しばらくその場にヤンキー座りでうずくまり、ああこれは追跡不
可能かと思った瞬間、

「…あの…大丈夫ですか…？」

控えめで可愛らしい声が頭上から降ってきた。

「だっ、だいじょぶれす…」

痛みに涙ぐみながら見上げると。

「本当ですか…？だって、は、鼻血が出てますよ？」

そこには、髪を低い位置で2つに結んだ小柄な女の子　つまり、
先程まで私に視線を送ったり追いかけてこを展開中だったあの子が、
心配そうな表情で立っていた。

昼休みも人気がなく2人きりで静かに話ができる所というと、私にはやっぱり裏庭しか思いつかない。だけど、12月に入ってからやたら通ったこの場所に、まさか私が後輩と来る事になるうとは。

「えっと…私、1年3組の吉澤華っていいいます」

裏庭の隅の古びたベンチに座り、その女の子　吉澤華ちゃんは私に向き直った。

「2年2組の杉崎心都ですー…」

鼻に丸めたティッシュ（止血用）を詰め額にはたんこぶを作った、女子として「ナシ」な姿の私は、鼻孔が塞がれたため口呼吸しながら名乗った。

……何だか、女の子らしくなろうと決心すればするほど、理想とかけ離れていくのは気のせいでしょうか。

「あー…やっぱ足ある」

「え？足…ですか？」

「あ、ごめん何でもない。老化からくるただの独り言」

すると、今まで思い詰めたような顔で隣に腰掛けていた彼女が勢い良く頭を下げた。

「あの…っ、さっきは逃げたりしてすいませんでした！杉崎先輩が叫んでたから私、怒られるんじゃないかと思つて怖くなつちゃつて…そのせいで先輩怪我しちゃつて…」

「いやいや！私が勝手に妄想して叫んですつ転んだだけだから気にしないで、ね」

華ちゃんは小動物みたいにくりんとした瞳を今にも泣きそうに潤ませ、私を見た。

……おっと、可愛い。同性の私でもくらつとくるほど、『守ってあげたい系』だ。

「えーっと……華ちゃん？どうしてさつき　っていつか前もだけど、遠くから私の事見てたの？…あ、何かこの聞き方キモいな」
これじゃあ、ただの自意識過剰な思い込み女だ。

「いえ」

華ちゃんは首を小さく横に振ると、

「…幼馴染み、なんです」

ぼつりと言った。

「へっ…誰が？」

「私と禄ちゃんです」

「ロクチャンって…TBS？じゃないよね。…あつ、もしかして禄朗！？」

地域によっては通用するかどうか微妙な小ネタを挟みつつ訊ねると、華ちゃんはこっくり頷いた。

「はい」

…ちよつと禄朗。こんなおとなしくて可愛い幼馴染みがいるなんて初耳なんですけど。

「そうなんだー。あのムカつく野郎…いや、あのやんちゃん子と小さい頃から一緒なんて大変だね」

ふふ、と華ちゃんが笑った。

「そうですね…ちよつと大変です」

会ってから初めて見る彼女の笑顔はとても柔らかく純粹で、何と
いうか……かなり癒された（何しろ最近小悪魔な笑顔ばかり見ているもんで）。

「で、禄朗の幼馴染みの華ちゃんがどうして私を…」

ぎょつとして言葉を止める。なぜならほんの数秒前まで笑っていた華ちゃんの瞳には、また急速に涙が溜まり始めていたからだ。

え！？私…泣かせた？えっ！？

パニックに陥る私の耳に、小さな小さな華ちゃんの声が届く。

「…禄ちゃんが、違うんです」

「ち、違う…？」

「最近…いえ、結構前から、禄ちゃんが変で　とにかく違っ
す…」

禄郎が『変』な事なんて重々承知していたけどなあ。なんて今にも泣きそうな華ちゃんに言えるはずもなく、私はただただ途方に暮れるのであった。

ひやりとした冷気が辺りを包み込む。

今日は風が強くてとても寒い。

そういえば今朝の天気予報では初雪が降りそうだと saying していた。

私はそれを聞きながら、ホワイトクリスマスになってほしいなあ、とぼんやり考えたんだ。

「禄ちゃんとは幼稚園のあじさい組からの付き合いで、自分で言うのもおかしいですけど……仲良しだったんです」

1つ1つ思い出すように、華ちゃんは話し始めた。

「私、あんまり人にガーツと向かってく方じゃなかったんで、昔はよくクラスの悪ガキみたいな男の子たちにいじめられてたんです。虫持って追いかけられたり、スカートめくられたり。でも、私は何も言い返せなくて……」

変な言い方だけど、潤んだ瞳が何とも可愛らしい華ちゃんは小さい男の子から見ればいじめたくなる対象だったのかもしれない。

「それを……禄ちゃんがいつも助けてくれたんです」

「ええ!？」

突如大声をあげた私を、華ちゃんが驚いたように見つめた。

いや、だって、あの禄朗が！道端で肩がぶつかっただけの少年や注意してきた担任に容赦なく掴み掛かる禄朗が！いじめられている女の子を助ける、なんて。はつきり言って全く結び付かない。

「人って変わるもんだなあ……」

戸惑いを隠せないまま思わず呟く。

「えっと、でも、助けてくれたっていつてもそんな正義の味方みたいな感じじゃなく、何ていうか……すごく禄ちゃんらしく」
「例えば？」

興味津々で尋ねると、華ちゃんは頬をほんのりと桜色に染めた（やばい、可愛すぎる）。

「……私がいじめられてても、その事には何も触れないんです。『やめる』とか『いじめるな』とか……そういう直接的な事は1つも言わないんです。一言だけ『お前らがいると空気悪い』って、その男の子たちをボコボコに」

「うをつ！ 華ちゃんストップ！」

その続きを言っちゃうと、ほんのり桜色の思い出話が非常に穏やかじゃない風に聞こえるから。やっぱり進藤禄朗、根元は昔から変わっていないらしい。

「あ、あの、もちろん止めました。助けてくれるのは嬉しいけど暴力はよくない、って。ただ……私の言う事聞いてくれるはずもなかったですけど。『すぐメソメソ泣くお前も悪い』なんて怒られちゃう事もありました。でも、禄ちゃんのおかげでいじめられる回数はだんだん減っていったんです」

「やるねえ禄ちゃん」

やり方はどうあれ、とりあえず女の子1人救ったわけだ。

「でも中学に入った頃から、禄ちゃん……変わりました」

「……変わった？」

ふと、その瞳が寂しげに曇る。

「私と っていうか他人と関わる事をすごく避けてる気がするんです。確かに昔からそんな気さくって感じではなかったですけど……話し掛ければぶつきらぼうでも応えてくれたし、たまに笑ったし、理由もなく暴れる事だっただけありませんでした」

でも、と華ちゃんは続けた。

「中学に入ってから禄ちゃんは……変です。誰も寄せ付けない眼

をして周りを睨んで、ちょっとした事ですぐ人に殴りかかって私が話し掛けると『うるせえな』って、突き放したように言うんです」

華ちゃんの小さな肩は、僅かに震えていた。

「昨日禄ちゃんがすごく楽しそうに笑ってて、正直びっくりしました。あんな禄ちゃん久しぶりに見たから……目が離せませんでした」
「だから遠くからこっち見てたんだね」

「ごめんなさい。さっきも先輩たちが1年生の廊下にいたから、禄ちゃんに用があるのかなとか色々考えると……どうしても気になっちゃって、私」

華ちゃんは視線をあげ、私を見つめる。

「どうして禄ちゃんが変わったのかわからなくて……前みたいに、私といる時も笑ってほしいんです」

冷たい風が吹き、細い木にかるうじて残っていた葉はパサリと足元に落ちた。本当に今にも雪が降りだしそうだ。

私は、華ちゃんにどんな言葉をかければいいんだろう。

小さい頃から傍にいた大好きな人が、やがて変わっていく。自分に笑顔を見せなくなる。

人間変わるの当たり前だから、とか。ずっと同じ関係のままいられるはずないから、とか。頭の中で考えれば、自分を納得させるための言葉はたくさん出てくるのだけだ。

頭じゃない、胸の奥がぎゅっと痛くて、やっぱりもうどうしようもなく悲しいんだ。

何か言わなくちゃ、と思う。

でも、隣に座る小さな彼女の気持ちはびっくりするくらい鮮明に想像できて、息が詰まった。

「……………」
「……………」

何も言えない。

結局予鈴が沈黙を破るまで、私は言葉が見つからなかった。

「……教室帰りでしょうか」

控えめに微笑みながら、華ちゃんが言う。

「……ごめん。私、全然話相手になれなくて」

「えっ、そんな事ないです……！ こっちこそ……勝手にぐちぐち言うてごめんなさい。やっぱり溜まつてる事聞いてもらつとすつきりしますね」

と、歩きながら華ちゃん。

うーわー。この子、本当に良い子です。輝いています。

何も言えない自分のふがいなさ、一層身に染みだ。

「……あの、そついえば先輩」

校舎に入ると同時に、華ちゃんが言った。

「さつき禄ちゃんに用があつてあそこにいたんじゃ……」

「あー！！」

やばい。すぽーんと記憶から抜けていました。私は、禄朗に24日の事を伝えるという目的があつてわざわざ3階まで来たのだ。……そついえば七緒は禄朗に会えたのかなあ。

「……ねー華ちゃん」

「はい」

「来週の24日って暇？」

きよとん、と華ちゃんが私を見つめる。

「えっと……その日は6時まで塾があるんですけど」

「そっか。あのさ、塾の後クリスマスパーティーに来られない？ 禄朗も来るからさ、言いたい事とか聞きたい事、じっくり話せるチャンスかも」

「え……でも、私なんかお邪魔して……」

と、華ちゃんが言いかけたその時。

「テメエふざけんのもいい加減にしとけや!!」

……わお、デジャヴ?

またもやあの怒鳴り声が、少し離れた所から風に乗って聞こえてきた。

「……本当に元気な人だなー」

まあ、探す手間が略けたのはよかつたんだけど。

ただ私には、隣の華ちゃんの張り詰めた表情だけが気掛かりだった。

禄朗は職員室前で白熱した口論を繰り広げていた。

もちろんと言っべきか、相手はあの橋本。

「さつきから黙って聞いてりゃ、オレの事馬鹿にしてんのか!!」

テメエの話は時間の無駄なんだよ!」

「だから、こうしてわざわざ昼休みにお前を呼び出したのも生活態度について注意をしているだけだろう! 何度言ったらわかるんだ!」

うん。橋本先生、とても説明的な台詞をありがとう。

つまり橋本に呼び出された禄朗は昼休み中ずっと職員室で普段の行いについての説教を受けていて、今ついにブチ切れてしまったらしい。そりゃあ捜してもなかなか見つからないはずだ。

「ムカつくんだよテメエはよ!!」

「何だその言い方は! 先生たちだってなあ、お前にはもう呆れ果てるんだよ!」

だんだん言い争いが過激になってくる。

やっぱり場所が場所だ。2人の周りには先生たちが続々と集まって、立派な人だかりが出来つつある。

「ろ、禄ちゃん……」

華ちゃんの瞳が心配そうに揺らぐ。

あんな話を聞いた後だから、華ちゃんが今どんな気持ちで荒れる

禄朗を見ているかはよくわかる。

このまま禄朗に喧嘩を続けさせるのはちょっとまずい。やっぱりこれはまた、私が乱入しなきゃいけないのかな……。っ
ていうか七緒はどこまで禄朗捜索に行つてんのよ!!

軽いパニック状態の私は、心の中で叫んだ。

こんな状況で禄朗をばつちり止めるには、七緒がどうにかするしかないじゃない。

「うっせえなテメエの言う事なんて聞きたくねえんだよ!」

「こつちだつてお前みたいな馬鹿に言い聞かせるのはもううんざりだ!」

うわ。結構すごい事言う。この2人の関係、何だかこじれ気味らしい。

「んだとコラ…」

禄朗がぐつと拳を握り締める。

隣の華ちゃんが息を呑んだ。

きつと周囲の誰もが、禄朗が橋本に殴りかかるんだと思った。私も、思った。

「……………」

が、しかし。禄朗はしばらく床を睨み付けたかと思うと、ふいに拳を緩めた。顔はまだ怒り満々のプチ切れた表情のままだったけど、とにかく殴りに行く姿勢を止めたのだ。

禄朗は、覚えているんだ。

むやみやたらに殴つたりしないっていう、七緒との約束。

当のご本人は今プチ行方不明中だけど、その言葉を禄朗はちゃんと覚えている。

……ちよつと大人になつたじゃん。

不覚にも、私はほんの少しだけ感動してしまった の、だが。

「オレだつてテメエみたいな馬鹿から言い聞かせてもらつ事なんか何もねえんだよ!」

「先生に対して馬鹿とはなんだ進藤!」

……前言撤回です。拳が駄目なら言葉で、つてか。確かに七緒との約束は『暴力ふるうな』だけだったからなあ。

昼休みもあと数分で終わりだというのに、禄朗は橋本とのバトル（口のみ）を再開したのだった。

と、その時。

「禄ちゃん……！」

今まで不安気にこの騒動を見ていた華ちゃんが、堪えきれなくなつたように呼び掛けた。

突然聞こえたその大声に、ナイフのように鋭い禄朗の眼が驚いて見開かれた。

「……………げ。……………は、華……………」

げ？

「禄ちゃん……………駄目だよ、そんな……………喧嘩とか、やめようよ……………」

瞳に涙を溜め、でも決して泣きだしたりはせずに華ちゃんと言う。

「……………うっせえな……………関係ねえだろ……！」

「ろ、禄ちゃん……………」

苛立たし気な舌打ちをし、禄朗は周りに集っていた先生たちを押し退けどこかへ歩きだした。

うっせえな。関係ねえだろ。

そう仰いましたかあの人。

「ちよつと待てコラ！」

気付いたら、かなり大きな声が出ていた。

禄朗が振り返る。

「それが自分を心配してくれてる子に言う言葉か！」

「はあ？ 何で急にボサボサが……………」

「ボサボサ言うな！！ こないだよりだいがマシだわ！ この最低男が！」

「テメエに関係ねえだろが！」

急に入り込んできた私に向かい禄朗が吠えた。

だけど、もう止まらない。

「確かに私は関係ないよ、お節介おばさんだよ！でも華ちゃんは違うでしょ！？関係くないでしょーが！」

禄朗は拳をぎゅっと握り締め、本当に忌々しそうに私を睨んだ。もしまた禄朗が（七緒との約束が頭から吹っ飛んでしまうくらいに）ブチ切れて私をグーで殴ったとしても、もう構わない。

「今の発言取り消してよ。じゃないとあんた本当に最低男だよ……！」

殴られようが蹴られようが吊されようが、そんなのどうでもいいと思えるほど、何だか無性に悲しくて腹が立って、もやもやした。

「そんな事……」

禄朗が今までで一番鋭い目つきで私を睨む。そして再び後ろを向き、

「そんな事テメエに言われなくなったら、知ってんだよ」

ぞつとするほど低い声で吐き捨てた。

表情は、見えない。

19 & It・キレやすい十代と、重り & gt ;

禄朗はそれ以上何も言わずに歩きだす。

遠ざかっていく背中を見つめながら、私はとても重要な事を思い出した。

「ちよつと最低男！」

「……何だよ。もう話す事なんて」

「24日、夕方5時に2年2組の栗原美里の家集合だから！公園の近くの、大きくて白いやたらメルヘンな一戸建てだから！」

「は？」

「ちゃんと伝えたからね！……あとはあんたお得意の『優しく控えめに尋ねる』やり方で、誰かに教えてもらいなよ！」

私はそれだけ叫ぶと禄朗の姿が見えない曲がり角まで全力疾走。床にへたりこんでしまった。

「……………」

何だこれ。

どうしてこんなに、悲しいんだろう。腹が立つんだろう。

自分にブレーキがかけられなくなるほど怒鳴ってしまったなんて、生まれて初めてかもしれない。

禄朗にまたボサボサって言われたから、とかそういう理由じゃない事はわかっていた。

最近ニユースとかでよく聞く『キレやすい十代』ってというのは、私みたいな奴の事なんでしょうか？

「先輩」

傍に来た華ちゃんが、私の目線に合わせ屈んだ。

「……ごめん、華ちゃん……。私、出しゃばってめっちゃくちやしちゃったよ……」

「いえ」

華ちゃんは優しく首を振った。

「私の方こそ巻き込んでごめんなさい。でも先輩が怒ってくれて、何かちよつとすつきりしちゃいました」

「……ごめんね」

もう一度謝る。

「先輩、私24日行つてもいいですか？」

「えっ本当に？ 来てくれるの？」

華ちゃんがこくりと頷く。

「……私、やっぱりこのままじゃ駄目だなあ、って。ちゃんと禄ちゃんと話して、前みたいに普通に笑って喋れるようになりたいです。……またさつきと同じく逃げられちゃうかもしれないですけど」

「そんなんさせないから！ 逃げようとしたらがつり押さえつけるから！ ねっ！」

私が鼻息も荒くまくしたてると、華ちゃんは嬉しそうに微笑んだ。彼女の純粋な笑顔は本当に人を癒す。

「だけどやっぱり、心のどこかで生まれた重りは消えてくれなかった。」

「いやーさつきは悪い悪い！ 禄朗捜してうるうるしてたら顧問に捕まっちゃって社会科資料室の整理手伝わされてさーあはは！ ほら柔道部の顧問、担当社会だからははは」

プチ行方不明だった七緒が教室に戻ってきたのは、本鈴が鳴り先生がやって来る数秒前だった。

そしてこの失踪理由を本人から聞かされたのが、5時間目終了後の事。その日の授業は終わりでは帰るだけなのに、何だか心身共にぐったりな私は帰り支度もせず自分の椅子に座っていた（さす

がに鼻ティツシユは取ったけど)。

「結局本鈴鳴るぎりぎりまでその仕事やらされてたから禄朗と会えなくてさーははっ。心都は会えた？」

「やたらご機嫌な笑顔を振りまく七緒。周りにお花が飛んでいます。」

「おう。ばっちり伝えといたわい。」

「……何でそんな男気溢れる返事？」

「なぜってそりゃあ、禄朗とあんなに激しく罵り合った後、ちょっとばかり男らしくもなるわ。」

「七緒の方がどーしたのよ。うきうきじゃん」

「私が訊ねると、七緒はいつそう笑顔を輝かせた。」

「それがさ、資料室の整理してる時、顧問に」

「告られましたか」

「ち……っげーよ！！ 真顔で言うな！」

「ごめん。今の私にはこんな死ぬほどしょーもない冗談しか思いつかないわ。」

「へー。じゃないとしたら何？」

「あのなあ……誉められたんだよ！ 最近上達してるって」

「え……それは本当にすごいじゃん」

「だって柔道部の顧問といえばゴツくて厳しくて、なかなか人を誉めない事で有名だったからだ。」

「何かさ、普段怒ってばっかだけどちゃんと見ててくれてんだなって……当たり前だけど、嬉しかった」

「本当に嬉しそうな笑顔の中、瞳だけはどこまでもまっすぐで、揺るぎない。」

「柔道の事を話す時、七緒はいつもこの顔をする。」

「そんな七緒を見るたび、私はいつだって同じくらい幸せな気持ちになれたんだ。」

「だけど、どうしてだろう。」

「やっぱり今日はおかしいみたいだ。」

「よかったね。……七緒、頑張ってるもん」

ちゃんと笑えない。

「……あのさ」

きつと今ものすごく不自然な作り笑いを浮かべているのであろう私を、七緒がじっと見る。

「昨日も言ったけど、やっぱり心都、変」

「ふふん、顔が？」

「だから違っつて」

普段は鈍感なくせに、こういう時だけやけに鋭い人になる。

「人が真剣に聞いてんだからそーいう事言っつな。」

だってこんな冗談でも言わないと私、またさっきの禄朗の時みたいにめっちゃくちな事になりそうな気がする。

「……そっちこそ急に真面目な顔しちゃってさー。やめてよ」

「やめてよっつてお前……」

拗ねたような顔の七緒。

「何か悩みでもあるんだっつたら良い幼馴染みとしては力になってやりたいと思っつたのに」

「……そりゃどーも」

幼馴染み。

何度も聞き慣れた、時には自分で口にしてきた単語が今日はやけに耳につく。

「期末テストの結果が悪かつつたとか……進路の事か？ あ。まさか恋の悩み？ それだつたら俺は経験ないからいいアドバイスできないー……でもっ、とにかく何でも聞くからさ」

昨日も思つた。素直で綺麗すぎる七緒の優しさは、たまにチクリと刺さるんだ。

「……七緒に聞いてもらつてもしよーがないもん」

駄目だ。そう思つた時にはもう、どうしようもなく可愛くない事を言つていた。

「はー？ ひつでえ言い方……まあ、言いづらい事だったらいいけどさ、幼馴染みに今さらそんな気イ使わなくても」

また、チクリ。

あの時七緒の家で切った指の傷が、痛い。

ずっと痛いままだよ。

「幼馴染み幼馴染みって……」

そんな肩書きが、『恋愛相談も聞く』なんて言うのを手伝っているんだったら。

「私」

私は七緒が好きだって事を、ただのありえないもしも話にしてしまっただったら。

だったら、もう、いっそ。

思いきり立ち上がると、椅子は派手な音とともに後ろに倒れた。

「私は、七緒と幼馴染みになんてなりたくなかったよ……！」

完全に力チーンときた顔の七緒が、私を見つめ言い返す。

「あーそうかよ悪かったな生まれた時から一緒に……！ どーも今までご迷惑おかけしましたですよ……！」

「こちらこそですよ！」

双方、怒りで言葉が変。

だけど私はそんな事も気にしていられないくらい真っ白で何も考えられなくて 止まらない。

「七緒なんて……七緒なんて……」

大っ嫌い！ とは絶対に言いたくない自分が悲しい。

「七緒なんて……ツイヴの夜に禄朗といちゃいちゃツイスターゲームでもしてる……！」

「そっちこそ1人物真似ショーでもしてろ!!」
そう言つと七緒は教室をあとにした。ぴしゃーんと思いきり閉めたドアの音がうるさい。

今、私、七緒に何言つた？

「……………」
残された私は、早くも後悔しすぎて愕然。
「……………何やってんのよ、あんたたち」
呆れたような美里の声が、遠くで聞こえる。

私、人生最大に馬鹿な事した。

20&1t・ピンチはチャンスと、かくれんぼ>

こんにちは、杉崎心都です。

あれからもう15年の月日が流れました。

早いもので私も29歳。

今はOLとして会社に勤め、お肌の曲がり角や三十路に怯える日々を過ごす傍ら、夜や休日には物真似芸人としてのお仕事もちょこちょこさせてもらっています。

まだテレビ出演の予定はありませんが、いつか芸人としての収入だけで食べていけるようになりたいです。

七緒とはあの喧嘩以来、全く口をきく事なく別々の高校に進学し、絶縁状態となりました。

終わり方は悲しいけれど、彼に恋をしていた少女時代は私にとってもいい思い出です。

ちなみに今、彼氏はいません。早く結婚したいなー。

あ、上司が私を呼んでいます。

くそつ。お茶くらい自分で煎れろや。

「……っていう夢を見たんだけど!!」

「へー」

美里の反応はととてもドライだった。

「こ、怖くない!? 予知夢とかだったらどうしよう!」

「心都が七緒君に一言ごめんねって言えばいい事でしょー」

……仰る通りです美里さん。

私はがっくりとうなだれた。

もちろんここはオフィスではなく、中学生の青さ溢れる四角い教室。

その教室が1日のうちで最も浮き足立つ、楽しい楽しい昼休みのはずなのに、私は1人この世の終わりのような心情だった。

だって、悔やんでも悔やみきれない。

恋愛相談も聞いちゃるぜーという七緒の過剰な鈍感さが原因の1つとはいえ、心配してくれたのにあんな事言うなんて。

『私は、七緒と幼馴染みになんてなりたくなかったよ……!』

「あ、あアアアアああもうやだ私の馬鹿馬鹿どのツラ下げてあんな血も涙もない事っ」

「その絶望的な顔やめて。ご飯まじくなっちゃうからにつこりと美里。」

「……すんません」

もう食欲がない私は自分のお弁当をつつく気にもなれず、頭を机の上に乗せぐったりと力を抜いた。

さすがに15年は経っていないけど、あの喧嘩以来、七緒と一切言葉を交わしていないのは事実。

教室で目が合っても、お互い「ケツ」てな感じで顔を背ける。謝りたいと思うけど、それでなくとも素直になれない私なのに、あ

んな事を言ってしまった後だからどうしても話し掛けづらい。今までも口喧嘩ならたくさんしたけど、こんなに泥沼を引きずるのは初めてだ。

「でも、もう明後日はクリスマスパーティーねー」

「……………」

美里の言葉に、私はますます突き落とされた。

そう、気がついたらイヴはあと2日後に迫っていたのだ。

「うーわー……………やばいやばいよ美里ー。このままパーティーなんて絶対気まずすぎ……………！ イヴは華ちゃんと禄朗の仲取り持つか偉そうな事言う前に自分が終わってんじゃーん……………」

「っていうか、パーティーもう1人増えるって聞いてないんだけど」
パーティー会場である栗原家の次女・栗原美里さんの鋭い突っ込みが入る。

「え……………あれ、言ってなかったっけ!？」

「ちつとも」

「ご、ごめん……………。吉澤華ちゃんっていう子で……………でもあの、すごい良い子だから絶対みんな好きになると思う。本当に優しいんだ」
だって、妄想して絶叫して転んで鼻血吹いた私に、温かい手を差し伸べてくれたんだよ？

「まあ何人増えようと私は全然構わないわよ。前も言ったけど、人数多い方が楽しいし」

「ありがと美里。……………ああでもマジでどーしよー……………」

私は再び頭を抱え込んだ。

「そんなに悩むなら最初から喧嘩ふっかけなきゃいいのに」

「……………それが出来れば苦労しないもん」

あの日、やたら気持ちが悪くもやもやしていた。禄朗の華ちゃんに対する言葉とか、その前日の七緒の素直すぎる優しさとか、それに対して嘘をついた自分とか、そういうの全部が原因で、眼鏡少年をいじめるガキ大将の如く「畜生むしゃくしゃするぜ!」状態だった。とにかく、全面的に怒りをぶつけてしまった私が悪いのは事実な

わけ。

「……謝りたいよ」

「ん。それが正しい」

と、可愛く微笑みながら私の頭を撫でる美里。夢の中ではそつち系の道に進んで何人ものパパ（血の繋がりはない）に高いバッグやら宝石やらを買ってもらっていたけど、それは本人に言わないでおう。だって怖いもん。

「あのね、心都。実は私のパパがねー」

「パパ!？」

ま、正夢……!!

「ただ駄目だよ美里！ 職業としてなら文句言わないけど14歳はまだ犯罪だよ！ 早まるなっ!!」

「何言ってるの」

げんなりした顔の美里が私を見つめる。

「え、だってパパって」

「正真正銘血縁関係にある私の父親だけど。……心都、あなたの頭の中っていつもそういう考えでいっぱいなの？」

「ちっ違います違います勘違いでした!! お願いだから『友達でいていいのかな』みたいな目で見ないで!!」

「まあ、今のあなたの発言については深く掘り下げないでおくわ」

「……いや、もうホント………すみませんでした」

本日3回目の謝罪。どうして七緒に謝れなくて、美里にはこんなに腰が低いんだ私。きっとこれもこの小悪魔美少女の為せる技なんだろう。

「で、私の『血の繋がったパパ』がねー、ワインに酔うとよくママとの馴れ初め話始めるんだけど、それがいつも喧嘩のエピソードなの。雨降って地固まるっていうの？ 喧嘩して仲直りしたから、もつと絆が深まってラブラブになれたんだってー」

「ラブラブねえ……」

っていうかワイン限定か。美里パパ、ビールとか焼酎じゃ駄目で

すか。

「喧嘩つて最悪の結末にもなりかねないけど、解決の仕方によってはもっと仲良くなれるでしょー。だからよけい話し掛けにくくなる前に心都もちゃんと謝って仲直りして、絆深めちゃえばバッチリじゃない。ピンチはチャンス、よ」

「ピ、ピンチはチャンス……!!」

目から鱗で思わずオウム返し。

ピンチはチャンス。なんて素敵な言葉なんでしょうか。

そうだよ。もともと私が悪いっていうのもあるけど、このままの状態がずるずる続いて引っ込みがつかなくなってしまう前に、早く素直に謝らなくては。

「おっしやああ『ごめん』言ったるぜ!!」

「わぁ勇ましいー。もう少し女らしさを出しつつ頑張れー」

美里がパチパチと手を叩く。

気合い満タン、七緒に声をかけるべく、私は辺りをぐるりと見回した。

が、教室に彼の姿はない。

「……肝心の七緒がいないっていう展開だよ」

禄朗も七緒も、落ち着きがなさすぎだ。自分の所へやって来るお客様への配慮として、願わくば昼休み中なるべく教室に留まっていたほしいものだわ。

「田辺くん」

美里は行動が早い。私がかの中で無茶な要望を唱えている間、もう田辺を呼んでいた。

「なっ何？」

美里のご指名を受け、田辺は興奮気味でやって来る。

「もしかして明後日の事？ あっ、そうそう聞こうと思ってたんだけどさ栗原ンちって結構金持ちなんだろ、だったらやっぱパーティはタキシードとかシルクハットで行くべきなのか!？」

田辺は今日も元気です。

「そうね田辺君がそうしたいなら正装で来てもいいわよ。それより七緒君どこ行ったか知らない？」

「うわぁ。美里さん、また純情な田辺少年を弄んだよ。きっとパーティー当日1人だけバリバリに堅い装いの田辺は、皆の間で浮きまくるだろう（っていうかタキシードとシルクハット持っているんですか）。

「え、東？ 何か微妙な顔して階段上ってったけど……。まあクリスマス前だし、多分あれじゃん？」

「ああ、あれね」

美里と田辺は訳知り顔で頷く。

「あれって……何？」

「どうやら私だけ話を飲み込めていないようだ。」

「あれはあれよ」

「だから、何」

美里が私に笑いかける。

「百聞は一見にしかずって言うじゃない。説明聞くより、とりあえず屋上あたりにでも行ってみれば？」

それを聞いて私は思った。

今日の美里はよく格言を使うなあ、と。

「好きなもの。付き合って下さい」

「……ゴメンナサイ。今そういうつもりはないので」

『あれ』って、これか。

屋上のドアの脇に身を潜め、私は心の中で呟いた。
告白。

寒い寒い屋上で七緒が受けている行為は間違いなくそれだった。

あつちから私の姿が見えない程度に前へ乗り出してみる。

上履きの色から判断するに、相手はまたもや3年生女子。年上からの根強い七緒人気はとどまるところを知らないらしい。

「……どうしても駄目なんだね」

肩までまつすぐ伸びた綺麗な髪を揺らし、その先輩は仔鹿のような上目遣いで言う（七緒と大して身長差はないけれど）。

囁くような声は、こうすれば自分がとても可愛く見える事をよく知っているようだった。なんて最も可愛くない事を考えている、自分が本気で嫌だ。

「……はい。すいません」

心なしか少し擦れた、七緒の声。こうして離れた所から、しかもこっそり見つからないように聞くと、何だかいつもとは違った風に耳に届く事を発見した。

仔鹿先輩は一言、わかった、と言うと足早に去っていく。

当然ドアに隠れていた私のすぐ横を先輩が通る、という事態が起きるわけだけでも。幸い、俯き加減の先輩とは全く目が合わず、見つかる事はなかった。ほっと小さく息を吐く。

先輩がいなくなっても、七緒はぼけーっと屋上に立っていた。

今だ。今、謝らなきゃ。

そう思うのに、やっぱりなかなか踏ん切りがつかない。そういえば七緒とはあんな大喧嘩を引きずるのも初めてなら、当然その後2人きりで真面目に謝るのも初めてだ。だから余計、馬鹿らしいほど緊張する。

ああとにかく早く、素直にごめんって言わなくちゃ。

「……バレバレなんだけど」

と、七緒。

「……へ」

「ほんと、隠れるの下手だよな」

呆れたような顔で、こつちを向く。黒岩先輩の時、私が自分から出てくるまで全く気付かなかった奴が言う台詞ではない。

また1つ場違いな事を思い出す。

昔、かくれんぼが苦手だった頃の話だ。

私はとにかく隠れるのが下手で、必ず1番に見つかっていた。たまに奇跡的に上手く隠れたとしても、鬼が近くに来るとなぜか変に笑ってしまったり、緊張に耐えられず自白してしまったり。

七緒が鬼になると、特に。

私は一度も自分の姿を隠し通せた事がないんだ。

数日ぶりになる七緒との会話は、不自然な敬語から始まった。

「……モテる男はつらいですね」

「……っーか、また覗きっすか」

「ち、違いますよ」

「じゃ何しに来たんすか」

おお。果てしなく仏頂面の七緒の後ろから、黒いオーラのようなものが。やつぱり、というべきか　まだ喧嘩モードだ。私は思わず視線を泳がせる。

「な、何しに来たのかと言うと……ですね……」

謝りに来ました。

こないだはごめん。

ひどい事言っちゃって、ごめんね。

言うんだ自分。

「っ」

「俺、言おうと思ってた事、あるんだ」

やっとの思いで私が発した1文字目は、やけに低めな七緒の声で見事かき消された。

僅かな間、思考が停止する。

あまりに間が悪い私たちに驚いたからではない。七緒の口調がとても真剣で、瞳がまっすぐで。

私は動けない。

「なに……」

自分でも驚く程、動揺した声になる。

七緒は一瞬躊躇うような表情を見せ　それでも口を開きはつきりと言った。

「……もう、やめるから」

やめる。止める？

「……止めるって何？」

「だから 心都、嫌なんだろ。幼馴染みなんだからーとか、幼馴染みなのにーとか言われんの。……俺、そんな全っ然知らなかったんだけど」

少し強めの口調だけど、怒っているのとはどこか違う。

「でも……もう、わかったから だから、色々言うのとか、そーいうのやめるし。……悪かった」

七緒と私の目が、がっちり合う。

わけがわからない。

だって、1番聞きたい『そーいうの』の部分を、七緒は言わないから。

謝るつもりが逆に謝られてしまうなんて。こっちだって言いたい言葉は、たくさんある。そう、あるはずなのに 情けない事に、彼の通常より真剣さ3割増の瞳を前にした私は、完全に頭が白紙になってしまった。思うように口が働かない。

「色々言うのやめるって……『そーいうの』って、どういう……」

そこまで言った時、私の後ろのドアが勢い良く開いた。

「あー東先輩探しました！ こんなとこにいたんですね！」

急に入ってきた坊主頭のがっしりした男子生徒は、七緒を見るなり野太い声をあげた。

「顧問が呼んでましたよ！職員室に来いって」

「わかった、さんきゅ」

どうやら柔道部の後輩らしい。どうりでガタイがいいはずだ。彼が七緒に敬語を使っている姿には軽い違和感すら感じる。

後輩君は、七緒と向かい合う私の姿に気付くと、居心地の悪そうな顔で「お邪魔しました」と呟きそそくさと出て行ってしまった。

……彼、何か激しく誤解している。屋上で思い詰めた顔の男女が2人きり、って確かにそういうシチュエーションではありませんが。

私は、さっきの質問の続きを言おうか迷っていた。

色々言つちのやめる、ってどういう事？

『そーいうの』って何？

そんな曖昧な言い方、嫌だよ。七緒。

と、さっきまでがっちり合っていた視線を、七緒がふいに逸らした。

「…………じゃ。」

そのままドアの向こうに、消える。

七緒の声はいつもと違い、固くて、低くて　心なしか遠かった。

ねえ七緒。

今のはきつと、いつも別れる時に言う『じゃーな』とは違うんでしよう？

本当に、わけがわからない。

わからない、けど。

ただ1つはつきりしているのは、今さっき私自身が七緒に訊ねようとした問いの答え。

大好きな幼馴染みの彼はもう二度と、今まで通り親しげに私に話し掛けるつもりはないのだろう。それも、自分の怒りからではなく、彼なりに私の気持ち考えた上で。さっきの七緒のたどたどしい台詞を訳すれば、『今まで悪うございました。君がそんなに嫌なら、もう二度と関わりません。さよーなら』。

「…………なんだそれ」

なんて、馬鹿馬鹿しい誤解だろう。馬鹿馬鹿しくて、悲しくて、七緒らしい優しすぎる誤解。

「……………あんたの優しさは、痛いんだってば」

空は目に染みるほど青く澄んで、高い。

結局この冬、初雪はまだ降っていない。

ホワイトクリスマスになってほしいなんてぜいたくな事、もう言わない。

だから。

とりあえず、力が抜けてだらしなくへたりこんでしまったこの身体を、立ち上げられるくらいにまで回復させてほしい。

私はしばらくその場から動けなかった。

「心都……心都……。ねえ心都ってば!!」

「……っひ!？」

気が付いたら、目の前にはどどーんと可愛らしい美里のアップ。

私は自分の席にぐったり座っていた。

「……あれえ……？ 私いつの間に教室戻ってきたの……」

私がぼんやりと呟くと、美里は眉をひそめ言った。

「あれえじゃないわよ。昼休み終わる直前にふらーっと帰ってきて、話しかけても反応ないんだもん。怖かったー。何か小さい声で一人ぶつぶつ言ってるし白目だし口半開きだし」

「え」

はつきり言って、全く記憶にない。私、とうとうガタが来てしまったんでしようか。

「じゃあ今……」

「もうとっくに5時間目も6時間目も、帰りのHRまで終わっちゃったわよ。ほんとに覚えてないの!？」

美里が驚いた顔でこっちを見つめる。もともと大きな目がさらに

見開かれ、目力120%アップ。

「あー……覚えてないっていうか……うん、まあ……」

曖昧に頷く。言われてみれば確かに授業を受けた記憶はぼんやりある気がする。でもそれはどこかふわふわしていて現実味がなくて、夢だったんだよと言われれば納得してしまいそうだ。屋上にいたあの瞬間から一気に今に飛ばされた感じがする。

でも、時間がすっ飛んだようなこの感覚は私にとってよかったのかも知れない。だって明日 12月23日は学校が休みだし、少なくとも明後日までは七緒と顔を合わせずにすむから。

すでに教室には遅い帰り支度をしている人がまばらに残っているだけだ。

「……心都、大丈夫？」

心配気な美里の瞳が私を覗き込む。

普段は私の恋について怒濤の勢いでアドバイスをくれる彼女だけど、今は屋上で何があったかを訊ねてこない。

勘が鋭い美里にはきつとバレているんだ。私がちゃんと謝れなかった事、それよりももっと悪いやりとりがあった事。

「……だいじょぶよん。ありがとう美里。これから部活でしょ？料理部は今日ないんだー。私そろそろ帰るわ」

「ん。わかった」

あえて詮索しない美里の気遣いが、素直に嬉しい。きつと今、屋上での七緒とのやりとりを説明させられたら、間違いない、私は途中で泣いてしまうだろう。

「ありがと」

美里にもう1度お礼を言うと、私は学校を出た。

クリスマスイヴまで、あと、3日。

好きな人に絶交宣言される。

こんな正夢いららないのに。

何をすべきなのかもわからなくて、

真っ白な心が押し潰されそうに痛んだ。

22&1t・若気の至りと、恋する女の子>

えっと。

とりあえず落ち着いて考えてみよう。

私の家は、ピクハウス取扱店だったっけ？

「おかえり心都ー」

にっこりと笑うお母様。その周りには果てしなく広がるフリル、花柄、レース、シフォン……。

「ただいま。そして何さ、このお洋服たちは」

何十着ものメルヘン垂れ流しな服が、ただでさえ大して広くない我が家のリビングに、足の踏み場もないくらい散乱している。

「ふふ。衣裳選びよ」

「い、いしょ……？」

「明後日は明美と久しぶりに親友水入らずでクリスマスパーティーでしょ。せっかくだから若い頃の服でやりましょうって事になったのよ」。見て見てこれなんか高校生の時のなのに今も着られるのよ。お母さんもまだまだ捨てたもんじゃないでしょー？」

そう言ってお母さんは綺麗に一回転をきめ、身に着けているピンクと白のふりふりづくしの服を私に360°から見せてくれた。

「ワー。スゴイスゴイー」

「んもう心都つてば、何よそのカンペ棒読みみたいなものの言い方は」

そりゃあ棒読みにもなりますよ39歳。娘として私がもっとしっかりしなくちゃと決心したくもなりますよ39歳。……やばい、変な語尾が癖になりそうだ。

「あ、ちよっと待って。高校時代の服って事は、じゃあ明美さん……」

「ええ。そういう服で来るでしょうねえ」
のほほんと笑うお母さんとは対照的に、私は若干嫌な予感を感じていた。

頭に浮かぶのは、遠い昔、まだ私が幼い頃に明美さんと交わした会話。

ねーねーあけみさん、やんきーってなに？

おお。心都お前、5歳児がそんな単語どこで覚えたよ。

おかあさんがいつてたー。あけみは昔やんきーで、オラオラで、ブイブイで、バリバリだったのよーって。

あいつ余計な事を……。

ねえやんきーってなんなの？

ヤンキーってのは、若気の至りだ！ 青春だ！

ふうん。よくわかんないけどわかったー。

「心都、どうしたのよ急にぼーっとしちゃって。心都がかまってくれないとお母さんつまらないじゃない」

動かなくなつた私の前で、お母さんが拗ねたように頬を膨らませた（……そろそろ年相応の表情つてもんを見せて下さいよ5ヶ月後には40歳）。

明後日、自分の母親の姿を見た七緒は泣いちゃうかもしれないなあ。

そんな事を考えて、ああ奴とは絶交したんだって、とあらためて思い出して また悲しくなった。

……駄目だ。暗くなる。

「……お母さんっ！！」

「はい？」

急に大声で呼ばれびっくりしたらしいお母さんを見つめ、私は言った。

「今日の夕飯、私が作る！」

急な私の申し出に、お母さんが目をぱちくりさせる。けど、やがて「あらあら」と嬉しそうに言つと、満面の笑みで財布と今日の献立のメモを渡してくれた。

「買い物行ってきます！」

そう言つて私は制服を着替えもせずに家を飛び出した。

やっぱり私には、悲しい時の対処法といえは料理しか思いつかないらしい。

世間はすっかりクリスマススムード。

駅前には大きなツリーが飾られ、お店が並ぶメインストリートはイルミネーションできらきらと輝いている。

スーパーの店内でもしきりにクリスマスソングが流れていて、今の私にはなんだか少し居心地悪い。というか、ますますへこむ。一通り買い物が終わる頃には悲しさから抜け出すどころか、どんより気分が増していた。

だって、この間まではあんなに楽しみだったイベントなのに、今はなんていうか、それどころじゃない。クリスマスのみならず、これから先、もう二度と七緒と一緒に笑って過ごせなくなるかもしれないのだ。

「……………そんなのやだ……………」

重いレジ袋を両手に提げ、きらびやかな街を歩きながら、一人呟いた。

数日前にはこんな街で七緒と2人いい雰囲気になる夢を見てにやっていた。なのに、今はどうだ。

何をすればいいのか、わからなくなってしまった。

ただ「ごめん」を言えば全て解決するとも思えない。

14年間、喧嘩なら結構してきたのに。

私は今まで、どうやって七緒と仲直りしてきたんだっけ？

わかんないよ。私、やっぱり馬鹿だからかな、忘れちゃったよ。

七緒。

「……杉崎先輩？」

柔らかい声が聞こえ、私は顔を上げた。いつの間にか俯いたまま立ち止まってしまったらしい（傍から見たらかなり危険な女だ）。

声のした方を振り返ると、華ちゃんがいた。ああやっぱり杉崎先輩だ、と笑ってこちらに駆け寄ってくる。白いダッフルコートにタンチエックのスカートが似合っていて、とても可愛らしい。

「こんにちは」

「こんにちは華ちゃん。久しぶりだね……。……って言っても3日ぶりくらいか」

「そうですね。何か、結構長い間お話してない気がしますけど……」
そこで華ちゃんは私の両手の荷物に視線を止めた。

「お買い物ですか？」

「うん。今日の夕飯に加えてクリスマス用のもんまで頼まれちゃって……重い重い」

袋の中には、ケーキの材料やら飲み物やら、なぜかクッキー（食べる方じゃなく、ヒモ引いてパン、の方）までどっさり。あの母親2人組、どんだけ盛り上がる気だ。

「1つ持ちましようか」

「あ、全然大丈夫だよ。ありがとう」

本当に、なんて優しい娘さんなんでしょう！ と私は心の中で叫び、ひっそり感動した。

「華ちゃんも買い物？」

「あ、いえ、7時から塾があるんです」

「7時って、ずいぶん余裕もって家出たねえ」

辺りは大分暗いけれど、時間はまだ5時を回ったところだ。

そんな暗がりの中でも華ちゃんの頬が僅かに赤いのははっきりわかった。少し緊張しているようにも見える。

「……えっと、塾の前に……禄ちゃんのお家に行こうと思って」「禄郎の?」

「……禄ちゃん、ここ2日くらい学校来てないんです。だからお見舞いに」

えっ、と思わず小さく叫んでしまった。

「来てないの? 風邪とか?」

「よくわかんないんです。クラスも違うし……」

馬鹿は風邪ひかないらしいしねーとか言えないくらい、華ちゃんは本気で心配そうだった。

「……それに、禄ちゃん返事しなかったじゃないですか。杉崎先輩が、クリスマスパーティーの場所を伝えた時」

「あー……」

「だから、今日会ったら禄ちゃんに言ってきます。来れそうだったら来てね、私も行くから、待ってるよ……って」

えへへ、と困ったような照れたような笑いを浮かべ、華ちゃんは言った。

「またウザがられちゃうかもしれないですけど。とりあえずぶつかつてみます」

禄郎、あんたは幸せ者だよ。

「……華ちゃんは、禄郎が大好きなんだね」
優しい瞳で彼女は微笑んだ。

「はい」

大好きな人を好きだと言う。

たとえ本人にはなくても、想いを言葉にする。

それは、とても勇気がある事だ。

「……すごいな華ちゃん」

「えっ」

「そんな良い笑顔ではっきり言えてさ」

またまた華ちゃんの頬が染まる。

「あ、ご、ごめんなさい……っ。私、こんな勝手にべらべら……恥ずかしいですよね……」

「んーん全然。私、うらやましいんだよ」

その素直さとか、可愛らしさとか。私にはかなり切実にうらやましい。

「先輩も好きな人、いるんですね」

また俯き気味になっていた視線を上げ、華ちゃんを見る。

「……私もね、幼馴染みなんだ。偶然な事に」

ものすごく鈍感だけど。

いじめか？ って言いたくなるくらい顔可愛いけど。

私を幼馴染み以上に見る気なんて今は1ミクロンもないんだろうけど。

たまに私1人勝手に悲しくなったりするけど。

「それってもしかして、あの七不思議の……あずま先輩？ ですか」

「えっ！？ なっかな何でわかるの！」

何ですか華ちゃんあなたエスパーですか、可愛い顔して割りとやるってやつですか。私、びっくりしすぎてまた鼻血が出そう（ていうか七緒の奴、『七不思議の東先輩』って微妙な肩書き付いちゃってるし）。

「あ、いえ、初めて会った時禄ちゃんと3人で歩いてましたし、この前も一緒にいたから……」

それに、と華ちゃんは控えめに微笑みながら付け加えた。

「東先輩を見る時の杉崎先輩の顔で、わかつちやいました」

「えっ!?!」

まさかまさかまさか。

「……び、美少女を狙う変態の顔、みたいなの？」

私が恐る恐る訊ねると、華ちゃんは慌てたように首を振った。

「そ、そんなじゃないです。何かすごく、恋する女の子……って感じの」

「え……」

恋する女の子、なんて。

そんな表情が私にも出来ているんだろうか？

「本当に東先輩の事好きなんだなあ……って、わかる顔でした」

「……うん」

うん。そうだ。だって私、七不思議の東先輩が、好きで、好きで。もうどうしようもなく大好きで。

ものすごく鈍感でも、

いじめか？って言いたくなるくらい顔可愛くても、

私を幼馴染み以上に見る気なんて今は1ミクロンもなくても、

たまに私1人勝手に悲しくなったりしても、

たとえ今、人生最大の喧嘩中でも。

「大好きなんだ」

今度はちゃんと笑って言えた。

「……ありがとう！。華ちゃんのおかげでかなり復活しちゃった」

「えっ……そんな、私なんにもしてないです」

真っ赤な顔の前でぶんぶん手を振る華ちゃん。買い物袋をドサリと地面に置き（中には卵も入っていた気がしたけど……うん、気にしない）、私はその手をぎゅっと握った。

「頑張ろうね！」

「……？ はいっ」

「ピンチはチャンス、だ！」

「いい言葉ですね」

禄朗の家へと向かう華ちゃんの背中を見送りながら、私は1人気合いを入れた。

「…………よーし」

私も、いっちょぶづかってみましょうか。

23 & 1 t・聖なる夜と、待ち時間 & g t ;

「いえーいハッピーメリークリスマスアス!!!」
いつでもハイテンションな田辺の掛け声と共に、私は思い切りクラッカーのヒモを引っ張った。

「ばぁぁん、と派手な破裂音。」

美里が「耳痛いー」と笑いながらパチパチ手を叩いた。

本日12月24日。

楽しい楽しいクリスマスパーティーの、始まり。

「……それにしても美里ん家、何回来てもすごいなあ」
リビングを見回して、思わず呟いてしまう。

パーティー会場であるここ栗原家を一言で表すと、とにかく広くて白い。壁も天井も照明も、濁りのない純白。さらに3階建てで庭も広く、庶民中の庶民である私から見ればちょっとした豪邸だ。

「そんな事ないって。普通よ」

「いやあ、ほんとすげえ家だよ。俺やつぱ親父のタキシード借りてきてよかったー」

そう言っただけで田辺は、少し大きめのタキシードの袖を捲った。彼の長所は思い込んだら一直線な所で、それはまた短所でもある気がする。

「わあ。ちょっと心都、これこそすごいじゃない」

唐揚げやらサラダやらと一緒にテーブルの上に置かれた、苺だらけのデコレーションケーキ。それを見た美里が小さく叫んだ。

「すごいおいしそー」

「えへへーどうも。いつになく頑張ったからね」

「で、頑張りすぎてそのクマ?」

「そこは突っ込まないで」

目の下を隠しつつ田辺を睨む。

今日の私はどす黒いクマが最高潮で、聖なる夜に相応しくない顔になってしまっている。

「うぁーその顔でガン飛ばすとマジ殺人鬼じゃん！」

「田辺うるさい。これでもせーいっばい隠してきたのっ」

慣れない化粧品使って色々格闘してみたけど、頑固なクマは消えてくれなかった。珍しく履いてみた、若干お母さん好みのひらひら膝丈スカートも何だか霞んで見える。

「心都」

栗原家特製の唐揚げに夢中な田辺に聞こえないくらいの声で、美里が囁いた。

「はいよ」

「元気になったのね？」

「え」

「おととい屋上から帰ってきた時は死にかけてたじゃない」

「あは。うん、もう大丈夫。ご心配おかけしました。……美里」

「ん？」

美里が可愛らしい上目遣いで、私を見つめる。わお。こりゃ田辺じゃなくても男なら皆イチコロだ。

「私、今日ぶつかってみる」

「もう逃げないって事？」

「おうよ。……ちゃんと話し掛けて、誤解といて　そんでもって、仲直りしたるぜ」

ぐっと固めた私の拳を、美里が小さく叩いた。

「それでこそ心都。頑張って。　ただ、もう少し女の子らしくね？」

「……はい」

美里と目が合う。へら、と私は笑った。

「っていつかさー、なんで俺ら3人なわけ？　東とかいつ来んの？」

と、両手に唐揚げを持ちながら今更な質問をする田辺。

「七緒は部活終わってからで、1年の華ちゃんも塾の後に来てくれ

るんだって。禄朗は」

禄朗の名前が出た途端、田辺の動きがぴたりと止まった。

「そ、そうか……。そついやあの進藤禄朗も来るんだったっけなあ

……………ははっ」

以前『質問に5秒以内で手早く尚且つ解りやすく答えなかった』

ために胸ぐらを掴まれた経験があるらしい彼の目は、果てしなく虚ろだ。

「うーん……禄朗はちょっと来れるか微妙かも。学校休んでたらしいし」

「ああ、そついや進藤、何日か前にまた橋本と派手にやったらしいな」

ぼん、と手を打ちながら田辺が言った。

「言い争い？」

「多分。結構白熱してたみたいだぜ」

「またか……華ちゃん気が気じゃないだろうなあ……………」

荒れる禄朗を見つめる、心配そつな華ちゃんの顔が目に見えぬ。

「俺も気が気じゃねーよ」

「なんで田辺が」

「進藤と喧嘩した後の橋本、すげーピリピリしてんだもん。その機嫌のまま部活来られるとマジ困る」

「あ、そーいえば田辺君バスケット部のね」

おおっと。残酷な一発が田辺にヒット。美里さん、「そーいえばはキツいっす。そして更にその台詞2回目っす。」

タキシード姿の田辺の背中中は、明らかにさつきよりしょぼくれていた。頑張れ田辺。

「……遅いなあ」

壁にかけられた時計（やたらキラキラしている）を見上げ、私は呟いた。

時刻はすでに8時を回っているのに、パーティは相変わらず3人で進行中だ。

すぐ傍ではさっきから田辺が美里に猛烈な勢いで話し掛けている。

「なあなあ栗原はどんなタイプの男が好きなの!？」

「物静かだしつくくない人かな。うるさくてしつこい人は勘弁だわ」

「へー! じゃ俺なんてどう!? かなりオススメ!」

「ふふ面白い冗談!」

もう一度言おう。頑張れ田辺。

私はさっきから玄関が気になって仕方なかった。禄朗は、やっぱり来ないんだろうか。そして七緒も華ちゃんも、もうとっくに着いていておかしくない時間なのに。

「七緒君、遅いわね」

私の気持ちを読んだかのようなタイミングで美里が言う。

「部活7時まででなんでしょ?」

「……うん」

「まだ杉崎との喧嘩引きずってんじゃない? それで拗ねて来ないとかさ。東も結構ガキだからなー」

と、能天気な口調で田辺。

「田辺君、私デリカシーのない人も嫌いだな」

にっこりと言う美里の目は間違いなく笑っていない。だけど私はそんな事も気にしていられないくらい、急に嫌な予感に襲われた。まさか七緒が私のせいで来ないなんて。そんな事あるはずない。うん、絶対ない。

だって約束したんだから。七緒は来てくれるって言ったんだから。

……だけど、それは喧嘩する前の事だ。

考えれば考えるほど、不安が膨れ上がる。

「……私、ちよつと外見てくる」

美里と田辺にそう言い残し、私は家を出た。

もちろん私が栗原家の前でつつ立っているからって、七緒が来るか来ないかに影響が出るわけじゃないけど。ただ、いてもたってもいられなかつたんだ。

外はもう真つ暗でびっくりするくらい星がよく見えた。空気が澄んでいて、気持ち良い。

天体観測しながら好きな人を待つってのもなかなか素敵じゃないですか。そんな事を考えて、不安なはずなのになぜか1人笑ってしまった。

けど、笑いが冷めた頃には、また何とも言えない寂しさがやってくる。

立派な門に寄り掛かり、自分の吐き出した白い息が暗闇に立ち上っていくのをぼんやり眺める。

「……早く来いよー七ちゃん……」
と、呟いたその時だった。

少し先の曲がり角から、こちらに向かって誰かが走ってくるのが見えた。

「……え！」

まさかまさか。こんなドラマのヒーローみたいなタイミングで現れるなんて、嘘でしょ？ やばいよ私、ときめいちまうよ？ 七緒！

いや違つ。

走っていたその人は私の目の前で止まり、驚いたようにこちらを見る。

「……………っ」

そこにいたのは、今にも溢れそうな涙を瞳に溜めた華ちゃんだっ
た。

「華ちゃん……！？」

「す、杉崎せんぱい……」

ちよつと見てわかるくらい、華ちゃんは動揺していた。いつもの
柔らかい癒し系オーラは少しもない。

「何、ど、どうしたの!」

「せ、先輩…… 禄ちゃんが……っ」

「禄郎が?」

「禄ちゃんが、いなくなっちゃったんです……!」

本日12月24日、恋人たちのクリスマスイヴ。

だつてのに。

一体どこまで華ちゃんに心配かけたら気が済むんだ、あの馬鹿。

「いなくなっちゃったって……どういう事？ 禄朗、今日はちゃんと学校来てたの？」

華ちゃんは泣きだしそんな瞳をこっちに向けた。

「はい。学校には来てて……でもそれ以来家に帰ってきてないみたいなんです。禄ちゃんと同じクラスの子に聞いたら、禄ちゃん今日終業式の後にまた橋本先生と喧嘩して、教室出てっっちゃったらしくて」

「え……じゃ、橋本と喧嘩して学校飛び出して、それ以来行方不明って事？」

こくり、と頷く華ちゃん。

「あの超大馬鹿野郎……」

思わず呟いてから気が付いた。よく見れば華ちゃん、制服姿だ。

「華ちゃんもしかして、学校終わってから今までずーっと捜し回ってたの？」

えっ、と小さく声をあげ、華ちゃんは辺りをきよるきよる見回した。

「あ、あれ？ もうこんなに真っ暗……。私、全然時間の感覚とかなくなってました……。なんか、夢中で走ってて何も考えられなくて

……。わあ、初めて塾サボっちゃいました……」

そう言っつて、やっと少し笑った。泣きだしそんな笑顔だったけど、とにかく、笑った。

「おとといお見舞いに行った時はどうだった？」

「具合悪くて休んでたわけじゃなさそうなんですけど……なんか元気なくて、ちょっと怒ってるような感じで、もう来るなって言われちゃいました」

「……そっか」

「あ、でも……っ 禄ちゃん約束してくれたんです」

僅かに、華ちゃん表情が明るくなる。

「クリスマスパーティー、来てくれるって。最初、私も行くって言ったらやっぱり不機嫌な顔されちゃったんですけど……来てねって100回くらい言ったら最後は渋々頷いてくれました」

「ひゃ、100回？」

普段の華ちゃんからは考えられないくらいの押しの強さだ。自分の言葉通り、華ちゃんは頑張って『ぶつかった』んだ。

「 だけど、どこ捜してもいないんです……禄ちゃん」
誰に言うでもなく華ちゃんは小さく呟く。

「私との約束なんか、忘れちゃったのかなあ……」

「忘れてないよ」

考えるより先に、私は華ちゃんの目を見つめきっぱり言っていた。

「え……」

「華ちゃんとの約束、忘れてないと思うよ。忘れてないけど、きっと禄朗なりに色々あるんだろうね。私も手伝うから、捜そう？」

華ちゃんが頷く。その瞳は潤んでいたけど、涙をこぼす事はなかった。強い子なんだ、と思う。

華ちゃんと一度別れ、それぞれ逆方向を捜す事にした。見つかったも見つからなくても、1時間後にはまた栗原家の前で会う約束だ。
「ろくろ　　！！」

走りながら大声を張り上げる。この辺りは静かな住宅街だ。どこの家でもクリスマスイヴの団欒中なんだろう、外を歩いている人は

ほとんどいない。

「ろくろお　！どこ行ったんだよ馬鹿　！！」

確実にご近所迷惑だろうけど、まあしょうがない。

しばらく走り回ったところで、美里と田辺にも協力を頼めばよかった、と気付き後悔した。電話しようにも、七緒を待つて外にいた状態のまま来てしまったので鞆も携帯電話も持つていない。栗原家に戻るのも時間がもつたない気がして、とりあえず走って捜し続けた。

もし見つからなかったら、どうしよう。

嫌な考えが頭をかすめて、それを振り払うように更に走った。

見つからなかったら、は考えない事にしよう。

絶対見つかる。うん。

絶対、絶対、あと少ししたらひょっこり出てくるって。

「ろくろ　！！出てこ　いッ！！」

その時。

すぐ傍の角からヌツと不気味な人影が。

「ぎゃあああ！！」

「うお！？」

あまりの驚きに、頭を抱えてへたりこんでしまう。

痴漢・変態・誘拐犯……色々な良くない単語が瞬時に浮かび上がる。

が、しかし。

「……………心都？」

頭上から聞こえる声は、あまりにも聞き覚えがありすぎて、愛しい。

ゆっくりと顔をあげる。

「七緒……………」

ジャージにぐしゃぐしゃの髪の毛、いかにも部活直後な格好の幼馴染みが、そこにいた。

うわ。なんか……………どうしよう。見慣れたはずの姿が、切ないくら

い懐かしい。

「ど、どうしたの七緒……」

声が震える。駄目だ、私、かなり間抜け。

「悪い、部活の時間延びちゃってさ。これでもダッシュで来たんだ。今ちようど栗原ン家向かうとこ」

温かい想いが少しずつ胸に広がる。

来てくれた。

七緒、やっぱり約束守ってくれたね。

一瞬でも疑って、ごめん。

そして。

「……ありがとうございます」

「え？何が」

「いやいや独り言」

「老化現象じゃん？」

「……うるさいよ」

喧嘩して絶交中のはずなのに、突然の私の出現に驚いたのか、七緒はいつもと変わらない口調だ。それが嬉しすぎて、辺りを照らしよぼい外灯がまるでスポットライトみたいに思えてきた。……やっぱり私は病気です。

「心都はこんなとこで何ランニングしてんだよ。今パーティ中じゃないの？」

そこでハツと気付く。

そうだ、浸っている場合じゃない。

「ろ、禄郎が行方不明なの……！」

「え？」

七緒は驚いて目を見開いた。

「家にいないしパーティにもまだ来てなくて……今華ちゃんと捜してるんだけど」

「つか華ちゃんて誰？」

そういえば七緒と華ちゃん、まだご対面していないんだった。華

ちゃんと出会った事を伝える暇もないまま、大喧嘩になってしまったから。

「吉澤華ちゃんっていう禄朗の幼馴染みの子。華ちゃんも今日のパーティー参加メンバーだよ」

「そーなんだ」

「私も最近知り合っただけどさー、すごい良い子なの。控えめで優しく可愛くてね、ホント妹にしたいって感じで……………ってこんなほほんと喋ってる場合じゃなくてっ！だから、とにかく禄朗探さなきゃ！」

「うわノリツツコミか」

「ああもう、そんな事どーでもいいじゃん！七緒も手伝ってよ！」

「ごめん、禄朗。今、一瞬あんたが行方不明って事を忘れていた。

だって、なんだか普通に七緒と会話できているのが信じられなくて　こんな状況なのに、すごく嬉しかったんだ（私、最悪）。

とりあえずいまいち事態を掴みきれていない七緒を巻き込み、イヴの夜の禄朗大搜索は再開された。

何があつたか知らないけど。禄朗。

出てこなかつたら本当に怒るからね。

あんた馬鹿で狂暴だけど、約束は守るじゃない。

信じてくれた子を悲しませちゃ、駄目だよ。

華ちゃんは、栗原家の前で俯き加減に立っていた。

「華ちゃん、どうだった？」

私が問い掛けると、彼女はゆっくり顔を上げた。

その表情を見れば、搜索の結果は一目瞭然だ。

「駄目でした。碌ちゃん……どこにもいなかったです」

「……そっか。私も見つかなかったよ」

その時、別方向を捜していた七緒が到着した。

「こっちの方にはいなかった」

息を切らしながら言う七緒の視線が、私の隣の華ちゃんに止まる。

「あー……えっと『華ちゃん』？」

「え、あつ、はい。初めまして、吉澤華です。東七緒先輩……です

よね？」

「おおよくご存じで」

初対面の子が自分のフルネームを知っていた事に、七緒は少し驚いていた（1年生はともかく先輩方（主に女子）の間ではあんたの名前、誕生日、星座、血液型その他諸々の情報が流れまくってるっつーの。気付け鈍感）。

「はい、あの七不思議の東先輩ですよ。知ってます」

と、無邪気に華ちゃん。それを聞いた七緒は、

「……………うん」

うわっ、テンションが落ち。

無理もない。彼にとって自分が七不思議のネタにされている事はとてつもなく不本意なのだ。まあ確かに『可愛い』って言われて喜べるわけないか。

ちよっぴりデリケートなお年頃（？）の七緒君、完全に落ち込み遠い目でブツブツ呟き始めた。

「……………どうせ女顔っすよ……………あーあ背伸ばしてえ……………」

いや、あなたの美少女っぷりは身長どうのこつので解決出来るもんじゃないだろ。

地雷を踏んでしまった華ちゃんはオロオロしながら七緒と私の顔を見比べる。

「えっ……え！？ すいません！わわ私、何か悪い事言っ……」

「気にしないで華ちゃん。そんな事より今は禄朗だよ」

「そんな事ってオイ！！」

心なしか若干涙目で突っ込んできた七緒だけど、それでもしばらくするとやっつと冷静さを取り戻したようだ。わざとらしい咳払いの後華ちゃんに向き直った。

「……えーと……じゃ……華ちゃん、とりあえず話は心都から聞いたから、俺も禄朗捜し手伝うわ」

「あ、ありがとうございます……！」

華ちゃんが勢い良く頭を下げる。

「なんで禄朗は今日学校飛び出してたのか知ってる？ 橋本との喧嘩なんて日常茶飯事なんだろ」

「それがわかんないんです……どうして今日に限ってこんな事になっちゃったのか」

「多分だけど、何かすっごいムカつく事言われたんだろうね。で、今まで以上にブチ切れちゃったとか」

私が言うと、華ちゃんはますます心配そうに瞳を曇らせた。

ふと、気になった事を聞いてみる。

「禄朗の親御さん達は、今どうしてるの？ 心配して捜したり……？」

「あ、いえ……禄ちゃんのお父さんとお母さん、なんていうか……結構昔から放任主義みたいな感じで……私が今日家に行った時も、放つとけば帰ってくるから、って言われて」

なら、今のところは『警察呼んでー！』とか大騒ぎになるって事はなさそうだ。

「……でも、放つとけって言われてもさ……やっぱ心配だよなあ……」

……」

深刻な声で、七緒が呟く。重苦しい沈黙が辺りを包んだ。禄朗、本当に、どこにいるのよ。

もしこのまま出てこなかったらね、言っとくけどあんた、華ちゃんだけじゃなく……私だって、七緒だって、泣くよ？ 馬鹿。拳をぎゅつと握り締める。

頭の中を走馬灯のように駆け巡るのは、出会ってから今までの禄朗との思い出。

『ボサボサをボサボサって呼んで何がいけねんだよ……！』

……。

『うつせえよボサボサ……！』

……。

『黙ってるボサボサ……！』

……あれえ？ 何だか思い出せば思い出すほど腹立ってきた。シリアスなシーンのはずなのに。おかしいな。

隣を見ると、七緒が微妙な顔してうなだれていた。きつと初めて会った時熱烈な求愛を受けた事を思い出したんだろう。

「とりあえず……これからどうしよう？ あっちの方の道まだ捜してないし もう少し見回ってみて駄目だったら禄朗の家に行つて、最悪警察に……」

と、栗原家より数メートル先の、暗闇に紛れて見えづらくなっている細い道を私が指差した瞬間、

「あ………！」

華ちゃんが短く叫んだ。

「何何どしたの華ちゃん」

小動物みたいにくりつとした華ちゃんの瞳は、さらに真ん丸になった。

「あの、あそこの細い道の先に……もしかして公園あたりしませ

んか？ っていつかありますよね……！？」

珍しく迫るような勢いで話す彼女に圧されながら、私は頭の中で地図を浮かべる。

「あー、うん。公園あるある。それがどうしたの？」

「……昔、よく祿ちゃんとそこに来てたような気が……」

可愛らしく口元に手を添え、華ちゃんは言った。

「え、マジで！？」

「は、はい……周りの風景とか変わっちゃってて最初気付かなかつたんですけど……多分」

この暗い中でもわかるほど、華ちゃんの頬はまたまたほんのり桜色に染まっていた。

つまりそこは、まだ祿朗が今みたいにとんがり始める前に2人で仲良く遊んだ公園　華ちゃんにとってスウィートメモリー的な場所なのだ。

私も思わず胸がきゅーんとしてしまう。が、

「いやー……もしそこに祿朗がいたりしたらさ、何かすっげえドラマチックだよなあ」

この雰囲気とは明らかに不釣合な、呑気でアホっぽい声で七緒が言った。

だから、少しはムードとか考えろって鈍感。

いた。

華ちゃん思い出の公園へ辿り着くと、七緒曰く「すっげえドラマチック」な展開が待っていた。

禄朗だ。

間違いなく、どう見ても、制服のままの禄朗だ。

割りと広めの公園の隅にはちゃんとベンチが置かれているのに、禄朗は砂でざらついた地面に片膝を立てて座り、滑り台の柱に背中をつけていた。入り口には背を向けている。

いやあ結構近い所にいたもんだな、と私は人知れずホッと溜め息をついた。

「……禄ちゃん……」

華ちゃんが緊張した声で呼び掛けた。

禄朗が、振り向く。驚いた顔をしていた。

「……は……？　なんでここに……」

「なんでじゃないよ……。禄ちゃん急にいなくなっちゃうから、心配したんだよ？　先輩たちにも捜すの手伝ってもらって……」

禄朗が黙って立ち上がる。私を見て「なんでボサボサまで……」

みたいな顔をして（悪かったな畜生）、唯一七緒にはバツが悪そうに軽く頭を下げた。

そして再びこちらに背を向ける。

「……」

「禄ちゃん、なんでいなくなったりしたの……？」

「……うっせえな……。お前に関係ねえって何回も言ってる」

表情が見えないまま禄朗は低い声で吐き捨てた。

と、その時、周りの空気が変わった。いや、正確に言うと　華

ちゃんの周りの空気が。

「……何よ、それ」

伏せられていた彼女の顔が突如、鋭く禄朗を見上げた。

そして次の瞬間、

「禄ちゃんのバカ　　ッ！！」

華ちゃんのものとは思えないような大声が、公園に響き渡った。

「バカ！ おたんこなす！ ツンツン頭ー！！」

……普段おとなしい子ほどキレると豹変するといっけねど。

うん。華ちゃん、変わりすぎです。

26&17:2人の本音と、男の勘ってやつ>

それは、そんなに難しい事なの？

「バカバカバカ　　！！」

怒鳴られた禄朗本人はもちろん、私も七緒も驚いて目をむいた。だって今までの華ちゃんといえはおとなしくて可愛らしくて、何というか、ああもう守ってあげたい！　ってイメージだったから。

「関係ないとか、放つとけとか……　っそんな事言わないでよ！」
周りの戸惑いを全く気にもとめず、涙を堪えながら必死に叫ぶ華ちゃん。

対して、いつもの威嚇顔はどこへやら、ぼかんとした間抜け面の禄朗。

「は、華？　いきなり何キレて……」

「うるさい禄ちゃんのバカア！」

「……すみません」

おお。華ちゃん無敵か？

なんだか口を挟む雰囲気でない事を察した私と七緒は、黙って2人を見守った。

「私は、禄ちゃんと関係なくなるとなりたくない！　勝手かもしれないけど、心配だし、もっと禄ちゃんの力になりたいし、何かあつ

たら助けたいし……」

禄朗を見つめる華ちゃんの瞳の飽和量は、もう限界に達していた。「また昔みたいに仲良くしたいよ……!!」

ずっと心の中にあつた、華ちゃんの本音。

それとともに、1雫、涙が零れる。

何か吹っ切れてしまったのだろう。それから堰を切ったように、華ちゃんの瞳からは涙が溢れた。

「……だから、無理なんだよ」

禄朗が小さく言う。精一杯いつものような鋭い目付きを作ろうとしているらしい彼の表情は、明らかに不自然で、どこか悲しげだ。

「何が無理なのよ禄ちゃんのバカー！」

ぶち。

「黙って聞いてりゃ……何回バカバカ言えば気が済むんだよ！」

あ、禄朗もキレた。ちなみに華ちゃん、今までに7回「バカ」とおっしゃっています。

さっきまでのシリアスな雰囲気とは一変、キレキャラと化した幼馴染み2人の怒鳴り合いが始まってしまった。

「だって禄ちゃんバカなんだもん！」

「……つバカはお前だろ!? さっきからふざけた事ばつか言ってるじゃねえよ!!」

「何もふざけてないよ! 私全部本気で言ってるよ!」

「それがバカだつってんだよ!!」

「バカじゃないもん!」

「バカだろ!!」

「バカじゃないもん!!」

ここで2人、ぜえぜえと肩で息をし、ちよつとブレイク。やっぱり間髪を入れずの怒鳴り合いは疲れるようだ。

「……そろそろ仲裁に入った方がいいのかなあ」

完全に部外者な私は、同じく部外者的ポジションのお隣さんに小

声で訊ねる。

「いいんじゃない？ 余計な口挟まないで温かく見守ってれば。 2人で解決すんだろ」

と、呑気な口調で七緒。

「やけに楽観的だねー」

「あの2人なら大丈夫だよ」

……何故わかる？ というか何故そんなに自信満々？

そんな訝しげな顔で七緒を見ると、彼はフツと笑って付け加えた。
「ま、男の勘ってやつ？」

「……………」

「……………」

「ごめん、よく聞こえなかった」

「……………じゃあいいです」

七緒は自分の発言を後悔するかのようにつなだれた。 いやあ、本当はばつちり聞こえていましたけど。 どう突っ込んでいいものか判断し兼ねましたので。

いつのまにかあつちの2人の言い合いが再開していた。

「オレと仲良くしたいとか……………その考えがバカなんだよ！」

禄朗は華ちゃんを見据え、さつきより少し感情を抑えた声で言った。
「だつて、本当の事だもん！」

「オレと一緒にいたっていい事なんかねえんだよ」

突き放したような言い方だった。 一瞬、華ちゃん表情が固まる。
「何それ」

少し視線を落とした禄朗は、顔を歪め、低い声で言った。

「……………オレみたいな素行不良でキレやすくて頭悪い奴といたら周りも悪くなるだけなんだよ。 だから一緒にいたら得な事なんか1個もねえんだつてよ」

「……………それ、橋本先生に言われたの？」

「あんな奴関係ねえよ」

橋本の名前を出すと、禄朗の顔がますます歪んだ。明らかに「関係ねえ」わけないだろう。確かに橋本が言いそうな台詞だ。

「そんな……」

「だから、オレとまた仲良くしたいとか、バカな事言つなよ。……お前が損するだけなんだし」

禄朗の言葉はやけに響いて、心に残った。

「……何それ」

華ちゃんが目を伏せ、再び言う。

「バカだよ禄ちゃん。そんな事言われて気にして……」

「まだバカって言……」

「だって本当バカなんだもん！」

禄朗の言葉を遮り、華ちゃんは顔を上げた。

瞳は涙でいっぱい。そしてとても怒った顔をしていた。

「損とか得とか、私はそんな事考えて禄ちゃんと仲良くしたいって言ったんじゃないもん！ただ、『禄ちゃん』と一緒にいたいって思ったの！！……なのに、そんな周りの事とか気にしてさあ……」

華ちゃんの小さな肩が僅かに震えている。

「……っ禄ちゃんのバカ！！」

本日13回目の『バカ』。

それだけ叫ぶと、華ちゃんは制服のスカートを翻して走っていつてしまった。

「あ、華ちゃ……」

私は追い掛けようと体勢を作ったけれど、あつというまにその姿は見えなくなってしまう。小さく華奢な見た目からはとても想像できない速さだ。

公園に残ったのは、不機嫌な表情の禄朗と、呆れるくらい呑気な七緒と、意味のなかったクラウチングスタートの姿勢のままの私。

「……禄朗、あんた今日橋本にそれ言われてキレたんだ」

「……………」

黙り込む禄朗は相変わらず不機嫌そうなのに、やっぱりどこか悲しげで。なんだか私まで泣きそうになってしまった。

「だからって華ちゃんにあんな事言わなくても……」

「あいつ、優等生なんだよな」

禄朗が呟く。

「成績良くて、なんか先生とか周りからも評判いいみたいで。このままいけば学校生活順風満帆ってやつ」

「だから、と禄朗は続けた。

「オレなんかといたら駄目だろ」

ああ、何となくわかってきた。

つまりこれは、禄朗なりの優しさ　なのかな。

華ちゃんの言うように本当バカだけど。でも、きっと奴なりの誠意なんだと思う。

「…………いや、何となくわかってたけど、やっぱり直接言われるとムカついたな。橋本の奴、オレが華とか七緒先輩と関わりある事ちゃんと知ってて　『お前は、同級生や先輩や周りの人間まで落ちぶれさせる気か?』だってよ」

はは、と面白くなさそうに禄朗が笑う。

「なんかその瞬間もう…………全部どーでもよくなってさ。ああオレは周りを駄目にする人間なんだ、って実感した。こいつ殺すぐらいにボコボコにしてその後はおとなしく捕まろうかなと思ったけど」

「でも殴らなかつたんだ」

「七緒先輩との約束破るわけにいかねえだろ」

禄朗は七緒の方に向き直り、改めて謝った。

「…………七緒先輩、迷惑かけてすみませんでした」

「俺は別に平気なんだけど」

七緒は真面目な顔でしばらく何か考え、やがて言った。

「禄朗の気持ちは、どうなわけ?」

「…………オレの、スか」

「華ちゃんは、ごちゃごちゃした事とか一切関係なく、ただ、また仲良くしたいんだって言ったじゃん。お前は、相手の損得考えてわざと突き放して、悲しくならない？」

「……でも華だけじゃないっすよ。橋本の奴、『2年の東とも最近つるんで、何か悪い道に引きずり込んでるんじゃないだろうな』って七緒先輩の事まで言ってたんす。……オレの周りにいると皆悪い目で見られます」

そう言うつと禄朗は俯いた。拳を握り締め、何かを堪えるような表情だった。

「……………」

沈黙の中、七緒は可愛らしい顔を少ししかめ、一言。

「お前……めんどくせーな」

「え」

「俺は別にそんな事気にしないし、華ちゃんだってそう言ってるじゃん。な」

そう言うつて七緒は私の方を見た。急に発言権が来て少し驚いたけれど、私も正直に言う事にする。

「あ、当たり前じゃん！ 私だってそんな事気にしないよ」
目を丸くする禄朗と視線を合わせる。

「確かにあんたとはあんまり仲良しこよしじゃないし、ム力つく事いっぱい言われて本当何回も心の中で呪ったけど！ ……でも、そんな周りの評価気にして離れるほど小さい人間じゃないし。……バカにするなよバカッ」

「……なんだそれ」

この数十分で14回もバカと言われた禄朗は、力のない声で反論した。

「気にしてんのお前だけじゃん、禄朗」

キラキララインとさわやかな効果音が付きそうなほどに完璧な美少女スマイルで、七緒が言う。

「1人でめんどくさい考え方すんなよ」

禄朗が、戸惑い気味に七緒を見遣る。

そして。

「……………はい」

禄朗は頷いた。

いつもの怒声とは全く違つ、呟くような声だったけれど。とにかく、頷いた。

それは、思ったとおりずっと簡単な事なんだよ。

27 & 17 : 彼の気持ちと、彼女の気持ち & get ;

「禄朗と華ちゃん、大丈夫かなあー……」

「大丈夫だろ」

「また男の勘ってやつですか」

「まあそーいう事にしといてください」

その勘を何か別の時にも発揮してくれないかなーと思ってしまっ、片想い歴4年の私。

数分前。七緒に促され、禄朗は華ちゃんを迎えに行った。ちゃんとして自分の思ってる事伝えてこいよ、という七緒の言葉に、禄朗は至極あっさりと言いた。きつと、彼の中で何か確実な変化があったんだと思う。

ちよつと嬉しくなつて微笑みながら禄朗を見ていたら案の定「ニヤニヤしてんじゃねーよ」ってガン飛ばされましたけどね。……私に対しての態度は本当に相変わらずだな。

そんなわけで今、私と七緒はこの公園の隅にあるベンチに座り、2人の帰りを待っているのだった。

「……やっぱり私たちも一緒に行つて捜した方がよかつたんじゃ……」

「うわ出たーお節介おばさん」

ほざく七緒をとりあえず睨んで黙らせてから、公園の真ん中に立つ背の高い時計台に目をやる（何度も言うけど私がおばさんならあんたはおじさんだつての。ていうかつら若き女子中学生におばさんとか言うな）。

時刻は9時半を回っていた。真つ暗な周りを見ると、どんな心配が増してくる。

「何で今日はやけに呑気なのよ」

そう問い掛けると、七緒は何ともなしに答えた。

「あの2人、言いたい事言い合ってたじゃん」

「うん」

「まあ途中からお互いキレて怒鳴り合ってたけど。とりあえず本音言ってたから、余計な仲裁入らなくても大丈夫だと思ったんだよ」

「……へー」

少し、感心。ただ呑気なのかと思つたら、意外とそういう事考えているんだ。全然男の勘じゃないじゃん、やっぱりかっこつけてただけかい、というツツコミはそつと胸にしまっておいてあげよう。

「だからしばらくしたら2人で帰ってくるって」

「……だね」

おばさんの出る幕じゃない事を理解した私は、おとなしく待つ事にした。

「…………」

「…………」

なんとなく、沈黙。

七緒はジャージで寒くないのかなーとか、すっかり忘れていたけど美里と田辺どうしてんだろーとか色々余計な事を考えた後、私は決心した。

今、かな。

禄朗と華ちゃんが帰ってくる前に、私もやっておかなきゃいけない事がある。

息を思い切り吸い込んで、私は言った。

「……「ごめん」」

ハモった。誰とって、私が謝らなくてはいけない張本人、

他ならぬ七緒とだ。

「えっ……え？　なんで七緒が謝るの？」

「そっちこそなんで急に謝ってんの」

と、きよとん顔の七緒。

なんだか禄朗疾走のドタバタでいつの間にもやら普通に会話していた私たちだけど、数日前の大喧嘩で絶交状態になっていたはずだ。そして私が一方的に悪いその喧嘩の後、まだちゃんとした仲直りをしていなかった。

だからずつと言いたかった「ごめん」を、今やつと口に出せたと思ったのに。まさかここで七緒と見事に八毛るとは。

……うん。この際、七緒の謝罪理由は後回しだ。

今は自分が伝えたい事をちゃんと伝えよう。

「……あのね、七緒」

「うん」

真面目な顔になった七緒がこつちを見る。ベンチで隣に座っているのかかなりの至近距離という事になるけど、ドキドキしている暇はない。

「こないだ喧嘩の時に言った事、あれ……嘘です」

「……幼馴染みになんかなりたくなかったぜ畜生ー！　つてやつ？」

こくり、と私は頷いた（若干台詞が誇張されている事には目を瞑った）。

全然女の子として見てもらえないこのポジションをたまに恨みたくなる時もある。

でも。

嫌なのかって聞かれれば　やっぱり、絶対、違うんだ。

「あの時、私ちよつと機嫌悪かったの。だから八つ当たりって言うか……全然心にもないひどい事言っちゃって、本当最低だった。：

……だから、ごめん」

頭を下げる。

膝の上の握り拳に少しだけ力が入る。

確かに、私は幼馴染みではない意味で七緒が『好き』で『大切』だよ。

でもね、幼馴染みとしての七緒も同じくらい『好き』で『大切』なんだ。

もちろんここまででは本人に言えないけれど。

「……………」

あまりの反応のなさに怖くなって、恐る恐る顔を上げる。

と、そこにはボケーンとした表情の七緒がいた。

「えええ……………？ 何その顔……………」

我に返った七緒は慌てて私に向き直る。

「いや、何か氣イ抜けちゃって……………。なんだーあれ嘘かよ……………」

深く深く溜め息を吐き、七緒はぐったり下を向いた。

「…………あの時けっこーシヨックだったんですよね」

「…………うん、ごめんなさい」

私だって、もし立場が逆で七緒にあんな事言われていたらきつと立ち直れなかったと思う。

「でも、あれが嘘だったって事は…………俺が謝る理由もなくなるかも」

「え」

今度は私がきよとんとする番だ。

「…………うーん…………いや、やっぱり謝んなきゃいけないな。結果的に約束守れなかったんだし」

「約束…………？」

ますますわけがわからない。だって、七緒はちゃんと約束を守ってパーティに来てくれた。謝られる理由なんて一つもないはずなのに。

「…………俺さ、喧嘩してしばらく経った後、屋上で絶交宣言したじゃん」

「うん」

「あの時、心都がそんなに俺と関わるの嫌ならもうこっちから離れ

ようつて本気で思ったんだけど」

七緒の優しさは十分知っている。たとえこっちの胸が少し痛んだとしてもそれは全て相手を思っている行動で、そういうのが奴の恋愛面での的外れっぷりに繋がっている事も、嫌になるくらいわかってる。だから七緒は幼馴染みとしてはいい奴だけど、恋愛対象には向いていないんだろうな、と思うんだ。

と、ここまで考えて気付いた。

七緒と禄朗つて、少し似ているかも。

相手の事を考えて、でもそれは若干正解と外れている所とか。悪気がなくても相手をちよつと切なくさせてしまう所とか。……わお、意外な発見。

七緒は小さな子供みたいにくしゃぐしゃと頭をいじりながら宙を仰いだ。

「……でも無理だったなー」

「何が？」

「さつきから俺たち、もうこうやって普通に喋ってんじゃん」

「それは禄朗の事とかで喧嘩引きずってる場合じゃなかったから」

「違つよ、それ以前に……俺やつぱり駄目だ」

だから、何がよ。

そう訊ねようと口を開きかけた私。だけど次の瞬間、間抜けにも全身が固まって動かなくなってしまった。

原因は単純。あの大喧嘩以来、本当に久しぶりに私へ向けられた七緒の笑顔。

今更こんな事を言うのも恥ずかしいけれど 少し困ったように

笑う七緒は、なんというか、つまり、正直なところ ありえないくらい可愛かったのです。

「やつぱり心都いないと調子狂つわ」

「……え」

その目を疑うほど可愛らしい笑顔で、七緒は言う。

「さつき久しぶりに心都と喋った時、思った。俺約束守れそうにね

えな、つて。心都と一生絶交とか、正直……無理」

……ああ、もう、こいつは。

私を殺す気なんでしょうか？

もちろん七緒の屈託ない笑顔を見れば、この言葉は『女の子』ではなく『幼馴染み』としての私に対してのものだって事くらいすぐにわかる。

でもやっぱり、私は単純だから。

どうしよう。めっちゃめっちゃ嬉しい。

「……それで絶交の約束守れなくてごめん、つて事？」

「そう」

なんだか七緒らしいなあ、と思わず吹き出してしまふ。

「うわ笑った」

「ごめんごめん」

すね始めた七緒に手を合わせ、私はちよつと深くベンチに座り直した。

「……うん。私も無理だなー。七緒と『絶交』してた何日かの間、めっちゃくちや寂しかったし」

「……自分から喧嘩ふっかけたのに」

と、口の端を上げて七緒。幼馴染みが、少しだけ大人びて見える表情だった。

七ちゃんも、変わるんだよね。

「……私、七ちゃんと幼馴染みでよかった！ と思ってる！ ……
のですヨ！ 本当に！」

私は、公園の静かな冷気がびりびりと震えるくらいの声で言った。「わ。急にでかい声出すからびっくりしたー。しかもなんかカタコトだし。つか七ちゃんて呼ぶな。んでもってこの手は何」

一通り突っ込みを終えた七緒は、目の前にずいっと出された私の右手を指差した。

「……いや。仲直りの……握手？」

だんだんと声が小さくなっていくのが自分でもわかる。

仲直りの握手　これ、口に出すと結構恥ずかしいもんだ。

七緒はきよとんとした顔で私を見ていたけれど、やがて今の言葉を飲み込んだらしく「あー」と頷き、

「なんで疑問系だよ」

呆れたように笑いながら手を握り返してくれた。

「はい仲直りー14年の幼馴染み復活ー」

ふざけたように言う七緒。その手はさらりと冷たくて、私よりほんの少し大きいような気がした。

幼馴染みの七ちゃんも、変わるんだよね。

きつと、昔のままじゃいられない時が来る。

でも今なら自信持って、「大丈夫！」って言えるんだ。

だって好きなんだもん。

大好きなんだもん。

理由なんてそれだけで十分だ。

「……………あ？」

七緒が空を仰ぎ、短い声をあげた。

「何、どーしたの」

「なんか今ほっぺに……………」

言いかけた七緒の瞳が、次の瞬間、僅かに見開かれる。

「あ」

「な、七緒？」

「心都、上。上見てみ」

「うえ……………」

言われるがままに空を見上げる、と。

ちらちらと舞うのは、小さく淡い、白。

「ゆ……っ雪！」

私は思わず七緒から右手を放し、雪を掴もうと目の前に置いてしまった。……数秒後、ちよつと後悔。ただの握手とはいえ、せつかく手と手を繋いでいたのに。

「今日ずつと寒かったもんなー。初雪じゃん」

同じように右手の掌を上へ向け、七緒が言った。

空からゆっくりと落下した雪は、地面に届くと幻みたいに溶けて消えていく。

「だねー。ていうか七緒、これはただの初雪じゃないよ？ ホワイ

トクリスマスってやつだよ！」

「へえ」

「うっわ反応薄」

「だってたまたま雪降ったのがクリスマスイヴだったってだけじゃん」

「……夢のない男め。それを言っちゃお終いだっつーの」

っていうかね、七緒。

本音を言ってしまうえば、私にとって本当に意味があるのは初雪でもホワイトクリスマスでもなく。

七緒と一緒に雪を見ている、って事なんだよ。

この夢のない男には、まだ恥ずかしくてとても言えないけれど。

出来れば来年の冬も隣で空を見上げて、

そしてその頃にはもう2人が同じ気持ちだといいなあと願いながら、

落ちては消えていく真っ白な雪を見ていた。

ふわふわと落ちては溶けていくばかりだった雪も、だんだん地面に白く積もり始める。

「雪っていくら見ても飽きないよねー」

「そうかあ？ まー、雨よりマシかな」

……夢のない奴め。再び呟きつつ、私はポケットに突っ込んでいた手を又ツと出した。

「……何これ？」

きよとんと七緒が問う。

「七ちゃん、今日は何月何日でしょう」

「……12月24日？」

「心都ちゃんからクリスマスプレゼントです」

片手にすっぽり収まる、水色の小さな包み。七緒はしばらく私の手の中のそれを見つめ、そして、

「あー……！ そ、そっか……クリスマスってプレゼント交換とかするの…… やっべ、なんか…… すっかり頭から抜け落ちてた」

この寒いのに汗をかきかき呟いた。

ふ、と私は思わず笑ってしまう。

「そんな事だろうと思った。大丈夫、最初っからプレゼントなんて期待してませーん」

だって、下手すると一生絶交状態になっていたかもしれない好きな人だ。仲直りできて今日を一緒に過ごせるだけで嬉しいのにプレゼントまで期待するなんて、いくらなんでもそんな高望みはしない。ずいっ、と七緒の目の前に包みを差し出す。

「小っこい事気にしないで受け取りなさい。つか人がせっかく用意したんだから素直に受け取れ」

おっと、思わず照れ隠し(?)の暴言が。

「じゃー……ありがとうございます」

七緒は右手を出して、私のプレゼントをもらってくれた。

「はい。いただいたちゃって下さい」

無事受け取ってもらえた嬉しさで自然と頬がゆるんでくる。

七緒はしばらく包みを眺めたり表面を触ったりしていたけど、やがてこつちを見て言った。

「開けていい？」

「え……今ここで？」

「駄目？」

「いや、あの、駄目とかいうわけじゃないけど、なんていうか、急いで作ったから出来が悪くて恥ずかしいっていうか……」

ぶつぶつ言う私を尻目に、七緒はもうとっくに包みを開けていた。

「あ。」

中身を確認し、七緒が小さな声をあげる。

なんだか本当に恥ずかしくなってきた、私は視線を落とした。

「だから出来悪いって言ったのに……」

白いフェルトで柔道着を型取り、中に柔かい綿を詰めた、お守り兼マスケット。背中の部分にはこれまた青いフェルトで『七』の文字が縫われている。

手芸が苦手な上に昨日一晩という短い時間で作ったため、かなり不恰好ではあるけれど、一応、私なりの精一杯のプレゼントだ。

「これ……手作り？」

「……なんか、すみませんね。下手だし、ちゃっちくて……」

七緒が私の目元を指差す。

「あー、もしかして……だからそのクマ……」

「う」

……バシっていたか。私は若干泣きそうになった。こんなひどいクマ、七緒にだけは気付かれなくなかったよ。

裁縫があんなに難しいもんだとは思わなかった。フェルトは上手く切れないし、糸は絡まるし。

その小さな柔道着を眺めていた七緒は、ゆっくりと私の方を見た。

そしてとても綺麗な瞳で、笑う。

「さんきゅー。すっげえ嬉しい」

「……おう」

しまった。二度目の照れ隠しで、また七緒曰く『男気溢れる返事』
になってしまった。こういう時くらい可愛くしろよ自分。

そんな後悔に苛まれながらも、嬉しそうな七緒の顔を見ると、
ああ作った甲斐があったなーなんて思う。

「心都、このお守り…もらう前から効いちゃってるみたいなんだな」
「え？」

ひひ、と綺麗な歯でどこか得意げに七緒が笑う。

「聞いて驚けー。実はこないだ顧問に呼ばれてさー……」

「告られましたか」

「ちげーよ！ そのネタもういいって！」

さすがに引つ張りすぎたか。

「なんと……今度の大会の団体戦メンバーに選ばれましたー！ し
かも顧問から『期待してる』のお言葉が！」

「えっ本当!？」

私、思わずベンチから立ち上がって絶叫。

「す、すごいすごいすごい七緒すごいー！！ やったじゃん！ す
げーよあんだ！」

背中をバシバシ叩くと、少しむせそうになりながらも七緒はガツ
ツポーズを返してくれた。

「へへ、これのおかげかな」

そう言っつて、さっき私が渡した柔道着型お守りを揺らす。

「七緒の実力だよ。ちよつとマジで頑張っつてね。……応援してるか
らさ」

「……ありがとうございます」

七緒は少し照れたように頭を下げたと思うと、ふいに何か考え込
む様に宙を見上げた。

「……………」

空からは相変わらず雪が降り続け、辺りを白く染めている。でも不思議と寒さは感じない。

七緒がすつくと腰を上げた。

「え、何、どしたの七緒」

「ちょっと待ってて」

それだけ言うと、あとは脇目も振らず走りだす。

「はあ！？ ちょっと……どこ行くの七緒！」

「すぐ戻ってくるからー！」

七緒がすごい速さで走りながら私に向かって叫ぶ。そのジャージの後ろ姿は、すぐに見えなくなってしまった。

あとに残されたのは、訳も分からずベンチの前でただ立ち尽くす私。

「……何なのマジで……」

7割の驚きと3割の怒りに固まりながら呟く。

仮に急に用事を思い出したとしても、置き去りはあんまりじゃないの？

再びベンチに座り直し、心の中で幼馴染みに文句を言った。

やっと会えて、仲直りできて、プレゼント渡せたのに。あんな一方的にいなくならなくてもいいじゃん。七緒の馬鹿、アホ、女顔。

こんな夜に1人出歩くなんて、置いてけぼりの私よりむしろ七緒の方が危険だよ？ あんたなんかすぐ変質者の餌食なんだからね。

泣いたって助けてやんねーぞ馬鹿馬鹿馬鹿。

一通り悪態をつきおわり少し気分も晴れたところで、小さく溜め息を吐く。

「……………寒い」

七緒といた時はほとんど感じなかった寒さが、今頃になって全身を包む。

「……………寒い寒い寒いさむーいよー……………」

どうやら私、寂しいと独り言が多くなるタイプらしい。

気を紛らわせたくて、なんとなく公園をぐるりと見回す。

滑り台、ブランコ、ジャングルジム、砂場。世間一般の公園にある物が全てちゃんと置かれている。

ここは華ちゃんと禄朗が昔遊んだらしいスイートメモリーな場所なんだっけ。

そういえば私も、よく七緒と公園行っただなあ……。ここよりも少し小さな、ジャングルジムのない公園だった。

ブランコでどっちが高くまでこげるか、よく七緒と競争したっけ……。たまに私が勢い余って落ちて鼻血出したりしていたけど。……

ちよっと思出し笑い。

昔の記憶は、一度掘り起こし始めると止まらなくなる。

そういえば、公園にいる途中、なんか2人で行方不明になりかけて大騒ぎされた事もあったっけ。あれは確か　そうだ、こんなふうに冬の寒い日だったな。

なんであんな風になっちゃったんだっけ？

……。ああ、そうだ。すごい量の雨が降っていて……。で、2人で色々言い合って……。色々あって……。

……。ええと。

『色々』って何だっけ？

その公園の滑り台を、私たちは『かまくら滑り台』とか単に『かまくら』とか呼んでいた。

全体を支えるホネホネした柱がなくて、かまくらのような丸みのある形をしていたからだ。その中は空洞になっていて、しゃがんだ子供が数人入れる広さなので、ちよつとした秘密基地気分を味わわせてくれる場所として人気だった。

だけどその時、秘密基地の中で、9歳になったばかりの私は泣いていた。静かに体育座りをして、それはもう涙と鼻水をだらだら垂らして。

「うっ……ぐす……っ」

隣の七緒が呆れたように私を見る。

「……泣きすぎじゃない？」

「だ、ただだつてえ」

私の恐怖の理由。それは、辺りでザーザーと音をたてる滝のような豪雨と、妖しく光る雷。

その日、私と七緒は2人で公園に遊びに来ていた。

珍しく公園には誰もおらず、私たちは「貸し切りだねーわははは」なんて言って楽しく遊んでいた。

が、つい数分前。ちよつと雲行きが怪しくなってきたかと思ったら、あつという間にものすごい量の雨が降りだした。

なので七緒と2人、かまくら滑り台の中でひとまず雨宿りをする事にしたのだけれど。

「……雨止まないよ？」

「おれに言われても」

「……どんどんひどくなつてない？」

冬には珍しい、激しい雷雨。しかもここは安全な家の中ではなく、一時的に非難した滑り台の空洞の中。周りに大人はいない。という

か私たち以外の人影はない。そして、寒い。

それら全ての状況が合わさり、私はとてつもなく不安だった。

「……は、早く止まないかなあ」

「もーすぐ止むよ」

隣の幼馴染みは、やけに呑気に言った。

「……な、なんでわかるの？」

「勘。」

私がガツクリとうなだれた、その時。

ピカッ。

「ぎゃあああ　　！」

突然の稲妻に、私は思わず頭を抱えてうずくまる。七緒はというと、雷よりも私の声に驚いたらしく、びくつと肩を震わせた。

「びっくりしたー……。あのさ心都、怖がるならもうちょっと女らしく……」

「だって怖いもんは怖いじゃああん……！！」

私、もう不安の最骨頂。というか軽いパニックだ。

天気はどんどんひどくなる。かまくら滑り台の中から見る外の景色は雨の粒で白く霞んで、不定期に光る雷がいつそうそれを不気味にした。

なんだかこのまま永遠に雨が降り続けるんじゃないかという気さえしてくる。馬鹿みただけど、幼い私を震え上がらせるには十分な感覚だった。

「う……うえ……っ怖いよーお母さん……」

次の瞬間、私の視界は真っ暗になった。

「え……な、七緒？」

「……　　」　　周りが見えなきやちよつとは怖くないと思う。多分だけ

ど」

七緒がその手を私の両目に覆い被せ、塞いでいた。視界が効かなくなつた私に届くのは、雨の音と、たまに遠くから聞こえる雷鳴と、七緒の温度だけ。

「……本当だ。怖くなくなつたよ」

「でしょ」

と、七緒。見えないけれどきつと今、得意そうな顔をしている。七緒の掌の威力はすごかった。周りが見えなくなつた事よりも、その温かさが私を安心させる。

「……ありがとう」

「だつて心都が怖がるとうるせーんだもん」

9歳の私たちは雨が止むのを待った。

あのね、本当は気付いてたよ、七緒。

私の目を塞いでくれた七緒の手が、ほんの少しだけ震えていた事。七緒も心細かつたんだね。

だけど私があまりにも騒ぐもんだから、それを一生懸命隠して、強がってくれたんだね。

ごめんね。

ありがとう。

七緒はいつも私の心をあつたかくするね。

泣き疲れた私と子守(?)に疲れた七緒は、かまくら滑り台の中でいつの間にか眠ってしまったていて。

気が付いたら周りではパトカーのサイレンがガンガン鳴り響いていた(私たちが帰ってこない事で大パニックになったお母さんと明美さんがものすごい口調で通報したらしい。……ものすごい口調って何だろ?)。

雨はもうすっかり上がって、からつとした青空が広がっていて。

大号泣の母親組に抱き締められながら、こんな綺麗な空もあるん

だなあ、と思ったりした。

「……………と……………心都……………心都！」

「んああ？」

アホ丸出しな声をあげ目を開ける。

そこには幼馴染みが驚いた顔で立っていた。もちろん14歳の、ジャージ姿の七緒だ。

「お前……………この寒い屋外で何寝てんだよ。死ぬぞ？凍死だぞ？」

どうやら私、七緒を待ちながら昔の記憶を辿っているうちに眠ってしまったらしい。……………やっぱり徹夜で手芸は無理があったか。

まだぼんやりする意識の中、とりあえず目を擦りつつ挨拶。

「……………おはよ」

「あ、おはよ。お前目覚め悪いし低血圧だな……………ってちげーよ！！
そもそも夜だし！　っていつか夜の公園のベンチで1人で寝るなんて危ねーだろ！」

む、と私は思わず喧嘩モードに入りかける。

「なああーにそれ常識人ぶっちゃって。自分だって昔公園で爆睡したくせに」

「は？ 何ソレ」

忘れてるってオチか。

「ていうか、か弱い乙女を夜の公園に置き去りにしてく方が悪いんじゃない」

いつもの七緒との会話だったら、きっと奴は『か弱い乙女』の部分に激しい突っ込みを入れてくるだろう。

でも今日の七緒は「あ。」と目を見開き、

「そ、そっぴやそっぴや……ごめん」

何とも素直に謝った。

そうしおらしくされると、私の方も居心地悪い。

「……や、別にいいんだけど。ほら私みたいな色気ないのが公園で寝てたって何もないだろうし」

「あー確かに」

「おい」

「嘘。ごめん」

前言撤回。こいつ全然しおらしくなんかありません畜生。

「で？ このか弱い乙女をほっぴりだしてまで成し遂げなくちゃなんなかつた用事は終わつたんですかい」

我ながら可愛くない口調で皮肉を込め訊ねる。

「あー、うん」

七緒が曖昧に頷いた。よほど走つたんだろう、よく見るとまだ少し息切れをしている。

七緒は今まで背中後ろに回していた右手を前へ出した。その手には、スーパーのビニール袋がぶら下がっている。

「遅ればせながら……クリスマスプレゼント」

「……へ？」

硬直する私を見て、七緒は少し照れくさそうに視線を逸らした。

「わ……私に？」

「うん」

「……今買ってきたの？」

「うん。……早くもらって」

恐る恐る腕を伸ばし、袋を受け取る。小さい割に意外と重い。

驚きで痺れた頭が徐々に冷えてくると、今度は嬉しさが込み上げてきた。

「わぁー……うっそ……。あ、ありがとう」

「……いや、だって俺もらっというても用意してなかったし……」
相変わらず視線を逸らしながら七緒が呟く。

「開けていい？ っていうかもう開けてるけど！」

そう言いながらガサガサ袋を開ける。

と、中から出てきたのは。

「……だ、大福………？」

パックに入った大福1個だった。

「え……えーと……」

なんでクリスマスに大福？

わけがわからず固まる私に、七緒が言う。

「お前が欲しいって言ってたものって、大福ぐらいしかわかんなくてさ。……クリスマスムード台無しで悪いけど」

「え？」

……私、言っただけ？大福欲しいとか言っただけ？

ぐるぐると回る頭の中に、数日前のヒトコマが甦った。

『その、つまり……。だい……』

『……？』

『……だい……だい………大福食べたい』

「あー！」

私は思わず叫んで両手を打った。

あの時。嵐のような禄朗が東家から去って、その後雰囲気
に流されて告白未遂の失態を演じた、あの時だ。

『大好き』の最初の2音がぼろっと口から出てしまった事を誤魔
化そうと、汗だらだらで私が言った台詞。それが『大福食べたい』
だった（大福食わず嫌いにも関わらず）。

「……あんなちっちゃい事……覚えてたの？」

単なる苦し紛れの台詞だったのに。

「なんか……どうしよう……」

私はニヤけそうになる頬を両手で押さえた。

馬鹿らしいといえばそれまでだけど。

でも、やっぱり、うん。

綺麗な指輪やネックレスをもらうより何倍も嬉しい。

「……嬉しすぎるよ七ちゃん」

「七ちゃんいうな。　なんだ、そんなに大福食いたかったんだ。

じゃあちゃんとした和菓子屋の買ってくれば良かったなー。この時
間スーパーカーがコンビニくらいしか開いてなくてさ。しかも金なくて
1個しか買えなかったし……」

と、ちよつとの外れな悔しがり方をする七緒。

「ううん。じゅーぶん嬉しいよ、これ」

「……そう？」

自分が出来る最大限の素直な笑顔で、目の前の幼馴染みに向き直
る。

「うん！　ありがとう、七緒。　今食べていい？」

「えっ今？」

驚く七緒をよそに、私はパックを開け大福を2つに割った。

「はい。半分こね」

片割れを差し出すと、七緒は呆れたような、それでいて面白がっているような顔で受け取った。

「ありがと。……マジで今食うんだ……クリスマススイヴの公園で大福って何かすげーな」

「こーいうのもアリだよ。いただきまーす」

初めて食べる大福は、思っていたより甘ったるくなくて、なかなかおいしくて。

でもそれよりも何よりも。

やっぱり七緒の気持ちが私の胸の奥をあっただかくしていた。

「……食わず嫌い克服かも」

「マジで？ そりゃよかつた」

なんとも可愛らしい顔で七緒が笑う。

さっきまで1人で寒い寒いと騒いでいたのが嘘みたいなのに、私はあつたかい気持ちでいっぱいだった。

「あ、そうだ。心都、俺だしまき玉子は完璧だから」

と、数秒前の笑顔とはうって変わって、今度はやたら真剣な表情で七緒が言う。

とてつもなく真面目な顔だけれど、言っているのはただの料理自慢だ。しかもだしまき玉子。なんという家庭的っぷりだろう。

「は？ だしまき？」

「ほら喧嘩中は料理教室どころじゃなかったじゃん。だから俺一応独学で頑張ったんだぜー？」

ああ……：そういえば料理教室なんてやってたな！。ほんの数日前の事なのに、大分昔のように感じる。

「張り切って昨日の部活にも色々持ってたんだけど……。でも、やっぱり心都に教わったレモンの砂糖漬けが1番評判いいわ」

「……あら。あらららー本当？」

ちよつと鼻高々。

「うん。あまりの美味しさに感動した後輩が『東先輩うちに嫁にきてくださいよ』なんてふざけて言ってさーアハハ」

……それって、その後輩ふざけてるわけじゃなかったんじゃないの？ という際どい疑問は心にそっとしまっておく事にする。だってあんなに笑顔が可愛い七ちゃんだもの。冗談でしょーと言い切れないのがほんのり怖い。

「……じゃ、しょうがないから冬休み中もたまたまに料理教室やってあげましょかね。そんなに評判良いんじゃないあ仕方ない」

ちよつと偉そうに言ってみると、七緒は意外と真剣に頭を下げた。

「お願いします。やっぱり料理っていつ役に立つかわかんないし」

「七緒……将来一人暮らしとかするの？」

「わかんないけどさ、いつかそういう事になるかしんねーじゃん」

「ふーん」

私は、自分の手にある食べかけの大福を見つめた。なんだか急に現実に引き戻された気分だ。

そうだよ。将来なんて、どうなるかわからない。

同じ高校に進まないかもしれないし、いつまでも近所に住んでいられるかだつてわからない。

わからない事だらけなんだ。未来なんて。

「来年の今頃とか、何してんだろうな」

足元に降り積もった雪を眺めながら、七緒が言う。

「受験の事で頭いっぱいなんじゃない？ ……わかんないけど」

「だよなー」

その頃には、私の想いは七緒に伝わっているんだろうか。それとも今と変わらず、こうしてくだらない事で悲しんだり喜んだりキレたり鼻血出したりニヤついたりしているんだろうか。 ……あ、なんか、すごい嫌だなー1年後もそんな自分。

「でもさ。クリスマスくらいはこうやって外に出て、雪見て、大福食べたりしたいよな」

「……え」

思わず、大福を持つ手に力が入る（でろ。と、あんこがあまり上品でない出方をしたので慌てて力をゆるめた）。

だって、クリスマスにわざわざ大福買って一緒に食べる相手なんて 他にいないよ、七緒。

この間も言っただけど、恋する乙女は皆、自意識過剰の妄想族なんだよ。つまり私はまた、その言葉を自分に都合の良い方向に受け取っちゃうからね？ あまつさえ激しく心ときめかせちゃうからね？

「……じゃあ、七緒」

「ん？」

「来年の12月24日も、一緒に……私と一緒に、大福食べてくれる？」

幼馴染みは面白そうに笑った。

「いや。クリスマスに公園で大福ね。このシチュエーション、俺けっこう好き」

その日1日休む分も勉強頑張るとかなきゃなーと屈託なく言う七緒。その横で私は幸せを抑えきれずに、1人満面の笑みを浮かべてしまっていた。

私、少なくとも来年のイヴまでは、七緒の隣に居られるみたいで
す。

再来年、そのまた次の年の今日も一緒に過ごせるか。

それは、これからの自分次第。

数分後、にこにこした華ちゃんと、相変わらず鋭い表情を作りながらもどこかさっぱりした様子の禄朗が帰ってきた。

詳しくは聞かなかつたけど、仲直り出来たらしい。

「鬱陶しくない程度だつたら仲良くしてもいいつて、オレも周りに対して荒れたりしないようにするつて、禄ちゃん言つてくれたんです」

と、こつそり華ちゃんが教えてくれた。その笑顔は今まで見た中で1番幸せそうだった。

「とりあえず一件落着だね」

ホツと溜め息を吐きながら、私はベンチの背もたれに寄り掛かつた。

「あ。そういえば心都」

「ん？」

「田辺と栗原は？」

「……あ。」

「杉崎どこ行っちゃったんだろーなー……東もなかなか来ないし……」

「さあね。案外2人で楽しく過ごしてるんじゃない？」

「そうかな……。あー！もしかして俺たちに気い利かしていなくなってくれたとか？うわっあいっすら何を勘違いして粹な計らいしてんだか困るなあもうアハハハー！」

「それはないわね。もしそうだとしたら私、心都と絶交だから」

「え？何か言った？」

「うっん何も」

「あ、そうそう栗原、これ俺からクリスマスプレゼント」

「あら、ありがとう。何？」

「へっへ。じゃじゃ〜ん！ドリームランドのチケット」 (ドラ

もん風に)

「チケット？」

「これペアチケットなんだけど、よかったら俺と一緒に」

「ごめんね田辺君、その日は従兄弟の結婚式があるの」

「え……あー……まだ日にち言っていないんですけど」

「とにかく結婚式なの。結婚式つてすごく大事よね。本当にごめんね (にっこり)。あれ田辺君泣いてる？」

「……………い、いや……………いいんだ……………男は引き際が肝心なんだ……………。このペアチケットもう1枚あるから、東と杉崎誘って4人で行くの

も面白そうだと思ったけど……でも栗原が行けないならいいや……」
「4人で行くって事は、乗り物乗ったりする時は必然的に心都と七緒君がペアになるわけよね？」
「そうだな。で、必然的に栗原は俺と一緒に乗」
「田辺君。たった今結婚式なくなっただわ。4人で行きましょう」
「ほ、本当に！？一緒に行ってくれんの！？」
「うん。誘ってくれてありがとう（最上級のにつきり）」

M e r r y C h r i s t m a s ! !

1 & 1 t ; 變と、若さと、地獄の果て & g t ; (前書き)

クリスマス編のその後のお話です。

ノリと勢いで書いた番外編的なものなので、軽〜い気持ちでお楽しみ下さい。

1 & 1 t ; 愛と、若さと、地獄の果て & g t ;

「……………いい？ 開けるよ、七緒」

「おう」

ドアノブに掛けた手が微かに震える。

隣の七緒が、ごくりと喉を鳴らした。

気持ちを落ち着かせるため何度か深呼吸をし、

「いくよ。……………いち、にー、の……………さんっ」

自分の中の勇気をフル稼働。一気にドアを開ける。

と、そこは。

「あらぁ心都々おかえりなさい〜ふふふふふ」

「おい七も一緒じゃねえかー！ お前こんな夜遅くに女子と帰宅とは良いご身分だなー！ わはははははははは」

地獄絵図だった。

栗原家でのパーティが無事終わったのは、30分前の事だ。

心配していた禄朗と田辺の対面も、田辺がやたら上機嫌だった事から大きな修羅場なく済んだ（それにしても田辺は気持ち悪いくらい浮かれてたなー。なんだったんだろアレ）。

そして解散となった後、家へ帰る途中に七緒がぽつりと言ったのだ。

「そっぴや今日……………母親2人は杉崎家でパーティしてんだよな」

「うん。……………ハメ外してなきゃいいけど」

「……………」

私たちはほんのり青ざめたお互いの顔を見た。

そんなわけで七緒も一緒に杉崎家へ行き、パーティの様子を見る事にした。のだけれど。

「うふふふー2人とも美里ちゃんのお家のパーティは楽しかった？ そりゃ楽しいわよね〜若い子たちが集まってキャピキャピするんだもの〜」

「まああたしたちも今日は十分楽しんでるけどなー」

「そうねーうふふふふ」

そこは想像以上の地獄絵図だった。

2人が果てしなく酔っ払っているとか、リビングのテーブルの上に私と七緒の小さい頃の写真が散乱している（思い出話のネタか？）とか、そんな事よりも、問題はお二人の母上様の服装にあった。

私の脳裏を過るのは、いつかのお母さんの浮かれ気味な台詞。

『明美と久しぶりに親友水入らずでパーティでしょ。せつかくだから若い頃の服でやりましょって事になったのよー』

そう。今日の2人はまさに、「若かりし頃」そのままの格好なのだ。

「なんか今日は気持ちまで十代にプレイバックした感じだよなー爽子」

「ほんとそうよねえ明美〜若いつて良い事ねえ。あつ見て見て心都〜今日のこのスカート可愛いでしょ〜？」

と、心なしかいつもの3割り増し高い声で訊ねてきたのはもちろん私のお母さん（今ちらつと出た通り、実は名前はソーコという。

爽快の爽、颯爽の爽と書いて爽子……正直、こんなに似つかわしくない名前も珍しいんじゃないかな（私には思っている）。

その爽子さんの本日の服装は、淡いピンクの乙女ティックな姫袖ブラウスに、下はこれまたピンク（ただしこっちはかなり濃い目）のふりふりフリルがふんだんに重ねられた膝丈スカート。そして女学生らしさ満点（？）な三つ編みヘアに真っ赤なりボン。うーん……痛い。目とか頭とか、あと色んな意味でも痛い。ていうか家の中でブーツを履くな。

今でも十分少女趣味なお母さんだけど、若い頃はよりコテコテに濃厚だったようだ。

そして。

「七あーお前何さつきから目エ合わせないようにしてんだよ。あれか？ お母様の若々しい姿を見て照れてんのか？ お前もいつちよまえにムズカシイ年頃だなー！」

そう言っつて七緒の背中を叩きながらガハハと豪快に笑う東明美さん。

そのお召物は、学制服にしては丈が長すぎる、冬用コートにしては雰囲気は攻撃的すぎる。なんとというか、その、ひと昔前のあまりガラの宜しくない方々が着ていたような……つまりいわゆる、特攻服的なもの、だ。

これが明美さん曰く「若気の至り」ってやつなんだろうか
うん。確信しました。この人確実に元ヤンだわ。

「……………」一瞬たりとも照れてねえよ……………」
相変わらず視線は自分の母親から逸らしながら引きつった顔で咳く七緒が気の毒で、私は精一杯の励ましを込め、ポンと肩を叩いた。

「それではあらためましてー」

「乾杯ー！」

母親2人によるご機嫌な掛け声と共に、4つのグラスがぶつかり合う澄んだ音がリビングに響き渡る。

「……かんぱーい……」

一方私たち子供2人はそのテンションについていけず、消極的に応えた。

せつかく4人になったんだからもう一度乾杯してパーツとやりましよう、というお母さんの迷惑な提案により、私と七緒は母親たちの宴会に渋々参加する事になった。

ああ、今年は抜けるって言ったのになあ。1回参加させられちゃうと長いんだよなー、これ。と、私は人知れず溜め息を吐いた。どうやら隣の七緒も同じ心境らしく、げんなりとした表情で手元のジュースが入ったグラスを見つめている。

「2人とも今日は随分遅かったわね。よっぽど盛り上がったの？」既にグラスを空にした（飲むの速すぎ）お母さんが私と七緒に訊ねる。

「うん……ちよつとすごく色々あって。ある意味盛り上がったよ七緒」

「……おー」

今日1日のどたばたを思い出して、更に疲れ気味になってしまった私たちであった。

でも、何だかんだ言っちゃったり楽しかったなあ。七緒から思わぬプレゼントももらえたし。来年のイヴも一緒に大福食べる約束までしちゃったし……えへへ。

「……何にやにやしてんの」

はっと我に返ると、隣の七緒が私を見ていた。

「に、にやにやなんてしてないから」

「ばっちりしてたって。なんつーの、夜道を徘徊する変態みたいな」
嗚呼。こいつ1回マジで泣かしてやるうか畜生。

物騒な感情を抑え、私はヤケクソ気味にコップをぐいっと口元に運んだ。

このぶどうジュースおいしいなーと思った次の瞬間。

ふいに、ふにゃ、と全身の力が抜けた。

* * * *

へろへろと間抜けな効果音が似合いそうなくらい呆気なく、心都は床にへたりこんだ。深く俯いたその顔から表情は読み取れない。

「……………え。心都？」

面食らった七緒が声をかける。が、しかし。

「……………」

心都はむつつりと黙ったまま、相変わらず腰が抜けたように動かない。

「あらやだー」

突然、素っ頓狂だがどこか能天気な声が聞こえた。

驚いた七緒が顔を向けると、ついさっき心都が一気飲みしたばかりのグラスを手に持った爽子が立っていた。

「これお酒よー？ しかもかなり強いやつ。心都ってば間違っただけのグラス取っちゃったのねー」

「なんだ心都の奴、何年か前と同じ間違っしてんじゃん。おっちょこちよいだなー！ あははははは」

笑う爽子と明美に向かい、

「いやいやいやいや笑い事か？」

七緒が突っ込んだ、その時だった。
がしっ。

「ひいつ!?!」

すごい力で腕を掴まれ心臓が止まるほど驚いた七緒は、思わず可愛らしく上ずった声を出した。

おそろおそろ、目線をその力の方向に向ける。

「……………びつくりした時の叫び声まで美少女ってか。ああ可愛いなあー七ちゃんは」

と、腕を掴んで七緒を驚かせた張本人である心都。可愛いなあと誉め言葉を口にしながらも彼女の表情は般若の如く凄まじいもので、地獄の果てから響いてくるような低くひび割れた声だった。

「え? ええええ……………? 心都?」

いつもとは違う幼馴染みの様子に戸惑う七緒。そんな彼を見て、心都は更に続けた。

「ほらまたそんな目エ真ん丸くてラブリーな表情しちゃって!。本つつ当に可愛いよねもはや犯罪だよね罪人だよね死刑にしたい位だよね」

そう言って、不気味な笑みを浮かべる。

「……………もしかして酔ってる……………?」

七緒が啞然として言う。

「そうよ、心都ってば酔ってるのよ、絡み酒よ絡み酒っ」

「やば、なんか面白い展開になってきたな」

と、後方の母親2人はわくわく感を我慢しているような小声で囁き合う。

数年前にも、心都はクリスマスパーティーで間違って酒をがぶ飲みし酔っ払うという失態を演じた。その時はジャ　おじさんの物真似を延々と繰り返す(しかも結構似ている)というかなり厄介な酔い方だったのだが。

「酔ってるって私があ? 失礼だなあー七ちゃん。あんたもしかしてあれか? 顔が可愛けりや何言っても許されると思ってるのか?」

「ああーやだやだ天狗になっちゃって」

まるで若いかわいこちゃんに絡む親父（ちよつとキレ気味）だ。

「今回も、いや、今回の方がかなり厄介な酔い方だ。」

七緒は心の中でそう呟くと、がっくりうなだれた。

「あつ、今溜め息ついた！ ふうーって溜め息ついたでしょ七ちゃん！ 人と話してる時に溜め息つくなんてこりゃ本格的に天狗だよね度を越えた天狗だよね尋常じゃないほどの天狗だよね。ねえちよつと私の話聞ってる？」

「……あのな、心都。お前は今、その、ちよつと頭がおかしいから、部屋でおとなしく寝てた方がいいと思うんだ」

なるべく冷静に簡潔に、かつ優しく諭そうと努めた七緒だったが、それが裏目に出た。

「あゝ？ ちよつとちよつとー頭おかしいって誰の事よ七ちゃん。今の発言マジ許せないんですけど！ ちよーむーかーっーくー！」

酔っ払いには、冷静さも簡潔さも優しさも無駄だ。

げんなりする七緒の腕をガシツと掴み、心都は邪悪に笑った。

「天狗になってる七ちゃんは根性叩き直すために強制個人面談です。明美さん、ちよつと七ちゃん借りていいかしらー」

「おー、いいぞいいぞ。煮るなり焼くなり好きにしな」

「ちよ……………っ無責任すぎんだろ！ 息子が酔っ払いにさらわれようとしてんだぞ!?!」

「ガンバレ七！」

にかつ、と素敵な笑顔の明美が親指を立てた。その横では爽子がこれまた楽しそうに笑っている。

「……………」

幼馴染みに引きずられながら、泣きそうな気持ちで七緒は悟ったのだった。

こいつら俺以外全員酔っ払いだ……！

2 & 1 t ; 愛と、若さと、お花畑 & g t ; (前書き)

- 前編のあらすじ -

聖なるクリスマススイヴの夜、悪の酔っ払い3人衆は降臨した。
狙われた清純美少女ナナオの運命やいかに。

ちょっと嘘です。

リビングには嵐が去った後のような静けさが漂う。

残ったのは、子供たちが出ていったドアを笑いながら見つめる母親2人だ。

「いいの？」

小首を傾げ、爽子が明美に尋ねる。

「何がだよ？」

「心都、かなりハイになつてたから何するかわかんないわよー？もしかして酔つた勢いで七ちゃんを無理矢理……」

「ははは。爽子こそあんな状態の心都を野放しにして、親としての責任に問題ないのかよ」

「ふふ。私は娘の恋を応援してるだけでーす」

年甲斐もなく可愛らしく語尾を伸ばし答える爽子に、明美は目をぱちくりさせた。

「なんだ、気付いてたのか」

「あら失礼しちゃうわねー。自分の娘の事くらいわかるわよ。明美こそこういう事にはかなり鈍感なくせに、よく気付いたわね？」

「失礼だなー。自分の息子の事くらいわかるよ」

爽子の返答を真似た明美は、にやりと笑って更に言った。

「つていうか心都の態度、あれは一目瞭然だろ。気付かないのはうちの鈍感馬鹿息子くらいだよ。まったく誰に似たんだか」

「あら、母親にそっくりよー？」

「何だとコラ」

少々口喧嘩風になりながらも、2人は相変わらず今の状況を楽しんでいるような笑顔だ。

そして、ほほ声を揃えて言った。

「若いつていいわねー」

「若いつていいよなー」

その頃、噂の若い2人は杉崎家の小さな庭にいた。

「じゃあ七ちゃん、自分のどころへんが天狗になつてたかを300字前後で述べなさい」

「いや、だから別に天狗じゃないって……」

「あつ！ また可愛く溜め息吐いた！ むーかーっくー。500字に変更しちゃうから！」

完全に酔っ払いと化した心都と、彼女に絡まれぐったりする七緒2人はかれこれ10分ほど、このわけのわからないやり取り（心都曰く、強制個人面談）を続けている。

七緒は参っていた。

酔った心都は想像以上にねちねちとしていたのだ。基本的には七緒の常日頃の美少女っぷりを理不尽に責め、たまに口答えされると今度はそれに対して「天狗になっている」だの、「可愛いからって

何を言っても許されると思っっている」だの逆上するというやつかいなパターンだ。

14年の付き合いである七緒も、こんな幼馴染みの一面は初めてだった。

なんつーか、正直……怖い。

七緒は心の中でひっそりと溜め息を吐いた(堂々と吐くとまた怒られるので)。

女の勘でそれを読み取ったのかわからないが、目の前の幼馴染みはほんのり赤い顔を思い切りしかめ、言葉を続ける。

「大体七ちゃんはねー可愛いくせに隙がありすぎるのよう。プリティな真ん丸お目々で呑気そうな顔しちゃってさー。そんなんだからこないだも黒岩先輩に簡単にちゅーされそうになったり、最近は何に1回男からナンパされたり、小5の時に隣のクラスの梨紗ちゃんにリコーダー盗まれたり、小3の時に担任の先生(男・26歳・独身)から毎日やたら見つめられたり、幼稚園のチューリップ組の時に」

「っ!! 言うな! 頼むからそれ以上!」

思わず叫ぶ。冬だというのに七緒は汗だくだ。

小さな頃から可愛らしかった彼は、それ故に色々と苦労もしてきた。特に幼稚園の年中さんの時の出来事。クラスの園児の約7割が「七緒ちゃんは本当は女の子。でも可愛すぎて悪の組織に狙われるからわざと男の子の服装をしてるんだ」という噂を純粹に信じていた。は決して思い出さたくないものだった。

それを掘り返されたからには、黙っているわけにいかない。

「あーもうこの酔っ払い!! 早く家人って寝ろよ! そもそもお前な、未成年の飲酒は法律で禁止されてるんだぞ!? 何普通に気持ち良く酔ってんだよ!」

「はあ? 酔ってないって言ってるじゃん、自分がキュートガールだからって調子乗んな七ちゃんのばーか」

「キュートガールでもねえし調子に乗ってもいねえよばーか」

「可愛すぎてむかつくんだよばーかばーか」

「うっせばーかばーか」

「ばかつて言った方がばかなんですーう」

「お前も言ってるじゃん！」

まるで小学生の頃のような口喧嘩が繰り広げられる。

と、その時。

ふいに心都の目が、何かに気付いたかのように丸くなった。

彼女の視線は七緒を通り越し、その後ろの何かを捉えている。

「……………いない……………」

「は？」

「クロがいない……………」

振り返り犬小屋を見てみると、確かに、いつもそこにいるはずの杉崎家の愛犬の姿がない。

「散歩でもしてんじゃねえ？」

そう七緒に問い掛けられ、心都はぶんぶんと首を左右に振った。

「ないないない。クロがひとりで出歩くんなんて今までなかったし、

ほら、ご飯も全く手付けないで残ってる。あの子がご飯を後回しに

するなんてありえないもん」

綺麗に皿に盛られたままのドッグフードを指差し心都が言う。

そういえばあいつ食い意地張った犬だったよな、と七緒も思い出

した。小学生の頃よく心都と2人で餌をあげていたが、その時から

クロの食欲は絶好調で、「ひと欠片も無駄にしねえ」と言わんばかりにガツガツ食べていた様子が記憶にはつきり残っている。

そのクロがご飯を丸々残し姿を消す、とは。

「……………異常事態？」

……………異常事態？」

七緒の言葉にこっくりと頷いた心都は、それきり顔を上げなくなつてしまった。よく見ると肩が少し震えている。

人間、酔うと情緒不安定になりやすい。っていうかこいつ既に変

だったし、もしかして泣き上戸的なアレでこのままわんわん泣きだすかも。

心配になった七緒はとにかく声をかける事にした。

「そんな不安がるなよ。な、大丈夫だって。今から一緒に捜しに
」

「誘拐だよ誘拐!!」

七緒の精一杯の言葉は、がばつと顔を上げた心都の怒声にかき消された。

どうやら不安がっていると泣きそうになっているとかいうのは少し違うらしい。

「絶対そうだよ、それ以外考えられないし！ クロは男前だから、クリスマスイヴを独りで過ごす寂しさに耐えられないどこかのロンリーガールが誘拐してっただよよ！」

酔っ払いの発想力は凄まじい。

怒りに震える心都を見つめながら、七緒はまた少しぐったりしていた。

「くそっ許せない!! 七ちゃん、取り返しに行くよ！ 打倒誘拐犯!!」

そう言うとき心都は七緒のジャージの襟を掴み、全速力で走りだす。

「うわ、ちよっ、おい。自分で走るから離し……」

「間違いなくこっちからクロの匂いがする！ 飼い主ナメんなよ誘拐犯!!」

「ほんとかよ!?! てか痛い痛い首痛いから!!」

七緒の悲痛な叫びが、怒る酔っ払いに届くはずもなかった。

どれくらい走っただろうか。

犬の嗅覚はもちろん人間より遙かに優れたものだが、飼い主のそれもなかなか侮れない。

ようやく襟を解放された七緒は、そう悟った。なぜなら心都が「こっちからクロの匂いが！」と言った方向には、本当にクロがいたからだ。

「すげえ……」

ただしクロと一緒にいたのは誘拐犯のロンリーガールではなく。

「犬……？」

見事愛犬を捜し出した心都が、不思議そうな声を出す。

そう。杉崎家から少し離れたマンションの駐車場に、クロは雪のように白い小型犬といた。心なしか幸せそうな顔をして、寄り添うように。

「なあんだー……そういう事ね」

「え？ 何、どういう事？ この白くて小っこいやつ誰？」
事態が飲み込めない七緒を心都が睨む。

「鈍感だなー七ちゃんは。クロの恋人だよ」

「へ……？ こいびと？」

酔っ払いに鈍感扱いされた事への反撃も忘れた七緒は、目の前の2匹をもう一度じっと見つめ、

「あ……」

関係をようやく理解した。

「そっか。犬の5歳って人間の5歳とは違うもんな」

「クリスマスだもん。クロも好きな子と過ごしたいんだよ。ご飯より何より大切な子とね」

そう言っただけ心都は2匹を邪魔しない程度の距離で腰を下ろした。

七緒もそれに倣い、隣にしゃがんで犬たちを眺める。

「……クロ、幸せそうだなー。ついこないだまでよちよち歩きの仔犬だったのに」

「ふふ」

なんだか子供の結婚を控えた親のような心境だった。

さっきまでただの暴走気味な酔っ払いだった心都も、犬たちのおかげで穏やかになったようだ。七緒は少しほっとした。

のも束の間。

「笑顔で犬を見つめる七ちゃん……かーわーいーいー。犬と美少女のコラボってかなり良い画だよねえ」

「……っ誰が美少女だコラ」

穏やかさはほんの一瞬の奇跡。心都はまたかわいこちゃんにねちねち絡む酔っ払いと化してしまった。

「どっからどう見ても美少女じゃーん。チューリップ組の皆の気持ちもわかるなーふへへへへ」

「だー！！ だからっその話題は出すなって！ あと変態っぽい笑い方やめろ！」

屈辱的な記憶を再び思い出すはめになり、七緒はぐしゃぐしゃと頭を掻きむしった。

「あーもう、酔ったお前ほんと性格悪……」
と、ぐったり気味の七緒。

それを聞いた心都は、ふっと笑った。

「だから酔ってないって言ってんじゃん、七ちゃんのかば。……うーん、でもね、今日はちょっと性格悪いな自分でも思う」

「自覚あんのかよー！」

七緒の鋭いつつこみが駐車場に響き渡る。途端、心都が「しーっ」と人差し指を唇に当てた。

「あ、わりいクロ……と、白い小っこいの」
思わず謝った七緒に、クロは『別にいいけど邪魔だけはすんなよ』
というような顔で一瞥を投げる。

そして再び恋人にぴったり寄り添った。

「だってさぁー困るんだもん」

顔は犬たちに向けたまま、心都が言う。

「困る？」

七緒が怪訝な顔で聞き返すと、心都は相変わらず視線を前に向けた状態でもう一度言った。

「七ちゃんがあんまり可愛すぎると、私が困る」

「……はあ？ 全然意味わかんないんだけど」

「七ちゃんさ、何度も言うけど鈍感だよね」

「……悪かったな」

少し不機嫌な声になる七緒。数分前にも同じ扱いを受けていればさすがにムツとくるものだ。

対する心都は、やっと七緒に視線を合わせ、にっこりと笑った。

ただしそれは、いつもの嬉しそうな心都の笑顔とも、昔からよく見るニヤニヤとした怪しい笑みとも違う。少し大人な、余裕のある笑顔だった。

……酔っ払ってるからかな。酔っ払うと笑い方まで変わった。やうんだな。

七緒は少しの驚きを、心の中で小さく吐き出した。

「知りたい？」

ゆっくりと、自分自身でも言葉を確認するかのように心都が問う。

「……はあ、そりゃまあ、気にはなります」

「じゃ教えてあげよう。どうして私が困るかって言うかねー……」

そこまで言うと、心都は笑顔を引っ込めた。

「えっと、びっくりしないでね？」

「……？ うん」
「……私、結構前から七ちゃんの事が……」

ほす。

びっくりしないでね？ と前置きされたにも関わらず、七緒はかなりびっくりしてしまった。

なぜなら、言葉の続きが発せられる前に、どういわけか心都の頭が自分の肩に落ちてきたからだ。

「えっ……」

つまり、『寄り掛かる』と『抱きつく』の中間辺りの、非常に際どい体勢なのだ。いくらなんでもこれは驚く。

そして肝心な部分を言わないまま、それきり心都は黙りこんでしまった。

「……心都？ どした？」

「……いい」

「？」

心都は呻くように言った。

「………眠い……」

「………はあ！？ 飲んで暴れて眠い、って………お前それ完全に普通の酔っ払いじゃねえかよ」

「………だって眠いんだもん」

「眠いんだもん、って……。あ、そういや心都昨日の夜寝てないんだっけ。いやいや、だとしても今ここで寝ちゃまずいだろ！家まであと少し我慢しろよ！」

「……………」

「寝ーるーなー！」

幸せな夢を、みました。

夢の中で、私は1人お花畑を歩いていました。

すると小さな教会に辿り着きました。

そこでは、我が家の愛犬であるクロが、白いわんちゃんと結婚式を挙げていました。

2匹ともとても幸せそうだったので、私は長い間ぼけーっと式に見惚れていました。

またしばらく歩いていくと、今度は七緒が居ました。

お花畑の中の七緒は、このやろつ天使か！　ってくらい可愛かったです。

そのあまりの可愛さに私は理性を見失い、勢いで七緒に告白をしてしまいました。

七緒は私の気持ちを受けとめてくれました。

やったね両想いだ！　と私は喜びました。

そしてなぜか七緒は私を軽々とおんぶしてくれました。

可愛いくせに、細いくせに、すごくかっこよかったです（なので私は、どーせならお姫様だっこがいいなーと贅沢を言うのを我慢しました）。

そしてそのままお花畑を走りました。

うふふふ、あははは　と2人で笑いました。

笑いながら、いつまでもお花畑を走り回っていました。

本当に本当に幸せでした。

そこで目が覚めました。

* * * *

「んあ？」

気が付いたら、私はリビングのソファの上で寝ていた。

「……なんでここで寝てんだろ？」

壁の時計を見ると、夜11時半。もうすぐイヴが終わろうとしている。

ぼんやりする頭でこれまでの出来事を整理する。

えっと。確か栗原家でのパーティが終わった後、七緒と一緒に私の家へ行って、母親組の宴会に半ば無理矢理参加させられて、それでどうジューズか何かを飲んだら急にふにやっとなって、それで……。

どうしたんだっけ？

体を起こして辺りを見回す。すぐ傍のテーブルではお母さんと明美さんが酔い潰れて寝ていた。やはりそれぞれ、どぎついピンクフリルと特効服という出で立ちだ。何だかもう2人のこの格好に違和感を感じなくなってきた……慣れって、怖い。

そんな事を考えながらふと向かい側のソファに目を遣り、
「ツくおー!!」

私は鼻血を吹きそうになった。

長いまつ毛に綺麗な肌、照明で茶色く透けるさらさらの髪に、ほんのりピンクの唇、白い喉元　細かいパーツを1つ1つ解説して

いくとキリがないのでここで止めておくけれど　とにかく、まさしく天使みたいに可愛すぎる七緒が、そこですやすや寝ていた。

「どとどとどうしよう、めっちゃ写真撮りたい……………だ、駄目だ起きちゃうか……………」

荒くなってきた鼻息を必死で整えながら、その寝顔を間近で凝視する。

あー畜生、可愛い。悔しいけどめっちゃくちゃ可愛い。ぶどうジュースを飲んだあたりから記憶がなくて何だかよくわからないけど、この寝顔を見る事が出来ちゃったからもう大大ラッキーだ。

と、私ににんまり笑ったその瞬間。七緒がぱちつと目を開けた。

「あれ、心都……………」

「……………！　ごごめんなさいしません！　あの、可愛い寝顔だなーって思ってたちょっと見てただけで、別に盗撮しようとか取って食おうとか考えてたわけじゃないの！！　断じて！　うん！」

慌てて弁解する私を、七緒はじっと見ていた。

「心都……………もう『平常』なの？」

「は？　平常……………って？　あ、ごめん、もしかして何か迷惑かけてた？　私ってばお母さんたちと宴会してるうちにいつのまにか寝ちゃったみたいだね」

「……………」

まさか七緒、寝呆けてんのかな。何だか私を見る目に、ほんの少し恐怖の色が溶けている気がするけど……………気のせいかな？

「うわー……………何も覚えてないとかそういうオチ？」

「だから何がよ」

恐怖から変わって、今度はぐったりした表情の七緒。

「……………あー……………いや、うん。覚えてないなら覚えてないでいいや……………OKです……………」

「？」

何だか七緒は疲れているみたいだ。人間って背負って歩くとすげえ重いのかなーとか、もっと足腰鍛えなきゃなーとか、遠い目でぶつ

ぶつ呟いている。もしかして部活でそういうトレーニングが必要なのだろうか。

「あ……そういえば心都さあ」

七緒がちよつと真剣な顔で私を見た。

「……俺に対して困ってる事とかあつたりする？」

「へ？ どうしたの急に。特にないけど」

いきなり何を言いだすんだろう、この人は。

「あー、ないならいいんだけど。いや言いかけたから気になつてさ……。結局あれ何だったんだろ？」

と、首を傾げ小声で呟く七緒。

独り言が多いのは疲れている証拠だ。やっぱりこの時期、部活が大変なのかもしれない。

よし。今度何かパワーが付くものでも差し入れとして持って行ってあげよう。

私はそんな事を考えながらも頭の片隅で、やっぱりさっきの天使の寝顔は写真に残しておくべきだったなー、と激しく、本当に激しく後悔したのだった。

ゆっくりと、イヴの夜が更けていく。

2&1t:愛と、若さと、お花畑>t: (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

これで本当の本当にクリスマスのお話は完結です。だらだら続きすぎて自分でも呆れ気味です。

1 & 1 t ; お誘いと、葛藤 & g t ;

私の1番の友達である栗原美里は、
校内きつての美少女で、

小悪魔で、

たまにキツくて、

でも結構優しくくて、

楽しい事が大好きで、

そしてちよつと謎めいている。

そんな子だ。

「へえ、じゃあ次のクリスマスの約束も出来ちゃったんだー。やる
じゃない心都」

と、アイステイラーのストローをくわえながら美里。

「えへへ。でしょ？」

「偉い偉ーい。でもそのにやあつとした笑いはやめなさいね」
につこり笑って、彼女は私をたしなめた。

年が明けて4日目。今日は女2人でプチ新年会（？）ということ
で、ちよつと豪華にケーキ屋でティータイムだ。

町で評判のこのお店のケーキは確かにすごくおいしかったけど、
私は1番小さなケーキ1個で涙涙の我慢をしておいた。実は正月、

お餅のせいで少し体重が増えたのだ。

「なーんだ、私と田辺君ほったらかしてる間、結構うまいこといつてたのね。心配して損したー」

と、可愛いピンクの唇を突きだして美里が言った。だけど私はにやけ笑いが止まらない。

「えへ、ごめんごめんー。別にほったらかしてたわけじゃないんだけど……。美里はその間どうだったの？」

私が尋ねると、美里は笑顔で答えた。

「田辺君でなんであんなにやつかましいのかしらね」

うん、目が笑っていません。あんなややこしい奴と2人きりにしやがって疲れんだよ畜生、というオーラがむんむんに漂っている。

たまらなくなった私はもう一度「……すみませんでした」と頭を下げた。

「ああ、そうそう。心都に言おうと思ってたんだ。クリスマスパーティーの時に田辺君が遊園地誘ってくれたんだけど、私と、心都と、七緒君と、田辺君の4人で行かない？」

突然の美里の提案に、私はしばし固まった。

七緒と遊園地か……。小さい頃はよくお母さん達に連れていってもらったけど、最近はそんな機会全くなかった。そういえば小学生の頃は私も七緒も遊園地が大好きだったな。私は「大人になつたらここに住むんだもん！」なんて言っつて、変な時に余計な現実的さを発揮する七緒から「……さすがに住むのは無理じゃねえ？」と突っ込まれて。最終的には大喧嘩になったっけ。ふ、昔は結構可愛かったじゃん私。

「何にやにやしてんのよ。行くの？ 行かないの？」

幼い頃の思い出から我に返ると、半眼の美里が私を見ていた。

私は慌てて返事をする。

「うんっ行きたい行きたい！ すごい行きたい！」

意気込んで身を乗り出す私を見て、美里が両手を合わせた。

「よし、じゃあ明日の朝9時に改札ね」

「オツケー。……って明日？ 急すぎじゃない？」

「なんか七緒君の部活のオフ日がもう明日しかないらしいのよ。田辺君が言ってた」

「へえー……」

「そうなのか…… 大変だな、柔道部。それじゃあ急でも仕方ないか。ん、わかった。どうせ私はいつでも暇だしね。じゃあ明日って事で。楽しみだね！」

「楽しみね。心都、頑張つてよ」

「へ？」

「またもや美里が小悪魔的な笑みを見せた。」

「遊園地なんてデートの定番じゃない。良い雰囲気になれる機会満載よ。これをチャンスと言わないで何をチャンスと言うのよー？」

「で、でえと？」

「声が裏返ってしまった。」

「だってさつきも言ったように、七緒と遊園地なんて過去に腐るほど行っている。そりゃまた一緒に行けて嬉しいに決まっているけど、そんな今更特別に気合い入れるほどの場所でもない気が…… あれ、もしかして私、恋する乙女失格？」

「うじうじと葛藤を続ける私の心中を読み取ったかのように、美里が目をすくめた。」

「なあに、まさか心都、また変に悩んでるわけ？」

「……う、いや、えっと」

「七緒君と遊園地に行けるって事に対して、何か闘志みたいなものはないわけ？」

「いや……その……。あ、どきどきはしてるよ？ 内蔵ひっくり返るくらい恐い絶叫マシン乗りたいなあ、ぎゃぎゃー叫びたいなあ、とか考えるところ胸の高鳴りが」

「あんだ失格！ 大失格！」

「びしっ、と効果音が聞こえてきそうなほど鋭く、美里が私に人差し指を突き付ける。」

「だ、だいしつかく……」

容赦ないその言葉にかなりのダメージを受け、私は思わずクラックときてしまった。

椅子から転げ落ちそうになりながらもなんとか持ちこたえた。

「だ、だつてさあ美里、頑張るつて言つても、七緒と遊園地なんて何回だつて行つてるし……そりゃあ何か進展したらいいなとは思つけど、今更つて感じだし……」

ぐさつ。

明らかに強すぎる力で、美里が手にしたフォークをチーズケーキに思い切り突き刺した。

「……っ」

ひい、と声にならない悲鳴が私の喉からもれる。

そういえば彼女は、デリカシーのない人間ややかましい人間に並んで、優柔不断な人間が大嫌いなんだつた。

「余計な事ばかり気にしちや駄目よ？」

「は、はい」

美里は微笑みながら言う。

「七緒君の事、本当に、大好きなんですよ？」

「……はい」

「誰かを心から好きになれるつてすつごく素敵な事でしょ？ だから、その気持ちは大事にしなきゃ。うじうじ悩んでちやもつたいないじゃない」

これも小悪魔美少女の為せる業だろうか。なんだか美里の言葉には重みがある。

もつたいない、か。……うん、本当だ。

私は素直に頷けた。

確かに遊園地なんて、恋人同士のパラダイスじゃないか。

七緒とジェットコースターで叫んだり、メリーゴーラウンドで優雅に回つたり、あわよくば観覧車で良い雰囲気……と、考えだしたら止まらない妄想をなんとかストップさせ、頭を正常に戻す。

明日、いつちよ頑張ってみようかな。

にっこり笑顔の美里に見守られながら、そんな気持ちが生えた、
ケーキ屋の昼下がりであった。

2&1t:自からウロコと、相棒誕生>

きつかり9時10分前。待ち合わせ場所に着くと、そこには既に1人、先客がいた。

「おーっす杉崎！」

年中お祭り男・田辺は案の定朝からハイテンションでぶんぶん手を振っている。

「おはよー……」

私もあくび混じりで挨拶を返す。

情けない事だけど、昨日の夜はほんのり緊張してしまい、なかなか眠れなかった。これも美里がケーキ屋で余計なプレッシャーをかけたせいだ。まったく小悪魔美少女の言葉には妙に重みがあつて困る。

「なんだよ元気ねえなー。しよっぱなあくびとか、テンション下がるだろ！ もつとこう、今日はわくわくするね！ みたいなさー……」

「田辺は朝から元気だね」

「あつたりめーじゃん！ 見ろよオイ、この澄み切った青空、程よい冷氣！ 絶好の遊園地日和じゃんかワハハハハハハハハ！」

ごめん、美里。クリスマスパーティーのあの日、田辺と2人きりにさせられてしまった貴女の苦しみが今ならよくわかるよ。

この人マジでやつかましいわ。

「そうだよなー、そりゃ嬉しいよね。私と七緒のおまけ付きとはいえ、憧れの美里と初めてのデートだもんねー」

「そうそう今日は俺と栗原の記念すべき初デー………って、はあー！？ な、なな何言つてんだい、お、お前さん！」「うわー、明らかな動揺。『お前さん』って……今更キャラ変更ですか。」

私は呆れて田辺の顔を眺めた。

「な、何だよその目はっ。別に俺は、栗原の事が、その、すすす好きとかそんなんじゃないぞ」

と、赤黒い顔の田辺。うわ。この人、普段からあれだけあからさまな態度をとっておいて、自分の気持ちが周りにバレていないと思っ込んでいるらしい。

「田辺、そんな隠さなくても……ていうか今更隠されても。あなたの気持ちなんて多分、美里以外全員知ってると思うよ？」

……いや。可哀想だから言わないでおくけど、もしかして美里だっけ知っているかもしれない。

焦った表情の田辺は冬だというのに汗だくだ。

「ええ！？ な、何言ってるんだよっ。俺そんな態度は1回も……

……っというか、その言葉そのまま杉崎に返すわ！」

「……へ？」

やばい。一気に攻守交替か？

私の動揺を見逃さなかった田辺は、にやりと笑う。

「そっちこそ、杉崎の気持ちなんて周りから見りゃバレバレだぜー

？ まああの東は鈍感だから気付いてないみたいだけどもさ」

「な、ぬっ、な……っ」

もう言葉にならない。私は酸素を求める金魚状態。

「杉崎、もしかして誰にも気付かれてないつもりだった？ いっつ

もあんな顔で東の事見つめといて」

「あ、あんな顔って……？」

今度は私が異常な量の冷や汗をかく番だ。

「そーだな……例えるなら『美少女を狙う変態』。」

こりゃ我ながら上手い表現だ、と満足そうに頷く田辺。

私は思わず膝をついた。前にもどこかで聞いた事あるぞ、その例え。

「まあそう落ち込むなよ」

「落ち込むよ！」

単純だと思っていた田辺ごときに恋心を見抜かれていて、しかも

その原因が七緒を見つめる変態顔だなんて。落ち込まない方が無理だ。

……ふん。華ちゃんは、恋する女の子の顔だって言ってくれたもん。華ちゃんの言う事の方が絶対正しいもん。だって華ちゃんは誰よりも純粋な子だもん。

とりあえず強引に自分自身を励まし、折れそうな気持ちを立て直した。

そんな私を見て、田辺がふと言った。

「じゃあ今日は俺たち、お互い好きな相手に接近する大チャンスってわけだな」

「……そーいう事になるね」

田辺はしばらく宙を眺めて何か考えていたけど、やがてポンツと良い音で手を鳴らした。

「じゃあ俺たちが手を組んで協力し合ったら最強じゃね？」

「え」

「お互いの好きな相手とはマブダチなわけだしさっ！　なんか上手いことラブチャンス作れそうじゃん！」

マブダチだのラブチャンスだの、恐らく普段聞いたら若干恥ずかしさを覚えるであろう単語を並べ熱く語る田辺。

が、幸いな事に（？）私たちはもはや正常ではない。

自分の目からウロコが落ちる音を聞いた気がした。

「……っ確かに！　うちらが組んだら最強コンビだよ田辺！」

「だよなあ！　やべっ我ながら超名案！」

「田辺天才！　最高！　よっ男前！」

「照れんじゃん、そんなに誉めんなよーハハハ！」

ひととおりテンションを上げきった私たちは、顔をすっかりと見合わせる。

お互い、その目にあるのは、好きな人への真っすぐな想いだけ。

「よっしゃー！　今日はよろしくな相棒！」

「おうよー！」

私たちはガシッと握手を交わす。

「わりー、待たせ……」

と、後ろから聞き慣れた声。

振り返ると、七緒と美里が目をぱちくりさせて立っていた。

「よつ東、栗原！ タイミングいいな！」

「いや、さつきそこで偶然会って一緒に来たんだけど……2人、なんで握手してんの？」

「ふふふ、友情の証ってやつかな。ね、田辺」

「おう！」

不思議そうに首を傾げる七緒と美里をよそに、笑顔で頷き合う私たち。

ここに、田辺悠斗と私杉崎心都による『いちちょラブチャンス作っちゃんおっじゃん同盟（田辺命名）』が結成されたのだった。

うん。

ラブチャンスとやら、搦んでやるっじゃないですか。

3&1t:夢の国と、2つ目の同盟>

ドリームランドへようこそだぴょん！　ボクはマスコットキャラクターのウサゴリだぴょん　よろしくぴょん！　この園内に一カ所だけボクの頭の形をした石が壁に埋め込まれている場所があるぴょん！　奇跡的に見つけられたあなたは願い事が叶うぴょん！

それではドリームランドを心ゆくまで楽しむんだぴょん！

看板に書かれた文章を読みながら、私は遊園地の入り口の門をくぐった。

そのぴょんぴょんやかましい台詞の横には、頭は兎、胴体はゴリラというシユールなキャラクターが描かれている。ウサゴリ……今流行りのゆるキャラってやつだろうか。

冬休み最後の日曜日ということもあって、遊園地はかなり混み合っていた。

「うわ、すげえ人の数」

「見て見て。あれ、120分待ちだつて」

美里が指指した先を見ると、ジェットコースターの前にずらりと並ぶ人の列があった。確かここの遊園地のジェットコースターは「速い・長い・怖い」という三拍子のコンセプトをラーメン屋ばりに掲げていて、国内でも三本の指に入るほどの恐怖レベルと評価されていたはずだ。

「さすがに120分は待ちたくないよな」

「じゃあ後で空いた頃を見計らって乗らない？」

私の提案に、美里がにっこりと笑った。

「そうね。お昼過ぎにパレードがあるから、きっとその時はどの乗り物も比較的空くはずよ。その時を狙ってまた来てみましょう」

「うん、賛成」

七緒もこつくりと頷いた。

「よし、じゃあ最初にどこ行こっか？」

私が入り口の前でもらったパンフレットを広げると、美里が長い髪を揺らして覗き込んだ。その表情は誰よりも輝いている。

「多分どこも、このジェットコースターほどは混んでないと思うのよね。あ、ここは？ 『ウサゴリ雷落とし』！ ビル10階分の高さから座った状態で真下へ一気に落下します、だって！」

「おお、しよっぱな落下系いっちゃう！？ 落ちちやう！？ 好きだねー美里も！」

「ふふふ！ そういう心都こそ、さつきから目線が『ウサゴリの空中音速トレイン』で止まってるわよー」

「あ、バレた？ ここの後で行こうよ！ それとこれも気になるんだよね、『ウサゴリ三時のコーヒーブレイク』！ 常識を越えた回転力のコーヒーカップ、失神覚悟！ って書いてあるよ！」

「きゃー！ 何それ絶対行くー！」

盛り上がる私たちをよそに、男子2人はポカンとした表情でその場に立ち尽くしていた。

「あ、七緒と田辺は何に乗りたい？ じゃんじゃん言っちゃってよ！ 七緒は昔からジェットコースターとか平気だったもんね」

「……あのさ、もしかしてここの遊園地ってそういうのが売りなの？ 落下とか高速とか回転とか」

目を真ん丸くして七緒が問う。

「そうよ。ドリームランドって言ったら、絶叫マシンの数の多さで有名じゃない」

「へー、知らなかった。それにしても、栗原がそういうの好きだなんて、なんか意外」

七緒の言葉に、美里は更に目を輝かせた。

「ふふ。私、絶叫系とか三半規管刺激系、大っ好きなの！ だから田辺くんがここのチケットくれたとき、とっても嬉しかった……田辺くん？」

「……………」
田辺は放心状態で、数十メートル先のジェットコースターを見つめていた。

それはまさに今ものすごい高さから車体が落ちた瞬間で、乗客たちの断末魔の声私たちのもとまで聞こえていた。いつもは黒い田辺の顔が、心なしに青白い。

「あら、田辺くん、もしかしてこういう絶叫系の乗り物苦手…………？」
「……………」

「おーい、田辺ってば」

私が脇腹を小突くと、彼は我に返ったようにこちらを向いた。

「はっ！ なに、絶叫系！？ もっ…………もちろん大好きだよ！ 俺、将来自分の家の屋上にジェットコースターとバンジージャンプ作りたいと思ってるくらいだし！ わははは！」

「わー、私も全く同じ夢持ってる！ 気が合うわね、田辺くん！」

と、美里が田辺にとびきりの美少女スマイルを向けた。美里、大好きな絶叫マシーンに囲まれてかなりの上機嫌なんだろう。普段の彼に対する冷淡ともいえる態度とは、激しくかけ離れている。

だから田辺の顔は見る見るうちに赤く染まり、でれっとした締めりのない表情になった。

「お、おう！ 絶叫にロマンを持たない奴なんて男じゃないよなっ」

「田辺くんってば話わかる！ さすが！」

美里の声がいっそう弾んだ。しかも田辺を誉めているという珍しい事態だ。これを逃すわけにはいかない。私は『いつちよラブチャンス作っちゃおうじゃん同盟』の相棒として、田辺に更なる良い波を与えようと、彼の肩を叩いた。

「そうそう！ 田辺、『三半規管の鬼』っていう異名があるんだもんね！」

「え？」

「こないだバスケット部の人たちが噂してたよ！ 『あいつは重力を自在に操る、あいつに乗りこなせない絶叫マシーンはない』って！」

さすが鬼だね！」

「ええっ、そうなの？ 田辺くん！」

美里がきらきらした瞳で田辺を見つめた。

「うっ……。も、もも、もちろん！ 鬼とは俺のことだ！ よーし早く行こうぜ！ その、ウ、『ウサゴリ雷おこし』とやらに！」

雷落と시다よ雷おこしって浅草名物じゃん、という七緒の突っ込みは、ナチュラルハイな田辺の耳には届いていないようだった。どさくさ紛れに美里の手を取って、どんどん先へと進んでいく。

その後ろを少し遅れて、私と七緒はついていく形になった。

「美里、同志が見つかったって嬉しそうだねー。田辺にいつもの10倍くらい優しいもん。あ、さすがに手は笑顔で振り払ったけど」

「いや、同志つつーか、あれは……」

「え？」

「……なんでもない。なんか俺あいつが不憫になってきた」

珍しく七緒が中途半端に言葉を濁す。

「不憫？ 何が？」

私の頭は疑問符でいっぱいになったけど、七緒はそれには答えず、ただただ哀愁漂う表情で友人の背中を見遣った。

『ウサゴリ雷落とし』の乗り場へ着くと、そこは美里の予想通り、ジエットコースターより遥かに空いていて、「20分待ち」の札が掲げられていた。

「20分ならあつと言う間にまわってきちゃうね」

「そうねえ、なんなら3回くらい連続で乗れちゃうわね！」

「美里ってば、攻めるねー！」

私たちは順番待ちの列に加わりつつ、『ウサゴリ雷落とし』の全体像を見つめた。

それはパンフレットの説明通りビル10階分ほどの高さの四角い鉄塔で、先端には大きなウサゴリのガラス像が燦然と輝いていた。そして鉄塔のそれぞれの辺に椅子が1つずつ、つまり4人分用意さ

れている。これに座ってゆつくりと頂上まで上り、そこから一気に地面へ落下するという仕組みだ。

「うわー…間近で見ると、すごい高さ…」

と、鉄塔を眩しそうに見上げて七緒。

「あれ？ 田辺くん、なんか震えてない？ どうしたの？」

「っ！ む、むむ武者震いだぜ！ わくわくするぜ！」

少年漫画の主人公のような口調の田辺の体は、確かに細かく震えていた。武者震いだなんて、よほど楽しみなんだろう。さっき私が口からでまかせで言った異名も、案外真実に近いのかもしれない。

「ねえねえ心都、これ頂上までいったらどんな眺めかしらね？」

「きつとすごい綺麗なんだろうね。夜にもまた乗りたいね！」

「それ、いいわね！ 落下系の絶叫マシーンは日が落ちてからまた乗る、これ鉄則よね」

「ねーっ」

私と美里は『ウサゴリ雷落とし』を眺めながらあれこれお喋りに花を咲かせていた。

だから、その時私たちの後ろで、七緒と田辺が小声でどんな会話を交わしていたかなんて、全く知る由もなかったのだ。

* * *

「……おい田辺。お前平気なのか？ どころからどう見ても絶叫マシン苦手な人代表みたいな感じだけど」

と、東七緒が田辺悠斗に囁いた。

「あ、東……！ お前気づいてたのっ？」

肌は青ざめ目は潤み、全身を恐怖で震わせたままの田辺が、同じ

く小声で言う。

「……この状況で全く気づかないあの2人の方が異常だと思つよ、俺は」

幸いなことに前に並ぶ心都と美里はお喋りに夢中で、彼らの会話は届いていないようだ。

「……だって、栗原の手前引つ込みつかなくなつちやつてさあ……あんなきらつきらした目で見られたら、『絶叫マシーン無理』なんて言えるわけねーじゃんっ」

「だからってあんな嘘つくことないだろ……。そもそも、ジェットコースターにも乗れないのになんで遊園地のチケットなんてプレゼントしたんだよ？ 自分からアウェーな場所に飛び込んでどうすんだよ」

七緒の意見はもつともだった。今回の計画は、田辺が美里にクリスマスプレゼントとしてこの遊園地のチケットを贈ったことから始まったのだ。

「だってデートの定番スポットといえば遊園地だしさ……。知らなかったんだよ、こんな国内屈指の絶叫マシーンだらけの地獄のような遊園地だなんて……。俺はただ、栗原とファンシーにメリーゴーランド乗ったりロマンチックに観覧車乗ったり、アイスを『あーん』で食べさせてもらいたかっただけなんだよ……」

「はあ？ アイスって、いま真冬ですけど」

「それに栗原が、あんなに可憐で美しい栗原が、まさかあんな恐ろしい絶叫マシーン狂だなんて、誰が想像できるんだよ？ 俺、てつきりイメージ通り『きゃあ怖ーい。あたしジェットコースターとかホント無理ー』なタイプだと思ひ込んでたんだよ」

「お前の猪突猛進ぶりは、感動すら覚える領域だな……」

七緒が、若干の尊敬と多大な哀れみの混じった、なんともいえない表情で田辺を凝視した。

「誉めるなよ照れるじゃねーか。とにかくこうなった以上、俺は三半規管の鬼として今日1日を過ごすしかねえんだよ。そしたら栗原

も楽しめるだろうし、さらに俺の株も上がって良いこと尽くめだ」

「1日バレないでいけるわけ？」

「……………多分」

「多分かよ」

七緒が鋭く言うと、田辺は途端に縋るような目をした。

「そんな冷たい言い方すんなよー。東が本当のこと知ってくれてるだけでもかなり心強いよ。なんかあったら協力頼むな」

「なんだよ協力って」

「……………具体的にはわかんないけど。とにかく俺が三半規管の鬼を演じるのを手助けしてくれってことだよ」

田辺の穴だらけな言い分に、七緒はがっくりと肩を落とした。

まだ朝だというのに、今日1日の疲労を想像して既に頭が痛い。

ここに、男2人による『田辺悠斗くんを三半規管の鬼にしちゃおうじゃん同盟』が強制的に結成されたのだった。

3&1t:夢の国と、2つ目の同盟>:(後書き)

しばらくインターネットから遠ざかっていましたが、また徐々に書き始めたいと思っています。既に前回投稿が三年も前になってしまっていますが、読んでいただければ幸いです。

4 & 17 : おかしな2人と、ランチタイム & get ;

「あー！ 超面白かったー！」

『ウサゴリ雷落とし』の落下を終え、地上に降りたつた瞬間、美里が満足げに言った。

「すごい良い眺めだったねー」

「本当にね。やっぱり暗くなったらもう1回乗りたいわね」

ビル10階分の高さに匹敵するという鉄塔の頂上からの眺めは素晴らしかった。夜になったら相当美しい夜景が見られるはずだ。

「ねえ、七緒と田辺も、また夜に乗……」

そう言いながら私は後ろにいるはずの男子2人を振り返ったのだが、

「……………」

言葉が後に続かなかった。

そこには七緒と、燃えつきた灰がいた。

「……………え。なんか、田辺どうしたの？ 死にそうになってない……………」

「い、いやいや、なっていないよ！ 田辺は全然死にそうになってない！」

そう答えたのはなぜか七緒のほうだった。やたら声が大きい。

当の田辺はというと、顔面蒼白を通り越してもはや真っ白、頭はまだ首が座らない赤ん坊のように不安定に揺れていた。ぱくぱくと口を動かしているけど、そこからは何の音も発せられない。

「……………」

「えっ、なんだって田辺？ 『この程度の落下じゃあまだまだ生ぬるすぎて退屈で、今半分眠りかけてる』って？」

田辺の顔に耳を寄せて七緒が言う。

「うんうん、そうかそうか。俺を覚醒させるにはこんなもんじゃ足りない』か。さすが三半規管の鬼だなあ、田辺！ ……ははは！」

そう言われてみれば、彼の不自然な首の動きも生氣のない表情も、眠りかけているように見えなくもない。今の『ウサゴリ雷落とし』だって、普通の人間にとつては相当スリリングなアトラクションだったはずなのに。田辺、恐るべし。

それにしても冬真っ只中の1月だというのに、七緒はなぜか汗だくだ。

「すごい、田辺くん」

田辺の鬼伝説を目の当たりにして、絶叫マシン狂の美里の瞳が再び輝きだした。美里に名前を呼ばれ、今まで半睡眠状態にあった彼は我に返る。

「はっ、栗原！ い、いやいやそれほどでも！」

「本当にこの程度じゃ全く平気なのね。さすが鬼って呼ばれてる人は違うわね」

美里はそう言つて可憐に微笑んだ。

もちろん田辺の顔には急激に赤みが戻り、にやけ笑いが広がる。なんておめでたい奴だろう。

「ま、まーな！ やっぱりこういうファミリー向けのアトラクションって万人受けするように作られてるからさー、俺にとつては朝飯前みたいなもんだよ。わはははは！ よし、さっそく次、杉崎が言つてた『ウサゴリの空中音速トレイン』行っちゃうか！」

「！」

七緒が、信じられないような表情で田辺を見遣る。

「七緒……なんか変じゃない？」

「えっ？ 俺？」

慌てた様子で私を振り返つた七緒の目は、やはり泳いでいた。

「うん。なんか挙動不審だし、汗だくだよ」

「うっ……俺、新陳代謝いいから」

「そうだったっけ？」

「そうそう。あ、ほら、田辺のやつ、また栗原の手掴んで先行っちゃうってるよ」

なんとなく誤魔化されたような気がしなくもない。けれど、

「俺たちも行こう。心都、『ウサゴリの空中音速トレイン』乗りたいんだろ」

そう言っただけで七緒が私に笑いかけ歩き出した瞬間、私の頭の中には、
なんか今のデートっぽくないか？

から始まる妄想が嵐のように吹き荒れたものだから、それ以上彼の
新陳代謝について深く考える気にはならなかった。

つまり相当おめでたい奴なのだ、私も。

「……ねえ、やっぱり変じゃない？」

美里が私の耳元で囁いた。

「美里もそう思う？」

私たちの少し前を、七緒と田辺が何やら切羽詰まった顔で話しながら歩いている。

時刻はもう昼時となった。あれから3つほどの乗り物に乗って、
その全てが絶叫マシーンというアクティブっぷりだ。絶叫マシーン
好きにはたまらないコースになっている。

が、しかし。

「うん。どう見ても変よ、今日の七緒くん」

「だよ……」

朝感じた違和感は、未だ消えないままだったのだ。

私は午前中の出来事を思い出していた。

アトラクションはほとんどが2人ずつ隣同士に乗るスタイルの物だった。そこで、『ウサゴリの空中音速トレイン』の乗り場に着いた瞬間、美里が「田辺くん一緒に乗りましょうよ」と声をかけたのだ。

小悪魔美少女と称される美里だけど、実はなかなか情に厚いところがあつて、私のなかなか進展のない恋を心から応援してくれている。つまりこれは、私と七緒を隣同士にしようという彼女の気遣いだ。

私も私で、七緒と隣だなんて嬉しくないはずはないし、何より『ラブチャンス同盟（面倒なのでもう略させてもらう）』の相棒を応援したい気持ちでいっぱいだった。

「そうだね。並外れた絶叫好き同士、田辺と美里2人で乗れば？」

ね、田辺」

すると、田辺が何か言葉を発する前に、七緒が慌てた様子でこう言ったのだ。

「いやいやいや、俺と田辺が一緒に2人の後ろに乗るから！」

その場の全員が一時停止したけど、なおも構わず七緒は続けた。

「さっき約束したんだよ！ ……えーと……乗ってるあいだ瞬きしたほうが負け、って！ だからお互いがジャツジするためにここは隣同士にしてもらわないと！ そんでなるべく風の抵抗が少ない後ろ側にしてもらわないと！ なぁ田辺？」

「お、おー」

「なんなの、その小学生みたいな勝負……」

と、呆れた様子で美里。

「し、真剣勝負なんだよ！ ……とにかくっ、田辺は俺と乗るからな！ はい決定！ この話終わりっ」

異常ともいえる七緒の勢いに押し切られ、結局その組み合わせで『ウサゴリの空中音速トレイン』に挑むことになった。

乗車の順番が回ってくるまでの待ち時間、七緒と田辺は小さな声で何やら話していて、その端々が僅かに耳に入ってきた。

「……お前……隣……気絶……バれる……」

「……も……駄目だ……」

「……泣くな……」

一体何の話なんだろうか。なんとなくしこりが残って、私と美里は顔を見合わせた。

結局その後のアトラクションも七緒の「もう一勝負させてくれ！」という願いにより、ペアの組み合わせは変わらなかった。美里と隣同士、もちろんとても楽しかったから良いのだけど。そこまで全力で田辺の隣を懇願されると、なんだか私自身が七緒に「お前の隣だけは絶対嫌だ！」って言われているみたいで少しへこみそうだ。

「七緒があんなに意見を押し通そうとするなんて、普段はないのに……」

「本当にどうしたのかしらね。田辺さんとやけに仲良しだし。なんか七緒くんぐったりしてるし」

「うーん……」

もしかして七緒、本当は今日あまり乗り気じゃなかったんじゃないだろうか。私と遊園地で一緒にはしゃいでいたのなんてもう何年も前のことだ。昨日も明日も柔道部の練習だから今日はゆっくり休みたいに違いないのに、田辺に頼み込まれ半ば無理矢理来ることになった。有り得ないことじゃ、ない。

「それにしても田辺くんは、まだ全然物足りないって感じよね」

先に行く田辺の背中を見て美里が言う。

彼はどの絶叫マシンに乗っても興奮を見せず、相変わらずの半睡眠状態になっているのだった。ひどいときなんか、よほど退屈だったのだろう、完全に白目を向いての熟睡状態だった（美里が呼び

かけたなら即目覚めたけど)。

「落下系も駄目、高速系も駄目、コーヒーカップも駄目……。ここ
に田辺を満足させられる乗り物なんてあるのかな？」

「やっぱりあのジェットコースターしかないのかしらね」

私は、朝120分という驚異的な待ち時間を掲げていた、この遊
園地の目玉ともいえるジェットコースターを思い浮かべた。

「ああ、あれそろそろ乗りたいよね」

「そうね。あと30分ちよつとでパレードが始まるはずだから……
今からお昼ご飯でも食べて、それから乗り場に行けば空いてるかも
しないわね」

確かにそろそろお腹が減ってきた。

「じゃあ、そろそろご飯にしようか」

私たちは園内に行くつかあるレストランのうち、一番リーズナブ
ルな所に入ることにした。

そこは街のファーストフード店とあまり変わらないような作りで、
お値段が良心的なこともありやはり若者が中心客層となっていた。

「ここも結構混んでるわねー」

美里が店内を見回して言った。

「あ、じゃあ美里と七緒、先に座って席取つといてよ。私と田辺が
4人分買つてきちゃうからさ」

「え？ そういうことなら俺と田辺で行くけど……」

「わ、た、し、と！ 私と田辺で行くの！」

有無を言わせない口調で私は七緒を威圧した。

「じ、じゃあ……お願いします」

うん、よろしい。ちょうど田辺と1対1で話したいこともあった
ところだ。それに何より、朝から今までのあいだで明らかに疲労が
溜まっている七緒のことがどうしても気がかりだった。

レジの列に並びながら、私は田辺に問いかけた。

「ねえ田辺。なんか今日の七緒ちよつと変じゃない？」

「えっ、そうか？」

「うん。ちょっと挙動不審だし何か隠してる感じだし、疲れてるよ
うにも見えるもん」

「そんなことないと思うけど」

あからさまに田辺が視線を逸らした。

「七緒、今日本当は来たくなかったんじゃないかなあ」

「あ、それはない。誘ったときも楽しみにしてたから。部活ば
つかりだから良い息抜きだって言ってたし」

「ふーん……」

なんとなくしっくりこないけど、そう言われたらもう頷くしか
ない。

「ところで田辺、今日の自分の目標覚えてる？」

「え、目標ってそりゃ……栗原と仲良くなることだけだ」

「でしょ？　なのに田辺、さっきから七緒にべったりじゃん」

田辺が「うっ」と言葉に詰まったが容赦している暇はない。私は
構わず続けた。

「乗り物も全部七緒の隣だし、乗り終わった後も七緒と2人ひそひ
そそこそ話してるだけだし」

「うっっ」

「美里が食いついたのだったって『三半規管の鬼』のことだけじゃん。
もつと隣をキープしてさ、色々面白い話して会話を盛り上げたり、
気の利いたこと言ったりしなきゃ」

「それはわかってるんだけど……ちょっと色々限界で……」

「えっ？　何？」

「いや……三半規管と胃が……」

なんだこいつ。いつものやかましさはどこへいったのだろう。も
ごもごと喋るばかりでハッキリしない田辺との会話を進展させよう
と努力しているうちに、レジの順番が回ってきてしまった。

トレイにそれぞれ2人分の軽食を乗せて、美里たちがとってくれ
ている席に向かい歩き出す。

「だから、とにかく……もう少しチャンスを活かさないか。そりゃ

私だって人のことと言える立場じゃないけど、今日1日田辺のこと応援してるよ。美里、今日は奇跡的にいつもよりだいぶ田辺に優しいしさ」

「最後の言葉は余計……」

と、田辺が言いかけて足を止めた。パツ、と両手を離れたために彼が持っていたトレイがそのまま落下した。

「ぎゃっ馬鹿！」

すんでのところで私が片手でキャッチし、大切な食事は無駄にはならなかった。この反射神経、ちよつと自分で自分を誉めてあげたい。

「あ、危ないじゃん！ 何してんの田辺」

「杉崎、あれ見て、あれ……」

本日二度目の白目状態となった彼が指さす先を追うと

「よっ、おねーちゃんたち、どつちも超かわいいねー！ 2人で来てんのー？」

美里と七緒が、やたら眉の細い茶髪の男2人組に声をかけられている瞬間だった。

ナンパ。

誰がどう見ても、ナンパである。

校内きつての小悪魔美少女である美里と、七不思議になってしま
うくらい可愛い見た目を持つ七緒。その2人が並んでいるのだから、
そこから放たれる輝きは生半可なものではない。

当然、ナンパなんかされてしまっても、おかしくないわけで。

「おねーちゃんたち、ほんとかわいいねー！ オレたちと一緒に食
べない？ おごっちゃうよ？」

語尾を急なタイミングで軽々と持ち上げる、不愉快極まりない口
調で、その男は言った。見た目からして高校生くらいだろうか。に
やにやとした嫌な笑みを浮かべている。

「……………誰がおねーちゃんだよ。どっからどう見ても男だろ
うがよ」

対して、地獄の底から響いてくるような声で、七緒。

イラつきを隠そうともせず、完全に目が据わってしまったている。
無理もない。彼が男からナンパされるのはこれで5回目にもなる。
ただでさえ普段から女の子に間違われるのを嫌がっているのに、こ
う不躰に絡まれてはたまらないだろう。

「ははは、そんな可愛い顔で何言ってるの？ 冗談きついよー！
ねえ名前教えて？」

「うるせーこつち来んなハゲ」
いやいや禿げてない禿げてない。多分、その場の誰もが心の中で
突っ込みを入れた。ナンパ男は明らかに髪の毛ふさふさで、いわゆ
るチャラ男の「盛られた」ヘアースタイルだ。

隣の田辺は私の左腕を掴んでガクガク揺すった。

「や、やべー、どどどうする杉崎……………！ 栗原と東がチャラ男の毒
牙に……………」

「田辺、とめてきてよ」

「そ、そうだよな。ここは俺が……」

と、涙目になりながら田辺は美里のほうを心配そうに見遣った。美里はというと、七緒に絡んでいるのとは違うほうのナンパ男の相手をしていた。やはり慣れたもので、口元につつすら微笑みを浮かべながらときとくな返答をしている。その目は冷たくて全く笑っていないけれど。

「髪長い彼女、どこから来たの？」

「家から」

「名前は？」

「アントワネット」

「アイドル並に超可愛い顔してるよね」

「よく言われます」

さすが小悪魔、と言うべきか。やはり美里は余裕たっぷりで強かった。

そしてその傍らでは、

「ねー、一緒に遊ぼうよ」

「……っだから、迷惑だつて言つて……」

余裕も欠片もない七緒、肩に手をかけられ爆発寸前。

やばい。これは、一刻も早くとめなくては。

「田辺……そろそろ本当に中に入らないと、七緒がブチ切れる」

呼びかける私の声が聞こえているのかいないのか、田辺は青ざめた顔のままふらふらと一歩ずつ前へと踏み出した。

そしてナンパ男たちへ声をかける。よし、男見せる！

「……き、君たち、やめたまへっ！」

誰だよ。私は思わずその場にしゃがみ込みたくなってしまった。

「あーん？ なんだテメー」

「ふ、2人とも嫌がつてるだろ」

「関係ねえだろテメー」

「……！」

胸ぐらを掴まれてしまった田辺は白目をむいてガタガタと震えている（そういえば彼は以前、禄朗にも胸ぐらを掴まれて脅されて、ぺろっと七緒の個人情報を喋っちゃったりしていたな）。

このヘタレ！ 私は心の中で叫んだ。

状況は最悪だ。美里と七緒はナンパ男にべつとりまとわりつかれ、田辺は威嚇されて固まっている。

腹をくくる覚悟を決め、私は4人分の食事を抱えたまま、彼らの元へと歩み寄った。

「美里りん、七緒たん！ お待たせだぴょん！」

普段より1オクターブ高い声で私は言った。

その場の全員が、愕然とした表情でこちらを見る。心が折れそうとか自分が嫌いになりそうとか、そんなことは気にしていられない。私は全ての感情を捨てた。

「レジが混み混みで、並び疲れちゃったぴょん！ 母の国ではこんな行列ありえないぴょん、プンプン！」

目の前の机に、ドンツと派手な音を立ててトレイを置く。

美里が七緒に小さな声で尋ねているのが聞こえた。

「心都、どうしちゃったのかしら？」

「あれは、心都の最終奥義『痛い系女子になりきる』の技だ……！ 昔、俺がしつこい男に絡まれた時も、この技で助けてくれたんだよ」

「わぁ、素敵ね」

素敵かどうかはわからないが、ナンパ男2人は明らかに口数が減り、顔色も悪くなっている。ちなみに今日のこの口調は、ここドリームランドのマスコットキャラクター・ウサゴリから着想を得たものだ。

私は今、足はひどい内股、上目遣いを通り越して恐らく三白眼状

態、舌の先をちよつぴり出してやんちゃさをアピール中。きつと彼らから見たらちよつとした妖怪だろう。

「あれれ？ こっちの2人は、新しいお友達だびよん？」

「ヒッ」

私が1歩近づくと、男たちは2歩後ずさる。

「初めましてだびよん！ 苺の国の妖精、心都つちだびよん！ 好きな食べ物は苺の苺ソース添え！ よろしくだびよん！」

しまった、気合が入りすぎて語尾が「びよん」になった。しかしそんな小さなミスも、ナンパ男を震え上がらせるには全く支障のないことのようにだった。

「やべえ……！ こいつ痛い……痛すぎるっ！」

「オレ無理！ 関われない！」

そう言つと男たちは脱兎の如く走り出し、店を出ていった。

大成功だ。私はホツと胸をなで下ろした。これをやれば、大抵の男は逃げ出す。今までもこの技で七緒を救ってきたんだもの。そのたび何か大きなものを失う気がしなくてもないけれど。

可愛い幼馴染みと親友を持つと、苦勞が耐えないのだ。

「ありがとう心都ー」

きゅ、と美里が細く白い指で私の手を包んだ。

「もう、あの人たちしつこいからちよつとイライラしちゃった」

笑顔で語る美里だけど、さっきナンパ男と話していたときの彼女の目が、今までにない冷たさを放っていたのを私は見逃さなかった。やっぱり嫌いなんだろうな、ああいうチャラチャラした男。

「この技の完成度の高さには本当にびっくりだよ。心都様々だよな」
七緒が両手を合わせて私を奉るように拜んだ。この可愛い顔を持つ幼馴染みのせいで、私の技は年々上達せざるを得なかったのだけど。きつと本人に言ったら怒るだろうから、その言葉はそつと胸にしまった。

「あれ、そついえば田辺は？」

いつの間にか姿が見あたらない。どこに行ったのだろうか。

「……………」

何やら、足元の方から呻き声が聞こえてくる。

不審に思った私が視線を下にやると、そこには、隣の空席の机下に地震訓練よろしくうずくまる田辺の姿があった。その顔には生気がなく、まるで死人のようだ。

「ぎゃーー！」

「……………よ、杉崎」

「よ、じゃないでしょ！ あんた何してんすか」

しゃがみこんだ私を、田辺が虚ろな目で見つめ返す。

「……………杉崎、俺はもう駄目だ……………。今日ひとつもいいところ見せられないし、栗原にたかるナンパ男の1人や2人も追い払えない……………」

「え、ちよつと何言っ……………」

「今世紀一のヘタレ野郎だよ、ハハツ……………なんか心折れた気がする……………。俺、同盟脱退するわ……………」

そう言つて田辺は乾いた声で自嘲気味に笑つた。

その顔はあまりにも悲しそうで、寂しそうで、だから

「……美里、七緒！ ちょっと田辺借りる！ 先にご飯食べてて！」
何事かと後ろから覗き込む2人にそう叫ぶと、ガシツと田辺の首根っこを掴んで、そこから引きずり出すという強引な手段を取つた。

「ぐー！」

思ったより強い力になつてしまつたらしく、田辺が潰れた蛙のよ
うな声を出したけど、もうそんなことは気にしていられない。

呆氣にとられた表情の七緒と美里をその場に残し、私は田辺をレ
ストランの外まで引きずつていった。

私が手を離すと、田辺は情けない顔で首元をさすつた。

「うう、何すんだよー杉崎……」

「こつちの台詞だよ！ 同盟脱退つて何！」

今朝、2人で結成した『ラブチャンス同盟』。こつ恥ずかしいネ
ーミングセンスまで披露して、やる気満々だったはずの田辺なのに、
今はすっかりしよげた様子で俯いている。

「……今日でわかつたんだよ……俺は栗原には釣り合わない男だつ
てさ……」

まるでこの世の終わりのような声。

「……最初から無理な片思いだったんだよな。栗原可愛いし、人気
あるし、俺は駄目な奴だし、あと趣味嗜好も俺と真逆だし……好き
になつたのが間違いだったんだ……」

「……」

「可能性ゼロだよ……ハハツ……俺、今まで身の程知らずだったけ
ど、もう諦める。だから杉崎、俺の分まで東とのラブを頑張っ……」
気がついたら、私の右腕が自分でもちよつと驚くくらいの速さで
動き、田辺が数メートル吹っ飛んでいた。

「この大馬鹿ヘタレ野郎！」

「じぶつ！ ちよつ……、このタイミングでエルボーはありえな……」

「うっさい！ 田辺の馬鹿、阿呆、間抜け、かりんとう！」

「か、かりんとう!？」

「色黒いから！」

もつとも、今は生気のない白色になっているけれど。

私は田辺の目を見据えて言った。

「釣り合わないとか、可能性ゼロとか言うな！ そんなの田辺が勝手に自分で決めてるだけじゃん！ …… 田辺は誰に恋してるの？」

美里でしょ？ 美里は可能性ゼロなんてこと一言も言っていないよ！」

「でも……」

「でももだつてもあるかー！ 同じ世界に生きてんだから可能性ゼロの恋なんかないんだよヘタレ！ 諦める理由を数えてる暇があったら、振り向かせる努力をしたほうが何倍も有意義でしょうが！」

ああ私、めちやくちや偉そうなこと、言ってるな。そう自分でわかっていても、言わずにはいられなかった。

何故か私のほうが、少し、泣きそうだ。

「相手が可愛すぎるとか釣り合わないとか、そんなことでくよくよしてたら前に進めないんだよ！ そんな暗い田辺よりも、いつもみたいに年中お祭り男のやかましい田辺のほうが、だいぶ素敵だと思っ！」

今の田辺はまるで、たまに心に現れる弱気な私の姿そのものだった。相手と自分の格差に落ち込んで、勝手に可能性を潰してしまう。諦めようとしてしまう。

そんなことより相手を好きだつていう気持ちのほうが、よっぽど強いくせに。

だからこれは、田辺と私自身に対する喝だ。

「杉崎……」

私の肘がクリーンヒットした頬をおさえながら、田辺は立ち上がった。その目はさっきまでとは比べ物にならないくらい澄んでいる。

「お前……なんつーか男前だな……！」

「そりゃどーも。……一緒に頑張ろうよ、田辺」

フツと笑うと田辺は勢い良く右手を差し出してきた。

「おかげで目が覚めたぜ！　さんきゅー相棒！　そうだよな、いつもの俺らしく頑張るしかないよな！」

「おうよ！」

朝同様、私たちは固い固い握手を交わした。

激しく落ち込んだ後に一気に立ち直ってテンションが上がるところも、なんとなく自分と重なるものがある。私と田辺って、もしかして結構似ているのかもしれない。だからなおさら、自分のことのように熱くなってしまうんだろうな。

「あ、でも、もしこの先万が一美里が『田辺くん嫌だマジ無理キモい関わりたくない』って言い始めたら私は全力であんたの接触を阻止するけど」

「おい」

だって私、田辺の盟友である前に、美里の親友だから。

* * *

「心都と田辺くん、遅いわねー」

「うん。何してんだろうな」

東七緒と栗原美里は不思議そうに顔を見合わせた。

先に食べておいて、と言われたものの、やはりそこは友情か、そ

れとも単に食欲がないのか、律儀に心都と田辺の帰りを待っている2人であった。

トレイの上のアイステイはすっかり氷が溶けきっている。そのストローの先をちよいちよいとつつきながら、美里は言った。

「ねえ、さつきから思ってたんだけど。田辺くんって……」
「ん？」

「……やっぱり何でもなーい」

ますます訝しそうな顔になる七緒。彼女、良い奴なのはもちろん知っているが、なんとなくなつかみどころのないクラスメイトだ。

そんなことを気にも留めない様子で、美里は話題を変えた。

「七緒くんは遊園地来るのって久しぶりなの？」

「あー、うん。小さい頃はよく心都与家族ぐるみで来てたけど、それも5年くらい前の話だし」

「そうなんだ。心都与七緒くんって、本当に昔から仲良しなのね」

「仲良しっていうか……幼馴染みだし、母親同士仲良くて、まあ兄弟みたく育ったから」

「兄弟？……男兄弟ってこと？」

「うん、なんかどっちかというとなんな感じなんだよな。変な気イ使わないっていうか……」

チツと美里が舌打ちをしたような気がして、七緒は少しひるんだ。しかしコンマ数秒後には、やはり元の笑顔の美里に戻っていたので、気のせいか、と自分の中で結論づけた。

「ねえ、七緒くん。2人が戻ってきたら、私、ちよつとだけわがまま言ってもいいかしら？」

「わがまま？」

「うん」

まさに小悪魔といった感じの微笑みで、美里が頷く。

「わがままって、どんな？」

「えっとねー」

美里の言葉を最後まで聞くことは叶わなかった。なぜなら、

「待たせたなー！」

「おまたせー！ うわっ 食べないで待っててくれたの？ ごめんね

！ ありがとう！」

出て行ったときより更にやかましく、そして何故か晴れ晴れとした表情で、心都と田辺が戻ってきたのだ。

私の1番の友人の栗原美里は時として、少し不思議な女の子だ。いつもの可憐な笑顔で、誰も予想だにしない言動を見せる。

それはわかっていた。友達になって1年半ほど経つ私は、彼女のびっくり発言にはそれなりに慣れているつもりだったのだ。

が、今回の美里の言葉にはさすがに驚いてしまった。

「ねえ、今度は私が田辺くんを借りてもいいかしら」

昼食を終え、レストランを出た瞬間、美里はこう言った。

「え？」

彼女以外の3人の声が綺麗にハモった。田辺でさえ、目と口を丸くし驚いている。

そんなことはお構いなしに、美里は「つまりね」と、より直球な言葉を言い放った。

「今からちよつと、別行動しない？」

「ええっ！」

またもや私と七緒、そして田辺は見事なハモリを披露してしまった。それくらい、美里がさらつと言いのけた言葉は衝撃的だったのだ。

なぜなら普段、熱烈な視線を送り続ける田辺に対し、美里の態度は間違つても優しくはないものだからだ。以前やむを得ず栗原家で彼と2人きりになってしまった後なんか、苦々しく「田辺くんってどうしてあんなにやかましいのかしら」と、やかましさの塊である田辺の全人格を否定するかのような発言を残している。

もちろん、心の底から、どうしようもなく嫌がっているわけではないこと(多分)わかるけれど、まさかあんなふうに言っていた「2人きり状態」を自ら提案するなんて。

「み、美里……？ 急にどうしたの？」

私は今さっき確かめ合つた田辺との『ラブチャンス同盟』の件も

頭から吹っ飛び、恐る恐る訊ねた。

「えー、別にどうもしないわよ。……駄目？」

美里は小首を傾げて私たちを見た。文句なしに可愛い。

当然、こんな美里の顔を見て、先ほど気合いを入れ直したお祭り男のテンションが上がらないわけはない。

「駄目じゃない！ 駄目じゃないぜ栗原！」

完全にスイッチが入ってしまった田辺はキラキラと瞳を輝かせた。こうなるともう止められないだろう。

「遊園地の醍醐味といったら2人ずつの別行動だよな！ うんうん

！ 東と杉崎もそう思うだろ？ な！ なっ！」

「……はあ」

正直言っ て意味不明だったけど、あまりのやかましさに私と七緒はげんなりと頷くしかなかった。

「うん、よしよしよしよし！ そんなじゃ、お前らもこの夢の国をたっぷり楽しめよ！」

わっははははは！ と外国の陽気なおじさんの如く高らかに笑うと、田辺は美里を連れて行ってしまった。

美里は歩き出す際に少し含みのある顔でこちらを振り向き、

「しばらくしたら連絡するから。また合流しましょ」

と、両手を合わせ「ごめんネ」のジェスチャー付きで言った。

残された私と七緒は、当然わけもわからず立ち尽くす。

「あ、これが……」

七緒がぼつりと言う。

「何？」

「さっき栗原が『この後ちょっとわがまま言っ て良い？』って言っ てたんだよ。その時は何のことだか聞けなかったんだけど、わがままっ てこのこと言っ てたんだよな、多分」

「そうなんだ。本当に急にどうしたんだろう、美里」

まさか美里、田辺に最後の夢を見せてあげた後にバツサリ振るつもりで誘っ たんじゃない……。だっ て多分、田辺の気持ちっ て美里にも

バレバレだし。

嫌な想像が脳裏を過ぎり、しかも考えれば考えるほどあり得そうな話のような気がしたので、私は少しぞくつとした（許せ田辺）。

「……っていうかあいつ、絶叫マシーン苦手なくせに栗原と2人きりなんて大丈夫なのかよ」

「えっ、田辺ってそうなの!? あんなに余裕そうにしてたじゃん！」

七緒が少し呆れたように私を見る。

「本当に気付かなかったの？ あいつほぼ失神してたけど」

「う、うん」

てつきり絶叫マシンの生温さに退屈してうつらうつらしているものかと。

「俺たち結構ギリギリアウトな誤魔化しかたしてたんだけど。よくあれで気付かなかったよな」

「いやもう全然」

「心都って、そのうち変な奴に簡単に騙されそうだな。あやしい壺買わされたり」

「……悪かったね」

確かに町中で自称占い師見習いのおばさんに、恋が叶うブレスレットを買わされそうになったことがある。『学生さん特別価格』で2万ジャスト。あいにくその時は全財産が1000円だったんだけど。

「で、どうする?」

七緒がポケットへ手を突っ込んで言う。午前中は汗をかきかき新陳代謝の良さをアピールしていたのに、急に寒そうだ。どうしたんだろっ。

と、そこまで考えて、「あの時の不自然な汗は田辺の偽設定を取り繕うためのものだったのか」とやっとわかった。それと同時に、七緒のさっきまでのげっそりと疲れ切った姿も思い出す。

ああ、そりゃ疲れるよな。

連日朝から晩まで部活の練習で、たまの休みに友人たちと遊園地に来てみれば余計な心労がのしかかり、拳句の果てに変な男にナンパされるなんて。この幼馴染みは基本的に苦労人だと思う。

「えーと……あっ、その休憩エリアのベンチに座ってあったかいものでも飲まないっ？」

「俺は別にいいけど。心都、乗り物乗らなくていいの？ ジェットコースター乗るって言ってたじゃん」

「い、いいの！ 私、今、猛烈にベンチに座りたいわー」

「ふーん……？」

とにかく今は、七緒を休ませてあげたい気持ちでいっぱいだ。

なんとなくしつくりきていなさそうな七緒と一緒に、私は遊園地の端に用意された古いベンチへ向かった。

田辺悠人は焦っていた。

ここは夢の遊園地こと、ドリームランド。そして隣には学校きつての美少女である栗原美里が、自分に向かって微笑んでいる。誰がどう見ても最高のシチュエーションだ。

しかし、田辺は焦っていた。

美里が「別行動しない？」と提案してきたときには舞い上がってつい頭から飛んでしまった問題が、再び重くのしかかってきたからである。

彼女は絶叫マシンが好きだ。そして自分は絶叫マシンが大の苦手だ。

今までは友人東七緒の協力でなんとかその事実を誤魔化してきた（？）が、2人だけでの行動となると隠しきれるかどうか、はつきり言って自信は限りなく0に近い。

「田辺くん、何に乗りたい？」

美里の問いかけに、田辺は思わず大声を出した。

「えっ！ えーと…栗原の乗りたいやつで！」

「私の？ いいの？」

「お、おう！ 乗りたいやつ全部付き合っぜ！ 俺はなんでもバッチコイだから！ わっはっはー！」

しまった、と思ったときにはもう遅く、つい見栄を張って『紳士的な俺をアピール作戦』に出してしまった。彼女が乗りたい物なんて絶叫マシンのオンパレードに決まっている。

田辺は頭を抱えて地面を転げ回りたい衝動に駆られた。

そんなことはお構いなしに、美里はしばらく首を傾げて考えた後、こう言った。

「じゃあ遠慮なく」

田辺は自然と身構えた。来るぞ。絶叫、落下、高速回転のフルコース。

しかし彼女の口から出てきた言葉は予想外のものだった。

「ゴーカートとメリーゴーランド。あと、そこの子供広場でやってるドリーム戦隊カイミンジャーのヒーローショーが見たいわ」

「へ？」

まさかのラインナップだ。田辺は拍子抜けして、美里をまじまじと見つめ返す。

「駄目？」

「いや駄目じゃないけど！ 乗りたがってたジェットコースターとかそういうのは？」

美里はけろりとした表情で言った。

「気が変わったちゃった」

午前中まではあんなに絶叫マシーンに夢中で、今後の予定も意気揚々と立てていたのに。女心と秋の空、とはよく言ったものだ。

冬の寒空の下、田辺は格言を作った昔の偉い人を敬わずにはいられなかった。

そして少し遅れて、言いようのない安堵感に包まれる。今はとりあえず美里の心変わりに一安心だ。ゴーカートなら、絶叫マシーンが苦手な自分でも楽しむことができるだろう。

「よしっ！ んじゃ、さっそく乗りに行っちゃいますか！」

「はい」

ああ！ なんかデートらしくなってきた！

今日1日踏んだり蹴ったりが続いていた田辺は、幸せを噛み締めた。

ゴーカートのスピードと衝撃にも（美里は意外と運転が荒かった）

、メリーゴーランドの回転にも酔うことなく、田辺は遊園地を満喫していた。

隣の美里も楽しそうだ。

「じゃあ次はカイミンジャーのヒーローショーね」

「うん」

弛みっぱなしの頬を引き締めようとすることももう諦めた。にへらつとした笑いを浮かべて、田辺は美里と共にショーの会場である子供広場へ向かい歩き出す。

「でも意外だな。栗原、ヒーローショーとか好きなんだ？」

カイミンジャーといえば、5人から構成される『ドリーム戦隊』の面々が悪の組織『レ・ムスイミン』とバトルを繰り広げる、日曜朝から絶賛放送中の実写戦隊物だ。男児には大人気の番組だが、ローティーンガールの美里は明らかにターゲット層に含まれていないだろう。

「そうね。見たことは全くないんだけど。というか、存在自体今日このパンフレットで初めて知ったんだけど。ちょっと気になって」「え、全く知らなかったの？」

「うん。でもさっき急に見たくなったの。そういうことってたまーにあるわよね」

なんとなくスッキリしない田辺であったが、砂糖菓子のような笑顔で語る美里の前に、ただただ肯うしかなかった。

「あれー？ さっきの可愛い子！」

突如、田辺と美里の耳に、聞き覚えのある不愉快な声が飛んできた。

嫌な予感をひしひしと感じながら振り返る。

「ホントだ！ 彼女、久しぶりー」

「もうあの痛々しい女じゃないじゃん」

予想通り、そこには先ほどのナンパ男2人組がいた。

「うわあああ……」

田辺は思わず泣き出したくなった。

今ここには美少女美里と、先ほどヘタレっぷりをアピールしてきた田辺しかいない。つまり、前回とは違い彼らが逃げ出す要素は何もないということだ。特に、母の国の妖精である心都がこの場にいることはない、彼らを大いに勇気づけたようだった。

「彼女ー、えつと、アントワネットちゃんだっけ？俺らとこのジェットコースター乗りに行かない？」

ナンパ男1が前回とほとんど変わらない誘い文句を美里に投げかける。

「でも私たち、もう行くところ決めてるから」

と、やんわり断る美里の表情は冷たすぎる笑顔だ。

「えー、いいじゃん、1回だけ！一緒に乗ろうよー。そんなやつほっとしてさー」

ナンパ男2は田辺を一瞥すると、美里の白い手を取った。

笑顔だった美里の眉が、ほんの一瞬だけ顰められたのを田辺は見ただ。

どうしよう。どうしよう。どうすりゃいいんだ。

心臓が口から出そうだった。

好きな女の子がしつこい男に絡まれている。相手は柄の悪い

2人組。自分はしがないヘタレ中学生。

こんなとき、どうすれば。

「……」

先ほど心都と交わした、男らしい(?)握手の感触がまだ右手に残っていることに、田辺は気付いた。

そうだよ。そうなんだ。

「ごちゃごちゃ考えている場合じゃない。行け自分！」

「チエスト　ッ！」

田辺はかけ声と共に手刀を繰り出し、美里とナンパ男2の手をばつさりと断ち切った。

「な、なんだこいつ……」

男が少し怯んだのを見て、田辺は一気にたたみかける。

「きつたない手で栗原に触んなー！ 俺たちはこれからカイミンジャーのショー見に行くんだよ！ お前らとジェットコースターに乗ってる暇はない！ ないったら、ないっ！」

「なんだとお？」

「こいつ、さつきは白目むいて震えてたくせして……」

ナンパ男たちがドスの利いた声でにじりよってくる。今までただの雑魚キャラとしか認識していなかった田辺に思いがけず反撃をくらひ、彼らのプライドは少し傷ついたようだ。

少し緊迫した空気の中、完璧な笑顔で美里が口を開く。

「ごめんなさい」

綺麗な声にも関わらず、なぜかずしりと重い響きがある言葉だった。

「私、しつこい人って大嫌いなもの」

ナンパ男が固まる。かなり深刻なダメージを負ったようだ。

「……栗原！ 今のうちっ、行こう！」

田辺は美里の右手を掴み、その場から走り去った。

全速力で走ったため、かなり息が切れた。

はあはあと荒い呼吸を整えながら、2人は子供広場の椅子に腰を下ろした。

「びっくりしたー……」

ぼつりと、美里が言う。

「何が？」

「急にチェストって……田辺くんって鹿児島の人？」

「あ、母親のほうの実家が鹿児島で……」

実際は、生まれてから数えるほどしかその地を訪れたことがない。しかしさつきはとにかく必死で美里とナンパ男を引き離そうとした結果、自然とその掛け声が口をついて出た。やはり人間が縁のある地から受けるパワーというものは侮れない。

田辺は走り疲れた体を休ませながら、そんなことをぼんやりと考えていた。

「ふふ」

小さな声で、美里が笑う。

「面白かったわよ。田辺くんのチエスト」

笑いながら、美里は田辺の肩を軽く叩いた。

「え……そう？面白かった？」

「うん。すっごく面白かった」

くすくす笑う美里につられて、田辺もつい笑いがこみ上げてくる。

「はは……そーか！面白かったんなら、良かった！」

「うん！最高だった！」

「最高か！ははは！」

結局、ショーが始まるまでの5分間、2人はずっと笑いが止まらなかつた。

9 & 1 t ; ファンファーレと、免疫 & g t ;

自動販売機で買ったホットココアを一口飲むと、温かさが胸に広がっていくのを感じた。私は思わずホッと息を吐く。

年が明けて5日目。昨日までと比べてぐっと気温が下がって冷え込んでいる。冬の寒さが好きな私にとって、こんな日は嬉しい事の上ない。冷気の中で晴れ渡った空はとても綺麗で、見ているだけで爽やかな気持ちになる。今日は冬の遊園地日和だと思う。

隣に座る七緒は温かいお茶の缶を両掌で包んでいた。さつきからまだ一口も口を付けていない。彼は猫舌なのだ。

そう。こんな顔して猫舌って、熱いものふうふうしちゃうって、あんたどこまで可愛いんですか？ 何、それは世の女子たちに対する挑戦なんですか？ もはや挑発なんですか？

片思いも5年目になるというのに、未だに彼のこんな姿を目の当たりにすると上記のような不穏な思いが頭を過ぎり、更に追い打ちをかけるかのように先ほどの自分の醜態（毎の国の妖精の件）がフラッシュバックした。その結果、ついつい缶を持つ手に力が入ってしまう。

「うわ、心都の缶ベコベコにへこんでる！ すげー力……！」

七緒が私の手元を見て驚愕の声をあげた。

「ああ、ちよつとしたやつあたり。気にしないで」

頭上にクエスチョンマークを浮かべる七緒を尻目に、私はへこんだ缶をぐいっとあおった。

そのとき、私のコートの右ポケットから、某ボクシング映画のファンファーレが鳴り響いた。

「あ、メール。田辺からだ」

白い携帯電話を開いて、七緒と一緒に内容を確認する。

『おれたちこれからメリーゴーランド乗るゆ！（＾o＾）』

「……乗るゆ？」

誤字と無邪気な顔文字が目立つその報告メールからは、田辺のテンションが上がり上がっていることが伝わってくる。

「かなり楽しんでるみたいだね」

「うん。あいつ、栗原とメリーゴーランド乗るのが夢とか言ってたし」

そうだったのか……ずいぶんとまた乙女チックな夢だ。

でも確かに、きらきらと装飾された白馬に座る美里は、さながらファンタジーの世界のお姫様のように見えるだろう。想像しただけで少しうっとりしてしまう。

念願叶って良かったね、田辺。私は心の中で『ラブチャンス同盟』の相棒に大きな拍手を贈った。

ようやく冷めたらしいお茶を一口飲んで、七緒が問う。

「心都は？ 本当に何か乗りたいのなの？」

乗りたいものがあるのかないのかと言ったら、そりゃあ、なくはない。ここの遊園地の目玉であるジェットコースターにはとてつもない魅力を感じるし、パンフレットに『この冬からのnewアトラクションだぴょん！』と紹介されていた『ウサゴリの大回転宇宙旅行』はどう見てもスリル満点で面白そうだった。

だけどそんなこと、今はどうでもいいのだ。

七緒の朝からの疲労感を想像すると、アクティブにアトラクションに乗りに行くよりも、断然ベンチに座ってまったり過ごすほうを選びたくなる。そしてそれと同時に、彼は今日かなり無理をしてこの場に来てくれたのではないか、という不安がどうしても心の中で幅をきかせてくる。

「いや……かたじけない」

「なんで急に武士みたいになってんだよ。かたじけないって何」

私は少しの逡巡の後、思い切って口を開いた。

「……七緒さ、今日楽しい？ 無理してない？」

「え？」

「冬休み中ずーっと部活で、今日が唯一のお休みなんですよ？ それなのになんか今日も1日色々あってごちゃごちゃしてるし……。疲れてない？」

前にも言ったように、この幼馴染みは基本的にどこまでもいい奴で、それ故に本人も気付いていない苦労人体質でもある気がする。だから今日みたいな日、私は心配になってしまう。七緒に恋をしているからとかそんなことは関係なしに、多分、幼馴染み兼お節介おばさんとして。

七緒は私の目をじっと見つめて、そして言った。

「え、全然。」

ギャグ漫画なら、ズコーと派手な効果音付きですっこける所だ。それくらい七緒の返答は私の予想と正反対であっけらかんとしていた。

そうだ。七緒はすごいいい奴でなんだか苦労性で、それと同時に私を拍子抜けさせることが世界一上手な奴なんだった。

「俺、全然全く1パーセントも無理してない。部活続きの冬休みだったから、逆にいい息抜きだよ。そりゃー確かに午前中の田辺との偽装工作はちよつと大変だったけど。まああんなの日常茶飯事だしさ」

「……そ、そう？」

「うん。疲れてるとか無理してるとか、ないない」

あっさりとした表情で、七緒が右手を振った。彼はこんな時に嘘をつくような人間じゃない。というか、そのわかりやすすぎる性格で口から出任せの嘘なんかついた日には、私が一発で見抜いてやるわ。

というわけで私は七緒の言葉を信じて、安心してその目を見るこ

とができた。

「……そっか。なら、良かったよ。『かたじけない』は取り消す」

「なんだ、心都そんなこと気にしてたの？」

少し笑って言う七緒は、なんとなく私をからかっているようにも見える。なので私はちよつと悔しく、それ以上にかなり恥ずかしくなってきた、今更ながら自分の取り越し苦労を呪った。

「……ふん。悪かったね、こちとらお節介おばさんなもんで。午前中七緒が汗だらだらかいて挙動不審だったから、楽しめてるかどうかちよつと気になっただけだよ」

我ながら最高に可愛くない言い方だ。逆にここまで可愛くない口調で相手を心配する言葉を吐くことができる10代女子がいたら、ぜひともお目にかかりたい（そしてお友達になりましょう）。

「あつそ。大丈夫、俺、けっこう楽しいよ」

と、特に動揺も見せずに七緒。おそらく、長年の付き合いで私の並外れた可愛気のなさにもそこそこ免疫が出来てしまっているのだろう。

逆に、いつまでたっても七緒の不意打ちに免疫が出来ないのが、私。

「久しぶりに心都と来る遊園地だし」

七緒が何とは無しに言ったこの言葉に、私の胸の鼓動は急激に速まった。

「えっ」

「ほんと、久しぶりだなー。昔はよく母親たちと4人で来てたけどさ」

「う、うん……」

動揺を必死で隠す。隣の七緒はあまりにも平然と笑っていて、毎度のことながら私と奴の心境の違いを実感させられる。

「心都、大人になったら遊園地に住む！なんて言ってたよな。いやーアホだったなー」

「夢見る少女と言つてよ」

「ふっ。よく言うよ」

幼い頃を思い出すように、七緒が少し目を細める。

まただ。よく知る幼馴染みの七緒とは少し違う、見たことのない

表情。

「でも今日来て良かった。久しぶりに一緒に遊びに来て、楽しいよ」

「……ずるい。」

「ずるいな、本当に。」

さらりとこんなこと言われて、私はどう反応すればいいのだろう。右斜め下を向き、電池切れのおもちやの如く固まってしまった私の中に、先ほど田辺とがっしり交わした男らしい(?) 握手の温かさが蘇ってきた。

ああ、そうだ。さっき確認し合ったばかりじゃないか。

「ごちゃごちゃと考えている暇があったら、ほんの少しでもいいから素直になるべきなのだ。」

私は顔を上げた。

「……うん。私も、久しぶりに七緒と遊園地に来て、すっごく嬉しいし楽しい！ だから……」

「だから？」

「ジェットコースター乗りに行かない？」

私の突然の言葉にしばらくきょとんとしていた七緒だけど、やがて全てを理解したように「ああ」と頷いて笑った。

「そっか。『かたじけない』は取り消しだもんね」

「うん！」

ベンチから勢いよく立ち上がった私と七緒は、ジェットコースターへ向かい歩き出す。

つついスキップしたくなる心を落ち着かせ、その道中、私は田辺にメールの返信をした。

『こっちは今からジェットコースターだゆ!!!!!!(^ o

^) 』

「おい、こっちこっち」

私が右手を挙げると、少し離れた所にいた美里と田辺がそれに気付いた。

……うーむ、美里の美少女っぷりは、やはり人混みの中でも目立つ。妙に感心してしまった。

「心都、久しぶりね」

長い髪をなびかせながら、美里が私に微笑みかけた。

約3時間に及ぶ別行動も終了し、私たちは今再び合流した。そろそろ日も暮れて始めている。

「ほんと、久しぶりって感じるねー」

「心都たちは今まで何してたの？」

美里が、私と七緒を交互に見て訊ねる。その瞳からは何かを期待するかのような輝きが爛々と発せられている。

まあ、あいにく美里が望むような色っぽい展開は私たちにはなかったわけだけだ。

「ジェットコースター、大回転宇宙旅行、超速ゴンドラ地獄、垂直落下タワー……」

七緒が指折り数えた。

「ええ？ それ全部今の時間に乗ったの？」

美里と田辺が驚いた顔で私たちを見る。

「うん！ 絶叫マシン乗り倒したよ。楽しかったね七緒」

「おー。やっぱり他の遊園地とは恐怖レベルが違うなー」

「だよなー。それに結構どれもさくさく乗れちゃったしね。美里が言ってた通り、お昼過ぎってどこのアトラクションも比較的空いてるんだね」

「……そうね」

美里の目が呆れているのが痛いほどわかる。確かにこれほど色気

のない別行動の過ごし方もなかなか珍しいだろう。

「だけど私は大満足だった。だって七緒の『久しぶりに一緒に遊びに来て楽しい』の言葉が聞けてしまったんだから。」

「美里と田辺は？ どこ回ってたの？」

「そう訊ねた瞬間、田辺の頬がでれつとだらしなく弛んだ。うつとりした目は、何も無い宙を見ている。」

「ふふ、ふふふ……。楽しかったぞ、最高に……。ゴーカートにメリーゴーランドにヒーローショー……。大満喫だよ……。ふふふ」

「どうしよう、田辺がちょっと怖い。恋する男の小さな念願が叶うと、こんな状態になってしまうのだろうか。」

「美里を見遣ると、彼女は隣の田辺の気持ち悪さなんか気にも止めず（相手にせず？）、くすつと笑って言った。」

「田辺くんたら面白かったのよ。チェストなんて使う人、今どきあんまりいないわよね」

「ち、ちえすと？」

「うん。もう私、笑いすぎてお腹痛くなっちゃったわ」

「あれ……。なんだか予想以上に和やかな雰囲気か2人の間に流れている。」

「田辺がデレデレなのは相変わらずとして、変化が見られるのは明らかに美里の方だ。以前よりも彼に向ける態度が大分穏やかになっている気がする。何があったのか詳しくはわからないけれど、もしかして、これは、まさか……。」

「……。い、いけるかもしれない……？」

「なーに？ 心都、何が『いける』の？」

「美里が不思議そうにこつちを見ている。私は慌てて口を押さえた。危ない危ない。興奮して思わず思考が口に出ってしまった。ここで私が無粋なことを言ってしまった。ここを壊したら、一巻の終わりだ。」

「んん、なんでもない！ それより七緒、明日も朝早いんでしょ？」

「あー、一応8時から部活だけ」

「じゃあそろそろ日も暮れてきたし、シメに観覧車でも乗って帰らない？」

この提案は全員の賛同を得て、私たちは観覧車へ向かうことになった。

やっぱり最後に乗るものといったら観覧車だ。そして観覧車といったら、密室で好きな人とじっくり話ができる絶好のチャンスだろう。少女漫画から得たイメージを頭の中に描き、私は1人頷く。

頑張れ、田辺。相変わらず夢見心地でふらふらと歩く彼の背中に念を送った。

と同時に、びりびりとした視線をうなじに感じて振り返ると、美里がこちらを見ていた。彼女は、女子なら誰もが羨ましくなってしまうようなその大きな瞳をきらきらと　いや、もはやきらきらとさせている。

『頑張つてよ、心都』

美里が声を出さずにそう伝えてくる。

私はそのあまりの目力に少し怯みながらも、とりあえず顔の横で小さなガッツポーズを作って美里に答えた。

自分が美里みたいな小悪魔美少女でないことは百も承知だ。いわゆる恋の駆け引きだとか、相手を落とすテクニクだとかは操れない。だけどせめて素直になることくらいはできる。それは知っている。

だから私は素直に頑張るよ、美里。

私のガッツポーズを確認して、美里がにっこり微笑んだ。

思えば、今回の遊園地デート(?)では、全員が自分以外の誰かを応援していた。

私と田辺は『ラブチャンス同盟』でお互い叱咤激励し合っていたし、美里は私のなかなか実らない恋を誰より応援してくれている。七緒も七緒で、田辺の絶叫マシーン嫌いを隠そうと汗だくになっていたわけだ。

結局全部が良い方向に行くのかはまだわからない。

けれど、とにかく

「みんな幸せになればなあ……」

「なんだよ、急にスケールでかいな」

隣を歩く七緒が目を丸くして私を見た。

「別にー。ただ、やっぱり1番の願いは世界平和だなんて考えてただけだよ」

「へえ、去年の七夕の短冊に『バケツプリン食べたい』って書いてたくせに？」

「……うっさい」

七緒の家の庭には大きな木がある。明美さん指導のもと、そこに毎年短冊を吊するのが東家の七夕の恒例行事となっていて、幼馴染みの私も小さな頃からちゃっかり参加させてもらっている。ちなみにその木は笹じゃない。まごうことなき立派な梅の木だ。

明美さん曰わく『笹だろうが梅だろうが、とりあえず吊しときゃ織り姫と彦星も願い叶えてくれんだろ。吊したもん勝ちだよ』だそうだ。

また、七緒（こっそり）曰わく『あの人、元ヤンのくせにわりとシーズン毎の伝統行事を重んじるんだよ。逆らうと暴れるし。だから吊して気が済むんなら吊しとくべきかと』だそうだ。

その信仰深いんだかてきとうなんだかよくわからない行事での、今となつては恥ずかしい願い事を、まさかここで掘り返されるとは思わなかった。

付き合いが長いということの良い思い出もたくさん共有できるけど、その分弱みも数多く握られているということだ。

七緒に恋をしてから何度も痛感している悔しさを噛み締め、私は観覧車への道のりを歩いた。

観覧車の乗り場に到着すると、予想外の事態が私たちを待っていた。

「申し訳ございません。観覧車は今の時間たいへん混み合っております。4名様の場合、皆様で1つのゴンドラへのご乗車になります」

受付のお姉さんが完璧な笑顔で告げる。

迂闊だった。確かに夕日が綺麗なこの時間帯、観覧車に人が集まるのは当たり前の話だ。

皆様で1つのゴンドラへ……。これはちょっと困った。

私としては、せつかく少し仲良しになっている美里と田辺を、ロマンチックな観覧車で2人きりにしてあげたい。なのに私と七緒も一緒に入った4人ぎゆうぎゆう詰めのゴンドラじゃ、きつと普段学校にいるときの雰囲気とあまり変わらないだろう。生まれる愛も生まれない。

だからといってストレートに「私たちは下で待つてるから、美里と田辺2人で乗ってよ」と言うのも、なんだか強引すぎる気がする。これじゃ今更ながら『ラブチャンス同盟』の意図が見え見えだ。それに何より、さっき私にエールをくれた美里は、自分たちだけの乗車にはきつと難色を示すだろう。「じゃあ観覧車は諦めて皆でもう帰りましょう」なんて言うに違いない。

つまり、私と七緒が自然に乗車を辞退するような流れに持っていかばいいのだ。

必死で頭をフル回転させ、僅か3秒の間に以上のことを考えた。人間、本当になんとかしたいときには驚くべき速さで脳が働くものだ。

そして私は行動に出た。

「う……っ！ 下腹部に、生まれてこのかた感じたことのない激痛

がー！」

お腹を押さえて、精一杯の苦悶の表情を作る。

「ええ？ どうしたの心都！」

3人が唾然として私を見た。

「さつき自販機で買ったホットドリンクが悪かったみたい！ あいたたた！ ……七緒も一緒に飲んでたから、きっと七緒のお腹も痛いはずだよ！ そうでしょ七緒！」

「はあ？ お前、何めちゃくちゃ言ってる……」

この鈍感野郎。

恐らく14年間の付き合いの中で最も強烈な顔で、七緒を睨みつけた。

「な、な、お。 お腹、痛いよね？」

七緒の表情が一瞬のうちに引きつる。

それでも空気を読んだ（読まざるを得なかった？）らしい彼は、やがてこくりと頷いた。

「……………い、痛いです……………」

「よっし！ じゃあ私と七緒はトイレとか行きつつ下で待ってるから！ 観覧車は2人で乗ってきてね！」

そう言ってる私は、美里と田辺の背中を押した。

「え？ え？」

と、よく事態が飲み込めていない様子の田辺。

「ねえ、心都、ちょっと……………」

と、何か言いたげな美里。

そんな2人の背中をもう一度押してゴンドラに乗せると、私は列を外れた。

「じゃ、私たちの分まで楽しんできてね！ ばいびー！」

未だに納得しきれていない表情の美里と田辺を乗せたゴンドラは、ゆっくりと動き出した。

「ばいびーって……………古っ」

後ろの七緒の咳きは無視する。

私は2人の顔が見えなくなるまで手を振り続けた。

「……ふう、我ながらいい仕事したわ。将来は女優もアリかな」

「どこがだよ。あんな演技力0だし強引だしバレバレじゃん」

目を眇めて完全に呆れ顔の七緒。

だけど田辺の絶叫マシーン恐怖症を汗だくになりながら誤魔化していたやつに、演技力どうのここの言われたくない。

まあ、もっとも、それにコロツと騙されていたのは他ならぬ私なだけで。

*

*

*

ゴンドラ内の丸窓を覗くと、地上でぶんぶんと力強く手を振っている心都と、一步引いている七緒が小さく見えた。

「杉崎のやつ、あんなに腹痛そうだったのにもう治ったのかな？」

田辺が心都の驚異の回復力に驚きを隠せず言う。

向かいに座る美里は溜め息をつくと、丸窓に目をやり、

「……心都の馬鹿」

少し頬を膨らませた。

普段あまり見たことのない彼女の表情に、田辺は思わずポーツと見とれてしまう。普段の小悪魔スマイルとはまた違う、むくれた顔の彼女もとても魅力的に見えた。しかし『怒った顔もチャーミングだね』なんてキザに囁ける恋愛スキルは、もちろん田辺にはない。

「相当2人で乗せたかったみたいね」

「へっ!？」

「観覧車。あのままだったら4人乗りだったでしょう。だからお腹下しただなんて、あんな下品な嘘までついて」

「え! あれ、嘘だったのかよ……!」

衝撃だった。田辺は完全に心都の迫真の演技に飲み込まれていた。それと同時に『いつちよラブチャンス作っちゃおうじゃん同盟(正式名称)』の絆の強さを感じ、ついつい目頭が熱くなる。

「くっ……、粹なことするじゃねーか……」

同志の計らいを無駄にはするまい。この観覧車が一周し終わるまでに必ずやこの片思いを一步でも、いや、半歩でも前進させよう。

田辺は目元を拭いながら、自分の胸に誓った。

「それにしても今日は楽しかったな!。栗原の意外な一面も見れたし!」

「意外?」

「絶叫マシーンとかヒーローショーとかが好きなんてさ」

美里は白い手で自分の髪を撫でつけながら軽く笑った。

「ヒーローショーは好きっていうか、今日たまたま見てみたくなっただけ。でも意外と面白かったわ」

「本当に?」

「うん」

その言葉を聞いた田辺の頭には一足早く春が到来した。

正直、最初にこのチケットを渡したときは、あまりにも美里の反応が悪すぎてもうこの世の終わりのような思いだった。

それがこうして今日一緒に出掛けて、2人で観覧車に乗って、楽

しそんな笑顔まで見ることができると。これを幸せと呼ばずして何を幸せと呼ぼうか。自然と頬も弛む。

「田辺くんって、感情の起伏が本当に全部顔に出るわよね」

「そ、そうかな」

確かに普段からどこか掴みどころのない美里に比べれば、田辺の表情筋は遥かにわかりやすいものだろう。

「いやー、そんなに誉められると照れるぜ」

心なしか美里の表情がげんなりしている。しかし田辺は脳内に吹き荒れる春一番の威力によって、それを気にする余裕もなかった。

「俺も今日は超楽しかったし！ ゴーカーもメリーゴーランドもヒーローショーも最高だったなー」

正確に言うと、ゴーカーで豪快にハンドルを切る美里や、メリーゴーランドで優雅に乗馬する美里や、ヒーローショーで悪役が倒された瞬間に本気で喜ぶ美里を傍で眺めているのが最高に楽しかったのだ。

相変わらずだらしない笑みを浮かべ続ける田辺の顔を、美里がじっと見つめる。長いまつ毛に縁取られたその綺麗な瞳に凝視され、さすがの田辺も少したじろいだ。

美里はそのまま視線を逸らさず、小首を傾げた。

「ねえ、そんなに楽しい？」

12&1t・ヒロインと、豪速球>

可愛いだけじゃ駄目かしら？

昔々、そんなキャッチコピーのフランス映画があった気がする。見たことはないが、そのおどけるようなフレーズだけがやけにはつきりと頭に残っていた。

そりゃ駄目だろう。

美里は、物心ついた頃からそう思っている。

「ねえ、そんなに楽しい？」

そう訊ねた瞬間、向かいに座る田辺からみるうちに笑みが消えた。目を丸くし、ぽかんとした表情だ。

ゴンドラは変わらずゆっくりと動いている。

聞き方を失敗した気がして、美里は軽く後悔した。

「ああ、ごめん。そういう嫌味みたいな意味じゃないのよ。ただ、田辺くんさつきから観覧車乗ってるだけでほっぺが崩れ落ちそうなくらいにここにここにここにこしてるから、そんなに楽しめるものなのかしらと思って」

「え、そりゃもちろん楽しいぜ！ 栗原と2人で乗れてるんだからさー！」

相変わらずの暑苦しい口調で、しかしごく自然に田辺は言う。

あら、と美里は微笑んだ。

これくらいで動揺するほどウブではない。しかも田辺からのこついった直球な言葉なんて日常茶飯事、もうとつくに慣れている。

「でも今日ずつと楽しかったのは本当だけどさー、あのナンパ男たちだけは参ったよなー……」

田辺が思い出したように肩をすくめた。

「そうね。2回目はちよつと本気で怒りそうになっちゃったわ」

あれは美里にとつてもかなり忌まわしい記憶だ。あのがさがさとした荒っぽい指で、今日会ったばかりの女性の手を掴むなんてとんだ野蛮人である。あのあと常備していたポケットティッシュで擦り切れるくらい手を拭いた。

「やっぱ栗原つてナンパとか結構しょつちゆうされるの？ 対応が慣れてたから」

「全然そんなことないわよ」

せいぜい3日に1回程度だ。それに揃いも揃って、相手は今日みたいなチャラチャラした男ばかり。

そう、全員美里の外見だけを見てわらわらと近付いてくるのだ。

自分はゴキブリに群がられるケーキ屑か。

「ああいうの、大嫌い」

笑顔で美里は言った。

「みんな顔だけしか見てないんだもの」

小さな頃から身内や知人はもちろん、喋ったことのない他人にまで可愛いと言われ続けてきた。だから自分の顔が、まあ世間一般受けするような造りになっていることは、だいぶ早い段階でわかった。しかしそれと同時に、あまりにも外見だけを見てすぐに言い寄ってくる男が多く、しかもそういう奴らに限って強引で自己中心的で、そのたび自分の気持ち冷え冷えとしていくのを感じた。

顔さえよければそれでいいんかい。そう言つて男たちをぶつ飛ばしてやりたい衝動に駆られるのだ。

「会つてすぐに『付き合わない？』とか、いくらなんでもおかしい

と思わないのかしらね。それともそんなに自分に自信があるのかしら」

うんうん、ほうほう、と田辺は美里の話を聞いていた。おそらく彼の人生とは全く無縁の悩みなのだろう、まるで遠い国のお伽話を聞く小さな子供みたいだ。

「告白の言葉なんて、全員馬鹿の一つ覚えみたいに、見た目のことばかり。そりゃそうよね、中身を知りもしないんだもの」

もちろん自分だってお気に入りのイケメンアイドルは何人もいるし、顔の整った先輩後輩同級生を見て女子たちで騒ぐのも好きだ。

しかしそれと恋愛は全くの別物だろう。繋げて考えようとする軽い男たちの単細胞っぷりに、つくづく嫌気が差す。

「……失礼な話よね」。なんか私の価値って見た目だけ？ みたい
に思っちゃうわよね、本当」

そして、自嘲気味に言ったそれを肯定しそうな自分が確かにいる。元来性格がものすごく素直で良いわけではなく、腹黒い部分も多々あることは一応自覚している。

だから尚更、自分の価値って何？ と、少し、ほんの少しだけ、へこむときがあるのだ。

悲劇のヒロインぶるのは寒気がするほど嫌いなので、そんな自分にもまたうんざりしてしまう。

「俺はそんなことないと思うけどな」
田辺がふいに口を挟んだ。

「……確かに栗原の顔は可愛い。うん、誰もが褒めたくなくなるくらい最強に可愛い！ そのパツチリした目とか長くて多いまつ毛とか綺麗な鼻とか上品な口元とか透き通るように白い肌とかサラサラロングヘアとか華奢な手首とか可憐な声とか！」

鼻息荒く語る田辺に、美里はものすごい勢いで引いている自分を感じた。このスローなゴンドラの進度を2倍にしたいと心から思った。

「でも！ でもさ！ 栗原の良いところは絶対それだけじゃないぜ

「！」

「……え？」

思わず、間抜けな声が出てしまった。

「だって俺は今日1日一緒に遊んだだけで、栗原の良いところ、たくさん見つけられたもんね！」

さっきと同じにこにこした締まりのない表情で、田辺は続けた。

「杉崎の片思いを全力で応援してるとことかー、パンフレット見てテキパキ計画立てられるとことかー、意外とハンドル捌きがパワフルなことかー、あとティッシュをちよつと離れたゴミ箱に捨てるときのピッチングコントロールの良さとか！」

最後の2つはもはや誉められているのかすらわからない。むしろ花も恥じらう乙女にとっては短所にさえなり得るのではないか。

しかし目の前の田辺は純粹すぎる笑顔満開で、とても嘘や皮肉を言っているようには見えない。

「ふっ」

美里はついつい吹き出してしまった。

この人、馬鹿なのかしら。

そう思う自分の心がいつの間にか軽く、明るくなっていることに驚く。

馬鹿だわ、本当に。

「それはどうもありがとう。……でもね、田辺くんだって今日頑張ってたじゃない」

「俺？」

「そう。ナンパ男に啖呵切ったし、苦手な絶叫マシンに無理して乗ってくれたでしょ」

「し、知ってたのか！」

田辺が仰け反った。やはり隠しきれている気だったらしい。

ずっと薄々感じていた美里だったが、田辺は必死に誤魔化そう

としていたし、何やら七緒まで加担しているようだったので、彼らの面目を保つために一応それに乗っかって過ごしていたのだ（加えて心都は全く気付いていない様子だったので）。

はたと、田辺が何かを思い出したかのように動きを止めた。

「ってことは、あの時栗原が別行動提案したのも、絶叫マシーンじゃないのに乗りたいてって言ったのも……？」

そう言いながら田辺の表情がだんだんと輝いてくる。単純だと思っていた彼だが、意外と勘は働くらしい。

美里はくすつと笑った。

「俺のために？」

「田辺くん白目むいてたからなんか可哀想になっちゃって。……でも午前中そこまでして無理に乗ることなかったのに」

「うう、だって栗原が乗りたいたいものは俺も乗つとかないとさー！」

またもや田辺の直球愛情表現。

そもそも彼が日頃からどういっつもりでこういった発言を続けてくるのが、美里にはいまいち謎だった。

田辺はそれなりに自信があって、よし必ず口説いてみせるぜ！

という目標を美里にも包み隠そうとはせず、こういうストレートすぎるアピールを繰り返しているのか。

それとも、ただ単純な性格ゆえに、自分の好意が完全に誰が見てもバレバレなことに気付かず、こんなにあっけらかんと素直すぎる発言をしているのか。

可能性はこの2つだろう。まあ大体の予測はついているが。

「ねえ、田辺くんってー」

「ん？」

彼は嘘がつけない人だ。

だから美里は聞いてみることにした。こちら豪速球の、ドストレートで。

「私のどこが好きなの？」

田辺がさっきの倍の勢いで仰け反り、狭いゴンドラ内の壁に頭を

ぶつけた。

「いつてえー！」

やはり後者だったようだ。

「ちよつと大丈夫？」

「く、くくく栗原！ い、い、いきなりなんてことを聞くんだお前さん！ そもそもなんで俺の気持ち知って……！ あ、まさか杉崎が！？」

「違うわよ。田辺くんわかりやすすぎるんだもの。てゆうか、それで隠してるつもりだったの？ 自意識過剰な人じゃなくなつて気付くわ」

もつとも、その気持ちを知った上で相手にこんな質問をぶつける自分もどうかと思うが。

「で、答えてくれないの？」

田辺が今さつきぶつけた自分の頭部をさすりながら、視線を逸らした。普段はストレートすぎるくせに直接訊ねられたら照れるなんて、複雑すぎる心理の持ち主だ。

「さ、最初は正直、顔だけ見て好きになつたよ、俺も。でも」

本当に正直な人だなあ。そう美里が思う間に、田辺はガバツと立ち上がり（天井の低いゴンドラ内なので中腰なのがいまいちキマらない所だ）、目の前に親指を立てた。バッチグー、のポーズだ。

「今日で中身にもメロメロだぜ！」

「ぶっ」

またもや美里は吹き出してしまった。

やっぱり馬鹿だわ。

「ええ！ 俺笑われてる！？」

「ごめん、ごめん。でも、メロメロって……ぶぶっ」

田辺が少しシヨックを受けた様子でよろめいた。どうやらかなり自信を持って繰り出したフレーズらしい。

ひとしきり笑いがおさまったところで、美里は右手を差し出した。

「じゃあ、とりあえずこれから仲良しのお友達になりましょう」

きよとんとした田辺が、美里の顔と差し出された手を交互に見る。
「私、田辺くんのことあんまり知らないし、田辺くんもきつと私のことあんまり知らないでしょ。お友達になってこれから色々知っていきましよう。お互いのことたくさん知らなきゃ愛も何も生まれないと私は思うの」

愛という部分がかなり気に入ったらしい田辺は、にへらつと頬を弛める。

「おう！ んじゃ今日からマブダチで！」

2人は握手を交わした。

「田辺くんって何型？」

「俺はOだよ。栗原は？」

「B型よ。ねえ鹿児島ってどんなところなの？」

「うーん、あんまり行ったことないけど良いところだと思う。ラーメン美味しい」

と、自分に興味を持ってもらい相当嬉しい様子の田辺。さっきから今日一番のにやけ顔だ。

「へえ。そういえば、田辺くんって部活何かやってるっけ？」

そう訊ねた瞬間、田辺の眉が下がり涙目になった。効果音を付けるならまさに『がびーん』だ。

そして美里は、田辺へのこの質問がクリスマスの時期から数えて既に3回目だということを出した。

愛が生まれるまでの道は、まだまだ始まったばかりである。

「美里と田辺、仲良くなれてるかな」

「さあ」

「今日初めて思ったけどあの2人意外といいコンビな気がするんだよね」

「へえ」

「……ちよつとちよつと。反応薄くない？」

私が声を低くすると、隣の七緒は負けじと目を細めた。

「べつつに」。ただ、心都の変な芝居に巻き込まれて俺まで緑茶で腹下してることにされたなんて心外だなんて」

「だからそれはごめんつてば」

私たちは今、観覧車乗り場から程近い壁際で、列に並ぼうとするでもなく他のアトラクションに移動しようとするでもなく、手持ち無沙汰に突っ立っていた。

美里と田辺を乗せたゴンドラはまだ帰ってこない。この観覧車、見た感じだと一周するのに大体10分強。だとしたら今ようやく半分を過ぎた頃だろうか。

楽しい遊園地で何も行動せずにただただ寒さに耐えているなんてきつと私たちだけだろう。

七緒が作った怒り顔をやめて、いつもの調子で言う。

「冗談だよ。でもどうしてそこまであの2人をくつつけたがるか不思議なんだけど」

「別にくつつけたがってるわけじゃ……」

「だって、俺が偉そうに言うことでもないけどさ、どう鼻屑目で見てもあれは……田辺の一方通行だろ」

あら、鈍感野郎のくせに厳しいこと言うじゃない。

つまりそれほど、日頃の田辺の思いは誰が見てもわかりやすく報われていないということだ。

ドンマイ、田辺。

生きる、田辺。

希望はある。

「でもそれは昨日までの話だよ！ 今日の別行動のあとの2人、なんか雰囲気良かったもん」

「そう？」

「うん！ 特に美里。なんかオーラが和やかというか、田辺に向けて視線が今までより優しいというか」

普段の美里からしたら考えられないことだ。田辺のしつこさややかましさを、いつも「田辺くんうるさい」の一言で黙らせてきたのだから。

七緒はいまいちピンとこない様子で首をひねった。

「ふーん……オーラねえ。全然気付かなかった」

無理もない。日頃から美里と一緒にいる私だって、よく見てようやく感じた位の些細な変化だ。

「……美里って普段あんまり自分の恋の話はしないんだよね。たまーにしたと思ったら、なんか冗談まじりだったり、心なしかちょっと不機嫌ばい顔だったりして」

だから実は少し心配になっていたのだ。小悪魔と称されモテモテの彼女だけど、実際はあまり恋にいい思い出がないんじゃないだろうか、と。

もしも、可愛い人気者故の悩みなんかがあるんだとしたら、きっと私には到底わからない話だろう。

けど、わかるうがわかるまいが、心配なものは心配なのだ。

だって美里は大切な友達だ。いつも私を誰より応援してくれている子だ。

私だって、美里には幸せな気持ちでいてほしい。

「そんでさ、田辺ってアホでうるさいけどいい奴でしょ」

「まーな」

「だから、美里といい恋してくれたらいいなーなんて……ちょっと

勝手に思ってるんだよね」

こんなこと恥ずかしくて本人たちにはとても言えないけれど。

それに、そんな余計な心配する暇があったら自分のほうを頑張るなさいよ！　なんて美里にどやされそうなのもする。

「つて、私またお節介おばさんになっちゃってるかな……」

「いや」

七緒は首を横に振った。

「いいんじゃない、友達なんだから」

さらりとした口調。だけど七緒にそう言ってもらえると、なんだか安心する。

私は笑って観覧車を見上げた。ゆっくりと回るゴンドラが夕陽を受けて輝いて、どこか神秘的だ。

「綺麗だねー」

「うん。田辺はしゃいでるだろーな……メリーゴーランドもだけど、栗原と観覧車乗るのも夢だとか言ってたし」

そうだったのか。ただでさえさつき浮かれすぎて不気味な田辺だったのに、2つ目の夢まで叶ってしまったら、一体どんな状態で帰ってくるのだろう。想像すると少し怖い。

でも好きな人との観覧車に憧れる気持ちは、やっぱり痛いほどわかる。

「夕暮れ時の観覧車なんてロマンチックすぎるもん。好きな人と乗れたりしたら、もう最高だよね」

「そんなもんか？」

「そんなもんよ」

たちまち七緒が難しい顔になる。

「……俺にはまだわかんねえな」

でしようね、と声に出さず私は頷いた。

だって柔道が1番楽しくて、今は誰とのお付き合いも考えられないと言う七ちゃんだ。恋だとか愛だなんて彼にとっては全く理解しがたいものなのだろう。

たくさんの女子たち（たまに男子）から思いを寄せられまくっているというのに、当の本人はこんなに色恋沙汰に疎い奴だなんて。世の中ってなんだか無情だ。

私は七緒にバレないように小さく溜息をついた。

だけど七緒のこの性格は、片思い歴5年目の私にとっては少し寂しくもあり、また安心できる要素でもあった。なぜなら、自分の思いが実る確率と同じ位、七緒が他の誰かとうにかなくなってしまいう危険性も極めて低いといえるからだ。

こんな共倒れみたいな考え方に希望を持つ自分が情けないけれど、本心なのだからしかたがない。恋する乙女は臆病なのだ（……うん、自分で言って少し恥ずかしい）。

ふと、七緒が観覧車から私に視線を移す。寒そうにポケットに両手を入れた彼は、他愛のない世間話でもするような口調で言った。

「もしかして心都、好きな奴いるの？」

「……………えっ？」

声が掠れた。

動揺を隠すために、ゆっくり瞬きをする。

長い付き合いだけど、七緒にこんなことを訊ねられるのは初めてだ。そもそも、こうして恋について七緒と話すなんてこと自体が珍しい。これも夕暮れの観覧車の魔力なのだろうか？ 私たち、乗っでもないというのに。

こんなの、七緒にとってはまさに世間話以外の何でもないのかもしれない。

でも私は違う。

この質問は、困る。

非常に困るよ、七ちゃん。

けれど

七緒は無邪気すぎる表情で、私を見ていた。

そして私は毎度のことながら、この人って綺麗な目をしているな
と思った。

「……………うん」

どうしてだろう。

今日はその目で見られたら、嘘なんか、つけない。

「いるよ」

気付いたら私はそう答えていた。

自分でも驚くほど、しっかりとした声で。

好きな人が、います。

彼は幼馴染みで、美少女と見紛うような顔をしていて、あまりの可愛さに学校の七不思議のネタになったり、男から求愛されたりしています。

でも中身はとても強くてまっすぐで、優しい人。

私はずっと彼が大好きです。

と、そんなこと言えるはずもなく、私は頷いたきりむっつりと黙り込んだ。

夕暮れ時で良かった。きっと今少し赤くなっているであろう私の顔を隠すことができるから。

「へー！ 心にもそんな相手がいるんだ」

意外そうに目を丸くした七緒が、なんとも間の抜けた声を上げた。さりげなく失礼なことを言われている気がする。でもそれに反撃するほどの余裕も、今の私にはない。

心臓は破裂寸前だ。

「……うん。全然片思いだけだ」

「そっかー……心都にもついに好きな男やつが……。そうだよな、男兄弟じゃないもんなー……」

しみじみと独りごちるように七緒が呟いた。

「男兄弟？」

「あ、いやこつちの話。……で、誰？ 好きな奴って」

無邪気な七緒の質問には、もちろん答えられない。

「さあ」

「俺の知ってる人？」

「さあ」

「かつこいい？」

「さあ」

無表情ではぐらかす私に対し、彼は少し拗ねた様子で、

「なんだよー、何も教えてくれないの？ 幼馴染みのよしみじゃん」

と、唇を尖らせた。そんな顔を言われても、無理なものは無理だ。

「黙秘します」

幼馴染みのよしみだなんて、この場合は全く効力を発揮しない。

頑なな態度をとり続ける私を前に、七緒は真相を聞き出すことを諦めたようだった。

「ふーん。心都ってこういうことに関しては結構慎重派なんだな」

「……まあね」

「告白とかしないの？」

「……まだそんな自信ない」

私はそっけなく答えた。

そりゃ慎重にもなる。まさにその好きな相手にこんな質問をぶつけられているのだから。この妙な状況で、はしゃぎなさいというほうが無理な話だと思う。正直言つて今、少しでも気を抜いたら奇声を上げて発狂してしまいそうな心境だ。

当然そんなこと知る由もないのは、目の前の幼馴染み。

「……なあ心都、お前なんだかんだいい奴なんだからさー、もっと自信持つてドンとぶつかってみるよ。その好きな相手が心都のいい面をたくさん知ったら、きっと上手くいくって」

ほんまかいな。

思わずエセ関西弁を繰り出したくなる。

もちろん、この鈍感野郎に全く非はない。それは重々承知している。私がいつまでも幼馴染みの域を越えられないのが悪いんだ。彼はこんな私を元気付けてくれようとする優しい人なんだから。

だけど、ああ、私には勿体ない位の励ましの言葉なのに、残念な

がら全くハッピーな気持ちになれない。七緒の優しさのせいでショック死の危機感を覚えるのは、もう何度目だろう。

「……そりゃどーも」

「うわテンション低っ」

「恋する乙女は情緒不安定なもんで」

おそらく普段の七緒なら、「乙女」の部分にがつつりと因縁をつけてくるところだろう。でも今の彼はいつもの二割増（当社比）ジエントルマンだった。

「あー、そっか……不安なこともあるんだよな」

「……」

「……でも心都なら大丈夫だと思うよ。14年来の付き合いの俺が言うんだから、間違いなしっ」

「……ありがとう」

少し泣きそっだ。

観覧車は相変わらずゆっくりと回り続けていた。

今は夕焼けが綺麗な時間帯だけど、あと少し経てば最高の夜景が見られるアトラクションになるだろう。

それもあつてか、乗り場の列に並ぶのはカップルが多い。みんな幸せそうな顔をしている。

世の中にはたくさんさんの恋人たちがいて、当たり前のようにだけど、やっぱりそれぞれに違ったドラマがあるのだろう。色々な偶然が重なって出会って、どちらかがどちらかを好きになって、両思いのために頑張つて、恥ずかしいことや不安も乗り越えて、思いが通じて、今ここに2人でいるのだ。

あらためて、すごいことだと実感する。

そして、それは私には本当に難しいことのように思える。

静かに息を吐くと、白い靄が冬の空気に溶けていった。

「上手くいくといいな。応援してるよ」

七緒が眩しすぎる笑顔で言う。

その輝きに目が眩んだ私は思わず2、3歩よろめいて、必死に足元を踏ん張った。

脳の奥で火花が弾ける。

それと同時に、私の発狂を抑えつけていた自制心が爆発した。

「ぐあ　　っ！ ヤメロ　　！　もう！　この話やめやめやめえーっ！」

「うお！？　なんだよ急に」

驚いた七緒が数歩あとずさった。

「応援してくれなくていい！」

「は？」

怪訝そうな七緒の表情。それをキツと睨みつける。

「七緒は応援しないで！　誰がしても七緒は、絶対、ぜったい応援しないで！」

思わず叫んでしまった本音。おそらく勘のいい人が聞いたらちよつとした告白になるだろう。

しかし私の前にあるのは、案の定、心底不思議そうなきよとん顔だ。

「え………なんで？」

「………恥ずかしいから！」

「恥ずかしい？」

全くの見切り発車で言うてしまった。何の作戦も立てていない。

だけど、やっぱりこういうときの人間のポテンシャルは素晴らしい。私は七緒が突かれると弱いポイントを確実に仕留められる自信があった。

「うん！　恥ずかしいの！　………ねえ、例えば七緒に好きな女の子ができたとして、その恋を明美さんに応援されたらどう？　真冬の海に飛び込みたくない？」

七緒はしばらく上を見て想像力をフル稼働させているようだったが、やがてげんなりと頷いた。

「……なるかも」

作戦は成功だったようだ。心底嫌そうな七緒の顔を見て、私はこつそりほくそ笑んだ。

「でしょ！ 私もそれと同じだよ！ わかってくれたんならもうこの話やめにして、さあ、しりとりでもしよう！」

「はあ？なんで今しりとり？」

「いいからっ、はい！ 3文字限定ね！ りんごー！」

「ご……ゴリラ」

「落語」

「……ゴルフ」

「双子」

「また『ご』かよ。……『ごぼっ』」

納得しきれてはいなさそうな七緒だけど、私の強引なペースに徐々にハマり始めたようだ。もう恋についての話を続けようとはしない。い。

優しさを踏みにじってしまったようで申し訳ないけど、やっぱりどうしたって、七緒に恋の応援なんてされたらたまらない。

「う、う、う……」

よし、また『ご』にしてやろう。そしてもう完全に、さっきまでの話題のことは忘れてもらおう。

必死でボキャブラリーの引き出しを開け閉めしていた私は、突如、ある一点に釘付けになった。

七緒の肩越しに予想外の物が見えたからだ。

「ウ……ウサゴリー！」

「あっ、3文字じゃねーじゃん」

すかさず七緒が言う。さすがスポーツマン、ルール違反には厳しい。い。

しかし今私が夢中なのはしりとりではない。

「じゃなくて！ ほら、あそこの壁見て！ ウサゴリの石ー！」

私は指をさして数メートル先を示した。

その壁は、白や灰の淡い石がごつごつと重なって成り立っている、どこか西洋っぽさを感じさせるものだ。それ故に非常に見つけづらけれど、その隙間を縫うように埋め込まれていたのは紛れもなく、この遊園地のシユールなマスコットキャラクター・ウサゴリの頭の形をした白く小さな石。

「……何これ」

石に近付き、それをまじまじと見ながら七緒が言う。どうやら彼は入口の看板にあったウサゴリからのメッセージを読まなかったようだ。

「園内に一カ所だけある、ウサゴリ型の石。これを見つけたら願い事が叶うんだって！」

「うわ、嘘くさ」

夢のない男め。

私は七緒を睨みつけて黙らせると、ウサゴリ石の前に立って力いっぱい合掌した。

「何してんの」

「願い事。七緒もしなよ」

「俺はいいよ」

またしても夢のない男め。信じるものは救われるという言葉を知らないのだろうか。

「……………」

「何祈ってんの？ 世界平和かバケツプリン？ それとも恋愛成就？」

七緒の口から出た「恋愛」という単語に、私の発狂スイッチが再び押される。

「き　ッ！！　だから！　その話！　しないでと！　あれほど！」

「わ、わかったわかった。悪かったからその猪木みたいな顔やめろ」

「なんだこのやろう！」

「うわ、似てるし」

実は凶星だったのだ。

私の願いは欲張りにも3つ。まさに七緒の言う通り、世界平和とバケツプリンと恋愛成就。

こんなわかりづらい所にある石を見つけ出したのだ。それ位叶えていただいてもいいでしょ、ウサゴリ様。

だけど不本意な物真似を誉められて、私の心は深刻なダメージを負っていた。これを立ち直らせるには、七緒に報復するしかない。

「ふん、私は七緒の代わりに願うといてあげたんだよ。身長が伸びますように、女顔が直りますように、男からナンパされませんようにって」

「くっ……」

私は見た。七緒にぐさぐさと矢が刺さる幻覚を。

「てめえ人が気にしてることを……」

「ふふん、優しさだよ、優しさ」

「じゃあそのにやにや笑いはやめろよ」

「あつ、美里と田辺が降りてきたよ。行こ行こー！」

「聞けよ人の話！」

好きな人が誰か、だなんて。

今はとてもじゃないけど言えない。

ただどいつか言ってる。

私がばっちり「女の子」になれたいつか、七緒の目を見て、大きい声で、言ってるんだ。

私はその「いつか」を夢見て燃えつつ、心の中で、とりあえず好きな人の前でプロレスラーの物真似はまずかったよなあと1人反省会を開いた。

私は満面の笑みで、観覧車から降りてきた2人を出迎えた。

「おかえりなさい」

合流するや否や、美里は軽く微笑んで、

「ただいま」

と私の肩に手を回した。その細腕からは想像もできないすごい力だ。笑顔とは裏腹に、彼女の頭には漫画のように立派な怒りマークが見えた。

「……いやん」

「いやんじゃないわよ、心都の馬鹿。人の応援してる暇があったら自分のほうをもっと頑張りなさいよっ。あんな下品な嘘までついて」

私にしか聞こえない小さな声で美里が言う。想像通りの彼女らしい台詞。私の演技力を駆使した『観覧車2人きり作戦』について、納得しきれていなかったようだ。

「私は心都と七緒くんに2人で乗ってほしかったのに。心都、強引なんだから」

「おっしゃるとおりです……すみません」

美里は私の顔をじつと見た。

肩に腕を回されたままなのでかなりの至近距離だ。彼女の長い睫毛が私の頬に触れるような錯覚をおぼえる。

「……わかつたんならよろしい」

美里がすつと腕を放した。

言葉ほど怒っているわけじゃない、と……思う。多分。

私は美里の表情を伺い、同じく小声で訊ねた。

「でも田辺、いい奴だよな」

「……まあね」

当の田辺は今、いかに観覧車での時間が素晴らしかったかを締めまらない顔で七緒に報告している。

「んもつ、観覧車はサイコーだぞ、東っ！ 損！ 乗らなきゃ損！」
「はあ」
「綺麗な夕陽！ 小さくなる民衆！ いい景色！ 素敵なムード！
観覧車サイコー！」
「気持ち悪いほどの笑顔と大きな身振り手振りだ。
せつかく人が誉めてるってのに、何してんだあいつ。」
「うるさい奴だけど」
「……うん。すっごくね」
美里はげんなりとした顔で頷いた。

出口を目指して歩いている途中、今度は田辺がこっそり話しかけてきた。

「なあなあ杉崎。俺びっくりしちやっただけど……」

「ん？」

「栗原さ、知ってたんだよ……！」

信じられないとでも言いたげな表情の田辺。こんなにも驚くべき出来事が、ゴンドラの中であったのか。

「なにに。田辺が絶叫マシン苦手なこととか？」

「それもだけど、俺が栗原にフォーリンラブだったこと」

「あー、そうなんだ」

「反応薄っ」

田辺には悪いけど、それはどう考えても想定範囲内だった。だって彼の態度はバレバレだし、それに加えて美里は勘が鋭い。田辺の思いに気付かない方が不自然だ。

それよりも、田辺の繰り出すフォーリンラブだのラブチャンスだのという独特の言葉のセンスのほうか、よっぽど（ある意味）目を

見張るものがあると思う。

「でも美里に気持ちを知られてた割には、やけににやにやしてるね、田辺」

そんなに良いことがあったのだろうか。観覧車に乗っているわずか10分ほどの間に。

相変わらずのにやけきった表情で、田辺が自慢気に言う。

「へへへ、俺たちマブダチになったんだよ」

「え……それって……」

いわゆる『お友達でいましょう』という、告白の相手を傷つけずに断る常套句ではないだろうか？

どうしよう、田辺を見る目がついつい「かわいそう」になってしまふ。

そんな私の心中を察してか、田辺は慌てて首を横に振った。

「いやいやいや、ちげーよ失礼だなっ。まず仲良くならないと愛は生まれなくてことで、未来あるお友達になるんだよ」

「未来あるお友達……」

「おう。お互いをよく知って、ゆくゆくはラブラブカップルだぜ」

田辺の夢見る瞳は、輝かしい未来へと向けられていた。

ゴンドラ内での出来事は、2人の距離を前向きに縮めたようだ。

「なるほど。良かったじゃん！ やったね田辺」

同盟の仲間として、彼の幸せが素直に嬉しい。

「へへ、サンキューサンキュー。杉崎のほうはどうだったんだよ」

「……うーん」

私はというと、田辺と正反対の状態だ。

『好きな人がいる』ことは知られたものの、七緒は私の気持ちに気付くどころか、まったく鈍感な態度を見せ続けているから。しかも笑顔で応援されちゃうし。レスラーの物真似なんか披露しちゃうし。

「……2歩進んで3歩下がるって感じ？」

「なんだよ、マイナスかよ」

田辺が呆れたように言った。

「まあ、まだまだこれからだよ。見てて、私の快進撃を！」

「おー、期待してるぜ。頑張れよ！」

「お前もな盟友！」

次に4人で遊びに来るときは、もうそれぞれラブラブカップルになつてるといいな。

そんな期待を込めて、私たちは固い固い握手を交わした。

さきほど祈った世界平和には、もちろん田辺と美里の分の願いも秘かに込められている。

好きな人と隣で笑い合える状態、それはとてつもなく「平和」だと思っただ。

こうして考えると世界平和って、なんとまあ融通のきく願い事だろう。大抵の望みはこれにひっくるめてしまうことができる気がする。

私は前に行く七緒をちらりと見た。

呑気そうにゆっくりと歩く後ろ姿は、幼い頃からよく見慣れたものだ。

こんな欲張りな私の願いは叶うのだろうか？

それはウサゴリ様のみぞ知る、近くて遠い未来だ。

15&17・内緒話と、願い事>(後書き)

遊園地に行って云々の話はこれで終わりになります。

読んでくださっている方々には本当にいくからお礼を言っても言い足りません。ありがとうございます！ 嬉しいです。

これからもよろしくお願い致します。

楽しかった冬休みも終わり、あっと言う間に三学期。

そして気付けば、恋する乙女たちが一斉にそわそわする時期がやってきた。

「トリユフとブラウニーだったらどっちがいいかな」

「うーん……どっちもおいしいですけど、ブラウニーは好き嫌いがあ

るっていいいますもんねえ」

「じゃあトリユフにしようか」

「はい」
華ちゃんが笑顔で頷く。それを見て、私も自然と顔がほころんだ。まさか自分がこんな乙女チックの典型みたいな会話を交わせる日が来るとは、夢にも思わなかった。

クリスマス的一件以来、華ちゃんとは学年の壁を越えての友人になっていた。同じ幼馴染みに恋をする者同士、喜びや悩みも分かち合うことができるのだ。

だからたまに私の部活と華ちゃんの塾がない日が重なると、こうしてお喋りに花を咲かせたりしている。

今日も学校帰りに私の部屋で、来週に迫ったバレンタインに備え

ての計画を練っている最中。

バレンタイン前日の13日、我が家で一緒にチョコを作る予定だ。フロアリングに行儀良く正座した華ちゃんは、ふと不安そうに手元の紅茶のカップを見た。

「でも、禄ちゃん、受け取ってくれるでしょうか……。チョコあげるのなんて幼稚園以来ですし、いらないうって言われちゃいそうで……」

「そんなことないよ！　ないない！　誠心誠意ぶつかればきっと大丈夫！」

華ちゃんの一途な思いは、クリスマスをきっかけに禄朗にも少し伝わったはずだ。

ぶつきらぼうでガサツな禄朗だけど、いくらなんでもそんな気持ちを無碍にすることはないだろう。

というか、そんなことした日には私がひっぱたいやる。

華ちゃんは柔らかく微笑んで言った。

「ありがとうございます。……なんか、杉崎先輩とチョコ作りができるなんて心強いです」

「そんな……」

私、ついついきゅんときてしまう。

この子は本当に根っからの『守ってあげたい系』だ（禄朗に怒ったときだけは恐ろしかったけど）。

「私、大したことなんて全然できないよ。料理部っていつでも家庭科の授業の延長みたいな感じだしさ」

「いえ、お料理のテクだけじゃなくて……。杉崎先輩と一緒に私、前進できるんです。クリスマスするときも先輩のおかげで禄ちゃんと仲直りできましたし。なんだか前向きになれるんです」

「華ちゃん……」

ああ、なんて良い子なんだろう。

華ちゃんはそう言うけど、正直、私は彼女に何もしてあげられていない。ただ喚いて転んで引っ掻き回して、最後は傍観していただ

けなのに。それどころか、私のほうが彼女の純粹さやひたむきさにいつもパワーをもらっているのに。

この子は天使だ。私はそう確信した。

「せ、先輩、泣いてるんですか……？」

「う……。うう、ちよつと目にゴミが……。大丈夫、大丈夫」

目元の涙を拭い、笑顔を作る。

こんな良い子に心配をかけるわけにはいかない。祿朗を叱る資格もなくなってしまう。

「あ、杉崎先輩は、毎年東先輩にあげてるんですか？」

華ちゃんのこの質問に、私は再び言葉を詰まらせた。

「それが……。一度もあげたことないんだよね」

「そうなんですか？」

華ちゃんが意外そうに目を丸くした。

長い付き合いではあるけど、私は七緒にバレンタインの義理チョコさえもあげたことがない。幼い頃はもちろん、恋心を自覚してからも、私はそういった乙女な行事はスルーしてきた。

理由は明確、恥ずかしいからだ。

その結果が、今の素直になれない私と、色っぽさ皆無の幼馴染み止まりの関係ということだ。

「だからこそ今年は、ちゃんとあげたいと思うんだよね……」

そう、今年は今までと違う。『可愛くなって七緒に告白したい』という目標を持って少しずつ頑張る決意をした数ヶ月前。それから初めて迎えるバレンタインだ。

本命チョコとして渡せるかはわからないが、やっぱりどうしても気合いが入ってしまう。

私が意志を固め直したそのとき、背後でかちやりと小さな音がした。不審に思い振り向くと、

「若いつていいわねえ……」

薄く開いたドアの隙間から怪しい瞳で覗いているのは、まぎれもなく我が母。

「うわ、お母さん！ びっくりするじゃん！」

お母さんは部屋へ入ってくると、につこりと微笑んだ。

今日のお召し物は、上は大柄の花が大胆にあしらわれたピンクのニットに、下はフリルがどっさり乗ったオフホワイトのロングスカートの。確かに2月の寒さ対策としてはバツチリなごてごてスタイルだが、アラフォーの御婦人の装いとしてはいかなものか。

私はもう生まれたときから見慣れた母親の格好だけど、会ったのが2、3回目の華ちゃんは眩しそうに目をパチパチさせていた。

「こ、こんにちは。お邪魔してます」

「あらあー華ちゃん！ いらっしやーい！」

あなたは三枝か。

お母さんが華ちゃんを抱きしめた。華ちゃんが大のお気に入りなのだ。

というかお母さん、可愛い子に可愛い服を着せるのが趣味らしい。以前美里を家につれてきたときも大喜びで自分が若い頃の服をあげていた。

しかし華ちゃんに対してはそれを上回る溺愛ぶりだ。お母さん曰わく、「美里ちゃんの完成された綺麗な感じも大好きだけど、華ちゃんのダイヤの原石ぽさが、すごーく心をくすぐるのよ！」だそうだ。

確かに美里と華ちゃんだったら、あどけない華ちゃんのほうがお母さん好みのピンクやフリルやレースは似合いそう。

「華ちゃん、これ着てみない？」

そう言ってお母さんは、案の定ピンクでフリルな服を取り出した。「ぜったい似合うと思うのよー。見て見てこれ、くまさんのアップリケがついてるの」

「え、えつと……」

華ちゃんが困ったようにその服を見つめる。

「こらこら、お母さん。今華ちゃんは私とお喋り中なんだから邪魔しないでよ」

「あらやだ心都、反抗期ー？」

お母さんが自分の頬を両手で挟んだ。

「難しい年頃ねえ。七ちゃんに愛を込めたチヨコをあげるんだったら、お母さんも協力したいと思ったのに」

「！」

私は背筋が凍るような感覚を覚えた。この人は、一体いつから覗いていたのだろう。

長年のこの恋心は、お母さんと明美さんだけには絶対に知られたくない。

「ち、ちがうよ！ 確かに今年は七緒にチヨコあげるけど、義理チヨコ！ それなりに世話になってるからお礼の意味を込めて！ 愛なんか込めてないから！」

慌てて否定すると、お母さんはうふふと笑った。

「本当にい？」

「本当に！ 義理も義理、ド義理だよっ！」

「ふうん、まあそれならそれでいいけどー？ ふふ、義理チヨコ作り頑張っつて」

相変わらず含みのある笑顔のままお母さんは部屋を出て行った。せえせえと肩で息をしながら、私はその後ろ姿を見送った。とりあえず誤魔化したのだろうか。

「えっと……先輩……義理チヨコなんですか？」

華ちゃんが少しシヨックを受けた顔で私を見ている。純粹すぎる彼女は、私のお母さんに対する言葉を真に受けてしまったらしい。

「ぎ、義理じゃないよ」

「じゃあ、ちゃんと愛を込めた本命チヨコですよね？」

そうハッキリ聞かれるとなんだか恥ずかしい。

「う……。まあ、そうだけど……」

「良かった。私、杉崎先輩と東先輩にうまくいつてほしいんです」
優しい笑顔でそう言われると、なんだかまた泣きそうになってしまっつ。

「うまくいくかな……。ていうか、ちゃんと渡せるかなあ……」
「つつい弱音を吐く私に、華ちゃんは言う。」

「大丈夫ですよ！ 誠心誠意ぶつかれば、きっと報われます。先輩
さっき言ってくれたじゃないですか」

「華ちゃん……」

「バレンタインは女の子の一大イベントですもん。素直になれるチ
ヤンスですよ、先輩」

「そっか、女の子の……」

「なんだかテンションが上がってきた。」

「普段は可愛くないこともたくさん言ってしまう私だけど、この日
くらいは。」

「愛の告白が出来るかどうかは別だけど、あの鈍感な幼馴染みに少
しくらい素直な気持ちがあれば、嬉しい。」

「心に火がついたのを感じた。」

「ガシツとカップを持ち、私は紅茶を一気に飲み干した。」

「ぷはー！ よし！ 気合入った！」

「せ、先輩、なんだか男らしいです……」

「ありがとう、華ちゃん。……頑張ろうね！」

「はいっ」

「私たちは力強く頷き合った。」

「来たる2月14日 チョコレートの魔法で、私は「女の子」に
なれるのだろうか？」

1 & 1 t ; 天使と、チヨコレート会議 & g t ; (後書き)

出来心でweb拍手を設置してみました。

私は朝の清々しい空気を噛み締めながら、通学路を歩いていた。

2月は寒さがピークなので空気も特に澄んでいる。嬉しくて大きく深呼吸をすると、制服のリボンがかすかに揺れた（そう、恋する乙女として、もうジャージ登校は卒業したのだ）。

昨日の華ちゃんとのバレンタイン会議の後も、ラッピングはどうしようかとか手紙はしたためるべきかとか1人考えていたら夜更かししてしまい、正直言うことや寝不足気味だ。だけどそんな眠気も冬の空気に触れれば一気に吹き飛ばす。

この心地よさをゆっくり味わうのは好きだ。だから冬はよほどの寝坊をしない限り余裕を持って家を出て、通学ラッシュより少し早めに学校へ着くことが多い。

そして例によって、本日も私は始業時間の40分前に校門をくぐった。と同時に、体育館のほうから何やらボタンボタンと音が聞こえてきた。

「……………おお、今日もやってる」

体育館に近付き半分開いた窓をそつと覗くと、思った通り、中では柔道部が朝練の真つ最中だった。

床に人が叩きつけられる大きな音があちこちで響き、部員たちがウォーとかオツシャーとか勇ましい掛け声をあげる。

うーん。ザ・男の世界って感じだ。

柔道部の連日の熱がこもった朝練、それは次の土曜日に控えた大会のためだ。

私は、団体戦の選抜メンバーになったと報告してくれたときの七緒の嬉しそうな顔を思い出した。それから何回かメンバーの入れ替えを経て、数日前の最終的な発表で、七緒は先鋒に選ばれたらしい。私も自分のことのように、嬉しい。

七緒の姿を探す。数秒間体育館を見回した後、ようやく発見した

彼は、ちょうど組み合った相手を見事に投げ飛ばしたところだった。「よっしゃあ！ 七緒すげー！」

しまったと気付いたときにはもう遅く、私は思わず大音量で叫んでしまっていた。

……だって、感動して、つい。

その声は部員たちの極太ボイスにも負けず、館内にはつちり響いた。

「……え、心都？」

と、目を丸くした七緒。

柔道着を着たごつい面々も、皆驚いてこちらを向いている。視線が痛い、つらい、恥ずかしい。

「す、すんませんっしたー！」

体育会系の返事を残し、私は教室まで全力疾走した。

「あー、心都のおかげで恥ずかしかった」

朝練を終え教室へ戻ってきた七緒に、私は手を合わせた。

「まことにすみませんでした……」

七緒は疲れを解すように、自分の首筋をグーで軽く叩いていた。

「あの後、技きめても技きめられても道着直してもモップかけても部員から『七緒すげー！』ってからかわれるし」

「猛省しております……」

七緒の机に額をつける勢いで頭を下げる。

「登校ついでに覗いたら、あなた様があまにも見事な背負い投げをお決めになったもので、つい感極まってしまいました……」

「……へへへ。苦しくない、顔をあげい」

七緒が溢れる笑顔を抑えきれずに言った。あら、やっぱり単純な奴……なんてつい心の中で呟いてしまう。

相変わらず首筋や肩をトントンと叩きながら、彼は自分の椅子に深く座り直した。

「いよいよ土曜なんだよ」

「うん、知ってる」

「小さい大会とはいえ、先鋒として選んでもらったんだから死ぬ気で頑張んなきゃな」

「うん、うん。死ぬなよ。私、応援いくよ」

「サンキュー」

七緒の笑顔が眩しくて、私は不自然にならない程度に視線を逸らした。

そんなこと言われたら、そんな顔されたら、こっちだって死ぬ気で応援したくなる。七緒の今までの頑張りの成果がようやく発揮されるときだ。嫌でも力が入る。

なにか差し入れでも持っていこうか。レモンの砂糖漬けはどうだろう。いや、前にも七緒と作ったし、定番すぎるかな。こういうときって、何が一番嬉しいんだろう……やっぱりカツ丼？ いやいや、重い、重すぎるよ。

私がそんなことをぐるぐると考えていると、別に対抗したわけではないだろうが、七緒は右腕をぐるぐると回した。

さっきから首やら肩やら腰やらを叩いたり、妙に落ち着きがない。

「……ねえ、体痛いの？」

七緒は少し首をひねった。

「んー、なんかここ最近、関節とかちよつと痛いんだよ」

「えっ、大丈夫なの？ も、もしかして練習しすぎとか……」

「いや、さすがに大会直前のこの時期だし、練習量は一応考えてや

ってるつもりなんだけど……」

「ここまで言うと、七緒は何かを思いついたかのようににやりと笑った。

「これが噂の成長痛ってやつか……？」

「え？」

「ウサゴリの御利益か？　とうとう俺に怒涛の成長期が来たのかも！」

その美少女顔を輝かせ、あまりにも嬉しそうに言うものだから、私はついつい吹き出してしまった。

ウサゴリの御利益って（まさかとは思うけど、微妙に韻を踏んでいるのか？）。あの時あんなに馬鹿にして、全く祈らなかった奴の言う台詞じゃない。

「なんだよ」

「いや、風邪前の関節痛だったりして」

「試合前に縁起でもないこと言うなよ。見てろ、来月辺りには180越えのマッチョマンになってるかもしれないからな」

「ただだけハイペースで成長する気だ。それにそんな七緒、どう頑張っても私には想像できない。」

「はいはい。でも本当に大丈夫なの？」

「うん。柔道に影響出るほど痛いわけじゃないから」

「ならいいけど……。気をつけてよね」

「おー」

七緒がそう答えるのと同時に、本鈴が鳴り、先生が教室へ入ってきた。

なんとなく悔しいから、言ってあげない。

さつき体育館で練習中の七緒の姿を探したとき、すぐに見つけられなかったこと。

つい最近まではそんなこと、有り得なかった。ごりごりの部員たちの中にいる七緒は、華奢で、小さくて、例えるならまるで可憐な女子マネージャーのようで、柔道着を着ているにも関わらず明らか

に浮いて目立っていたから。

今こうして教室であらためて向かい合った七緒だって、やっぱり美少女顔は美少女顔だし、そんなに体格が変わったようにも感じられない。いつも通りの見慣れた姿だ。

それがさつきは、この幼馴染みを発見するまでに数秒かかってしまった。七緒はあまりにも違和感なくあの男だらけの中に溶け込んでいた。

やっぱり少しずつ、昔とは変わってきているのだ。色々なことが

私は自分の席へ戻る。

嬉しいような寂しいような、校庭を全力疾走したいようなこのまま暖かい教室で眠りたいような、そんな不思議な気持ちだった。

私がバレンタインという乙女な行事に参加の意を表したことで一番喜んだのは、美里だった。

「バレンタインにチョコレートだなんて、心都もようやく普通の恋する女の子って感じになってきたわねえ……」

4時間目の体育が終わり、グラウンドから戻る途中、美里はしみじみと言った。

普通の恋する女の子の以前はなんだと思われていたのだろう。嫌な予感がするから聞かないでおく。

「あの、美里。言っとくけど私、告白するわけじゃないよ」

「わかってるわよ。心都のことだから、どうせ好きのすの字も言えないで渡しちやうんでしょ」

「うっ」

「で、七緒くんは七緒くんで、『心都がチョコくれるなんて珍しいな』。幼馴染みだからってそんな気い使わなくていいのに」とか言っっちゃうのよ」

「うっうっ」

やはり美里、長い間私の恋の行方を見守ってくれているだけあって、痛いところを突いてくる。

可愛気のない私と、鈍感な七緒。こんな私たちだから、美里の言うそれはかなり実現の可能性が高い未来だ。

「……なんていうか、七緒が義理チョコだっと思ってんなら、それはそれでいいの。今の私はまだ告白なんてできるレベルじゃないし」

「へえ」

「とにかく渡すだけでいっばいっばいだもん。……でも私からは絶対、『義理チョコ』って言わないけど」

「なるほど」。多くは語らず嘘は吐かず、心を込めたチョコを渡すのが唯一の目標ってことね」

さすが美里だ。私の言いたいことを上手くまとめてくれた。

「うん……やっぱり駄目かな？ スローすぎるかな？ もっとガンガン進むべきかな？」

思わず美里にすがりつく私。昨日は華ちゃんのおかげで気合いを充電できたものの、やっぱりふとした瞬間に不安でたまらなくなってしまう。

受け取ってもらえないかもしれない。

また可愛くない言い方をして、喧嘩になってしまつかもしれない。

義理チヨコだと解釈されて、想像以上に傷つくかもしれない。そして万が一、普段は鈍感な彼が今回に限りこれは本命チヨコだということに気付き、そして……ふられるかもしれない。

いま少し考えただけでも、こんなにも様々なバッドエンドが頭をよぎって、雄叫びをあげたい衝動に駆られる。そんな私に、美里は諭すように言った。

「まあ、心都らしいんじゃない。ゆっくりでも前進は前進でしょ。

焦ってもいいことないわよ」

「……そうだよ」

うじうじするのは好きじゃないのに、恋に關してだけはどうしてもネガティブになってしまうのだ。良くない、良くない。

とりあえず頭を振って、悪い想像を追い払う。何か楽しい話がないと、私は話題を変えてみた。

「ねえ、美里は？ 田辺にチヨコあげるの？」

「は？」

綺麗な笑顔はそのまま、美里の声だけがぐっと低くなった。すごい迫力だ。

「どうして私が田辺さんにチヨコを？」

「いや、最近仲良しだし……あげるのかと思って……」

「あげないわよ、ただのお友達なもの。確かに最近甘いものが食べたいナーとかわざとらしく言ってくるけど。コンビニで板チヨコで

も買えばって言ったら泣いてたけど」

「……そっか」

やっぱり愛が生まれるまでの道のりは、長く険しいらしい。田辺の恋もきつと私に負けず劣らずのスローテンポだ。

頑張れ、田辺。

私も、頑張る。

「あ」

もうすぐ更衣室というところで私は足を止めた。

「どうしたの心都」

「グラウンドにタオル忘れてきちゃった。美里、先に戻ってて！」

了解と手を振る美里を残し、私はグラウンドまで走った。

鉄棒の端に掛けっぱなしになっていたM Yタオルを掴み、また校舎へと戻る。昼休み中ということで、廊下は賑やかな雰囲気だ。

1階から2階へ上がる途中の踊場で、私は後ろから小さく肩を叩かれた。

振り向くと、見知らぬ女生徒3人組が、なんとなく浮き足立った様子でそこにいた。3人も長めの髪が綺麗。雰囲気からして後輩

ではない気がするから、多分3年生だろう。

「2年の杉崎さんでしょ」

「はあ、そうですけど」

警戒心を隠しきれずにそう答えると、3人組はにこりと笑った。

「東くんと幼馴染みなんだよね？」

私は首を縦に振る。

ほらやっぱりこの子だよーと3人組が笑顔で小さく言葉を交わし合った。

なんとなくわかってきた。たいそう女性からおモテになる七緒との仲も15年目に入ると、この手の質問には嫌でも慣れてしまう。

恐らく次に続く言葉は

「ねえねえ、2人は付き合ってるの？」

予想は的中した。

普段から七緒の近くにいる機会が多い私は、このような誤解を受けることがたまにある。別にそれで何か危害を加えられたりするわけじゃないから、特に気にしてはいないのだけ。

「付き合っただけですよ」

「マジでー！ ああ良かったー」

女の子たちの甲高い声が弾ける。耳の奥が少しキンとした。

「じゃ東くんフリーなんだ。バレンタイン渡せるじゃーん」

「ひと安心だわー」

「頑張んなきゃねー」

3人それぞれが隣の者の肩を叩き笑い合う。どうやら全員が七緒ファンらしい。今に始まったことではないけど、私はこういう事態がある度にあらためて驚く。

なんだあいつ、アイドルかよ。

「ねえ東くんってどんなチヨコが好きか知ってる？」

「いや、ちよっとそこまでは……」

つつい苦笑いで答える。

七緒は甘いもの割と好きだし、なんでも食べてくれるんじゃないですか？ とは言わない。なんとなく（性格が悪いのでしょうか、私）。

「そっかー。じゃあ本人に直接聞きに行っちゃおうか」

「だねー」

「杉崎さん、ありがとう。じゃあね」

用事が全て済んだらしく、3人組はスキップでもしそうな勢いでその場から立ち去った。

私はもう今更、七緒がモテていることくらいでは焦らない。

ただ今日は、なんとなくくいつもより疲れた。

着替えを済ませて教室のほうへ向かうと、昼休みの廊下ではさっきの言葉通り、件の3人組に呼び出されたらしい七緒がきゅんきゅんぴきゅんの質問攻めにあっていた。

「東くん、うちら来週チョコあげるねー？」

「……はあ、それはどうも……」

「東くんはどんなチョコが好きなの？」

「え、どんなって、別に特には……」

明らかに困っている様子の七緒と、ぱっちり目が合う。その視線はSOS信号を発していた。

助けてあげたいのは山々だけど、残念ながら幼馴染みという肩書きには人様の恋路を邪魔する力はない。薄情かもしれないけど、黒岩先輩のキス未遂事件の時のように強引に何かされているわけじゃないし。私にはどうしようもない。

ま、頑張れ。これも宿命だ。

私は同じく目でそう伝えてフンと笑うと、教室のドアに手をかけた。この薄情者ー！ という七緒の心の叫びが聞こえてくるようだ。

と、その時。

「おらおらおらー！ どけブサイクども！」

凄まじい大声が辺りに響いた。聞き覚えがある声だけど、間違いであってほしいなと私は思った。しかしブサイクどもって……ひど

い、ひどすぎる。

恐る恐る声のほうを向くと、

「七緒先輩が困ってんじゃねーか！ 空気読めゴルァ！」

やはりというべきか、進藤禄朗。七緒の前にドンと立ちほだかり3人組を蹴散らしていた。

相変わらずの、限界まで重力に逆らったツンツンヘアーに、引きずりそうな丈の制服ズボン。目はナイフのように鋭いけど、その奥に七緒への一途な想いが燃えたぎっているのを、私は見た（そして、できれば見たくなかった）。

突然の乱入者にブサイク扱いされてしまった彼女たちは、ハラワタが煮えくり返ったような表情を浮かべている。

「いやー！ なんなのこいつー！」

「ありえない！」

「超うざーい！」

当然といえば当然の反応だろう。3人は間違ってもブサイクではないし、「空気読め」なんて横暴でお馬鹿な彼にだけは言われたくない台詞だ。

しかし、そんなことで引つ込む禄朗ではない。

「うっせえ年増ババア！ 散れや！」

禄朗、あんた、いつか刺されるよ。

私は呆れて、占い師のおばさんよろしく呟いた。

だけど心の隅のそのまた隅でっすだけ、本当にほんの少ーしだけスカッとしている自分があることもまた否定しがたい事実だった。

やっぱり私、そこそこ性格が悪いのかもしれない。

4 & 1 t ; 火花と、青春のよるめき & g t ;

3年生3人組は、禄朗の強烈すぎる言葉の暴力を食らい、蜘蛛の子を散らしたように逃げ出した。

もちろん「うざい!」「キモい!」「ありえない!」という憎しみたつぷりの捨て台詞付きだったけれど。

廊下に残されたのは、鼻息の荒い禄朗と、呆気にとられた七緒、そしてなんとなく教室に入るタイミングを失った私。

「七緒先輩、大丈夫っすか!」

禄朗が七緒の肩を掴みガクガクと揺すった。

「う、うん。禄朗、助けてくれたのは非常に有り難いんだけど、お前そんなんじゃないっつか刺されるぞ……」

私もさつき全く同じ感想を持った。まるで歩く暴言生産マシンのような彼がもしも明日殺されたとしても、動機を持つ人間が多くて容疑者を絞るのは大変だろう。

しかしそんなことは微塵も気にしていない様子の禄朗、どうやら七緒の感謝の言葉だけをピクアップして受け取っただけらしい。

「これくらいお安いご用っすよ! あいつらまるで小うさぎを狙う飢えたハイエナみたいな目をしてたっすから! ……しかも! こいつは見て見ぬ振りで助けようともしないし!」

と、禄朗が私に人差し指を突きつけた。

「このボサボサ女、最低な薄情者っすよ!」

「こ、この髪は体育のあとだからちよつと乱れてるだけ! 普段はちゃんとしてるから!」

「は! どーだか」

「くっ、ムカつく! このツンツン馬鹿頭!」

「はいストップ、ストップ」

火花を散らす私たちの間に、七緒が割って入る。その表情は明らかにぐったりしていた。

ああ、いけない。ここで禄朗の挑発に乗るなんて大人気ない、可愛くない、常識ない。私は咳払いして笑顔を作った。

「うふ。ねえ禄朗くん、何か用があつてここまで来たんでしょ？」

「あ、そうそう、七緒先輩に言いたいことがあつて。ボサボサと話してる暇はねえよ。あとどうでもいいけどその顔と喋り方気持ちわるいぞ」

私は拳を握りしめた。やっぱりこいつは敵だ。

禄朗がおもむろに七緒に向き直る。

「先輩！ 来週の14日は、お腹空かせて学校来てくださいっ！」
「え？」

怪訝そうな七緒に対し、禄朗は笑顔全開だ。14日ということは、もちろん彼が言うのはバレンタインの話だろう。

正直、この事態は予想していた。七緒先輩ラブな禄朗が、瞳にバラを咲かせてしまう乙女な禄朗が、こんな行事をスルーするはずがないのだ。

「俺、料理はしたことないっすけど、頑張つて美味しい Milfie コ作るっす！ 14日の昼休みにお届けするんで楽しみに待つててください！」

バレンタインに Milfie コだなんて、ずいぶん思い切った選択をしたものだ。確かにいつだったか、禄朗と七緒が Milfie コ談義で盛り上がりつつあったような記憶もあるけど。

「んじゃっ、それだけ言いに来たんす！ 失礼しまっす！」

それだけ宣言すると、禄朗は風のように去つていった。

「なんだつたんだ今の……」

七緒はわけがわからなさそうに、禄朗が消えた方向を見つめた。

「直訳すると『バレンタインは俺の愛をドーンとぶつけるっす！ 覚悟しといてほしいっす！』 だろうね」

「え！？」

私の答えに、七緒は驚いて目をむいた。

「愛つて、そんなまさか」

「モテる男はつらいねえ」

「何言ってるんだよ」

私は少しの同情を込めて、七緒の肩を軽く叩いた。そしてその時になって初めて、彼が柔道着を肩に掛けていることに気付いた。

「もしかしてこれから昼練？」

「うん。部室行こうとして廊下出たら、さっきの人たちに捕まったから」

「ご飯は？」

「5分で済ませた」

なんとという俊敏さだろう。朝と放課後に加えて昼まで部活だなんて、よほどの情熱がなければできないことではない。そういえばここ最近昼休みに七緒の姿が見えなかった気がするのは、練習に打ち込んでいたからか。

「そっかー……大変だね」

私が七緒の顔をまじまじと見つめると、彼は飄々と言った。

「いや別に。好きでやってることだから苦じゃないし、大会も近いし。……それにこの頃、ようやく柔道の本当の楽しさが少しだけわかってきた気がするっていうかさー」

七緒の顔が輝き出す。

「うまいこと言えないけど、最近部活がすっげー楽しいんだ」

「……うっ」

どうしよう、七緒が眩しい。眩しすぎる。

一生懸命な彼の笑顔はどうしてこんなに素敵なんだろう。私は思わず両手で目を覆い、よろめいた。

「心都？ なんだよ、ドライアイか？」

「いや、なんかやけに輝いてるから……」

「は？」

いまいちピンとこない様子の七緒。

「……うっん、なんでもない。昼練頑張ってるね」

「おー」

そう言って歩き出す七緒の肩で、使い古された柔道着が揺れている。そこにしがみつくように括り付けられているのは、私がクリスマスにあげた手作りの柔道着型のお守りだ。もちろん着るときは外すんだろうけど、七緒はあの日以来、このちゃん手作りプレゼントを律儀に持ち歩いてくれている。

私は七緒の後ろ姿を見送りながら、なんだかくすぐったいような気持ちで噛みしめた。

「それにしてもキラキラしてるなー……あいつ」

七緒が楽しそうで嬉しいのはもちろんだけど、実は少し羨ましかつたりもする。私もあんなふうになんかに打ち込んだりしたいな……なんて思う。

私が夢中になれるものって、一体なんなのだろうか。

「そりゃあ七緒くんですよ」

美里があまりにもハッキリと言うものだから、私は喉に卵焼きを詰まらせてしまった。

「ぐ……っげほ」

「やだ、何むせてるのよ」

お上品にお弁当を食べながら美里が笑った。

私も何かに夢中になれるかなあという質問に対して間髪入れずにこう答えられたら、むせても当然だろう。なんとか卵焼きを飲み下し、目の前の美里を見据える。

「……美里お、私は真面目に相談してるのに！」

「私だって真面目に答えてるわよ」

そう言う美里の表情は間違いなく真剣だ。

「心都が今一番情熱を注いでるのは七緒くんへの片思いじゃない」

「うーん……」

確かに美里は間違ったことは言っていない。言っていない、けれど。

「……なんかそれ、男のことしか頭がないパツパラパーな女みたいで、やだ……」

ぷつと美里が吹き出した。

「心都、どうしたのよ急に」

自分でもおかしいと思う。でも、私は少し焦り始めていた。

「いや、なんか最近、真剣に柔道に取り組んでる七緒がやけに輝いて見えてさ……私はこんなんでいいのかなって」

目標や趣味や取り柄や生きがいも特にない。ないない尽くしの平凡すぎる私はこのまま貴重な青春時代を消費していくのだろうか。考えたら少し頭がくらくらしてきた。

「ねえ、ちよつと考えすぎじゃない？ この歳でそんなに打ち込めるものが見つかる人ってそうそういないわよ。心都らしくゆっくり見つけてほしいじゃない」

ね、と美里が私の肩に手を置く。こういつときの彼女はまるで姉のように温かく頼もしい。

「ありがとう……ごめんね、取り乱して」

「いーえ」

どうやら私、七緒の眩しすぎる笑顔に少しあてられてしまったようだ。まったく、あの美少女顔の鈍感野郎には変な影響力があったりする。

「あ、土曜に七緒の大会応援に行くんだけど、美里も行かない？」

「うん、行くのかな。七緒くんが柔道やってるところって見たことないし、なーんか想像できないのよね」

「じゃあぜひ見たほうがいいよ！ 結構かっこいいからさ！ 行くー！」

意気込んで立ち上がりながら言つと、勢い余って椅子を倒してしまつた。

美里が呆れたように言う。

「ほら、やっぱり首つたけ」

穴があつたら入りたい。

5 & 1 t ; シュシュと、試合開始 & g t ;

その大会は、隣町にある中学校の体育館が会場となっていた。

土曜日の昼過ぎ。美里と共に体育館に足を踏み入れると、そこにはいかにも柔道やってます！ という感じの巨漢男子たちがひしめいていて、私たちはまるで場違いのようだった。

「なんか、これぞ男の世界って感じね」

応援席に座るや否や、美里がきよるきよると辺りを見回しながら言う。

今日の彼女、上はぎっくりとしたニットに、下はバーバリー風のチエックのミニスカート。すらりとした足が美しく、会場の中でもいつそう光を放って見える。校内きつての小悪魔美少女は、場所がどこであるうと気を抜かず完璧に可愛い。

今日は応援に徹するから！ と、パーカーにジーンズのラフすぎる格好で来てしまった私は、あらためて隣の彼女と自分の姿を見比べて絶望的な気持ちになった。

「それにしても心都、今日は禄朗くんがなくて良かったわね」

「え？」

美里の手がゆっくりと私の頭に伸びてきた。

「もし今日会ったらまたボサボサ女って言われてたわよ」

脳天をガシツと掴まれ、私は戦慄した。美里の顔がこの上なく恐ろしかったからだ。

「最近ちゃんとしてると思ったのに、ちょっと気を抜いたらこれよ」

「み、美里……えーと、今日は時間はあっただけど、寝癖が強すぎてまとまらなくて……け、決してこの現状に満足しているわけじゃなく……改善したい気持ちはあっただんですが……」

そう、今日の私は気の抜けたファッションに加えて、毛先があちこち跳ねて暴れ回っているというおてんばヘアスタイルなのだ。

しどろもどろな私を見た美里は、溜め息を吐くとピンクのポーチ

を「ごそごそ探り出した。

「あのね、別に七緒くんの応援に来てるからちゃんと可愛くしろって言ってるんじゃないのよ。誰が周りにいてもいなくても、常にそういうのに気を使ってこそ、本当に好きな人の前でも可愛くなれるものなんじゃないの」

「な、なるほどー……」

彼女からは本当に学ぶべきことが多い。

「はい、これ貸すから直してきなさいよ」

そう言っただけで美里が渡してくれたのは、シンプルな白いシュシュだった。

「軽く濡らしたりして結べばちょっとはマシになるでしょ」

「そっか……！ 美里、ありがとうー！」

目から鱗だ。私はとにかく髪を真つ直ぐ整えようと必死になるばかりで、結んでアレンジを加えて誤魔化すなんて小技は全く頭になかった。そういうえばこんな可愛らしいヘアゴムの一つも私は持っていない。ひょっとして女子失格だろうか。

試合開始まではまだしばらく時間がある。私はひとり館内のトイレへ急ぎ、髪型の修正に取りかかった。

シュシュを片手に鏡とにらめっこしつつ、元気すぎる髪と格闘した末、なんとか上手い具合に寝癖をまとめることができた。

「……よし」

ふうと息を吐くと、鏡の中にはどことなく張り詰めているような自分の顔があった。

私がかんだってどうしようもないことはわかっているけど、今日はずいぶん七緒が練習の成果を発揮する時だ。否が応でもドキドキしてしまう。

幼馴染みの肩書きのジレンマ、バレンタインへの不安、七緒のキラキラ具合に対する焦り、頑固な寝癖 最近悩みが盛り沢山な私だけ、今日だけは。

今日だけは全部忘れて、とにかく七緒を全力で応援することだけ

考えよう。

私は鏡を見つめて、自分の頬を両手で軽く叩くと、トイレを出た。数歩進んだ通路に入ると、そこで見慣れた柔道着の後ろ姿を発見した。

「お、七緒ー！」

1人ふらふら歩いていた七緒がゆっくりと振り向いた。

「おはよ。へへ、応援来たよ！」

「……うん」

「頑張つてね！」

「……うん」

どうも様子がおかしい。

反応が鈍いし、目がぼんやりしているし、私の顔を見つめているように微妙に視点が定まっていない。なんだろう、緊張？

「……っていうか」

七緒がのろのろと口を開いた。

「すみません、誰でしたっけ」

私は頭をハンマーで殴られたような衝撃を覚えた。

誰、って。そんな！

15年の付き合いは、かくも脆く儂いものなのか！

「いや、あの……私、杉崎心都」

「俺、東七緒。……あー、なんだ。心都か」

ギクシヤクとした自己紹介の結果、七緒の重たそうな目がようやく私をとらえた。

「来てくれてありがとう。髪型が違うからわかんなかった。切った？」

「結んでるだけだよ」

「へー。髪型が違うからわかんなかった。切った？」

「いや、だから結んでるだけですけど」

「あ、そうなんだ。なんか髪型が違うからわかんなかったんだよな
ー。切った？」

「……………」

会話が無限ループしている。

私は言いようのない不安に襲われた。

「な、七緒……………？ 大丈夫？」

「えー？ 何が？ だいじょぶ、だいじょぶ」

そう答えると七緒がグツと親指を立てた。しかし、その目は心なしか潤んでいる。

「七緒……………」

「んじゃ、俺そろそろ行くから」

「う、うん…………… 本当に大丈夫？」

「おー。応援よろしく」

ひらっと手を振ると、七緒は恐らく選手の集合場所なのでであろう一角に向かい歩き出した。少しよろけ気味で危なっかしい。

不安になった私がある後姿を見守っていると、七緒は途中もう一度こちらを振り返り、妙に間の抜けた声で言った。

「だいじょぶ、だいじょぶー」

私は確信した。

絶対、大丈夫ではない。

応援席へ戻ると、美里が私の頭を見て満足そうに微笑んだ。

「うん、いい感じに結んだわね」

「美里……」

思わずさがるように名前を呼ぶと、自分でもびっくりする程か細い声になった。

「どうしたの、心都。一気に半世紀老け込んだみたいな顔になってるわよ」

「さながら私は還暦越えか。」

「七緒が変だったよ」

「会ったの？」

「うん。なんか、とろーんとしてた」

「とろーん？ 何それ、心配ね」

あれは緊張から来る極限の精神状態だったのだろうか。

しかし小さい頃から七緒の試合は何回か見に行っているけど、あんなおかしな彼はいまだかつてなかった。七緒はどちらかというと本番に強いタイプで、その緊張感を楽しむとまではいかなくても、ドキドキに押しつぶされることなく試合に挑める人間だったと思う。では、さっきの七緒はなんだっただろう。

私が底知れぬ恐怖に襲われているうちに、辺りの雰囲気徐徐に変わり始めた。

「あ、始まるみたいね」

美里が私の袖を引っ張る。

私は祈るように手を組み、場内に現れた七緒を見つめた。

「心都、保護者じゃないんだから」

「うう、だって……」

もう不安で不安で堪らない。

試合が始まった。

先鋒である七緒の相手は、七緒より少しガツシリした感じの男子。

七緒はさすがにあの腑抜けた様子そのままではなく、一応しゃんとしている。両手を構え、相手に技をかけようとしたり、かけられそうになったり。顔だつてさっきみたいにはんやりしていない、凜々しい七緒だ。

がっちり組むところまではなかなかいかないけれど、お互いが逃げずにしかけ合う、傍目から見ても結構良い試合だと思う。

しかしやっぱり七緒はどこがおかしい。

「ねえ、なんか……調子悪そうじゃない？」

「うーん……そうねえ」

時々、動きが鈍くなるような瞬間があるのだ。

私は昔、彼が言っていたことを思い出していた。

自分は柔道をやっている同年代の人たちの中でも特に体が小さいけど、そんなことを嘆いてもどうしようもないのだと。

だから、パワーで勝てない分は動きで取り返すしかないのだと。

その言葉通り、七緒はいつも俊敏な動きを武器とする柔道をしてきた。

それなのに、今は違う。

明らかに動くのが辛そうなのだ。

「どうしちゃったの、七緒……」

私は戦う幼馴染みを見つめ、心の中で何度も叫んだ。

頑張れ、七緒！

大きな歓声が場内を包んだ。

6 & 1 t ; 天使 (再) と、チョコレート作り & g t ;

細かく切り刻まれたチョコレートは、湯煎して軽く混ぜると、ポウルの中で魔法のように溶けていった。あつという間に出来上がったなめらかな茶色の川に、私は思わず感歎の声を上げる。

「わー、がぶ飲みしたい」

「ふふ、すごく綺麗に溶けましたね」

華ちゃんが嬉しそうに言う。

「先輩の微塵切りが上手だったからですね。私、手さばきに感動しちゃいました」

そんなに純粋な瞳で言われると、普段あまり人から誉められ慣れていない私はなんだかくすぐったくなってしまう。しかし、微塵切りが上達したのは部活で向上心を持って特訓した成果……ではなく、何か嫌なことや腹立たしいことがあると料理（それも大量生クリーム）の泡立てとか、山盛りキャベツの千切りとか、一心不乱に腕を動かす系のもの）で現実逃避するという癖があるからだ。我ながら可愛くない理由でちょっと悲しくなる。

クリームと少しのブランデーを加えたチョコレートの荒熱を冷ます間、華ちゃんはその他の材料たちを眺めて緊張気味に呟いた。

「いよいよ明日なんですな……」

本日2月13日、日曜日、バレンタインイヴ。おそらく1年中最も一番、全国のエプロン装着率が高いであろう日。

例に漏れず私と華ちゃんも、昼間から杉崎家のキッチンでトリュフ作りの真っ最中だ。

「そうだねえ。きつと恋する女子たちはみんなそわそわしてるんだろっね」

「碌ちゃんも今頃ミルフィーユ作り頑張ってるのかな……」

と、華ちゃんは温かい表情で微笑んだ。

碌郎が七緒にバレンタインの贈り物をするについて、彼女は

とつくに知っていた。なんでも禄朗から直接「バレンタインに無難にチョコをあげるのと、相手の好みを重視してイレギュラーだけどミルフィーユをあげるのと、どっちがいいと思うか」と訊ねられたらしい。おそらくこんな乙女チックすぎる質問ができる友人が他にいないんだろうけど、それにしただって自分に少なからず好意を持っているであろう子にそんなことを聞くなんて、彼の無神経ぶりは山より高く海より深い。

そしてそれにきちんと答えてあげる華ちゃんの健気さに、私はまたしても涙ぐみそうになってしまう。

「華ちゃんは……禄朗の七緒ラブっぷり、平気なの？」

「はい。禄ちゃんが楽しそうだから、私も嬉しいです」

やはり、この子は天使だ。私は再び確信した。

例え自分にとって都合の良い出来事じゃなくても、相手のことを思ってそれをプラスに変える。なかなか出来ることじゃない。

「人間ができてるなあ……」

「えっ？　そ、そんなことないです」

慌てて否定しながら両手を振る華ちゃん。その姿はもう可愛くて可愛くて、私は全力でこの子を応援したい、絶対幸せになってほしいと今まで以上に強く思った。

「あ、そろそろかな」

冷め具合を確かめた後、私たちはチョコレートを袋に入れて、バツトにいくつも絞り始めた。

力を入れすぎず抜きすぎず、綺麗に丸く絞り出すのは結構難しい。「そういえば昨日、東先輩の試合の応援だったんですね？　どうでしたか？」

ぐちゃ。

嫌な音とともに、私の手元には汚い形に絞り出されたチョコレートが現れた。

チョコの乱れは心の乱れ　と偉い人が言ったかどうかは知らないけど、とにかく今、華ちゃんの無邪気な質問により、私は少し動

揺っていた。

「先輩？」

「……うん、行ったんだけど……結局判定で負けちゃったんだよね」
「え……そうだったんですか」

私は頷いた。

一晩経った今でも、はつきりと思い出せる。あの時の七緒の不自然で辛そうな動作。一体彼に何があったんだろう。

結局試合が終わった後は会うことができなかったので、心配は未だ解消されないままになっている。

「七緒、大丈夫かな……。気合い入ってた分すごいへこんでそう」
「そうですね……」

ずっと努力してきた、ようやくメンバーに選ばれた試合。それがあんな感じになってしまった今、彼は何を思うのだろうか。こんなちっぽけな私に何ができるのだろうか。

一晩考えた、その結果、

「とりあえず今は……嫌な気分が少しでも吹っ飛ぶくらいの美味しいチョコを、自分あげたいっす!!!」

突然大声を出した私に、華ちゃんはビクツと肩を揺らした。

「あ……ごめん、つい熱くなっちゃって」

「い、いえ。……応援しますね、先輩」

「ありがとう。華ちゃんもね」

私たちはお互いの健闘を祈りつつ、再びトリュフ作りに取りかかった。

翌朝。

私は自分の家の前でひとり仁王立ちをしていた。右手には通学鞆、そして左手にはラッピングしたチヨコの入った水色の紙袋を持って。

「さすがに寒いな……」

思わず声に出すと、白い息がふわりと立ち上った。いくら冬が好きと言っても、寒空の下、何分も突っ立っただけでは冷える。

でもどうしても朝のうちに七緒にチヨコを渡してしまいたかった。一日中タイミングを図って過ごすのは嫌だし、どうせ学校に着いたら彼にはたくさんの女子が殺到するだろうし、うるさい禄朗に邪魔される可能性もあるし。それに何より、朝一で渡して、「土曜はお疲れ様！」って声をかけて、笑って、七緒の心が少しでも軽くなればいいな、と思う。

東家から学校へ行くには、必ずこの徒歩5分以内の私の家の前を通ることになる。だからここで立っていれば必ず通学中の七緒と鉢合わせできるのだ。最初は七緒の家の前で待ち伏せしようかと思っただけど、ストーカーっぽいことに気付いてやめた。さすがにこんな大切な日に変態呼ばわりはされたくない。

トリュフはとても美味しく出来た。昨日華ちゃんと味見したら、自分たちで作ったのがちょっと信じられないくらいの良い味だった。今朝はいつも以上に早起きして髪もちゃんとブローできたし、もちろんジャージではなく制服姿だし、リップも塗ったし、実は普段は手にしないビューラーを使って、慣れないながらも睫毛をちよつと上げちゃったりなんかしている（ああ、今日に限って校門で抜き打ち検査なんかありませんように）。

「……うん、完璧。大丈夫」

自分に言い聞かせるように呟く。実はさっきから動悸が激しすぎるのだ。

私はかなり緊張していた。

情けない、たかがチョコをあげるだけじゃないか。ほぼ毎日顔を合わせている幼馴染みに、おやつをプレゼントするのが、たまたま2月の14日目なだけじゃないか。無理矢理そう思い込もうとしても、やはり胸の鼓動は止まらない。

さつきから頭をぐるぐると駆け巡るのは、本番のためのシミュレーションだ。

おはよう、七緒。

心都。一体何をしているんだい。

実は渡したいものがあって。はいこれ、バレンタインのチョコレート。

急にどうしたんだい。

七緒を想って頑張って作ったんだよ、えへ。

ありがとう。

私、七緒が大好き。

心都、実は俺も同じ気持ちで……。

「ないないないない」

だいぶ現実離れしてきたところで自主的に強制終了させる。これじゃシミュレーションというかただの妄想だ。

ここまで上手くはいかなくても、とりあえずちゃんと渡したい。普段より少しだけ素直になりたい。

私は大きく深呼吸して、気持ちを落ち着かせた。

7&1t:ダブルパンチと、授業参観>

甘くて苦いチョコレート
まるで私の恋みたい

あなたを想えば
かじかむ指もへっちゃらなの

ふわふわまぶしたココアパウダーと一緒に
降り積もった私の気持ち
あなたに届け……

「 というポエムを今朝七緒を待っていた1時間で作りました」

「心都……とりあえず涙と鼻水ふきなさいよ」

美里が憐れみのこもった表情で私にハンカチを差し出した。

私は小さくお礼を言い、そのハンカチで目元を拭う（さすがに鼻水は自分のティッシュで処理した）。

寒空のした突っ立って、暇潰しのため胸焼けしそうに甘い乙女ポエムまで作り、遅刻ギリギリまで待ったものの、結局七緒とは会えなかった。それどころか教室に辿り着いて朝のホームルームが終了しても彼は姿を見せなかったのだ。

まさかと思ひ担任教師に訊ねてみたところ、返ってきたのはあまりにも無情な一言だった。

「東なら、風邪で熱が下がらないから欠席との連絡があつたぞ」
バチコーン、と頭を強く殴られたような衝撃を受けた。待ちに待ったバレンタイン、万全の状態で臨んだつもりなのに、まさか相手

が欠席だなんて。

チヨコレートを渡せないショックと、普段ほとんど風邪をひかない七緒が熱を出したことへの心配が同時にやってきて、かいしんのダブルパンチだ。

そんなわけで午前中ほぼ放心状態だった私は、昼休み、ポエムの発表を終え、ぐすぐすと美里に愚痴っていた。

「なんか私って本当タイミング悪い……」

「この場合タイミング悪いのは七緒くんですよ。土曜に調子が変わったのも、きつと熱のせいだったのね」

「……あ、そっか」

確かに、それなら試合前のループ地獄な会話も試合中の辛そうな様子も、全て納得がいく。そういえば目も潤んでいたし、足元もおぼつかなかつたし。

そして少し前の七緒の『最近関節が痛い』発言も

「成長痛じゃなくて、本当に風邪前の関節痛だったのか……」

あんなに得意気に、ゆくゆくは180越えのマツチヨマンだの何だの言っていたのに。なんとというか　心から、かわいそうな、七ちゃん。

「それにしても……すごいわね、あれ」

美里が教室の一角にちらりと視線を遣る。そこには、うずたかくチヨコの箱が積まれた、七緒の机。

「まるで漫画みたいだねー」

たくさんの女子たちがここを訪れ、『えー七緒くんいないの？』と残念そうに言ったかと思うと机にチヨコを置いていく。朝からそんなことが何度も繰り返され、昼になる頃にはチヨコの小さな山が出来上がっていた。おそらく今頃、下駄箱のほうも同じような状態になっているだろう。

「熱下がって登校したらビックリだろうね」

「チヨコ、腐ってなきやいいわね」

さり気なく美里が笑えないことを言う。風邪が治ったと思ったら

食中毒だなんて、あまりにも不憫すぎる。

「普通のチヨコなら1日2日平気だよ、多分。……まあ、生クリームたっぷりトリュフとかミルフィーユとかだったら別だけど」と、私が言ったその瞬間、

「七緒せんぱいッ！」

ガラスと勢いよくドアを開け、禄朗がやって来た。素行の悪さで有名な1年生の登場に、教室内がざわつく。

「約束通りバレンタインのプレゼントをお届けに来ましたッ！俺の特製ミルフィーユ、ぜひ食べてほしいっスー！」

そのメッセージに答える人物は、もちろんいない。可愛らしいピンの紙袋を片手に叫ぶ禄朗の声だけが、辺りに虚しく響いた。

「……禄朗。あんたのスィートエンゼル七緒先輩は欠席だよ」

私の言葉に、禄朗は目をむき食ってかかってきた。

「は、欠席！？……ボサボサ女、ためー、俺と七緒先輩の仲を引き裂こうと、嘘こいてんじゃねーぞ！」

「こいてねーよ」

あらやだ私ってば、つい言葉遣いが。

毛羽立ってしまう心をおさえて、私は笑顔で禄朗に向き直った。

「七緒、風邪ひいて熱が出ちゃったんだって。今日はお休み」

「マ、マジかよ！七緒先輩は、無事なのか！？」

「マジだよ、無事だよ。ただの風邪だもん。だから渡すならまた後日にしなよ。あと訂正だけど今日の私はボサボサじゃなく一応きちんとセツトして、」

「畜生ッ！」

私の言葉を遮り、禄朗の拳が鈍い音とともに壁にめり込んだ。おいおい。

「この日のために俺は……練習に練習を重ねて、指切ったり味見しすぎて胸焼けしたりしながら、ミルフィーユ作りに励んできたんだぜ！全ては七緒先輩のためなのに……やっと美味しくできたと思っただのに……くッ……なんて運がわりいんだよ！」

そう言いながら悔しそうにガツンガツンと壁を殴り続ける禄朗。正直に言つと、同じく七緒にチヨコを渡せなかった者として、その気持ちは痛いくらいよくわかる。しかし我がクラスの壁に八つ当たりするのはやめてほしい。うるさいし。塗料崩れてきてるし。

なんて言えばやめてくれるかなー、こいつ私に敵意むき出しだしなー、と私が考え倦ねていた、その時。

「禄ちゃん！」

再びドアが開いたと思うと、今度は華ちゃんが現れた。禄朗とは違い、彼女はきちんとお辞儀をして遠慮がちに教室に入ってきた。

いつも通り頭の低い位置で2つに結ばれた髪の毛が、今日は心なしか特につやつやと輝いて見える。

「禄ちゃん……壁を殴っちゃ駄目だよ」

数秒間で状況の全てを理解したらしい華ちゃんは、諭すように言う。

「だってよ、バレンタインだっていうのに七緒先輩がいねんだよ！俺の魂を込めたミルフィーユが無駄になつちまつたんだよ」

と、悔しそうに禄朗。

「……でも、だからといって物に当たるのは良くないよ。……ね？」その言葉を受け、禄朗はなんとなくバツが悪そうに拳をポケットにしまった。やはり、華ちゃん強し。私は感心した。

「……で、お前はこんな所で何してんだよ」

禄朗がぶつきらぼうに言つと、華ちゃんは少し頬を染めて、自分の右手を背中の後ろに回した。よく見ると、その手には綺麗な赤い箱があった。見覚えがあるそれは、昨日私の家で一緒にラッピングしたものだ。

「私は……禄ちゃんに会いに来たの」

「はあ？俺に？」

「うん、今日ずっと探してたんだよ」

ああ 華ちゃん、頑張つて！

私は思わず胸の前で拳を握りしめ、ハラハラしながら事の成り行

きを見守る。気分はまるで授業参観の母親だ。

「……だつて禄ちゃん、授業が終わる度に調理室に走って行っちゃつて、なかなか捕まらないんだもん。だから昼休みにここに来れば、会えるかなつて……」

「あー、そりや朝から調理室の冷蔵庫にミルクフィーユを入れてたからな。どっかの不届き者にパクられねえように、1時間ごとにチエツクしてたんだよ。七緒先輩にぬるくてまずいケーキなんか食わずわけにいかねーしなつ」

と、ここまで言つて、一途すぎる禄朗はがっくりと肩を落とした。

「まあ、それも無駄に終わったけどよー」

「禄ちゃん……」

「……はーあー……マジで生きる気力なくした。……これ、お前にやるよ」

そう言つて禄朗が華ちゃんに差し出したのは、七緒にあげるはずだった、ピンクの紙袋。つまり愛を込めた手作りミルクフィーユだ。

「ええ！？ わ、私に……？」

華ちゃんが慌てふためくのも無理はない。まさかの、禄朗からの逆バレンタインである。

「七緒先輩が完治したら作り直す。ちゃんと元気なときに渡したいし、先輩に古いミルクフィーユなんて食わせらんねえからよ。これもういらねーから、やる」

なんだか残飯処理みたいな言い方が引つかかるけど、華ちゃんはそんなこと全く気にならないらしく、夢見るような表情で紙袋を手にした。

「ありがとう……嬉しい」

「あー俺も帰るわ。昨日ミルクフィーユ作つてて寝てねえからねみいー」

禄朗があくびをかみ殺しながら、その場を立ち去ろうとする。バレンタイン前日に徹夜だなんて、いじらしい乙女の見本みたいだ（午後の授業をフケようとしている奴が乙女か？ という疑問はさて

おき)。

「ま、待って！ 私も、これ……あげる」

華ちゃんが慌てて自分のチョコを突き出す。それを見つめ、禄朗は怪訝そうに目を眇めた。

「何だよ、お返しとか別にいらねーのに」

「え？ いや、あの、お返しじゃないんだけど……」

「ま、でも一応もらっとくわ。お前も義理堅いな」

そう言って、禄朗は華ちゃんからチョコを受け取った。

「も、もらってくれるの？」

「ああ。やっぱり人間、義理と仁義は大事だからな。じゃ、俺は帰るわ」

禄朗の言うことは、いつでもよくわからない。

ただ華ちゃんは、教室を出ていく彼の背中を、本当に幸せそうな笑顔で見送っていた。その腕にはミルフィーユがしっかりと抱えられている。なんだかこれ、ハッピーエンド？

「先輩……禄ちゃん、受け取ってくれました。しかもミルフィーユまでもらっちゃいました」

「良かったね、華ちゃん！」

華ちゃんの恋が少なくとも一歩は前進したのを確実に感じる事ができた。私も自分のことのように嬉しい。

「でも東先輩……心配ですね……」

華ちゃんがふと瞳を陰らせる。

「あー、大丈夫だよ、多分。昔からめったに風邪ひかなかったけど、たまにひいてもすぐ治ってたし」

「でも、杉崎先輩のチョコ……」

当然のことながらトリュフには生クリームもばっちり入っている。明日以降これを口にしたら、おそらくあまり良くないことになるだろう。

「いいの、いいの。今日自分で食べるし。私も禄朗と同じく、七緒が復活したらあらためてまた作るよ」

華ちゃんの成功のお陰で、私もだいぶ気持ちの切り替えができてきた。

うん、大丈夫。もうへこんでいない。

別に今日会えなくなたって、チヨコくらいいつでも渡せるもの。

うんうんと頷くと、私は未練たらしく自分の机の上に置いたままになっていた水色の袋を、鞆の奥底にしまった。

8 & 17 : 思わぬ依頼と、ヒョウ柄ブーツ & get ;

華ちゃんが教室から出て行った、直後。

またしても知った顔が私の元へやって来た。

「ねえねえ、今日東くん休みって本当？」

数日前にバレンタインのチョコを七緒に渡すんだときゃぴきゃぴしていた、綺麗目3年女子3人組だ。

「あ、はい」

私が頷くと、彼女たちは悲鳴に近いような甲高い声をあげた。

「えー、やっぱり噂は本当だったんだ！」

「やだー」

「シヨックウ」

12時現在、どうやら七緒が欠席しているという事実は3年女子の間で噂になっているらしい。どれほどの人が今日彼のためのチョコを用意していたか、よくわかる。

「どうしよう、これ生チョコなのに」

どうやら共同で作ったらしい小さなチョコの包みを、彼女たちは困り顔で見つめた。

確かに生チョコだったら、どうしても今日中に渡したいところだろう。私にも気持ちはよくわかる。

七緒がこのタイミングで風邪をひいたことにより、一体何人の女の子のチョコが無駄になっていくのか。想像もつかないが、おそらくかなりの数になるだろう。全く、罪深い奴。

「……」

そんなことを考えている私を、気が付いたら3人がじっと見つめていた。

「……な、なんですか？」

「ねー、杉崎さん。これ、東くんに届けてくれない？」

思いもよらない提案だった。

「えっ、私が？」

「うん。幼馴染みなんですよ？ 仲良しなんですよ？ 家も近いんですよ？」

「でも……」

「うちらどつしても今日中に渡したいの！ ね？ お願い！」

あまりの勢いに私は思わず2、3歩後ずさった。

「先輩、それナイスアイディアですね！」

突如声を上げたのは、今まで黙って様子を眺めていた美里だ。見る者に不敵ささえ感じさせる笑顔で、その目はきらきらと輝いている。何か「すつごく素敵！」なことを思いついたときの表情だ。

「み、美里……？ ぐっ」

美里の肘が私の脇腹を小突いた。黙ってる、ってことか。

「安心して下さい。この人に責任持つて届けさせますね！」

「話がわかるね」。ありがと！」

じゃあよろしく、の言葉とチョコを残し、3人組は去っていった。その後ろ姿を、美里は手を振りながら見送っている。

「美里……急にどうしたの？」

「他の女子たちのを届けるっていう口実があれば、心都も自分のチョコを渡しに行きやすいでしょ」

美里は今しがた3人組から受け取った包みと、七緒の机に山のように積み重ねられているチョコとを交互に指差した。

その言葉に、私は思わず口をぽかんと開けた間抜け面になってしまった。

「……そういうこと？」

「うん。お見舞いもできてチョコも渡せて万々歳ね」

確かに七緒の病状は心配だし、たくさん女の子のバレンタインプレゼントを腐らせずに済ませたいし、自分のチョコだって渡したい。

でも、迷惑じゃないだろうか？

いくら勝手知ったる幼馴染みの家といえども、心身ともに絶不調

であろうこんな日にあがりこんでチョコを渡して良いのだろうか？
頭の中で不安がぐるぐると渦を巻く。

「うう……」

「心都つてばまた悩んでる。どーんに行っちゃいなさいよ！ 体調不良で弱つてるときに優しくされるとコロツといつちやう男の子つて多いんだから」

「……そうっすか」

美里の完璧すぎる笑顔が恐ろしく、せつかくのアドバイスにもぎこちなく応じることしかできなかった。そんな小悪魔テク、やれるもんならとつくにやっている。

結局私はお見舞いに行くかどうかを決められないまま、3人組のチョコを鞆にしまった。

とりあえず机と下駄箱のぶんもあわせて七緒の家まで持って行って、それから考えよう。最悪生チョコだけでも郵便受けに入れてもいいし。そうだ、いざとなったら明美さんに全部渡して帰ろう。きつと七緒はあとで母親から死ぬほどからかわれるだろうけど、そこまで知ったことか。そうしよう。

私はたくさん逃げ道を作り、1人うんうん頷いた。

そんな私を、どうやら美里は「どーんに行く」決意をした様子と勘違いしたらしい。満足げな顔で見守っている。

それにしても美里、なんだか今日はやけに楽しそう。

「あれ……美里、それ何？」

ふと、彼女の紺ブレザーの胸ポケットに何かが入っているのを見つけた。よく見るとそれは、マッチ箱のような小さい長方形の箱だった。

「ねぎ玉キムチ牛丼風味チョコレート。」

さらりと告げられたのは、どう考えても最悪な組み合わせである商品だった。

私は味を想像して、

「……おえ」

思わず、口を押さえる。

「今朝偶然コンビニで見つけて、『LAのセレブに大人気!』って書いてあったからつい気になって買った。でもやっぱり怖い組み合わせだから、これから田辺くんに毒味……じゃなくて試食してもらって、美味しかったら食べてみようかと」

「……もしかしてそれが美里からのバレンタインプレゼント?」

ふふふと微笑んで、美里は答えなかった。

ああ、気の毒な田辺。きつと美里からの思いもよらないチョコと
いうことで、嬉し涙を流しながら受けとるんだろうなあ。更に大口
開けて食べちゃうんだろうなあ。

それにしても、LAって。絶対嘘だ。ねぎ玉キムチ牛丼チョコ、
きつと想像を絶する味なのだろう。

数分後、そこには想像を絶する表情で口元をおさえ、ト
イレへ走る田辺の姿があった。

「くそー、重い……」

放課後、私は1人悪態をつきながら、引きずるように紙袋を運んでいた。

中身はもちろん、女子からの愛がたつぷり詰まった七緒へのチヨコ。机の上と下駄箱の中のを全てあわせたら、予想以上の重さになってしまったのだった（下駄箱を開けたらチヨコがドサドサと雪崩を起こしたのは驚いた。漫画かよ）。

七緒の家はもう目と鼻の先だ。いつもと同じ通学路なのに、なんだかやたら長く感じた。もう一踏ん張り、と私は腕に力を込めた。それにしてもあの3年女子3人組、よく私にチヨコの配達を依頼する気になったな。七緒のことが大好きで、「付き合ってるの?」なんて直接聞いてくるほど負けん気が強そうな人たちなのに、一応女子である私に東家訪問を頼むなんて。そこに危機感とかはなかったのだろうか。

ここまで考えて私は虚しくなった。

チヨコを届ける、と決まったときの3人組の晴れ晴れとした表情を思い出せば、答えは火を見るより明らかだ。

危機感なんて、全くなかったんだろうなあ。私みたいなちんちくりんは恋のライバルにも値しないってことか。

別に敵視されたいなんて思っていないけど、ここまで安心してチヨコの配達を任されるのも少し考えものだ。

「はあ……」

「辛気くさい顔してんな、心都」

突如声をかけられ、驚いて顔を上げると、そこには自転車に乗った明美さんがいた。

「ああ、こんにちは明美さん」

よっ、と軽く片手を挙げた東家のお母さんは、買い物かご付きのいわゆるママチャリがなんだかバイクに見えるような錯覚を私に起

こさせた。これも元ヤンのパワーなのだろうか。

「すごい大荷物だな」

たくさんの女の子から、あなたの息子へのチョコです。言おうとして、なんとなくやめた。

「ちよつとね。……七緒は具合どう？」

「まだ少し熱はあるけど、昨日までよりはだいぶマシだな。あいつ、おとといの夜なんて特にひどくて40度近くあってさー」

「よんじゅう!？」

そんな状態で試合に出ていたのか。私は驚きを隠せず、チョコの詰まった大袋を落としてしまった。

「心都、もしかしてお見舞いに来てくれたの？」

「……う、うん。でもまだ熱あるんだったらやっぱり帰ろうかな」

「あー、大丈夫、大丈夫。だいぶ本調子を取り戻してきたから、行ってやってよ。ありがとな」

と、明美さんは私に鍵を差し出してきた。

「あだし、これから夕飯の買い物行くから。少しのあいだ七のこと頼むよ」

「えっ……いいのかな」

私は、鍵に手を伸ばすことを躊躇した。

幼馴染みの免疫というやつか、別に今更「家に2人きり」状態に緊張したりはしない。しかし、鍵なんか持つちゃって七緒1人の病床に忍び寄るなんて。それこそ美少女を狙う変態みたいな構図にならないだろうか。

私の「いいのかな」はそういう懸念故の言葉だった。

それが伝わっているのかいないのか、明美さんは少し目を細めて笑った。

「なんかあいつ、平気なふりしてるけど、いつちよまえにへこみ気味っぽいからさ。話相手になってやってよ」

そう言って私に鍵を握らせる。

「……なんか今日の明美さん、母親みたい……」

「おいコラ。れっきとした母親だっつーの」

だって、ヒヨウ柄のブーツがこんなに似合う明美さんだもの。たまに七緒のお母さんであるという事実を忘れてしまふのだ。

私は東家の鍵を握りしめた。

「よろしくな、心都」

美少女と変態になるかもしれない。

こんなときに大量のチヨコを抱えて訪ねるなんて、おかしいかもしれない。

でも

「……うん」

やっぱり七緒に会いたい。顔が見たい。

風邪以上に彼の心情が私は1番気掛かりだった。

私が行って元気を出させるなんてそんな大層なことは考えていない。ただ会って、少しでも話したい。そう思った。

9 & 17 : 期待と、「ち、よ、い、れ、い、と」 & 17 :

七緒の家に最後に来たのは、いつだっただろうか。

記憶を遡って少し考え、あ、先月来たばかりじゃん、と思い出した。3学期が始まって間もないある日、その時も学校帰りに偶然明美さんに会って東家でお茶をしたのだ。

小さい頃のようにしょっちゅう訪ねることはなくなったけど、全く足が遠のいたわけではない、よく知った七緒の家。それでもやっぱり鍵を使って1人で入るのは初めてだ。

庭の大きな梅の木を横目に、私は少し緊張しながら鍵穴に差し込んだ鍵を回した。

「お邪魔します……」

なんとなく、音を立てないよう気をつけて家の中へ入る。泥棒みたいな気分だ。

無人のリビングを抜け、2階上がったすぐそこが七緒の部屋だ。ちなみに階段は12段ある。どうして覚えているのかというと、なんのことはない、いわゆる「グリコ」のジャンケンゲームをよくここで七緒としたから。チョコのチョコレート、つまり6文字の「ち、よ、こ、れ、い、と」で2回勝てば、最速でこのゲームを制することができたのだ。もちろんそれはお互いわかっているから、当時は幼いなりに真剣な心理戦が行われていた。

そんな懐かしい思い出に浸りながら12段を上りきり、私は七緒の部屋の前に立った。

「……はい」

鼻声の七緒の返事。

それを確認すると、私はそろりとドアを開け言った。

「……成長痛じゃなくて、残念だったね」

美里、やっぱり『風邪で弱った男子をコロツと』な小悪魔テクは、

私には無理だ。私の開口一番の言葉に、七緒は少しむくれたような表情を作った。

「……泥棒かと思った」

スエット姿の彼は額に冷却シートを貼り、ベッドの上に半身を起こしていた。見るからにザ・病人って感じた。

「ここに来る途中で明美さんに会って、鍵もらったんだ。……熱いくつあるの?」

「7度3分。だいぶ楽になった」

「そっか、良かった。あ、これお見舞いの品ね」

そう言っただけで私はチヨコの詰まった大きな紙袋をベッドの脇に置き、自分もその横に腰を下ろした。

「うわ、でけー。何これ?」

「女の子たちからのバレンタインチョコ。いやー、ここまで運ぶのにもう愛が重くて重くて。肩凝ったわ」

疲れているような恥ずかしさに耐えているような、なんともいえない顔の七緒がチヨコを見遣る。

「……わざわざご丁寧に、どうも」

「いえ」

少しの、沈黙。

他の女の子たちからのプレゼントは無事に届けたものの、肝心の自分からのチヨコを渡すタイミングを、私は見失っていた。

意味もなく視線が室内をぐるりと一周する。

クローゼットと机と棚、そしてベッド。それだけの、なんとも七緒らしいあつさりとした部屋だ。

そういえば、東家には先月来たばかりだけど、こうして七緒の部屋に入るのはいつ以来だろう。記憶が定かではないけど、おそらく小学生のときが最後だった気がする。いくら付き合いが長いといっても、中学生にもなればお互いの部屋を行き来する機会も自然と少なくなるものだ。

「……本当、タイミング悪いよな」

ふいに、七緒が呟いた。

「普段は健康体なのに、よりによってこんなときに熱だすなんてさ」
七緒が言う。「こんなとき」とはバレンタインデーではなく、もちろん土曜にあつた試合のことだろう。それがわかるからこそ、私は正直に頷くしかなかった。

「……うん。ちよつと、タイミング悪かったね」

七緒も首を縦に振る。

「体調管理も選手の責任のうちなんだって、よくわかつてるはずだったんだ。けど……俺は、やっぱり色々足りなかつたんだろうな」

彼はとても静かな口調で言った。

「選んでくれた顧問とか仲間とかにも、すげー申し訳ないと思う」
私は七緒の頑張りを見てきたつもりだった。今回の大会だけではなく、それこそ柔道を始めたばかりの幼い頃から彼は努力家で、その姿を私はよく知っていると思っていた。

本当に思い込みもいいところだ。

七緒の悔しさや苦労は、七緒にしかわからない。

どんなに支えたくても、私は七緒の本当の気持ちを、わかることができない。

私には応援することしかできないのだ。

悔しそうで悲しそうで、でもどこか大人びた七緒の表情を見て、私はそのことに気付いた。

だから、下手な慰めや共感の言葉は言えない。自分が思うことをそのまま伝えるのが精一杯だ。

「七緒は自分の失敗をちゃんとわかつてるから、もう同じ間違いはしない……と思う」

本当に、そう思うよ。

「また次があるよ。次の次だって、そのまた次だってあるよ。……あんな若いんだからさ！」

なんとたつてまだ14歳だ。

私たち、平均寿命の5分の1も生きていない。

しばらく俯いていた七緒は、ふいに顔を上げ、私を見た。

「親戚のおばちゃんかよ」

「……どうせ私はおばちゃんだよ」

七緒は笑っていた。

だから私は、このうら若き乙女に対するおばちゃん扱いもしょうがないから今回はかりは大目に見てやろう、という気持ちになった。それに、柔道に打ち込む七緒は輝いていて、とてもかっこよかった。これはもう私にとってどうしたって覆らない、絶対的な事実だ。断言する。

……恥ずかしいから本人には言わないけれど。

私は傍らの大袋をさぐり、小さな包みを取り出した。

「おばちゃんついでに忠告だけど。これ、こないだの先輩3人からね。生チヨコだから早めに食べてだつて」

「……へーい」

「あと禄朗はあらためてミルフィーユ作り直すつて。今日のは華ちゃんにあげてたよ」

「へえ」

「もてる男はつらいねえ」

「……何言つてんだよ」

七緒はふてくされたように布団をかぶった。

「え、何、寝るの？」

「……」

「無視かよ！」

七緒は私の方とは真逆を向き、更に額の辺りまで布団をかぶっているせいで全く顔が見えない。

まさか、本当に眠ってしまったのだろうか。だとしたら私は退散するしかないだろう。

自分のチヨコは渡せていないけど他のは無事に届けたし、それに私のうぬぼれでなければ少し元気になった七緒を見ることができた

と思う。なので、まあ、じゅうぶんかな。私がやれることは全部やった気がする。

と、ジャッジを下した私が腰を上げようとしたその時、

「……………来てくれてありがとーな」

ぼそりと、七緒が言う。

珍しくあらたまったようなその口調に、私は少し驚いてしまった。

「どうしたの、急に。お見舞いくらい気にしないでよ。家近いんだし、この大量のチョコ届けないと女の子たちがかわいそうだもん」

「……………いや、見舞いもだけど……………試合もだよ」

七緒が再び半身を起こした。

「応援席で、なんか両手組んですげー祈ってる風だっただろ」

「見えてたの？」

「うん。やたら目がぎらぎらした奴がいると思ったたら心都だった」

「マジですか」

「マジですぜ」

ぎらぎら。あんまり良い感じではない擬音だけど、とりあえず気にしないでおくことにする。

「せっかく来てもらったのに負けて悪かったけどさ。…………俺、実は結構ほんとに、日頃から…………感謝してるから」

この静まり返った部屋でなければきつと聞き取れないであろう小さく低い声で、七緒は言った。その視線は明後日の方向だ。

「…………熱計る？」

「…………熱でこんなこと言わねーし」

「うわ、いま舌打ちしたよね」

感謝、って、私に？

私、何もしていないのに。むしろ私のほうが七緒に助けられたり、ハッピーな気分にならせてもらっているのに。

もうわけがわからない。

わからないけど、私、とりあえず今激しくときめいています。

ごほん、と七緒が白々しく咳払いをした。

「……心都が、色々自分のことみたいに喜んでくれて、応援してくれて、本当に励みになってる。だから……」

「……」

「だから……次こそは絶対勝つから見とけ！ ってことだよ！ わかった？」

最後は少しキレ気味じゃないか。

なんだよ。そんなこと言われたら、ますます嬉しくなっちゃうよ。

私は単純なんだから。

「……わかった」

私には応援することしかできないと思っていた。

だけど、それで力になれるなら、命懸けで、全身全霊で、応援する。旗とかうちわとか作るよ。はちまきも巻くよ。太鼓も叩くよ。

七緒。

「次の試合、期待してるね！」

七緒がここまで真面目にこんなことを言うなんて珍しい事態だ。だからもしかしたら、私もシリアスマードで頷くべきだったのかもしれない。

だけど、

「期待してるね！ 七緒！」

「なんで2回言うんだよ」

「期待の現れだよ！ んふふふ」

「……その笑い方どうにかして」

私はもうどうしようもなくニヤニヤがおさえられなくなっていた。

私は、驚愕した。

もう日も暮れてきたし、いよいよ自分のチョコを渡して帰ろうかしら、と意を決して通学鞆を開けたその瞬間。信じがたい光景が目に飛び込んできた。

チョコの入った水色の紙袋は、教科書たちに押されて揉まれて、見るも無惨に潰れていた。

どうしてこんなことに……と考えて、答えは5秒で出た。今日七緒にチョコを渡すことを一旦諦めた私は、「どうせ家に帰って自分で食べるし」とそれを鞆の底に少しぞんざいに押し込んだ。そしてここまで来る途中、七緒に届ける大量のチョコがそりやもう重くて重くて、何度も体勢や持ち方を変えて歩いた。時にその大袋がぶつかり、通学鞆を落としてしまうこともあった。当然、その中に入っているこの水色の小さな紙袋が綺麗な状態を保っていられるわけはなく。こうして、とてもじゃないけど人に渡せるようなものではない姿になってしまったのだ。

どうして気が付かなかったのだろう。少し考えれば防げたことじゃないか。

しかし今までの私は、七緒に自分のチョコを渡すことよりも、他の女の子たちの贈り物をお届けすることが完全なるメインイベントになっていた。つまり、自分の手作りトリュフがどんな状態でどこに収まっているかなんて、全く気にする余裕はなかったのだ。

「何固まってるの？」

と、頭上にクエスチョンマークを浮かべる七緒をちらりと見遣り、

「……………はあああああ……………」

深すぎるため息を吐き、私はがっくりと肩を落とした。

「人の顔見て失礼だな」

七緒が心外だと言いたげな表情で私を睨む。

もう駄目だ。終わった。最悪だ。こんなくしゃくしゃな包みじゃ、渡せない。

「……私、帰るね……」

よろよろと立ち上がりながら、私は七緒に言った。

「え？ ああ……。お前なんかこの数分間で急にやつれてない？」

「……気のせいじゃない？ 七緒こそお大事にね」

「あー……。ありがと」

突然のおいとま宣言に、七緒は少しぽかんとしたけど、やがて遠慮がちに口を開いた。

「あのさー……。心都、帰る前に1つ聞いていい？」

「何？」

「前に言ってた好きな奴に、バレンタインのチョコは渡せた？」

が。派手な音を立てて、私はその場に卒倒した。

「うわ、大丈夫かよ」

「大丈夫じゃないよ！ その話はしないでっ！ こないだ！ あんなに言ったのに！」

「だからその猪木みたいな顔やめろよ」

「元気ですか！」

「似てる……」

と、七緒が息を飲んだ。そんなことでハッとされても嬉しくない。

「いや、この話ほじくり返して悪かったけど……だってやっぱり幼馴染みとしては気になるじゃん。バレンタインなんて良いチャンスなんだしさ」

善良で純粋な、としか言い表せないような一点の曇りもない表情で七緒は言う。

なんて良い幼馴染みなのだろう。もう本当に、良い奴すぎて涙が出る。

「くっ……」

「えっ、なんで男泣きすんだよ！」

私は拳で荒々しく目元を擦ることを止め（男泣きと言われムカついたからだ）、再び七緒のベッドの側に座った。

「……渡してない」

「なんで？」

「作ったけど渡せなくなった。鞆の中でチヨコの袋がぐっしやくしやになつた」

「え」

「そんなの渡せないから……」

言葉にしてすぐに後悔した。

何を言っているんだろう、私は。こんな七緒に話すことじゃないのに。

絶望に打ち震える私を見据えて、七緒は言った。

「なんだよ、諦めんなよな。袋が潰れたんなら新しい袋を買えばいいし、中身まで潰れたんならまた作り直せばいいじゃん」

その表情は真剣そのものだ。

「七緒……」

私は鞆を開けて、水色の袋を取り出した。

「……だって、こんなになつちやつたんだよ」

「あー、全然大丈夫。ちよつと皺寄ってるだけじゃん。こんな許容範囲だよ。それに……形が悪いのなんて関係ねーよ。こつこつのは気持ちが一番大事だろ、気持ちが」

なんだろう、この状況。チヨコが渡せず落ち込んでるところを、その渡したい張本人に叱咤激励されているなんて。

こんな妙なことがあるだろうか。いや、ない。

私は反語の例文みたいな台詞を心の中で呟く。

「まっすぐぶつかれば、潰れたチヨコでも相手に伝わるって。こんなことで諦めるの、心都らしくねーよ」

な、と七緒が笑う。

「……じゃあ、これ、もらってよ」

そう言って七緒の手に、半ば無理矢理チヨコを持たせる。

七緒はきよとんとそれを見た。

「え？ 俺に？」

「うん」

ああ、どうしよう。

いくら鈍感な七緒でも、これはさすがに気付くかな。

私がチョコをあげたい人は、好きな人は、七緒なんだってこと。心臓が破裂しそうなほど脈打つ。

本当はこんなぐだぐだな感じで伝えたくなかったけど、七緒があまりにも諦めるなと励ますから、もう、私

「あ、作り直すことにしたんだ」

あっけらかんと七緒が言う。

「……はい？」

一瞬、事態が飲み込めず、私は固まってしまった。

「そしたらこれは用なしだもんな。んじゃ、くれるんなら俺がありがたく食うよ」

「……」

何言っただこいつ、こっちが必死こいてチョコ渡した数秒後になんだよそのあっさりした反応はよー、と思わず悪態を吐きそうになる。

落ち着いて、整理してみよう。

七緒が私にくれた「潰れたなら作り直して渡せばいいだろ」と「ていうか形が悪くても気持ちがあれば伝わるだろ」の2つの意見。そのうちの前者を私が採用した。つまり、この潰れたチョコはもう必要ないので、残飯処理として自分がいただく。七緒はそう解釈したらしい。

「でも、用なしのお下がりチョコとはいえ心都からバレンタインにもらうのなんて生まれて初めてだよなー？ 明日は雪が降るかもな、ハハハ」

「……ふっ」

もう笑うしかない。

この人の鈍感具合と云ったら、いちいちまともにドキドキしていたら身が持たないレベルだ。そんなことはとっくに学習済みだったはずじゃないか。しつかりしろ私。

「ふ、ふっふっふ、ふふ……」

「なんで笑いながら睨むんだよ」

「ふふ……別に」

顔で笑って、心で泣いて。私は今日またひとつ強くなる。

やっぱり幼馴染みからの脱却は、まだまだ遠いみたいだ。

「いま食っていい？ ずっとお粥生活だったから腹減っててさ」

「……どーぞ」

そう。七緒には何度も何度も拍子抜けさせられている。

だから、こんなふう嬉しそうな顔を向けられたくらいでもうドキドキなんかしないぞ。

ましてや、数ある彼女の中のチョコの中で一番に食べてもらえることとにきめいたりなんかしないぞ。してたまるか。

よくわからない闘志が私の中で燃えたぎる。

そんなことはつゆ知らず、七緒がトリュフをひとつ食べて、こりこりと笑った。

「うん、うまい。さっすが料理部だな」

どっきゅん。胸の辺りから、忌まわしい（そして非常に慣れ親しんだ）音がする。

私は膝をつき、拳で床を叩いた。

「ちくしょー！」

私は、負けた。

東家から帰る道すがら、私はひとり今日の反省会を行っていた。もうすっかり日は暮れて、濃紺の空にはうつすらと星が瞬いている。その下で難しい顔をしてぶつぶつと呟きながら歩く私は、きつとさぞかし不審者めいて見えただろう。

「とりあえず目的は果たせたのかな……」

たくさんの女子からのチョコを届けて、七緒とこの間の試合の話をして、自分のチョコも渡すことができた。

しかも七緒の素直な感謝の言葉まで聞けてしまったのだ。これはもう最高に嬉しい出来事だ。今思い出しても頬がゆるむ。

しかし七緒の誤解は続いている。私が誰か他の人に恋をしている、という大いなる誤解だ。

今日は励ましまで受けてしまつて、そのおかげで七緒にチョコを渡す決心がついたとはいえ、なんともまあ複雑な感じだ。

「……これからだよね、これから……」

自分に言い聞かせるように呟く。

この誤解は、これからゆっくり解いていこう。

まだまだチャンスはある。

若いんだもの、私たち。

私はなんだかんださっぱりした気持ちで歩いていた。

思い出すのは、柔道のことを話す、今日の七緒の顔。悔しそうな顔も、嬉しそうな顔も、決意に満ちた顔も、全部私は大好きだ。

そしてやっぱり、そんなにも何かに打ち込んでいるのって、ちょっと羨ましいな、とも思う。

「……ん？」

ふと目に入ったのは、道の端にひっそりと立ててある、いわゆる「町内会のお知らせ」的な掲示板だ。その右下に貼られている1枚の紙には、細々とした文字が地味な書体で記してある。

「こ、これはっ……！」

私は食い入るようにその紙を見つめた。

私にも見つかるだろうか。

夢中になれる、何かが。

1 & 1 t : 冬の奇跡と、来襲 & g t ;

この地域にしては近年稀にみるほどの大量の雪が降ったのは、バレンタインの翌日だった。

私は傘を右手に、既に積もって固まりかけている雪で転ばないよう慎重に学校への道のりを行く。

歩きながら思い出していたのは、前日の七緒の言葉だ。

『心都からバレンタインにもらうのなんて生まれて初めてだよな？ 明日は雪が降るかもな、ハハハ』

「……………」

いやいや関係ないない。どんな奇跡だよ。

これ自然の摂理、と自分に言い聞かせるように何度も呟く。

まあ、確かに昨日までの天気予報では、雪なんてちらりとも言うていなかったけど。

××年ぶりの大雪！ とかってかなりニュースになっちゃっていいけど。

まさかね。だって、私が七緒にチョコをあげたくらいで雪が降ったら、告白なんかしちゃった日には、隕石が降って人類が滅亡しかねない。

そんなことを考えて背筋がゾツとした瞬間、

「よっ」

と、後ろからよく聞き慣れた声。

「うわー！」

驚いた私は、例によって例のごとく、全くもって可愛くない悲鳴を上げ、派手に尻餅をついた。

しかし私以上に驚いたのは、声をかけた張本人、つまり七緒だ。

「ええ！？ そんな驚かなくても！ ……大丈夫？」

スツと差し出されたその手を、私はなるべくナチュラルに取って起き上がる。

「……どーも」

触れる手と手に、本当は少しドキドキしている。けど、毎度のことながらそんなときめき状態が全く通用しなさそうな七緒には、それを悟られるわけにはいかない（だって悔しいから）。

無事に助け起こされた私は、無意味な咳払いをしながらスカートについた雪を払った。

「七緒……もう風邪治ったの？」

「おー。お陰様で、全快、全快。……それにしてもすげー雪だなぁ有り難いことに昨日の自分の降雪発言を忘れていいのか、七緒はチヨコの話蒸し返そうとはしなかった。自分の足元の雪を珍しそうに見ている。」

そんな横顔を眺めながら、私は七緒に真っ先に話したかったことを思い出した。

「そういえばね、七緒。私もこのままじゃいかんと思って、青春の浪費をストップさせることにした」

「は？」

怪訝そうな七緒に向かい、私はニヤリと笑みをこぼす。

そう。正直、最近は柔道に打ち込む七緒の眩しさに当てられっぱなしだった私。このままない尽くしの自分でいいのか？と少し悩んだりもした。

でも、昨日、見つけたのだ。

もしかすると小さなきっかけになるかもしれないこと。

「玉ねぎみじん切り大会？」

私の説明を聞き終えた七緒は、ますます胡散臭そうに言った。

七緒と並んで通学路を歩くと、雪を踏みしめるさくさくとした音が2人分、冬の朝の静けさの中に響く。私は少し楽しい気分になった。

「そう！ 昨日の帰りに町内の掲示板で見つけたんだ。近所の料理教室主催で、商店街の一角に小ステージ作ってやるらしいよ。制限時間3分でひたすら玉ねぎを刻んで、粒の美しさと量を競うんだって」

「なんとまあシュールな……」

七緒が愕然とした表情で言う。

「大会っていうか、催し物みたいな感じか？」

「うん。老若男女問わず、誰でも参加オツケー。しかも！ 優勝商品は万能圧力鍋！」

「へえ」

幸いみじん切りなら少し得意だ。現実逃避への入り口になれるから という荒んだ理由はともかく、普段からやっていて良かった。

別に料理人になろうとかそんなたいそうな夢を持っているわけではない。でも、自分が唯一「これなら戦えるかも」と思えることで私も少して良いから、七緒の半分でも良いから、輝いてみたい。

「じゃ、応援に行くよ」

さらりと七緒が言った。

「……本当に？」

「うん。商店街の催し物なら多分参加者以外も見れるんだろ？ 心には色々応援してもらったし」

それに、と七緒は半笑いで付け加える。

「そのみじん切りを競い合っつていう怪しげな光景にも興味あるし」

「ちよつとちよつと、私は真面目に参加するんだからね。これは町内のお料理好き住民によるバトルなんだよ、バトル！」

口ではそう言いながら、私はもう天にも昇るような気持ちだった。夢中になれるかもしれないことを見つけただけでも嬉しいのに、まさか七緒が応援に来てくれるなんて。そんなの、全力で頑張るしかないじゃない。

「で、大会はいつ？」

「至極まっとうな七緒の問いに、

「あ」

私は固まった。

「……何？」

「いや、日にち忘れた。」

「なんだよそれ。やる気満々のくせに肝心な情報が抜けてんじゃん」
呆れたように七緒が言う。正論すぎて返す言葉もない。

昨日は掲示板の貼り紙を見つけた瞬間に舞い上がってしまい、日時をメモするのを忘れてしまったのだ。

「ごめんごめん。まあ商店街のイベントだし多分日曜日とかだと思っけど。確認したら七緒にもすぐに知らせ……」

と、私が言ったそのとき。

「あ、ず、ま、く　ん！」

数十メートル先の学校の校門前から、誰かがこちらにすごいスピードで突進してくるのが見えた。雪なのに。

思わず立ちすくむ私たちの前に信じがたい速さで現れたのは、数ヶ月前に色々な意味でお世話になった人物だった。

「黒岩先輩……！」

「やだ、東くんてばあたしの名前覚えててくれたのー？　超嬉しい！」

そりゃあ、いきなりラブレターで裏庭に呼び出されキスを迫られた相手のことなんか、忘れようと思ってても忘れられないだろう。

ふんわりウエービーヘアが美しい、ボンキュッボンな3年生、黒岩先輩は、綺麗に微笑むと七緒の目を見つめた。

「久しぶり。朝からごめんね」。東くんはどうしても会いたくて校

門で待ち伏せしちゃった。会えて良かったあ」

そこまで言う就先輩はチラリとこちらに目をやり、

「ま、余計なおまけ付きだけど」

私からガツチリと視線を逸らさず、棘のある言葉を付け加えた。怖い。裏庭で本音でぶつかり合ったいわゆる「タイムン」の後、少しは仲良くなれたかと思っただのに。

「……えーと、今日はどうしたんですか？」

七緒が少しの警戒心を見せながら尋ねた。黒岩先輩の強烈さは、彼が1番身を持って体験している（何しろキス未遂のみならず、重めのビンタまでくらっている）ので、当然だろう。

「ふふ。はい、これっ」

そう言っただけで黒岩先輩は七緒に豪華なラッピングの箱を差し出した。

「1日遅れだけどバレンタインのチョコ。東くん昨日いなかったじゃない？ でも直接渡したかったから今日持って来ちゃった」

「あ、どうも……ありがとうございます」

七緒がぎこちなくそれに手を伸ばした。

こつという場面は生まれてから何度も踏んできているだろうに、相変わらず慣れないらしい。

「……それからもう1つ」

と、黒岩先輩がにっこり笑って、チョコの箱ごと七緒の手をギュッと掴んだ。

「へー!？」

面食らう七緒。

畜生引き離したる！ と勇んで2、3歩踏み出した私は、

「ぎゃっ」

雪に足をとられ、再び転んだ。

「東くん。来週、あたしとデートして」

語尾にハートマークでも付きそうな調子で、黒岩先輩は言った。

2&1t:デートと、タイプ>

「……でえと？」

まさに目が点、といった表情で七緒が言う。

対する黒岩先輩は、うきうきと頷いた。

「ほらー、ホワイトデーの頃にはあたしもう卒業しちゃってるじゃない？ だから、その代わりと言っちゃ何だけど1日限定でもデートに付き合ってほしいなーなんて思ってた。しかも実は、来週の土曜日ってあたしの誕生日なんだよねー。だからその日に2人で楽しくデートしない？ ねっ？ ねっ！」

これだけの長台詞を一気に言っただけで、黒岩先輩は輝く瞳で七緒を見つめた。

「あー……そっか、来月にはもう卒業式なんですよーね」

なんだか七緒がちよっとしんみりしている。同じく私も時の速さを実感し、物思いに耽りたいような気分になって……間髪、はたと我に返った。

「ちよっと待った。先輩、受験生ですよ。のん気にデートなんかしていいんですか？」

私の問いに、黒岩先輩はふんと鼻を鳴らした。

「とっくに推薦で合格決めてるっつーの。こう見えてあたし成績はいいんだから」

「へー！ おめでとうございます」

「おめでとーございます」

私たちは祝福と尊敬を込めた拍手を贈った。

黒岩先輩は満足そうにかかかと笑い、再び七緒に迫る。

「だから、東くん、デート！ デートしよう！ あたしと！」

七緒は至近距離の先輩の目を臆することなく見返し、

「あ、はい了解です」

「！」

あつさり、かよ！

七緒の返事のあまりの軽さに、私はもちろん、黒岩先輩までもが拍子抜けしてその場につんのめった。

七緒は1%の照れも戸惑いもない、なんとも晴れ晴れとした表情をしていた。……こいつ、デートするということ意味をわかっているのだろうか。

「運良く来週の土曜は部活がテスト前で休みなんです。俺でよければ、卒業前にパーツと楽しい思い出作りましょう」

まるで『良い後輩』のサンプルとして提出できそうな笑顔と言葉と、爽やかさ。やはり、七緒はデートの意味を全くといつていいほど深く考えていない。

恐らく、自分の役割はさしずめ『思い出作り要員』だとも思い込んでいるのだろう。なんだろう、この信じられない鈍感具合。もはやビョーキか？

「……うーん」

黒岩先輩もその違和感に若干気付いているようではあるけど、それでも僅かな葛藤の後、デートの約束を取り付けた嬉しさのほうを上回ったらしい。

「……ま、いつか！ 超嬉しい！ じゃあ東くん、来週の土曜日、朝10時に駅前で待ち合わせね」

ほん、と七緒の肩に手を置くと、黒岩先輩は私に視線を向けた。

ほんの数秒間、無言であったはずなのに、その勝ち誇った目は明らかに私にこう言っていた。

悪いわね、小娘。

「くっ……」

私は拳を握りしめた。

七緒（鈍感、無防備、美少女顔）と黒岩先輩（強引、過激、ボンキユツボーン）がデートだなんて、不安だ、怖い、嫌だ けれど、私は七緒のただの幼馴染みであって、この肩書きには2人のデートを邪魔する効力はない。

不幸中の幸いというべきか、当の七緒は今回の「デート」が持つ甘くふわふわした意味をよく理解していないらしい。

ああ、何も起きないといいのだけど。

しかし私の願いも虚しく、悪い出来事は更に重なるのだった。

「え！ 七緒くんのデートと、心都の変な大会が同じ日？」

受話器の向こうで美里が叫んだ。

変な大会って、真剣勝負の玉ねぎみじん切り大会に対して、ちょ

つと聞き捨てならない。

しかし私が文句を言う前に、更に美里の悔しそうな声が耳に飛び込んできた。

「ああもう、何よそれ。怪しげな大会とはいえせつかく七緒くんが心都の応援に来てくれるっていう、2人の距離が縮まりそうなラブチャンスだったのにー。しかもそれじゃあデートの尾行もできないじゃない」

「美里美里、怪しげな大会じゃないから。しかもラブチャンスってなんか田辺みたいなのワイドチョイスになっちゃってるから。あと日付重なってなくても尾行するつもりなんてないから」

ひと通り訂正を終え、私はあらためてがつくりと肩を落とした。

そう。本日帰り道、再び掲示板の貼り紙を確認したところ、玉ねぎみじん切り大会の実施日は来週の土曜日、まさに七緒黒岩ご二人のデートの日と丸被りであることが判明したのだ。

私は自分のあまりの運の悪さに30分ほどその場で呆然と立ち尽くした後、なんとかふらふら家まで辿り着いた。そして今、こうして自室で美里に電話をかけている。彼女にささやかなお願いをするためだ。

「で、どうするのよ。七緒くんに言うの？ 『同じ日なんだけど！』

私と先輩どっちを取るのよ！』って」

「いやいや、まさか」

そんな強気な態度はとてもじゃないけど無理だ。大体、これはきちんと大会の日程を控えていなかった私の落ち度なのだ。

私は背中からベッドにダイブした。ポフツという鈍い音と共に、埃っぽい空気が舞う。

「もともとその日に先に約束取り付けたのは先輩だし……きっと七緒もすつきりした気分でごせないと思うんだよね。だから言わないことにしたよ」

「いいの？」

「うん、いいのいいの。七緒には、エントリーするのやめたーとか

適当に言っとくよ。だから美里、お願いなんだけど……奴が側にいるときに大会の話はしないようにしてほしいんです……氣イ使わせで悪いけど」

幸い、大会のことはまだ美里と七緒にしか話していない。美里にだけ口止めをお願いしておけば、私の大会参加が彼にバレることはないだろう。

それは構わないんだけど、と美里は珍しく遠慮がちな口調で続ける。

「ねえ、本当にいいの？ 正直に話して、デートの日をずらしてもらえば？ そりゃ黒岩先輩には睨まれるだろうけど、何もその日じゃなくてもいいじゃない」

「……黒岩先輩、誕生日なんだって。しかももうすぐ卒業だし。中学最後の特別な日だから、やっぱり好きな人と一緒にいたいんだよね」

片思い歴が長い私だからこそ、そういう恋する気持ちは痛いくらいわかってしまう。

それに、「デートしよう」とあんなにも堂々と言える黒岩先輩が私は少し羨ましく、また悔しいけれど密かに尊敬もしていた。

そうやってまっすぐに自分の気持ちをつづけている時点で、「その日」を巡る戦いは、もう先輩の勝ちなのだ。

「それにその分、美里が応援してくれるでしょ？」

私が言うと、受話器の向こうで美里が小さく笑うのが聞こえた。

「そうね。あんなにぐじぐじ悩んでた心都が初めて見つけた、夢中になれるかもしれないことだもんね。しょうがないから私が七緒くんの分まで声援を送ってあげるわよ」

「ありがとう」

電話を切った後も、私はしばらくベッドでごろごろしていた。

窓の外に目をやると、朝からの雪が未だに降り続け、町を白く染めている。

あらためてすごい降雪量だ。間違いなく、しばらくはこの地域の

観測史上に残るだろう。

「……まさか本当に私のせいだったりして」

思わず1人呟いた冗談を、今度はなぜか笑い飛ばせなかった。

3&1t:ミルフィーユと、異名>

バレンタインから2日遅れて本命チョコならぬ本命ミルフィーユを渡しに来た祿朗の笑顔は、これ以上ないくらい輝いていた。

「七緒先輩！ 俺の魂込めたミルフィーユ、受け取って欲しいッス！」

祿朗はかねての予告通り、昼休みに教室に現れた。

きちんと七緒の風邪が回復したのを確認し、一からケーキを作り直し、いそいそ学校まで持ってくる。まさに恋する乙女の鑑ともいえる行動だ。私も見習いたいくらい。

しかし彼の計算ミスは、その気持ちの熱さ故に、とても1人では食べきれないようなホールケーキを贈ってしまったことだ。

「お、おお……ありがとう……」

一辺が30センチほどある大きな正方形のミルフィーユをずっしりと抱えた七緒は、ひきつった顔で言った。

しかし完全に瞳の中に薔薇が咲き乱れている状態の祿朗は、そんな七緒の様子には全く気付かない。

「いやー、そんなに感激されると照れるッスねえ。さ、先輩、遠慮しないで一気にガブツといっちゃってください！」

「……」

粉砂糖をまぶしたパイ生地と、見るからに濃厚で甘そうな生クリームが交互に重なったミルフィーユ。中に適度に混ぜられた苺やブルーベリーがこれまた良いアクセントになっている。見るからに美味しそうだ。

しかしほんの数分前に昼食のお弁当を食べたばかりで、こんな量を「一気にガブツと」いけるわけがない。

祿朗がにこにこ見守る中、それでも義理堅く三分の一ほど食べ進めたところで、七緒はこちらを見た。

「心都、甘いもの好きだよな。一緒に食べ、」

「そんな爽やかな笑顔で言っても無駄だよ。責任持ってひとりで食べてよ」

日直のため日誌の記入に励んでいた私は、ペンを走らせる手を止めずに言う。

笑顔から絶望的な表情へと変わった七緒の隣で、彼以上に感情の起伏を見せたのは禄朗だった。

「てめえ！　せっかく七緒先輩が、俺特製ミルフィーユのあまりの美味さに感動してお前ごときにも恵んでやるっつー偉大な優しさを発揮してるのに！　その調子こいた態度はなんだゴルア！！」

禄朗はあまりにもポジティブシンキングすぎる。

私は呆れ、七緒はうなだれた。

「っつーかよ、ボサボサ女、ちようどてめえに話があんだよ。ちよつと表に出な」

突如、禄朗が自分の親指で廊下を指し示した。こんな典型的な「表に出やがれ」ポーズ、実際にやる人を初めて見た。

「は？　私と？」

禄朗が私と話をしたがるなんて、普段の彼から考えるとちよつと信じ難い事態だ。

もちろん、彼のその睨みつけるような表情とこれまでの経験を踏まえれば、何か良い話であるはずがないことは容易に察しがつくけれど。

この珍しい事態に、七緒は少し心配そうな顔で何か言おうとした（何しろ私と禄朗の喧嘩の仲裁役はいつも彼なのだ）。それを「あ、平気ッス！　他愛もない世間話ッス！　七緒先輩はゆっくりミルフィーユを味わってください！」と笑顔でかわし、禄朗は私を廊下に連れ出した。

「話って何？」

「舌打ちすんじゃないやねーよボサボサ女。……おい、七緒先輩が女とデートするってマジかよ」

禄朗は珍しく声を潜め、真剣な面持ちで言った。

なんとという情報の速さだろう。私は、ひよつとしたらこいつ想像以上のストーカー行為を行っているのでは？ と考えて少しぞつとした。

「黙ってねーで答えるコラ」

「……デートの話は本当だけど。なんであんだ知ってるの？」

「七緒先輩フアンの間は昨日からこの話題で持ちきりだぞ。目撃者がたくさんいたからな。しかも相手は校内でも有名な『セクスイー黒岩』だしな！」

私は愕然とした。黒岩先輩にそんな恐ろしいあだ名が付いていたなんて……。

確かに先輩はスタイル抜群の色っぱい美人だけど。セクスイーって。スイーって。

しかし、それはさて置き、その人物が校門のすぐ傍で七緒に対してもおかしくはないだろう。禄朗はフアンの子供たちのネットワーケに入り込んでいるのか？ という疑問もこの際見ないふりだ。

「しかもボサボサ女、てめえその時その場にいたらしいじゃねえか！」

「えー……そんな詳細まで噂になってるんだ」

恐るべし、七緒ファンたち。

否定しない私に、禄朗が火を吹いた。

「傍にいなから防がねえなんて、本っ当に役立たずだなてめえはよ！ セクスイー毒牙から七緒先輩を守れよボサボサ頭！」

「無茶言うなツンツン頭！ まっとうにデートに誘われて普通にOKした七緒をどうやって守れってのよ」

「その場で大暴れするとか、駄々こねるとかよー！」

「あんだがやれば？」

「俺は七緒先輩に嫌われたら人生終わるから、出来ねえよ！」

それで、私にやれってか。

禄朗に対してふつふつと沸き上がる物騒な感情をなんとか抑え、

私は笑顔を作った。

「でも、嫌われたくないからやらない、っていう概念があんたにもあるんだね。てつきり毎回自分の感情だけで暴走してるもんかと」「喧嘩売ってんのか、てめえ。……だってよ、七緒先輩がデートの誘いを受けたってことは、少なくともその相手に好意がなくはないってことだろ。それを暴れて邪魔したりしたら、最悪の場合、七緒先輩に嫌われるじゃねーか」

意外にも核心を突いているような禄朗の言葉に、私は頭をガツンと殴られた気分になった。

「こ、好意って、そんな……。私、七緒は、ただただ鈍感だから特に何も意識しないでデートの約束をしたもんだと思ってたんだけど……」

「いくらなんでもそこまで鈍感かよ。七緒先輩はちゃんと物事の違いがつくお人だけ」

「そ、そうかなあ……。七緒、黒岩先輩のことちょっと好きなのかな……」

「……嫌いな相手とはデートしねーだろ、多分……」

「……そうだよな……」

自分たちの発言に自分で落ち込み始めた私と禄朗は、つい先程の怒鳴り合いとは一転、まるでお通夜のような雰囲気醸し出した。

「七緒がデートか……」

「嫌な響きだな……」

「デートって何するんだろ……」

「そりゃデートすんだろ……」

「そっか……。どうしよう、七緒と先輩がデートをきっかけに付き合い始めたら……」

「……」

「……」

そうなれば、幼馴染みの心都ちゃんと後輩男子禄朗くんは、全く出番がなくなるだろう。

「……縁起でもねーこと言ってるじゃねーぞボサボサ野郎！」

野郎って、もはや女ですらない。

「くそつ、なんでてめえとどんよりしなきゃいけねーんだよ！ 考えたくもねー！」

そう言つと禄朗はお通夜のムードを吹き飛ばし、足音荒く七緒の元へ戻つていった。

私も慌てて後を追う。

どうやら禄朗は、自分にとって喜ばしくないその想像をシャットダウンすることにしたらしい。

でも私は違う。禄朗みたいにはできない。

考えたくないのに考えすぎて、不安がどんどん膨らんでしまう。

私は重すぎる溜め息をついた。

教室では相変わらず七緒がミルフィーユと戦っていた。

その後、目で助太刀を訴える七緒と「七緒先輩の優しさをムゲにするのか！」と見当違いに怒る禄朗に負け、私もしぶしぶミルフィーユをいただくことになった。それは、短気で乱暴な禄朗が作ったとは思えないくらい確かに美味しかった。でも、出来るならお腹が空いているときに食べたかったなーというのが切なる思いだ。パーティー用ですか？ と訊ねたくなるようなポリウムは、食べても食べてもいっこうに減らない。しかも、さくさくのパイ生地は徐々に口の中の水分を奪い、なおかつ顎を疲れさせる。

結局、昼休みをぎりぎりまで使い、私と七緒はミルフィーユを完食した。

それを見届けた禄朗は満足そうに去つていった。本当に、面倒な奴。

残されたのはぐったりと机に伏す私と七緒と、未だかつて体験したことのないような胃のもつたり感だ。

「私まで巻き込まないでよ……うっ」

「あれ俺ひとりでは無理だろ……心都ならペロツと食べそうだなと思つたから……うっ」

「食えねーよ。フードファイターかよ」

思わず言葉遣いが乱れる。口元を覆い、こみ上げるものに耐えながらの会話なので、変にドスが利いてますます女子らしからぬ声色になった。

七緒に、黒岩先輩とのデートについて聞こうとしたけれど、なんだか踏み込めない。この人は本当に鈍感すぎてデートの意味もわからず誘いに乗っただけなのか？ それとも禄朗が言うように、セクスイー黒岩に対してちよつとクラツとなっっちゃっているのだろうか？ 「ファイターっつていえばさー……」

ひよい、と七緒が唐突に上半身を起こした。

「昨日言ってた玉ねぎ大会の日程って、もうわかった？」

大会名の変な略し方を訂正する気も回らず、私はぐつと唾を飲む。ついに恐れていた質問が来た。

なるべく不自然に見えないように注意しながら、笑顔で答える。

「それなんだけどー、実はエントリーするのやめたんだよね。ほら、テストも近いし、なんか面倒になっっちゃってさー」

昨夜何度も練習した台詞だ。

「なんだ、やめたんだ」

七緒が拍子抜けしたように言う。

「せっかく応援行こうと思ったのに」

「はは。ごめん、ごめん。次なんかあったら来てよ」

「うん」

そうあっさり信じてもらえると、かなり良心が痛む。

「ぐつ」

私は左胸を押さえた。

「え、何、どうしたの」

「いや、ちよつと、胸焼け……うつぶ」

こんな可愛くない誤魔化し方しかできない自分に心底嫌気がさし、私は、心で号泣した。

4 & 1 t ; 隠蔽と、傷だらけのローティーン & g t ;

目を瞑り、精神を統一させる。

深く、深く、深呼吸。

心に思い浮かべるのは、清らかな水をたたえた美しい湖だ。

きらきらと反射する日の光、滑らかな水面、触れるとわかる澄んだ冷たさ。

ここは自宅のキッチンであるはずなのに、まるで清々しい森林にいるような錯覚を覚えた。

気分が落ち着く。

しばしの沈黙の後、カツと目を見開き、私は右手の包丁を激しく動かし始めた。

包丁がまな板に当たる、小気味良いリズムカルな音が辺りに響く。左手は添えるだけ。力を入れすぎず、抜きすぎず、重要なのはどれだけ無駄な動作を省いてより多くの完璧な「粒」を生み出せるかということだ。

刻むのはもちろん、ころころ可愛い玉ねぎちゃんである。

きっかり3分間の格闘の後、私は手を止めた。

まな板の上には細かく切り刻まれた玉ねぎがこんもりと積み上がっている。

私はそれに顔を近付け、まじまじと凝視する。自ら判定を下すためだ。

一見綺麗なみじん切りだが、よく観察するとまだキメが粗く、大きさが微妙に不揃いになっている。

嗚呼！

私は膝をついた。

「く……っ、駄目だ……こんなじゃ、王者になんか成れやしねえッッ！」

ダン、と拳を床に打ち付ける。

「あらあら心都、何してるの？」

キッチンに入ってきたお母さんが、ドアの前で目を丸くして訊ねる。

「……特訓という名の、スポ根ごっこ」

「まあ、変質者みたいな格好しちゃってー。一体何の特訓？」

そう。玉ねぎを刻むときに涙が出るのを避けるため、私は今、競泳用のごついゴーグル、更に花粉症用の大きなマスクを装着していた。ビジュアル的には最悪だが、これは確かに目が全く痛くならない。本番もこれで臨もう、と私は決心した（が、もういい歳だというのに今日も今日とてピンクのレースと薔薇モチーフの刺繍がふんだんにあしらわれたカーディガンに、白いフリルのロングスカートを着ている人から、格好のことについてとやかく言われたくない、本当に）。

いよいよ大会は明日に迫っていた。私は夕飯の準備をしつつ、みじん切り練習のラストスパート中だ。

「絶対に負けられない戦いがそこにはあるんだよ、お母さん」

「あらそう。お取り込み中のところ悪いけど、七ちゃんが来てるわよー」

ひよい、とお母さんの背後から七緒が顔を出した。

「よ、心都」

私は声にならない声で絶叫した。そして咄嗟に、目の前のまな板にうずたかく積まれた玉ねぎのみじん切りを、コンロにかかっている鍋にぶち込んだ。

鍋の中身（つまり今夜のメインディッシュ）がおでんであることを知っているお母さんは「まあ」と素っ頓狂な声をあげた。

証拠隠滅。お母さんには申し訳ないけど、「エントリーしない」と言った手前、こんな大量のみじん切りを七緒に目撃されるわけにはいかないのだ。

続けて、急いで自らの顔面のゴーグルとマスクもむしり取る。

七緒はその一連の行動を冷え冷えとした目で見ていた。

「……何してんの？」

「……えっと……」

さすがにこの変質者ルツクの言い訳は私も思いつかない。

「……な、七緒こそ人んちで何してるの？ まさか家出？ 明美さ

んと喧嘩してコテンパンに負けた？」

「ちげーよ」

七緒が憮然として言う。

「ちょうど家の前でバツタリ会ったのよねえ。七ちゃん、忘れ物を届けに来てくれたんだって。感謝しなさいよー？ 心都」

と、お母さんが私から七緒をかばうように言った。

「そーだそーだー」

援護射撃を得た七緒が強気な態度でこちらにヤジを飛ばす。

「くっ……」

思えば、こいつは幼い頃もそうだった。私と喧嘩をした時にうちのお母さんが自分の味方につくと、それまでの倍くらい態度が大きくなるのだ。そんな時、明美さんは必ず私の味方になってくれて、一緒に七緒を完膚なきまでに口撃したものだ。

しかし今、明美さんはこの場にいない。2対1。状況から見てもなんだか私が悪いのは明らかだし、これはおとなしく負けを認めるしかないだろう。

「……どーもすいませんでした。私、何か忘れ物したっけ？」

七緒が差し出したのは、私が学校の昼食時間に愛用しているお弁当箱だった。

「机の横に引っかけっぱなしだった。気付いて追っかけようとしたんだけど、俺も今日部活あったし、帰りに届けばいいかと思って」「あ！ 忘れてた……」

金曜日に教室に忘れられたお弁当ほど悲惨なものはない。冬場とはいえ、間に土日挟むことにより、週明けに再会を果たす頃には恐ろしい姿になっている可能性があるのだ（汚い話、失礼）。

「ありがとう、七緒。助かったよ」

「ま、いいってことよ。心都にはこないだ珍しくちヨコモもらったことだし……」

「あらあら、バレンタインの話？」

耳ざといお母さんが、瞳を輝かせ会話に割り込んできた。私と七緒を交互に見やり、楽しそう。これは危険、すごく危険だ。

「七ちゃん、やっぱり心都からちヨコモもらったのね」

「そうなんですよー。まあそもそも俺宛じゃないやつだったんだけど」

「ええー？ 本当にそうかしら？ だって心都かなり前から華ちゃんと家で会議……」

ガガガガガ、と派手な音が部屋中に響き、お母さんの発言を遮った。私がキッチンにあるミキサーを起動させたせいだ。

これ以上、この母親に余計なことを喋らせるわけにはいかない。

「あら心都、何してるのよー。中身が空の状態での使用は故障の元よ？」

「……お母さん、ちょっと、静かにして」

お母さんがペロリと舌を出す。この人は3ヶ月後に40歳だ。私は頭が痛くなり、我が母をキッと睨んだ。

「心都ったら怖いわねえ、女の子なのに。ねえ、七ちゃん？」

「！ ああ、もう！ ……七緒、今日はありがとうね！ 外まで送るよ！ ほら、行こ行こ！ ほらほらほらほら！」

「お、おー」

私は七緒の背中をぐいぐいと押して、半ば強引に退室を促した。

一刻も早くこの場から七緒を連れ出したい。これ以上ここにいたら、お母さんが何を言い出すかわからない。

そんな気持ちを知ってか知らずか（いや、恐らく知っている気はするけど）、お母さんはにこにこしながら私たちを見送っていた。

庭に出ると、我が家の愛犬クロが七緒の足元へじゃれついてきた。

「お、クロ。クリスマスぶりだなー。……なんかちよつと太った？」

「うん。もともと食欲旺盛だったけど、最近肥えちゃって……」

「なんだよお前、メタボなお年頃かー？」

七緒がひよいとクロを抱き上げる。クロは鼻を鳴らし、七緒の胸元に顔を埋めた。

もともと彼に懐いてはいたけれど今日は特に嬉しそうだ。きつと、ここ最近よく冷える日が続いて人肌恋しいのだろう。

「ほんと、このままじゃメタボまっしぐらだからさー、最近は散歩の距離を増やしたりはしてるんだけどね」

抱かれたままのクロの鼻の頭を、私がちよいと触ったその時、七緒が何かに気付いたように小さく呟いた。

「あれ、心都、その指……」

「ゆび？」

言われて自分の手を見た私は、ハツとした。

すっかり忘れていた事実　連日のみじん切り練習により傷を負いまくった私の指には、今、たくさんの絆創膏が貼られているのだ。

しまった。せつかく玉ねぎのほうは隠蔽しても、指がこれじゃあうっかりもいとこだ。

冬だというのに私の背中を汗が伝った。

「怪我？」

「いや！　あの……これは……。そう、ちよつとドアに挟んじやつ

て

「え？ そんなに何本もの指を一気に？」

「そ、そうだよ」

いざという時、しっくりくる言い訳が全く思いつかない私。

とにかく話題を変えたくて、咄嗟に、今一番心に引かかっていることが口をついて出た。

「そ、それより！ ほら、七緒は明日黒岩先輩とデートなんですよ？ どうよ、今の気分は」

急に質問をぶつけられた七緒は、少し驚いた顔で私を見た。

「どうよって……別に。デートっていうかただ単に遊びに行くだけだろ」

「それをデートって言うんじゃないの？」

「そうかあ？」

「そうだよ。っていうかね、七緒さんよ……我々中学生の世界では2人きりの男女が学校外で楽しく過ごしてたら、それだけでちよつとしたデートになっちゃうわけよ。おわかり？」

「じゃ、これもデート？」

クロを腕に抱えたまま、表情ひとつ変えずに七緒が言う。

私は思わず間抜けな声をあげた。

「……へっ？」

「だから、心都理論でいくと、今この状況も『デート』になるわけ？」

一瞬、思考が停止した。

これがデート？

私と七緒の、デート？

痺れた頭で考えても、答えはすぐに出た。

「それは……違うでしょ」

「だろー？ ほら、心都理論、駄目じゃん」

七緒が得意気に言った。

恋愛に関しては異常なまでに鈍感なこの幼馴染みに一本取られた

気がして、なんだか悔しい。

「……ふん、七緒のは屁理屈だよ。だって黒岩先輩は明らかにあんなラブラブな感じを出してきてるじゃん」

「ラブラブって……」

「その人の誘いを受けるってことは、『嬉しいですうーボクもラブラブしたいですうー』って言ってるようなものだよ」

「おい何か台詞にすごい悪意が」

「っていうか七緒、黒岩先輩のこと好きなの？好きとまではいなくても、ちよつと気になっちゃってたり、はたまたあのセクスイービームに若干クラクラきちゃってたり、明日のデートの首尾によつちやあ付き合つのもありかなーみたいに思っちゃってたり、鈍感なフリして心は実はチャラ男だったり、挨拶はチョリーススだったりそうじゃなかったり、」

「何言ってるんだよ？」

啞然とした七緒の声で、私は我に返った。

動揺と興奮のあまり、矢継ぎ早にとんでもない質問をしてしまっていた。

既に背中の冷や汗の量は尋常ではない域に達している。

「……なんか……すみません……」

これじゃあまるであれみたいだ　以前美里に提案された、「私と先輩どっちを取るの？」なんてヒステリックに聞いちゃうような嫌なタイプの女子。

激しい自己嫌悪に襲われる。

そんな私を見やり、わけがわからなさそうな表情の七緒は、ゆっくりとク口を地面に降ろした。

5 & 1 t ; 彼女の嫉妬と、彼の確固 & g t ;

気まずすぎる沈黙の中。

七緒の腕から降ろされたクロだけが、楽しそうに私たちの足元を行ったり来たりしていた。

「……なんでそんなパニックってるわけ？ 心都」

心底不思議そうに七緒が言う。

「ご機嫌に鼻を鳴らしすり寄ってくるクロを抱き上げ、私はウムムと黙り込んだ。」

答えられるわけじゃない。

いま私を支配しているこの感情は、嫉妬、恠気、ジェラシー……つまり、子供じみたやきもち以外の何者でもないのだから。

「別にパニックってなんかないよ。ただ七緒はどういうつもりで先輩のデートを受けたのかなって……幼馴染みとしてちょっと気になっただけ」

こういう時、本当に自分が嫌になってしまう。

好きな人と他の女の子のデートを笑顔で受け流せる余裕もなければ、「行かないでっ」と泣いて縋れる素直さと勇気もない。

で、結局は幼馴染みの肩書きで誤魔化してしまうのだ。

「……じゃあ一応答えるけど」

七緒が少し考え込むように首をひねった。

「黒岩先輩のことは、別に好きとかクワクラきてるとかそういうのは一切ないけど、まあなんだかんだ悪い人ではないと思って。明日遊びに行くのも、卒業前にパーツと楽しく思い出作りたかっただけ、そこに変な他意はないよ」

「……本当に？」

「うん」

良かった ホッと安堵の溜息をつきかけた私は、慌ててそれを飲み込む。

確かに、先日禄朗と危惧していた「七緒が先輩にまさかのフオーリンラブ？」説をハッキリと否定してもらえたことは良かったと思う（黒岩先輩にはちよつと悪いけど）。

しかし、これで私の中のもやもやが全て解決したわけではない。

「……でも、黒岩先輩は明らかに七緒のこと好きだよ。去年告白されてるんだし」

「え？ それはもうお断りしてるじゃん」

七緒は驚くほどけろりとした様子で答えた。

「過去のことなんだからさ。黒岩先輩だってもうとっくにそんな気ないよ。俺のことは普通に先輩後輩として遊びに誘ったんだろ」

「……あのー、それ本気で言ってる？」

「え、もちろん」

私はがつくりと膝をついた。

ああ、今、全てが明らかになった。

この男、黒岩先輩から自分に対する気持ちは、もうとっくに終わったものだと思っているのだ。だからこんなにもうのと、デートを「ただ一緒に遊ぶだけ」だなんて宣えるのだろう。

確かに一度交際をお断りしているという過去はあるけども、だからといってそれである黒岩先輩が引くわけないだろうに。……というか、人の恋心ってそんな簡単なものじゃないでしょう？

「いや、だって七緒、黒岩先輩からバレンタインチョコもらったじゃない」

「そんなん心都だつてくれただろ」

ぐ、と言葉に詰まる。

ここで私を引き合いに出されると非常に困る。私も黒岩先輩も、七緒が好きだからチョコを渡したに決まっている。しかしそんなことは、もちろん言えない。

「ただ先輩後輩と一緒に遊ぶだけだつていうのに……なんか大袈裟なんだよな、心都は」

あははは、と呑気に七緒は笑う。

私は彼に恋をしてから既に何百回目になるかわからない台詞を、
心で叫んだ。

この鈍感野郎、本当にどうにかしてくれ！

「……ああ、そうですね。わかりましたよ。どうせ私は大袈裟で馬鹿で不審者でモテないおせっかいおばさんですよ」

「いや何もそこまで……」

私は七緒に人差し指を突きつけた。

「でもあんた！ 鈍感すぎるのも度が過ぎると、たくさんの人を傷つけるだけだからね！」

「え」

目を丸くした七緒が、私を見つめる。

「鈍感がチャームポイントだとか思うなよ！ おニブちゃんが許されるのなんて本当に若いうちだけなんだからな！ そんなんだから隙だらけで告白とかナンパとかされちゃうんだよ！ ばーか！」

「ば……」

最後の余計な一言に、七緒の眉がぴくりと動いた。

「なんだよ、さっきから何カリカリしてんだよ！ わけわかんねー！」

「！」

「わかんなくて結構！ ほら、早く帰らないと夜道は危険だよ！

この辺可愛い女の子狙った変質者が多いんだから！」

「！」

この私の言葉は、狙い通り完璧に七緒の怒りに触れたようだった。ゴゴゴ、と燃えたぎる炎が彼の背後に見えた気がした。

「誰が女だよ、誰が。言われなくたってもう帰るよ！ なんだよ、いきなり喧嘩ふっかけてきて、お前キレやすい十代の代表だな！」

「けっ、悪かったね。帰れ帰れ、ばーか！」

「ばかって言ったほうがばかだぞ、ばーか！」

鼻息荒く帰って行く七緒の後ろ姿にガンを飛ばす。

「……………」

また小学生みたいな喧嘩をしてみました。

しかも最後は、せつかく忘れ物を届けてくれた七緒を「帰れ！」と追いやってしまった。

本当に嫌な奴だ、私。

でも言わずにはいらなかった。

慣れっこだったはずの彼の鈍感具合が、今日はあまりにも炸裂しすぎていて。

「……………反省してるけど、後悔はしてない！」

腕の中のクロにそう宣言すると、愛犬は驚いたように私を見つめた。

どうしても今日は、一発ドカンと言わなきゃいけない気がしたのだ。

だって彼はあんなにたくさんのおいを寄せられているくせに、あんなに鈍感で、それでいて優しかったりして　きつといつかその辺の女子に刺されるんじゃないだろうか。

人間の恋心の強さを、まだ七緒は知らないのだろう。

「……………ああ、もやもやする……………」

私はクロの頭を撫で地面に降ろすと、家に入った。

そして包丁を握りしめると、再び怒濤の勢いで玉ねぎを刻み始めた。

6 & 1 t ; 臨戦と、学生の味方 & g t ;

雲ひとつない冬空が、水で溶いた青い絵の具のように、なめらかに広がっている。

見上げると、そのまま吸い込まれてしまいそうな錯覚を起こす。

神聖なる真剣勝負の日にふさわしい、良い天気だ。

凜と冷たい空気が気持ちいい。

私は深呼吸をした。

町の商店街の奥の奥の奥の一角で、それは始まるうとしていく。

「なんか、思ってたよりかなり……かわいらしい感じね」

美里が辺りを見回しながら言う。これはかなりオブラートに包んだ表現だ。

「……そうだね」

私もステージを見上げ、遠慮がちに頷く。

この「玉ねぎみじん切り大会」は、想像以上にこぢんまりとした催し物だったのだ。

大会名が毛筆で書かれた、チープな垂れ幕。

主催である料理教室の前の僅かなスペースに作られた、高さ30センチほどのステージ。

参加者は私を含め5人（内3人はその料理教室のメンバーらしい）

観客席なんかはもちろんなく、ステージの周りでは恐らく主催者や参加者の身内であろう人々が数名、見物のためつつ立っているだけ。

競技開始10分前だというのに、なんとも盛り上がりがない空気だ。「私、こんなの持ってきてきちゃって恥ずかしい」

美里がオペラグラス片手に呟く。確かにそれはちょっと恥ずかしい

い。どれだけの大イベントを想像していたのだろうか。

「でも、たとえ想像よりちよつと小規模でも、真剣勝負は真剣勝負。美里の応援を無駄にしないように、頑張るね」

と、ガッツポーズを作った私を、美里は妙に慈愛に満ちた目で見つめた。

「すっかりスポーツマンみたいになっちゃって……」

「へへ」

「ねえ心都。今日は私のことを七緒くんだと思っていいわよ……」
ぼんぼん、と私の肩を叩きながら彼女は言った。

「ありがとう美里。でもその扱い方はよけい傷口広がるんですけど」
「あらそう？」

昨日の七緒との喧嘩は、今も私の気分をどん底に沈ませていた。

一晩経って冷静になってみれば、かなり言いたい放題言ってしまったよなあとと思う。七緒の鈍感さと恋愛における無神経さにぶつちんしてしまったとはいえ、我ながら言い過ぎた感是否めない。

こんな底意地悪い幼馴染みとのバトルを経て、七緒は今頃セクスィーで一途な黒岩先輩とデートだ。さぞかし楽しいことだろう。

「……」

「心都？」

どんより黙り込んだ私を、美里が心配そうに覗き込んだ。

駄目だ。

暗くなっている場合じゃない。今日は大切な勝負の日なのだ。

気合い、根性、精神力、勝利への飽くなき探求心。

今必要なのはそれだけだ。

「よし、頑張るね！美里！」

私はゆっくり深呼吸をすると、競泳用ゴーグルを装着した。

*
*
*
*

女性の買い物というのは、どうしてこんなに長いのだろうか。

東七緒は、長年の疑問を心の中で小さく呟いた。

思えば自分の母親も、昔からショッピングといえは長時間もかけてあーでもないこーでもないとやっていた。最近はまだ一緒に買い物に出ることも滅多にないけれど、幼い頃はよく七緒だけが店の前で待ちぼうけをくらったものだ。

そして今、目の前にいる黒岩みかも例に洩れず、長い長いショッピングを展開中だ。

「ねえ東くん、これとこれだったらどっちがいいと思う？」

両手にスカートを持った黒岩が、満面の笑みで訊ねる。

正直言って七緒にはその2つの違いがわからない。どちらも同じようなデニム生地で、同じような型だ。

「う……俺そういうセンスないんでよくわかんないんですけど」

「もう、そんな深く考えないで、どっちでもいいから決めて！」

「じゃあ……こっち？」

てきとうに指さしたほうのスカートを、黒岩はご機嫌な様子でレジに持って行った。

うーん。よくわからん。

七緒は首をひねりつつ、その後ろ姿を見送る。

どちらでもいい、とはすなわちどちらも大して欲しくないことと同じ気がする。ならば自分の意見を聞いてまで無理して買わないほうが良いのでは、と思う。

きらきらでカラフルなディスプレイの前で1人にされた七緒は、ぎこちなく辺りを見回した。

レディースファッション（しかも若干ギャル系）を取り扱うこの店は当然、どこもかしこも若い女性ばかりだ。

とてつもなく、居心地が悪い。

いや、ここだけではない。午前中に観たベタベタでコテコテの恋愛映画も、昼食時に入ったおしゃれ感満載なカフェも、ここ以前に入った様々な洋服屋も、ことごとく七緒を所在なげにさせたのだった。あまりにも普段縁のないスポットだからだ。

「おつまたせー！」

会計を済ませ、紙袋を提げた黒岩が戻ってきた。

「ごめんねー、色んなお店連れ回して疲れたでしょ？ どっか入ってお茶でもしよっか」

これは有り難い提案だった。

別に疲れてはいなかったが、自分にとって居心地の悪い場所から抜け出せる好機だ。

「そうしましょう！ ちょうど近くに俺のよく知ってる店があるんで！ 良かったらそこに！」

「きゃあ、東くん行きつけのお店？ 行きたい行きたい！」
そこは自信を持って案内できる店だ。胸を張り、七緒は歩みを進めた。

「よし、行きましょう！ すぐそこです」

5分後、七緒と黒岩はファーストフード店にいた。

「……行きつけのお店ってここお？」

「はいっ。この辺のファーストフード店の中では群を抜いてSサイズの飲み物がでかいんですよ。学生の味方ですよー」

雑然と適度にうるさい店内、豊富なメニュー、しかもここらの店で一番安い。まさに「男子中学生にとっては」天国のような場所なのだ。

「あれ。どうかしました？」

向かいの椅子に座る黒岩の表情が引きつって見える。

「……なんでもない」

「そうですか。先輩何飲みますか？」

「……レモンティー」

了解です、と七緒は勝手知ったるカウンターへ向かう。

2つのドリンクを抱えて席に戻ると、なんとなく腑に落ちなさそうな顔の黒岩が待っていた。

「……黒岩先輩？」

声をかけると、黒岩ははたと我に返ったように七緒を見つめた。

「え？ ああ、ありがと」

2人向かいあって飲み物を飲む。

やはりこういう店のほうが落ち着く。七緒はオレンジジュースをすすりつつ、1人うんうんと頷いた。

「今日は結構歩いたね。映画も買っ物も、あたしの行きたいところばっか付き合わせちゃって、なんかごめんねー」

「いえ」

「まだ3時過ぎだし、東くんはこの後どこか行きたいところか
ないの？」

黒岩が小首を傾げて言う。

「この後ですか。うーん……」

非常に困った。

自分の日頃の行動範囲なんて学校と家と、せいぜい部活帰りに仲
間と行くこういったジャンクな店くらいなものだ。あらたまつて「
行きたい場所」だなんて聞かれても、七緒には全く思いつかない。

「……ちよつと、考えときますね」

本音を言えば、居心地の悪い場所じゃなければどこでも良かった。
しかしここは、やはり自分も何か提案するべきなのだろう。

「わかった。じゃ、東くんが考えつくまでここでお喋りタイムね」

「はい。……あ、そうだ」

ふと、七緒はあることを思い出し、自分の鞆の中を探る。

そうだ。午前中はすっかりタイミングを逃してしまっていた
が、そもそも今日は。

「先輩、誕生日なんですよね。誕生日と、あとバレンタインにもら
ったチョコのお返しと、あと高校合格、おめでとーございます」

そう言つて七緒は、青い紙袋を黒岩に差し出した。

1つの贈り物に3つの意味を込めてしまうのは我ながらセコすぎ
るかなー、と若干の懸念を抱えながら。

7&17:瓶詰めキャンディと、疾走>

黒岩は七緒からのプレゼントを両手で抱きしめ、言った。というか、ほとんど絶叫した。

「きゃー、ありがとう！ 東くんにプレゼントもらえるなんて、感
つつ激！」

そんな嬉ばれるなんて予想外だった。

何を贈るべきなのか見当がつかず、結局ホワイトデーの定番ともいえる小さなキャンディの詰め合わせをチョイスするという無難ぶり。加えて、そのパツとしないプレゼントに「誕生日祝い」「ホワイトデー」「合格祝い」という3つの意味を込めるセコさ。

いくらしかない中学生とはいえ、それらのことに七緒は若干の負い目を感じていた。

しかし目の前の黒岩は早速袋を開封し、嬉しそうに中身を眺めている。七緒は心底安心した。

「わぁー、可愛いキャンディ！ 今一つ食べていい？」

「あ、はい。どうぞ」

黒岩は瓶に入った色とりどりのキャンディから、黄色い包み紙のものを選んだ。そして中身を取り出し、口に含み、

「おいしー。東くん、ありがとね！」

満面の笑みで言う。

その一連の動作を見て、七緒はふと思いついたことを訊ねた。

「先輩、レモンが好きなんですか？」

「どうして？」

「昼飯食べたカフェでもここでもレモンティーだったし、今もわざわざ瓶の底のほうからレモン味のを選んでたから」

黒岩は肩の下で柔らかくウェーブした髪を撫で、頷いた。

「よくわかったねー。そうなの、あたし昔っからレモン味のが好きなんだよね。可愛く苺とかさくらんぼとか言いたいんだけど、

レモン系の商品があるとどうしてもそっちいつちやうからさー」

「へえ。でも、俺もレモンは好きです。一時期毎日のようにレモンの砂糖漬け作ってたら、洗脳みたいな感じで好きになったっていうか……」

「砂糖漬け？」

「はい。うちの柔道部はマネージャーいないんで、くじ引きで当たりを引いた俺が冬休み中の差し入れ係になっちゃって。それで練習毎にレモンの砂糖漬けを持ってく羽目になったんです」

「東くんが、差し入れに、レモンの砂糖漬け……」

黒岩はしばらく宙に視線をやり、顎に手を当て、何やらじっと考えていた。そして、

「かーわーいーいー!!」

突如、叫んだ。

どうやら先ほどまでの沈黙は、七緒のマネージャーもどきの姿を想像していたらしい。

「やばい！ 超可愛い！ 超似合う！」

「……やばくもないし可愛くもないし、似合いもしません」

とても暗い声で、しかしきっぱりと七緒は言う。

心外だった。自分は男であり、バリバリの柔道部員であり、レモンの砂糖漬けが似合うはずがない。

黒岩はそんな七緒の様子を見て、ますますウッフと微笑んだ。

「でも、東くん意外と料理とかできるんだねー。砂糖漬けっていつでも、ある程度はコツがいるでしょ」

「あー……それは、心都に教わったんで」

唐突に出てきたその名前に、黒岩の眉がわずかにぴくりと動いたような気がした。

「ああ、あの子……料理部なんだっけ」

「はい」

「ふうーん……」

と、どことなく不機嫌そうな表情の黒岩。

あれ？ この2人、仲悪かったんだっけ？

七緒は不思議に思い、首を傾げた。

確かに裏庭への呼び出しだの口喧嘩だの色々なゴタゴタはあったが、1対1のいわゆる「タイマン」を経て、結局は和解に至ったはずだ。

しかし、七緒が心都の名前を出した途端、黒岩はまるで因縁の仇敵に向けるかのような形相を浮かべ、レモンティーを一気に飲み干した。

「……」

なんだかよくわからないが、心都も敵が多い奴だなあ。禄朗ともなぜかしょっちゅう喧嘩しているし。みんな穏やかじゃなくて、まったく困ったものだ。

七緒は、しみじみと溜め息を吐きかけ　いや、と思い直す。

喧嘩といえば、今は自分も偉そうなことは言えない。昨日は久しぶりに心都と小学生のような言い争いをしてしまったのだから。

一晩立った今も、七緒は全く理解できなかった。なぜあの幼馴染みはあんなにピリピリしていたのだろうか。なぜ自分はあるにブリ切れたのだろうか。

そもそも昨日は、心都の忘れ物を届けに杉崎家に寄ったのがきっかけだった。それは完全なる親切心だ。感謝されるならともかく、なにゆえ、あのようにやれ馬鹿だの鈍感だの罵られ、変質者に遭う心配をされ、しまいには「帰れ」と庭を追い出されなくてはならなかったのだろうか。

全くもって腑に落ちない。

「東くん、どうしたの？」

はたと我に返ると、向かいの黒岩がこちらを覗き込んでいた。

「眉間にしわ寄ってるよ」

「あ……… すいません」

慌てて表情を元に戻す。

駄目だ。

今日はこの卒業を控えた先輩とパーツと楽しく遊ぶための日なのだ。過ぎたことを引きずってもやもやすべきではない。

「なんか考え事？」

黒岩が、七緒の目をじつと見つめながら言う。

その表情は、純粹に疑問を持って訊ねているというよりも、明確な目的があつて発言しているような、どこか挑戦的なものだった。

七緒は思わず、少し怯んだ。

「……いや、大したことじゃないんです。実は昨日心都と喧嘩して結構派手に言い合ったんで、ちょっと思い出してムカムカしてただけです」

「喧嘩したの？ どうして？」

「さあ……よくわかんないんですけど。なんか心都の奴、昨日は虫の居所が悪かつたみたいで」

ふーん、と表情を変えずに黒岩が相槌を打つ。

なんとなく場の空気が変わったことを察した七緒は、やはりこの人の前で心都の名前を出すのは良くないみたいだ、と再び感じた。

話題を変えた方がいいよな。そう思った七緒は何か違うトークテーマを模索したが、その発見を待たずして、意外にも積極的に会話を掘り下げてきたのは黒岩のほうだった。

「あの子はさー、今日あたしと東くんが一緒に遊んでること知ってるんだよね？」

七緒はこくりと頷く。

それを見た黒岩は、今度こそ本当に挑むような表情で七緒に訊ねた。

「ねえ、東くんって、あの子のことどう思ってるの？」

「え？」

唐突な展開に、七緒は固まった。

「眉間のしわもそうだし、さっきからずっと、なんかもやもやした顔してるよ。そんなに昨日の喧嘩を引きずってるの？ あの子のこ
と気になるの？」

畳み掛けるように黒岩が質問を浴びせる。

七緒は完全に押され、椅子に座りながらも数歩後ずさった。

「あの子ってどんな存在なの？」

「どんな存在って……」

黒岩の目は鋭く輝き、例えるならまるで獲物を捕らえる狩人のようだ。何か答えなければこのまま取って食われそうな勢いだった。

「そりゃあ……」

と、七緒が口ごもる。

その時、隣のテーブルに、小学生とおぼしき少年2人組が賑やかに着席した。

それぞれジュースの紙コップを片手に、男児特有のけたたましい声で会話を繰り返す。

「今日うちのかーちゃん変な大会に行ってたー。なんかひたすら玉ねぎを刻みまくるんだって」

「なんだよそれ、変なの」

「通ってる料理教室の先生に、人が集まらないから出てくって頼まれたんだってさ」

「だっせーじゃん」

「きつと今頃商店街の端っこで玉ねぎ刻んでるよ」

「ぎゃはははは」

その聞き覚えがありすぎるシニールな競技内容に、七緒は動きを止めた。

頭の中でいくつかの場面が、浮かんでは消え、また浮かんで、繋がる。

心都がエントリーすると燃えていた、玉ねぎみじん切り大会。

その直後、誘いに来た黒岩。

あっさり取り消された参加表明。

昨日、杉崎家で見えた奇妙な心都のゴーグル。絆創膏だらけの左手。

やたらピリピリしていた幼馴染み。

「あー！」

全ての事柄が繋がった七緒は思わず立ち上がり、手を打って叫んだ。

「なんだよ、あの嘘つき！」

「ど、どうしたの東くん」

突然ハイになった七緒に、黒岩が戸惑いの視線を向ける。

きつ、と七緒はその視線をまつすぐに受け止め、見つめ返す。

「先輩、ちよつと行きたいところがあるんですけど！ いいですか？」

「え？ うん、ようやく思いついた東くんの行きたいところなら、もちろん……」

黒岩が全て言い終わる前に、七緒は右手に彼女の手を掴み、左手に全ての荷物を抱え、走り出した。

「ええ？ ちよつと……」

「すみません、走ります！」

ファーストフード店を飛び出し、繁華街を抜け、ショッピングモールを通り過ぎ、手を繋いだまま2人は全力疾走する。

その光景はなかなか異様であるらしく、道行く人々はすれ違ったび驚いた顔で凝視した。

「東くん、どこに行くのか知らないけど、とりあえずさっきの質問まだ答えてもらってないんだけど」

手を繋ぎ走りながら、黒岩が言う。

「さっきのって……」

「あの子は東くんにとって、何？」

黒岩の少し前に行く七緒は、速度を緩め、振り返った。

8 & 1 t ; 真剣勝負と、偽装工作 & g t ;

高らかに鳴り響くホイッスル。

それを合図に、横一列に並んだ参加者が一斉に玉ねぎを刻み始める。

私も一心不乱に包丁を動かした。

高さ30センチ程度のステージ上は静かな熱に包まれる。

BGMも実況もない、辺りを支配するのは、包丁がまな板に当たる軽快な音だけだ。

参加者の鼻肩目で見てもこれはもう紛れもなく珍妙、異様、シュールである（美里を含む、ちらほらいる観客の皆さんの表情も若干引き気味だ）。

しかし、ああ何やってんだろ私、とか思い始めてはそこで全て終わりだ。

3分間の真剣勝負。集中力が途切れた者が負ける。私は全神経を右手に集めた。

トン、トン、トトン。リズムカルな音で、練習通り玉ねぎを刻み続ける。

今のところはなかなかの好調だ。競泳用ゴーグルと花粉症用マスクのおかげで、涙が出る気配はない。見栄えを全く考慮しないこの私の作戦は大成功だった。

周りの参加者はお料理玄人っぽい主婦の方々だらけだけど、この調子ならひよっとして、まあまあ良いところまでいけるかもしれない。

気合い一発、私は下っ腹に力を込めた。

いける。いける。

頑張れ私。

輝け私。

自分を鼓舞する言葉をぶつぶつと呟き、右手を動かす。

しかし。

まな板の上に刻まれた玉ねぎが溜まれば溜まるほど、心の中に寂しさが広がる。

おかしいな。みじん切りは自分でも驚くほど順調なのに、どうしてだろう。……なんて白々しく気付かない振りをしていても、無駄だった。

私は、今ここに七緒がいないことが、どうしようもなく寂しい。何かに夢中になりたくて、頑張りたくて、この大会に応募した。七緒の輝く姿を見たのがきっかけだ。

だから、応援に行くよ、と笑って言うてくれてとても嬉しかった。だけど私は嘘をついた。

子供じみた嫉妬で、喧嘩も売った。

嫉妬深くて口が悪くて可愛くない私に、今回ばかりは幼馴染みも愛想が尽きたかもしれない。

全部、自分のせいだ。

それなのに寂しいだなんて。

今日の私を七緒にも見ていてほしかっただなんて。

とんでもないわがままだ。

もう、我ながら呆れるよ。

心で小さくため息を吐き出すと同時に、微妙な寸分で手元が狂った。

左手すれすれの所を包丁が掠める。

「あ……」

かろうじて指は切れなかったものの、動揺が抑えられず、私は思わず手を止めた。

どうしよう。

なんか、駄目かも。

頭が真っ白になる。

その時だった。

頑張れ心都。

と、聞き慣れた声が耳に届く。

顔を上げると、まばらな客席の後方に、まるで全力疾走した直後のように息を切らせた七緒がいた。

悲しみが募りすぎて、とうとう頭がおかしくなってしまったのだから、私。幻聴のみならず幻覚まで見えるなんて。

だってあなた、黒岩先輩とデート中では？

私はぽかんと客席の彼を見つめた。

「ああ、よそ見すんなよ！ 手え動かせ、手ー！」

慌てた様子で七緒が言う。

後ろには、この風変わりな大会にドン引きしている黒岩先輩。

なんだ、この状況？

全く理解はできないが、とにかく今は彼の言う通り、手を止めている場合ではない。

私は包丁を握り直し、みじん切りを再開した。

動悸が速い。けどそれは、指を切りそうになった時の動揺によるものとは明らかに違う。

先程までとは比べものにならないくらい、私は心に温かさを感じていた。

不思議だ。

あんなに悲しい気持ちだったのに。

右手が軽い。

玉ねぎの粒も輝いて見える。

七緒が来てくれただけで、全く違った世界にいるみたい。

本当に単純だよな。

笑っちゃうよね、七緒。

*
*
*
*

「3位おめでとう」

七緒がにこやかに言った。

私は、ステージ裏手にある料理教室の建物の影にしゃがみ込んだ
まま、それに答えた。

「……5人中の3位だけだね」

「その抱え込んでんの、何？」

「賞品。鍋掴みだって」

「へー」

と、そこまで笑顔で会話を続けていた七緒が突如、

「……っていうかさ」

一変、ぎろりと私を睨みつけた。

「言えよ！」

私は思わず首をすくめた。

「面倒になったとかエントリー取り消したとか、大嘘じゃねーか！

今日日本番だって言ってくれりや普通に見に行ったのに」

「……だって」

「どうせ、黒岩先輩の誘いと重なったからーとか言うんだろ」

「うっ」

なんだか今日はやけに鋭い。

昨日はあんなに鈍感全開、ポケ連発だったのに。たまに妙な読みの深さを見せるから、そのたび私はドキリとしてしまう。

「だからって嘘つくなよ。俺、本当に応援したいと思ってたのに」

「……すみません」

「本番前日だから、昨日変にピリピリしてたんだ？」

いや。それは、違うんだけど。まさか今さら嫉妬だとは言えずに、私は肯定も否定もしなかった。

七緒は寒そうに上着のポケットに手を突っ込み、ため息を吐いた。

「まあ、良かったよ。間に合って、このシユールな大会での心都の勇姿も見れたし」

「……ステージから見えたけど、七緒、走ってきてくれたの？」

「おー」

「なんで？」

「だって応援行くなって約束したじゃん」

「なんで今日大会って気付いたの？」

「偶然とか、ご町内の狭さとか、あとまあ俺の冴え渡る推理力とか？ 色んなことが重なって」

ふふん、と得意げに七緒が言う。

「七緒」

「ん？」

「ありがとう」

「……とりあえず جوجل 早く外せば？」

それは無理だ。

だって今 جوجل をとったら、玉ねぎとは無関係な涙で目が潤み
きつているのがバレてしまうもの。

「ちよつと。さつきから存在無視してんじゃないわよ」

ぬつ、と七緒の背後から顔を出したのは、もちろん黒岩先輩だ。

腕を組み、目はぎらぎらと異様に血走り、口は立派なへの字。一歩前へ出た先輩は明らかに不機嫌な表情で、ヤンキーばりに私を睨んでいる。

私はそのあまりの恐ろしさにビビってしまい、感動の涙も引つ込んだ。ゴッグルをはずし、ごくりと喉を鳴らす。

女同士の不穏な空気に、うわぁ、と明らかにげんなりした顔の七緒。

更にその後方、少し離れた場所には、口元に手をやりやたら楽しそうな表情の美里がいる。彼女の輝く瞳は、「これって修羅場の始まりなの？」と私に語りかけていた。そんなにわくわくされても困る。

確かに、結果的に私は七緒と先輩の誕生日デートを邪魔してしまったことになるのだろう。2人がどんな経緯でこの大会へ足を運んだのか知らないが、やはりここは一言謝るべきなのかもしれない。

「す、」

「あんだ、ちよつと顔貸しな」

謝罪の1文字目をばっさり遮り、黒岩先輩は私の肩に手を回す。そしてものすごい速さで私を少し離れた路地裏へと連れ込んだ。

暴力沙汰のにおいを感じ取りさすがに慌てて止めようとした七緒を、美里が羽交い締めにするのが、ちらりと見えた。「七緒くん、ここはあの2人に任せて！」と相変わらず楽しそうだ。

先輩は路地裏の奥の壁に私を追いやり、ぎろりと目を光らせた。そして逃亡を阻止するため、私の顔を囲うよう壁に両手をついた。怖い怖い怖い。まさかのタイマン再び、だ。

「あんださあ、一体どういうつもり？」

地獄の底から響いてくるような声で先輩は言った。

「ど、どういうつもりと言われましても……」

冬だというのに、体中から汗が吹き出るのを感じる。

「東くんとあたしの誕生日デートを、こんなあなたの意味不明な大会に邪魔されるなんて、マジム力つく！　なんであたしが走らされなきゃならないわけ？」

「そ、そのことは本当、申し訳ないと思ってます……すいません」

「ちよつとなに謝ってんの。よけいム力つくんだけど！　バカにしてんの？」

「いや、そんな滅相もない……」

もう私はしどろもどろ。

黒岩先輩はしばらく無言で私を睨み続けていたかと思うと、そのまま視線は逸らさず、若干トーンダウンした口調で言った。

「あたしが1番ム力ついてるのは、東くんに対してなの」

「え？」

壁から離れた両手をわなわなとさせながら、先輩は続ける。

「デートだっというのにロマンチックなプランも言葉もムードも何もない、行きつけだっという店についてってみればただのファーストフード、いやまあ確かにキャンディのプレゼントは嬉しかったけど、それを打ち消すくらいことごとくデート感0だし、あげくの果てによろやく行きたい場所があるって言い出したかと思ったら全力疾走で変な大会に連れてこられて……！　ほんと信じらんない！　こんなに美女がいるっつのに、ちつともクラクラしてくれないし！　こんなくそみたいなデート生まれてこのかた経験したことねえっつーのよチクショウ！」

これだけ一気に言うと、黒岩先輩はげえげえと肩で息をした。

「先輩、言葉遣いがすごいことに……」

「うるさい！　ああム力つくー！」

頭を掻きむしり、雄叫びをあげ、先輩は怒りを爆発させる。わかっちゃいたけどセクスイー黒岩、その見た目だけでなく、やはり内

面までもがかなりデンジヤラスなのである。

確かに、あの七緒にロマンチックなデートを求めるなんて到底無理な話だろう。そもそも彼は、今日のお出掛けが男女のデートだということすらきちんと認識していなかったわけだし。

私自身、そんな七緒の鈍感加減にはこれまで数え切れないくらい撃沈してきた。だから黒岩先輩の怒りも痛いほど理解できてしまう。

「いや、でも先輩、なんでそれ私を呼び出して言うんですか？」

「八つ当たりに決まってるでしょ」

まあ、ちよつと予想はできましたけど。

黒岩先輩は一通り怒りをぶちまけると、乱れたヘアスタイルを整えた。ウェーブがかかった髪が肩の下でふわりと舞って、とても綺麗。

「東くんのこと好きなんだけど、好きだからよけいムカつく」

舌打ち混じりの黒岩先輩の言葉に、私はまたしても共感を覚えた。「……わかります。あいつの恋愛における鈍感さとか空気の読めなさはもちろんのビョーキなんじゃないかって最近真面目に思うんですよね」

「言うね、あんたも」

ふん、と鼻を鳴らす黒岩先輩。

「そういう人を好きになっちゃったんだからもうしょうがないなあとは思ってます。でもどーしても納得できないときってあるんですよ。それで喧嘩になっちゃうんですけど」

「そうそう、しかもあのベリースウィートな笑顔で屈託なく言われると、よけい刺さるっていうかさー」

「ああ、わかりますー」

うんうんと頷き合いながら、私たちは思いがけずに意気投合する。やはり同じ人間に恋をする者同士、共感できることがとても多い。

黒岩先輩の表情は先程より少しすっきりしているように見えたが、それも束の間、またしてもぎろりと私を睨みつける。

「そう、あたしはムカついてんの！ だからあんた、いい気に

ならないでよね」

「は？」

再び矛先が向けられた意味が分からず、私は固まった。

「あんたどうせ『デート中なのに七緒が私のほうを選んで駆けつけてくれるなんて感激っ（泣）』とか調子に乗ってんでしょ？ 言っとくけど東くんは律儀に約束を守っただけなんだからね。そこにあんたへのラブはないんだからね！」

私はただただ先輩のペースに飲まれるばかりで、反感だとか落胆だとか、そんな感情を認識する余裕もなかった。そのくらい、今日の先輩のテンションはとんでもなく高かったのだ。

「しかもあたしは別に、あんたのこと1パーセントも羨ましがったりしてないから。むしろ東くんに怒り爆発だから。ナメんじゃないよ」

「……はあ」

よくわからないが、とりあえず黒岩先輩は今日の七緒に怒り心頭であるものの、彼に対するぞっこんラブは変わらないらしい。それは同時に、私への敵対心が変わらないことも意味する。つまりこの闘いはまだまだ終わらないのだ。

「それにあたし、手エつないじゃったしね」

と、不敵な笑みの黒岩先輩。その言葉に私の心はようやく激しく揺さぶられた。

「手！？ う、うう、嘘ですよね、本当ですか、なんでですか！？」

「嘘なわけないでしょ。10分間くらいかなー、東くんからあたしの手を取って、そりやもうギュッと」

「そ……そんな……」

私は愕然と膝をついた。

七緒がお手々つないでデートだなんて、信じられない。一体どんな天変地異の前触れ？

「ふふん、悪いわね。あたし一歩リードって感じ？」

私を見下ろす黒岩先輩の声が、頭上から降ってくる。徐々にシヨ

ツクを上回る悔しさが湧き上がり、私は先輩を見上げた。

「わ、私だって！ 七緒と手つないで歩いたことくらい、あります
っ」

「どうせ幼稚園の頃とか言うんでしょ」

「ぐっ」

完全に見抜かれている。私は再び肩を落とした。

「ふん。そんな目の周りにゴーグルの跡をがつり残してるあんた
なんかに負けないから」

私を見下ろしながら、黒岩先輩が高らかに言い放つ。ああ、やはりこの人との口喧嘩には、いつになっても勝てない。完敗だ。

「卒業するからって安心しないでよね。学校が違うくらいで恋を諦めるあたしじゃないわよ」

「……」

「何ガンとばしてんの」

「……先輩。これ、どうぞ」

「何よ」

立ち上がった私が差し出した物体を、黒岩先輩は怪訝な表情で見つめた。

「3位の賞品でもらった鍋掴みです。誕生日と……あと卒業祝いに
少し忘れかけていたけど、卒業式は来週なのだ。いくらこの恐ろしい黒岩先輩でも、もう学校で会わないかと思うとても寂しい。

「お祝いに賞品渡すなんて……なんかとってつけた感じ」

そう言いながら、先輩はぶっきらぼうに鍋掴みを受け取った。

「うっわ何これ、玉ねぎの刺繍入ってる。ださっ」

「……」

やはり「とても寂しい」は撤回だ。

少し寂しい、にしておこう。うん。

「ああ、八つ当たりしまくってちよっとすつきりしたー」

「……そうすか」

「さ、そろそろ東くんのとこ戻るよ。また暴力ふるってんじゃない

かつて誤解されても困るし」

もうじゅうぶん言葉の暴力は受けている気がする。

黒岩先輩はずんずんと歩き出した。

本当に怒りを発散するためだけに私を呼び出したようだ。私はさしずめ人間サンドバツクか。

私とはほとほとその後ろをついていった。

ふと、黒岩先輩が振り返る。

「……あんたのことなんて言ってたか、教えてあげようか」
「え？」

先輩は今までよりもほんの少しだけ優しい顔だった。

「あたし今日聞いたの。あんたが東くんにとってどういいう存在なのか、って」

突如、私の心臓は激しく脈打ち始めた。

七緒にとつての、私？

そんな、私がこの5年間聞きたくても聞けなかったことをズバリと切り込むなんて

「せ、先輩……なんてことを……！」

「教えてほしいの？ ほしくないの？」

足が震える。呼吸が苦しい。心臓が破裂しそうだ。

「……ほ、ほしい……です」
「うん」

先輩はおもむろに目をつむり、腕を組んだ。

そしてたつぷりと間を置いた後、ぽん、と私の肩に手を置く。

「男兄弟」

語尾にハートマークさえ付きそうな口調で、黒岩先輩は言った。

「………は？」

「東くん、あんたのこと、男兄弟みたいだって」

頭を鉄パイプで殴られたような強い強い衝撃を受けた。張り詰める緊張感と、ほんのりあった甘い期待が、みるみるうちに消え去る。

「……お、おとこ……？」

【男】意味：人間の性別のひとつで、女でない方。（広辞苑より）
私は七緒が好きだ。幼馴染みの関係だけでなく、恋として大好きだ。

だから「兄弟」の認識だけでも凄まじいダメージなのに、更に「女でない方」と性別まで否定されては、もう……笑うしかない。

「……ふ、ふふ」

「まあドンマイって感じね」

今日一番の爽やかな笑顔で黒岩先輩が言う。

元いたステージ裏に戻るやいなや、私は無言で拳を固め、七緒の頭を殴った。

「いて！ 心都、何すんだよ？」

「うっさい馬鹿。誰が男兄弟だ」

「はあ！？ なんだよ急に……」

「あ、それ遊園地するときにも七緒くん言ってたわよ。心都は男兄弟だ、って」

と、いち早く事態を理解した美里が横からひよっこり顔を出す。

その発言によって、私は自分の堪忍袋の緒が完全に切れたのを感じた。

「きいいい！ あちこちで吹聴してんのかこのやろー！ 馬鹿！ 女

顔！」

「いてっ！ ちょ、おい、よくわかんねーけど重めのグーパンチやめろよ！ あいたたたた」

* * *

七緒を殴り続ける心都を、黒岩は少し離れたところから眺めた。

男女問わずファンが多い七緒に容赦なく拳をふるう（しかも首から上を狙う）なんて、きつと学校の人間に目撃されたら心都はたくさん敵を作ることになるだろう。

さっきの自分の発言は、半分が本当で、半分が嘘だ。

『あの子は東くんにとって何？』

手をつないでの疾走の最中、その質問に対し、七緒はゆっくりと振り返り足を止めた。

生まれたときから一緒だし、余計な気イ使わないから、前までは男兄弟みたいだと思ってたんです。けど、最近ちょっと違う気がするんです。

少し困ったような苦笑い。そんな七緒の表情を、黒岩はそのとき初めて見た気がした。

まあ、昨日みたいな喧嘩も多いけど、実際けっこう心都には色々感謝してて……。だから怒らせるよりは笑ってほしいかなーと思う、なんだかんだそれなりに大切な幼馴染、ですかね。……なんかあらためて言うときとすげー背中ムズムズしますけど。

はは、と七緒は屈託なく笑った。

その「男兄弟」の部分だけをピックアップして伝えた結果、今、心都は怒り狂い、七緒は理不尽な鉄拳を受けている。

しかし黒岩は罪悪感など微塵もなく、そんな2人を眺めていた。

今日はせつかくのデートを玉ねぎごときに邪魔されてしまったのだから。

「これくらいの意地悪は許しなさいよ」

ふふん、と薄く笑いながら黒岩は呟いた。

1 & 1 t ; 桜並木と、ルートの 5 & g t ;

暖かい風が頬を撫でる。

桜の花びらが目の前を舞い、それがあまりにも綺麗で、私は歩みを止めた。

通学路の桜並木は満開だった。

きつと今が1番の見頃、あと2、3日もすれば緑がちらほら混じり始め、あつという間に葉桜となるのだろう。出来ることなら、綺麗に咲いているうちにゆつくりと見ておきたい。

しかし残念ながら今は、ここに留まってしみじみ情緒を感じている暇はない。新学期早々遅刻だなんて間抜けすぎる。

私は学校へと急いだ。

校門をくぐり校舎前へ進むと、そこは多くの生徒でごったがえしていた。

毎年お馴染みの光景だ。

ここには大きな掲示板があり、4月最初の登校日　つまり今日は、新しいクラス編成が貼り出されているのだ。

「心都、おはよう」

人混みの中から奇跡的に私を見つけてくれたらしい美里が、小走りやって来た。

「おはよ、美里」

「私たちまた同じ2組よ」

「えっ、本当に？　良かったー！」

思わずきやあきやあ歡喜の声をあげ、美里と手を取り合う。

彼女とは1年生のときも同じクラスだったから、これで中学3年間一緒ということになる。1番の親友と卒業まで一度もクラスが離れないなんて、こんな幸運は滅多にないだろう。

喜びを噛み締める私たちの間を裂くように、すぐ傍でやかましい声があがった。

「もちろん俺も一緒だぜ！」

確認するまでもない、年中無休のお祭り男・田辺は色黒の笑顔を美里に向けた。

「2年間も栗原と同じクラスなんて、これはもうステファニーとしか言いようがねーな！」

「……」

恐らくだけど彼は、デイスティニー、運命と言いたかったのだろう。ああダサイ、ダサすぎるよ田辺。かっこつけて横文字を使うからこういうことになるのだ。

しかし自分の間違いに全く気付く様子もなく、田辺は笑顔を振りまく。

そんな彼を無表情にチラリと見やった美里は、再び私に視線を戻し、

「まあ、うちの学年2クラスしかないから確率50パーセントだしね。やっぱり少子化の影響って大きいわよねー」

さも現代日本を憂えているかのように眉をひそめる。完全に無視されてしまった田辺は、そのまま固まった。

この2人の間にほんの僅かでも愛が生まれるのは、一体いつになるのだろうか。

めげるなよ田辺、とエールを送った後、私は掲示板のほうに目を向けた。クラス発表を見るために留まる生徒、更にその結果を喜んで悲しみ合ったりする生徒がそこら中に溢れ、相変わらずの大混雑状態。

この距離だと掲示板の文字は見えないし、かといって近付くことも

できない。

私はどうしようもなくそわそわしていた。先程からあることが気になっていけるせいだ。

そんな私を見かねたのだろうか、美里が耳元で囁いた。

「七緒くん、2組」

「ほ、本当？」

「うん。さっきばっちりチェックしてきてあげたわよ」

「ありがとう美里。……そっか、七緒ともまた同じか……」

ふつつつと嬉しさがこみ上げる。いくら家をご近所の幼馴染みでも、やっぱりクラスが別れてしまっただけでは、一緒にいられる時間が大きく減るのだ。

ああ、今日ばかりは少子化に感謝。

「ところでその七緒くんは？ 全く姿が見えないけど」

と、辺りを見回しながら美里が言った。私もブレザーの内ポケットから携帯電話を取り出し、時間を確認する。

「遅いね。あと5分で遅刻になっちゃうよ」

基本的に七緒は部活の朝練がある日以外遅刻ギリギリだ。とはいえ、新年度の初日くらいは余裕を持って登校するのが学生のあるべき姿だろう。

「ねえ心都、そのストラップ何？」

私の白い携帯電話には今、真新しいストラップが1つぶら下がっている。

「あ、これ？ 富士山くんストラップ」

「富士山くん……」

それはにこにこ笑顔の富士山に手足が生えているという、10代女子の持ち物としてはなんとも微妙なセンスのものだ。ちなみに背中（？）の部分には明朝体の黒文字で「富士山麓にオウム鳴く」と書かれている。

「これ、春休み中に七緒からもらったの。ホワイトデーのお返しだつて」

「斬新ね」

美里が少しの哀れみを込めた目で、私とストラップを交互に見る。
「柔道部の合宿で富士山の近くに泊まったんだって。このストラップと、あと定番の『 』 に行ってきた』 的なパッケージのバラックッキーももらったよ」

「それってお返しっていうより、おみやげ……」

「言わないで美里。いいの、わかってるから……」

心底不憫そうな顔の彼女を、右手で制する。

そもそも私はあの七緒が女子のツボを的確につくような可愛くてこじやれたプレゼントをしてくれるなんて、1ミリも期待していなかった。それどころか、お返しすらもらえないんじゃないかと若干考えていたくらいだ(だって私が渡したチョコレートは無惨に潰れていたし、おまけに彼はそれを本命からのお下がりだと勘違いしているのだ)。

だからこれは、私の初めてのホワイトデーの、じゅうぶんすぎるくらいの結果だった。

それにこの富士山くん。七緒からのお返しだと思って四六時中眺めていたら、不思議と愛着が湧いてきた。今では結構お気に入りだ。「おかげでルートもばっちり覚えられたし！」

「まあ心都が幸せならいいけど」

「ほら。よく見ると結構可愛い顔してんだよ、富士山くん……」

私はうつとりとストラップを見つめた。しかし、

「またニヤニヤしてる。好きな人からのプレゼントを眺めるときくらい可愛らしく微笑みなさい。正直、今の心都の顔より富士山くんのほうがだいぶ可愛いわ」

意に反して、美里からのお叱りを受けてしまった。

うつむ。今の私、自分の中の計画では結構な「恋する乙女っぽい」佇まいになるはずだったのに、な。

いまいち腑に落ちず、私が首を傾げたそのとき、慌ただしい足音と共に七緒がやって来た。

「セ、セーフ……」

恐らく家から走ってきたのだろう、七緒は乱れた呼吸を整え、咳いた。

「相変わらず朝練ないと朝が弱いね、七緒」

「低血圧なんだよ」

そう言いながら、暑そうにネクタイをゆるめる。なんだか久しぶりに七緒のちゃんとした制服姿を見た気がする。3学期中、朝も昼も放課後もほぼ欠かさず部室で汗を流していた彼は、ジャージで過ごすことが多かったのだ。だから今日の七緒は、本来ならこれが男子中学生の正しい姿であるにも関わらず、私には少し新鮮に見えた。美里による無視のダメージからようやく立ち直ったらしい田辺が七緒の肩を叩いた。

「よっ、東！ また同じクラスだぜ。俺も栗原も杉崎も」

「あ、そうなんだ」

そのあまりにも薄すぎる七緒のリアクションに、私はちよつとがっかりしかけて 思い直して、止めた。

こんなの至極当然の反応じゃないか。もし七緒が「また心都と同じクラス！？ きゃー嬉しいっ！」なんて言ってくれたとしても、それはそれでなんだかすごく嫌だし。

「あと、2年のときも同じだった奴だと、藤川とか新井とか平野とか」

「おっ、マジで？ なんか賑やかそうなクラスだなー」

だからこのように、彼が2組の友人男子たちの顔ぶれを知ったときのほうが嬉しそうなのも、当たり前のことだ。

……けど、まあ、正直言おうと。今の半分の笑顔でもいいから、私と同じクラスだということに対して向けてくれないかなあというのが本音だ。

そんな私のないものねだりが、どうやら顔に表れていたらしい。

七緒が私をじっと見て、不思議そうに訊ねた。

「……心都、なんでちよつとしゃくれてんの？」

心外だった。

せめて「むくれてる」とか言っただけほしい。

「……そんなつもりはなかったんだけど」

「猪木の物真似は公の場ではやめとけって言ったじゃん」

「いや、だからそんなつもりじゃ……」

「けっこう引くレベルで似てるんだから、これからは本当に心を許した人の前以外ではやらないほうがいいぞ」

「聞けよ」

今日から中学3年生。

といつても、急に大人になれるわけでも、心に余裕が生まれるわけでもなく。

私は今まで通り、七緒の何気ない言動にドキドキしたりニヤニヤしたり、はたまたしゃくれてしまったりしている。

なんとしても卒業までにはこの状況を変えたい　　いや、変えなきゃ駄目だ。

春の麗らかな陽気の中、そんな切迫感にも似た強い思いが、私の胸に湧き上がっていた。

2&1t;ジnkすと、春のせい>

始業式のあとは新クラスでの短いホームルームのみで、その日は下校となった。

学校前の交差点で美里と別れ、そこから私はひとり家路につく。通学路の桜並木は相変わらずの満開だ。私は自宅近くの公園前までやってきたところで足を止め、咲き乱れる桜を眺めた。

ひとたび強めの春風が吹くと、まるで演歌の花吹雪みたいに辺りがピンクに染まる。すごく綺麗。

ふと、小学校低学年の時に流行ったジnkスを思い出した。

桜の花びらを空中でキャッチできたら願いごとが叶う。

こないかにも嘘くさい噂がまことしやかに流れ、当時は春になると通学路で舞い散る桜を掴み取ろうとする女子の姿があちこちで見られた。もちろん私も無邪気にチャレンジしたくちだ。しかし鈍くさいのか運がないのか一度も成功しないまま、いつのまにかこのジnkス自体綺麗さっぱり忘れてしまっていた。

だけど今なら、散っている花びらの量もかなり多いし、何より、数年を経て少しは私の身体能力もアップしているだろう。

よし。

私は神経を集中させ、狙いを定める。

ここだ！ と素早く右手を動かし、見事、花びらを掴んだ。と思ったのだけど。期待を込めて開いた手の中はすっからかん、花びらどころか埃ひとつない。

今度こそ、と再びチャレンジするも、やはり桜は捕まってくれない。

おかしいな。こんなはずじゃなかったのに。

私はやっきになって、何度も何度も空中キャッチを試みた。

しかし、数を重ねても結果は同じ。

「くっ」

こつなつたらもう意地だ。

段々と手付きも鼻息も荒くなってくる。私は一心不乱に桜の花びらへ挑み続けた。

そう、とにかく必死だった。

だから、すぐ傍に同じく下校中の七緒がいると気付くのに、こんなに時間を要してしまったのだ。

「……………」

七緒はほんの少し離れたところから、「うわぁ……………」と変質者に向けるかのような表情でこちらを見ていた。

右の拳を大きく突き上げた状態のまま、私の体が凍りつく。

しまった。自宅近くのこの公園前、私の通学路であるのと同時に、七緒にとつてもそうなんだった。つまり、この時間に彼が通るのも当然のこと。

青ざめる私をよそに、七緒は対変質者用の顔を崩さないまま、そそくさと自宅方向へ歩き出そうとした。

まさかの無視だ。

「あの、こういう時その反応は1番きついんですけど」

「…………いやー、お構いなく。道端で1人シャドーボクシングしてる奴に話しかけるほど、俺、好奇心旺盛じゃないから」

「シャドーボクシング!？」

大いなる誤解だった。

私は自分でも驚くほどの瞬発力（桜キャッチのときに発揮したかった）で七緒の元へ近付き、

「違う!」

がっしりと腕を掴んだ。

「桜見てたらちよつと乙女気取りなくなっちゃっただけであって、昔流行ったジんクスの的なものを思い出して試してただけであって! 決して女ボクサー目指してるわけじゃない!」

「ジんクス?」

七緒は胡散臭そうに目を細めた。

「桜の花びらをキャッチできたら願いが叶う、って。知らない？」
「知らない」

やはり大ブームといっても女子児童の間だけのことだったらしい。
「だからって1人でそんな鬼の形相でやらなくても……」

呆れたように七緒が言う。

確かに小学校低学年ならともかく、十代も半ばである私が公共の場で人目も気にせずフィーバーしてしまったのは恥ずべきことだろう。

「……以後気をつけます」

もう少し落ち着きと思慮深さを身につけよう、と私は反省した。

「心都が教室でまで奇行に走ったら、今度こそ俺、つつこみきれずに他人のふりするよ。せつかくまた同じクラスになれたのに、そんな勘弁だからなー」

冗談めかして言う七緒は、少し意地悪く笑っていた。

しかし私は、今の彼の発言に異常ともいえる程ときめいてしまっていた。

『せつかく同じクラスになれたのに』？

何とはなしに放たれたこの言葉だけど、心でリピート（エコーつき）してしまうくらい、私には大きな意味がある。

これ、少しは私と同じクラスを嬉しいと思ってくれていると解釈してしまって、いいだろうか。いいよね。

恋する乙女は皆、自意識過剰の妄想族だ。

一度軽くへこまされているだけに喜びもひとしお。ああ、手足が震える。今すぐ走り出したい気分。

「自分もっ！七緒と同じクラスで、良かったっす！」

「何その体育会系」

またまた七緒の表情がげんなりとし始め、私は慌てて感情の高ぶりを抑えた。

「い、いやいや。ふざけてるわけじゃないよ。2クラスしかないとはいえ運が良かったなあって」

「そつだよな。ほんと、また一緒に良かったよ」

「……うんうん」

ときめきは最高潮だ。

「3年生のときのクラスって重要だよな」

「うんうん」

「同窓会で集まるのって大体このクラスになるんだもん」

「うんうん。……ん？」

若干の引つ掛かりを覚える。

恋する乙女は皆、自意識過剰の妄想族であるのと同時に、自分にとってよろしくない意味の言葉に敏感だ。

「これで心都と、10年経っても20年経っても、同窓会で会えるもん」

舞い散る桜を背景に、爽やかな笑顔で七緒は言った。

同窓会で会える。

これは、同窓会以外では会えない、という意味にも取れるような気がする。

つまり七緒が描く20年後のビジョンに、「同窓会」のシーン以外で私は登場しないのだろう。

間違っても今現在恋人同士ではない私たちだ。当然といえば当然のことだけど、七緒に想いを伝えて幼馴染み以上の関係になりたいと願う私にとって、それはあまりにも直接的で破壊力が強すぎた。例によって例の如く、七緒は一切屈託のない笑顔なものだから、よけい始末に負えない。

「……そりゃないぜ、おい」

妄想という名の私の未来ビジョンには、10年後も20年後も七緒が登場しまくっているというのに（主に素敵な教会とか、幸せなキッチンとかが舞台だ）。

「え？ 心都、なんか言った？」

「……なんでもない」

この鈍感男のおかげで、ここ最近、私もだいぶ強くなった。この

場で落ち込むよりもとにかく気持ちを切り替えたほうがいい、ということもよくわかった。

ここはできる限り深みにはまらないようにしよう。

そしてあとで家でゆっくり落ち込もう。

「……それにしても、七緒がこんな時間に下校なんて珍しいね。いつも遅くまで部活なのに」

「今日は顧問の都合で休みなんだ。明日からまた連日の特訓スタートだけ」

「大会とか近いんだっけ？」

「大会じゃないけど再来週、隣の中学との練習試合」

「そうなんだ。じゃあ今度こそ一本背負いで大勝利だね！」

「……簡単に言うなよ」

そう言っただけでさっさと歩き出す七緒が、私とは目を合わさず、

「……まあ絶対勝ちたいけど。ていうか勝つけど」と、呟く。

前回の大会後に七緒が言ってくれた「次は勝つから見とけ！」という偉そうな言葉を、私はまだすっかり覚えているし、きっとそれは彼にとっても同じなのだろう。

そのことがなんだか嬉しくて、私はつい締まりのない顔になりながら、七緒に並ぶ。

「頑張ってるね」

「おー」

「試合、見に行っている？」

「うん、来て。俺はエントリー取り消したとか嘘ついたりしないからな」

「ちょっとそれまだ引きずってるの？」

「冗談だよ」

私が七緒をぎろりと睨んだ、その時だった。

向かいから歩いてきた学生服の少年が、私たちの数メートル先で

足を止めた。

「杉崎？」

急に名前を呼ばれ、私は驚いて少年を見た。

彼の黒い学ランと濃紺の通学鞆はよく知っている、隣の中学校のものだ。なので間違いなく同い年、もしくは年下である。

しかし、175以上はあるであろう長身に、黒い短髪、マッチョともいえるがっちりとした体格のせいで、とても大人びて見えた。

「うっわあ、すげえ偶然！ 久しぶり！ 俺だよ、俺俺！」

「えっと……」

困った。

オレオレ詐欺のように話しかけてくる彼を、私は全く知らない。

「4年？ 5年ぶりか！ 懐かしいなー！ 杉崎！」

彼はきらきらと瞳を輝かせ、私たちの元へ歩み寄ってくる。

「心都の知り合い？」

「いや、全く」

怪訝そうな七緒に、小さく耳打ちする。そんな私の言葉を受け、

「ああ、春は変な奴が多いからな」

と、七緒。

そうなの？ これって春のせいなの？

しかし謎の学ラン少年はさっきから私の名前を連発している。

「あれ？ 隣、ひよっとして……あずま？」

突如名前を呼ばれ、七緒は目を見開いた。

「ああ、やっぱり東か！ 相変わらず女顔だなー！」

「……はあ？」

七緒の声がワントーン低くなり、眉間にしわが寄る。非常に危険だ。

しかし学ラン少年はそんな不穏な空気もなんのその、明るい口調で続けた。

「なんだよ、まさか2人とも忘れてんのか？ 俺だよ。昔、同じ道

場だった。」

彼の言葉をここまでで遮り、私は思わず言った。
ある人物が突如として脳裏に浮かんできたからだ。

「 ヤマザキ? 」

「 惜しい! 山上^{やまがみ}だ! 」

彼は豪快な笑顔のまま、ばしりと私の肩を叩いた。

5年前に大嫌いだった人間の名前を、どうやら私は間違っ
て覚えていたらしい。

2&1t:ジnkすと、春のせい> ; (後書き)

あなた誰状態、すみません。

山は1章 - 10でけっこう出てきた人です。

3 & 1 t ; 再会と、予感 & g t ;

約5年ぶりに会った山上は、豪快な笑顔で私の肩をバシバシと叩いた。

「やっと思い出したな。忘れられたかと思った！」

「う、うん。最初は全然わかんなかったよ。なんかすごい大きいから同い年に見えないし」

「ははは、俺、今177センチあるからな」

「へえ、すごいね」

昔は何かと私に突っかかってくるが多かった山上。はっきり言って嫌な奴で、私は大嫌いだった。

ところが現在の彼はとても気さくで朗らかで、昔のような嫌悪感はなく感じさせない。やはり人間、年月が経てば精神的にも大人になるものだ。

私は人知れず感動していた。

しかしそんな中、未だにその場の再会ムードについていけない人物が1人。

「山上……やまがみ……？」

七緒は難しい顔で首をひねった。

ああ。こいつ、5年前に取っ組み合いまでした山上のことを完全に忘れている。

呆れた私は七緒の首根っこを掴み、小声で言った。

「同じところで柔道習ってた山上だよ。ほら、掃除当番のときに派手に喧嘩して、私がバケツの水ぶっかけて2人ともびしょ濡れになったじゃん」

ここまで説明されてようやく、七緒は「ああ」と手を打った。

「あの山上か。ほんと久しぶりだなー」

「思い出したか、東」

「確か山上、小5のときに外国に引越したんだよな」

「ああ。4年間アメリカにいて、こないだこの町に帰ってきたばかりなんだ」

10歳当時の取っ組み合い事件のことなど微塵も感じさせない、和やかな2人のやり取り。

私はまたしても時の流れを噛み締め、感動した。

「やっぱり4年離れてると色々変わるよなあ」

「でも、今後はもうずっとこっちにいるんでしょ？ その制服、西有坂中のだよな」

私たちが通う有坂中学校の隣の学区、歩いて15分程のところにあるのが西有坂中学校だ。

私の問いに、山上はこっくり頷いた。

「今月から西有坂中に通うことになったんだ。今日は転入初日」

ふと、七緒が何か考え込むような表情になった。

「西有坂ついていえば、再来週の練習試合の相手校だな……。山上、まだ柔道は続けてる？」

「おう、アメリカでもずっとやってたからな。まだ入部届け出していないけど、すぐにでも柔道部に入るつもり」

「じゃあ再来週また会うかも。会場も西有坂中の体育館だし」

それを聞いた山上は、嬉しそうに瞳を輝かせた。

「ってことは、東も柔道続けてるんだな？」

「うん」

「おおおお！ そうか！」

山上は七緒の手を取り、ブンブンと振り回した。たいそう強烈な握手だったが、七緒も嫌そうではなかった。

やっぱりかつての道場メイトが今も頑張っているというのは、お互いに嬉しいことなのだろう。

ふと山上が、私と七緒を交互に見つめた。

「それにしても、相変わらずつるんでるんだな。東と杉崎」

「別につるんでるわけじゃ……」

「だって一緒に帰って仲良さそうじゃん。何、ひよっとして付き合

つてるとか？」

「いやいやいや……」

と、私と七緒のゆるい反論の声が八モった。右手を軽く振る動作まで一緒だ。

……「ゆるい」だとか「軽い」だとか。これが好きな人との仲を冷やかされた女子の反応に付く形容詞だなんて、我ながら間違っていると思う。しかし、この質問に対する慣れや緊張感のなさ、そして何より隣の七緒が全く照れたり動揺したりする姿を見せない（これは毎回ちよつとムカつくのだが）ということで、結局私はこうなってしまうのだ。

「そうなんだ。でもまあアレだな、東は相変わらず男にモテそうな顔だな！」

そう言う山上は悪気など少しもない様子だけど、やはり七緒の眉がピクリと動くのを私は見逃さなかった。

「全く、全然、微塵もモテねーよ」
嘘だ。

「ははは！」

山上の大きな笑い声が響く。

言いたいことはズバズバ言う、スキンシップ多め、そして明るく豪快に笑う。これがアメリカナイズというやつなのだろうか？ いっそ山上の笑い声をH A H A H Aと表記したいくらいだ。

「おっと、俺そろそろ帰るな。引っ越してきたばかりだから色々やることもあるんだ」

山上は「東、また再来週。杉崎も」と手を振り、大股歩きで去っていった。

その後ろ姿が見えなくなるまで見送った後、私は呟いた。

「……山上、変わったねー」

「そう？ もとから体デカかったじゃん」

「見た目じゃなくて、性格の話だよ。昔はもつといじめっ子っぽかったのに、すっかり陽気な良い奴だね」

勝手ながら、私は今の山上とならかなり良いお友達になれそうな予感がしていた。やっぱり時の流れって素晴らしい。

うーん、と七緒がじっくり来ていなさそうに首を傾げた。

「山上って昔そんなだったっけ？」

「私、結構いじわるされた記憶があるんだけど」

「それって心都に対してだけじゃねえの？」

失礼な。どれほど嫌われていたんだ私。

「えー……。七緒だって取っ組み合いの喧嘩したじゃん」

「だって、そりやお前あのときはさ」

ここまで言っただけ七緒は、苦虫を噛み潰したような顔で宙を睨んだ。そして、

「……まあ、いや。帰る帰る」

勝手に自己完結して、さっさと歩き出した。

「……」

あのとときの取っ組み合いの原因を、その場にいたにも関わらず、私は知らない。

なんとなく聞く機会を逃したまま5年間に過ぎってしまった。というか、よくよく考えてみればあれ以来、七緒とこの件について話をしたことがなかった。今の彼の反応を見ても、喧嘩のきっかけを特に語るつもりがないのは明らかだ。

「……なんか歯切れ悪いなあ」

その言葉を見無視して歩く七緒の背中では普段と少し違って見えて、これも制服効果なのかしらと私はぼんやり考えた。

4 & 1 t ; 乙女と、身体測定 & g t ;

入学当初は縮こまっていた新入生も、一週間も経てば徐々に伸び伸びとしてくる。

昼休み。出来たばかりの友達同士グラウンドで遊ぶ1年生たち（制服も運動靴も真新しいのですぐにわかる）を眺めながら、私は隣の美里に尋ねた。

「もう新入部員入った？」

今日はとても天気が良いので、美里とグラウンド脇のベンチでお弁当を食べている。ぽかぽかとして気持ち良い。ちよつとしたピクニツク気分だ。

美里は卵焼きをきちんと飲み込んで、口を開いた。

「今のところ5人。そつちは？」

「うちはまだ全然。そもそも2、3年生合わせて10人いかないくらいだしな」

家庭科の授業の延長レベルである料理部では、なかなか人も集まらないのだ。私に言わせてみれば、放課後の校内で堂々とご飯やお菓子が食べられるなんてとても魅力的なことだと思っただけだ。

「まあ、でもこれからよね。まだ新学期始まって一週間ちよいだし」「そつだよね」

桜はすっかり散ってしまったけど、季節はまだまだ春だ。

「ねえ心都。あんまりお箸が進んでないけど、具合悪いの？」

美里が私の手元を覗き込んで言う。さすが鋭い。

私は頭をかきかき答えた。

「いやあ、実は午前中の身体測定でちよつと目方のほうが……」

「あ、太つたの？」

ずばりと、美里。

基本的にとても優しい彼女だけど、たまに驚くほど容赦ない。

「……4キロほど」

春恒例の身体測定は、その結果次第で、思春期真っ直中の中学生を天国へも地獄へも連れてゆける。昨日から食事の量を減らしデザートも控えるという万全の状態で挑んだにも関わらず、私は去年に比べて体重が4キロも増えていた。身長は大して伸びていなかったの。

やはりというべきか、前述の「校内で堂々とご飯やお菓子が食べられる」現状がまずいのだろうか。

美里は明るく笑い、その白く細い手を私の肩に置いた。

「なあんだ、そんなこと気にしてたの。大丈夫、心都はどう見ても中肉中背の標準体型よ」

「ちゅうにく……」

下手に「平気だよお、細いよお」などと気休めを言わないからこそ、美里の言葉は頼もしかった。

「そのくらいの体重の増減はよくあることよ」

「……そうかな」

「まあ、気にしちゃうのもしょうがないと思うけどね。恋する乙女だもん。だからもし本当に心都の体型がやばくなってきたら、私が心を鬼にして『豚ちゃん』って呼んであげる」

だんだん気持ち明るくなってきた。

そもそも、ランニングや食事制限までして本格的なダイエットに臨む決意も根性も、私にはまだない。だったらもうそこにあるのは「気にしない」という選択肢のみだ。

「うう。美里、ありがとう」

「え、やだ涙ぐんでる？」

「持つべきものは優しくして時に容赦ない親友だよ……」
それ誉めてるの？ と美里が顔をしかめた、その時。

「危ない！」

突如聞こえた大声。

驚いてそちらを向くと、私をめがけて勢い良く飛んでくる、白黒のコントラスト眩しいサッカーボールが見えた。

このままだと顔面直撃は免れない。

しかし、かなりのスピードがついているボールをキャッチするのはさすがに無理だ(だって乙女だもん)。

だから私は、ゴツと鈍い音をたて、拳でそれを跳ね返した。

「ああ、杉崎。わりーな！」

ボールを追ってへらへらと現れたのは、田辺だ。

「危ないじゃん、気をつけてよ」

「わりーわりー。でも当たらなくて良かった。咄嗟にパンチが出る奴なんてそうそういねーよ」

失礼な奴だ。もしボールがぶつかりそうになったのが美里だったら、きつとその場で手首を切りかねない勢いで謝るんだろう。

私はやさぐれたい気持ちになって、田辺を睨んだ。

「今日は皆で仲良く楽しくサッカーですか。バスケット部員さん」

「別にバスケット部がサッカーやったっていいだろ。ボールは友達だぜ」
サッカーボールを小脇に抱え、なぜか得意げな田辺。

「ドライブシュートの練習してたらボールが変な方向いっちゃってよ。まあ杉崎の顔面直撃しなくて良かったよな、わはは！」

なんだこいつ。どこぞの翼くん気取りか。

「東がいればスカイラブハリケーンでも練習するんだけどな。あいつ身軽そうだし」

「七緒は参加してないんだ？」

「おう。あいつスキップで昼練に行ったぜ」

衝撃を受けた。嬉しくてスキップする人間なんて本当にいるのか。
「なんか午前中の身体測定の結果でハッピーになっちゃったらしくて。ここ最近で身長4センチ近く伸びたんだったよ」

「よ……4!？」

再び衝撃を受けた。

今までずっと、ほぼ同じくらいの背丈だった私と七緒。

最近だって彼の隣にいて、そんな大幅な伸びを感じたことはなかった。

いくら一緒にいる機会が多い幼馴染みだからって、4センチの目の差に気が付かないなんて、有り得るのだろうか。

と、ここまで考えて気が付いた。

春先になって感じた七緒の違和感を、私は久しぶりに見る彼の制服のせいだと思っていた。

しかし今考えればきつと、違う。

もちろん多少は制服のせいでもあるだろうけど、違和感の大半はその4センチが生むものだったのだろう。

「嫌だ！ ムカつく！」

たまらず叫んだ私に、美里が驚いたように目を向けた。

「ええ？ そこは『いつのまにかそんなに背が伸びてたんだ……やつぱり男の子だなあ……』とくんくん」でしょ」

美里の意見ももつともだ。私だって、それやりたかった。少女漫画ばりにとくんくんしたかった、けど。

「タイミング最悪だよ。私は4キロ増えてへこんでるのに、七緒は4センチ伸びてスキップルンルンだなんて……同じ数字なのに……。ああ、なんかすっごいムカつく！」

「心都……」

美里がなんともいえない表情で私を見やる。

「へえ、杉崎は太ったのか！ 言われてみりゃーそんな気も……」どこまでも無神経な田辺が、両手の親指と人差し指でカメラのフアインダーを模した四角を作り、私を眺めながら言った。

私は彼を睨みつける。

「田辺うるさい。早く戻ってサッカーの続きしてきなよ。技の練習途中なんですよ」

「ああ、そうだった。なつ、栗原も良かったら一緒にサッカー……」美里がにこやかに微笑む。

「遠慮しとく。っていうか、田辺くんってバスケット部のね。知らなかった」

彼に何度も浴びせてきたであろうこの言葉を、恐らくわざと美里

は言った。

膝から崩れ落ちる田辺の心が音をたて折れたのが、はっきりとわかった。

私は、斜め前の席に座る七緒を下から上までじっとりと、蛇の如く睨みつけた。

帰りのホームルームも終了し、放課後の部活に行く準備をしていた七緒はその視線に気付き、

「……なんだよ、心都。喧嘩売ってんのかよ」

と、にこやかすぎる笑顔で言った。

「浮かれてるなあと思って。身長伸びたんでしょ」

「ああ、気付かれちゃいました？ まいっちゃんうなー」

本当にすごい浮かれようだ。辺りにお花が飛んでいるのが見える。「いや、私は全く気が付かなかったんだけど、さっき田辺に聞いたから」

「そうなんだよ。今年の正月に自分で測ったときはまだ159だったんだけど、それから急に4センチも伸びたみたいでさー」
「ふうん」

「このペースでいけば来年の今頃には山上くらいにはなってるな。我ながら恐ろしいよな、成長期ってやつはよ」

「ははは、と楽しそうに七緒が笑う。私は全然楽しくない。」

「くそつ。ムカつく」

「え、なんか言った？」

阿呆面の七緒をじつと見つめ、私は右手を伸ばした。

「……私だつてここぞとばかりにとくんとくんしたかったのに」

そのまま右手を七緒の頭に置き、下へ押し込めるように、ぐいぐいと力をいれた。

「え？ え？」

「……縮め！ ていうかお前も横に伸びろっ」

「は？ 何言つて……」

「道連れにしてやる！ 今日から毎日ピザをおかずにご飯3杯食べろっ！」

「いて！ やめろ、ばか！」

結局、ぶち切れた七緒から頭に重めのビンタをくらうまで、私は彼のつむじに圧力をかけ続けた。

「心都……そんなの恋する乙女の行動じゃないわ」

ぼつりと悲しそうな美里の声が、耳に届いた気がした。

5 & 1 t ; お祝いの1ホールと、見学 & g t ;

七緒の背が伸びた。

そんなおめでたいともいえる出来事を、当初そのナイーブさゆえに受け入れることができなかった私だけど、数日が経って徐々に気持ちも落ち着いてきた。

美里に豚と呼ばれてしまう日を迎えないためにも、なるべく甘いものを控える決心もついた。

しかし。

「お母さん、これは……」

リビングのテーブルには、たっぷりの生クリームに真っ赤な苺の乗ったケーキがひとつ。

ひとつといっても1ピースではなく、まさかの丸々1ホールだ。

「すごいでしょー？ お母さん頑張って作ったの。ちょっと遅くなっちゃったけど、心都の進級のお祝い」

フリルのエプロンを身にまとったお母さんは、にっこりと笑って言う。

「さあ、食べて、心都」

「お母さん、お祝いはほんと、ありがとう……。でも1ホール丸ごと？」

「大きい方が嬉しいと思って。心都、甘いもの好きでしょ？」

「今、夕飯食べたばかりだよ」

「作りたてのほうが美味しいじゃない。今日食べられるだけ食べて残りは明日ね」

お母さんは私を椅子に押さえつけると、いそいそとティーカップの準備を始めた。

もう、逃げられない。

「早いもので心都ももう3年生なのねー。どう？ 最高学年は」
「どうって、特には」

「あら、感動が薄いよね。明美なんか学生時代、すごい浮かれようだったわよー。名実ともに学校のトップに立てるわけだから。あ、高3の時の話ね」

「トップ？」

元ヤンの考えることはよくわからない。私はあまり深く追求しないよう、心に決めた。

「そういえば明日、七ちゃんの試合見に行くんでしょ？」

「うん。西有坂中との練習試合」

お母さんが嬉しそうに言う。

「仲良しねえ」

「別に普通だよ。美里も行くし」

「美里ちゃんもだけど、七ちゃんともまた同じクラスで本当に良かったわよねー。一緒の時間が減らなくて、ひと安心じゃない」

「あ、安心なんてしてないよ」

「うふふ」

この母親は、私のなかなか報われない恋に気付いているのだろうか。今まで何度も頭をかすめてきた疑問だ。出来ることなら、それは絶対に避けたい。

「だって、あいつと一緒にいると、色々な女の子に『付き合ってるの？』とか詰問されるし、怖い先輩には睨まれるし、不良の男子生徒には罵倒されるし。かなり被害被ってるんだよ」

「そんなこと言わないの」

相変わらず楽しそうに微笑みながら、お母さんは軽く私をたしなめる。

うーん。やはり私の隠蔽工作、見透かされている気がしないでもないような、するでもないような……。

「今までみたいに一緒にいられるのも、いつまで続くかわからないでしょ。来年はあなたたち高校生なんだから」

言われてあらためて気付く。今年は受験の年なのだ。そういえば、もうすぐ第1回目の進路希望調査があると担任の先生が言っていた。

「……高校かあ」

七緒は進路どうするんだろう。

いや、人のことを気にする前に、自分はどうしよう。中の中と中の下辺りをふらふらしているような今の私の成績では、今後の受験勉強をかなり頑張らないと行ける高校も限られてくる。

将来に一抹の不安を感じながら、その夜、結局ケーキを半分近く食べた。

我が校から歩いて15分程のところにある西有坂中学校は、まだ創立20年ちよつとの新しい学校だ。

校舎はもちろん校庭や体育館も比較的綺麗で、広々としている。

普段割と古めかしい校舎で学校生活を送っている身としては、非常に羨ましい。

「同じ地区の公立校なのに、新しいのと古いのではこうも違うのねえ」

大きな体育館を見上げ、しみじみと美里が言った。

「美里、ついてきてくれてありがとね」

「いいのよ。西有坂中って、この辺の地区でもイケメンが多い学校ってもっぱらの噂だから、一度来てみたかったの。目の保養よ、保養」

「……そうですか」

どつりで、本来柔道に興味のないはずの彼女が、私の誘いにノリで応じてくれたわけだ。

この物騒な世の中、学校のセキュリティもかなり厳しくなっている。試合の見学という名目でもなければ、他校の生徒が堂々に入ることもなてまず出来ない。

「で、どうよ。美里のお眼鏡に適うイケメンは、いる？」

体育館に入ると同時に美里に尋ねる。

館内の隅では西有坂中の柔道部の面々が、恐らくウォーミングアップなのか、軽い組み合いをしていた。

美里が小さな声で答える。

「私、うっかりしてた」

「何が？」

「柔道部に、私の理想の『バラが似合う王子様』タイプはいないわ。あまりにも神妙な顔で言うものだから可笑しくて思わず吹き出すと、彼女に脇腹を小突かれた。痛い。」

試合開始時刻の13時までまだ30分ほどあるというのに、辺りは既にたくさんのギャラリでざわついていた。そういえばこの柔道部って、市内でもそこそこ強いんだっけ。

「うわ、あの人見て。すごい」

と、美里が体育館の一角を指さす。

それは今まさに、西有坂中柔道部の中の1人が「どりゃあ！」と野太い声をあげ、組んだ相手を投げ飛ばした瞬間だった。

「なんかもうガタイからして他とは違う感じね。1人だけ柔道一筋20年ツスみたいな」

褒めているのか何なのかよくわからないセリフを美里が言う。

遠目だけど、柔道部軍団の中でも人一倍マッチョなその人物に、私はかなり見覚えがある。

「あれ山上だよ」

「えっ！ 山上って……この間心都が言ってた、元いじめっことで、元七緒くんの道場メイトで、つい最近再会した、あの山上くん？」

「うん。その山上」

「へえー。あの人と喧嘩なんて、小学生のときの七緒くん、命知らずねえ」

思えば山上は昔から強かった。5年前の取っ組み合いでも、七緒との圧倒的な力量の差を見せつけていたのだ。

手加減を知らない子供同士で、あのとき大きな怪我がなかったのは今考えると奇跡だ。だって七緒、あの頃は私と戦ってもたまたまに負けるくらい弱かったんだもの。

ああ、もしもあのまま私も道場に通い続けていたら、今頃山上の女版みたいなマッチョガールになって、七緒を投げ飛ばしたりできていたのだろうか……。

私がそんなことを考えている間に、ウォーミングアップは終了したようだった。

山上が汗を拭いながらこちらへやって来る。

「杉崎い！ 来てたのか！」

それなりに距離がある場所から見学していたのに、なんて目がいいのだろう。

山上は私の目の前に立つと、再会したときと同じように笑顔で肩をバンバン叩いてきた。

「見てたか、俺の背負い投げ！」

「う、うん。すごかったね。山上、試合出るの？」

「まさか。俺、まだ入部して数週間だぜ。今日は応援役だよ。今のは選手のウォーミングアップの相手してただけ」

「その割には豪快にきめてたね」

「おう。軽い練習のはずがついアツくなって投げ飛ばしたら、なんか顧問に怒られちったよ。ははは」

あっけらかんと言う山上だけど、笑い事ではない気がする。

「まー、ゆっくり見てってくれよ。杉崎も友達も！」

まるで自分主催のイベントであるような口振りだ。

笑顔の山上は、私と美里と順々に握手を交わすと、再び部員たちの元へ帰っていった。

「なんかすごい人ね」

呆然と美里が言う。

「うん。アメリカ帰りだから」

「それだけの理由で片付けられるもんじゃない気がするけど」

まあ確かに、山上のあの性格は本人の地によるところも大きいだろう。

「豪快だし強引だし熊とか倒せそうな外見だし……七緒くんとは対極って感じねえ」

同じ柔道部員でもここまで違うだなんて、不思議だ。

体重の階級が違いすぎるから有り得ないだろうけど、もしも2人が今もう一度組み合ったりしたら……恐らく七緒は死んじゃうだろうな、うん。

私が不吉な想像に身震いしている間に、選手集合のアナウンスが流れた。

試合が始まるうとしてている。

6 & 1 t ; 勝利と、幻 & g t ;

「……ねえ、何それ？」

美里が怪訝な表情で指さすのは、私の額にキリリと結ばれた鉢巻き。力強い毛筆で「勝利」と書かれている。

「今日のための応援グッズ。やっぱり試合観戦もアイテムがあると気合い入ると思ってさ」

なんだかやたら照れくさくて、私は頭をかきかき答えた。

「こんなのも作ったんだけど、いざ試合会場に来るとさすがにちょっと恥ずかしいナー」

私は持参した紙袋から、同じく毛筆で「必勝」と書かれ、縁にスパンコールのデコレーションが施されているうちわを取り出した。

「作り始めたらなんか楽しくて結局昨日徹夜しちゃったよ、へへ」「すごいわね」

「ありがとう。そう言ってくれると思って、はい、これ！ 美里の分も作ってきた！」

「あ、私は大丈夫。おかまいなく」

差し出したうちわを、笑顔の美里が力強く押し返す。あら、なんだか奥ゆかしい。

仕方なく私は両手に2人分のうちわを握り締め、試合に備えた。

少し前までは、応援することしかできない自分にもどかしさを感じていた。でも七緒は、そんな私が力になると言って感謝してくれた。

だから私は全力で応援する。

七緒が勝つことを約束してくれたとき、私もそれを誓ったのだ。

私は思わず、口をあんどりと開けた。

「……………か、」

体育館の中央で組み合っていた七緒の体が、突如素早く動き、相手を押さえ込んだ。

見事な一本、だ。

「勝っちゃった……………」

あつという間の出来事に、私は隣の美里の腕を揺すった。

「勝っちゃったよ、七緒」

「すごいわね、七緒くん。この間の試合とは全然違うわ」

パチパチと拍手をして、美里が嬉しそうに言う。

私はあまりの興奮に、体中が小刻みに震えていた。

絶対勝つ！ と大口叩いて約束してくれた七緒だし、私もそれを信じていたけど、まさかこんなにあっさりキメてしまうなんて。

「す……………」

うちわを持つ手に力が入る。

「すごいー！ 七緒、すごいよー！」

観客たちの歓声の中、感極まった私の声は、思ったよりも響いた。それは会場の真ん中で、勝利のあと凛々しい表情で道着を直していた彼にもばつちり届いたらしい。

「あ、七緒くんずっこけた」

ドリフばりの綺麗な『こけ』だ。

七緒がこつちを睨んでいる。

「ああ、あとでキレられる……」

だって嬉しくて、つい。

前は体調不良もあり発揮できなかった七緒の努力の結果が、こうして今日ばっちり出たのだ。

これで嬉しくなかったら、私にとって世の幸せなんて全部幻だ。

試合後、出入り口の側で、ぞろぞろと体育館を後にする我が校の柔道部の面々と会うことができた。

「七緒、お疲れ様」

「おー」

私たちに気付き、ひらっと手を振る七緒。

「心都、栗原、来てくれてありがとうな」

「いーえ。面白かったわ」

美里がにこりと微笑む。

やべえ栗原さんが見に来てたのかよ、と柔道部員たちが一気に色めきだした。

美里は美里で、浮つく部員たちにとびきりの笑顔で手を振ったりしている。さすが校内一の美少女、慣れたものだ。

私はあらためて七緒に向き直った。

「おめでとう、七緒。勝っちゃったね」

「へへ、さんきゅ」

七緒が嬉しそうに頭をかく。

「すごかったよ。私、感激した」

「……感激ついでにあんなに叫ばれるとは思わなかったけど、少しげんなりと七緒。」

それでも、思っていたよりは怒っていないのかな。

「ごめん、ごめん。なんか七緒があまりにもかっこよくてさ」

「なんだよ、それ」

呆れたように七緒が言う。いつもみたいな冗談の延長で、私が茶

化していると受け取ったらしい。

「だけど、それは誤解だ。冗談なんかじゃない。」

「本当だって。もうね、震えちゃったよ私！ わなわなと！」

私は思わず七緒の肩をぐわしと掴んで、力説した。

「本当に本当に、かつこよかった！ 七緒は、すごいよ！」

こうして肩を掴んで近くで見合うとあらためて、あ、やっぱりこの人背が伸びたんだな、と実感する。

今になって思えば、どうして制服のせいなんかにはできたのだろう。

15年間ほとんど同じ高さだったはずの目線が、僅かに離れた。

この差は、思っていた以上に大きい。

私がそんな場違いな認識をしている間、七緒は少し驚いたような顔でこちらを見ていた。

「が、やがて、」

「……な、なんだよ、急に」

パツと視線を逸らすと、肩に置かれた私の手を振り払った。

七緒の顔が、少し赤い。

あれ？

「……七緒、ちょっと本気で照れてる？ マジ照れちゃった？」

「てっ……照れてねーよ！ わけわかんねーこと言うなよ、馬鹿、」

阿呆、馬鹿」

うわ。口、悪っ。馬鹿って2回言ったし。

「……」

まじまじと七緒の顔を眺める。

私は今、ツチノコやネッシー並みに、とんでもなく珍しいものを見ているのかもしれない。

七緒がこんなにわかりやすく照れるなんて！

「ぶっ」

「なに笑ってんだよ」

今までの七緒は、私との間に何があっても、どんなにからかわれ
ても、まっとうに赤くなつて照れることなんてなかったように思え
る。

いつも勝手に照れたり動揺したりするのは私の役目だったのだ。

それが今は、可愛らしく頬を染め、意味もなくジャージの襟を直
す七緒が、目の前にいる。

この鈍感野郎も、私の言葉でちゃんと照れたりするんだ。

なんだか嬉しい以上に、すごくおかしい。

「あー、愉快愉快」

「何が愉快だよ、ニヤニヤすんな。っていつか、頼むからそれ外し
てくれ」

もう耐えきれないといったふうの七緒が、つけっぱなしになつて
いる私の額の鉢巻きを指さす。

「ああ、忘れてた」

「忘れてた！？ ってことは俺が言わなきゃ家までそのまま帰つた
つてことか！？ 勝利鉢巻きのまま！？」

恐ろしい奴、と今度は青ざめた顔で七緒が言う。

「こんなもありますけど」

私がспанコールぎらぎらの必勝うちわを取り出すと、七緒は2、
3歩後ずさつた。

「うわ、こんなうちわとか実際に作っちゃう人初めて見た」

「ちよつとちよつと、引かないでよ」

「別に引いちやいないけど……よく作るなあと思って。結構手間か
かってんだろ、これ」

「そんなことないよ。本当は旗とか太鼓とか銅鑼も欲しかったくら
いだし」

恐らくそれらを使って応援される自分の姿を想像したのだろう、
七緒の目が急に虚ろになる。

「……………俺、もう心都を試合に呼ばないかも」

「え！？ いや今の軽い冗談なんだけど！ ジョーク、ジョーク！
本当は、半分くらい本気だった。だけど七緒がそこまで拒絶反応
を示すなら大人しくやめておこう。」

今日はあるなに「珍しいもの」を見せてもらえたんだから。
それだけでもう、お腹いっぱいだ。

7&1t;アメリカナイズと、首ったけ>

七緒に促されようやく鉢巻きを外した私は、それを紙袋に戻す際、ある違和感を感じた。

「……あれ？」

がさごそと音を立て、袋の中を探る。

そんな私を、七緒が不思議そうに見ていた。

「何してんの？」

「必勝うちわがない」

「うちわ？ 今持ってたじゃん」

「いや、もう1つ美里用に持ってきたんだけど、それがないの」

試合が始まる前はしっかり手に握っていたから もしかして、観客席に忘れてきてしまったのだろうか。

少し離れた美里の様子を伺うと、笑顔の彼女は未だ色めく柔道部員たちに囲まれていた（「栗原さん、次の試合も絶対見に来てくれよな！」「俺、栗原さんが応援してくれるなら死んでも勝つよ！」「もういつそうちの部のマネージャーになってくれ！」ってな具合だ）。

この状況で美里に近付くのは、かなりの至難の業だろう。

私は隣の七緒に告げた。

「多分、観客席だと思う。ちょっと戻って見て来るね」

「一緒に行く？」

「ううん、大丈夫。ちゃっちゃと行って取ってくるよ」

それだけ言うと、私は体育館に踵を返した。

もしあのうちわが今も館内にあるとしたら、誰かに発見されるのも時間の問題だ。

背中を冷や汗が伝うのを感じる。

七緒には見せなかったけど、実はあのうちの裏面には派手な赤文字で『lovely smile nanao』と書いてあるの

だ。制作時の深夜のテンションと、作業しているうちに何やらアイドルのライブグッズでも作っているような錯覚に陥ってしまったのが主な原因だった。

さすがにあれを他校に忘れ物として残していくのは恥ずかしすぎる。

だから私は、普段の歩調の何倍もの速度で観客席へ向かった。

「あつた……」

探し求めていたうちわは、私が先程まで座っていた観客席の辺りに落ちていた。

私はホッと息をついた。これでよそ様の学校に変な忘れ物を残さず帰ることができる。

体育館内は、試合後の撤収作業で賑わっていた。

50人はいそうな西有坂中学校の柔道部員たちがパイプ椅子を運んだり床を拭いたり、せつせと動いている。

「おっ、杉崎い！」

本日二度目となる豪快な呼びかけで振り返ると、そこには予想通り、山上がいた。

彼は柔道着のまま、両手に3つずつパイプ椅子を持っている。

「山上、お疲れ様」

「おう。何やってんだ？ もう有坂中の奴ら全員帰っただろ」

「ちよつと忘れ物しちゃって」

慌ててうちわを背後に隠す。

「片付け大変そうだね」

「まあな、会場校だからしょうがねえよ。その分こっちはギリギリまで練習できたわけだし」

私は、試合開始直前に見た山上の迫力満点の背負い投げを思い出した。

「山上、きつと次は試合で大活躍だね」

「ははは！ そうだといいんだけどな」

「いや、お世辞じゃなくて本当、そう思うよ」

山上はその場にパイプ椅子を降ろすと、

「杉崎！ お前はいい奴だなー！」

ガバツと私に抱きついてきた。

ああ、やっぱり彼は帰国子女だ。私は妙に納得した。

しかし気さくなのは良いけれど、ものの加減を知らないのはいかななものか。

力いっぱい抱きしめられ、私の呼吸は限界だった。

「ぐっ……や、山上、苦しいんだけど」

「ははは！ わりー、わりー」

そう言っって山上は私を離した。

「つい嬉しくてな。別に窒息死させるつもりはないんだけど」

「はあ」

よくよく考えれば私、男性にギュッとされたのなんて生まれて初めてだ。

少しびっくりしたけれど、相手がアメリカナイズの山上だからか妙なドキドキはなく、私は割と落ち着いていた。例えるならば、大きなゴールデンレトリバーに体当たりを食らった感じ？

「今日さ、杉崎、すげえ全力で東のこと応援してたよな」

「そ、そう？」

「おう。遠くから見てもわかったよ」

ひょい、と背後に回ると、山上は私が隠していたうちわを手にとった。

「こんなうちわまで作るなんて、なかなか出来ることじゃねーってバレていたのか。なんだか居心地が悪くなり、私は山上から視線を逸らした。」

「『lovely smile nanao』……うん。やっぱり尋常じゃねーよ」

「……山上、それ誉めてるの？ どん引きしてるの？」

「もちろん誉めてんだよ！」

力強く山上が言う。その表情はとても真剣で、嘘をついているようには見えない。

もしかして本当に、この「尋常じゃない」は誉め言葉なのだろうか。

「……じゃあ、ありがとう」

「おう」

山上は何かに納得したような口調で呟いた。

「そうか。やっぱり、杉崎は東が好きなんだな」

私は転倒した。

「どうした、杉崎。段差も何もねえぞ！」

「な、何！ いきなり何言うの！」

先程抱きつかれたときとは比べものにならないほど、私の心臓は

脈打っていた。

山上は私を助け起こすと、けろりとした表情で言う。

「見てりゃわかるよ。これで気付かないのなんて、相当鈍感な奴だけだって」

「……う」

その相当鈍感な奴っていうのが、他ならぬ七緒なんだけど。

「なあ、俺、間違ったこと言っていないよな？ 東が好きなんだから？」

山上がまっすぐ私を見つめ、問う。

どうして私の恋心は、こうもことごとく言い当てられてしまうのか。

「……うん」

私は頷いた。体中の血液が顔面に集中しているのが自分でもわかる。

出来ることなら今すぐ、体育館の隅に山積みになっているマットレスに潜り込みたい気分だ。

「そうか、やつぱり」

山上は腕組みをして言った。今までに見たことのないような、難しい顔をしている。

「困った」

「ん？ 何が？」

豪快で、突き抜けて明るくて、心と行動が直結しているようなこの人にも困ってしまうことなんてあるのか。

若干失礼な感想を抱きつつ、私は山上に尋ねた。

「悩みごと？」

「いや、本当に困ったよ。だって俺、杉崎のこと好きなのにさー」
さらりと言ったその一言。

「え？」

瞬間、私の頭は真っ白になった。

山上はひとり頷きながら、やけに真面目な顔で語る。

「だから、俺は5年前から杉崎が好きなのに、杉崎は東にめろめろ

なんだもん。まいっちゃうよな」
だもん、って。

一体この人は、何を言っているのだろうか？

「ええ？　ちよ、ちよっと……冗談だよね。だってあんた私のことめっちゃいじめてたじゃん」

「ああ、それはさー、」

平然とした顔で山上は言う。

「好きな子ほどいじめたくなるっていうじゃん？」

言葉を失う私に、山上はさらに続けた。

「正直5年間離れてて恋心もちよっと冷めかけてたけど……久しぶりに会ったら杉崎、なんか可愛くなってるし、東のことを血相変えて応援する姿を見て、すげー良いと思った。まあ再燃ってやつだな！」

当然ながら私は、異性に抱きしめられたこともなければ、可愛いと言われたことも愛の告白をされたこともない。

しかも相手は長年私の中で「いじめっ子ヤマザキ」としてインプットされていた、山上だ。

だから私の頭は真っ白で、何も考えられなくて、つまり　固まっ
ってしまった。

「……………えっと……………」

「どわ、ストップ！」

山上が両手を突き出し、私の言葉を制した。

「勢いでぶっちゃけちゃったけど、いま告白の返事聞いても断られるのはわかってるから！　だって杉崎は東に首ったけどもんな！」

「く、首ったけって……………」

「だから、今のは忘れる！　今後もつと俺のこと知って、5年間の空白をばっちり埋められたら、あらためてまた告白するからさ！」
言っていることが滅茶苦茶だ。忘れろと言われても、こんな衝撃

的な出来事を簡単に忘れられるはずがないじゃないか。

「あ、やべえ。顧問が睨んでる。ちつと喋りすぎたな」

山上が再びパイプ椅子に手をかける。片腕に3つずつ、両腕合わせ6つにもなるのに、彼はいとも軽々とそれを持ち上げた。

「んじゃ、杉崎、またな！」

普段の彼だったらきつと別れ際にバシバシ肩を叩くか、激しすぎる握手をしてくるところだろう。しかし今は両手が塞がっている。

だからなのか、山上はその大柄な外見からは想像もつかないほどチャーミングな表情で右目をつむった。

こんなに上手にウインクする人を、私は初めて見た。

やっぱりこれも、いわゆるひとつのアメリカナイズ？

私は山上の後ろ姿を見送りながら、衝撃を受けすぎて痺れてしまった頭で、そんなことを思った。

8 & 1 t ; 5年目の恋と、待ちぶせ & g t ;

人間、予想外の事実を告げられたときの反応というのは様々だ。

冷静に受け止める人、慌てふためいてしまう人、なんとか平静を保とうと無理する人……十人十色だろう。

私の場合はまさに呆然、啞然、びっくり仰天といった感じで、思考が停止してしまったものだから、「うう」とか「ええ」とか「え」とか、情けない声を出すことしかできなかった。

もつと言つと、完全に体中の力が抜けた。

もつともつと言つと、腕の力を失って右手に握っていた物をうっかり取り落としたことにも気付かなかつた。

そして、そのままふらふらと体育館を去ってしまったのだ。

「で。結局、驚きすぎてあの恥ずかしいうちわを西有坂中の体育館に忘れてきちゃったってこと？」

呆れたように美里が言う。

私は深くうなだれた。

「……………そういうことです……………」

西有坂での試合から一晩が過ぎた。

朝一番の教室には窓から太陽が差し込み、だからといって暑すぎるわけでもなく、ぽかぽかの春の陽気がとても良い感じ。

そんな麗らかな空気の中、私は教室の隅で美里からの事情聴取を受けている。

昨日、体育館での一件の後、美里たちの元へ戻った私はずっと上の空で、とてもじゃないけど誰かとまともな会話が出来る状態ではなかった。

だから今朝、ずっと不審に思っていたらしい美里に尋ねられ、私は全てを打ち明けた。

山上から予想外の告白をされたこと、それを忘れろと言われたこと、うちわの裏側には『lovely smile nanao』と書かれていたこと、そのうちわを他校に置いてきてしまったこと

1日経った今だからこそ、多少は落ち着いて話せたのだ。

美里は私の言葉に、黙って耳を傾けてくれた（うちわの裏側の話の時だけ、妙に生温かい表情をしていたけど）。

「まあ、忘れちゃったものはしょうがないじゃないの。幸いうちわには心都の名前は入ってないんだし。恥をかくのは『lovely smile nanao』くんだけよ」

さらりと、美里。

彼女は時に、可愛い顔でとんでもなくドライなことを言う。

しかしそんなあっさりとした意見は、色々なことが起こりすぎて既に頭がパンク状態の私にとってかなり有り難い。

「そっか、それもそうだよね」

私はひとまず、うちの件を忘れることにした（許せ、七緒）。

「それにしても、まさか5年前の『いじめっ子ヤマザキ』くんが心都に告白するなんてねえ」

「……うん。昔あんなにイビられてたのに」

「まあ、好きな子をいじめるのは小学生男子の典型的なパターンだものね。で、これからどうするの？」

美里の問いかけの意味がわからず、私は間抜けな声をあげてしまった。

「へ？ 何が？」

「だから、今後の山上くんとの関係よ。告白を受け入れるの？ 断るの？」

美里が身を乗り出す。

「いや、とりあえずびっくりはしたけど……、結局山上は『今は忘れる』って言ったから、ここは一旦なかったことに、」

「ちよっと、なに寝言いつてんのよ。そんなの無理に決まってるでしょ！ 一度愛の告白をされてるのに！」

そう言う美里は、キラッキラの目で明らかに楽しそうな顔をしていた。

彼女の瞳がこうやって輝くのは、何か「すごく素敵！」なことを考えているときだ。

「美里……なんかちよっと楽しんでる？」

「もちろん」

あまりにも躊躇なく肯定され、私はがっくりうなだれた。

わかつちやいたけど美里さんよ、せめて、もう少し隠してほしかった。

さつきは嬉しかった美里の『あっさり』が今度は胸に軽く刺さる。そんな私を見た美里は、顔の横で小さく右手を振った。

「あらやだ。私は別に好奇心とか冷やかして面白がってるわけじゃないのよ。むしろ、逆逆」

「逆？」

美里が今までよりも少し真剣な表情になる。そして教室内をきよるきよる見回すと、私に顔を近づけ小声でささやいた。

「あのね、心都は5年間ずーっと追いかける恋をしてきたでしょ。しかも相手はあの、鈍感で柔道のことしか頭がない七緒くん」

「どうやら今さっきの動きは、教室に七緒がいないことを確認するためのものだったらしい。」

「うん、まあ」

「だからこうやって想われて、好きだー可愛いー愛してるーって言われて、追われる恋をしてみてもいいんじゃないかなって思うのよ。もちろん結局どうするのか決めるのは心都だし、私だっつてずっと応援してたんだから七緒くんとうまくいってほしいわよ。でも、やっぱり1番は心都に幸せになってほしいから」

美里はまっすぐに私を見ていた。その真剣な目は、私を本気で思いやってくれていることを明白に語っていた。

「美里……」

あまりにも感動的な親友の言葉に、私は鼻をすすり上げる。

美里が、私のことをこんなにも真剣に心配してくれていたなんて。彼女は優しい声で続けた。

「つまりね、七緒くんに盲目的になるのも結構だけど……、ちょっとくらいは追われる恋も視野に入れてみたら？　ってことよ」

正直なところ、山上からの告白が全く嬉しくなかったと言えば、嘘になる。

思えば私は今まで周りの男から、おせっかいおばさんだのジャージ女だのボサボサ頭だの変質者だの、あんまりな扱いを受けてきた人生だった（いや、大半は自分の日頃の行いのせいなんだけどね）。だから山上が、何の間違いか知らないが「可愛い」だなんて言うてくれて、告白までしてくれて、驚くのと同時にやっぱり嬉しかった。

なんだか初めて、ちゃんと「女の子」になれたような気がしたのだ。

「だけど」

「うん……。ありがとう、美里」

私は心からの感謝を込め、美里に笑いかけた。

「確かに七緒は並外れて鈍感で、柔道馬鹿で、気の利いた台詞もなくて、ホワイトデーのお返しのセンスも変で、顔なんかこっちの気が狂いそうなほどの美少女フェイスだけど……。やっぱり私」

「俺がなんだって？」

突如、背後から聞き慣れた声。

驚いて振り返るとそこにはしかめっ面の七緒が、通学鞆を持ったまま立っていた。

「な、なななな n a n a o ! いつからそこに！」

「『な』多いし慌てすぎだししかもローマ字かよ」

ひと通りつつこみを終えた七緒が、私をじろりと睨む。

「今日は朝練ないから今来たんだよ。そしたら誰かさんが朝っぱらから馬鹿とかセンスないとか、俺の悪口べらべら並べ立ててるからよー」

「ち、違うよ！ 悪口じゃなくて、むしろ……」

「は？ むしろ？」

「……」

きょとん顔の七緒が私を見やる。

「いやいやいや。」

「言えるかよ。」

「う、うるさいなあ、もう！ 男のくせに陰口ごときでカリカリしちゃってさ」

「うっわ、出たよ、逆ギレ。陰険な奴ってやだよなー」

「ふん、ちっちゃい男！」

「ちっちゃい！？ おい聞き捨てならねーな。俺、今によきによき背伸びてるって言ってるんだろ！」

「そういう意味じゃない！ 器の話だよ、馬鹿！」

「馬鹿って言ったほうが馬鹿なんですーう！」

美里が「あーあ」と呆れたようにため息を吐く。

結局、本鈴が鳴り先生が教室に入ってくるまで、私と七緒の小競り合いは続いた。

……おかしいな。

私はさっきの美里の質問を経て、七緒への強い恋心を再確認したはず。なのに。

何が悲しくて、朝から好きな人とレベルの低すぎる口喧嘩を繰り返さなくちゃならないのだ。

* * *

「よっ、杉崎い！」

相変わらずの豪快な呼び声。

私は驚いて、歩みを止めた。

「山上……？」

今さっき5時間目の授業を終え、本日は部活もないので下校しようとして校門をくぐった私。

そこへ現れたのは、制服姿の山上だった。

「な、何してんの？」

「決まってるだろ、杉崎を待ってたんだよ」

あっけらかんと山上は言った。

こんな人の出入りが激しい場所で、他校の制服を着た山上（しかも中学生とは思えないほどデカい）が突っ立っていたら、さぞかし人目を引くことだろう。現に今もちらほらいる下校中の生徒が、なんだなんだと私たちのやり取りに視線を送っている。

「こゝ、こゝでずっと待ってたの？」

「おう。学校の違いなんてぶっ飛ばせ！ 今から放課後デートだ！」
笑顔の山上は、私の手を掴んで走り出した。

割とハチャメチャな人だなあとは、再会したときから思っていたけれど。

今のこの人は本当に理解不能、一体何を言っているんだろう？

9 & 1 t ; 未来予想と、ハウリング & g t ;

急に「デートだ！」なんて言われて。

手なんか引つ張られて。

そういうことに全く免疫のない私が笑顔で軽くかわす業を持ち合わせているはずもなく、急な出来事に対する不安と、やっぱり単純な性格ゆえ感じてしまう少しのときめきがごちゃまぜになってしまい、ああ私どうしてこんな気持ちなのかしら、私が好きなのは七緒だけよと心で呟いて、瞬間的にちよつとこのヒロイン的ポジションに酔っているフシがある自分に気付いてげんなりして、更に今朝の七緒との喧嘩も思い出してイラツとして、そういうしている間にも山上はぐいぐい私の手を引いているから、もうただただ動揺するのみで、これからどこに行くのだろうとそればかり気になって……

とにかく、私はドキドキしていた。

しかし。

*
*
*
*

町のメインストリートにあるカラオケ屋。

その一室に、私と山上はいた。

「そしてー！ 輝ーく！ ウルトラソウツー！！」

決して広いとはいえない部屋に、私の大声が響き渡る。

うおお、と拳を突き上げ、嬉しそうな顔の山上。

ここに来て1時間、ずっとこんな感じだ。

山上に半ば無理矢理連れられカラオケへ入ったものの、彼は私に歌わせるばかりで自分では全くマイクを持つとうとしない。

しかもリクエストするのは絶叫系の曲ばかり。

「ね、ねえ、山上……そろそろ止めにしない？」

酷使され続けた私の喉は、もうとつくに限界だ。

しかし山上は、私の提案を笑顔で却下した。

「なーに言っただよ！ まだまだこれからだろうが！」

「じゃあ山上も何か歌おうよ」

「いや、俺はいいんだよ。今日は杉崎の大声を聞くために来たんだから」

そう言つと山上は電子パネルのリモコンを手にし、再び曲を選び始めた。

……本当に一体何がしたいんだろう、この人は。

昨日の告白から丸1日、再び会った瞬間、なぜかカラオケに直行だし。特に上手くもない私の歌を1時間も聞きっぱなしだし。

全くもって理解不能。さっきの葛藤とドキドキを返せ。

私の心の眩きが聞こえたのか、山上はひょいと顔を上げる。

「俺、声が大きい女の子が好きなんだよなー！」

「……は？」

不快感を隠せず目を細める私に対し、彼はどこまでも穏やかな顔で言った。

「杉崎さ、昨日の試合のときも、普通の人だったら恥ずかしくても出せないような大声と気合いで東を応援してただろ。それを見て、俺は5年前の気持ちを思い出したんだ……『杉崎が好きだ』って」

うんうん、と自分自身で納得するように山上。その周りにはキラキラとした空気が漂っている。

何これ？

「俺は杉崎の、恥じらいを持たずなりふり構わず大声で叫べるところが大好きで、最高に可愛いと思ってるんだ！」

「……」

「だから今日は元気な歌声が……ってというか、鼓膜がびりびりするような大声が聞きたいんだ」

「……そ、そうっすか」

なんだか良い雰囲気でする山上にうつかり流されそうにはならなかった。さっきからどう考えても誉められている気がしない。やっぱりこの人、ちよつと変だわ。

声が大きいいから好き。そう言われて手放して大喜びする女子は一体どのくらいいるのだろうか？

正直言っつて複雑な気持ちだ。

山上がおもむろにマイクを持つ。

「だから！」

と、彼はなぜかマイクを通して言った。拡声された言葉が部屋に響く。

「俺はこれからもガンガン積極的にいくからな！」

「え？」

「ガンガンいって杉崎との5年間の空白を埋めて、それでまたあらためて告白キィン」

後半、別に彼はアラレちゃん物真似をしたわけではない。

山上の大声に、マイクがハウリングを起こしたのだ。

それでもかろうじて、言おうとしたことは伝わった。昨日と全く同じ宣言だ。

だけど「またあらためて告白する」なんて言葉自体が、もう既に告白のような気がしなくてもない。

「あの……山上、そのことだけど、やっぱり私……」

「はいストープ！」

山上の大声に、再びマイクがキーンとハウリングを起こした。耳、痛い。

「どうせ『七緒が好きだから気持ちには答えられない』とか言うんだろ。だからこそ時間をくれって言ってんだよ」

山上は豪快に笑うと、言った。

「しばらく経ったらきつと、東より俺のこと大好きになってる」

なってる、なってる、なってる………とエコー全開（近頃のカラオケマイクのクオリティーはすごい）の山上の言葉。それはまるで一種の呪文みたいに、私の頭の中で繰り返される。

何なんだ、その自信満々の未来予想。

私が七緒への気持ちをなくして、山上に恋をする　なんて。

「山上、何言ってる……」

「本気だからな。さて、歌おうぜ」

山上がりモコンを操作して、曲を入力した。

「よし、杉崎！　次は『蠟人形の館』だ！」

「……それ私が歌うの？」

「杉崎ならいけるだろ！」

有り得ない。

本当に、有り得ないよ。

放課後デート（という名のカラオケ地獄）の、翌日。

私は朝の通学路を歩きながら悶々と考えていた。

結局昨日、山上による絶叫系ソングのリクエストは夜まで続いた。彼曰く、私の魅力は「恥じらいを持たずなりふり構わず大声で叫ぶるところ」だそうで。

女子としては複雑すぎる心境だけど、それより何より考えるべき問題は、山上が「これからもガンガン行く」と予告してきたことだ。私は当然その気持ちには答えられない。だけど彼はそんなこと全く気にしない様子で、あまつさえ「もうすぐ俺を好きになる」なんて呪文めいた言葉まで言ったりする。

もちろんその通りになるとは到底思えないけど、一体これからどうすればいいのだろう。

私だって5年間もしつこく七緒が好きなんだ。こんなに真つすぐ気持ちを伝えてくれる山上を、うとましく思うことなんて、できない。

だからといって、はい喜んでと山上の気持ちを受けることも

「……」

そこまで考えて、私はため息を吐いた。

なんだ、これ。

本当に私の人生か？

悩みすぎて頭はパンク状態。昨日からずっと堂々めぐりだ。

自分がこんなことに悩む日が来るとは、夢にも思わなかった。

だつてずっと、おばさんや変態や男兄弟と称される女子力低めな私だったのに。

誰かに想われるなんて（いくら妙な理由とはいえ）、本当に縁のない出来事だったのに。

「よ、心都」

と、聞き慣れたのん気な声と共に肩を叩いてきたのは、もちろん七緒。

私にとつての通学路は、大部分が彼にとつてもそうなのだ。

私はゆっくり振り返り、口を開く。

「…………おはよう、七緒」

「うわ、何その声!？」

私の第一声を聞いた七緒が、信じられないような顔でのけぞる。

七緒が驚くのも無理はない。絶叫だらけのカラオケから一晩明け、私の喉はボロボロ、声はガラガラだった。

だからなるべく喋りたくなかったのに、まさか朝一で会ってしまふなんて。ご近所さんが今日ばかりは徒となる。

「ちよつと声枯れちゃって…………」

「枯れたつてレベルか？ 完全おっさんボイスじゃん!」

前言撤回。男兄弟なんてまだ可愛いものだ。ついに私、「おっさん」とまで言われる領域に達してしまつたらしい。

「何それ、失礼な！ せめておばさんとか…………」

「ほら、こつやつて目え閉じるとまるで、酒飲みで赤ら顔で気のいい中年のおっさんと喋ってるみたいな錯覚に…………」

そう言いながら七緒は私に向き合い、目を閉じた。

長い睫毛が滑らかな頬に影を落とし、まるで天使みたい。

そのたいそう可愛らしい顔の真ん中より少し上、つまり額に、私は重めのデコピンを打ち込んだ。

「いってえ！ 何すんだよ」

「ぴちぴち10代女子をそんな細かな設定付きでおっさん呼ばわりするほうが悪い」

私は悶絶する七緒を尻目に、さっさと歩き出した。

清らかな天使顔を見せられたところで、悪いけど今は全く「きゅん」とか「どきん」はしない。

悩みは尽きないし、喉は痛いし、好きな人にはおっさん呼ばわりだし。

私の心は若干やさぐれていた。

そりゃ多少の暴力行為に出たくもなる。

隣に追いついた七緒はわざとらしさ満点の悲壮感漂った声を上げながら、額をさすった。

「あー、脳が揺れる。頭が割れる」

「大袈裟」

七緒は言い返そうと口を開いたけど、突如、何か思い出したように「あ」と手を打った。

「そういえばさ、昨日校門のところに山上が来てたって本当？」

「え？」

「昨日、柔道部の奴らが『こないだの試合のときにいた西有坂のマツチヨマンが来てる』って言ってたから。まあ俺は見えてないけど、西有坂のマツチヨっていつたらほぼ間違いなく山上だろ」

私は動揺していた。

山上が待っていたのは私で、そのあと手を引っ張られて2人で「放課後デート」に行ったことは、絶対に言えない。言いたくない。

「さ、さあ……私も会ってないからわかんないけど。他の友達にも会いに来たんじゃない？ ほら、山上5年前まではこの辺に住んでたんだから、その頃の知り合いも多いんだよ、きっと」

知らんぷりを決め込む私の言葉を、どうやら七緒は信じてくれたらしい。納得しきった顔で頷いた。

「あー、なるほど。そうだったのかもな」

「うんうん、そうそう」

我ながら上手く誤魔化せた。

山上とのあれこれは、七緒にだけは知られたくない。

だって、鈍感で善良な幼馴染みの彼のことだ。恐らく間違った優しさ炸裂で「山上いい奴だもんな。応援するよ」だなんて輝く笑顔で言ってくれてしまうことは、悲しいかな、私には容易に想像でき

る。想像だけでもこんなに辛いのに、実際にそんな応援をされてしまった日にはきつと私、どん底まで落ち込んでしまっただけで立ち直れないと思う。

「こないだ心都が言っただけで『小学生時代の山上はいじめっ子だった』って、やっぱり俺はピンと来ないんだよな」

七緒は難しい顔で腕を組んだ。

「あいつ、今みたく底抜けに明るくて気さくってわけでもなかったけど、別に性格悪くもなかったよ。……やっぱり、いじわるは心都に対してだけだった説が有力だと思うな」

「……」

「お前、当時なんか山上の気に障るよーなことしたんじゃないの？」
ひひ、といたずらっぽく七緒が笑う。

「ただど私は笑えない。」

「……そ、そうかな？」

先日の山上の『好きな子ほどいじめたくなるっていうじゃん？』という台詞がエコー付きで私の頭を占領する。

それを打ち消そうと首を振った瞬間、喉がひりりと痛み、私は激しく咳き込んだ。

「ごほつごほ！　ぐえほつ」

「ええ？　なんだよ、大丈夫か？　そんなおっさんみたいな咳して

……」

「う、るさいつ。おっさん言うな！　ごほつ」

七緒はまじまじと私を見つめた。

「そんなになるまで喉痛めるなんて、本当にどうしたんだよ。風邪？」

「……んん。まあ、そんな感じ」

曖昧に頷く。

「しょうがねーな、これやるよ」

と、七緒が私に差し出したのは、ピンクに白のドット柄の包装紙に包まれた、小さな飴玉ひとつ。よく見ると『いちごミルク』とプ

リントされている。

「いちごミルクって、七緒……これまた期待を裏切らず可愛い
ものを……」

「別に俺の趣味じゃねーよ。なんか昨日知らない1年女子たちがく
れたんだけど、そのまま制服のポケットに入れっぱなしにして忘れ
てた」

何とはなしに七緒が言ったその言葉に、私は愕然とした。

「い、1年女子……？」

「うん。なんか最近、やたらたくさん1年生の女子が柔道部の見学
に来るんだよな。マネージャー希望らしいんだけど、練習中キャー
キャーうるさいから浮ついて駄目だって、主将が断ってた」

「へ、へえ……」

「まあ確かに練習中、急に名前叫ばれたりしてちょっと困るときも
あるんだけど……。でも華も何も無い柔道部の応援してくれるなん
て、珍しい子たちもいるもんだよな」

のん気な顔で言うこの男、絶対にわかっていない。

キャーキャーうるさいって、名前叫ぶって、飴玉くれるって。

そんなの、七緒目当てで練習を見に行っている以外の何者で
もないじゃないか。

ショッキングな事実にも、わなわなと指先の震えが止まらない。

「……」

しかし私はいまいち腑に落ちなかった。

美少女と見紛うような七緒の顔は、後輩や同級生から愛でられこ
そすれ恋愛対象にはなりにくいらしく、これまで彼の熱烈な支持層
はほとんどが先輩女子だった。

だから3年生となった今、少しはこの恋愛サバイバルも落ち着いて
たかなあと思っていたのだけだ。

「何、飴いらぬの？ いちごミルク嫌いだったけ？」

不思議そうに訊ねる七緒の顔を、私はじっと見つめた。

どうやら、私の読みは大きく外れていたらしい。

「いや、好きです、ありがとうございます、いただきます……」
普段は美味しいはずの飴が、今は全く味がしない。

七緒が後輩女子にモテ始めるだなんて！

「七緒くん、1年の女の子たちから結構人気よ。知らなかったの？」
何を今更、といった表情で美里が告げる。

私は思わずよろめいて、教室の壁に手をついた。

「嘘……そんなの初耳」

「フアンの数も多いみたいよ。私の部活の後輩たちも騒いでたわ。
てつきり、心都は知ってるけど特に気にしてないもんだとばかり」

そんな余裕のある女っぷりを発揮できるはずがない。裏付けされた衝撃的真相は、私の心を激しく揺さぶった。

「今、当の七緒くんは？」

「あ、朝練中……」

「じゃあ今頃また体育館ではファンたちがキヤーキヤー見学してるかもねえ」

ズシンと来る、美里の一言。

私は白目をむきそうになるのを必死で堪え、なんとか発狂手前で踏みとどまった。

「信じられない！ って顔してるわね、心都」

「だ、だって信じらんないもん！ なんで……？」

「なんでって、七緒くんがモテてるのなんて今に始まったことじゃないでしょ。何そんなに初々しく動揺してるのよ」

確かに私の幼馴染みは、そのとてつもなく可愛いお顔を持って生まれた宿命で、幼い頃からたくさんの女子とたまにいる特殊な男子にモテていた。

しかし先ほど言ったように、その支持層の大半は年上のお姉さん方。

七緒が後輩の女の子に黄色い声をあげられていたなんて記憶は、15年間の付き合いでほぼ皆無だ。

「七緒が年下にモテるなんて、異常事態だよ！ ずっと先輩女子に
かわいいーかわいいー言われてたんだよ？」

あら、と美里が意外そうに目を見開く。

「七緒くん、多分1年生の間では『可愛い』なんて全然言われてないわよ」

「え……」

美里は形の良い大きな瞳で私を覗き込み、少し笑って言った。

「かつこいいい！ つて、1年生たちは大騒ぎしてるみたいよ」

「……かつこいいい？」

その瞬間の不思議な気持ちは、ちょっと説明し難い。

ジェラシーとは限りなく似ているようで、少し違う。

七緒がかつこいいいことなんて、私、ずっと前からわかっていた。

周りは七緒を見ては「可愛い可愛い」と目をハートにしている、

もちろん私も奴の美少女っぷりなんか痛いほど認識していたけれど。

「かつこいいい」七緒を知っていて、そんな彼が好きなのは、自分だけだと思っていた。

わがままで身勝手に自信過剰で、我ながら呆れるよ。

七緒が遠くに行ってしまうようで。

私の知らない七緒になってしまうようで。

とにかく、なんだか無性に寂しかったのだ。

「……かつこいい……?」

私は驚きを隠せず、呟く。

七緒が後輩女子からモテ始めた。しかも『可愛い』ではなく、『かつこいい』という言葉と共に。

こんなの15年間の経験と教訓をもつても全く予想外の出来事だ。

ゆえに、私はそれをなかなか上手く消化することができない。

「心都、白目むいてるけど大丈夫?」

「だ、大丈夫……」

「ねえ、どうしてそんなに驚くのよ」

目の前の美里は私を見て、小首を傾げた。

「……だって、七緒だよ? ちっちゃな頃から可愛くて、12で七不思議と呼ばれてさ、天使みたいに輝いて、触るもの皆キョンとさせた……」

「言つとくけどその替え歌、ゴロ悪いし全然上手くないからね」

「だ、だから、とにかく、七緒が『可愛い』じゃなくて『かつこいい』って言われることなんて今まで全くなかったから……ちよっと動揺するっていうか……」

しどろもどろになってしまふ。私自身、今の気持ちに整理がつけられないからだ。

美里は指を顎に当て、何やら思惑を巡らせるように目を細めた。

「でも私も、最近ちよっと七緒くん変わったなーって思うわ。前より美少女美少女してなくなったとゆうか……」

「そう?」

「いまいちピンとこない。」

「心都はきつと、近すぎてわからないんじゃない? ほら、久しぶりに会った親戚の子の成長には気付くけど、自分の家のハムスター

が大きくなってるのってなかなか実感できないじゃない」

「う、うーん……」

果たしてその例えは適切なのか。

私の煮え切らない態度に、ついに美里はぎろりと目を光らせた。

「もつっ！ 腑に落ちないのは心都の勝手だけど、ぼやぼやしてるとどっかの1年女子に七緒くんとられちゃうよ！ いいの!？」

「そ、それは嫌だ!」

思わず背筋を伸ばし、答える。

「じゃあ頑張りなさいよ！ マツチヨに誘われてふらふらついてってカラオケで声枯らしてる場合じゃないでしょ!」

「ご、ごもつともな意見です……」

ああ、耳が痛い。

春は恋の季節というけれど、4月になって桜が咲いても、私の恋は依然足踏み状態だった。

七緒との関係はいまいち変わっていないような気がするし、小学生並みのちっちゃな口喧嘩ばかり。しかも本日発覚した事実、新たな支持層を加えての恋愛サバイバル状態はまだまだ続くみたいだし。

最近、少し真面目に考えてしまう。

果たしてこの恋に、ちゃんとハッピーエンドがくることはあるのかな、と。

私の5年間の片思いの前には、10年間の幼馴染みの期間がある。そしてこの間に形成された、私たちの色恋沙汰いっさいなしのフラックすぎる関係。不本意だけど七緒の言葉を借りるなら、「男兄弟」と表現することもできる。は、あまりにも強力だ。

だから私はなかなか「女の子」になれないし、七緒との仲も発展しない。

こんな私が恋を実らせることなんて、できるのだろうか？

「……」

つつい、暗い顔でため息を吐いてしまう。

「ねえ心都。来月の修学旅行、せっかく七緒くんと同じ班なんだから。これ、進展する大チャンスよ」

美里が私を励ますように言った。

「そっか、もうすぐ修学旅行か……」

そう。来月に予定されている2泊3日の北海道修学旅行。その行動班を決めるホームルームが、先日あった。男女混合4〜5人グループを自由に組むというアバウトなやり方だったのだけど、美里の計らいと田辺の熱烈なアタックにより（この2人の利害が一致するなんて珍しいことだ）、私と美里、七緒と田辺の4人班が結成されたのだ。

「北海道の雄大な自然の中で、心都与七緒くんがくつついてくれたら最高だわ」

「はは。そんな夢みたいことがあったら……本当に夢みたいだよ」
滅茶苦茶な日本語になってしまった。

何も私は今すぐに、一刻も早く、七緒と恋人になりたいなんて言わない。

でも、たとえ「いつか」の遠い話だとしても、そんな夢みたいな日が、本当に、本当に、くるのだろうか。

心の中で自問した。
もちろんそうなってみせるわ！ と強気で前向きな答えは、今は出せない。

……ああ、なんだか私、ネガティブな気持ちに押されてしまっている。

だって七緒いわく、今日の私は「酒飲みで赤ら顔で気のいい中年のおっさん」だ（実はこれ、けっこう尾を引いていたりする。しつこいのかしら、私）。

おっさんと中3少年の恋なんて、完全アウトでしょ？

そもそもそんな2人の恋、誰が見たい？

少なくとも私は見たくないぞ。

私の周りに漂うどす黒オーラを吹き飛ばすように、目の前の親友

はキラキラとした表情で語る。

「粉雪舞うロマンチックな街並みを歩きながら、心都がクチンと女の子らしいくしゃみをかませば、きつと七緒くんは『寒い？』って聞くでしょうから、そこで心都は『私、末端冷え性なの……』と上目遣いで可愛く答えて、七緒くんは心都の手をそつと取り、『本当だ、手が冷たい』『お願い七緒、この手をずつと離さないで』『心都、それってどういう意味だ？』『言葉通りの意味よ。一生あなたと手を繋いでいたい』そう言った瞬間、街並みが一齐にライトアップ！ 2人を優しく照らす……！」

「……」
「完璧じゃない！ ね、頑張りなさいよ心都！ 合い言葉は『末端冷え性』よ！」

美里は本当に友情に厚く、姉のように頼もしく、優しい。こんなにも力強く背中を押してくれる彼女には、いくら頭を下げても足りないくらい心から感謝している。

だから私は、5月の北海道は雪なんか全く降っていないし春らんまんだよ！ とは、とてもじゃないけど言い出せなかった。

「よっ、杉崎い！」

もはや毎度お馴染みとなってしまうた、豪快に私の名字を呼ぶその声が、耳に届く。

と同時に、声の主は後ろから両手を回し、私の目をふさいだ。大きな手があっという間に視界を遮る。

即席で出来た暗闇の中、私は自分でも驚くほど冷静な気持ちで背後の彼に語りかけた。

「あのさ……それ、『だーれだ？』とか言いながらやらないと意味ないから」

「あっ、そうか！」

と、勢い良く両手を外したのは、もちろん山上だ。

「あちゃー。俺、うっかりしてたな！」

「『杉崎い！』って地声で叫びながらじゃあ、名乗ってるようなもんだよ」

「そうだよな、いやー失敗失敗。次から気をつける！」

あははと山上が頭をかいて笑い、私もつられて吹き出し、あらあらなんだか和やかムード

「っじゃなくて！ 山上！ こんな所で何してんの？」

我に返って問い詰める。

私の家の近所の公園前。学校の行き帰りに必ず通るこの場所を、部活後のちよっぴり疲れた体で歩いていたら、夕闇の中に山上がいた。それも「だーれだ未遂」のおまけつきで、だ。

山上はあっけらかんと答えた。

「何、って……こないだと同じこと聞くんだな、杉崎。お前を待つ

てたんだよ」

「え……な、何用？」

「用事という用事はないけど、会いに来た。強いて言うなら『ガンガン積極的に行くため』に来た」

どうしてこの人は、少しの恥ずかし気もなくこういう類のことが言えるんだらう。

さすがにもうアメリカナイズを理由にはできない。明らかにこれは山上の性格によるものだ。

逆に、なんだか恥ずかしくなってしまったのは私のほうだった。

さつき目隠しされたときは平然としていられたのに、いや、今まで何度も山上からは割とストレートな言葉を言われて、それで啞然とすることはあってもいちいちもじもじすることはなく過ごせてきたはずなのに。

この夕闇の中、不意打ちの『会いに来た』の一言は思ったよりパンチがあった。

私はほんの少し顔が赤くなるのを感じ、慌てて俯いた。

「この辺に私の家があるってどうして知ってるの？」

「小学生のとき、この公園で一度だけ東と毛虫探して遊んだことがあるんだ」

私は、幼い頃の彼らにそんな交友関係があったことに驚いた。やはり七緒が言うように、山上が私以外にはさほど「嫌な奴」ではなかったというのは本当らしい。

それにしても毛虫探して、一体何が楽しいのだらう。小学生男子の、謎。

「多分杉崎もこの辺に住んでんじゃないかと思って、ダメ元で待ってみた。こないだ杉崎が『校門で待ち伏せはちよつとほんとマジで勘弁してくださいマジで無理ツスすいません』って顔してたからさ。だからここで待ってたんだけど、結構すぐに会えて驚いた。すげー嬉しかった」

山上は笑顔でそう言った。

あらそうアタシも嬉しいわ、と笑顔を返せるはずもなく、私はぎこちなく固まってしまった。

なぜだろう。

今日はなんだかいつも以上に、どんな言葉をどんな顔して言えばいいのか、よくわからない。

少しの、沈黙。

それを破ったのは、予想外すぎる間抜けな声。

「あれ、心都……と、山上じゃん」

そう言って少し意外そうに目を丸くするのは、部活帰りの見慣れたジャージ姿で、公園前を通りかかった七緒だった。

12&1t:3人と、共鳴の後に>

またしても、うつかりしていた。

何度も言うように、私にとっての通学路は大部分が七緒にとってもそうなのだ。

つまり、部活帰りのこの時間に彼がここを通るのも至極当然であるわけで。

決してこれは、運命の悪戯や神様の意地悪なんかではないわけで、そう、頭ではわかっているはずなのに。やっぱり私は茫然自失で、自分の運命と天上の神様を呪わずにはいられなかった。

「よお、東！」

山上は相手が誰であろうと変わらない大声で、七緒に明るく笑いかけた。

七緒も軽く片手をあげ、それに答える。

「よ、先週ぶり。……こんなところで何してんの？」

と、不思議そうな表情の七緒。

つい先日数年ぶりの再会を果たしたばかりの、違う学校に通う私と山上が、こんな夕闇の時間にご近所の公園に佇んでいるなんて、確かに普通に考えればあまり自然なことではない。

どっしりよ。どっしりよ。

山上が私を待っていてくれたこと。その目的は『ガンガン積極的に行くため』であること。

こんなの、とてもじゃないけど七緒には言えない。

私がまごまごと迷っているうちに、隣の山上はあっさりと口を開く。

「愛を語ってた」

私はその場に卒倒した。

動揺なんてもんじゃない、脳を引つかき回されて一部の記憶がなくなっただんじやないかってくらいに激しい衝撃を受けた。

何言ってるんだ、このマッチョ！ 私は心で絶叫した。

ぶ、と七緒が可笑しそうに吹き出す。

「何ずっこけてんだよ、心都」

「……こけてない」

倒れたんだよ馬鹿。

ああ、ついつい殺伐とした口調になる。更に今日は複数人からお墨付きの「おっさんボイス」に加え、転倒後の低姿勢のため必要以上ギョリと人を睨みつける格好になってしまい、女子力は最低だから七緒は「うわぁ」と顔をしかめた。

「……こんな奴と愛を語ろうだなんて、山上も強者だなー」

「こんな奴で悪かったね。しかも愛なんか全くもって1ミリも語ってないから。ちょっと帰り道に雑談してただけだから」

ドスの利き過ぎてしまった私の否定を、山上は豪快に笑い飛ばす。

「そうだったな！ 悪い、間違えた。『語ってた』んじやなくて『これから語ろうとしてる』んだよ」

またしても、卒倒。

違う。違うよ山上。私はそんな微妙な日本語の訂正をしたいんじゃない。

しかし今度こそ打ちのめされた私は言葉がスムーズに出ずに、地

べたに震える膝をついたまま口をパクパクさせるしかなかった。

七緒は今度は吹き出したりしなかった。ただ、やたら真面目な顔で山上をまじまじと見つめる。

「面白い奴だな、お前って……」

「お、サンキュー東」

どうやら七緒は、山上の『愛を語る』発言を、とても高度なアメリカンジョークか何かだと思っただらしい。

普段はもやもやさせられっぱなしの七緒の鈍感加減が、今回ばかりは有り難い。

鈍感、万歳。

人知れずガッツポーズを決めた後、なんだか少し虚しくなった。

「それにしても懐かしいよなー、この公園。昔ここで毛虫探して遊んだよな、東」

「そうだった？」

「なんだ、忘れたのかよ」

ははは、と再び山上が豪快に笑った。

この人は本当になんでも笑い飛ばしてしまうな。たまに尊敬にも似た羨ましさを感じる。

「わりー、わりー。次会うときまでに思い出しくからさ」

そう言つと七緒は、「じゃーな」の形でひょいと片手をあげた。

「おう、またな東」

ああ、行つちやうんだな。

当然だ。彼は単に部活帰りにここを通りかかったただけなのだ。この場に留まる義理も理由もない。

七緒。

ここはいつちよ私も便乗して、一緒に帰つちやおうかな。

この場所で愛を語るのも毛虫を探すのも、今私がすべきことじゃないっていうのは確かだから。

山上には失礼だけど、私は歩き出す七緒の背中を見つめ、そんなことをほんの少し考える。

「ただどやっぱり何も言えなくて、ただ黙ってその場に立ち尽くした。」

「あ、心都」

突如、振り返った七緒の視線が、しっかりと私だけをとらえた。

ほんの少し、呼吸が苦しくなる。

私はそれを悟られないように、なるべく普段通りの顔と声を作るよう努めた。

「なに？」

春といつても、やっぱり日が暮れ始めると少し涼しい。ジャージ姿の七緒は両手をポケットに突っ込んでいた。

「あんま遅くなると爽子さんが心配するぞ」

ああ、やっぱり。

普段と何も変わらない。

「……おー」

「おっとこらしー返事」

と笑い、七緒は去っていった。

そう。普段と何も変わらない。

七緒の口調は「幼馴染み」に対するものだ。

私はもちろんエスパージャーじゃないし、人一倍感受性が豊かってわけでもない。なのに、どうしてこういう時はいつも、ハッキリとわかっってしまうんだろう。

「ふうん」

山上が腕を組んだ。七緒の消えた夕闇の先と、私の顔を交互に見ながら。

「何？」

「東の奴、やきもちとか嫉妬とか、そういうの一切なしかーと思っ
てさ」

「何言ってるの。当たり前じゃん」

私が男の子と2人でいたからって、七緒がやきもちなんか焼くわけじゃないじゃないか。

「ふうん」

山上はもう一度呟いた。

「本当にただの幼馴染みなんだな」

「……山上、今日本当は私の傷をえぐりにきたの？」

「まさか。ただ、杉崎と東が秘かに両思いだったらやべえな」って思ってたけど、そんな心配も全くなさそうで安心したよ」

「……」

どう考えても、最近ちよっぴり停滞気味である私の恋心の傷をえぐって塩を塗りに来たようにしか思えない。

ははは、と山上は明るく笑った。

「デリカシーないだろ？ 俺」

「うん、かなりね」

「でもなあ、誰かを好きになったらデリカシーだのなんだのなんて気にしてらんねえんだ。そういうもんだろ。な」

山上がいつになく割と真面目なトーンで言うものだから、私は何も答えられずに黙り込んだ。

わけわからん、とぼっさり言い切れないのが自分でもとても嫌だ。だんだんとわかってきた。

5年も片思いを続けている私は、きっと誰よりも山上の気持ちに共感できてしまう。

「だから無神経なの承知で言うけど、こんなの作っても意味ないと思うぞ」

そう言っって山上が自らの通学鞆から取り出したのは、先日私が西有坂中に忘れてきた必勝うちわだ。

「これ……拾ってくれたの？」

「ああ、本当は昨日もこれを返すために有坂中に行っただけだな。なんか杉崎の顔見たら悔しくなって出すのやめた」

悔しい？

訳が分からずうちわを受け取る私に、山上は笑顔のまま言った。

「だって裏面には『lovely smile nanao』だし

さ。このまま捨てちまおつかなーなんて魔が差したりもしたな。

でももう色々確信できたから、返す」

「確信つて、何」

一呼吸おいた山上は、私の目を見据え言う。

「なあ杉崎、東への恋は諦めた方がいいんじゃないか」

「は？」

「十何年間一緒にいてさ、ずっと『幼馴染み』で、さっきみたいな状況で何のやきもちも焼かない……これってほぼ望み0だろ」

山上の真っ直ぐな瞳からは、とても悪意なんか感じられない。

ただただ私のために、ありのままの事実を述べているだけ。それがわかるからこそ、私は余計に胸が重くなった。

右手のうちわの柄を、痛いくらいに握りしめる。

「……別にこれは、望みがあるとかないとかじゃなくて……私が勝手に応援してるだけだから」

もうすっかり日は沈んでしまった。公園の蛍光灯が、辺りに不定な光を放っている。

「応援するなら、可愛い顔の細腕柔道部員より 俺にしとけば？」

そう。私は、きっと誰よりも山上の気持ちに共感できてしま
う。

だけど、納得はできない。

首を縦に振ることはできない。

気がついたら右手のうちわで山上の肩を思いつきりぶつ叩いてい
た。

所詮しょぼい紙のうちわだし相手はマッチョだ。もちろん痛みや
ダメージは全くないだろうけど、それでも山上は驚いたように目を
見開いた。

「それ……武器だったのか」

「そうだよ！」

自分でも何を言っているのか、よくわからない。

ただ想像よりもだいぶ大きな声が出てしまい、もう止まらない。

頭が熱い。

私はなぜか涙が出そうになるのを堪えながら、山上新き合った。

「訂正しとくけど、七緒はただ顔が可愛いだけの柔道部員じゃない

！確かに山上新きべればだいぶ華奢だし男にもナンパされちゃったりするけどっ！」

でも。

「七緒は、絶対絶対かっこいい！」

どこその1年生女子たちにとって、わかることだよ。

私はボウルの生クリームを泡立てながら、激しく後悔していた。ただ今、週に3日の部活動中。本日のメニューは、外はさっくり中はとろーりのシュークリーム。

楽しい楽しいひとときにも関わらず、私の頭を占めているのは昨日の出来事だ。

いくら頭に血が上がったとはいえ、山上を力いっぱいうちわで殴ってしまっなんて。自分でもどうかしていたとしか思えない。

重めのため息を吐く。

どうしてあれほど感情的になってしまったのだろう。

山上に、七緒への恋は諦めろと言われたから？

違う。

七緒はただの美少女顔の幼馴染みではなくて、私にとって最高に「かっこいい」男の子なんだということ、なぜだかあの瞬間、伝えずにはいられなかったからだ。

私はそのあと全速力ダッシュで家まで帰るとい見事な言い逃げを果たしてしまったため、山上がどんな反応をしたのかはわからない。ただ、わざわざ私を待っていてくれた人とろくに話もせずあんな別れ方をすることはなかったと思う。自分の愚かさを悔やんだ。

道具で叩いて叫んで逃走だなんて、これじゃ通り魔と大して変わらないじゃないか。

生クリームを泡立てる手にもついつい力が入り、ガチャンガチャンと激しい音を立てる。

「今日は気合い入ってるね」と部活仲間に関心され、私はへらりと曖昧に笑うことしかできなかった。

* * * *

これは、デジャブってやつだろうか。

東七緒は目の前に佇む人物を発見した瞬間、そう思った。
なぜならここは自宅付近の公園前で、時刻は部活終わりの夕暮れ時。

そしてその小さな公園内にいたのは、

「よっ、東！」

笑顔で手を振る山上だったからだ。

これは昨日と全く同じシチュエーション。

唯一の相違点といえば、昨日はこの場にいた心都が、今日はいないということだ。

「山上……お前、2日連続でこんなとこで何してんだよ」

日の落ちかけたひと気のない公園で、山上は1人ブランコに座っ

ていた。大柄で無骨な彼とカラフルなキッズ向け遊具の組み合わせは、なんともシユールだ。

七緒が近寄ると、山上は隣のブランコを指し示した。

「ま、座れよ」

「……はあ」

七緒はわけもわからず腰をおろした。

がちゃん、とブランコの鎖が音を立てる。この乗り物は、もうとつくに対象年齢をすぎた自分には窮屈すぎた。座面部分も小さいし、足はすぐ地に着いてしまうので、逆にバランスを取るのが難しい。

よくこいつ平気な顔して座っていられるな、と七緒は自分よりだいぶ図体の大きな隣の人物を見つめ、妙に感心した。

山上はそんな七緒の視線に気付いてか、そのまま目を逸らさずに言った。

「今日はずつと東を待ってたんだ」

不覚にも鳥肌が立った。

「……俺、男と愛を語る趣味はないけど」

もちろん女性と語ったことだって一度もないのだが。

はは！ と山上は豪快に笑うと、首を横に振った。

「何言つてんだ、ちげえよ！ 俺だってそんな趣味はない。東に渡したい物があったのと、あと、ちよつと話がしたくてな」

思わず怪訝な表情になる七緒に山上が差し出してきたのは、一枚のうちのわだった。それも、そんじょそこらのうちのわではない。

「これは……」

中央には力強い毛筆で『必勝』と書かれ、うちわ全体をきらめくスパンコールが縁取っているという派手すぎる逸品だ。

非常に見覚えがある。

「……こないだ心都が持ってきてた応援グッズじゃん」

「おう。昨日東が帰った後、杉崎にこれでぶつ叩かれて、去り際に落としてった。悪いけど東から返しといてくれよ」

「ぶつ叩かれた？ このうちのわで？」

七緒は驚いて聞き返した。

確かにあの幼馴染みはたまに少々暴力的な面を見せることもあるが、いくらなんでも数年ぶりに再会したばかりの友人を、こんな公共の場で道具を使って殴りつけるなんて。

しかも殴られた張本人の山上は笑顔でそれを語っている、とは。何やら得体の知れない恐怖を感じる。

「俺、怒らせたみたいだなー！ いやぁ失敗、失敗」

山上は頭をかきかき言う。言葉とは裏腹に悪びれる様子はほとんどなく、あまり「失敗」とは思っていないようだった。

「何、喧嘩？」

「喧嘩つつーか、まあ意見の食い違いだな」

「ふーん」

それで暴力に発展したのなら結局は「喧嘩」ではないのか。微妙な疑問を抱きつつ、七緒はとりあえず隣の彼を励ますことにした（もつとも、ハナからあまりへこんではいないようだったが）。

「大丈夫だよ。心都、喧嘩しても次の日にはケロッとしてることも多いし」

「へえ、ケロッとなあ。でも昨日は相当ヒートアップしてたから、どうだろうな」

そう言いながらも山上はやはりそれほど心配していなさそうな様子だった。

「東は今までに杉崎と喧嘩なんかたくさんしてるんだろ」

「まあ、割と」

山上が興味深そうに身を乗り出す。

「例えばどんなことで？」

そんなに期待されても、他人が聞いて面白いようなエピソードは特にない。

15年間、七緒と心都の喧嘩はいつだって些細なことが原因だった。

「例えば……小さい頃の話だけど、ゲームでズルしたとかしないと

か、おやつケーキの毒乗ってるほうをどっちが食うかとか。あと俺のほう誕生日4ヶ月早いからってちょいちょい威張ってたら心都がキレたり、逆に、昔は心都のほう背が高かったからそのことで偉そうな態度とられて俺がキレたり。最近のだと、朝っぱらからセクスないとか女顔だとか悪口言われて喧嘩したな」

山上は面白そうに七緒の昔話を聞いていた。

「へーえ。色々争いが絶えないんだな。でも基本的には仲良いよなお前ら」

そう直球で尋ねられると少々頷きづらいが、かといって『仲が悪い』わけでは、決してない。

「まあ、幼馴染みだし……仲良いとか悪いとかの次元じゃないかも」「そうか」

山上は納得したように笑った。やはり心都との喧嘩についてくよくよ思い悩んではいけないようだ。それは良いことだと思う。

しかし、彼はこの話をするためだけにわざわざ自分を待っていたのだろうか？

七緒は疑問に思いながら、何の気なしに右手のうちわを裏返す。

『lovely smile nanao』の文字が目飛び込み、ブランコから落下しそうになった。

表面の『必勝』だけでも恥ずかしさでかなりのダメージを負ったのに、この悪ノリの集大成のような裏面の言葉はそんなの比にならないほどの破壊力だ。

心都は試合中これを振り回して応援していたのだ。げんなりと沈む気持ちを抱え、七緒はうちわを通学鞆にしまった。心都のこういつたセクスはいつもよくわからない。

そんな七緒の一連の様子を見ていた山上は、ふっと楽しそうに笑った。

そして、そのままの笑顔で言った。

「実は俺、杉崎のことが好きなんだ」

七緒は一瞬、相手が何を言っているのか理解できなかった。

「『出先の午後は寿司なんだ』?」

「ははは、全っ然違うぞ東!」

山上は七緒の間違いを笑い飛ばすと、今度は先程よりもゆっくりとした口調で告げた。

「俺、5年前から杉崎が好きで、杉崎も今そのこと知ってて、まだ両思いじゃないけど、ゆくゆくはカップルになりたいから、今猛烈アタックしてるんだ」

なんとも簡潔で無駄のない状況報告。

「……マ、マジで?」

七緒はとにかく驚いた。

今までほとんど男つ気のなかった幼馴染みがモテているなんて。そしてそれと同時に、頭の中で色々なことの辻褄が合った。

幼い頃心都に対してだけ意地悪だった山上、校門での待ち伏せ、昨日の『愛を語る』発言……全ては恋心ゆえの出来事だったのだ。

「お前らがただの幼馴染みだっことはよくわかってるけど、とりあえず東には報告しとこうと思って」

「……へー」

衝撃のあまり、つい間の抜けた声になる。

「……なあ、それ聞いて俺どうすりゃいいわけ。協力しろってことか?」

もしそうなら、申し訳ないがそれは出来ない。なぜなら、心都は以前「好きな人がいる」と発言していたから。

片思いは個人の自由だが、外野の自分が余計な操作を働くことは明らかにルール違反だろう。七緒はそう思っていた。

しかし予想とは裏腹に、山上は軽く笑ってそれを否定した。

「協力なんていらねえよ。ただ、今現在、東が杉崎に一番距離が近いじゃん。だからまあ一応報告っつーかプチ宣戦布告っつーか」

「せんせんふこく?」

ますます訳が分からなかった。

そんなものを布告される覚えは全くない。

「こいつわけわかんねえ、って顔だな、東」

「だってそう思ってるし」

「だよなあ」

勢いよくブランコから立ち上がった山上は、あらためて七緒に向き直った。

「俺が勝手に伝えたかっただけだから。東に知つといてほしかったんだ」

「……わりい。今回ばかりは本当に心からわけわからん、本っ当に本心だった。今日の山上との会話は、わからないことが多すぎる。山上は楽しそうに頷くと、片手をあげた。

「気にすんな。じゃ、俺はそろそろ帰る」

「は？」

一方的に言いたいことだけ言われても、非常に困る。

「おい、山上、ちょっと」

七緒の思いが通じたのか、歩き出した山上の足がぴたりと止まった。

「そつだ、東」

おもむろに、山上が振り返る。

「昨日言ってたこと　毛虫のこと、思い出したか？」

少しのあいだ宙を見て、やがて七緒は答えた。

「悪いけど、全く」

昨日ここで交わした冗談まじりの約束　『この公園で山上と毛虫を探して遊んだという幼い頃の出来事を、次に彼に会うまでに思いつく』　は実現できなかった。あのあと必死で記憶を辿ったが、自分はそのときのことをすっかり忘れてしまったらしく、断片的にさえ思い出せなかったのだ。

山上は快活に笑った。

「忘れっぽいな、東！　再会したときも最初なかなか俺のこと思い出せなかっただろ」

「昔のこととか、細かく覚えてるほうじゃないんだよ」

「ふうん」

小首を傾げた山上は、何やら考え込むように顎に手を当てた。そしてこの日初めて笑顔を引っ込め、真面目な表情で七緒をじっと見据える。

「なあ、東。俺は、杉崎がうちわにデコレーションしてる時間も、東の試合の応援してる時間も、東と喧嘩してる時間も、今後は全部俺のこと考える時間に変わったらいいなと思ってる」

「……つまり？」

「もう今年で15なんだし、男女の仲良し幼馴染みとかそういうのは卒業していい時期だ。それよりお互い恋なり部活なりに励もうぜ」
穏やかな口調ではあるが、今までよりもだいぶ明確な宣戦布告だった。

幼馴染みの自分と心都の過ごす時間を、山上は勿体ないと感じている。もっと言ってしまえば、『その時間を俺にくれ！』ってとこだろうか。

七緒は意識を終えると、あらためて驚きを噛み締めた。

杉崎心都の幼馴染みという自分の肩書きの1つが、まさかこんなふうになんかの格気の対象となる日が来るなんて夢にも思わなかったことだ。

「……山上、あのさ、」

「そんだけだ！ 呼び止めて悪かった！ じゃーな！」

そう言っただけで山上は、ひらりと手を振りながら、なんとも上手に、チャーミングに片目をつぶった。

「えええ……？」

呆気にとられる七緒をよそに、ずんずん遠くなる山上の背中。夕闇の中、一方的な報告の末に取り残された七緒は、強く強く思った。

ウィンクは、なしだろ。

いくらアメリカ帰りといえども、大の男がこんな状況で、普通の
感覚なら有り得ないだろ。
うん。ないない。

思わず喉がごくりと鳴った。

世の中には色んな人間がいるのだ。

世界の広さをあらためて実感し、気が遠くなるような、東七緒
4歳の春であった。

私は甘い物が好きだけど、さすがに大皿に積まれた十数個ものシュークリームをあらためて目の前にしたら、尻込みせずにはいられなかった。

ましてや今は夕食後。満腹虫垂がある程度満たされた状態でのこの光景は、正直、見ていただけで胸焼けを起こしそうだ。

「すごい量ねえ」

食卓中央にどんと置かれた私の部活動の成果を眺め、お母さんが感嘆の声をあげる。

「ちよつと今日は作りすぎちゃって……」

「部員の子たちで分けなかったの？」

「分けたよ。分けた結果の1人分が、これ」

「あらまあ。本当にたくさん作ったのね」

正確に言えば、他の部員よりは若干多く私がお持ち帰りしている。なぜならこの大量のシュークリーム、私が勢いに任せてクリームを生産しすぎてしまったことが原因なのだ。

「生菓子だから早く食べないといけないけど……」

我が家は両親共に甘い物好きだし私もそうだけど、いくらなんでもこの量は一晩で食べきれそうにない。ただでさえ今、これ以上体重を増やしたくなくて節制中だというのに。

しかし料理部員の意地として、作ったものは残したくない（単に食い意地が張っているだけ、ではない。断じて！）。

ああ、これ全部食べたなら、何日分のおやつに匹敵するのかな。私今度こそ美里に豚と呼ばれるようになってしまふのかな。うずたかいシュータワーを眺めながら眩暈を起こしそうになる。

そのとき、ポンとお母さんが手を打った。

「東家におすそわけしてきたら？ 明美も七ちゃんも甘い物好きじゃない」

目の前に道が開けた気がした。

「それいい。お母さんナイスアイディア！」

「うふふ。でしょー？」

やっぱり甘い物を無理して食べるなんて間違っている。シュークリームたちも、無理無理胃に押し込まれるより、二家族に美味しくいただかれるほうが幸せに違いない。

「よしっ」

善は急げ。私は手頃なランチボックスにシュークリームを詰められるだけ詰めると、徒歩5分圏内の幼馴染みの家へと向かった。

がちやりと自宅のドアを開けた七緒は、私を見るなり、驚いたように目を丸くした。

「こんばんは」

「……家出？」

開口一番それかよ。

「違うよ。家出少女はもっと大荷物でしょうが」

「……そっか」

「そっだよ」

「……うん」

「……」

「……」

あれ？

なんだろう。この沈黙、距離感、テンポの悪さ。いつもとは明らかに違う。

七緒はどことなくバツが悪そうに、斜め下あたりで目線を泳がせている。

なんだ、これ。

「……と、とにかく家出じゃないから。ね」

沈黙に耐えかねた私は、馬鹿みたいに先ほどと同じことを繰り返してしまった。

「だってこんな時間に心都がわざわざ一人で来るなんて滅多にないじゃん」

と、すっかり暗くなった空を仰ぎながら七緒。

ただ今の時刻、8時過ぎ。確かに幼馴染みが「あーそびーましよー」と訪ねてくる時間ではない。

私はランチボックスを差し出した。

「東家におすそわけしに来た。よかったら食べて」

七緒は中身を開けると、またしても驚きの表情を浮かべた。

「うわ、こんなにいいの？」

「どうぞどうぞ。……っっていうか今日の部活で作りすぎちゃって絶対食べきれないから、むしろもらってくれると有り難いよ」

「そっか。サンキュ」

七緒が満面の笑みを浮かべる。

ああ、やっぱりいつもの七緒だ。普段と何も変わらない。

さっきの違和感はきつと私の気にしすぎによるものだったのだろう。恋する乙女は些細なことにもついつい敏感になってしまっからいけない（反省、反省）。

「……あ」

と、七緒が小さく呟いた。

「何」

「……いや、ちょっと。30秒待ってて」

そう言って家の中へと入っていった。

一体どうしたというのだろう。

私は「待て」をくらった犬のように、開け放たれたドアの前で所在なげに突っ立っていた。

その間に顔を出してきたのは、赤茶のロングヘアがお似合いの東家の母、明美さん。

「お、心都。来てたんだ」

「こんばんは」

「夕食後に密会なんて、ついにアベック成立か？」

「いやいや、成立してないない」

しかもアベックって。古い、古すぎるよ。そしてインターホン鳴らして玄関から堂々訪問したんじゃ密会になってないよ。

明美さん相手にそんな細かい突っ込みはキリがないので、私は苦笑いとともになんか飲み込んだ。

それにしても、明美さんといううちの母親といい、やっぱりこれは……バれてしまっているんだろうか。私の恋心。

昔からこういうノリの多かった明美さんだからこそ私は今も笑って流せる。しかし確信はないけど、何となく最近、色々と見透かされている気がするのだ。

突っ掛けサンダル（なかなかお目にかかれないような、濃い赤紫色）で玄関へ出てきた明美さんは、軽く笑って言う。

「んじゃ、うちの馬鹿息子が学校に忘れ物か」

「ううん。今日は部活でシュークリーム作ったから持ってきて……」

「だ、れ、が、馬鹿息子だよ」

ぬおん、と最高に不機嫌そうな顔で七緒が現れた。明美さんは全く悪びれることなく、ぐしゃぐしゃと乱暴に七緒の頭をかき回す。

「お前以外に誰がいんだよ馬鹿息子！。玄関先で女の子待たせるなんて最低だぞ」

「馬鹿息子言うな！」

七緒はそれを振り払うと、明美さんを睨みつけた。

「ちよつと心都に渡す物があつて、部屋まで取りに行つてたんだよ」
「え？」

私に？

確かに七緒は右手に持った何かを背後に隠している。

誕生日でもなければホワイトデーでもないこの時期に七緒から物をもらえるなんて、全く身に覚えがない。予期せぬ事態に、胸の鼓動が速くなる。

明美さんが私の肩に手を置いた。

「おい心都、むやみやたらにプレゼントしてくる男は危険だぞ。物で釣るだけ釣つといてそこに真心はないからな」

「プレゼントじゃねーよ！ もう、放つとけ！ 話がややこしくなるから！」

と、青筋を立てる七緒は、まるで飼主に逆らつてキャンキャンうるさいチワワみたいだ。

七緒はドアの内側に明美さんを押しやると、一切を遮断するようにバタリと閉めた。

閉まり際に、「なんだ、やっぱり密会か。生意気だなー」と明美さんの声が聞こえた。ひよつとしたら明美さん、『密会』の意味を根本的に間違えているのだろうか？

屋外に出た私と七緒は、再び妙な沈黙に包まれた。

七緒は叫び疲れて肩で息をしている。

「……えつと、七緒、渡したいものつて？」

「ああ、これ」

七緒の右手には、見覚えありまくりの派手なうちわ。

「えっ！？ なんでこれを七緒が！ ……つていうか裏！ 裏面見た！？」

軽いパニックを起こす私に対して、七緒は至極あっさり頷いた。

「見た。すげー悪ノリ全開だった」

ああ、『lovely smile nanao』がついに本人

の目に触れてしまったのか。

怒むべきは、制作時の深夜の異常なハイテンション。もう恥ずか
しさを消えてしまいたい。

「で、どうしてこれをnanaoが……？」

「その表記やめろよ。今日の帰り道、山上が届けてくれた。昨
日これで山上のことぶん殴ったんだって？」

呆れたように、七緒が目を細める。畜生、喋ったな山上め。

「ぶ……ぶん殴ったってというか、軽くハタいたってというか……」

「まー想像つくけど」

うつかりしていた。私はあのと時頭に血が上りすぎて、うちわを
置き去りに帰ってしまったことにも気付かなかったのだ。

「……なんかすみません、色々と」

頭を下げつつ、うちわを受け取る。

「あとで山上にも謝っとけよ。下手したらお前、傷害沙汰だぞ」

「だからそんな強く殴ってないって」

か弱い女子中学生の腕力を一体何だと思っっているんだ。

しかしそれに対する怒り以上に私の胸を占めていたのは、ある種
の嫌な予感だ。

「あのさあ七緒……」

「ん？」

情けなくも、声が震える。できればこれは悪い夢であってほしい。
「……や、山上、他には何か言ってた……？ 私が叩いたこと以外

に何か……」

例えば私の片思いの相手とか、山上の恋愛事情とか。

七緒は何やら考え込むように、少し目を細めて黙り込んだ。

それは不思議なことに、私の全く知らない表情に見えた。

通い慣れた東家の庭先で、まさかこれほど恐怖に打ちひしがれる日が来るとは夢にも思わなかった。

七緒はじつと黙り込んだまま、何も答えてくれない。

私はもうこの静けさが怖くて怖くて、少しでも気を抜けば発狂して叫びまくってしまいそうだった。

10秒ほどの沈黙の後、七緒はゆっくりと私に視線を合わせると、落ち着いた口調で言った。

「山上、何も言っただけだった」

「ほ、本当……？」

「うん。うちわで叩かれたこと以外は、何も」

じゃあ今の間は何か？

そう問いかけたかったけど、そんなにキツパリ頷かれたら、私は何も言えない。

またしても妙な沈黙が辺りを包みかけた。のだが。

それをすぐに破ったのは、大きな音をたてドアを開けた明美さんだった。

「おい、七！ お前ちゃんと心都を家まで送ってけよ」

その突然の提案を、私は慌てて打ち消した。

「え？ いいよ、大丈夫だよ。まだ8時台だし、家まで5分もかからないんだから……」

そもそも今までだって七緒の家から帰るときに送ってもらったことなんか一度もない。

明美さんは大きく頭を振った。

「ダメダメ！ 春は変質者が多いんだぞ！ 心都も最近めつきり垢抜けてきたからこんな時間にふらふら歩いてたら危険だろ！ といいわけだから七、心都を家まで送って、ついでにコンビニで徐光液と寒天ゼリー買ってこい」

そう言つて明美さんは、自分の息子に向かつて革製の長財布を投げ渡した。

「……それがメインの目的かよ」

七緒はげんなりした表情で呟いた。

なるほど、と私も苦笑してしまった。

なんだかんだ言いながらも、財布を持って歩き出す七緒はやっぱり優しい（且つ、良き息子だ）と思う。

私は明美さんに「お邪魔しました」を言つと、七緒の隣に並んだ。

「……なんか悪いねー。わざわざ出掛けさせちゃつて」

ひと気のない夜道を歩きながら、七緒に詫びる。

「別に。あの人の自己中には慣れてるし」

「寒天ゼリー、どうしても今すぐ欲しかったんだろうね」

「あー、最近ダイエットもどきみたいなことしてるらしいから」

「寒天ダイエット？ つて効果あるのかな。もしあるならちよつとかなり興味深いんだけど」

「わかんねーけど、でもうちの母親の場合、寒天とか食つても夕食の量そのものは減らしてないから意味ない気がする」

「ああ、なんかすごい明美さんらしいね。つてというか明美さんスリムだからダイエットなんか必要ない気もするけど」

先程のような沈黙が嫌で、私はいつもの2割増お喋りになつていった。

しかし意外にも淀みなく会話は続く。

「なんか夏に爽子さんと南のほうに旅行行く計画立ててるらしい。」

それで海入るから痩せたいんだつて」

「旅行かあ、いいな。しかし水着を着こなすために痩せようだななんて、やっぱり明美さんまだまだ若いね」

「っーかあの人、水着うんぬんの前に極度のカナヅチなんだけどな」

「あはは。　　そういや、もうすぐ私たちも修学旅行だね」

しんと静かな辺りに、私たちの声と足音だけが響く。

七緒の家と私の家の間の、5分足らずの道。幼い頃から飽きるほ

ど通ったはずなのに、今日はなんだか、いつもと違う道みたいだ。
「俺、北海道つてあんまり詳しくないけどどの辺が名所なんだろ」
「私も全然知らない……どっかのラベンダー畑とか、どっかのでっかい時計台とか？」

「……ちゃんと調べとかなないと班行動のとき大変そうだな」
「でも私たちと美里と田辺だもん。こないだの遊園地みたいに、きつと楽しいよ」

「田辺が暴走しなきゃいいけど」

「有り得そうだよねー。そのときは七緒、とめてよね」

「火がついた田辺をとめるのは、栗原以外の人間には無理だろ。同じ班に決定したときだって舞い上がって浮かれまくって『田辺くんうるさい』って一蹴されてたし」

「気の毒に……」

だからだと喋っているうちに、私の家へと着いた。

私は七緒を見据え、笑顔で言う。

「送ってくれてありがとう。買い出し頑張って」

「おー。……じゃあな」

「……うん。また明日」

ああ、やっぱり。

やっぱり変だ。

我が家の玄関前で七緒の背中を見送りながら、私は思った。

だって七緒、帰り道で一度も目を合わせてくれなかった。

私、何かしてしまったんだろうか？

知らず知らずのうちに、彼の態度をここまでぎこちなくさせるような失態を犯してしまっただろうか？

考えても考えても、わからない。

春の夜道で、うちわを両手にぎゅっと抱きしめ、私はしばらく自宅に入ることができなかった。

翌朝。

「だーれだ！」

その声と共に私の視界が塞がれた。私は前回同様とても落ち着いた気持ちのまま、背後から手を回す彼を呼ぶ。

「……山上」

「うお！ よくわかったな！」

朝一だろぅがなんだろぅが、彼は元気だ。私の目から両手を話すと、快活に笑った。

「こないだ学習した通り『だーれだ』方式でやったのに」
だって、声色がまんま山上だったし。そもそもこれって、ガチで
背後の犯人を言い当てるバトルじゃなくて、恋人や親密な友人同士
がただのじゃれ合いのためにやる可愛い遊びのはず。

しかしそんな反論を繰り返すこともせず、私は相変わらず落ち着
いた。というか、どんより沈んだ気持ちだった。

「……山上、こんな所にいていいの？」

ここは有坂中学校の正門から300メートルも離れていない大通
り、いわゆる真正銘のスクールゾーン。登校時間真っ只中の今、
隣の中学の学ランに身を包んだ大柄な彼は例によってこの場でかな
り浮いていたけれど、もはやそれはどうでもいい。

そんなことより、隣校といっても歩いて15分程かかる西有坂中
に通う彼が、今こんな場所で油を売っていてはおそらく遅刻確定だ
ろう。

私の心配をよそに、山上は明るく笑った。

「大丈夫、大丈夫。ダッシュすればギリギリ遅刻にはならないから。
それよりどうしても朝から杉崎と話したくなってるさ」

まさかまた『愛を語る』んじゃないだろうな。

私の若干の警戒を汲み取ったのか、山上はさらりとした口調で言
う。

「こないだは怒らせて悪かったな。そんなつもりじゃなかったんだ
けどさ」

「……私も叩いてごめんね。うちわ、届けてくれてありがとう……」
自分でも思っていたより、絶望的で悲しげな声になってしまった。
山上はきよとした表情で私を覗き込む。

「なんだ、なんかへこんでんのか？」

「……へこんでないよ」

嘘だ。

私は心に重度のダメージを負っていた。理由はもちろん、昨日の
七緒のおかしな態度。一晩じっくり考えてみたけれど、どうしてあ

んなことになってしまったのか、答えはやっぱり出なかった。

つつい重苦しいため息を吐きそうになって、なんとか飲み込む。そのとき、山上がポンと手を打った。

「もしかして東と何かあった？」

飲み込んだため息が喉に引っかかって、むせた。

「ごほっ」

「あ、やっぱり凶星なんだな」

この勘の鋭さは、一体何なのだろう。

私は少しの恐ろしさを感じ、山上から視線を逸らさずにいられたかった。

「……大したことないよ。いつもの喧嘩」

これも、嘘。

いつものくだらない喧嘩とは違って、お互いぎゃーぎゃー言い合うこともなければ、明確な理由もわからない。

ただ自分自身に言い聞かせるように、私はそう言い訳してみた説明をした。

「ふうん」

山上は眉間にしわを寄せ、腕組みをする。

「俺のせいかな……」

「ん？ 何？」

難しい顔で何事かぼつりと呟いた山上の声は、よく聞こえなかった。いつも異様に声の大きな彼にしては珍しい。

もう一度問い直そうとした瞬間、山上が自分の腕時計を見た。

「やべ。そろそろ行かなきゃ」

彼はあまり焦っていなさそうな口調でそう言うと、私に向かって右手を上げる。

「じゃーな、杉崎。また会いに来るから」

私がお話おとす前に、颯爽と去っていった。

やはりああ見えて、少しは急いでいたらしい。遅刻しかけるくらいなら、わざわざ待ち伏せすることはないのに。なんでこんな変な時

間の使い方をするんだろ。と、ここまで考えて、「もしかして私に謝るためだけに朝っぱらから訪ねてきた？」と気付いた。

「……」

本当に、良い奴なんだけどな。

再会したとき私、『今の山上とならかなり良いお友達になれそう』なんて1人確信していたんだ。

七緒と山上も仲良さそうにしていたし、元道場メイト3人、5年を経てきつと平和に友情を育めると思っていた、あのときは。

つい最近のことなのに、なんだか遠い昔のようだ。

だってあの日はまだ、七緒と普通に笑って話せていた。それが当たり前のことだった。

七緒。

喧嘩なんかたくさんしたけど、こんなのは初めてだよ。

本当にわけがわからない。

私は山上を見送った体勢のまま、ぼんやりとその場に立ち尽くした。

「杉崎先輩？」

遠慮がちに声をかけられ振り返ると、そこには通学中の華ちゃんがいた。

「華ちゃん、おはよう」

「おはようございます。……どうしたんですか？　こんな所で立ち止まって」

華ちゃんは私の元へ近寄ると、首を傾げる。

「ちよつとボーっとしちゃって。寝不足かな」

はは、と曖昧に笑って誤魔化する。できればこの優しく素直な良い子に心配をかけたくない。

しかし華ちゃんは不安そうに顔を曇らせた。

「本当に大丈夫ですか？　だって、なんか今にも泣きそうな顔しますよ……？」

華ちゃんの優しく温かい声。

私の胸に染みて、色々なものを溶かしていく。

「くっ……」

食いしばった歯の隙間から、つつい男らしい嗚咽のような声が漏れる。

「え！　だ、大丈夫ですか？　涙ぐんでますよ先輩！」

「うう、大丈夫。ごめん」

「ごしごしと拳で目元をこすり、私はなんとか気持ちを落ち着かせた。

「一体どうしたんですか？」

「……七緒が、わけわかんなくて、なんかよそよそしくて……」

「え？」

私は校門から下駄箱へ行く道のりで、華ちゃんにここ最近の奇妙な状況を打ち明けた。

華ちゃんは真剣な表情でそれを聞いてくれたけど、話が中盤を過ぎた辺りから何やら頬がほんのり上気し、瞳がきらきら輝きだした。

そして全てを話し終え、それぞれの学年の下駄箱で靴を履き替えまた合流した瞬間、彼女はおもむろに言った。

「それって……東先輩の態度がおかしい理由って、杉崎先輩がその山上さんと仲が良いことに対するやきもちじゃないんですかっ？」

華ちゃんにしては珍しく、少し興奮気味な様子。

「きつとそうですよ、先輩っ」

しかし対する私は、彼女に申し訳ないくらいに、その説には食いつくことができなかった。

「……いや、それは……ないな。うん、ないない」

右手を振って否定する。

悲しいことに、七緒のやきもちが有り得ないことは私が誰より知っている。だって、私と山上が2人つきりだった現場を目撃した直後の七緒の態度はまだいつも通り、なんとものん気なものだったし。山上の「愛を語る」発言を「おもしろい」と評していたくらいだし。

それに何より、もし七緒が妬いてくれるだなんてそんな胸きゅんな状況が訪れるのなら、それは数ヶ月前、「好きな人がいる」と私がカミングアウトしたときだったはずだ。

以上のことからこの「七緒やきもち説」、私は見事なまでに完璧に、自信を持って否定することができる。……ああ、なんだか空しくなってきた。

華ちゃんは心から残念そうに肩を落とした。

「そうですか……」

「……ご、ごめん」

思わず、ご期待に添えなかったことを謝ってしまう。

「でもやきもちじゃないとすると、何でしょうね？」

「うーん……」

2人そろって首を捻っても、結局始業5分前のチャイムが鳴るまで答えは出なかった。

2階の階段の踊り場でくすぶっていた私たちは、ここからそれぞれの教室　華ちゃんは4階、私はこのまま2階　へ向かうことになる。

真相は相変わらず闇の中だけど、華ちゃんに悩みを聞いてもらって少し回復した。

「ありがとうね、華ちゃん。……愚痴っちゃってごめん」

「いえ、杉崎先輩の力になれるんなら私、話くらいいくらでも聞きます」

今度こそ号泣しそうになり、必死で堪える。

やっぱり彼女は天使だ。

別れ際、私は先程から気になっていたことを今更ながら聞いてみた。

「それにしても、今日はやけに荷物多いね。それ全部教科書？」

華ちゃんは通学鞆に加え、手に手提げ袋を持っていた。中には書物がどっさり入っていて、かなり重そうだ。

「これ、参考書なんです」

「へえー、すごい量だね。塾で使うの？」

華ちゃんはほんのり頬を染め、嬉しそうに笑った。

「今日の放課後、祿ちゃんと2人でお勉強会なんです」

「べ、勉強……！？」 祿朗が！？」

雷に打たれたような衝撃を受ける。

あの祿朗が、お馬鹿で暴力的で論理的思考が一切なさそうな祿朗が、勉強だなんて！ 失礼ながら全く想像できない。

硬直する私を見て、華ちゃんは柔らかに微笑んだ。

「私もびつくりなんです。でも祿ちゃん、1年生のときもかなり成績ひどかったから、今学期の中間と期末で全科目平均点以上取らな」と夏休みは補習だ、って先生に言われちゃったみたいで……。だから勉強教えてくれて私に頼んできたんです」

「へえー、祿朗がねえ」

「夏休みの補習が相当嫌みたいで……」

なんだか感心してしまった。

少し前の祿朗と比べると、かなり真面目に「中学生らしく」なってきた。それに何より、今まで自分から遠ざけようとしていた華ちゃんにこんなにも素直に頼み事ができるようになったのは、明らか進歩だ。

華ちゃんの幸せそうな顔を見ていると、こっちまで嬉しくなってくる。

「勉強会頑張っつてね、華ちゃん」

「はい」

「勉強難しくて祿朗がイラつきだしたら、容赦なく頭叩いちゃいなね」

「ふふ。はい」

華ちゃんの後ろ姿を見送りながら、私は幸せのおすそわけを感謝した。

そしてその嬉しい気分の中に、ほんの少しの寂しさを発見してしまい、思わず苦笑した。

私もやっぱり 戻りたいな。
七緒と笑って会話できる、いつもの関係に。

16&17・死神と、ピンクドット>

チョコレートにビスケット、ラムネにポテチに、グミ、クッキー。目の前にずらりとカラフルなパッケージが並ぶ。

商店街の一角にあるここは、安いと評判の小さなお菓子屋さん。夢と希望と子どもたちの笑顔に溢れる店内で私はキャンディの袋をひとつ手にとり、どんよりとそれを見つめた。

「……心都、死んだ魚の目になってる」
と、隣の美里がひとこと。

「……そうかな？」

「うん。目は死んでるし、顔は土色だし、声は暗いし、はつきり言ってる死神みたいよ。大丈夫？」

「……多分」

少なくとも今の美里の言葉は、私に決して軽くはないダメージを与えた。死神って。明らかに菓子屋にいてはいけない人物だ。

どうにか印象を変えたいと思い、ニイツと笑ってみせたら、美里に「怖い」と一蹴された。

ここ最近、私はずっとこんな感じだった。何をしても気持ちがいじっとり沈んでしまうし、心底笑顔になれない。

あいつのせいだ。

陳列棚にキャンディを戻し、心の中で幼馴染みへの怨みを呟く。

あのシュークリームの夜から2週間が経った。七緒は依然、私に對してのぎこちなさを維持し続けている。会話が全くなかったわけではなく挨拶や最低限のやり取りはあるだけに、よけい調子が狂ってしまう。

「ああ、明日からゆうつつだよ……」

重めのため息をつく。

時の流れは速いもので、気付けば今日は、修学旅行前日。それはつまり、その気まずさ満点の相手と明日から2泊3日、班行動を共にしなければならぬということだ。

想像しただけで私の胃は縮みあがる。

学校帰りに美里と旅行のお菓子を買いに来ているという本来なら楽しいひとときであるはずの今も、私はキャピキャピすることが出来ずについ暗い顔になってしまっていた。

「ほんと、なんでいきなりあんな気まずい感じになってるのよ。班の話し合いのときも変な空気だしびっくりしたわ」

美里が呆れたように肩をすくめる。

「理由が私にも全くわかんないんだよね」

以前も七緒と数週間の泥沼状態が続いたことはあった（5ヶ月ほど前、クリスマスの時期だ）。しかしそのときはお互い怒鳴り合った喧嘩の後だったので、まだ原因も明確だった。仲直りも切り出せた。

それに比べ、今回のケースはあまりにも特殊すぎる。七緒は私と会話はするし、刺々しさなんかも感じないものの、とにかくどこちなさすぎるのだ。目は泳ぎ、笑顔は引きつり、声にも覇気がない。

しかも美里や田辺やその他の人々に対してはごくごく普通、いつも通りの態度をとり続けているものだから、ますます腑に落ちない。

「本当に何かまずいこととしてかした覚えはないの？ 心都」

「うーん……」

「無意識にお尻触っちゃったとか」

「それ完全に変質者だよ」

この良き友人は、一体私をなんだと思っているんだ。恋は人を狂わせるとは言っけけれど、さすがにそこまでの末期患者になったつもりはない。

「冗談よ、と顔色ひとつ変えずに美里。」

「でも、あんなわけわかんない七緒くん初めて見たもの。理由がな

「いわけないでしょ？」

「……そうなんだけど、色々考えてもやっぱり思い当たらないんだよね。一度『なんか怒ってる？』ってさりげなく聞いても否定されまし」

「いっそ完全に冷たくされたんなら問いつめようもあるのにね」「うん……」

せつかくの修学旅行。こんなもやもやした気持ちで過ごしたくないのに。

私は再び柵に視線を戻すと、なんとか気分を晴らすために、色とりどりのお菓子を眺めた。

ああ、きつとまた死神の顔になってるんだろうなーと、げんなり自覚しながら。

「よっ！」

帰り道の公園で山上が堂々たる態度で待ち受けていても、私はもう驚かない。

なぜならここ2週間、山上はほぼ毎日の放課後にここで待機して私の帰りを待つという妙なハチ公精神を発揮していたからだ。

さすがに4日目あたりで戸惑いがピークに達し、「ほら、ね、私たちそういう関係じゃないんだしさ」と丁寧なお断りを試みたこともあった。しかし、その「そういう関係」 私は「主人と忠犬」の意味で言ったのだが、 山上が「仲睦まじい恋人同士」と勘違いして受け取ってしまうという食い違いが生じ、「大丈夫だ！ これからそういう仲になるために、俺は来てるんだ」と何やら聞きようによっては怪しい台詞を繰り返され、撃沈した。

いやそうじゃなくて、と更に否定しようとする、彼は笑顔でこう言った。

「俺が勝手に待ってるだけなんだから。杉崎がこの公園を買収して持ち主になって『やめろ』って言ったらやめろよ」

「……………」

まるで小学生のような切り返しだった。そう言われてしまうとこっちはもう何も言い返せない。その結果、こんなおかしな放課後の会合が2週間も続いているのだ。

「山上……そ、そろそろ飽きない？ やめない？」

「えー、何言ってるんだよ。飽きるわけないだろ」

子供用のブランコに腰掛け、山上は言う。

日も暮れ辺りは薄暗い夕食時だ。今ここには主な利用層であるはずの小さな子供はおるか、暇な小学生も、たむろする場所を求める不良も、のんびりお饅頭を食べるおじいさんさえも、それこそ人っ

子ひとりいない。これは幸いだと思う。だって、こんなガタイの良い学ラン男がカラフルで可愛いブランコに乗ってぼうつと私を待っていたら、おそらく子供たちは怯えて泣き、下手したら通報されるだろう。

私がひとり安堵していることなんかつゆ知らず、山上は楽しそうにブランコを漕いでいた。

「有坂中は明日から修学旅行だろ？」

「うん。西有坂は？」

「俺たちは来週。場所は同じ北海道だけだ」

「ふーん」

「お土産買ってきてくれよな」

「来週同じところ行くのに？」

呆れてそう言うと、山上は豪快に笑いながら立ち上がり、私の肩をバシリと叩いた。

「杉崎からもらった物だったらなんでも嬉しいに決まってる！」
「……」

この人はどうして何のためらいもなくこういふことが言えてしまうのだろう。

以前なら抱きつかれようが手を取られようが平気だった私なのに、なんだか最近やけにこの手の言葉を意識してしまい、自分の免疫のなさを再確認するばかり。

つまり、私は自分の顔が赤くなるのを感じ、それをどうにか隠そうとうつむいた。

おもむろに、山上が私の肩越しに公園の入口を指さす。

「あ、東だ」

心臓が跳ね上がる。

「！……」

振り返った先には、誰もいない。

「うつそびよん」

しれっと宣う山上に、私は腹の奥底から物騒な感情が沸き上がるのを感じた。

ぴよんじゃねえよ、ぴよんじゃ。

言葉遣いも荒れてくる。

「山上、あんた……そんな小学生みたいな嘘ついて楽しい？」

「楽しいに決まってんだろ！ 杉崎のアホみたく素直な反応が見れんだからよ」

頭に血が上るのを感じた。

「この……ゴリマッチョ！ バカマッチョ！ 学ラン着てると古き良き時代の喧嘩番長風マッチョ！」

「あー、それぞれ。うんうん」

山上がうつとりと目を閉じる。

その表情は幸福そうで、とてもじゃないけど激しく罵られまくっている最中の人物には見えない。

えっ、何この人。

今までの怒りとは一変、私は底知れぬ恐怖を感じ、その場から2、3歩後ずさった。

山上は目を開けて私との距離が少しひらいていることに気付くと、またしても笑いながら言った。

「俺は杉崎の大声が好きなんだって前に言っただろ。なのに、なんか最近変に恥じらってもじもじして全然叫んでくれないからさ」

「……だからってわざわざ挑発しなくても」

「ははは。でもまあ、考えようによっては、もじもじするのは俺のこと好きになってきたってことか」

「いや違うからね」

そこはズバリと否定させてもらおう。

山上が良い奴だっことはわかっているけど、もちろん“好き”になってはいない。ただ少し、ストレートな言葉にドギマギしてしまうだけ。私にあまりにも免疫がなさすぎるだけ、だ。

「なんだよ、残念だなー」

と、笑いながら山上。

はつきり言つてその表情は全く残念そうではなかった。以前彼がカラオケマイクを通して言った『しばらく経ったらきつと、東より俺のこと好きになつてる』の台詞の有効期限の長さを感じさせられる。

そのとき、山上が再び私の後ろを指さした。

「東だ」

「まだ言うか！ もうその手には乗らないって……」

そう言いつつも振り返ると、今度こそ心臓が止まりそうになった。山上の人差し指の先にいたのは、真正正銘、公園の入り口に面した道を帰宅中の東七緒14歳しし座A型。

迂闊だった。さすがに修学旅行前日はどの部活も少しは早めに切り上げるものだろうと勝手に思い込み、七緒と今日ここで鉢合わせることはいないだろうとふんでいたが、バリバリ体育会系の柔道部にはそんなの通用しないらしい。

ただでさえ気まずいのに、こんな状況で会いたくない。不幸中の幸いか、七緒は公園内の私たちには気付いていない様子で、のん気な顔して歩いている。どうかこのまま通過してほしい。

しかし私の願いも空しく、

「おーい、東」

「！」

呼ぶなよ。私は山上を睨みつけたが、時すでに遅し。山上の元気な掛け声に、七緒がこちらを向いた。いかにも部活帰りらしい、少し乱れた髪にジャージ姿という出で立ちだ。

「あ、山上……と、心都」

私の名前を呼ぶとき、七緒の視線が猛烈に泳いだ。

「部活帰りか？ 東」

「うん。山上は？ お前も西有坂で柔道部入ったんじゃないか」

け

「おう、毎日練習してるぜ。そのあと猛ダッシュでここに来てるんだ」

「……ご苦労なこった……」

半ば呆れたように呟く七緒。

もちろん私のほうは、一度も見ない。

2週間経つのに、やっぱりこのときの寂しさと戸惑いには慣れない。

「……じゃ、またな」

会話もそこそこに、七緒は歩き出した。

隣の山上が納得したようにささやく。

「確かに……なーんかぎくしゃくしてるな、東」

でしょでしょ？ と盛り上がる気には、もちろんなれなかった。

遠ざかっていく七緒の背中。

肩にかけられた柔道着が揺れる。そこにくりつけられているのは、私がクリスマスにあげたチープな道着型マスコット。

初雪の中渡して喜んでくれたことも、それを身につけてくれていたのを知って嬉しくなったことも、全部遠い昔のようだ。

マスコットが揺れるたび、一歩ずつ七緒が遠くなる。

私はぎゅっと拳を握りしめた。

やっぱり、こんなの嫌だ。

このままなんて嫌だよ。

七緒。

しばらくの逡巡の後、私は山上に向き直った。

「せっかく待つててくれたのに悪いけど……もう行くわ」
「えー？」

目を丸くする山上をよそに、私は走り出す。

「ごめん！ 北海道のお土産、2つ買ってくるから！」

じゃあまあ良いか、と山上が呟くのが聞こえ、私は心置きなく足に力を込めた。

運動不足気味な体にむち打って、全力疾走。

興奮しすぎたのか途中で左の足首を思い切りひねり悶絶するとうタイムロスはあつたけど、それでも走る。足首は痺れたままだったけど、走る。

基本的にあつさりとした性分あの七緒が、あんなにも不可解で曖昧な態度をとり続けるなんて、普通なら考えられない。

きっと何か自分からは言えない理由があるのだ。

だったらもう、私がつつかろう。

今追いかけなきゃ、多分、一生このままだ。

もうこの際、ひとまず「ただの幼馴染み」でも良いから。

「男兄弟」でも良いから。

前みたいに笑って話してよ。

七緒に追いついたのは、東家の真ん前。

今まさに自宅に入ろうとしている幼馴染みに向かい、私は先ほど買ったばかりのキャンディの袋を力いっぱい投げた。

いつだか彼が私にくれた、ピンクドットのいちごミルクだ。

私が放ったキャンディの袋（20個入）は、結構なスピードをつけ、見事に幼馴染みの顔面へとクリーンヒットした。

「……………」

七緒がゆっくりとこっちを向く。

その据わった半眼はとても険悪で、どす黒い怒りのオーラが辺りに見えるようだった。

「……………何すんだよ」

不機嫌全開の声。

突然現れた通り魔の如き私に物を投げつけられ、それが顔面を直撃したのだから、当然だ。

一方私はほんの少し泣きそうになってしまっていた。

七緒が私から視線を逸らさずに、しっかり目を見て言葉をかけている。たったそれだけのことなのに、2週間ぶりともなると軽い感動すら覚えてしまう。

「ただ低下しているんだ、私の幸せレベル。」

しかし今は嬉し涙を流している場合ではない。私は彼を追いかけた本来の目的を思い出し、ぐっと気持ちを引き締めた。

七緒を見据え、口を開く。

「私に何か怒ってるわけ？」

予想以上に低い声になった。

「もうずっとちゃんと会話してないし、挙動不審だし、気まずくて気まずくて、何日経っても気まずくて、寝ても覚めても気まずくて……………嫌だよ、こんなの」

七緒は黙って私を見ていた。

口を堅く結び、怒っている風でも悲しんでいる風でもなく、その表情は何とも掴みにくいものだった。

「明日からの修学旅行だって、こんな状態で過ごしたくない。……だから、」

少し迷って、言葉を切る。

私は相手の隠された気持ちを察して上手く動けるほど頭も良くないし、人間も出来ていない。

かといって、このまましおらしく七緒との距離感に落ち込む日々を過ごし続ける気もない。

だから、この状況を打破したいと思ったら、もう「ぶつかる」のみ。

正解かどうかはわからないけど、単純なこの頭にはそれしか方法が浮かばないのだ。

私は思い切り息を吸い込むと、力の限り叫んだ。

「言いたいことがあるなら、はっきり言え!!」

突然の大声に、七緒がギョツと目を見開いた。

だけどそんなことを気にしていられるほど、今の私は冷静ではない。ここ2週間胸に溜まっていたもやもやが一気に爆発したような気分だ。

「嫌なことと言われるより、変に引きつり笑い浮かべられるほうがよっぽど辛いよ! 言いたいことは全部言っつてよ! この十数年間で人のこと散々アホだのおばさんだのおっさんだの不審者だの言っついて、今さら遠慮することなんか何もないでしょ! ばーか!」

「ば……」

聞き捨てならない、といった感じで七緒の眉が動く。

「お前……ここで馬鹿はねーだろ、馬鹿は!」

「馬鹿だから馬鹿って言ったの! 私と話すたびにウヨウヨウヨウヨウヨウ泳がせちゃってさー! そんな七緒、気味悪いんだよ!」

「気味悪いって喧嘩売ってんのか！」

「なんだこのやるー元気ですか！」

「その猪木顔やめろよ似てるぞ！」

次の瞬間、白熱の言い争いは停止した。

東家の玄関を開け、中から怖い顔した明美さんが現れたのだ。

「お前らの声、辺りに丸聞こえだぞ」

「……」

「ご近所迷惑だろうが。密会は結構だけど、痴話喧嘩なら小声でやりな」

それだけ言うと明美さんは再び家の中へ引っ込んだ。

密会でも痴話喧嘩でもない！ と否定をする余裕もないくらいの妙な迫力。さすがは元ヤン……と言ってしまうって良いものか。私と七緒は言葉を失った。

しかし確かにこの怒鳴り合いはご近所迷惑。他人様に迷惑をかけてしまったては駄目だろう。

私たちは先程よりも互いに距離を詰めると、明美さんの忠告通り小声での喧嘩を開始した。

「だから……つまり、最近の七緒のハッキリしないキョドキョドした態度、正直言っってほんと嫌」

「別にキョドキョドはしてねーだろ」

「嫌すぎて今日だって楽しい気分でお菓子選べなかった。私の1500円返せ」

「その理論おかしいだろ。ていうか1500円分もお菓子買ったのかよ」

ひそひそと小声で、しかし殺気立った雰囲気言い争う2人組は周囲から見たらさぞかし異様だろう。

だけど幸いなことに今現在、辺りに人はいない。私たちは心置きなくバトルを続けられる。

「え、何、今のまさかダジャレ？ お菓子とおかしいで掛けてる？」
「ち、違……」

しまった、という顔で七緒。

「やだー寒いつ。春なのに寒いよー七緒のせいで」

「違うって言うてんだろ！」

耐え難そうに、七緒の声のポリウムが上がった。

私は人差し指を顔の前に立て「しー」とそれをたしなめる。

「ご近所迷惑だよ、七緒」

ぶち、と何かが切れたような不吉な音と共に、彼の周りの温度がぐっと上がった。瞳の中ではゆらゆらと、怒りの炎が燃えているのが見えた ような気がした。

あら、ついに本格的にスイッチ入っちゃった？

そりゃあ私だってできることなら、穏便に平和に解決したかったけど、ここで引き下がってしまったらきつと彼の本音は聞けない。

先に目を逸らしたら負け。これ、喧嘩の鉄則。

私は覚悟を決め、七緒の視線をまっすぐ受け止める。

「言いたいことがあるなら言いなさいよ」

「そんなら、言わせてもらいますけどね」

やけに落ち着いた口調で七緒が言う。

「山上から、心都が好きだって宣言されたんだけど」

その場に倒れそうになつて、なんとか持ちこたえる。

こいつ、山上からは何も聞いていないって言ったくせに。やっぱり嘘だったんじゃないか。

恨みがましく七緒を睨むと、彼は全くひるむことなく私を見返し、言葉を続けた。

「で、心都はその気持ち知ってていつも公園で待たせたり、日々アタックを受け続けてるんだろ。お前、こないだ好きな人いるって言うってたよな。それなのに山上にこんなハッキリしない態度取るのっ

てどうかと思うけど」

「べ、別にハッキリしてないわけじゃ……」
見事なまでの形勢逆転。

私はもうしどろもどろで、どうにか視線が泳がないよう耐えることとで必死だった。

七緒は目を眇め、驚くほど低い声で言った。

「その気がないならきっぱりお断りすればいいだろ。その気があるなら山上にちゃんと良い返事して付き合えよ。今のフラフラしてる心都は、山上にも、そのどこの誰だか知らない好きな相手にも失礼だ」

「……お断りはしてるけど山上がまだ納得してなくて私に公園のオナーになれって……」

「うわ、何それ。魔性のオンナ気取りですか」

「違う！ 違う違う違う！」

つい叫んでしまった私に、今度は七緒が口元に人差し指を当てシヤラップサインを送る。

「ご近所迷惑」

「……くっ」

言葉に詰まる。

彼の言うことは全くもって正しいのだ。

私の煮え切らない態度はきつと不誠実で、山上の純粋な気持ちと貴重な青春時代の一部を浪費させているのだろう。

そして私の発狂手前の大声は、この夕飯時、ご近所の皆さんの一家団欒をぶち壊すだろう。

そう。

七緒は、とても正しいのだけど

「……そんなの七緒に関係ないじゃん」

今まで以上に小さな声で呟く。

しかし向かい合う彼にはばつちり届いたようで、

「はあ？」

かなり不本意そうにその眉がひそめられた。

「お前、関係ないってなあ……、山上は俺に急にわけわかんねー宣言布告を……」

と、ここまで言っつて、七緒は慌てて口をつぐんだ。

「え？ せんせん？」

「……いや、なんでもない」

なんだよ、この期に及んでまたそれが。

私は七緒を睨みつけた。

彼の言い分は正しい。

正しくて正しくて、涙が出そうになるほどだ。

だけど七緒、1つだけ誤解している。

私の好きな相手は、どこかの知らない誰かさんじゃない。

「……私がフラフラしてようが、七緒には関係ないじゃん。なんでそんなイラつかれて変な態度とられなきゃいけないの」

喧嘩は先に目を逸らしたら負け。その鉄則を信じ守り続けてきたはずなのに、今の私はもう七緒の顔をまっすぐ見ることができなかつた。

声が震える。

「七緒は関係ないんだから……私は私でちゃんとするから、ほっと

いて」

とてもひねくれたことを言っていると、自分でもよくわかっている。

だけどそれを理解した上でなお抑えられないくらい、私は荒れた気持ちだった。

先程の七緒の言葉が頭でリピートされるたび、水を含んだスポンジみたいにながぐんぐん重くなる。

私は七緒にとって「女の子」じゃないんだから、きっと誰と恋仲になろうが彼にとっては大したことではない。そんなことはとくにわかっていてもりだったのに。それでもなんとか変わるように頑張ろうって、今までは思えたのに。

『その気があるなら山上と付き合え』だなんて。

そんな明確な言葉は聞きたくなかった。

七緒は心底不機嫌そうに目を細め黙っていたかと思うと、やがて頷いた。

「……そーですね」

まるで某アルタの生番組の観覧客のような、投げやりな返事。しかしそこに快活さは全くない。

「悪うございましたね、関係ない人間が口を挟んで」

「……ふん。こちらこそ不快な気持ちにさせてすみませんでしたね」
妙に他人行儀なやりとりの後、私はくるりと踵を返し、東家の前から立ち去った。

また明日、とは言いたくなかった。

どう考えても、もう修学旅行なんか楽しめる気がしない。

のろのろと帰り道を歩いていると、今度こそ涙が出てきて、私は

歯を食いしばった。

七緒に恋して5年目の春。

今まで一度も考えたことのない案が、初めて頭に浮かんでいた。

もう、諦めた方がいいのかな。

実る見込みのない七緒への片思い、そろそろ潮時なのかな。

この恋心はなかったことにして、昔のように完全に「幼馴染み」
として仲良くしたほうが、きっとお互い嫌な思いもしないのかな。

ぐずぐずと鼻をすする。

言いたいことがあるなら言え！ と促したら、本当に素直すぎる
意見をもらってしまった。そして勝手に傷付いて喧嘩別れ。

我ながら、馬鹿らしくて呆れる。

だけどまさかあそこまで、何の躊躇もなく山上との仲について提
言されるなんて。

これってほぼ望み0だろ。

前に山上から言われた台詞が、心の奥でよみがえる。

そのときは、何くそどっこいとうちわで彼をひっぱたいてしまっ
た私だけど、今なら素直に頷ける。

うん。望み、0かも。

歩調を速めると、七緒を追いかけたとき派手にひねった左足首が、
少し痛んだ。

いくら幼馴染みと激しい喧嘩をしようが、彼と険悪極まりない雰
囲気だろすが、左足首の捻挫がちょっと無視できないレベルの痛み
になっていようが、お構いなしに修学旅行の日はやって来る。

やって来るったら、やって来る。

時計台、旧道庁赤レンガ、そして大通公園。初めての札幌を満喫
できる、理想的な観光コースだ。

中でもここ大通公園は、広大な園内に様々な花が咲き乱れ、各種
銅像にテレビ塔まで望める素晴らしい観光スポットである。

「緑がいっぱい気持ちいいわねー」

美里が感嘆の声をあげた。

私も頷いて、辺りを見回す。

緑の木々の中に、所々鮮やかな桃色を発見できた。

「「まだ桜咲いてる」」

……ハモった。

言葉にならない苦々しさを感じながら、声がした背後を振り返る。相手は奇しくも絶賛喧嘩中の七緒だ。

不本意なハモリを披露してしまった私たちは、ヤンキーばりの睨み合いの末、「けっ」てな感じでお互い顔を背けた。

「不穏よねえ」

「不穏だなあ」

と、美里と田辺が囁き合う声が小さく聞こえた。

2泊3日の修学旅行、本日2日目。

初日である昨日は、現地までの移動と学年全体の観光のみで終了したが、今日は違う。私と美里、七緒と田辺の4人の行動班による、1日がかりの札幌観光中なのだ。

5月の北海道はとても暖かな春の陽気で、まだ桜も咲いている。とてもじゃないが美里の「末端冷え性大作戦」は無理だ。

もっとも気温が高かろうが低かろうが、今の私にはそんな作戦を実行する余裕はないのだけだ。

きつと今とんでもない仏頂面になっているだろうことを自覚しながら、私は天を仰いだ。

おとといの東家門前での言い争いは、私と七緒の間に深い亀裂を作っていた。

せつかくの修学旅行。このギスギスした雰囲気を持ち込むのは同じ班の美里と田辺にも忍びないので、なるべく楽しく過ごそうとは思っているし、私も七緒もお互い以外とはもちろん普段通りに明るく話す。

しかしやはり、一瞬でも目が合うと、無言の中にバチバチと火花が散るといふ不穏すぎる空気になってしまうのだ。

それに加え、喧嘩前に七緒を追い掛けてひねった左足首の状態は今、最悪だった。

負傷した当日は軽い違和感程度だったけれど、昨日1日歩き回ったせいかな、今朝起きるとさらに痛みが増していた。

足を引きずるほどではないものの、やはり無意識にほんの少し、左をかばって歩いてしまう。

おそらく走ったりしなければ傍目にはわからない程度ではあるのが不幸中の幸いだろうか。

だって、ただでさえこんな変な空気だというのに、さらに怪我まで伝わってしまったら気を使わせすぎて美里たちに申し訳ない。

七緒との仲の改善はもはや難しい。だからせめて捻挫だけでも隠し通して、できる限り楽しく班行動を終えたい。

それが私の今日の目標だった。

「えっと、次は白い恋人パークね」

大通公園を抜けたところで、パンフレット片手に美里が言う。

事前に班で決めていた観光ルートによると、次の目的地へは電車に乗って向かうことになっている。

私たちは駅に向かい歩き出した。

私はやっぱり左足が気になって、遅れをとらない程度に最後尾につく。

先程のむかつ腹がおさまらずに七緒の背中を睨みつけながら歩くと、その殺気を察したらしい彼は負けじとこちらを振り返った。

またしてもバチバチと激しく視線がぶつかる。歩きながら無言で火花を散らすなんて、こんな器用なことができる2人はそうそういないだろう。

しばしのガン飛ばし合戦の後、「けっ」とお互い顔を背ける。すると、美里が私を肘でつついた。

「ちよつとお、本当にいつまで喧嘩してんのよ。この旅行が2人の距離を縮める大チャンスだって言ったじゃない」

小声で囁く彼女は、少し怖い顔をしていた。

「うう……ごめんね」

「謝罪は良いから、早く仲直りしちゃいなさい。こつこつのは長引けば長引くほどめんどくさいんだから」

相変わらず姉のように頼もしい口調で、美里が言う。

そんな彼女に対して、私は曖昧な笑みを浮かべることしかできなかった。

「ごめんね。」

心の中でもう一度謝る。

美里、たくさん応援してくれたのにごめん。

私、もしかしたらこの恋、諦めるかもしれない。

だってもう望み0なんだもの。

どう考えても七緒とは、今後も「ただの幼馴染み」として付き合い合っていたほうが上手くいく気がしてならないのだ。

駅のホームに到着するやいなや、

「うわ、もう電車出るぞ」

先頭を行っていた田辺が大声をあげた。

一行はパタパタと走り出す。この電車を逃してしまつては、今後の予定（白い恋人パークでお菓子作りを体験する、お菓子を食べる、お菓子を大量に購入する等）が大きく狂つてしまう。

私もとっさに一歩、足を踏み出した。

その瞬間。

左足首に激しい痛みが走った。

「うぐ」

小さく声が漏れる。

手を大きく振り上げ右足は引き気味という、走り出す気満々の体勢のまま、私は固まつた。

全身の血が一気に引く。

なつたことないけど、ぎっくり腰の瞬間つてこんな感じなんだろうか。魔女の一撃、とは言い得て妙だ。

美里と田辺、そして七緒が驚いて車内で振り返ると、無情にも私と彼らの間のドアが閉まるのは同時だった。

「えっ……ちょっと、なんで!? 心都っ」

と、珍しく慌てた顔の美里が言った。いや、正確には、そう言っているような口の動きをしていた。だって私たちは頑丈な電車のドアに隔てられていたから、到底声なんか聞こえっこないのだ。

無駄に躍動感溢れる変な体勢のまま、私はこくこく頷いた。一応「大丈夫、心配しないで」の意味だったのだけど、きちんと伝わったかどうかは定かでない。

びっくり顔の3人を乗せて、電車は発進してしまつた。

ホームに1人取り残された私は、なんとも虚しい気分で見

送る。

ああ。何をしているんだろう、私。

楽しい旅行のはずなのに、うつかり駅で孤独だなんて。

なんだか私このまま1人、センチメンタルジャーニーにでも出かけた気分だ（心都はまだ14だから……と歌ってみる。笑ってね）。

ずきずきと疼く左足の痛みを噛みしめながら、私はうなだれた。

悪い出来事は重なるというけれど、何もここまで大サービスで重ならなくても。

うつん。もしかしてこの場合、重なっているわけではなく、全て繋がっている？

あの日七緒を追いかけなければ激しい喧嘩にもならなかったし、足も捻挫しなかった。足を捻挫しなければ、こうして電車に乗り遅れることもなかったのだ。

まさに負の連鎖。ネガティブスパイラル。

よかれと思つての行動がこんなにも裏目に出るなんて、いくら私でも、ちよつとしばらく動き出さたくないくらいにまで落ち込んでしまう。

しかし、いつまでもここで1人たそがれているわけにはいかない。ただでさえ足手まとい気味なのだ。早く美里たちと連絡をとって合流しなければ。

私は制服のスカートのポケットから、携帯電話を取り出した。

「……あれ？」

少しの、違和感。

数秒後にその正体を理解したとき、私は今度こそ、抜け出せない負の連鎖を確信した。

18&17・修学旅行と、負の連鎖>t・、(後書き)

年内最後の更新です。

良いお年を！

19&1t・愛しのあの子と、会いたいひと>

私の幼馴染みの東七緒には、贈り物のセンスがない。

クリスマスプレゼントはスーパーで売っている大福1つだったし、ホワイトデーにくれたお返しは柔道部の合宿で買ったという富士山くんストラップ（笑顔の富士山に手足が生えている）と、「
行ってきました」のプリント付のお土産感を全面に出したバナラクッキー。

どう鼻屑目に見ても、イケてるメンズのおしゃれで小粋なプレゼントとはいえない。

だけど私はじゅうぶん嬉しくて、大福もクッキーももりもり美味しくいただいたし、ストラップは携帯電話につけて眺めてはニヤついていた。

好きな人からの、大切な贈り物だった。

しかし。

「富士山くんが……ない……」

1人ぼっちのプラットホームで、自分でも驚くほど絶望的な声が出た。携帯電話を持つ手が、微かに震える。

そこにぶら下がっているはずの富士山くんは忽然と消えていた。ポケットの中を探しても、辺りを見回しても、その姿はない。

なんで？ いつ？ どこで？

ぐるぐると回る頭で必死に考えても答えは全く出ない。

とりあえず、大通公園に入ったとき携帯電話で時間を確認した記憶はある。あのときは確かにストラップがあった。

ということは公園内、もしくはそこから駅に向かう途中で落としてしまったのだろうか。

本当に、どこまでもついていない。最低だ。

そのとき、手の中の携帯電話が某ボクシング映画のファンファーレを奏でた。

着信。美里だ。

「も、もしもし……」

「もしもし心都？ どうしたのよ？ 急にホームで動かなくなるからびつくりしちゃった」

「ごめん。ちょっと、その……目にでっかいゴミが」

「大丈夫？」

「うん」

「なら良かった。私たち駅で待つてるから、次の電車に乗ってきてね。早く合流しましょ」

心底ホツとしたような美里の声。やはり相当心配をかけていたようだ。申し訳なくもあり、有り難くもある。

「だけど私は、快い返事をするのができなかった。」

「……ごめん、美里。一生のお願い。1時間……ううん、30分だけ、別行動させてくれないかな……」

「ええ？ ちょっと何言ってるのよ」

「3人で先に次の観光場所行って。用事済ませたらすぐ追いつくから。……お願い！」

本当に勝手なことを言っていると、自分でもよくわかる。

「けどどうしても、このままここを去るわけにはいかない。」

「心都、どうしちゃったの。やっぱりなんか変よ」

「……ごめん！あとでじっくり説明させて！30分だけちょうだい！本当に本当に本当に、ごめん！」

ホームの端の駅員さんがぎょっと振り向くほどの大声でそう言うのと、私は電話を切った。

ごめん、美里、田辺、そして七緒。

心の中で必死に念じる。

旅行先でグループ行動を外れて1人だけ落とし物探しだなんて、あまりの和乱しっぷりに自分でも呆れてしまう。

けど、どうしようもなく強い衝動が私を突き動かしていた。

探しにいきなきゃ。

1秒だつて無駄にできない。私は思わず走り出した。のだが、左足の捻挫をすっかり忘れていたため、がつつりダメージを食らってしまった。

「いつてえええ！」

痛さに絶叫する。ああ、女子力マイナス500。いけない、いけない。ない。

「い、痛い、でございます……」

再び駅員さんの不信感溢れる視線を感じながら、私は今度は慎重に、一步を踏み出した。

うん、大丈夫。

痛いけど歩けないほどじゃない。

私は足元を注意深く見渡しながら、もと来た道を辿りだした。

待ってて、私の富士山くん。

駅の改札付近、そこから大通公園までの道のり、そして公園内。
思い当たる場所を全て辿る。

地面を凝視しながら歩いて、たまに後ろを振り返りながら歩いて、
もしかしたら蹴飛ばされたかもしれないと道脇の植え込みまで漁
りながら、歩く。

何しろ、小さくて地味なストラップだ。見落としてしまう可能性
だってある。今までの人生で1番なんじゃないかってくらいの集中
力で、搜索を続けた。

しかし、最後にストラップの存在を確認した地点　公園の入り
口付近まで来ても、富士山くんは見当たらない。

私は呆然と足を止めた。

「どこいつちゃったの、富士山くん……」

もうすぐ約束の30分が経過してしまふ。このままじゃ結局見つ
からないパターンもありえる。

しかも最悪なことに、先ほどからのダメージが蓄積されたのか、
左足首の状態はかつてないほど最悪だった。歩かずに立っているだ
けでスキズキと痛む。

思わず、ため息をつく。

……これはもう、神様からの「諦める」ってメッセージかな。
ストラップも、贈り主への恋も、全部今日でさよならしなさい
そういうこと？

心身ともに弱つてくるとどうも思考がファンタジー寄りになる。
こんなに感受性豊かだったっけ、私。

ゆっくりと目を伏せ、富士山くんストラップに思いを馳せる。

見事な富士山型の体に、全ての悩みを打ち消してくれるような無邪気な笑顔、赤いほっぺ。申し訳程度に付けられた細い手足は、見る者に彼が山寄りなのか人寄りなのかを混乱させ、ミステリアスな一面を演出している。そして背中には「富士山麓にオウム鳴く」と明朝体の文字。可愛い上にミステリアスで、ルート5の語呂合わせまで覚えられてしまうのだ。

愛しの愛しの、富士山くん。

私は顔を上げた。

もしかして、公園の入り口でストラップを確認したのは記憶違いかもしれない。

もう少しだけ、戻ってみよう。

もし戻ってみて見つからなかったら……それは、そのとき考えよう。うん。

2、3歩踏み出した瞬間。

がし、と後ろから右手を掴まれた。
驚いて振り向く。

「……何してんだよ、心都」

まさか走ってきたのだろうか、ぜえぜえと肩で息をして、髪の毛もぐちやぐちやで、眉間にしわを寄せた表情のまま、

幼馴染みは言った。

何してんだよ、って。そんなの自分でもわからないよ。

私、どうしてこんなに諦めが悪いんだろ？

19&17・愛しのあの子と、会いたいひと> ; (後書き)

富士山くんはさりげなく6章 - 1 が初登場だったりします。
何はともあれ今年もよろしくお願いいたします。

真剣な顔の七緒は、私をまっすぐ見据えていた。

対する私は、予想外すぎる出来事に面食らい、なんとも間の抜けた声を出してしまった。

「……な、七緒、なんで、ここに？」

「『なんで』？」

七緒がぐつと目を細める。

やばい、これは……。

嫌な予感が背中を走る。慌てて耳をふさごうとしたけど、もう遅い。

完全ブチ切れ状態の七緒の、特大の怒鳴り声が降ってきた。

「お前がホームで急に非常口のマークみたいな格好で固まって1人だけ電車乗り遅れてそれだけでも驚いてんのにやっと連絡ついたと思ったら単独行動したいとかわけわかんねーこと言い出して一方的に電話切ってしかも栗原が『なんか今にも死にそうな声してたわ』とか言うから何かただならぬことがあったのかと思って迎えに来たんだろーがバカ！」

これだけを息継ぎなしで言いきった彼は、またしてもゼエゼエと肩を上下させた。

スピーディーで無駄のない説明だ。私はもう頭が上がらない。

「す、すみません。マジですみません……」

「バカ、すみませんで済んだら警察いらねーんだよバカ！」

うわ。なんかいつにも増して、とんでもなく口悪い。チンピラみたいな切り返しだし。バカってトータル3回言ったし。

七緒は呼吸を整えると、先ほどから掴みっぱなしだった私の右腕

をようやく離した。そして、今までよりはかなり落ち着いた口調で言う。

「心配すんだろ。栗原も田辺も……俺も」
私はうつむいた。

本当に七緒の言うとおり、私はバカだ。自分の自己中心的な行動が恥ずかしい。

七緒からもらった大切なストラップを取り戻したくて、ついパニックになってしまっていた。いくら目的が達成できたとしても、それと引き換えに贈り主本人や美里たちに迷惑かけて良いはずはないに。

「……ごめん」

「まあ、すぐ見つかったから良かったけど」

「……七緒、1人で来てくれたの？ っていうか、よく私がここに
いるってわかったね」

ああ、と七緒が事も無げに言う。

「3人で引き返すより1人で行って走ったほうが早く済むし。心都の居場所は、電車降りてすぐ駅員さんに聞いた。制服姿で1人ホームに取り残されてる中学生見ませんでしたか、って」

「へ、へえ……冷静だね」

少し、拍子抜け。

だってこの人、すごく息を切らせて登場したから。てっきり町中を手当たりしだい探し回った末に運命的にここで私の手を掴んでくれたのかなーなんてちょっと思っていたのだけれど、よく考えたらそんな効率の悪い探し方をしていたら、きっと私たちが会おうまでに相当な時間がかかっていたと思う。

「そりゃそうだろ。札幌、広いし。闇雲に探したって普通見つかんねえよ」

「デスヨネー」

ドラマの見すぎか、私。

「駅員さんはお前のことよく覚えてたぞ。『1人で絶叫したあと

フラフラーっと大通公園方面に向かった』って。おかげで探しやすかったよ」

「……」

そんな覚えられ方、嫌だ。

私は自分の一連の行動を呪った。

「で、結局何してたわけ。心都」

ようやく本題、とばかりに七緒が向き直る。

「いや、ちよっと……探し物を……」

「探し物って？」

「……」

言えない。

私はむっつり黙り込んで視線を逸らした。

だって、探していたのは他でもない七緒からのプレゼントだ。きつと当の本人は何の気なしに贈ったであろうあのささやかなストラップを、団体行動の和を乱してまで血眼になって探していたなんて知られたら　なんとというか、それって、その、恋心垂れ流しすぎじゃないだろうか？

いくら鈍感な七緒でも……私の気持ちに気付いちちゃったりするんじゃないだろうか？

だんまりを決め込む私を見て、七緒は「あ」と手を打った。

「ひよっとしてこれ？」

そう言っただけが制服のポケットから取り出したのは

「富士山くん！」

紛れもなくあのシールで愛しいストラップだった。

「なんで七緒が……！」

「心都の居場所を聞くために駅員室まで行ったら、その真ん前の『落とし物BOX』に入ってた。駅員さんが改札で拾ったんだってさ。やっぱり心都が落とし物だったんだ」

「お、落とし物BOX……」

なんだ、それ。そんなの目に入らなかったぞ。

反論しかけて、まあ当然といえば当然だなと思い直す。私はとにかく「落とし物富士山くんを見つけないきゃ！」と足元ばかりに注意を向け、ここまで道をさかのぼってきたのだから。

つまり富士山くんストラップは、私がああ電車に乗り遅れる直前、改札口で携帯電話から外れ、駅員さんに拾われてずっと落とし物BOXにおさまっていたわけだ。こんな公園まで戻ってこなくても、あの場合で冷静に辺りを見ていればすぐ見つかったに違いない。とんとん、私、バカ。

だけど今はそんなことを後悔する気持ちより、再び彼が私の元に戻ってきた喜びのほうは何倍も勝っていた。

七緒から富士山くんを受け取り、確認する。

ストラップのヒモの部分の先端が切れているだけで他に大きな破損はない。結べば、まだ使える。

「……よかったあ……」

思わず富士山くんを両手の平で包み込んで、ため息を吐く。

大切な、七緒からのプレゼント。

ここで一生お別れなんてことにならなくて良かった。

本当に良かった。

ありがとう、神様、仏様、駅員様。

ストラップをぎゅっと握りしめ、私は感謝の念を唱える。

そんな私を、七緒は心底驚いた表情で見ている。

「心都……お前、そんなに富士山くんが気に入ってたのか」

「え？」

いやいや。

富士山くんが気に入ってたっていうか、重要なのはむしろそこじゃないよ……。

私の心の中の主張がもちろん届くはずもなく、七緒は「なーんだ」

と無邪気に言った。

「そんなに好きなら、合宿のおみやげ、もっと買ってきてやれば良かったな。ストラップ以外にも富士山くんグッズ色々あったんだ。ボールペンとかメモ帳とかタオルとかペナントとか」

「……」

ペナント、心底いらない。

無邪気な笑みを浮かべる七緒を見つめ、私は「恋心バレちゃうかも？」なんて懸念をほんの少しでも抱いた自分を悔やんだ。

そんなこと、あるわけなかったんだ。

純粹で、のん気で、私を「女の子」としてなんか一ミリも見てやしない、この鈍感野郎だもの。

「……えっ。なんですかー睨んでんの」

「べつにい」

「あ、そ。じゃあそろそろ田辺と栗原のそこ向かうか。2人とも心配してるだろうし」

「……うん」

と、一歩踏み出した瞬間、

「ぐッ」

激痛に、思わず声が漏れた。

左足首がじんじんと痺れる。

ああ、七緒が来てくれたことと富士山くんが戻ってきた嬉しさですっかり忘れていた。私、割と重めの捻挫の真っ最中なんだった。

驚いた表情の七緒が振り返る。

「な、なんだ今の、地の底からわき上がるよーな、暗くて低くてい

かついうめき声は……」

いかつい余計だ、ちくしょう。

そんな反論をする余裕もないほど、痛い。地面を凝視し唇を噛みしめ、涙を堪えるので精一杯だ。

固まる私の顔を、七緒が覗き込む。

「足、怪我してたの？」

「……う」

頷きかけて、止めた。

「……いや、いやいや、ちょっと捻っちゃっただけだから、ささいな捻挫だから、大丈夫。どうぞお構いなく」

単独行動して、心配かけて、迎えに来させて。これ以上迷惑かけたら本当に駄目な奴だ。

お願いだから少しくらい、私にも見栄を張らせてほしい。

七緒はじつと黙っていたかと思うと、突如、

「あ！」

私の肩越しの何かを指差した。

「えっ？」

反射的に体ごと振り返ると、左足に電気が走る。

「いつてええ！」

またしても、絶叫。もう「痛いでございます」をしばらくだす余裕もなかった。

振り返った先に特に変わったものはなく、ただただ公園ののどかな緑が広がっているばかり。この幼馴染みのこしやかなハツタリに見事に引っかかってしまったわけだ。……なんだか以前、山上にも同じようなことをされた気が。

「やっぱり。大したことなくないじゃん」

「……」

肯定も否定もできず黙り込む。

七緒は私に背を向けたかと思うと、その場にしゃがみ、「はい」

と顔だけ振り返り、ナチュラルな仕草で「何か」を促した。

これは、まさかの、いわゆる、「おんぶ」ポーズ。

「ええ！ そ、それはさすがに……！」

「だって歩けないんだろ」

「で、でも……」

恥じらってポポポと頬を赤らめる のではなく、私は全身の血の気が引いて顔が青ざめるのを感じた。

ただでさえ今回の旅行、私の身勝手さにより諸々の負担をかけまくりにのに、このうえ重量的な負担までかけるなんて有り得ないことだ。

更に言えば、元々すごく体格差があるわけでは決してないのに、最近の私はまさかの4キロ増。彼が楽々背負って歩けるとは到底思えない。

なかなか動こうとしない私を、七緒はイライラと横目で見遣る。

「アタシお姫様だっこじゃなきゃイヤン、なんて頭沸いたこと言うんならこの場に置いてくけど」

なんなのよ、その顔に似合いすぎる前半の「女子っぽい裏声」は鳥肌が立ちそうだ。

「……そんなこと言わないよ」

「じゃ、早く乗れって」

どうやらこのままグズグズと渋っているほうが、彼にとっては迷惑になるらしい。

私は覚悟を決め、七緒の背中に近付いた。

「し、失礼いたします……」

慎重に体重をかける。

すると意外や意外、七緒は私を背負ってひょいと立ち上がった。

「……おお」

と、思わず私は呟いた。

「何？」

七緒が怪訝そうに振り向く。

顔が近い、顔が。

「い、いや。オメーやるじゃねーか的な感嘆詞？」

「意味わかんねー」

七緒が顔を前に向け歩き出したから、私は少しホツとした。この距離でこちらを向かれたら、いくら生まれた頃からの付き合いでついには先日『おっさん』と言われてしまった私だってドキドキせざるを得ない。

そう、おっさんにだって、恥じらいはあるのだ。……うつん、なんか違うよな、この台詞。

「ねえ。重くてもう限界！ ってなったら言ってね。私、地面を這ってでも帰れるから」

「ならねーよ。どんだけバカにしてんだよ」

「いや滅相もない。ただ、私のせいで柔道部期待の星の腰がポロポロに砕けたらたままないなと」

「……」

七緒の背中のみくもりを感じながら、私はなぜか少しだけ、懐かしい気持ちになる。

「あのさ、小学1年生の、2人で学校から帰る途中のときのこと覚えてる？」

「なんだっけ？」

「私が派手に転んで、ひざ血まみれで泣き叫んで歩けなくなっ。七緒、おんぶしてくれようとしたんだけど無理で、結局肩かしてくれて……っていかほど引きずるみたいな感じだよ」

「全然覚えてない」

「そういうことがあったから、七緒が私のことおんぶできるイメージなんてないんだよね」

「そんなん何年も前の話だろ。……っというか、俺、去年のクリスマススイブの日も眠りこけてる心都を背負って杉崎家まで運んだんだけど。覚えてねーのかよ」

「え！ 何それ、全く記憶ないよ！ 怖い！」

「うわ、うるさっ。耳元で叫ぶな」

人の記憶は曖昧だ、とはよくいうけれど、いくらなんでも去年のことをここまで覚えてないなんて、一体私はどうしたのだろうか。確かにあのイブの日は葡萄ジュースを飲んだあとから記憶がなくて気付いたらソファで寝ていた、というなんともミステリーな体験をしたけれど。

っというか、半年以内に2回って、どれだけ背負われているんだ私。穴があつたら入りたい。

「……ま、いーけど。とりあえずその足じゃもう観光は無理だろうから、宿に向かうぞ。待機してる先生もいるだろうし」

「……ごめん」

「別に謝らなくてもいいって」

「うん……ありがとう、七緒」

「くりと無言で七緒が頷く。

私はやっぱり、バカでしつこくてとことん諦めが悪い奴だ。

もうこの恋も終わりにすべきかなあだなんて、どうして一瞬だっ
て思えたんだろう。

「……やっぱり、「ごめん」

「ごめんね、七緒。

諦められそうにないよ。

「……だから、別にいいって」

1年女子からモテていようが、死ぬほど鈍感だろうが、私に望みが全然なかるうが、

こんなに好きで好きでどうしようもないんだから。

左足首を包帯でぐるぐる巻きにされた私は、宿泊先である旅館の特別室（というか実際は先生たちの部屋。体調不良なんかで団体行動がとれなくなった生徒はここに隔離されるらしい）で、1人ぼつと座っていた。

10畳はありそうな広々とした和室。どっしりと渋い床の間に、立派な掛け軸。まさに古き良き日本の部屋って感じた。掛け軸にはなぜか和服姿の老人が描かれている。最初は物珍しかったその繊細なタツチも皺のリアルさも、今はもうすっかり見飽きてしまった。七緒に背負われ宿に到着したのが3時過ぎだから、かれこれ4時間はこちらにいることになる。

私はあまりの退屈さに、思わずため息をつく。

「ああ……暇だ……」

ちょっと前まではこの部屋も賑やかだった。田辺と2人の班行動を終えた美里が足音高くやって来るなり、私の肩を掴んだのだ。

「心都！ 足！ 怪我してたなんて！」

「ご、ごめん。ご迷惑おかけしまして……」

「虫が目に入ったなんて嘘ついて！ もう！ ちゃんと行ってよ！」

「ご、ごめん、本当、すんません……」

どうやらかなり心配をかけていたらしい。美里は泣きそうな顔をして私を叱っていた。

私は深く深く反省した。

まあまあ相手は怪我人なんだし、と後ろから顔を出した田辺になだめられ、美里はようやく落ち着きを取り戻した。

そして、こんな隔離部屋で暇だろうからと私の話し相手になってくれた。

いや、話し相手というよりは 田辺が終始、楽しかった自由行

動のことを締まりのない顔で喋って、美里がそれを信じられないくらい冷たくあしらう、というやり取りがほとんどだったのだけれど。

そんなこんなで現在、午後7時。今頃、生徒の皆はもちろん先生たちだって食事中だ。私は1人味気のない時間を過ごしていた。

やっぱり多少無理しても食事は皆と一緒にとらせてもらえば良かったなあと、今更ながら後悔する。いくら一歩踏み出すことに苦痛に顔が歪んで地の底から響くような呻き声を漏らしてしまうとしても、皆でわいわいご飯が食べられる楽しさと比べればそんなの些細なことだ。

私は畳の上にごろんと寝転んだ。

何の気なしに窓の外を見やる。開け放たれた窓の向こうには立派な桜の木あつて、満開の花を咲かせている。もう5月なのに、この北の大地では今がまさに春爛漫なのだ。

部屋から眺める桜は思った以上に綺麗で、私は「夜桜の良さがわかるなんて私もなかなか大人の女になってきてるじゃん」と1人ほくそ笑んだ。

と、そのとき。

「失礼ー」

ちつとも配慮の気持ちになさそうな声とともに、扉ががらりと開かれた。

慌てて飛び起きると、そこには食事が乗ったお盆を持った七緒がいた。

「なんだよ、寝てたのか」

七緒が呆れ顔で私を見る。

「寝てないよ。ごろごろしてただけ」

「あっそ」

そう言って、七緒が机にお盆を置いた。ほかほかの炊き込みご飯にお味噌汁、魚の煮付けとおひたしと、なんか小鉢の白っぽいやつ（何だろう？）。いかにも旅館のご飯って感じで、おいしそう。

「わぁ、ありがとう。七緒がご飯持ってきてくれたんだ」

「うん。先生が持ってくるはずだったんだけど、なんか下の階でケータイいじってるやつがいて、お盆持ったまま説教してたから代わった。飯、冷めるだろ」

原則としてうちの中学は、普通の学校生活はもちろん、こういう行事にだって携帯電話の持ち込みは禁止されている。けどほぼ全員が密かに持ってきているし、きつと先生たちもそんなこととづくに知っていると思う。だからこそ、現行犯を目撃したときだけは先生たちも思い切り説教せざるを得ないのだろう。

ちなみに七緒はこのご時世、中3にもなって携帯電話を持っていないというわりと珍しい人種だ。本人曰く、今は必要ないけど高校入ったら買おうかな、らしい。

「じゃ、いただきますー！」

私はお盆と七緒の両方に手を合わせた。

「ご飯もお味噌汁もおかず（白っぽいのは、ごぼうのコールスロー Dressing 和えだった）も、とてもおいしい。箸がどんどん進む。そういえば昼食のときは足の痛みに気を取られてお腹いっぱい食べられなかったんだ。」

「……………」
なんとなく視線を感じ顔を上げると、七緒がじつとこちらを見ていた。

「……………何？」

「え」

はたと我に返ったような七緒が、口を開く。

「いや、今ちよっと思ひ出したんだけど……………確かあのとき転んで喧嘩したよな、俺たち」

「あのとき？」

「さつき心都が言ってた、小学1年の、俺が心都を背負えなくて引きずって帰ったってとき」

「……あー」

そういえば、そうだった。あのとき、怪我した私に肩を貸してくれた七緒だけど、結局彼は私の重みに耐えきれず、あと一步で家というところで2人して派手にすっ転んでしまったのだ。

そして私は、同じ箇所を二度擦りむくというこの世のものとは思えない苦しみを味わった。地面に伏したまま「うわあああ七ちゃんのかー！」と八つ当たり混じりに泣き叫ぶ私。その隣で、「おまえが重いんだよばーか！」と同じく尻餅状態のまま涙目で言い返す七緒。あれは、まさに阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

「そんなこともあったねえ。七緒、忘れたって言うたくせに結構覚えてんじゃん」

「だから今思い出したんだよ」

確かそのあとは、家の前で2人で泣きながら言い争っているところをお母さんに発見されて、ホットケーキを作ってもらって、すっかり機嫌も直ったんだっけ。うーん、単純。

思えば、私たちの喧嘩なんていつもそんな感じだった。始まりも終わりも本当に単純で、些細なこと。

今回だってそうだ。昼間まではバトルの真っ最中で険悪極まりなかったのに、富士山くん紛失事件をきっかけに、もういつも通りに戻っている。

私たち、こんなことを15年間で何度も繰り返してきたんだ。

なんか、それって

「山上にさ、ちょっと前に『杉崎とどんなことで喧嘩してきた？』」

って聞かれたんだよ」

と、七緒。

その唐突さに、俯いて物思いに耽ってしまっていた私は、少しびつくりして顔を上げた。

「山上に？」

「うん。そんな話まで聞きたがるなんてあいつ、そーとー心都にぞっこんだよな」

私をからかうように七緒が笑う。

だけど私はなんとも返答できずに、ぎこちなく目をそらした。その話題、非常にコメントしづらい。

七緒は私の挙動不審っぷりを気にもとめず、続ける。

「だから小さい頃の喧嘩のネタとか話したんだけど、なんかあまりにもくだらないことばかりで、思い出しながら我ながらびっくりした」

「……私も今さっき、同じこと考えてたよ。しょーもない喧嘩ばかりだなんて」

「あ、やっぱり？」

ちよつと笑えた。

「なんかおかしいよね、本当。今日だって数時間前まで喧嘩してたのに」

「うん」

物心ついたときから繰り返している、くだらなくて馬鹿みたいな喧嘩。今まで特別に考えたこともなかった。

つまりそのくらい、七緒との日々は「当たり前」で「日常茶飯事」で やっぱりどこか居心地がいいんだと思う。

それって、もしかしたら、私にとって「幼馴染みの七緒」の存在は自分の認識以上にとんでもなく大きいってことなのかもしれない。

「……だから、『関係ない』っていうのは、違うよな。やっぱり」
ふいに、真面目な顔で七緒が呟いた。
数日前の喧嘩でのやりとり 『私のことはあんたに関係ない』
『そうですね』 のことを言っているのだとすぐにわかった。
どうやら七緒もこの数秒間の沈黙で、私と同じことを考えていたらしい。それがなんだか、すごく嬉しい。
「頭に血が上ってたからね。あれは……取り消しだね、お互い」
「……ま、一応、それなりに重要な『幼馴染み』ってやつだもんな」
「一応とかそれなりとかは余計だよ」
それに「重要」じゃなくて、「大切」とか「かけがえのない」とか、もう少し色気のある言い方をしてほしい。……まあ、この男にそんなものを求めるのも無理があるけど。

開けっ放しの窓の外で、強い春風が吹いた。
満開の桜の花びらたちが舞って、数枚この部屋にも入り込んでくる。

「あ！ ジンクス！」
「は？」
「こないだも言ったじゃん！ 桜の花びらを空中でキャッチできると願い事が叶うって」

私は頭から捻挫のことも吹き飛び、勢いよく立ち上がってしまった。

「いたたたたた！」
「うわ、アホか」

七緒が心底呆れた顔で私を見る。

「だって、いまだに桜咲いてるのなんて北海道くらいだもん！ これ逃したらもう来年の春までチャンスはないんだよ！」
「だからってそんな……」

そう言いかけた七緒の目の前に、ひらひらと風に遊ばれた一枚の

花びらが落ちてきた。

彼は反射的にそれに手を伸ばし、掴む。ゆっくり手を開くと、中にはちゃんと一枚の花びらが収まっていた。

キヤツチ大成功。

「すごい！ 七緒、箸で虫とかつかめちゃう系の人になれるよ！」

「偶然だつて」

「ほら、早く願い事しないで！」

そうは言ったものの、私は七緒がこのテのジnkクスやらおまじないやらを信じるとは到底思えず、こいつきつとまた夢のないことを言い出すんだろつなああと覚悟していた。

だけど予想に反して、七緒は手の中の桜を見つめ、呟いた。

「願い事かぁ……」

あら、意外と素直。

私は少し驚きながら、神妙な顔で悩む幼馴染みを眺めた。

家族でもないし友達とも少し違うし、もちろん恋人でもない。

私と七緒は、幼馴染みだ。

彼に恋をしてしまった私にとって、この肩書きが呪縛となるのか嬉しい絆となるのかは、正直、いまだによくわからない。

だけでもし万が一、私の思いが通じて晴れて恋人同士になれる日や、残念ながら大玉砕してしまう日なんてのが来たとしても、絶対に「幼馴染み」の関係だつてなくなならない。いや、なくせないに違いない。

私はそれをあまり悲観的には思わなかった。

なぜなのかは、やっぱりよくわからないけれど。

「決まった？」

私の問いかけに七緒が顔を上げた。
ばっちりど、目が合う。

「……………どうしような」

少し困ったような笑顔。

気のせいだろうか。それはなんだか最近増えてきた、知らない人
みたいに見える七緒の表情だった。

21&1t・春風と、大成功>t;；（後書き）

6章はこれにて終了です。ありがとうございます。

だらだらやっているこの連載ですが、次の7章は、大きな転機があるとか、ないとか、あるとか…（すみません。こういつのやってみ
たかった…；）

ご意見感想などいただけたら嬉しいです。

<少女と、日記と、暗中模索>

5月×日 水曜日 晴れ

今日はなんだか、学校が静かでした。

3年生の先輩方が修学旅行に行っているからです。

やっぱり一学年抜けると、校舎全体ががらんとしています。

杉崎先輩たちも今ごろ北海道を楽しんでいるのでしょうか。

お土産話を聞くのが、今からとっても楽しみです。

私は今日の放課後も学校の図書室に行きました。 禄ちゃんと勉強するためです。

突然怖い顔で「勉強教えろ」と言われたのが2週間前。それから私の塾がある日以外はほぼ毎日一緒に図書室に通っていますが、禄ちゃんは今のところ音を上げることも投げ出すこともなくちゃんと真面目に勉強をしています。

ただ、「あの進藤が勉強を！」と興味深そうにこつちを見てくる図書委員の子を睨みつけて号泣寸前まで追い詰めるのは、ちよつとやっぱり、やめてほしいな。

とにかく禄ちゃんは信じられないくらいやる気に満ちています。

今月末にある中間テストが、というか、そこで赤点を取って夏休みの補習に強制参加になることが、よっぽど嫌みたいです。

今日も勉強している最中、「夏休みは七緒先輩と遊びまくる」と息巻いていました。

東先輩はたくさん柔道部の練習があるだろうし、しかも受験生なんだからそんな暇はないんじゃないかな……と思いましたが、口には出しません。先輩との夏のプランを勝手に思い描く禄ちゃんがす

ごく楽しそうだったから、わざわざそれを壊すような発言をする「
ともないよね、」と思ったからです。

禄ちゃんって、本当に東先輩が大好きなんです。

今日、私たちは国語を中心に勉強していました。

禄ちゃんは国語が、その中でもとりわけ今回の中間テストの出題
範囲の一部である四字熟語が苦手みたいです。

今パツと思いつく四字熟語ってある？ と聞いたら、禄ちゃんの
答えは「弱肉強食」と「喧嘩上等」。ちよつと頭が痛くなつてしま
いました。

とりあえず教科書と私のノートを見て、1つ1つ意味を確かめて
いくことにしました。

しばらくすると、禄ちゃんが「暗中模索」の項目を指さし「これ
はわかる」と言いました。テスト範囲の中でもわりと難しい部類の
四字熟語です。意外に思っていると、さらに信じ難いことが起こり
ました。

なんと禄ちゃんは目をつぶったまま、「暗闇の中で手探りで探す
こと。転じて、手がかりのない物事を探し求めること」とかなんと
か、すらすら暗唱し始めたのです。どうやら辞書の解説を丸暗記し
ているみたいです。

意外なんてレベルじゃありません。信じられない。どうしちゃっ
たの、禄ちゃん。

驚いて訊ねてみると、

「前に七緒先輩が言ってたんだけど、俺、そのときは全然意味わか
なくてよ。家に帰ってすぐ辞書引いて調べたんだ。で、何回も読
んでるうちに覚えちゃった」

と、誇らしそうに禄ちゃんが言います。

なるほど、納得です。東先輩絡みなら、この子は普段と全く違っ
た自分に変身できるんです。

でも、暗中模索が登場する会話って一体何なんだろう……謎です。禄ちゃんに訊ねてみても「男の拳は喧嘩のためじゃねえんだ、でも何のためかっていうとそれは七緒先輩もまだ暗中模索中なんだ」とか興奮気味に喋られて、結局よくわかりません。

だから私は一言、率直な感想を言いました。

「禄ちゃん、本当に東先輩が大好きなんだね」

「あ？ なんだよ、文句あんのか」

「ううん、ない。でも、もしも東先輩に彼女さんができて、ラブラブで、禄ちゃんと話したりする時間が減っちゃったら……どうする？」

と、言った後、ちょっと意地悪な質問だったかなあと後悔しました。

けど、これは前々から聞いてみたかったことです。私は杉崎先輩が好きだし、その恋の成就を心から願っているけど、東先輩のことを幸せそうに語る禄ちゃんを見るのも好きです。だからたまに自身どちらを応援しているのかわからなくなってしまい、そのたびちょっと複雑な気持ちでした。

禄ちゃんは私をぎろりと睨み、言いました。

「んなの、七緒先輩が幸せなら祝福するに決まってるじゃねえか」
「やっぱり今日の禄ちゃん、色々と私の予想を裏切ってくれます。」

同学年の子たちから陰で「デスナイフ」や「13歳のチンピラ」と勝手なあだ名をつけられ恐れられている彼の口から出たとは思えない（ごめんね）言葉に、私は驚きました。

禄ちゃんはさらに「七緒先輩の幸せは俺の幸せだ！」と続けました。

それは図書室では絶対に許されないような大声だったけれど、私は禄ちゃんをたしなめるのも忘れ、黙り込んでしまいました。

禄ちゃんの言うこと、なんだかすごく覚えがあります。

私も、禄ちゃんが東先輩のことを楽しそうに話す顔が好きで、見ているだけで嬉しいから。

好きな人の幸せは、自分の幸せ。わかる。わかるよ、禄ちゃん。私と禄ちゃん、同じだったんだ。

「けどまあ、七緒先輩とその女に一発ずつ頭突きくらいはお見舞いするかもしれないけどな！ 祝いのプレゼントとして！」

と、眉間にしわを寄せ、わなわなと拳を固め、禄ちゃんが言いました。想像とはいえ「東先輩に彼女が」なんて状況はやっぱりさうとう耐え難いみたいです。

こういうところは、すごく予想通りの禄ちゃんだなあ、と私は笑ってしまいました。

「頭突きは……やめたほうがいいと思うよ、禄ちゃん」

「いいんだよ、それがケジメなんだから」

「そう」

「華てめえ何笑ってんだコラ」

と、禄ちゃんが鋭い目つきで睨んできて、私はちっとも怖くありません。

禄ちゃんが本当は優しい人だって、知っているからです。

もし将来、禄ちゃんに素敵な恋人ができたら、そのときは……私も頭突きしちゃうのかな。なんて。

テストまであと少し。明日も勉強頑張ります。

終了を告げる鐘が鳴る。私はシャープペンを置き、心の中でひっそりと歓喜の声をあげた。

ああ、終わった！ 3日間の苦痛。地獄の中間テスト。

3年生になって最初のテストというのは、気合も労力も今までと全く違う。学年が変わり勉強が難しくなるので、ここでついていけなくなつてはこの先ずっと落ちこぼれる可能性もありえる。

それに加え、今期の成績は高校の推薦入試にも大きく影響してくるのだ。生徒全体が熱気むんむんで必死に勉強するものだから、恐らく学年の平均点も今までより上がるだろう。だから私も今回は力を入れて勉強した。そのぶん疲労も大きければ、終わった瞬間の喜びもひとしおだ。

張り詰めた空気がほどけ、ざわつく教室内。回収のため後ろから解答用紙が回ってくるのを待つ間、開放感から思わず鼻歌なんか歌ってしまう。

「ご機嫌っすねー」

と、隣の席の七緒がこちらを見る（テストのときは座席が名前順になる関係で、なんとなんと、ラッキーにも七緒と隣同士になれるのだ。クラス替え初日にこの事実を知ったときは、ついつい小躍りしたくなってうすぐ両膝を必死に抑えたっけ）。

明らかに小馬鹿にしたようなその目線。さてはこいつ聞いていたな、私の鼻歌、きのしのズンドコ節。

いつもならスイッチオンで挑発に乗ってやるところだけど、今の私は幸せいっぱい、寛大だ。解答用紙を前に回しながら、にっこり

余裕の笑みで答えることができる。

「うふ。あたりまえじゃん。魔の中間が終わったんだもん。七緒だって嬉しいでしょ？」

「そりゃ嬉しいけど……それ以上にねみい」

七緒があくびをかみ殺しながら言った。よく見ると目の下にうつすらクマまである。どうやら昨夜、かなり遅くまで勉強したらしい。「帰ってゆっくり寝な寝な。……っっていうか、ねえ、国語の点数勝負しようよ。コンビニのアイス賭けて」

「はあ？ 普通、勝負ってテスト前に約束するもんだろ」

「だって今日の国語、予想以上に解けちゃったんだもん。85点はカタイな」

「うわ、きつたねえ。自分が調子良かったら一方的に勝負ふっかけんのかよ。スポーツマンシップに反するぞ」

「私、スポーツマンじゃないし。バリバリ文化系料理部員だし」

「……百歩譲って数学だったら受けて立つけど」
もともと苦手な数学には、今回もあいにくあまり自信がない。私は七緒の譲歩案を丁重にお断りした。

七緒とは3週間前の修学旅行以来、特に大きな事件もなく仲良くやれている。一度わけもわからずぎこちない態度をとられた上に大喧嘩しているだけに、いつも通りであるはずの今のこの状況に小さな幸せを感じてしまう。

それに、あのとときの七緒のおんぶ。後々冷静になつて考えてみると、なかなか少女漫画的なシチュエーションだったんじゃないかと我ながら思う。

七緒が私を心配して走って探しに来てくれたのもかなり嬉しかったしな！。なんだかんだ一生忘れられない旅行になっちゃったな！。そんなことを思い返してムフフと微笑むと、

「……え、何、こわっ」

七緒が大げさに身を震わせた。

何とでも言ってくれ。今の私は心底ご機嫌なのだ。

また2ヶ月後には期末テストがやってくるけれど、とりあえず今は目の前の壁をひとつ越えたことが嬉しい。今日は自分へのご褒美に雑誌でも買って帰ろう。

しかし、しばらく続く予定だったこの開放感は、その直後、あっさりとお消え去った。帰りのホームルームで進路調査票が配られたのだ。

「それぞれ第一志望から第三志望まで記入して、来週中に提出するよう」

すぐ前にいるはずの担任教師の声が、どこか遠くから聞こえてくるような錯覚をおぼえる。

私は呆然と手の中の糞半紙を見つめた。

そつだ。いくら中間テストを乗り越えたからといって、受験生だという事実には変わりはない。そろそろ真面目に進路について考えなくてはいけない時期だ。

進路。

正直言って、現段階で何も考えていない。漠然と「まだ就職する気はないし、両親も高校行けって言ってるから、進学かな」「特別こだわりとか行きたい学校もないから、とりあえずお金のかからない公立校かな」という気持ちだけはある。

しかし本当に「それだけ」。具体的な志望校はおろか、推薦入試でいくのか一般入試でいくのかも決めていない。

形も信念もない、ふわふわとした思いだけなのだ。

もしかして私、やばい？

慌てて周りを見回すと、クラスメイトたちは皆、配られた調査票に多少憂鬱そうにしてはいるものの、特に取り乱す様子はなく、「

来るべきものが来た」という顔だった。中には、顔色一つ変えずに周りと帰りの挨拶を交わしてさっさと教室を後にする者もいる。

なんなんだ級友たちよ、その余裕っぷりは。

これが5月下旬の受験生の、ごく普通の姿なの？ 私、とんでもない遅れをとっている、救いようのない超ボンクラ野郎なの？

じわじわとした焦りが足元からこみ上げる。

「そっいえば、心都」

帰り支度をしながら、隣の七緒が言う。のんきな声だ。

「最近、山上と会った？」

「ううん。私たちの次の週の週が西有坂の修学旅行だったり、その後すぐテスト期間入ったりで、結局もう3週間くらい会ってない」

一時は毎日のようにあった、山上の忠犬八チ公ばりの「待ちぶせ」。それがピタリとなくなつたので、学校の違う私たちは当然、めつたに顔を合わせることもないのだ。

そのかわりというか、彼からのメールは毎日のように届く。「今日の晩飯はカレーだった！」とか「部活が楽しかった！」とか、交換日記のような内容なので、とりあえず私も「今日の夕飯は塩さばだった！」「部活ではクツキーを作った！」と同じようなテンションで返信している。果たしてこれが正解なのかはわからない。こんなメールで山上が楽しめているのかも、わからない。

そして更に不可解なことに、彼のメールの本文の最後には必ず「ILUSM」という謎のアルファベット5文字が添えられているのだ。辞書をひいてもそんな英単語は出てこないし、一体何なのだろう。何かの暗号？ それともオリジナルの署名？ いつもルンルンUSA育ちのマッチョ男より、とか？（もしそうだったらどうしよう。怖すぎて今後山上とメル友を続けられる自信がない）

「……でもちようど今日、ちよびつと会う約束してる。修学旅行のお土産がそろそろ腐っちゃうから」

私は机の脇に提げた大きな紙袋を指し示した。修学旅行前日に交わした約束通り、山上にはお土産を2つ買ってきていた。

「ああ、そうなんだ。山上喜ぶな」

と、事もなげに七緒が相槌を打つ。

私は「東先輩、山上さんにやきもち説」を嬉しそうに唱えた華ちゃんに、あらためて心の中で詫びずにはいられなかった。

「……七緒も一緒に行く？」

冗談っぽく半笑いで訊ねると、案の定、奴も軽く笑って返してくる。

「いや、いい。部活あるし」

「……だよねえ」

「山上によるしく」

予想通りの答えだ。

なんとというか　ごめん、華ちゃん、心からごめん。

私は部活へと向かう七緒の背中を見送りながら、ぼんやりと考えた。

七緒は進路どうするのかな。

どこの高校に行きたいとか、もう決めたのかな。

もちろん相談し合って進学先をそろえるような甘くベタベタした関係でないことは重々承知している。それでもやっぱり気になる。

15年来の幼馴染みとしても、片思い中の身としても。

そこまで考えて、はっと我に返る。

いやいや、その前にまず自分の進路だ。人のことを気にしてそわそわしている場合ではない。

こんな何も定まっていけないような状態じゃ、恋する乙女（ハートマークを添えて）以前に、受験生として失格だ。

もう少ししっかりしなきゃ。

私は自分自身に活を入れると、机の上に出しっぱなしになっていた進路調査票をできる限り丁寧にたたんで、鞆にしまった。

2 & 1 t ; G の決意と、H の二乗 & g t ;

「はい、どうぞ」

そう言っただけは、大きな紙袋を差し出した。中身は北海道の名産である芋のお菓子が2つ。約束通りの修学旅行みやげだ。

「おお！ サンキュー！」

山上が恭しい手つきでそれを受け取る。

彼とお馴染みの会合場所となった、小さな公園。その可愛らしいブランコにガタイの良い山上が座って笑顔を浮かべている様子は、ちよつといまだに慣れない。

ぼちぼち夕飯も出来上がる夕暮れ時なので、今日も園内に子どもたちの姿が見えないのが救いか。

若干の抵抗はあったけど、立ち話もなんだと思い、私も隣のブランコに腰を下ろす。

「なるべく早めに食べてね。っていうか一刻も早く食べてね」

すでに購入からかなり日が経っているため、正直言って賞味期限がギリギリなのだ。

「わかった！ 何を犠牲にしてもこれだけは食べきるぜ！」

笑顔の山上が頷いた。

彼のこういう表情には何か不思議なパワーがあると、私は前々から思っている。

明朗で、豪快で、からつと明るいい心からの笑顔。恐らく初対面の人でもこの顔を見たら「このマッチョ絶対いい奴だな」と思わずにはいられないだろう。

「しかし、本当久しぶりだよな。3週間ぶりか」

そのパワフルな笑顔を崩さないまま、山上が言う。

「そうだね。テスト期間中だったしね」

「杉崎から『会おう』って誘ってくれるなんて、俺、ほんと感激し

たんだからな。こりゃ両思いも近いってことか」

「いや違うから。賞味期限的な事情があっただけで、この誘いに変な意味はないから」

思わず片手を敏捷に繰り出し、古典的な「つつこみポーズ」をとってしまった。

悪いけど、ここはしつかり否定しておかなければいけない。以前七緒に怒られたように、これ以上山上に青春時代の浪費をさせてしまえば、きつと私はとんでもない罪人になるだろう。

しかし当の山上は、私の渾身のつつこみを笑い飛ばした。

「ははは！ 照れるな照れるな！」

「照れてない！ 馬鹿かッ」

「あー、久々に聞く杉崎の怒鳴り声はいいなー。うんうん」と、山上がうつとり目を閉じる。

駄目だ、こいつ、やっぱりちよつと変だ。

ひどい疲労感をおぼえた私は、「彼が目を閉じている間に黙って帰ってしまおうか」と考えた。

しかしその間に山上は瞑想から戻り、こちらに向き直った。

「修学旅行はどうだったんだ？ 東と気まづいまま楽しめた？」

「うん。まあ、色々あったけど……結局仲直りして楽しめたよ」

私は修学旅行中の「色々」を思い返し、そして、決心する。

あの旅行中に確信したことを、山上に伝えなければならぬ。

「あのさ、山上」

「ん？」

「私、ゴキブリ並みにしぶとい女なんだよね」

「おう、それも杉崎の魅力のひとつだと思っぞ」

「……………どうもありがとう」

自分で言っておきながら、ものの例えの「ゴキブリ」をさらりと肯定してしまうと、なんだか複雑な心境だ。

だけど今は、その僅かな引っ掛かりにつまずいている場合ではな

い。

私は隣のブランコに座る山上の目を見つめ、先ほどよりも少し大きな声で言う。

「そういう私だから、キツパリ振られる日が来るまでは、七緒への片思いを諦めるなんて絶対に無理だと思う。だから、申し訳ないけど、山上の意見通りにはできない」

山上が少し首を傾げる。

「俺の意見って？ 前に言った『もう東のことは諦めたほうがいいってやつ？』」

「うん」

「なんだ、あんなことが」

大口を開けた山上が、ハハハと いや、H A H A H A と表記したいくらいのアメリカンな快活さで 笑う。

決意の告白を思いがけず笑い飛ばされ、私は当然ショックを受けた。彼いわく「あんなこと」「らしいあの言葉、私にとっては相当なパンチ力があつたのに。」

山上はカラフルなブランコから勢いよく立ち上がると、私に向き直った。

「あんなの気にすんなよ。意見なんてもんじゃないし、ただのアドバイス？ いや願望？」

「はあ」

「長年しつこく片思いしてるのは俺も同じなんだから、杉崎の諦めたくない気持ちはよくわかる」

「……」

思わず、うつむく。

私が言うのもおかしい話だけど、私と山上はやっぱり境遇が似ていて、お互い共感できてしまうことが多い。

「杉崎は東を諦めないし、俺も杉崎を諦めない。そういうことだ！ お互い頑張ろーぜ！」

前向きすぎる笑顔で、山上が右の拳を突き出してきた。

「え？」

この流れで、まさかの、拳ハイタッチ？

私の言語能力が正常なら、今の今まで、彼との会話のテーマは「恋」だったはずだ。

それが何ゆえ、いきなりこんな拳を突き合わせて、男の友情確認的な行為に？ 少年漫画のひとコマ的な状況に？

共感できる部分が多いと言ったばかりだけど、早くも訂正だ。

私、山上に関しては、「共感」以上に「理解不能」な部分が多すぎる。

しかし、不信感は隠せないけれど、それでもさすがに無視することはできない。

私は仕方なく片手を差し出す。

すると山上は私の手の中に無理矢理なにかをねじ込み、きゅつと握らせた。どうやら拳ハイタッチではないらしい。

「それ、俺からの修学旅行みやげ」

にっこり笑って山上が言う。彼が通う西有坂中学校でも、私たちの中学と一週違いで北海道への修学旅行があったのだ。

そつと手を開くと、中には銀色の華奢なチェーンにつながれた、小さなガラスのハートがあった。

「……ネックレス？」

「おう！ ガラス工芸の店で見つけたんだ。どーだ、可愛いだろ！」
「うん」

あれ。なんか、ちょっと、やばい。

瞬間的にそう感じた。

当然ながらこの私、男の子からアクセサリをもらうのなんて生まれて初めてだ（何しろ七緒からのプレゼントはいつも独特のセンスの品ばかりなのだ）。

だから今、自分でも驚くほど感激して、情けないほどドキドキしてしまっている。胸が苦しい。

がきつかけだと思っただよなー」

「え？」

初耳だった。山上も七緒も、そんなこと今まで一度も口にしていない。

「いらんことって何？」

「ああ、そりゃ東に聞いてくれ」

「はあ？」

「俺、もう杉崎にぶん殴られたくないもん」

けろりとした表情でのたまう山上。

そんな彼を前にして、ふつつつと怒りがこみ上げてくる。「もんじゃねえよ、「もん」じゃ。」

私は山上の襟首を掴み、揺さぶった。

「おいコラ、ここまで言ったんだからちゃんと最後まで話しなさいよ！　こんなの生殺し状態だよ！」

「オウ、ニホンゴ、ムツカシイネー」

「こんなときだけ帰国子女ぶるな！」

山上はするりと私の拘束を抜けると、

「じゃあな！」

信じられない速度で去っていった。マッチョのくせにすごいフットワークの軽さだ。

遠ざかるその背中を睨みつけ、ついつい悪態をついてしまう。

「くそ……」

逃げられた。綺麗なネックレスと、大きな謎を置きみやげに。

これじゃ色々気になって、きつと今夜は眠れないだろう。

ああ、そういえばあのメールの「ILUSM」の暗号の意味も聞きそびれちゃったな、と気付いて、私は思わずため息をついた。

その晩、私はやっぱりなかなか眠れなかった。いや、正確に言う
と、眠気はあるのだけど、なかなかベッドに入ることができなかつ
た。

自室で机に向かい、げんなりと呟く。

「どうしよう……」

目の前には本日配られた進路希望調査票。

夕飯後に両親に相談したところ、ひと言、「心都が行きたいとこ
ろに行きなさい」と温かい言葉だけをいただいた。未来への可能性
溢れる娘を持つ親としてはきつとパーフェクトな対応だけど、ボン
クラ予備軍な娘である私はあまりの自由度の高さにちよつと困つて
しまう。

進路つて、どうやって決めればいいんだろつ。

私が行きたい高校つてどこなんだろつ。

美里や、他のクラスメイトたちは、どうやって決断しているんだ
ろつ。

……七緒は、どうするんだろつ。

睡魔にうつらうつらしながら、それでも色々思い悩んでシャープ
ペンを握っているうちに、無意識に『第一志望：お嫁さん（東家の）

第二志望：超美人 第三志望：大金持ち』と記入していた。

ハツと正気に返って用紙を見つめ、

「見事に欲望まる出したなあ……」

我ながら、逆に少し感心した。

3&1t:朝のブルーと、センチメンタル>

私と七緒は、同じ高校に進路を決め、無事に合格、進学した。彼と一緒に高校生活は本当に楽しくて、あつという間に過ぎていった。

文化祭を一緒に回ったり、不良に絡まれている私を七緒が助けたり、縁日でおもちやの指輪を買ってもらったり、夜の校舎に忍び込んで屋上で星を眺めながら将来を約束し合ったり……、色々なイベントを経て、なんやかんやで私たちは結婚した。

今は赤い屋根の小さなお家で家族3人暮らし。

小学校に上がったばかりの娘ナナコ（七緒に似てとても可愛い顔をしている）と、白いティーカップで紅茶をいただきながら、夫の帰りを待っている。

愛娘の頭をなで、私は叫んだ。

「なんて幸せな人生！」

自分の大声で目が覚めた。

辺りを見渡すと、そこは赤い屋根の小さなお家のリビング……ではなく、散らかり気味な自分の部屋。窓から朝日がさし込んでいる。私は机に突っ伏した体勢で寝ていた。そのせいで体の節々が痛い。

「うう……。ナナコ、お水持ってきて……」

呟いた直後、我に返る。

すっかりしる自分。

私は東心都じゃなく、杉崎心都。中学3年生。もちろんナナコなんていない。

机の上には、枕にしていたせいで若干しわが寄った進路希望調査票。こいつについて悩んでいるうちに、いつの間にか眠ってしまったらしい。

ああ、幸せだった。

私は今覚めたばかりの夢の内容を思い返し、うっとりため息をついた。

この手の夢は今までも何回か見たことがあるけど、その中でも一番ハッピーでロマンチックな大長編だった。

二度寝したら続きが見られるかな。

そんなことを思いながら、ふと壁に掛けられた時計を確認すると、

「えっ、8時!？」

既に家を出なければいけない時間だ。

私は慌てて椅子から立ち上がった。

遅刻ぎりぎりです教室に滑り込むやいなや、美里にド突かれた。

「その格好！」

鼻息荒い美里は顔の横で拳を握りしめ、目を三角にしている。

美少女にあるまじき姿。彼女をそんなふうになさせてしまっているのも、私のひどい格好のせいだ。

本日のわたくし　寝坊したため制服をちまちま（ボタンをとめたりリボンを結んだり）と着る時間がなく、学校指定の青いだぼだぼジャージ。もちろん髪をブローする暇なんかないので、ほぼ起きたままのぼさぼさヘア。

半年ほど前、つまり「可愛くなって七緒に告白する」と決意する前まではしょっちゅうだった格好だ。時間がなくてやむをえずとはいえ、久しぶりにこの怠惰スタイルで登校したところ、美里は怒り狂った。

「最近は何日ちゃんとした格好してると思ったのに！」

「いやあ、ちよつと寝坊しちゃって……」

頭をかきかき答える。

美里は何かをぐつと飲み込んだような顔を見ると、深呼吸ひとつ、私を椅子に座らせた。

「……」

「み、美里、いま舌打ちした？」

美里は何も言わずにポーチから複数のこまごました道具を取り出し、私の背後に回った。

「恋する乙女だったら、多少遅刻してでも最低限の身だしなみくらいは整えてきなさいよ」

そう言うとき彼女は私の髪をブラシでとかし始めた。

「髪の毛は今ホームルーム始まるまでの間にやってあげるから、次の休み時間にちゃんと着替えてきなさい」

「……うん」

直接見えないにも関わらず、美里の手さばきがすさまじく俊敏であることはよくわかった。

きっと私が1人でやっていたら何十分もかかっているであろうヘアスタイリングを、彼女はみるみる進めていく。

「でも、心都が寝坊なんて珍しいわね。いつも早めに学校来てることが多いのに」

「昨日、進路調査票書いてたらなかなか眠れなくてさ」

美里が私の髪に何やらクリームのようなものをつけながら、「なるほどねえ」と呟いた。

かすかにフルーティな香りがする。それがワックスなのかムースなのか、私には皆目見当もつかない。

「美里はもう進路決まってる？」

「一応ね。今のところ第一志望は南高校」

美里が口にしたそこは、公立校にはめずらしく英語に特化した特進コースがあることで有名な高校だ。

「そっか、美里、英語の成績良いもんね」

「良いかはわかんないけど……何が勉強したいかって考えたら英語かなって。大学でそっちの学科に進むなら高校のうちから重点的にやっておいたほうがいいでしょ。英語系の資格とかも色々とりたいし、南高ならそういう講習も充実してるみたいだから」

私は感心した。やはり美里はしっかりしている。

自分のやりたいことがわかっていてそれに向かって着実に歩めるなんて、私から見たら相当レベルの高い段階だ。

「心都は？ 調査票、結局書けたの？」

美里が私の毛先の束を微調整しながら問う。

「うつん……まだ全然。なんか考えれば考えるほどわかんなくなってきたやつて」

「大丈夫よ、そのうち決まるわよ。まだ夏前だもん」
はい完了、と美里が私の頭を軽く叩いた。

鏡を見ると、数分前までの乱れ具合が嘘のように綺麗にまとまった自分の頭があった。おまけに、1番癖がひどかった箇所には可愛らしい花のピン留めまでつけてくれている。

「わあ、ありがとう美里」

「今後は自分でちゃんとしてきなさいよ。はつきり言ってさっきまでの心都の頭は富士の樹海……いや、未開発のジャングル状態よ」
「……ど、努力します」

私の恋を誰より応援してくれている彼女は、納得したように頷いた。

高校が別々になったら、もうこうして美里に世話を焼いてもらうことも減るのかな。一緒にお弁当食べたり、くだらない話でキヤツキヤしたりもできなくなるのかな。

そんなことを考えて、急にたまらず寂しくなってしまう。

「……私、美里がいなくて生きていけるのかな……」

「重っ」

美里が目を眇める。

「なんなのよ、それ」

「なんかもうすぐ卒業だと思つと寂しくて……」

「まだ10ヶ月もあるのに気が早いわね」

「10ヶ月しか、だよ」

「なら10ヶ月後もしっかり生きていけるように、せめて今から身だしなみくらいはきちんと自分で整えなさいって」

「うつん……」

私は鼻をすすり上げ、気持ちを立て直した。

ああ、中学生生活最後の1年に突入したからだろうか、近頃どうも

感傷的になってしまつて良くない。

そう。きつと、全部このセンチメンタルのせいなのだ。

願望たれ流しの夢を見たのも、桜の花びらへの願い事を考える七緒の顔が少し大人びて見えたのも、山上のこじやれたプレゼントに心乱れてしまったのも。

「あ」

ふと、あることを思い出す。

「あの、英語が得意な美里さんにひとつお聞きしたいことがあるんですが……」

「急にどうしたのよ」

「ILUSMって何だと思う?」

ILUSM 山上からのメールの最後に毎度必ず添えられている、謎の暗号。

辞書を引いてもその意味はわからず、昨日山上に尋ねようとしてすっかり忘れていた。

「ああ、それ略語よ。アメリカの10代の女の子なんかメールでよく使うやつ」

「そうなんだ……」

いくらアメリカ帰りとはいえ、図体に似合わず随分可愛いメールテクを使うもんだなあ（そういえばたまに、いわゆるデコ絵文字を使ってメールを打ってくることもある。流行りの乙女系ってやつか?）。

でも、とりあえず「いつもルンルンUSA育ちのマッチョ男よりの略ではないようで、その点は少し安心した。

「どういう意味なの?」

「I love u so much……あなたが大大大好き！
つてことね」

さらりと美里が言う。

しかしその威力は絶大で、私は卒倒しそうになった。

「あ、あ、あいらびゅう……ですか」

山上の並外れたストリートさはじゅうぶん知っているつもりだったけど、それでもまだ甘かったらしい。

まさかそんなメツセージが毎回メールに込められていたなんて。

そして、そんなことに少しも気付かず、私は「今日の夕飯は塩さばだった！」とか返信していたなんて。

なんだか色々と恥ずかしい。

「どうしたの心都、顔が真っ赤よ」

「な、なんでもないよ。ちょっと最近、血の気が多くて……」

美里は、私の下手な言い訳に「そうなんだあ」と納得するほど鈍くはなかった。

「あ、山上くんね」

「……」

「ILUSMって入ってるメールをもらったんだ」

全てを見透かされ、私は固まった。この友人はどうしてこんなにも鋭いのだろう。

うふふと笑った美里は、悪戯っぽく私の肩を叩いた。

「いいじゃない。さすがアメリカ力帰りね、素敵。そんなに一直線に気持ちぶつけてくれる人って今時なかなかいないと思うけど」

「いや、田辺もかなりそういうタイプじゃない？」

「田辺くんは全然方向性が違うわよ」

美里の声がぐっと冷たく、低くなる。

しかし教室内の少し離れた場所にいたご本人にはばっちり聞こえていたらしい。

「何何、俺の噂っ？」

意気揚々、目尻を下げて飛んできた田辺に対し、美里は心底面倒くさそうな一瞥を投げた。

「惜しいわね。噂っていうよりは悪口よ」

「わ、悪口!? 栗原……! 俺たち『未来あるお友達』じゃなかったのか!?」

「その未来が仲良しこよしのハッピーエンドとは限らないわよね」

あ、田辺がちよつと泣きそうだ。頑張れ。

『ラブチャンス同盟』の盟友である私の心のエールが聞こえたのか、田辺は涙を堪えその場に踏みとどまった。

「……いや! それでも! それでも俺はハッピーエンド目指すぞ! 少しでも愛が生まれる可能性がある限り、俺は……!」

美里はもはや聞いているのかいないのか、制服のポケットから生徒帳を取り出し「本校沿革」のページを熟読し始めた(絶対に今のタイミングでやる必然性のない作業だと思う)。

ちよつと朝練から帰ってきた七緒が、「うわあ」と顔をしかめた。

「何の騒ぎ?」

「田辺が美里に100回目くらいの玉砕中」

「ふうん」

七緒は特に驚きもせず、2人のやりとり(愛についてやかましく演説する田辺と、沿革に飽きて年間行事のページに移った美里)を眺める。観葉植物でも見るようなその視線は、いかにこの田辺の不遇っぷりが日常茶飯事であるかを表している。

「……ねえ」

私の呼びかけに、視線は相変わらず大演説に向けたまま、「ん?」と七緒が答える。

今、聞いていいかな。

いいよね。

「山上に何言われたの?」

「え」

七緒が、目を丸くしてこっちを向いた。

「山上が言ってたよ。『お前らが喧嘩したのは俺が東にいらんこと言ったのも一因だ』って。山上と2人で会って何か言われたんでしょ？」

「……」

「こんなにもわかりやすく目線を泳がせる人間を、私は他に見たことがない。」

つまり、そのくらい、彼はあからさまに動揺していた。

「ねえ、いらんことって何？」

「……別に大したことは言われてない」

「これほど態度に出しておいて、そんな言い訳が通用すると思ってるのだろうか（まあ、さっき美里に「血の気が多い」で誤魔化そうとした私が言えたことじゃない気もするけど）。」

「気になるじゃん。知りたい」

「……」

「教えてよ」

なるべく圧迫感を出さないよう心がけて笑顔で詰め寄る。七緒はそのたび、可愛らしい顔を歪め、じりじりと距離を取っていく。…

…なんだかお姫様を追い詰める悪い魔女みたいな気分だ。

「ねえつてば」

「……あーもう！ うるせーな！ いいんだよそれは俺が自分で決めるから！」

「はあ？ うるせーだなんて、そんなこと言う子に育てた覚えはないわよ！」

「育てられた覚えもねえよ！」

少しヒートアップし始めたとき、タイミングよく担任の先生が教室に入ってきて、バトルは中断された。

私は七緒の背中を睨みながら自分の席に着く。

一体なんなんだ。山上も七緒も真相を教えてくれないだなんて、気持ち悪いことこの上ない。

それに、悔しく悲しく情けないけれど、山上の暗号の真相もいまだに私の胸を少しドキドキさせていた。

これじゃきつと、今夜こそ安眠は難しいだろう。

あの夢の続き、絶対絶対、見ようと思っていたのに。

3&1t:朝のブルーと、センチメンタル>t:(後書き)

いつも読んでくださっている方々、感想や拍手をくださる方々、本当にありがとうございます。完結までお付き合いいただけると嬉しいです。

そして今更な告知ですが、4/13に短編をアップしました。いちおう心都と七緒の中学1年生の夏休みの話という設定ですが、本編を知らない方でも読めるように(多分)なっています。よろしければ目を通してみてください。

4 & 1 t ; 居残りど、リトリート & g t ;

私は手の中の紙きれを見つめ、ため息をついた。

一週間前よりも更にしわが寄りくたびれたそれは、忌々しき進路希望調査票。

あれから何度も机に向かい悩んだけれど、結局納得のいく答えは出せなかった。その結果、提出締め切り日である今日、放課後の教室に居残って書いているような事態に陥っているのだ。

期限までに担任教師に提出できなければ、進路白紙でお先真っ暗な受験生としてお呼び出しを受けてしまう。それだけはなんとしても避けたい。

どうやらクラスでまだ書けていないのは私だけらしい。その証拠に、いま現在教室に居残っている生徒は他にいないし、今朝のホールルームで「最終締め切りは今日の17時」と告げる担任の目は、心なしか私を捕らえていた。

「あと30分か……」

憂鬱な気持ちで、黒板の真上にかけられた時計を見る。

タイムリミットが刻一刻と迫っても、なかなか紙面は埋まらない。私には高校選定の基準も、明確な目標もないからだ。

だから中学3年生になり本格的に受験の影がちらつき始めた今も、「とりあえず」の判断しかできない。こんな状態で進路を絞るなんて到底無理だ。

しかし早く提出しないと、待っているのは一対一のお呼び出しコース。

窓の外では真っ赤な夕日が辺りを染めている。

そろそろ、日が暮れる。

私は悩んだ末、北高校を第一志望欄に書き入れた。

そこは、電車で20分ほどかかる公立高校。私にとって特にその高校じゃなくてはいけない要素はなく、今の学力的に見て多分合格圏内だろうなというのが大きな理由だった。

まあ、まだあくまでも「希望調査」だし。変更もきくし。

自分にそう言い聞かせながら席を立ち、提出のため職員室へ向かう。

ふと、廊下の窓ガラスに映る自分を見た。

美里に叱られてからはさすがに気を引き締め直して、ぼさぼさ頭とジャージ姿での登校は控えている。なので、今日の私も一応髪は自分なりにセットしているし、制服着用だ。

しかしクマに縁取られた目には全く生気がなく、どんよりと濁っている。肌もなんとなくすんで、若さがない。

身だしなみに気を使っているはずなのに、全く可愛いとは言い難い私がそこにはいた。

理由は明白。

ここ数日は迫り来る進路希望調査票の提出期限に怯え、悩み、更に徐々に受験モードになっていく授業についていくのにも必死だ。そんな疲労が積み重なり、私は目に見えて劣化している。

このままいけば、近いうちに白髪だらけになってしまっくんじゃないだろうか。欧米人の白にも近いプラチナブロンドはサマになるけど、純日本人的な顔立ちの14歳のそんな姿は、きつとあまり良いものではないだろう。

真っ白ヘアの自分を想像してへこみつつ、職員室へ入った。

無事に提出して廊下へ出ると、少し離れたところに見慣れた姿があった。

職員室は、1階の最右端に位置する。

その2つ隣の小さな教室は「進路指導室」といって、文字通り、進路指導担当の教師が進路に悩む生徒の相談に乗ったり、はたまた非現実的な進路希望を持つ生徒を諭したりする部屋だ。

生徒たちの間では、通称「うさぎ部屋」。なぜならば、そこに入った生徒は自分の将来への悩みや現実の厳しさのあまり泣いてしまつ者も多く、目を赤くして部屋から出てくるその姿はまるでうさぎのようだかららしい。

その恐ろしいうさぎ部屋から現れたのは、七緒だった。

部屋の謂れに反して泣いてはいないけど、ひどくぐったりとした顔をしている。

本来なら部活中であるこの時間に進路指導室から出てくるだなんて、ひよっとして奴も進路問題がかなり切羽詰まっているのかな。

こんなときに妙な絆を感じる。

七緒は数メートル離れたところにいる私に気付かず、背を向けてすたすた歩き出した。

声をかけようとしたその瞬間、

「東先輩！」

私を追い越し、小走りで七緒の隣へ並んだのは、1人の女子生徒。

七緒が振り向くより先に、私はとっさに、職員室脇の曲がり角へ（自分でも怖いくらいの速さで）身を隠した。

あれ。なんかこれって、完全に盗み聞き体勢？
……だって、ついつい気になって。

わずかに顔を出して覗くと、夕焼けの中、向き合う七緒と女の子が見えた。

上履きの色から察するに、女の子は1年生。かなり小柄で華奢、つむじから細かく波打つ茶色いショートヘアがよく似合っている。毎朝寝癖をまっすぐに伸ばそうと四苦八苦している私は、ちょっと感心した。

いつそくるくるふわふわにしちゃえば、あんなにもチャーミングなんだなあ。

まあ、あの子はそもそも顔立ちが可愛いのも大きいと思うけど。真ん丸で黒目がちな瞳がまるで子リスみたいだ。

「こんにちは、東先輩」

「こんにちは」

にこつと微笑みかける子リスちゃんに対し、七緒は少し不思議そうに答えた。面識がないのだろうか。

「あの、私のことわかります？」

「えーと……。あ、よく柔道部の練習見に来てる子だけ」

「わあ！ 覚えててくれて嬉しいです」

子リスちゃんが顔をほころばせる。

七緒が1年生にモテているというあの美里の言葉は、やはり真実らしい。

「いつも見学してて、東先輩の柔道してる姿、すごーくかっこいいなあって思ってます」

「そ、そりゃどーも」

七緒がぎこちなく頭をかく。

当然といえば当然だ。彼は「可愛い」と言われたことは数知れず

「かっこいい」なんて言葉は多分ほぼかけられたこと
だけ、

「……いや、訂正。私は過去に2回ほど、「かっこいい」と言った
ことがあるけれど。おそらくあんな可愛い女の子に笑顔で告げられ
たことは、これまでにないのだろう」と、自分で言っておいて非常
に空しくなってきた。

小柄な子リスちゃんは七緒よりもだいぶ身長が低い。

彼女と並ぶと、あの幼馴染みもなんだかちゃんと男に見えるから
不思議だ。

「それで、いきなりで失礼かもしれないんですけど、今日はお誘い
に来ちゃいました」

「お誘い？」

15センチ以上はありそうなその身長差ゆえに、子リスちゃんは
必然的に、七緒を見上げる形になる。

屈託なくうるうると輝く瞳が、上目遣いに彼をとらえた。

「来月、一緒に夏祭りに行ってくださいませんか？」

子リスちゃんの可愛い声が廊下に響く。

本当は全力疾走したかったけど、バタバタ音を立てて気付かれる
とまずいので、あくまでも静かに。でもできる限りの早足で。

私はその場から立ち去った。

もうこれ以上、聞きたくないと思ってしまった。

くるくるでふわふわでうるうるでキラキラな女の子からのデート
のお誘い。それに七緒がどう返事をするのかとか、子リスちゃんが
どう反応するのかとかは、もちろん気になる。

だけどそれ以上に、この場にいたくないと思う気持ちの方が強か

った。

黒岩先輩や祿朗のときは、もう少し強気に「チクシヨウ負けねえ！」という姿勢でいられたのに。

どうしてだろう？

嫉妬や苛立ちとはまた違う、この気持ち。

気付いたら、もう用のない教室へと逆戻りしていた。

私の今の席は窓際の最前列にある。

晴れた日の授業中は窓からのぽかぽか陽気に睡魔が襲ってくるけど、居眠りなんかしたら一発で見つかってしまおう、そんな不運な席。

私は自分の机へと近付き、なんとなく窓に目をやった。

いつのまにか日はすっかり暮れてしまい、外は真っ暗だ。

窓ガラスに映るのは、先程と同じ、お世辞にも可愛いとは言い難い自分。

私は胸に手を当て、深呼吸をした。

ああ、私、今すごく可愛くなりたい。

七緒と並んでもバツチりお似合いに見えるくらいに。
すごく、すごく、可愛くなりたい。

これまでのどんな瞬間よりも、強くそう思った。

5 & 1 t ; 爆発と、りんご以上 & g t ;

「七緒先輩！ これを見てほしいツス！」

昼休み。私たちの教室にやってくるなり、禄朗はA4サイズの1枚の紙を掲げてみせた。

もはや2年生が3年生の教室に我が物顔で入ってきているとか、声がかすぎて耳障りだとか、そんなことを咎める者はいなかった。何しろ相手は素行の悪さで校内にその名を轟かせる。しかし敬愛する七緒の前ではたちまち健気な乙女みたいになってしまう。進藤禄朗なのだ。

七緒はその紙を受け取り、まじまじと見る。最初は平常だった表情がしだいに驚きに染まり、やがて彼は素っ頓狂な声をあげた。

「学年順位43位？ まじで？」

「そうツス！ まじツス！」

禄朗が得意気に笑う。

どうやら彼が持ってきたのは、先日の中間テストの総合結果らしい。ひと学年は100人弱。その中で40位台とは、間違っても悪くはないポジションだろう。

私も驚いて目を見張った。暴力的で直情的、頭を使う作業なんて一切苦手そうなのこの禄朗が！ 学力試験で上位半分に入ったなんて！ 世の中何が起きるか本当ににわからないものだ。

七緒が笑顔で禄朗の肩を叩く。

「すげーな、禄朗！」

「前回から60位くらいアップしたツス。俺、こっに見えてやればできる奴なんスよねー」

「いや、本当すげーよ。頑張ったんだなー」

60位アップって、それ、前回はほぼ最下位ってことじゃないか。

まさにごぼう抜きだ。

感心すると同時に、華ちゃんの顔が脳裏に浮かんだ。

『禄ちゃんとお勉強会なんです』と嬉しそうに微笑む華ちゃん。今回の禄朗の大幅順位アップは、彼女の力によるところが大きいのだらう。

きっと禄朗のこの結果を誰より喜んでるのは華ちゃんに違いない。

胸が温かくなる。

よく頑張ったな、禄朗。

そして華ちゃんに感謝しろよ、禄朗。

ていうか七緒にべたべたしすぎじゃないか？ 禄朗。

「補習回避して夏休みは遊びまくりましょう！」とかわけわかんないこと言っつて、いつまでガツチリ握手しているんだ？ 禄朗。

早く離れてほしい。

離れなさい。

離れろ。

「で、あいつの髪は一体なんなんスか？」

禄朗が突如、教室の隅の少し離れた場所で念を送っていた私を指さす。

七緒がそれを真面目な顔でたしなめた。

「……禄朗、そのことについては触れてあげるな。俺だって朝から見ないフリしてるんだから」

私は傷付いた。それはもう、ざっくりと深く。

そう。今日の私の髪の毛は、いつもとは一味ちがう。

自分としてはくるくるふわふわな女の子らしいヘアスタイルを目指したつもりだった。しかし今朝目覚めたとき、私の頭は理想のウエーブ感を遙かに越えた「ちりちり&ごわごわ」状態になっていたのだ。

やっぱり、前の晩に髪を乾かさないうで三つ編みをして寝るというケチったやり方が間違이었다ようだ。

もう一度シャワーを浴びるほどの時間もなく、泣く泣くそのままの髪で登校したところ、美里を始めとするクラスメイトたちは絶句七緒すらからかってこない。

「いっそその髪なんやねーん」と漫才ばりに真っ向からつつこんでくれたらまだ気が楽だっただろう。しかし、おそらく私がこの世の終わりのような顔で現れたため、誰も気軽に触れることができなかったのだと思う。みんな、優しい。もう優しくすぎて涙が出そうよ。

「うわー、ツラみてえだな」

反対に、優しさの欠片もないのがこの禄朗だ。馬鹿にしきった薄ら笑いを浮かべ、こちらに近付いてくる。禄朗は片手で私の頭を乱暴に触り、

「ぎやははは！ なんだこれ、『ゴフアツ』て、人間の髪の毛の感触じゃねーよ！」

「うるさい触るな！」

「鳥の大家族の住居にピッタリだな！」

「あんだだってツンツンした馬鹿みたいな頭してるくせに！」

「なんだとテメエ！ 俺のは入念にセットされた気合の入った髪なんだよ！ そんな爆発コント後みてえな髪型と一緒にするな！」

今にも始まりそうな掴み合いに、七緒が「はいはい」と間に入つてストツプをかける。

「でも本当にどうしたんだよ、心都。頭燃えたの？」

七緒がようやく私と目を合わせた。そして視線を少し上、頭部にずらし、

「……ぷっ」

耐え切れなくなったようにふき出した。

「わ、笑うな！ ちょっとくるくるふわふわに憧れただけで、そんなもってちよっと方法間違えちゃっただけで……ささいな失敗だよ！」

「ささいねえ」

笑いをこらえ肩を震わせながら、七緒。

私は悔しくて唇をかんだ。

昨日の子リスちゃんに影響されているということは、七緒には絶対に知られたくない。だって、あんな女の子らしい可愛いヘアスタイルを目の当たりにして、憧れないわけじゃないじゃない。

それが、何をどうしたら、こんなアフロ一歩手前みたいな髪型に？ やっぱり私って駄目駄目だ。惨敗。

「心都の長所は、思い込んだら一直線、一途になれるところよね」「デザートのリングゼリーをお上品に食べながら、美里が言う。

「そして短所は、ちゃんと正しい方法を調べないで暴走するところ」

「……ごもつともです」

「なんでそんな頭になっちゃったわけ？」

美里の問いに答える前に、私は辺りを見回した。

七緒は、私の頭を指さしては爆笑する禄朗を廊下へと連れ出していた。このままじゃ大喧嘩に発展しかねないことを察知したのだから。これはかなり有り難かった。私だって好きな人の前で後輩にキレて拳をふるう姿なんて晒したくない。

七緒が遠くにいることを確認し、私は美里に向き直る。

「実は昨日、七緒がデートに誘われてるところに居合わせちゃってさあ」

「うん」

「その相手っていうのが、1年生の女の子なんだけど、くるくるふわふわの茶色いショートヘア、うるうるキラキラのつぶらな瞳がそりゃあもう可愛くて」

「うんうん」

「それに触発されてちょっとウエーブさせようと髪の毛三つ編みして寝たら、今朝こんなことになってました」

なるほどねえ、と美里が腕組みをする。

「それ、嫉妬とはちょっと違うってことよね？」

私は自分のとんでもない頭を触り、頷いた（やはり禄朗の言うとおり感触は『ゴフアツ』だった）。

昨日感じたのはジェラシーよりももっと強くて、胸をかきむしりたくなるような自己嫌悪だ。

夕日の中に佇む七緒と子リスちゃんが、思わず一瞬見とれてしまいうくらいにお似合いで。

よりよってそんなとき、私はこれまでの人生の中でもかなりひどい疲れきった姿で。

あまりにも大きな差を感じてしまい、闘志のトの字も湧いてこなかった。

「七緒がその子に結局どう返事したのかもわからずじまいで気になるけど……なんか、本当の問題はそこじゃないっていうか、もっと根本的なところっていうか……」

七緒のことを好きな女の子なんて、きっと数え切れなくらいいっぱいいる。

そんな中から選ばれて、恋人という肩書きで堂々と隣にいられる確率なんて、いったいどれほどのものなんだろう。

いや、そもそも、私はそのたくさんの女の子のうちの1人にすら入っていないんじゃないだろうか。

黒岩先輩や子リスちゃんを始め、彼女たちはみんな可愛くて素直で、眩しさすら感じるほどに、ちゃんと「女の子」だ。

対して男兄弟やおっさんである私は、未だそんなライバルたちと同じ土俵にすら上れていない気がするのだ。

可愛い女の子になろうとすればするほど、空回りしているこの現状。さすがに悲しくなってしまう。

「心都、負のオーラ出てる」

美里がりんごゼリーの1番大きな果肉をスプーンですくい、私にくれた。甘くてちょっとすっぱくて、おいしい。

「可愛くなりたいてって気持ちはわかるけど、そのまんま誰かを真似しようとしても今日みたいに失敗するだけよ、きつと」

「……やっぱり、そうかな」

「うん。もちろん最低限の身だしなみとかは大前提だけど、そこから先は、心都にしかない武器を大切にしていたほうが絶対魅力的よ」

「私にしかない武器って？」

思わず身を乗り出し、美里にすぎるような体勢になる。

そんなものがあるのなら、ぜひとも全面に押し出してこれでもかというほどアピールしていききたい。

「そうねえ……例えば……」

美里が上を向き、少し思惑を巡らせる。

「驚異的なまでに七緒くんに異性を感じさせないキャラクターとか。

今日みたいに体を張って七緒くんの笑いを取りに行くガッツとか
それは、果たして武器なのか。どちらの特質も意図せずして生ま
れた不本意きわまりないものだ。

「心都」

いつの間にか七緒が、近くまで来ていた。

どうやら禄朗を自分の教室まで帰すことに成功したらしい。

「……何」

プチ傷心中の私、ついつい無愛想な返答になる。

七緒はそんな私の態度の悪さを気にも留めず、やたら優しい笑顔
で隣に立った。

なんだ？

私が不審に思い眉をひそめたその瞬間、信じられない出来事が起
きた。

七緒が唐突に、右手を私の頭の上に置いたのだ。

もはや、トクン……とかドキン……ではない。ドゴン！ と凄ま
じい音で心臓が跳ねる。

好きな男の子からの“頭なでなで” 『恋する乙女100

人に聞きました、思わずキュンとしてしまう瞬間は？』の上位に必
ずランクインするであろうシチュエーション。

それがまさか、今このタイミングで訪れるなんて。あまりに急す
ぎて気持ちがついていかない。

それでも反射的に、さつき食べたりんご以上に甘いときめきが胸
いっぱい広がる。

今までの沈みきった負のオーラはどこへやら、私はもう天にも昇

る心地だった。

美里が「きゃあ、うっそ、マジで？」と小声で囁きながらも素早く携帯電話を取り出し、こっそり私たちを写真に収めようとする。さすが美里、グッジョブだ（あとで貼付して送ってもらおう。待ち受け画面にするから！）。

七緒は優しく私の頭を撫でながら、うんうんと頷いた。

「やっぱりクロだ」

「……へ？」

「今日の心都の髪、何かに似てるなあと思ったんだけど。この質感、クロそっくりだよ」

あはは、とのんきに笑いながら七緒が言う。

彼が口にしたのは、黒くてもこもこ、最近めっきり肥え気味な我が家の愛犬（ ）の名前だ。

七緒は幼い頃からクロを可愛がっている。そしてクロもまた、七緒によく懐いている。

つまりこの七緒の慈愛に満ちた顔も、優しい手つきも……ああ、なんだ、そういうことか。

胸を占拠していたときめきが、みるみるうちに萎えていく。

「うん。そっくり、そっくり。さすが飼い主とペットだなー」

「ごめん嬉しくない」

私はぞんざいに七緒の手を振り払った。

「え？　なんだよ、誉めたのに」

腑に落ちていなさそうな顔で鈍感野郎が言う。

しかし私が自分にできる最上級の恐ろしい顔で睨むと、彼は「うわ」と少しひるんだようにその手を引っ込めた。

美里が無表情で携帯電話を閉じた。

「あ、そつだ、心都。お前今日部活ないよな？」

ふと、七緒が真面目な顔をする。

「え？……うん、ないけど」

基本的にゆるい文化部である料理部は、週に3日ほどしか活動がない。だから残りの2日間は家に直帰で、放課後を持て余すことになる。

「じゃあ、もちろん今日は6限が終わったらさっさと家に帰るんだよな？」

「うん。別に予定もないし、こんな頭でうろつろ散歩できるほどハート強くないから」

「そつか、そつだよな」

七緒は納得したようにまた笑顔になった。急にどうしたのだろうか。

「なんで？」

「いや別に」

そう言つと彼は私の傍を離れ、どこかへ行つてしまった。

なんなんだ、今の確認作業。全くもって理解不能だ。

首をかしげると髪の毛が『ゴフアツ』とうなじに当たり、そのあんまりな感触に、私はうなだれた。

普通、大好きな人に頭を撫でられた乙女は「いやーん、幸せ！

私、もう二度と髪洗わない！ ああ、でもそれじゃ不潔で彼に嫌われちゃうよお。どうしよう！」と守れもしない誓いをうきうきと立てた後、無駄な心配に心を震わせるのだろう。

しかし、私は固く決心した。

帰ったらすぐにシャワーを浴びよう。

そしてこの、コシが命の本格ちぢれ麺みたいな髪を、一刻も早くブローで元に戻そう。

で、その時ちょっと、声出して泣こう。

5 & 1 t ; 爆発と、りんご以上 & g t ; (後書き)

今回出てきたのは通称「貧乏パーマ」といわれる歴史あるテクニクです（作中では大失敗してませんが）。

私が小学生のころプチ流行しました。検索すると色々詳しく出てきて面白いです。

6 & 1 t ; 切り札と、危ない放課後 & g t ;

決心通り、帰宅後の私が最初にとった行動は、シャワーを浴びることだった。そして今日のやるせない出来事を思い返し、おいおい泣きながら髪を乾かした。

きちんとブローして、縮れ麺みただった頭を元に戻したところで、自室へ向かう。

次の目的はひとつ。

私は貯金箱をひっくり返した。

「ひい、ふう、みい……」

数えてみると、半年前のお年玉を少し残しておいたおかげで、そこそこの額があった。

これだけあれば。

「……ストパーかけられるかも」

ストパー。それはつまりストレートパーマのことで、飛んだり跳ねたりまとまらない髪の毛をまつすぐ伸ばすことができる、魔法のような技術なのだ。

ボサボサヘアに悩む私が今までこれに頼らなかったのには理由がある。

ストパーはかけたあとの髪の手入れがそれなりに大変で、下手したら傷んでパサパサになってしまう。つまり、上手くいけば真っ直ぐで綺麗な髪の毛が手に入るけれど、一歩間違えばボサボサよりも修復の難しいダメージヘアまっしぐら。

いわばストパーは、ボサボサ女子の最後の切り札だ。

私はそれに手を出そうとしていた。

というのも、今日の「ちりちり頭なでなで事件」私とクロを重ねないで」は私に結構なダメージを与えていた。こんなふうに髪型

のキマリ具合で一喜一憂するのも、若干疲れてきた。しかも、そろそろ季節は梅雨だ。湿気の多い雨の日はより一層髪をまとまりにくくさせる。このままでは、きつと今年の梅雨は例年以上にイライラした気持ちで過ごすことになるだろう。

それもいつそひと思いにストパーでまっすぐにさせてしまえば、万事解決。

サラサラヘアを手に入れれば、七緒の前でももう少し女の子らしくなれるかもしれない。でもって、女の子らしくなれば、幼馴染みポジションからも脱却、とんとん拍子で恋が上手くいくかもしれない。でもってでもって、七緒に（今度はちゃんと恋人として）頭をなでてもらえる日も近いかもしれない。

次から次へと妄想が広がり、

「ふへへ」
にやけた。

パーマ後のケアが上手くできるかという懸念はある。明確な値段もわからない。

だけど、テンションが高まってきた私はもういてもたってもいられなかった。

とりあえず美容室まで行ってみることにしよう。値段を見て、美容師の人に施術後の傷みの程度や手入れの難しさなんかも尋ねて、それから決めよう。

「よし！」

思い立ったが吉日。私は全財産を財布に突っ込み、家を飛び出した。

近所の公園の前を通りがかったとき、見慣れた姿が視界に入ってきた。

七緒だ。

明らかに部活帰りのジャージ姿である彼は夕暮れの公園のベンチに座り、じつと前を向いていた。

「……何してんだろ？」

入り口にいる私に気付く様子もなく、園内にある背の高い時計台にときたま目をやり、時間を確認している。

なんだか誰かと待ち合わせをしているように見える。でも、こんな時間から一体誰と……？

と、ここまで考えたところで、私の脳裏にある人物が浮かびあがった。

まさか、子リスちゃん？

くるくるふわふわな子リスちゃんと、わずかな空き時間を惜しんで放課後デートの待ち合わせ？

そういえば七緒は今日、私に「授業が終わったらすぐ帰るんだよね？ 寄り道とかしないよな？」とやたらしつこく聞いてきた。

あれは、ご近所さんである私に逢い引きを目撃されたくないが故の確認作業。そう考えれば辻褄が合う。

「そんな……」

体中の力が抜けて、へなへなと膝をつく。

つまり、七緒と子リスちゃんは昨日からお付きあいを始めていて、さっそく今日が初デートということか。

こんな夕暮れの公園で愛とか語り合っちゃうの？ 手とか繋いじやうの？

ついさつき私を「ふへへ」とにやけさせた想像力のたくましさ、今度はアダになる。脳内に広がるのは、仲睦まじく公園デートを楽しむ七緒と子リスちゃんのイメージ映像。

私はうつむき、地面を見つめた。
終わった。完敗。

あんな可愛い子から彼女のポジションを奪うなんて、到底無理だ。突然すぎる終幕に涙も出ない。

私の長い片思いも、ここまでか。

そのとき、

「おい、待たせたな、東」

公園の2つある入り口のうち、西側のほう。つまり、今私がいるのと反対側。から、七緒を呼ぶ声が聞こえた。

どうやら待ち合わせ相手が来たらしい。私は顔を上げる気にもなれず、土を見つめ続けた。

子リスちゃんたら、昨日までは「東先輩」って呼んでいたのにさっそく呼び捨てだ。まあ、付き合っているんだから当然か（でもせっかくなら下の名前で呼べばいいのに……なんて、この期に及んでおせっかいおばさんになっちゃってるかしら）。

それにしても彼女、見た目に似合わず今日はずいぶん野太い声だ。声だけ聞いたらまるで身長180近いマッチョボーイみたいな。

……いや、違う違う。さすがにそれは、ない。
私は顔を上げた。

そこにいたのは、七緒と、予想通りのマッチョボーイ山上。
彼らは何やら話しながら、こちらに近付いてくる。

私はとっさに近くの植え込みに隠れた。2人に見つからないように、青々と茂る葉っぱに埋もれて、ほっと息をつく。

なんだ、子リスちゃんじゃなかったんだ。

とりあえず、ひと安心。今夜は枕を濡らさなくても済みそうだ。
だけど、どうして七緒と山上が？

疑問に首をひねりながらも、またナチュラルに覗き見体勢になっ
てしまっている自分に気付き愕然とした。

ものすごいデジャブ感。2日連続で物影から密会を目撃だなんて、
私ってば次世代の「家政婦は見た」を狙えるかもしれない。

山上は、私が隠れている植え込みのすぐ近くのブランコに腰をお
ろした。

「山上……なんでお前はいつもブランコなんだよ」

「だってせっかく公園に来てるのにベンチに座るなんてもったいな
えよ。ほら、東も座れよ！」

笑顔の山上に押し切られ、七緒もしぶしぶといった感じで隣のブ
ランコへ着席した。

これで完全にここから出られなくなっちゃった。

だけど私は、退路が断たれたことをそれほど残念には思わない。
これで腹を決めて、じっくり2人の会話を聞くことができる。こそ
こそ覗き見だなんて悪趣味極まりないけど、どうしても気になるの
だ。

七緒と山上がこんなところで待ち合わせて、一体何を話すつもり

なんだろう。

私は数日前の一幕を思い出していた。「私たちの喧嘩の一因、山上に言われた『いらんこと』って何？」と尋ねる私に、「俺が自分で解決するからほっとけ！」と軽くキレ気味だった七緒。

もしかしてそのこと？　なんて考えて勝手に緊張してしまうのはちょっと、自意識過剰だろうか。

「で、東。例の物は持ってきてくれたか」

突如、少し神妙な雰囲気の上上が話を切り出した。

「おう」

七緒がニヤリと笑い、鞆の中から何やら紙袋を取り出す。ずしりと重そうなそれを受け取る上も、へへへと笑った。

2人とも怖いくらいに楽しそう。

なんなのよ、この怪しげな雰囲気は。

背中がぞわりと粟立つ。

私、もしかして見ちゃいけない現場を見ようとしている？

なんか怖い。帰ろうかな。いや、あの2人がいるかぎり私はここから出られない。嫌だ、どうしよう。帰りたい。帰りたい。

山上が大切そうに袋から取り出したのは、一冊の本。

黒くて太い書体で表紙に書いてあった文字は 『月刊 中学柔道』。

「サンキューな東！　これアメリカじゃ売ってないんだよなー。マニアックすぎて取り寄せも難しいしよ」

「とりあえずここの1年間のは全部持ってきたから、じっくり読めよ。」

返すのいつでもいいから」

「かたじけねえなー」

「いいってことよ。そうそう、先々月号のここの特集記事がすげー良くてさ」

「どれどれ？」

雑誌をめくり、この選手がいいだの、この学校が今後強くなりそうだの、キャツキャと楽しそうな柔道談義が始まった。

……帰りたいな。

先程までとは違う意味で、私は思った。

ひととおりお喋りを終え、山上はあらためて七緒に向き直る。

「でも悪かったな。部活帰りで疲れてるところを」

「いや」

七緒は小さく首を振って、山上の言葉を打ち消した。

「俺も、雑誌貸す以外に、山上に用事があったから」

「ん？ なんだよ」

真面目な表情になった七緒は、ブランコから立ち上がった。

子供用のブランコだ。作りも小さく、中学生が快適に座れるとは決して言い難い。それに無理な体勢で座っていたに違いない七緒は、立ち上がった瞬間、少しよろけた。

うわ、かつこ悪い。

見なかったことにしてあげるべきだろうか。

体勢を整え、咳払いで気を取り直したらしい七緒。山上に向き直り、落ち着いた声で言った。

「前に山上が俺に言ったことに、ちゃんと返事しなきゃと思ってさ」
「ああ、杉崎の話か」

唐突に出てきた自分の名前。

一度はゆるんでいた緊張が、一気に体を走る。

七緒は別に怒っているようでも悲しんでいるようでもなく、当たり前のことを当たり前に言っているだけ、という様子だった。ただ、その目はとても真剣で、それがいっそう私を混乱させる。

私の話って、一体何？

七緒は静かに口を開いた。

「……山上の宣戦布告は、受け取れない」

葉っぱに埋もれながら、私は少し胸が詰まって、思わず深呼吸をした。

なんだか、不思議な予感がしたのだ。

山上と再会した春から始まった、中学生生活最後のこの1年間。

その中でできごと、私と七緒の関係が良くも悪くも少しずつ変わっていきくんじゃないか いや、すでに目には見えないところで変わり始めているんじゃないか、って。

そんな、全くもって根拠のない予感が。

7 & 1 t ; 恋の病と、4 回目 & g t ;

「……山上の宣戦布告は、受け取れない」

落ち着いた口調で、しかしハツキリと、七緒は言った。

私は緊張と不安で、もうどうにかなりそうだった。

鼓動がうるさい。

宣戦布告って一体何？

受け取れないってどういうこと？

その疑問を代弁してくれたのは、意外なことに　このやりとりの当事者であるはずの山上だった。

「宣戦布告？　ってそれ何だっけ？」

「えええ……？」

と、七緒が心底情けない顔で山上を見つめる。効果音をつけるならきつと「ガビーン」だ。

まあ、彼のシヨックも当然といえば当然だろう。あれだけあらたまった雰囲気をもし出して放った言葉が、「何だっけ？」の一言で片付けられてしまったのだ。

しかも山上のほうはブランコに座ったまま、少しも悪びれることなくあっけらかんと笑っている。

「わりい、わりい。俺、東に宣戦布告なんてそんな物騒なことしたっけ？」

「思いつきりしただろ！　1ヶ月くらい前！」

「……？」

「いやいや、なんでポカン顔だよ！　お前、わざわざ俺を待ち伏せてこの場所で堂々宣言してたじゃねーか！」

自分に対する「宣戦布告」とやらを必死に思い出させようとする七緒。なんだか見えていて気の毒になってきた。

「おい、まさか本当に忘れたのか。お前、『俺は杉崎が好きだ。杉崎が東と過ごす時間も今後は俺との時間に変えていきたい。男女の仲よし幼馴染みとかそういうのは卒業していい年齢だろ』とか一方的に言うだけ言ってウインクかまして去ってっただろ！」

その非常に簡潔な説明は、私の心臓を破壊するには十分すぎるほどの威力だった。

血が驚くべき速さで送り出され、それが顔中に集中するものだから、カーッと燃えるように熱い。

山上が七緒にそんなことを言っていたなんて、ちっとも知らなかった。なんとというか、山上って 本当に本当に、ストレートな人だ。

あまりの恥ずかしさにひとり顔を手で覆うと、肘が葉っぱにぶつかった。その場しのぎの隠れ家である植え込みがガサリとわずかな音を立てる。

七緒と山上が同時にこちらを向いた。

「なんたる、今の音」

……ああ、私の馬鹿！

「猫じゃね？」

と、山上。その言葉が私には天の助けのように聞こえた。猫の真似なんてしたこともないけれど、この場を切り抜けるためにはやるしかない。

「二、ニャーオウー」

「ほら、やっぱり猫だ」

「本当だ、猫だな」

心で大きくガツポーズ。自分の物真似能力もなかなか侮れないものだ。

私が妙な自信をつけたところで、2人のやりとりが再開された。

「あー、うんうん、そうか。宣戦布告って、あのことが」

「よし、思い出したな？ 話進めるぞ？」

無駄な汗をかきながら七緒が確認をとる。

もう完全に山上のペースだ。

「……山上は『杉崎との時間をくれ』っていうような意味で言ったんだと思うけど、それは無理だ。やっぱり心都とは十年以上の幼馴染みとして、まあ喧嘩とかも多いけど一緒に過ごしてきたる仲だし……幼馴染みっていう存在は、やっぱり結構、自分でも思ってる以上にでかいと思うから」

私は七緒との修学旅行でのやりとりを思い出した。あのとき再確認した彼の存在の大きさは、今もばっちり心に残っている。

身を乗り出して、七緒の言葉に耳を傾ける。

「だから俺もそれはしないし……うぬぼれじゃなければだけど、多分あいつもそんなことしてほしいとは思ってない。山上が、心都と距離を置いてくれて言ってもそれはできないよ」

喉元まで出かかった言葉を飲み込む。

うぬぼれなんかじゃないよ。

七緒。

もしそんなことになったら、私はきつと立ち直れない。

七緒はまっすぐに山上に向き合い、言った。

「俺は山上のことすごくいい奴だって思ってるし、それはこれから変わらないと思うけど……もし万が一山上があいつを傷付けるようなことがあったら、許せないと思う。……いちおう大事な幼馴染み、だからさ」

淡々と話す彼を見つめ、私はもう胸がいつぱいだった。

七緒が私のことをそんなふうに言ってくれるなんて。たとえ七緒の言う「あいつ」が、「女の子としての私」ではなく「幼馴染みとしての私」であることが一目瞭然でも　やっぱり、涙が出そうなくらい嬉しい。うん。

私が言いようのない感動に浸っていた、そのとき。

「ははは、そんな怖い顔すんなってえ」

山上が緊張感のない笑い声をあげた。

「俺、別にそれ強要するつもりで言ったんじゃないからさ。いちアドバースっつーか、願望っつーかさ」

「……はあ？」

七緒が訝しげに目を細める。

その光景に、私はまたしても激しい既視感をおぼえた。

なぜならこれ、数週間前の私と山上のやりとりと全く同じだから。おそらく山上はそのストレートさ故に、相手に大きな衝撃を与える言葉をあまり深く考えずに発してしまうのだ。本人に全く悪気がないだけに、よけい始末が悪い。

「お前なあ……あんだけ言いたいことガンガンぶつけるときながら、そりゃねーだろ……。俺けっこう真剣に受け止めて考えたのに」

「わりい、わりい。俺の言葉は気にすんな！」

「……」

完全に山上に振り回された形になった七緒が、げんなりと肩を落とす。しかし、やがて「まあいいか」と呟くと顔を上げた。

海より深く山より高い寛容さを大發揮している、というわけではない。

七緒のあの、なんの感情もないガラス玉のような目。……多分面倒くさくなったのだ、全てが。

「そつだ東、お前、焼きそば好きか？」

唐突にブランコから立ち上がった山上が、七緒の肩に手を置く。

「え？ まあ、普通に好きだけど」

「よし！ じゃあ今回悩ませちまったお詫びに、来月の夏祭りで焼きそば何個でも奢ってやるよ！ 俺、屋台手伝う予定なんだ」

「へー、山上が焼くの？」

「おう。うちの部の顧問が毎年焼きそばの出店やってるみたいで、部員でその手伝いなんだ。町内の夏祭り、来るよな？」

七緒は少し宙を見て考え込むような仕草のあと、小さく頷いた。「……うん。ちょうど、今年は行こうかなと思ってたところから」

私は、忘れかけていた現実を突きつけられた気持ちになる。

あの日あのと夕日さす廊下で、子リスちゃんが誘っていた夏祭り。それに対して七緒がどう返事をしたのか、私は知らないままだった。

「だけど　OKしたんだ。やっぱり行くん、七緒。」

幼馴染みが誰とどこへ行こうとも、私が干渉できることじゃない。それは十分すぎるほどわかっているはずなのに、やっぱりどうしようもなく悲しい。

可愛い後輩と2人きりで夏祭りに行くということが、少なくとも君のこと好きになる可能性が有りますよ」という意思表示の意味を持つているって、あの鈍感な彼はわかっているのだろうか。

「じゃあ、焼きそば食いに来いよ。俺は今年初参加だから知らないけど、かなりうまいらしいぞ」

「サンキュー。楽しみにしてる」

七緒の笑顔を見て、胸が痛んだ。

「それにしても東……、4回だ。4回」

「は？　何が」

「ここ数分で、お前が『幼馴染み』って言葉を口にした回数」

「……数えてたのか」

「まあな」

へへ、と山上が得意げに胸を張る。だけど七緒の若干ひき気味の表情から、彼が山上を褒めたわけでないことは明らかだった。

「ま、とりあえずもっかい座ろうぜ、東」

山上が再び、ブランコへの着席を促す。

私もだんだんとわかってきた。山上がこんなふうに通つときは、何か話したいことがあるという合図なのだ。……多分。

「東が杉崎のこと大事に思ってるのはよくわかったけどさー」

山上が相変わらずの明るい口調のまま言う。

「それって本当に『幼馴染みとして』なのか？」

私は、今度こそ心臓が破裂する思いがした。

山上つたら、なんて際どすぎる質問をするのだろう。

「え？」

七緒がこれ以上ないくらい目を丸くして、山上を見つめる。

もちろん私は9割方期待なんてしていない。今までの経験、そしてこの七緒のきょとん顔を踏まえれば、私のポジションが「それなりに重要な幼馴染み」に過ぎないことは否定しがたい。

だけど残りの一割で、やっぱり懲りずに甘い展開を期待してドキドキしてしまう。七緒の中で私の存在が少しでも「女の子」になれば、先の見えないこの片思いにも、光が差しってくるってものだ。

答えが聞きたいような、でも聞きたくないような。

そんな複雑な乙女心に占拠された私は、ついつい身を乗り出しすぎた。自分の体重をかけているのが、コンクリ作りの壁なんかじゃなく、ただの植え込みの葉っぱたちだってことも忘れて。

つまり私は、転倒した。

ドサリと派手な音を立て、七緒と山上の目の前に転がったのだ。

「……」

しばしの、不気味な沈黙。

それを破つたのは素っ頓狂な山上の声だった。

「こりゃ、噂をすればなんとやらだな！」

それを遮るように七緒が言う。

「違う。こいつの場合はただの覗き魔。しかも常習犯だ」

地獄の底から響いてくるような声。私を睨む七緒の全身からは怒りのオーラが溢れている。

私は静かに起き上がり、体についた砂を払った。

ここを切り抜けるためのいくつかの選択肢が浮かんでは消え、また浮かぶ。完全に姿が見えてしまっている今、さすがにもう猫の真似は通用しない。

そうして最終的に私が選んだ道は、「逆ギレ」だった。

「しょうがないじゃん！ 趣味の昆虫採集してたら2人が来て、出るに出不然なくなっただから！」

「いつからそんな趣味持ってたよ！ つくんならもっとマシな嘘つけよ！ 変態！」

「へ、変態！？」

「どう考えても変態だろ！ もう覗きも3回目なんだからな！」

一度目は黒岩先輩とのキス未遂現場の覗き。二度目はクリスマス前の上級生からの告白現場の覗き。そして今。

確かに3回もこんな行動をしていては変態扱いされてもしょうがない。しかし細かいことを言わせてもらえば、これは4回目だ。私は昨日の子リスちゃんからのお誘い現場もバツチリ目撃しているのだから。

なんてことはもちろん七緒に言えるはずもなく、私はグヌヌと黙り込んだ。

「そんなところから不意をついて現れるなんて、さすが自称ゴキちゃんなだけはあるよな、杉崎」

と、腕組みをした山上が、うんうん頷く。どうやら彼は、私がこそこそ盗み聞きをしていたことに関して何の戸惑いもないらしい。有難い大らかさだ。

「……どういう意味？」

「こないだ言ってただろ。『自分はゴキブリ並にしぶとい女だから、

「っ！」

私は慌てて山上の口を両手でふさいだ。20センチほどの身長差があるのだからキツイ体勢だけど、これ以上言わせてなるものか。この後に続くのは『七緒への恋は諦められないわよーん』という恥ずかしすぎる言葉なのだ。いくら大らかだからって、この場で言っただけのことと悪いことはしっかり知っておいてほしい。

山上を思いつきり睨みつける。私の手をベリッと剥がした彼は「おお、怖」と言った。その弾けるような笑顔は、全くもって怖がっているようには見えない。

「じゃ、俺そろそろ帰るわ。これ以上いたら杉崎にまた殴られかねないからな」

そう言つと、山上は荷物を抱えた。

「東、雑誌ありがとな。焼きそば来いよ」

「おう」

去り際、山上は私に、小さくウィンクをかました。相変わらずのアメリカナイズ。だけどいつもと違う何となく意味深なその目線に、私はふと考えた。

もしかして山上、私がずっと植え込みに隠れていたことを知っていた？

……いや、まさかね。

すぐに推測を打ち消したものの、やっぱりなんだか言いようのないしこりが、私の胸に引っかかっていた。

あとに残された私たちは、非常にギスギスした雰囲気の中に立ち尽くす。

「……変態」

「変態言つな」

「だって変態だろ。それとも痴女か」

「いや、本当、盗み聞きは悪かったと思ってるよ」

「結局、こんなところで何してたんだよ」

「たまたま通りかかったら七緒がいて、山上も来て、つい出来心で隠れちゃって、私の話とか始めるから出づらくなって……」

「つい出来心で、か。変態にありがちな言い訳パターンだよな」

「……『思ってる以上に存在が大きい大切な幼馴染み』にそんな口の利き方ひどい」

「！」

七緒が信じられないというような顔で私を見る。

「お前……性格悪いな！」

「ウフフ」

結局、山上の最後の質問に対する七緒の答えは聞けずじまいだ。

だけど、それでも良いかなと思える。

その前の七緒の言葉は、たとえ対幼馴染み用だったとしても、やっぱりかなり嬉しかったから。

「ありがとうね七ちゃん」

「七ちゃん言うな。……別に、あんなの、普通ああ答えるだろ、あの状況だったら」

もごもごと七緒が言う。私とは一切目を合わせようとしない。ほんのり赤い頬が、なんとも可愛いらしい。

「……」

どうしよう。なんか、私……。

今、すごく、七緒のこと抱きしめたい。

だけど駄目だ。衝動に任せてそんなことしたら今度こそ私は正真正銘の変態になってしまう。

「くっ」

私は自分自身の肩に、思い切り拳を叩きつけた。

「え！？ 何してんだよ唐突に！」

ちよっと力の加減を見誤ったかもしれない。予想以上に痛い。

「お、抑えが利かなくなったら嫌だから……」
「はあ？」

「いくら変態でもやっぱり最低限はわきまえときたいっていうか、そこまで墜ちたくないっていうか……」

ぶつぶつと呟く私を、七緒が困ったように見つめる。

「なんだよお前、ノイローゼか？」

どうせなら恋の病と言ってほしい。

と、そんなことはもちろん七緒には言えず、私は無言で自分の肩をさすった（もう本当に、ちょっと半端じゃないくらい、痛い）。

ふいに七緒が私に尋ねた。

「さっきの山上の、焼きそばの話聞いてたよな」

「え？ うん。……夏祭りで屋台やるって話でしょ」

思い出したくない話題を出され、私は俯いた。

七緒と子リスちゃんの夏祭りデートだなんて、想像しただけで胸が痛む。

しかし、その次に出てきた七緒の言葉は、私の予想を裏切るものだった。

「一緒に行く？」

私は固まった。驚きなんてものじゃない。予想外すぎる七緒の問いに、完全に頭がフリーズしてしまった。

私の反応の悪さを気にも留めず、七緒はさらに続けた。

「心都さ、最近疲れてるだろ」

「……そ、そう見える？」

確かに私はここ最近、迫りくる進路調査票の提出期限や、難しくなる授業内容に頭を悩ませていた。

だけど、体調を崩したり一切の笑顔を失うなどという大げさなものでもなかったし、普通に学校生活を送っていた。

まさか七緒が、そんな些細なことに気づいてくれていたなんて。

「うん。顔も疲れてるし、ため息も多いし、かと思えば急に変な髪形で登校してきたり、明らかにヤバい追い詰められ方してただろ。確かに受験生になって色々忙しくて大変だけど……だからこそたまには息抜きも必要なんじゃないかと思うんだよな」
にかつと七緒が笑う。

「だから夏祭りでも行つてさ、パーッと遊ぼう」

この事態にもだんだんと頭がついてきた。

つまりこれは、七緒いわく「ヤバい追い詰められ方をしている」らしい私の気晴らしに付き合ってくれるという、幼馴染みの優しさだ。

嬉しさに満面の笑みを浮かべそうになったところで、ハッと重要な問題に気づく。

「子リスちゃんは何？」

「子リス？ 何それ」

「あ、いや、なんか小動物系の可愛い1年女子に夏祭り誘われてなかった？」

こいつなんで知つてんだ、まさかまた覗きか？ と言いたげな七緒。私は慌てて両手を振る。

「噂でね！ 噂で聞いたの！」

まあ、嘘ですけどね。

七緒はまだ疑わしそうな顔をしていたけど、やがて素直に答えてくれた。

「……その場でお断りしたよ。やっぱり、あんまり知らない人と夏祭りとかいっても、楽しめるような気もしないし。あの子も友達と行ったほうが楽しいんじゃないかと思うし」

「……あ、そう」

なんだそれ。本当に、心から鈍感な奴 と、からかう気にはならなかった。

私が思い返していたのは、先ほどの自分自身の言葉だ。

2人きりで夏祭りに行くということが、少なくとも「君のと好きになる可能性がありますよ」という意思表示の意味を持っている。

それって、本来の関係が「幼馴染み」である場合にも有効なのかな。

そういえば、彼にこうしてちゃんとしたお出かけに誘われたのって生まれて初めてな気がする。幼い頃から、放課後「一緒に遊ぼう」とかはしょっちゅうだったけど。

「で、結局どうすんだよ。……行くの？ 行かないの？」

七緒が少し居心地悪そうにこちらを見やる。

有効か無効かはわからないけど、まあ良いか。

だって、七緒の優しさが、今こんなに嬉しいんだもの。

「行く！」

私は頷いた。

ここ最近で一番の、心からの笑顔で。

8 & 17 ; お姫様部屋と、相合傘 & g t ;

ドアを開けてすぐの場所に、薄桃色の大きなドレッサー。鏡の前には綺麗なビンが並べられている。

その横には細々とした小物がきちんと整理された、カラフルで可愛い箱たち。

他にもぬいぐるみやアクセサリーボックス、お菓子の形のキャンドルなどがお行儀よく飾られていて。

もう、いるだけでうつとりお姫様気分、いかにも女の子の個室！美里の部屋は、そういう場所だった。

今、私はそんな素敵なお部屋で、紅茶をいただいている。「お中元でフルーツをたくさんもらったから、うちのママがクラフティ作ったの。よかったら心都、食べにこない？」とお呼ばれをしたのだ。こんな優雅で素敵な日曜日、きつと美里の部屋でなければなかなか過ごせない。

「夏祭りの焼きそばって、青のり入ってるかな……」

お皿の上でつやつやと宝石のように輝くダークチェリーを見つめ、私は言った。

美里は紅茶をひとくち飲み、私を見つめる。

「そりゃ、大概の焼きそばには入ってるんじゃない」

「そうだよね……」

「何よ急に」

私はクラフティをフォークですくいながら、思わずため息をつく。「七緒と夏祭りで焼きそば食べたときに、歯に青のり付かないようにしなきゃなーと思うと今から心配で……」

「あら、のろけが出るなんて上等ね」

と、からかうように美里。

のろけじゃないんだけどな。

そう言いたかったけど、その前に口いっぱいクラフティを頬張ってしまったから、私は黙って首を横に振った。

「のろけじゃなかったら何なのよー。ん？」

美里がグツと目を細め笑う。私がやったら確実に「ニヤニヤ」になるこの笑い方も、彼女の場合は何やら言いようのない色気が漂っている感じがするから不思議だ。

私は口の中のものを全部飲み込んで、ようやく声を発した。

「違っつてば。……確かにこないだ誘ってもらったときは、もう飛び上がったちゃうくらいに嬉しかったけど。だからこそハマしたくないな」

あいにくというべきか、山上との約束によって、当日焼きそばを食べることは既に決定している。

もしも夏の夜の幻想的な雰囲気のおかげで奇跡的に七緒とロマンチックなムードになれたとしても、私がニツと笑った瞬間前歯に青のりを付けていたら、何もかもが台無しだ。

どうやら美里も同じような場面を想像したらしい。少し悲しげな顔で私を見た。

「鏡持ってきなさいね」

「うん」

乙女の日常における必需品、小さな手鏡。多分学校で全女子生徒の鞆をひっくり返したら、ほぼ全員の持ち物から発見出来るだろう。だけど私は普段、滅多にそれを持ち歩いていない。そんなに頻繁に自分の顔をチェックする習慣もないし、たまに何か気になることがあつたらトイレの鏡や教室のガラス窓なんかで事足りる。情けないことだけど、やはりここにも私の女子力の低さが表れてしまっているのだ。

とにかく夏祭りの日は、命に代えてもこれだけは忘れないようにしよう。私は固く決意した。

「そういえば心都、こないだストパーかけたと言ってたけどあれどうなったの？ 相変わらず梅雨の湿気に弄ばれへアーだけど」

「うん……ストパー代にしようと思ってたお金使っちゃったから、まだ当分かけられそうにないや」

「えー、何買ったの？」

美里が身を乗り出す。そんなに期待されると、少し発表しづらい。

「笑わない？」

「笑わないわよ」

「……浴衣ゆかた」

「わあ、心都も結構かわいいところあるのね」

「どういう意味だろう？」

「つつこみたいところだけど、その気持ちもぐっと抑えて私は俯いた。それ以上に、なんだか照れくさいのだ。」

七緒が夏祭りに誘ってくれたあの日、私はその足で早速浴衣を買いに行った。浮かれてるよなあ、と自分でも思う。

浴衣を着ればあつと言う間に美女に大变身、七緒も私にメロメロ、両思い！ なんて都合の良い妄想は、さすがに最近はしていない（浴衣を買った帰り道は、正直、したけど）。

「ただ、馬子にも衣装っていう素敵なお言葉もあるし。夏祭りの日、七緒の目から私が少しでも可愛く見えたらいいな」なんて、淡い期待を抱いてしまう。

「でも心都、浴衣ちゃんと着られるの？」

「うん、着たことないけど、てきとーに本かなんか見ながらやれば大丈夫でしょ、多分」

「何言ってるのよ。あれ着るのって結構難しいのよ」

「え、浴衣って胸の前で布を交差させて終わりじゃないの？」

美里が重い重い溜息を吐いた。

「どうやら私、大きな誤解をしていたらしい。」

フリフリこつてリドレス系の服を好む母親の元に生まれたせいかな、私は今まで浴衣に馴染みのない人生を送ってきた。それゆえに、正しい着方やその難しさなんかも全く知らないのだ。

「わかったわ。夏祭り当日、七緒くんとの待ち合わせ前に私の家に来なさいよ」

紅茶を飲み干した美里が、頼もしい口調で言う。

「えっ、いいの？ …… つていうか美里、浴衣の着付けできるの？」

「うん。小さい頃から親に教わってたから、中学上がる頃には自分で着てたわよ」

「さすがー！ ありがとう！」

やっぱり持つべきものは大親友。私は感激して美里の両手を取ろうとした。のだが、すんでのところで止めた。

彼女の瞳がこれ以上ないくらいに輝き、怪しい光を放っていたからだ。これはもう完全に、スイッチが入っちゃったときの顔だ。

「心都のおめかし、たっぷり手伝ってあげるわ。あとは作戦会議ね。」

『夏の夜、浴衣に金魚に恋花火大作戦』！ キーワードは『人混み』

『手つなぎ』 『他校の不良登場』 『大立ち回り』 『2人で1つのか』

き氷』 『来年の夏は恋人としてあなたの隣で花火を』 e t c ……」

そのワードを聞いただけで作戦内容に察しがつく。

そして申し訳ないことに、私は現段階でそのうちの1つも実行できる気がしないのだった。

* * * * *

大粒の雨が降り注いで、まるでそこら中に薄いカーテンをかけたように、辺りの景色がぼやけて見える。

ざあざあと激しい雨音が耳につく。

梅雨って植物にとっては天国なんだろうけど、この季節を嫌う日本人は多い。特に私みたいに、天気予報をチェックし忘れて傘を持たずに学校に行った人間は、無情にも午後から降り出した雨に、白旗をあげるしかないのだ。

「うう、さいあく」

私は公園の滑り台の下、ひとり呟いた。

通称『かまくら』と呼ばれるその滑り台は、全体を支えるホネホネした柱がなくて、かまくらのような丸みのあるドーム形をしている。その中は空洞になっていて、私も小さい頃はよくここで秘密基地ごっこを楽しんだものだ。

だけど今の私にとって、もうこのかまくらは遊び場ではない。ありがたい雨宿りの場所なのだ。

濡れてしまった制服のスカートを両手で絞ってみると、結構な量

の水が出る。

「あーあ、最悪……、と今度は声に出さずに呟いた。

今日、部活を終えた下校時にはすでに雨が降っていた。途中までは料理部仲間の傘に入れてもらっていたけど、もちろんさすがに家までついてきてもらうわけにはいかない。幸いそのときまでは雨もまだ小降りだった。だから、傘がなくとも小走りで帰ればなんとかいけると思ったのだ。

しかし1人になってしばらく経つと、雨はそれまでとは比べ物にならないくらい土砂降りに変わった。

だから近くの公園に飛び込み、ここで雨宿りをする羽目になっているのだ。

かまくらの中は暗くて狭い。

幼い頃は2、3人が中に入って遊んでも余裕だったのに。なんだかちよつとノスタルジーを感じてしまう。

だけど物思いに耽るうにも、じっとり湿った制服のシャツや髪から垂れる滴が鬱陶しくてしょうがない。

雨は多いし髪は湿気でハネるし（もっとも今はびしょびしょでハネなんか関係なくなっているけど）、やっぱり梅雨、嫌いだ。

「妖怪？」

顔を上げると、かまくらの前には傘を差した七緒がいた。濡れ鼠の私を驚いた顔で見つめている。

私は七緒を睨みつけた。

「ひど……。もっと他に言いようがあるでしょ？ 水も滴るなんとやら、とか」

「こんな土砂降りの暗い公園でずぶ濡れの人影が見えたら、そりゃ妖怪か幽霊だと思うだろ」

まったくもってデリカシーのない奴だ。もう一度睨みつけてやるうと思つたら、前髪からの滴が目に入つてうまくキマらなかった。

まあ入れば？ と七緒が傘を差しだす。

「いいの？」

「化けて出られても困るし」

七緒の憎まれ口にも、もう睨みをきかす気にはならなかった。相合い傘！　なんておいしい展開だろう。

私は先程までの憂いも忘れ、心の中でガッツポーズを決めた。

雨大好き！

梅雨最高！

1本の傘に2人でおさまって歩きながら、私は頬が弛むのを必死で抑える。

そんなことはつゆ知らず、七緒はのんきに空を見上げた。

「雨、続くなー。毎日こうだとちよつと滅入るよな」

「うん。梅雨明け、例年通りだとあと2週間後くらいだね」

「夏祭りの日は雨降らないといいよな」

何とはなしに七緒が言う。だけど私はその言葉がジーンと響いて、人知れず心を震わせていた。恋する乙女にとって、「雨降らないといいよな」を「お前とのデートが今から楽しみでいてもたってもいられないぜ！」に脳内変換することなんて容易い作業なのだ。

七緒の頭の片隅にでも、私のお出かけの予定が忘れずメモされていることが嬉しい。

少しは楽しみにしてくれているってことなのかな。

嬉しさに彼の顔を見上げ、

「……」

その瞬間、気付いた。

七緒、またちよつと背が伸びたみたいだ。

こうして同じ傘の中で至近距離にいて、はっきりと実感する。

今までだったら隣の七緒に対して「見上げる」なんて表現は、絶対になかった。

それが今は、ある程度あごを持ち上げなくては彼の横顔をきちんと見ることができない。7、8センチは差が開いてしまったように

思う。

なんか、変な感じ。

私の執拗な視線を感じたのか、七緒が訝しげにこっちを向いた。

「何？」

目と目がばつちり合い、少しまじつく。

「いや、なんでも……。そ、そういえば！ 七緒、夏休みも部活忙しいの？」

歯切れの悪さを誤魔化すために、部活の話振る。

ちよつと苦しかったかなあと思っただけ、七緒はあっさり話題転換に応じてくれた。

「まあな。8月に大会あるから。どこまでいけるかわからないけど、一応それが中学最後の大会になるかな」

「引退試合ってこと？」

「そう」

「えーっ、超重要じゃん！ また見に行っていない？」

「うん、それは有り難いんだけど……勝負の夏休みなのに受験勉強は大丈夫なわけ？」

「その日のために前の日頑張る！」

鼻息荒く頷く。

だって、今まで努力してきた七緒の中学校生活の集大成ともいえる大会だ。これを応援に行けなかったらきつと私は一生後悔するだろう。雪が降っても（夏だけど）、槍が降っても、何が何でも這ってでも行く。

そっか、と七緒が笑って答えた。

相変わらず雨はざあざあと降り続けている。学校指定の運動靴がびしょ濡れで、靴下にまで浸水してきた。

だけどさつきまでは鬱陶しいことこの上なかった雨音も、体にまとわりつく水分も、今は全く不快には思わない。

むしろ、雨粒が地面に当たる音が小気味いい音楽にさえ聞こえてきて、心が弾む。

お手軽な奴だな、私って。
我ながらちよっと呆れた。

「……あのさ、心都」

少しトーンを落としたような、七緒の声。

隣を見やると、さっきまでとは違う、真面目な顔をしている。

「何？」

「……うん。俺……」

彼の言葉を遮ったのは 激しすぎる水音だった。

後ろからやってきた自動車が、私たちを追い抜きざま、思い切り水たまりを通過したのだ。

ばしゃっ、という派手な水しぶきが上がり、車道側を歩いていた七緒は当然、甚大な被害を被った。

「……」

全身ずぶ濡れ、髪を額に張り付かせた七緒は呆然とその場に立ち尽くした。

「あははははは！ 妖怪！ 妖怪濡れ鼠！」

突きつけられた私の人差し指を、七緒がバシリと払う。

「なんだよ、笑ってんなよ！ もっと他に、いたわりの言葉とかあるだろ！」

「ハァー？ さっきの言葉そのままそっくりお返ししただけですけどー」

「くっ……」

悔しさに打ち震える七緒。その姿をもう一度指差して笑っている間に、私の家の前に到着した。

「あー、面白かった」

「俺は面白くないけど」

「そういえばさっき言いかけてたこと、何？」

私が見上げると、七緒は一瞬、少しひるんだような顔をした。

なんだその反応。私、そんなに妖怪チックな風貌だっただろうか。

「……いや、また今度でいいや。お互い一刻も早く着替えた方がいいと思うし」

確かに彼の言うとおりだ。傘を差してきたことが全く無意味なくらい、お互い全身濡れそぼっている。

すぐく気になるけど、まあ、しょうがないか。

「わかった。じゃあね。傘入れてくれてありがとう」

「ああ。……んじゃ」

七緒の背中が豆粒ほどになるまで見送る。

本当に、何を言おうとしていたんだろう。

まさかまさか、彼から私に愛の告白？ と夢見る乙女モードに突

入ったかったけど、今回はちょっと無理だった。

だって、七緒があんなふうに言葉を濁すときって、たいていが私にとってあんまりよくない報告だから

「ぶえつくしよい！」

思ったより豪快なくしゃみが出た。

ああ、駄目。大風邪ひいて夏祭り欠席なんてシャレにならない。

とにかく今は、仮定の話に杞憂するより目の前の問題を片付けよう。

私は雨に濡れた服を着替えるべく、さっさと家に引っ込んだ。

9 & 17 : 浴衣と、夜の手前 & get ;

「ぐえ」

「もう、変な声出さないでよ心都」

「だ、だって苦しい……。もうちよつと緩めて……」

美里が私のお腹の帯をきつく締め上げるから、私はもう限界だった。お昼に食べたメロンパンが出そう（きちゃない話、失礼）。

美里がピシヤリと言い放つ。

「駄目。ここをちゃんとしとかないとすぐ着崩れちゃうんだから」
「うう……」

浴衣着るのってこんなに大変なんだ。知らなかった。

美里の鮮やかな手さばきに感心しつつ、私は息苦しさに耐えた。

美里のお姫様部屋で格闘すること数十分。

「はい、完成」

と、美里が私の肩を叩いた。

大きな姿見の前に立つと、濃紺に薄紅の朝顔柄の浴衣に身を包んだ自分がいた。美里がうつつすら化粧まで施してくれたため、なんだか顔もいつもと違って見える。

「うん、良い感じ。心都みたいに髪が黒々して割とあっさりした顔の子が一番似合うのよ、浴衣って」

「そ……そう？」

私は、美里みたいに目が大きくてまつ毛バチバチ、色素の薄いサラヘアのほうが羨ましいけど。

美里は誉めてくれるけど、正直、似合っているのかいないのか、自分ではよくわからない。とりあえずいつもの自分とはだいぶ印象が違うなっていうことだけは確かだ。

「さあ、あとは髪型ね」

美里が右手にコテを構えた。

「これ使えば心都も憧れの子リスちゃんヘアになれるけど。どうする？」

私は、子リスちゃんの茶色いくくるふわふわヘアを思い出した。軽くて柔らかくて、女の子らしさ満点の可愛い髪型。あんなふうになりたい思いが先走って、ちりちり爆発ヘアになってしまったことも記憶に新しい。

だけど少しの逡巡の後、私は首を横に振った。

「うーん。……やっぱり、普通の髪形でいいや」

町内の夏祭り。

それはつまり、待ちに待った七緒とのお出かけの日でもある。

私は朝からなんだかそわそわしてしまい、美里にヘアメイクの面倒をかけている今も、時計を見て待ち合わせの時間が刻一刻と近付いてくるのを確かめてはギュツと胸を詰まらせている。

「ありがとう、美里」

自分の頭の高い位置にあるすっきりとしたポニーテールを触り、私は親友にお礼を伝えた。

「なんか心都、顔ひきつってない？」

「え……。わ、わかる？」

両の拳で自分のほっぺをぐりぐり押す私を、化粧が崩れる！と美里が怖い顔で制止する。

「なんか変に緊張しちゃって……楽しみは楽しみんだけど、怖い気持ちもあるっていうか……」

「怖いって何がよ？」

呆れたような美里の声。たまらない気持ちになって、私は顔を伏せた。

「だって……浴衣、七緒にドン引きされたらどうしよう。似合っていないと思われるかもしれないし……」
「うわ、こいつ浴衣着てきやがったよ、しかも化粧してやがるよ、なに気合い入れちゃってんだよ

気持ちわりい（失笑）』とか……」

美里に着付けまでしてもらって本当に悪いけど、今更ながら私は浴衣を買ったことをほんのり後悔し始めていた。

七緒がただ単に幼馴染みの優しさとして、私を夏祭りに誘ってくれたことは明白だ。これは決してデートなんかじゃない。

それなのにこうやってめかしこんでいそいそ登場して、七緒に不快感を与えてしまったらどうしよう？

空回りしていたらどうしよう？

土壇場の今になってそんな不安が胸にむくむくと湧き上がり、やっぱり胃からメロンパンが飛び出てきそうなのだ（またまたきちゃない話、失礼）。

反応のなさに恐る恐る顔を上げると、美里は声を押し殺して笑っていた。

頭を殴られたような、衝撃。

「な……な、なんで笑うの？」

「ごめん、ごめん。なんかおかしくて。心都ったら、めずらしくす

ごーく『恋する女の子』なんだもん」

「それ、誉めてる？ 微妙にけなしてる？」

「誉めてるわよ。大丈夫、浴衣似合ってるわ」

ポンポン、と美里が私の頭を軽く叩いた。彼女は変な嘘やお世話と言わない子だけど、今の表情や仕草からはまるで小さな子供をあやすようなものが感じられてしまい、私はちよつと複雑だった。

「どうしようもなく緊張しちゃったときのために、心都に簡単なおまじない教えてあげるわ」

「おまじない？」

その乙女チックな響きに、私は懐かしさを覚えた。

小学生のころ流行ったなあ。消しゴムにピンクのペンで好きな人の名前を書くと両思いとか、リップクリームに針で自分の名前を刻むと可愛くなれるとか。

美里はにっこり微笑むと、他の誰が聞いているわけでもないのに、
いたずらっぽく私に耳打ちした。

からころ、からころ。と、生まれて初めて履く下駄からぎこちな
い音がする。

私は転ばないように気をつけながら、ひとり歩く。せつかく着飾
っているのにここですっ転んでボロボロになったら台無しだ。

赤に少しの紫が混じった空を見上げる。

チチチ……と名前のわからない虫が鳴き、日が暮れかけて暑さが
少し和らぎ始める、夜の一步手前。夏より冬派の私だけど、夏のこ
の時間帯は大好きだ。

雨が降らなくて良かった。

七緒との待ち合わせ場所は、町の少し外れにある神社。そこが今日の夏祭りの開催地なのだ。

鳥居の前に到着して辺りを見回す。普段は閑散としている広い敷地内も、今日は出店や大勢の人の活気で賑わっている。

約束より少し早く来てしまったから、まだ七緒の姿は見えない。

早く来てほしいような、来てほしくないような。そんな微妙な気持ちで私の胸を占拠していた。いくら片思い中とはいえ相手は十年の付き合いの幼馴染なのに、ちょっとおめかしして会おうっただけでこんなにビビってしまうなんて。自分の小心加減が情けないため息をつきかけたその瞬間、遠くからこちらに向かい歩いてくる七緒の姿を、視力1.5の私の目がとらえた。

ああ、どうしよう。私は意味もなく自分の頭や顔を触った。

浴衣とかメイクとか髪型とか変じゃないかな　　やっぱりやめとけば良かったかな　　今から公衆便所にかけて込んで浴衣脱いでメイク落とすべきかな　　いやいや着替え持ってないじゃんただの変質者じゃん　　もう軽いパニックだ。

しかし、そんな私の動揺に拍車をかける、予想外の出来事が起きた。

七緒は私の真ん前をスーツと通り過ぎ、鳥居のもう一方の足側に立った。そしてそのまま腕時計で時間を確認すると、何事もないかのようにそこに居続ける。

つまり、まさかの完全スルーだ。

この距離なら確実に私が視界には入っているはずなのに。

なんだ、つまりこれは、あれか？

私、とっさに他人のフリしたくなるくらい浴衣が似合っていないってこと？

「な……七緒……？」

泣きたい気持ちをこらえ、背後から呼びかける。自分でも驚くほど悲壮感あふれる声になった。

振り返った七緒が、私を見て目を丸くする。

「え、心都だったのか！ なんだよ、浴衣着てるからわかんなかった」

「はあ、すみません。マジですんません」

「何ペコペコしてんだよ」

なんとなく七緒と目を合わせることができない。

軽く笑って、「てへ、ちよつとおめかししてきちゃったー。こんなときくらいしか浴衣着る機会もないからサー」と冗談っぽく言えたらどんなに楽になるだろう。

だけど今の私にはそれもできない。挨拶もそこそこに謝罪を連発しおろおろと視線を泳がせる私は、きつと挙動不審っぷりこの上ないだろう。

不意に、七緒と目が合ってしまう。

七緒はちよつと笑っていた。

それが苦笑なのか失笑なのか、はたまた愛想笑いなのか 完全テンパリ状態の私には判断がつかない。

「へえ。浴衣だとなんかいつもと違う感じだな」

「……」

誉め言葉とも遠回しな批判とも取れる発言だ。

今の彼の言葉 『なんかいつも（ダサイ格好してるお前だけど今日みたいな変に気合い入ってる）と（また普段とはひと味）違う（気持ち悪さがにじみ出てる）感じだな』の略だったらどうしよう。胃がキュツとする。

「なんかさ」

「……虫」

何か言いかけた七緒をさえぎり、私は呟いた。

自分自身に言い聞かせるように、低く低く唱える。

「だんご虫」

「は？」

「今日の七緒はだんご虫、だんご虫」

「……喧嘩売ってんの？」

断じて売っていない。

美里が教えてくれたおまじない 「緊張しちゃったときは、相手をだんご虫かなんかだと思つようにすればいいのよ」 「をさっそく試したただけだ。」

不本意極まりない、といった感じの表情の七緒。

並んで、私たちは夏祭りの人混みの中を歩き出す。

9 & 1 t ; 浴衣と、夜の手前 & g t ; (後書き)

お読みいただきありがとうございます。

気が付けばユニークアクセス数が5万人に。本当にありがたいことです。

スローペースな話ですが、どうか完結までお付き合いいただきたいです。

また、感想、意見などいただけると嬉しいです。

祭り囃子の軽快な太鼓の音が、少し離れた所から聞こえる。一定のリズムがお腹に響いて心地いい。

神社の広い敷地内にはずらりと出店が並んでいて、その数だけたくさんの香りが立ちこめている。

その傍らを歩く色とりどりの浴衣の女子たちの笑い声は、高くて、ささやかで、ふわふわしていて、なんだかよそ行きみたい。

道なりに吊るされたいくつもの提灯の光も幻想的で、お祭りの夜はまるで別世界に来たような気持ちになる。

美里のおまじないの効果は絶大だった。

隣の七緒をだんご虫だと思いきな瞬間、今までの妙な緊張がみるみる解け、肩の力を抜くことができたのだ。

「あー、すっごいお腹すいた。七緒、なんか食べよう！」

「なんだよ、感情が安定しない奴だな……」

隣の七緒が呆れたように私を見る。まあ、彼の反応も当然といえば当然だ。さっきまで挙動不審に謝罪を繰り返していた私が、数分後にはもう恥じらい皆無で食い意地を發揮しているのだから。

「だけどそんなこと気にしてもう一度もじもじするつもりもない。

おまじないが効いた今、この夏祭りを思い切り楽しもうという気持ち私を占めていた。

「だって朝からメロンパンしか食べてないんだもん。ねえ、山上が手伝ってる出店行こうよ。焼きそば食べたい」

「ああ。じゃ、店探すか」

ずらりと並ぶ屋台は、今ちょっと見ただけでも相当な数がある。

更に、いよいよ暗くなり始めてお祭り本番といった感じの今、人混

みもなかなかのもので、この中から山上の焼きそば屋台を探すのは決して楽な作業ではないだろう。

だけど私は全く苦には感じなかった。夏祭りの夜の幻想的な雰囲気はやっぱり素敵だし、そんな中こうして七緒と2人きりで過ごせるなんて、片思い中の身としてはとても贅沢なことだと思うから。

ただ、美里が言っていた『手つなぎ作戦』だけはどうしても実行できそうにない。

確かにこの人混みの中、うっかり気を抜いたらはぐれてしまいそうではあるけど、隣を歩く七緒ののん気な顔を見てみると、とてもじゃないけど勇気を振り絞って手を取る気にはなれないのだ。

それにしても、ずらりと並ぶたくさんのお店はどれも本当に魅力的に見える。

カラフルなかき氷、つやつや光る林檎飴、焦げたソースの匂いがたまらないお好み焼き、見るからに柔らかそうな綿飴……。焼きそばを目指して歩いている最中でも、つい目移りしてしまいそうになる。

中でも私が心奪われたのは、割り箸で刺された透明な水飴の中に、人工着色料感たっぷりのビビットピンクなうさぎの飴細工が入っているものだ。

食べやすさや健康は一切無視、見た目の可愛さだけを追求した一品。その潔さとラブリーさが素敵だ。

私はついつい足を止め、見入ってしまった。

「おっ。浴衣のべっぴんさん、いらっしやい」

屋台の奥に座る、つるりと禿げた頭のおじさんが私に向かって言った。

「べ、べっぴんっ？」

サービストークだとわかっているのに動揺する。だって、普段あまりにも言われ慣れていない類の言葉なんだもの。

いかにも商売上手、といった感じのおじさんは、イキの良い笑顔

で続ける。

「おう、べっぴんもべっぴん、特上のべっぴんさんだ！特別大サービス、今なら50円引きしてあげるよ」

「わあ、やった」

いくらお世辞でもそこまで言われると当然悪い気はしない。

飴は文句なしに可愛いし、安いし。

「ねえ、七緒。せっかくだから……」

私はニヤけながら、後ろの七緒を振り返った。

ふわふわとした良い気分の中、彼が飴の購入に同意してくれるであろうことを期待して

「……って、いねエし！」

図らずも大絶叫。

てっきり後ろにいるものと思っていた七緒の姿は、どこにもなかったのだ。

衝撃、混乱、そして絶望。まさか待ち合わせから10分足らずで早速はぐれてしまうなんて。確かにこの人混みの中、何も言わずに足を止めた私も悪いけど……。

「……どんだけえ。マジであいつ、どんだけだよ」

何がどう『どんだけ』なのかは自分でもよくわからないけど、とにかく何やら強い憤りと空しさを感じ、私は独り呟いた。

おじさんに必ず後で買いに来ることを約束して、私は人混みの中を歩き出す。

まだそんなに離れてはいないはず。早く合流しなくちゃ。

こつこつととき、携帯電話を持っていない七緒のアナログ加減が恨めしい。

しばらく歩き回ったところで、

「杉崎！」

耳慣れた声が私を呼んだ。

声のした方を振り向くと、そこにはなぜか粋な法被はっぴを着こなした山上がいた。

彼はピアツと明るい笑顔で、私を見つめた。そして両手に銀のヘアを持ったまま、つかつかと私の元へ歩み寄る。

「うわー！ 杉崎浴衣！ 可愛い可愛い超可愛いんですけどみたいな！」

「山上……ギャルみたいな口調になってるけど」

「ハハハ！ わりい、つい興奮して」

そう言って笑う山上の肩の向こうには、美味しそうな香りが漂う焼きそばの屋台。中で賑やかに働く数名の男性たちは、みんな山上と同じようにガタイが良く、揃いの法被を着ている。

七緒を探し歩くうちに当初の目的地だった屋台にひとり辿り着いてしまうなんて、人生って順序良くいかないものだ。

山上は目を輝かせたまま、豪快な笑顔で私の肩をバシバシと叩いた（もちろん、その時点で銀のヘアは他の仲間に明け渡していた。そんなものでバシバシやられても、私、焼きそばやお好み焼きじゃないから美味しくならない）。

「でもほんと、可愛いな！ 杉崎、浴衣似合うんだなー」

「……いやいや、そんな……」

「謙遜すんなって！ 最強に可愛いから自信持て！ 良いもん見れた！ 幸せだ！」

「ど、どうも……」

ちよっと、かなり、褒めすぎだと思う。すごいな浴衣マジック。またしても慣れない居心地の悪さを感じ、私はぎこちなく頭を下げた。

顔が赤くなっていないことを祈る。恥ずかしい。

だけど、山上也館屋台のおっちゃんですえ（お世辞でも）褒めてくれるのに、一番「可愛い」と言われた人には何も言ってもらえていない。

というかこんな、会ってしよっぱな離れ離れだなんて。

なんだかなあ。

人生つて、やっぱり上手くいかないよなあ。

と、弱冠14歳と8ヶ月にしてこの世の無情を噛み締めてしまっ私だった。

10&11t・夏の夜と、ちよつぴり虚無感>t；(後書き)

一か月ほどの更新停止から帰ってまいりました。またよろしく願
いします。

「東と一緒にじゃないのか？」

山上が不思議そうに尋ねる。

「ちよつとはぐれちゃって……今探してるんだけど、見かけなかった？」

「この辺には来てないな。こんな人混みだから、一旦はぐれたら探すの大変だよなあ」

「うんうん、そうなんだよね……ん？」

と、ここまで言っただけで気が付いた。

「なんで私と七緒が2人で来てること知ってるの？」

「だってホラ、東のことを夏祭りのこの屋台に呼んだの俺だし。東はきつと杉崎を誘ってくるんじゃないかなと思っただけからさ」

山上はこともなげに答えるけど、いまいち腑に落ちない。七緒が私を誘うなんて、そんなの何の確認もないことだったと思うけど。

山上はたまに妙な読みの深さというか、私にはよくわからない見解を見せるのだった。

「……っていうか、そうだ、忘れてたけど私ちよつと怒ってんだからね、山上」

「えー？ なんだなんだ、怖いな」

私が軽く睨みつけると、山上はわざとらしく首をすくめた。もちろん全然びびっていない。くそ、悔しい。

「山上、七緒に変な宣戦布告したり、私のゴキブリ発言バラそうとしたりしたじゃん。大らかなのはいいことだけど、言って良いこととマズイことの冷静な判断頼むよマジで」

いくら本人にそんなつもりは毛頭なかったとしても、山上の宣戦布告が七緒を大きく戸惑わせたのは事実。私の勝手な恋心でこれ以上七緒に迷惑がかかってはたまらない。

それに山上は何のつもりか、『ゴキブリ並にしつこい女である自分は七緒への恋を簡単に諦められない』という私の恥ずかしすぎる宣言まで披露しようとしたのだ。これには本当に焦った。

しかし彼は全く動じず、明るすぎるほどの笑顔で私をいなした。

「そんなこと言っただけ？ まあ、その結果今日2人で祭来れてんだから、いいじゃねえか」

「……」

もう言葉もない。やはりこの彼に注意を促して屈させるなんて、私には100年早かったようだ。

「あ、じゃあお詫びに面白いこと教えてやろうか」

突如、山上がいたずらっぽい顔で声を潜めた。

「……何？」

「5年前に道場で俺と東が取っ組み合いの喧嘩になったの、覚えてるか？」

「うん」

忘れもしない。あの雪の日。10歳だった私たち。

七緒と山上が急に取っ組み合いを始めるものだから、私はどうしたらいいのかわからなくて、結局バケツの水をぶっかけて強制的に2人を止めた。そしてその後は七緒と2人でなぜか号泣。

あの出来事がきっかけで、私の七緒への気持ちは幼馴染みに対するもの以上になったんだ。

「あの原因、知らないだろ」

私はこっくりと頷く。

ずっと謎だった、あの喧嘩の発端。七緒は教えてくれなかったし、私も無理に聞き出すつもりはなかった。だけど確かに気になってはいたのだ。教えてもらえるもんなら教えてほしい。

ふと、山上が笑顔を引っ込めた。いつになく神妙な顔になり、もったいぶって腕を組む。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「お前の母ちゃんデーベース、だったんだよ」

「……はあ？」

「つまり、俺はあの頃かなり嫌な悪ガキだった。杉崎のこと好きなのに素直になれなくていじめてばっかりだっただろ。だからあの日も悪ガキの典型中の典型『お前の母ちゃんデーベース』をノリノリで歌ったんだよ。当の杉崎は、ぞうきんがけに夢中でちゃんと聞かえてなかったみたいだけだな」

そう。あのとき、山上が私に向かって何か言った記憶はある。しかし掃除に気をとられていた私は彼の言葉をうっかり聞き逃し、間抜けなクエスチョンマークを浮かべていた。

「それで、東のほうが喧嘩ふっかけてきたんだよな」

10歳の七緒の怒りのツボは、「私のお母さんが馬鹿にされた」ことだったのか。確かにうちの母親は、私と七緒の喧嘩のときも必ず七緒側につき、小さい頃から彼を可愛がっていた。子ども同士の喧嘩とはいえ……いや、子供同士だからこそ、七緒が我慢ならなかったのもわかる。

でも、だからって 5年近くうやむやにされていた事件の真相が、これ？

「なんか私がこんなこと言うのもなんだけど……全然ドラマチックじゃないね」

「え、ドラマを期待してたのか？」

直球で尋ねられ、私は思わず黙り込んだ。

そりゃあ、私だって今年で15歳。更に、あの鈍感に恋して早5年、拍子抜けさせられること多数。

これまで重ねてきた様々な経験から、甘い展開はもうなるべく期待しないようにする姿勢が身についている。

でも、万が一の可能性に思いを寄せ、「七緒が私のために怒ってくれたの……？ 一体どんなことで……？（バツクに花びらを散らした効果付きで）」なんて、ちょっとくらいときめいてみてもいい

じゃないか。

山上の質問には答えず、私は自分の携帯電話で時間を確認した。もう七緒とはぐれてから20分ほど経過している。

「……そろそろマジで七緒探さなきゃ。合流できたら、約束通り焼きそば買いに行くから」

「ここにいたほうが早く会えるんじゃないか？」

山上の言うことにも一理ある。携帯電話を持っていない七緒を闇雲に歩き回って探すより、ここに留まって彼が通りかかるのを待ったほうが良いのかもしれない。

「だけど私は首を横に振った。」

「早く探してあげないと、夏祭りの不埒なヤロー共に七緒がナンパされちゃうからさ」

じつとしているより、自分の足で七緒のところへ行きたい。

それに私には、絶対に彼を見つけられる自信がある。どんなに暗い場所でも、人混みの中に埋もれていても、私の目には七緒の姿が他の誰よりもきらきらと輝いて見えるから。なんちって。

「わかった。……じゃあ、ハイ」

そう言って山上は、私に向かって両手を広げた。

「何の真似？」

「決まってるだろ。お別れのハグ！」

私はげんなりとした気持ちに包まれた。

ちなみに山上、「ハグ」の部分だけやたらと発音が良い。それがまた、なんか腹立つ。

この、帰国子女のアメリカナイズのゴリゴリマッチョの法被似合いすぎ野郎！ と、私は喉まで出かかった言葉をぐつと飲み込む。いけない、いけない。ここで山上のペースに巻き込まれてしまつては駄目だ。「恥じらいを持たずなりふり構わず声が大きい杉崎が好きだ」と豪語する彼は以前から、私に大声を出させようとわざと

挑発してくるフシがある。つまりここで鼻息荒くカツカと喚き立ては、奴の思うつばなのだ。

私は深呼吸すると、いかに自分が冷静そうに見えるかということに全神経を集中させ、山に向き直った。

「ここ、日本。私、日本人。あんたも、日本人」

「そうだな。まあ、ぶっちゃけ杉崎の浴衣があまりにも俺的にヒットだったから、ギョツとしたくなっただけなんだわ。俺って正直者だろハハハ」

「は、ハハハってあんた……」

やはり山上のほうが一枚も二枚も上手だ。そんなストレートに言われてしまったら、とっさに反論の言葉が思いつかない。

「え、駄目？」

「だ、駄目が良いかと言われたらそりゃ駄目に決まって……」

さすが柔道有段者、と言うべきか。私の心が動揺に押されてきているのを、山上は見逃さなかったようだ。

ふふ、とあまりにも朗らかな笑みを浮かべ、手を広げたままこちらに一歩詰め寄る。

「ええー？ 俺のおかげで今日東と祭に来れてるのに？ よく考えたら俺、超損な役回りじゃね？ きっかけ作りだけして好きな女の子の浴衣姿を見られたのも一瞬で、更に今からその子を他の男の元へ送り返すんだろ？ せめてもの救いにアメリカでは挨拶代わりであるハグを求めるくらい許されるんじゃないかねーかの的な考えはおかしいかね的な？」

「な、何言ってるの」

そう言い返しながらも、私はよくわからなくなってきた。

確かにアメリカじゃハグなんて挨拶代わりだって聞く。

だったらこの要求も、そんなに驚くようなことでもないのか？

これくらいでこんなに焦っているのって逆にダサい？

変に意識して拒むことで、逆にヤラシイ感じになっちゃったりす

る？

ぐるぐると回る頭を抱え、私はフリーズした。

そのときだった。

ポン、と誰かが後ろから私の肩を叩いた。

驚いて振り返ると、そこには、先ほどから探し求めていた姿があった。

「やーっと見つけた……」

「七緒……」

七緒は少し息を切らせて、それでもホツとしたように笑った。

「わりい、わりい。いつのまにか心都のこと見失ってたわ。山上のところにいたんだな」

七緒は山上に右手を突き出し、更に2本指を立てた。ピース？

「山上、焼きそば2つ」

「ちえー、このタイミングで来るんだもんな、東」

山上がちよつと唇を尖らす。もちろんふざけてやっているのは顔を見ればわかる。しかし今ここに来たばかりで何のこっちゃわからない七緒にとつては、戸惑いの嵐だろう。

「え？ なんだよ」

七緒が心底不思議そうに尋ねる。

それを完全無視した山上はスタスタと鉄板の前まで歩くと、銀のへらを使って器用に焼きそばを操り始めた。そして手際良く2つのパックに詰めると、私たちに差し出す。

「へーい、お待ち」

「あ、さんきゅ」

私は思わず山上をじっと見つめた。

結局うやむやになってしまったハグの件。私は一体どうするのが正解だったんだろう。

損な役回り　という先ほどの山上の言葉が、頭にこびりつく。

確かに今日七緒と2人で出かけることになったのは、他でもない山上のおかげなのだ。しかも山上は、七緒が私を誘うことを想定した上で、今日の夏祭りの話を持ち出したという。

なんだかちよっと引っかかる。

それってつまり、どういう意図があつてのこと？

そんな私の葛藤を知ってか知らずか、笑顔の山上はひらっと手を振った。

「そんじゃ、またな。あ、杉崎、さっきの続きはまた今度つてことで」

「……」

やっぱり、たまによくわからない奴だ、山上つて。

山上の屋台から離れ、私と七緒は再び歩き出す。

「七緒、大丈夫だった？」

「え」

「私とはぐれてる間にナンパとかされなかった？ 変な男から」

「……お前それ、喧嘩売ってんだろ」

「えっ、私は真剣に七緒の身を案じてあげてるのに」

「されてたまるか」

相変わらずのすごい人混み。やっぱり2人並んで歩くのは難しい。たまに人とぶつかりそうになるのを避けつつ、私は一歩前を行く七緒の背中についていく。

「そういや、山上が言ったた、『さっきの続き』って？」
と、七緒。

何度も言うつようだけど、七緒は私のほんの少し先を歩いている。

だから、彼の表情は見えない。当然、彼からも私の顔は見えない。そのことが原因なのか、はたまた夏の夜の独特の雰囲気のせいなのか。自分でもよくわからないけど、このとき私の中にささやかな好奇心が芽生えてしまった。

ドキドキと、いたずら欲と、ちよつとの切ない気分が混ざった好奇心。

それはつまり、さっきの山上とのやりとりを伝えたらこの幼馴染みはどんな返答をくれるのか？ というものだ。

私は答える。つとめて明るく普段通りの、なんてことなさそうな声で。

「いやー、あのね、山上が『お別れのハグをくれ』ってさ。参っちゃうよねあのアメリカンボーイ」

「ハグ？ って何だっけ？」

「ギョツと抱きつくってことだよ」

「なんじゃそりゃ」

「さあ。こつちが聞きたいよ」

そのとき、お好み焼きの良い香りが鼻をくすぐった。今しがた横を通り過ぎたばかりの屋台からの香りだ。うう、誘惑に負けそう。でもソースものだしなあ。焼きそばとかぶっちゃってるしなあ。他にも色々食べたいものはあるし。しょうがない、我慢するか。

そんなことに目移りしながら歩く私に、七緒が尋ねた。

「結局したの？」

「え？」

「ハグってやつ」

「いや、そう言われて困ってる所に七緒が来たから。してない」

「あ、そう」

「混乱してたからちよつと助かった。ナイスタイミングだった」

「んじゃ、1つ貸しだな」

そう言いながら七緒が軽く笑ったのが、後ろ姿からでもわかった。やっぱり彼は予想通りの、のん気すぎる反応だった。もちろん私

はやきもち焼いてほしいだとか焦ってほしいだとかはハナから望んでいない。ただちよつと伝えてみようかなって思った、小さな小さな好奇心なのだ。

そんなことより今私が一番動揺しているのは、さつきから七緒が私の右手を引いて歩いていることなのだ。

そりやもう、「ナンパされなかった？」のくだりから、ずーっと。

「あのさあ……こんなこと言いたかないけど、正直、私いま結構手汗かいちゃってるから恥ずかしんですけど」

「こんな人混みじゃまたはぐれるだろ。そしたらまた再会するのに数十分かかんじやん。さつきはお互い違う方向見ながら別々にフラフラ歩いてたのが敗因だったんだよね」

敗因つて。そんな色気のない言い方ひどい。

「七緒さあ、ケータイ買ってよ。ケータイあればこういうときもすぐ合流できるよ」

「うーん……。まあ、そのうち」

もちろん七緒と手を繋ぐのは初めてのことじゃない。小さい頃はお手手つないで仲良くお出かけなんてしょっちゅうだったし、更に去年の冬の「裏庭タイムン事件」のときのことも記憶に新しい。

だけどなぜだかやたらとドキドキしてしまう。

もしかしてこれも、夏の夜の幻想的な雰囲気と浴衣の絶妙な歩みにくさが成せる技なのだろうか。

「前にもこんなことあったよね」

「そうだったっけ？」

「黒岩先輩にビンタされそうになったら七緒が間一髪助けてくれて、そのあとこうやって手を引っぱられてさ」

「あー、そんなこともあったよね」

思えばあのときも今と同じく、七緒はとことんタイミングが良かったんだ。

「なんか私……助けられてばかりだなあ」
「……」

自分でも情けなくなってしまうほどに、私は七緒にたくさんものを与えてもらってはばかりなのだ。

「……そんなことないけど」
そう言った七緒の表情は、やっぱり私の位置からは見えなかった。

12&17・条件と、好機についてのあれこれ&get;

人混みが少しやわらいだところで、七緒と繋いでいた手はそつと離れた。

ああ、残念　と思う以上に私は安心した。

だって、夏の夜の暑さと人の熱気、それに加えて七緒と触れ合っているというドキドキで、私の右手はこれ以上ないくらいに熱を帯びて、汗もかいてきてしまっていて。

だから、これが原因で嫌われるなんて事態が起こる前に手を離すことができて、正直ちよつとホツとしたのだ。

「……………これ、全部食べきれんの？」

七緒が呆れたように私に尋ねる。

焼きそば、ポテト、イカ焼き、ソース煎餅、フランクフルト、綿飴、チョコバナナ、水飴（あのおじさんの屋台で買った、うさぎちゃんのだんご細工入りのやつ）、ベビーカーテラ、かき氷……………これらを両手にどっさり抱えた私たちは、人混みから少し離れた境内の石段に腰をおろしていた。

「だいじょーぶ！　しょっぱいのと甘いのバランス良く買ったし！」

「そういう問題？」

「そういう問題！　さ、七緒も食べよ」

お祭りで食べるご飯って、どうしてこんなに美味しいんだろう。

どんどん食が進む。

特に山上自ら作ってくれた焼きそばは絶品で、私は「山上、将来焼きそば屋さんでも開業すればいいのに」なんて思った。

私は箸休めに水飴をなめながら、帯に挟んだ小さな熊のぬいぐるみを眺めた。隣に座る七緒にバレないようにひっそりとほくそ笑む。

これは先ほど射的の屋台で七緒が見事ゲットしたものだ。黄色の体に赤いトレーナーを着た可愛い熊（ひげが生えているという点以外は某夢の国のキャラクターと酷似しているけど、夏祭りの景品にはよくあることだから気にしない）は彼の部屋には不必要らしく、私が譲り受けた。

また宝物が増えた喜びで、胸がギュツとなる。

一時はどうなることかと思った今日の夏祭りだけど、なんだかなだ十分楽しみまくっている私なのだった。

「んふふ」

「なになに怖いんすけど」

と、馬鹿にしたような薄ら笑いを浮かべた七緒。

「さっきの金魚すくいのときの七緒、かつこ悪すぎだったなーって。思い出し笑い」

柔道部で鍛えられた動体視力を見せてやる！ と鼻息荒く挑んだものの、金魚すくいの繊細な加減が全く掴めなかったらしい彼は獲物0匹という逆に珍しい快拳を成し遂げたのだ。

「な、なんだよ。あのときさんざん馬鹿笑いしといて、まだそれ引っぱんのかよ」

「あれは忘れられないなあ。3回挑戦したけど全部すぐ網やぶけて、ダッサダサだったもんね」

「そつちこそ輪投げひとつも入らなかつただろ」

「ぐ……」

それを言われると弱い。

「ま、まあ、引き分けだよね今日は！ 私は金魚すくいで勝ったし、七緒は輪投げで勝ったし」

本当のことを言うと、私は多分、射的でも七緒に負けている。

彼がゲットした（そして私にくれた）熊のぬいぐるみはいくつかあった景品の中でもそこそこ豪華っぽいものだったけど、私が手に入れたのは明らかに残念賞の、「萌」とでかでか書かれた変な缶バッチひとつだったからだ。

だけど七緒はそのことを引き合いに出さず、「まあそういうことにしといてやるう」という顔で前を向いた。

その視線の先には、人混みと屋台で賑わう、祭りのメインストリートともいえる道。私たちがいる場所から数十メートルしか離れていないのに、まるで別世界みたいだ。それくらい、この石段はひっそりと静まり返って、人気がなかつた。座ってゆっくりご飯を食べるのには最適の場所だろう。

私は水飴を食べ切り、言った。

「なんだかんだすごい満喫できたね」

「しょっぱなはぐれてどうなるかと思っただけだな」

「まあね。……でも楽しかったなあ。これで夏休み、勉強頑張れそう」

「そういえば心都、進路は決まったんだっけ？」

七緒も溶けかけのかき氷をひとくち食べ、私に問う。

そう真っ向から尋ねられると、ちよつとテンションが下がる。いまだ解決の兆しを見せない志望校問題は私にとって最大の悩みだ。

「えーと……一応調査票は北高を第一志望にして出したけど、まだ検討中っていうか、おいおい確定していく方針っていうか……」

「ふうん」

「そ、そういう七緒は？ 前つさぎ部屋から出てきたの見たけど、もしかして私と一緒に進路うやむや組だったりすんじゃない？ ヒヒヒ」

仲間に引き入れようとにじりよる私に、七緒は憮然とした表情で反論した。

「ちげえよ失礼だな」

「ちゃんと考えてるの？」

「まあ、一応それなりに……」

うーむ。やっぱりこの時期になってもふわふわしている受験生なんてそうそういないか。

更にテンションが下がってため息をつきかけた私は、すんでのところでそれを飲み込んだ。

七緒がいつになく真剣な顔つきで、じっと私を見たからだ。

視線と視線がぶつかって、私の心臓が大きな音をたてる。

妙な沈黙の中で、少し離れた屋台の喧騒が微かに聞こえる。

道なりに吊された提灯の灯りがぼんやりと、夜の闇を照らす。いつもみたいに軽く笑って「何ガン飛ばしてんのヨー」とか言えるはずもない。それくらい真面目な空気が辺りに漂っていた。

「心都」

七緒がゆっくりと口を開いた。

私はいよいよ自分の胸の鼓動に押しつぶされそうになって、死にかけながら黙って次の言葉を待つ。

そんな私の緊張を知ってか知らずか　七緒は少し笑みを浮かべて言った。

「歯にのりついでる」

「……え？」

「焼きそばの青のりが歯についてますよ」

ガツンと頭を殴られたような衝撃を受けた。

「う、うそ!？」

あれだけ美里に心配され、自分でも絶対に起こしてはならないと

注意していた事態が、まさか現実のものになってしまったというのか。

慌てて七緒に背を向け、鏡を取り出す私に、彼がもう一言。

「うそ」

は？

愕然とした気持ちで振り向く。七緒は意地悪く笑っていた。

そのときになって、私はようやく全てを把握した。

この……

「このバーカ！ バカバカバカ！ ガキ！ 乙女心をもてあそびやがって！」

「いてっ！ いてて殴んな！ 何が乙女だよ」

私は先ほど七緒からもらった熊で、彼を殴った。柔らかいぬいぐるみとはいえ意図的にかなり遠心力をつけているので、そこそこ痛いことは間違いないだろう。

「おいコラ熊さんは関係ねえだろ、武器にすんな！」

「うっさいバーカ！」

この幼馴染みの単純な引っ掛けにハマってしまうなんて。悔しい。悔しすぎる。

なんとか一矢報いることはできないものか 必死に働かせた頭に、ついさつき山上から聞いた話がよぎる。

よし、これだ。

私は七緒に負けず劣らずの底意地の悪い笑みを浮かべた。

「そういえばあんた、『お前の母ちゃんデベソ』が怒りの沸点らしいじゃん」

「えっ」

「山上から聞いたよお。5年前は私のお母さんのためにドーモね」
みるみるうちに七緒の顔が強張り、赤と青の混じった変な色になる。

「……やめてくれ、今思い出しただけでもマジで恥ずかしさで死に

そうなんだから」

あまりにも耐え難そうなその表情に、ちよつと吹き出した。

まさかこのネタひとつで彼をここまで苦しめることができるとは思ひもしなかった。だからこの5年間、七緒の口からあの事件の真相が語られることはなかったんだ。納得。

七緒は観念したようにため息をひとつつくと、ぶつぶつと語り始めた。

「……まあ、俺、小さい頃は爽子さんが女神か天使みたいに見えてたからな」

「何それ。そんなに？」

「心都だつてうちの母親の性格はよく知ってるだろ」

それはもちろん。私だつて、七緒のお母さんである明美さんとは小さい頃から仲良くしてもらっている。彼女のまことしやかに囁かれる元ヤン説を裏付けるワイルドさは身をもって知っているつもりだ。

「正直まだまだ甘えたい盛りだった小学生の俺にとっては、爽子さんが理想の母親だったんだよな。褒めてくれるし可愛がってくれるし、ケーキとか焼いてくれるし」

「へーえ」

「おい、その半笑いやめろ」

「笑ってないよ」

「……。とにかく、あん時はどうしようもなくガキだったってこと！ 母親たちにはこの話、ぜつつっつたい内緒だからな！」

「うん、わかった！」

私は満面の笑みで頷いた。

これは良いゆすりのネタ……もとい、思い出し笑いのネタができたってなもんだ。

「そういえば、昔は何度かお母さんたちと一緒にここのお祭り来た

よね」

今となつては遠い昔。恐らくまだ私たちの年齢が一桁の頃だ。

母親たちに連れて行つてもらつた祭では、ヨーヨー釣りがすごく楽しかったことを覚えている。

「懐かしいなー」

「うん。俺なんて夏祭り自体久しぶり。中学入つてからはずっと部活ばかりで夏休み遊びに行くこともほとんどなかったからな」

「……そうだよな」

というか、今年の夏休みも七緒が部活で忙しいことには変わりない。むしろ受験生ということもあり、今まで以上に時間に余裕がないのは明白だ。

そんな中で彼が、私の悩みっぷり（彼曰く「ヤバい追いつめられ方」）を案じて夏祭りに誘つてくれたことには、やっぱりいくら感謝してもしきれない。

「今日は誘つてくれてありがとうね」

「何だよ、急に」

「さっきも言つたけど、これで受験勉強がんばるパワーがついたよ。おいしいものいっぱい食べられたし、浴衣も着られたし！ 大満足！ 大満足！」

改まつて向き直る私に、七緒は少し驚いたようだった。目をパチクリさせながら私を見つめ返し、

「ああ、そつ」

と、ひとこと。

そんな彼のそつけなさも気にならないくらい、私は満ち足りていた。

今日一日本当に楽しかった。色々予想外のこと多かつたけど、間違いなくこの夏の大切な思い出だ。

それに思いがけない形とはいえ、七緒と手も繋げちゃつたし。次に会つたら美里にすぐ報告しよう。何しろ彼女は『人混み手繋ぎ大作戦』を強く推奨していたんだから。

「浴衣」

ふいに、七緒が言った。

「え？」

「心都、前に言ってた『好きな人』に浴衣姿を見せればいいじゃん。そしたらきつと相手イチコロだろ」

照れているわけでもなく、キザっぽく微笑んでいるわけでもなく、あくまでも七緒は飄々とした顔をしている。

だから言葉の意味を掴むのに少し時間を要したけど、それって、えつと、つまり。

「七緒、浴衣褒めてくれてるの？」

「一応そのつもりなんだけど。……なんで疑いの眼差しなんだよ？」
「だって七緒、今日最初に会ったときから何も言ってくれなかったじゃん」

「言おうとしたらお前が遮ったんだろーが」
そうだったけ？

やっと事態を理解した私の心臓が、またしても破裂しそうな勢いで脈打つ。

頭と胸が熱い。苦しい。

でもそれ以上に、やっぱり嬉しい！

気が付いたら私は、七緒に掴みかからんばかりの勢いで質問を浴びせていた。

「本当の本当に！？ ちょっとでも可愛げあると思った！？ 今までの私との違いを感じた！？ 驚いた！？ ドキッとした！？」

「なんだよその質問」

「お願い！ 私の今後の人生にとって重大な問題なの！ ボランティアだと思って！ アンケートに答えるつもりで！」

「……」

彼は右手の親指と人差し指の間に小さな隙間を作り、答えた。

「じんくらい、ちびっと」

「……っよっしや　　アアア!!」

静かな神社の石段周りに、私の雄叫びが響き渡った。高く高くガツツポーズ。テンションは最高潮だ。

「うわ、うるさっ」と七緒が顔をしかめる。だけどそんなことはお構いなしに、私は狂喜した。

「ばんざーい！ やったぜベイビー!!」

「何がベイビーだよ頭大丈夫か？ ……っーか、俺の意見なんか参考にしないで、自信持ってその好きな相手と浴衣デートの約束でもしろって。ぼやぼやしていると夏なんかあっという間だぞ」

ああ、こいつ、また複雑な勘違いをしている。だけどそんなことに落ち込む暇もないくらい、私は今、喜びに溢れていた。

七緒に恋して早5年。

この美少女顔を持つ異常に鈍感な幼馴染みへの恋は、そりゃあもう問題点だらけだった。

明らかに私より七緒のほうが何倍も可愛いし、そもそも彼は私のことを「女の子」だとは微塵も思っていないだろうし。

だからこそ今こうして、七緒に外見を褒めてもらうことができたなんて、私にとっては奇跡に近い出来事だ。

諦めないで頑張ってきて良かった。

今はもう世界中の人々にハグして回りたい気分。

と、ひとしきり喜びを噛みしめたあとで、私はあることに気付いた。

恋愛サバイバルの中で戦う覚悟をした去年の冬、私が心に決めた「告白の条件」。

『いつか、私が少しでも可愛くなれたら。そんでもってあの部活命の鈍感男をちょっとドキドキさせることが出来たら、そのときは告

白しよう』それが自分自身との約束でもあり、目標のひとつでもあった。

これは……今日クリアということにしているのだろうか？
ただ今この状況が条件を満たしているかというところ、正直、微妙なところのような気がする。

確かに七緒は褒めてくれたけど、後半は半ば私が言わせたような感じだし、あくまで「ちびつと」だし、そもそもこれは世に言う浴衣マジックによるところが大きい気もする。

いや、それ以前にまず、この条件が確実に満たせたといえるときってどんなもんだらう？

まさかちよつとおめかしして七緒に会うたびに「今、ドキツとした？ 私のこと可愛いと思った？」なんて聞くわけにもいかない（そんなのただの危ない女だ）。

だけど、条件をクリアしたかしていないか、そのあたりのことを自分自身でもあまりにも厳密に計りすぎては、きつといつまで経っても告白なんてできないだろう。

だとしたら、告白の本当の好機って一体いつ？

そもそも、今告白してこの恋は実るの？

っていつかそもそも、告白なんて私にできるの？

もつとそもそも、告白ってどうやればいいの？

ああ、だんだん「告白」の2文字がゲシュタルト崩壊してきた。

先ほどまでのハイテンションとは一変、急に黙り込んだ私を七緒が訝しげに見る。

そして、なんだかやけに落ち着いた声で言った。

「何？」

「えっ」

「すげえ何か言いたいときの顔してる」

「……何それ。わかるの？」

「まあ、15年の付き合いだし」

告白。

したくなつたときが好機だとするのならば、きつと間違いなく今は、そのときなのだと思う。

私は深呼吸すると、七緒の目を見つめた。

「喧嘩は先に目をそらしたら負け！」と、あまりにも場違いなあお鉄則を、何度も心で繰り返して。

13&14:スターマインと、彼の告白>

私は意を決して、目の前の幼馴染みに呼びかけた。

「……………な、七緒」

しまった、声が震えた。しかももった。

この並々ならぬ緊張が伝わってしまったただろうかと心配になったけど、幸いなことに七緒は特に訝しがる様子もなかった。

「何？」

「じ、実は、言いたいことがあって……………」

「言いたいこと？」

七緒が不思議そうに私を見る。

どうしよう。腹を決めたものの、いざ自分の気持ちを伝えようとすると、やっぱり情けないくらい怖い。

胸の鼓動がうるさい。

まばたきすら上手にできない。

まつ毛の先が震える。

呼吸が苦しい。

私が気持ちを伝えることで、この5年に及ぶ片思いが、良くも悪くも終わる。。

七緒がますます不思議そうに私の瞳を覗く。

「具合悪いのか？ 鼻息荒いし目エ血走ってるし……………やっぱり調子に乗って買い食いし過ぎたんじゃ」

「ち、違うー！」

なんて失礼な奴だ。

私は渾身の右ストレートを繰り出し、七緒の肩に叩きつけようと

した。

だけどすんでのところまで止めた。

いま私がしたいことは、好きな人の肩を砕くことじゃない。

「違う」

殴る代わりに拳をほどいて、彼のシャツの裾を掴んだ。

少女漫画のヒロインみたいにそっと摘めれば良かったのだけど、何しろ元はバイオレンス用の拳。変に力がこもってしまい、手のひら全体でがっしりと掴んだ裾はしわが寄ること間違いないだった。

「……心都？」

ああ、怖いな。

気持ちを伝えて、七緒に謝られてしまうのは怖い。

関係が変わってしまうのは怖い。

だけどそれ以上に、もうとっくに「好き」の気持ちは大きくなりすぎてしまった。

もっと近い位置で、長い間、彼の傍にいたいと思ってしまったのだ。

「……七緒」

「ん？」

七緒が私をまっすぐ見つめる。

私は彼の目が好きだ。

あと、ちょっと口は悪いけど実は優しいところとか、ひたむきで芯が強いところとか、純粹な笑顔とかも好きだ。

っていうか全部好きだ。

早い話がもう重症末期患者。好き好き大好き超愛してる。

「す、」

1文字目を発したその瞬間。

ドオン、という音がお腹に響いたかと思うと、一瞬にして辺りが明るくなった。

夜空に大輪の花が咲く。

「おお、すっげー！」

隣の七緒が空を見て、感嘆の声をあげる。

祭の終盤に打ち上げられる色とりどりの花火。夏祭りの名物ということで、わざわざこれだけを見に来る人も毎年多い。

「やっぱり夏は花火だよなー」

「そ、そおダネ」

私はぎくしゃくと頷いた。

発せなかった2文字目の「き」を、口の中で持て余す。

不運すぎるタイミングに完全に気持ちをくじかれてしまった。もしもこの場に美里がいたら、「そんなことでいちいちへこんで止まったら何年かかっても告白なんてできないわよ！」と確実に怒られているだろう。

だけど、このどうしようもない私のうじうじした気持ちを、どうかわかってほしい。こういうのって非常にデリケートな問題なのだ。勢いつけて「いざ！」と臨んだ一歩がすべてしてしまうと、再挑戦には前回の倍以上の決心がいる。

うう。この運の悪さって、やっぱり日頃の行いのせいなのかな。

もっと普段から素直で可愛げのある女の子だったら神様も味方して告白が成功した瞬間に華麗な花火を打ち上げて最高のムードしてくれるのだろうか。

泣きたい気持ちをごらえる。

「ほんと綺麗だなー。俺、打ち上げ花火見るのも久しぶりかも」
「……うん」

空を見上げるふりをして、隣をそつと盗み見る。

花火の光に照らされる七緒の横顔は、とても 私に言わせれば
夜空の花火の何倍も ととても綺麗だった。

正直言つて花火よりそつちを凝視していたくらいだわ、なんて
こんなこと考えているのが知られたら七緒にドン引きされちゃうか
な。

そう思いつつもやっぱり夜空だけには集中できなくて、チラチラ
と隣をうかがってしまう。

と、ふいに目が合った七緒が口を開く。

「俺も」

腰が抜けた。全身が震える。

「七緒……エスパーだったの？」

「は？」

「俺もつてことは、そ、それは、そういう意味つてことで、うううう
受け取っちゃいけないですかねっ!？」

『花火より七緒の顔を見たい』、『俺も』……。

これはまさかの両思い到来、カップル成立、おめでとう私、あり
がとう私、今日が2人の愛の記念日、何年経つても結婚しても熟年
夫婦になつてもこの日は2人でワイングラスで乾杯したい、そうい
う夫婦に私はなりたい、ああ今日つて何日だっけ、7月28日だ、
ということとはゴロ合わせ的にはナツヤ、ナツハ、ナツパ……、
「……菜っぱの日!? なんか足りないッ! ロマンチックさが足
りない!」

「何言つてんのマジで」

七緒が冷やかな表情になる。

私は慌てて我に返つた。

少し妄想が過ぎたようだった。

「ゴメン。なんでもない」

「……」

「何が『俺も』なの？」

しばらく対不審者用の視線を私に投げかけていた七緒だったけど、咳払いをひとつすると、ようやく真面目な顔になってこちらに向き直った。

「実は俺も、今日話したいことがあったんだ」

「ああ、こないだ何か言いかけてたもんね。何？」

「その前に心都も何かあるんだろ」

「いや、先に言つてよ」

ずっと気がかりだった（といつても9割方忘れていたけど）、七緒の「話したいこと」だ。早く知りたい。それに一度折れたこの気持ちを立て直すには、また数十分の時間が必要な可能性大だし。

先程から次々と打ち上げられている花火も、そろそろクライマックスだ。

スターマインというらしい細かな連続花火が上がる夜空。そこから私に目を移し、七緒は口を開いた。

「まあ、進路の話なんだけど」

心臓が少し跳ねる。

ここ数ヶ月、七緒に具体的な志望校名を聞く機会を逃していた。自分の進路がハッキリしていないというのも大きかったし、自然とそういう話の流れになって彼が言い出すまでは特に聞き出さなくてもいい、という気持ちもあった。

七緒が口を開く。

「俺、開条高校を目指そうと思って」

はつきりとした迷いのない声だった。

彼が口にしたそこは、大学付属ということもあり割と有名な私立高校だ。私も名前は知っている。

「やっぱり高校でも柔道が続けていきたいと思ってるんだ。で、中

学に入った頃からちよつと目標っていうか憧れっていうか、いつか絶対指導してもらいたいつて思ってる人がいて、その人が開条の顧問でさ」

七緒の瞳は輝いていた。

「雑誌なんかにもたまに載ってる人なんだけど、そんなに大柄じゃなくても戦える柔道っていうのを提唱してて、その人自身も割と小柄なほうでさ。あと、それ以外でも開条の柔道部って実績とかモットーとか練習法とか戦い方とかすごい魅力的で……まあ今話すと絶対長くなるからやめとくけど。ずっと憧れてた気持ちがあるにはあつて」

そつえば以前、七緒と山上の柔道雑誌の貸し借りの現場に遭遇したことがあつたなあ、と私は若干場違いなことを思い出した。

「だから俺、開条高校に入って柔道をやりたいつて思ってるんだ」

「そつなんだ……」

「……なんか、真剣にこんな宣言みたいなことするとちよつと恥ずかしいな。これ、心都に最初に話したよ」

七緒が少し照れくさそうに言う。

そんなことない、恥ずかしいことなんて何もなし。目標があるつてすごい。やりたいものがそこにはあつて、それを目指して進む決意が固まっているなんて私からしたら本当に尊敬できることだ。

だけど私の心はざわざわと栗立つて、「応援するよ!」の言葉が引つかかつて出てこなくなつてしまつていた。

なぜなら、その高校は、隣の隣の、そのまた隣の県にある。

「……でもそれつて……家からは通えないよね?」

想像よりずつと冷静な声が出た。

「うん。学校の寮暮らし。……まあ合格したらの話だけだな」

そつ言つて七緒がまた空を見上げた。

おそらく最後の一発であろう、今までのどれよりもとびきり大きな花火が上がり、ゆつくりと散つていく。

泣きそうとか、悲しいとかいふのとはちよつと違う。

「なんで私に一番に話してくれたの？」

胸の奥が冷たい。まるで氷の固まりがつかえたようで、痛いくらいだ。

「なんでだろうな。……なんとなく、心都に最初に聞いてほしいと思ったんだよ」

少し困ったような笑顔で七緒が言う。

私たちは15年間幼馴染みで、あまりにも長い時間を一緒に過ごした。

この関係に今後何かしらの変化が訪れるかもしれないことは想定していたし、それを怖いと思うのと同時に、心のどこかで望んでもいた。

良い変化を求めて告白したいと思ったことだって紛れもない事実。だけど、すぐ近く、いつでも会える心地良い距離に彼がいることだけは、まだしばらく変わらないと思っていたのに。

この幼馴染みは、一体いつからこんな大人の顔で笑うようになったんだろう？

1 & 1 t ; 入道雲と、夏の憂鬱 & g t ;

来年の桜が咲いたら、七緒が遠くへ行ってしまふ。

夢にも思わないことだった。

そりゃあ私だって、いつまでも同じ学校、同じ町、ご近所さんでいられると思っていたわけじゃないけど。

「それで、そのあとどうしたの?」

と、電話の向こうから美里の冷静な声が聞こえる。

私は自室のベッドに腰掛け、暗い気持ちのままぼそぼそと答えた。

「……私、『へえ』って答えて……あとは特に何も」

「えっ、それだけ? それで終わり?」

「そのあと私、足元に蝉の抜け殻が転がってるの見つけたから、『あ、抜け殻』って言って、あとは虫の話とかして、残ってたソースせんべい食べて……その日は終わった」

「最悪……。最っ悪」

ため息を挟み、美里が感想を二度口にした。

私も同じく思う。　そう、最悪なのだ。

5日前　つまり、あの夏祭りの日。進路を告白してくれた七緒に対し、私の反応はあまりにも淡泊だった。

咄嗟に返せた言葉は「へえ」の二文字だけで、あとはその話題を避けるかのように、大した広がりを見せない虫の話ばかり続けた。まっただ。

「もう……心都ってなんでそうなっちゃうわけ？　そこは良い幼馴染みとしては笑顔で『頑張ってるね、応援してるよ』！　片思い中の乙女としては潤んだ瞳で『応援したいけど、やっぱり寂しいよ……』。このどっちかでしょ！」

携帯電話のスピーカーを通してでも、美里の眉毛が吊り上っていることがなんとなくわかる。

「……だって、あまりにもびっくりして……」
「ショックで混乱しちゃったのはわかるけど、だからってその反応は駄目よ。七緒くん、せつかく一番に心都に打ち明けてくれたのに。私は黙って頷いた。もちろん電話越しなので、それが美里に伝わっているとは思えないけれど、そうすることしかできなかった。もうぐうの音も出ない。」

全くもって、この親友の言うとおり。

私は最低だ。

あまりにも急な進路発表に絶句してしまったとはいえ、よりによってチョイスした選択肢が「回避（虫の話）」だなんて。今振り返ると、とてもじゃないけど今年度義務教育を終える人間の行動とは思えない。

七緒の決意を聞いた瞬間、本当に何を言えばいいのか、何を言いたいかわからなくなってしまうた。

自分自身の中で色々な感情が拮抗して、せめぎ合って、美里の言う「応援するよ！」と「寂しい」のどちらの言葉も出なかった。

それは5日経った今も変わらず、私は七緒にどんな言葉をかけるべきか、自分の気持ちの答えが見つからないままだ。

だって、七緒が遠くに行っちゃうなんて　嫌とか嫌じゃないとか以前に、実感がないんだもの。

ベッドに腰掛けたまま、窓の外を眺める。

気づけば夏休み真っ最中。

どんより澱んだ私の心とは裏腹に、午前中の夏の空は見事なお天気だ。

輝く太陽、スカイブルーに入道雲がもくもくと横たわり、まさしく夏晴れって感じ。

「心都……大丈夫？」

美里の気遣わしげな声が聞こえ、我に返る。

「あ、大丈夫。ごめん、ちょっとぼけつとしちゃった」

「……とりあえず、自分の気持ちに整理がついたら、七緒くんにもう一度この話振ったほうがいいんじゃない？　このままズルズルしてたらこの話題はうやむやになっちゃうわよ」

「そうだよね……」

私だって、このままにしているのは嫌だ。

七緒がわざわざ伝えてくれた決意に、自分なりの素直な言葉をきちんと返したい。

「ちょっと考えてみる。ごめんねジメジメしちゃって」

「ううん。……あ、そういうえば心都、今日も夏期講習？」

美里が少し明るいトーンになって、話を変えてくれた。

「そうだよー。平日はほぼ毎日あるもん」

どんなに志望校がふわふわしていても、恋に頭を悩ませていても、受験生は受験生。私はこの夏、近隣の学習塾に通っている。

美里のように家でコツコツと要領よく学力を上げられるタイプではなく、しかも得意科目とそれ以外の差が激しい私は、お母さんの

勧めもあり、夏休み限定の特別夏期講習に参加することになったのだ。

今日もあと数十分後には出かけなくてはならない。

「なんかこの間、田辺くんもその夏期講習に参加してるみたいなこと言ってたわ。会ったことない？」

「えー、そうなんだ。結構うちの学校の子いるけど、田辺は見たことないなあ。もしかしてクラスが違うのかも。私は理系のほうが苦手だから、数学レベルアップクラスなんだ」

「あ、そっか。じゃあ違うわね。田辺くんは英語を重点的にやるクラスだつて言ってたから」

「ふーん。……つていうか、美里、田辺と夏休み中ちよくちよく会ってるの？」

やけに田辺についての情報が充実している。夏期講習のクラスがどこかだなんて、夏休み中に会っていないとできる会話ではない。

ひと呼吸置いたのち、美里は憂鬱そうな声を出した。

「頻繁にメールが来るの。頼んでもないのに近況報告みたいなメールが」

「ああ……そうなんだ」

「あの人、メールですらやかましいのよ……。顔文字もガチャガチャ使いまくるし、それに加えて一文ごとにビックリマークが5個くらい付くのよ。信じられる？」

「そ、それはご苦勞様……」

労いの言葉をかけずにはいられない。

その後も少し雑談（主に美里が、田辺からのメールによく使われる〵〵〵）（〵〵〵）（〵〵〵）（〵〵〵）（〵〵〵）という変な顔文字の意図がわからないという不満をぶちまけ、私は心で『頑張れよ田辺』と20回くらい呟いた）を交わし、電話を切った。

私は夏期講習用の参考書や辞書が入ったトートバッグを持つと、部屋を出る。

考えるのは『ラブチャンス同盟』のたった一人の仲間のことだ。
田辺のやつ、夏だつていうのに相変わらず暑苦しく攻めてるな。
今年は猛暑らしいし、この夏を境に本格的に美里に嫌われなきや
いいけど。この想像はなんとなく現実味がある気もする。
でも。

玄関でサンダルを履きながら、ふと思う。

美里も、本当に興味のない相手だったらメールの内容をこんなに
覚えていることもないような気がする。きちんと本文を読むかも怪
しい。彼女はそういう性格だ。

だから、田辺が夏期講習で英語クラスに所属していると記憶して
いるつてことは、彼をそこまでぞんざいに思っているわけではない
んだよね、きつと。

なんだかんだ、順調に距離を縮めていつてるんじゃないだろうか。
そう思うと少し嬉しくなる。

でもまあ、とりあえず、『\8)() ^ ^ () () 8 /』
は止めたほうがいいよな。

私がいやなり注意してあげたほうがいいのかしら……。

そんなことを考えながら「いつてきまーす」で勢いよくドアを開
けた、その瞬間。

ゴン、という鈍い音とともに、何かが戸にぶつかる手ごたえがあ
った。慌てて外に出ると、

「……」

右手を額に当ててうずくまる、ジャージ姿の七緒がいた。左手に
は半分に切られたスイカを抱えている。

「えっ、何してんの？」

「俺が聞きてえよ……なんだよこれ、タイミング悪……」

若干涙声だ。可哀想に、よほど痛いのだろう。

何してんの？ と聞いたものの、この状況を見ればいくら私でも
わかる。

おそらく我が家にスイカのおすそ分けに来てくれた彼がインターホンを鳴らそうとしたところ、ちょうど私がドアを開けてしまったのだ。

「ごめんごめん。まさかそんな所にいると思わないからさあ」
「ようやく痛みの波を越えたらしい七緒が、額をさすりつつ立ち上がる。」

「どっか出かけるところ？」

「うん、今から夏期講習」

「あー……そっか。これ、うちの母親からおすそ分け」

私はスイカを受け取り、お礼を言った。

「わあ、おいしそう。ありがとう」

多分、いつも通り笑えていたと思う。

笑わなくちゃいけないと無理に思ったのではなく、自分でも驚くほど自然に笑顔が出た。

それは多分、七緒が普段と変わらない態度だったからだ。

「七緒もこれから部活？」

「うん。大会近いからな、一番気合いいれてる時期だよ」

「あ、そっか……今月引退試合って前に言ってたもんね。今日も暑
いみたいだから熱中症とか気を付けてね」

「おー」

いつもと変わらない、自然な会話。

お互い、夏祭りのときうやむやに流れた進路の話をもたほじくり返したりはしない。

だからなんだか、あの日のことは全部夢だったのではないかとさえ思えてくるのだ。

もちろんそんなはずないってことはよくわかっているのだけだ。

出かけるところ悪かったな、と言い帰っていく七緒。
私は小さく手を振る。

彼の背中が小さくなっていく。

ああ、駄目。

駄目駄目だ。

結局私は、「良い幼馴染み」にも「恋する乙女」にも徹しきれない。

どっちつかずの中途半端な奴なのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0916a/>

こんな僕たち私たち

2011年9月27日11時41分発行